牛頸中通遺跡群

福岡県大野城市大字牛頸字中通所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第　4　集

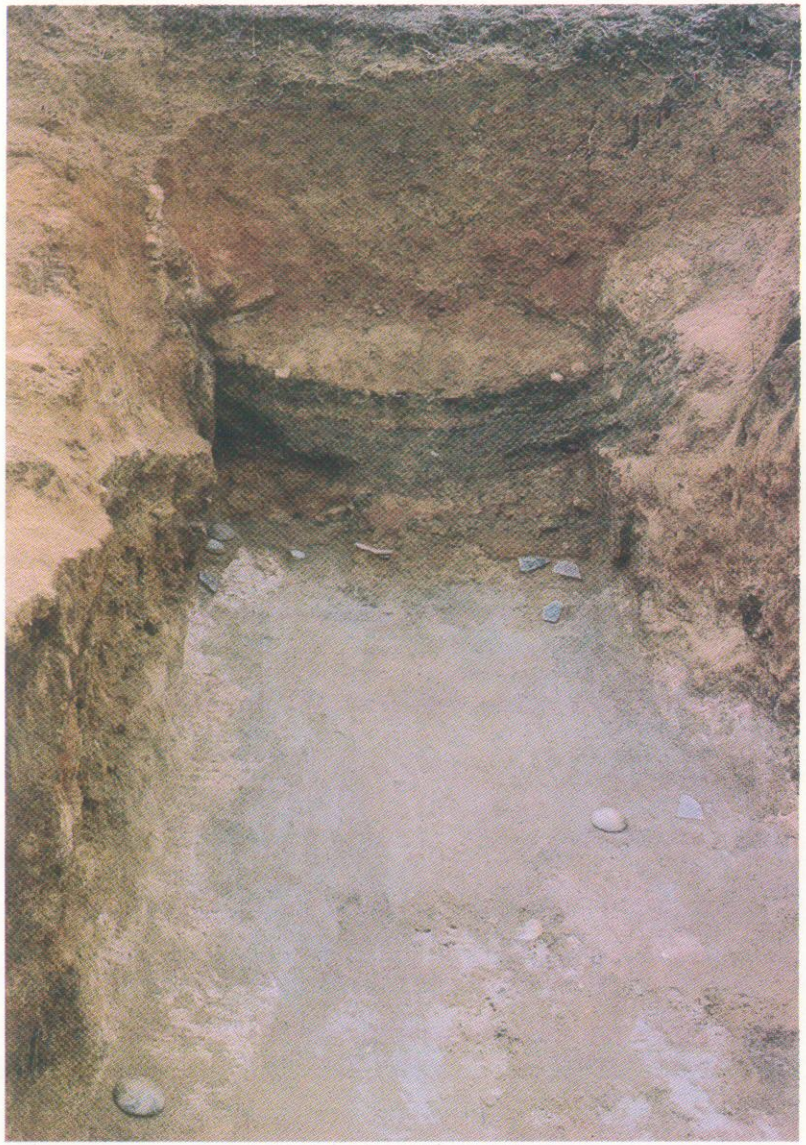
1980

大野城市教育委員会

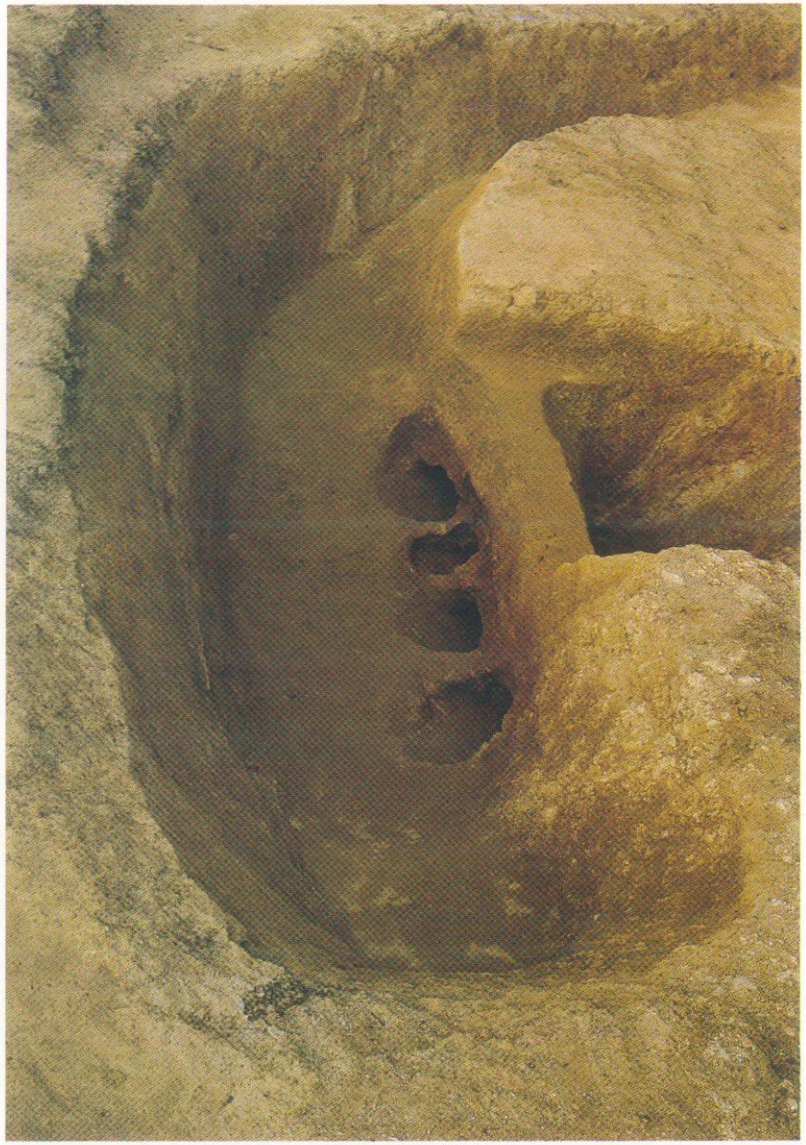
牛頭中通遺跡群



中通遺跡群全景（航空写真 南から）



中通Ａ－１窯断面写真（東から）



中通Ａ－２窯煙出し部全景（南から）



中通Ｂ窯断面写真（東から）



中通Ｃ窯煙出し部（東から）



中通D－1窯全景（西から）



中通D－1窯断面（西から）

序

牛頸中通（ナカドオリ）遺跡群発掘調査は、九銀興産株式会社、福岡ミサワホーム株式会社による宅地造成工事（昭和47年度第1次調査、昭和54年度第2次調査）及び福岡土地株式会社による宅地造成工事（昭和54年度第3次調査）に伴い調査を実施したものです。

このたび、その調査結果を記録保存し、資料として広く活用するため、報告書を刊行する運びとなりました。

本書が九州古代文化の研究、とりわけ古墳時代後期の須恵器工人集団の実態を解明する上での貴重な資料となり、ひいては文化財保護に対する市民の理解がいっそう深まりますよう念願するしだいであります。

発掘調査及び報告の編集に御尽力いただきました松岡史氏、副島邦弘氏をはじめ県教委文化課諸氏、県文化財保護指導委員の前田軍治氏ほか福岡チブサン会のみなさん、並びに調査に御協力いただきました竹中・西武共同企業体関係者、地元牛頸区長、発掘作業員の方々、九州歴史資料館等関係機関、各位に対し厚くお礼を申しあげます。

昭和55年3月31日

大野城市教育委員会

教育長　井　上　幸　一　郎

例　言

1．本報告書は大野城市大字牛頸所在中通（ナカドオリ）遺跡群の発掘調査の記録である。

2．本書は、九銀興産株式会社、ミサワホーム株式会社、福岡土地株式会社の受嘱を受けて行なった発掘調査で、大野城市教育委員会が福岡県教育委員会の指導を受けて、実施総括したものである。

3．本書の写真については、遺構写真は松岡史・前田軍治（第１次)、副島邦弘・池辺元明・馬田弘稔（第２次)、舟山良一(第３次)があたり、遺物写真については、松岡史（第１次)、平島美代子・岡紀久夫（第２次)、岡紀久夫（第３次）が担当した。遺物整理の指導は第２次調査分は岩瀬正信氏の協力と援助を受けた。

4．本書の執筆はつぎの通りである。

Ⅰ－１……松　岡　　史
　－２……前　田　軍　治
Ⅱ－１……松岡　史・前田軍治
　－２……副島邦弘・小池史哲
　－３……舟山良一・川述昭人
Ⅲ……副　島　邦　弘
　付……櫻　井　康　治

5．付編として、昭和47年２月～４月におこなった、大野城市大字牛頸字上平田所在の上平田窯跡群の概要を掲載した。

6．題字は浜田葉子氏にお願いした。

7．本書の編集は、第３次調査分については、舟山が行ない、第１次調査分と第２次調査分及び、とりまとめは副島が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．序　章

1．調査の経過……1
2．位置と環境……4

Ⅱ．発掘調査の記録

1．第1次発掘調査（昭和47～48年度）……9
1）はじめに……9
2）古墳群の調査……10
3）小　結……71
2．第2次発掘調査（昭和54年度）……75
1）はじめに……75
2）古墳群の調査……80
3）窯跡群の調査……99
4）近世墓とその他遺物……139
5）小　結……146
3．第3次発掘調査（昭和54年度）……151
1）はじめに……151
2）古墳群の調査……154
3）窯跡の調査……167
4）その他の遺構……177
5）小　結……178

Ⅲ．結　章

牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書……181
付．牛頸上平田窯跡群の調査……193

図　版　目　次

第１次発掘調査

本文対照頁
図版１（上）中通り遺跡群（上方丘陵）と不動城跡（下方丘陵）…… 1
（下）中通り古墳群全景（航空写真）…… 4
図版２（上）中通り古墳群北支群…… 4
（下）中通り古墳群北支群（西から）…… 4
図版３（上）中通り遺跡群（南から）…… 4
（下）中通り古墳群北支群（矢印はスエ器窯跡）…… 4
図版４（上）南より見た牛頸中通地域…… 4
（下）中通り遺跡群と不動城跡及び平野神社（右上森）…… 4
図版５（上）中通り丘陵（南から）…… 9
（下）中通り古墳北支群（右１号墳、左２号墳）……10
図版６（上）中通り遺跡群Ｃスエ器窯跡（中央丘）……10
（下）調査前の中通り北古墳群（古墳の姿は全く判らない）……10
図版７（上）中通り１号墳羨道閉鎖状況……10
（下）　同　上　出土鉄製品（鉄鏃）……13
図版８（上）中通り１号墳　玄室と羨道……12
（下）　同　上　玄室奥壁……12
図版９（上）中通り２号墳近景……13
（下）　同　上　羨道……13
図版10（上）中通り２号墳　玄室奥壁……14
（下）　同　上　玄門閉鎖状況……14
図版11（上）中通り２号墳　墓道遺物出土状況……15
（下）　同　上……15
図版12（上）中通り２号墳　玄室床面玉類出土状況……15
（下）　同　上　玄門部土器出土状況……15
図版13（上）中通り２号墳　出土硬玉製勾玉・ガラス玉……15
（下）　同　上　出土鉄製品（鉄鏃・刀子）……16
図版14　中通り２号墳　出土スエ器……16
図版15　中通り２号墳　出土スエ器……16
図版16　中通り２号墳　出土スエ器……16
図版17　中通り２号墳出土スエ器・ハジ器（最下段がハジ器）……18

図版18　中通り２号墳　出土スエ器・ハジ器（最下段がハジ器）……18
図版19　中通り２・３号墳　出土スエ器（最下段が３号墳出土）……18
図版20（上）中通り３号墳近景……18
　　（下）　同　上　玄室東壁……19
図版21（上）中通り３号墳羨道閉鎖状況……19
　　（下）　同　上　玄室奥壁……19
図版22（上）中通り３号墳　出土耳環・碧玉製管玉……20
　　（下）　同　上　出土ハジ器盤……21
図版23（上）中通り４号墳全景（上から）……22
　　（下）　同　　上　（羨道部から）……22
図版24（上）中通り４号墳出土耳環・玉出土状況……23
　　（下）　同　上　羨道部……23
図版25（上）中通り４号墳　羨道部土器出土状況……23
　　（下）　同　上　出土鉄製品……25
図版26　中通り４号墳　出土耳環・碧玉製管玉・ガラス玉……24
図版27　中通り４号墳　出土スエ器……24
図版28（上）中通り５号墳近景……26
　　（下）　同　上　羨道……26
図版29（上）中通り５号墳と前方牛頸山……26
　　（下）　同　上　玄室奥壁……26
図版30（上）中通り５号墳　墓道土器出土状況……26
　　（下）　同　上　出土鉄製品（刀子・鉄鏃）……29
図版31　中通り５号墳　出土スエ器……27
図版32　中通り５号墳　出土スエ器……27
図版33　中通り５号墳　出土スエ器……28
図版34　中通り５号墳　出土スエ器……28
図版35（上）中通り６号墳全景（上から）……29
　　（下）　同　上　（羨道部から）……29
図版36（上）中通り６号墳　羨門閉鎖状況……29
　　（下）　同　上　羨道……29
図版37（上）中通り６号墳　玄室奥壁……30
　　（下）　同　上　玄室内スエ器小坩出土状況……31
図版38（上）中通り６号墳　玄室内装身具類出土状況……31

（下）　同　上　羨道部スエ器出土状況……31
図版39（上）中通り６号墳　出土装身具類……32
（下）　同　上　出土スエ器……34
図版40　中通り６号墳　出土スエ器……34
図版41（上）中通り７号墳　石室全景……35
（下）　同　上　前　室……35
図版42（上）中通り７号墳　前室遺物出土状況……35
（下）　同　上　……35
図版43　中通り７号墳　出土スエ器……37
図版44（上）中通り７号墳　出土スエ器……37
（下）　同　上　出土鉄製品（刀子・鉄鏃）……37
図版45　中通り７号墳　出土スエ器……37
図版46（上）中通り８号墳全景……38
（下）　同　上　玄室奥壁……38
図版47（上）中通り８号墳　石室全景……38
（下）　同　上　前室……38
図版48（上）中通り８号墳　玄室内ガラス玉出土状況……40
（下）　同　上　墓道部土器出土状況……40
図版49（上）中通り８号墳　前室土器出土状況……40
（下）　同　上　……40
図版50　中通り８号墳　出土玉類・スエ器……41
図版51　中通り８号墳　出土スエ器……40
図版52　中通り８号墳　出土スエ器……40
図版53（上）中通り９号墳　石室全景……42
（下）　同　上　玉類出土状況……42
図版54（上）中通り９号墳　出土装身具類……43
（下）　同　上　出土鉄製品（鉄鏃）……43
図版55（上）中通り10号墳　前室と玄室……45
（下）　同　上　玄室……45
図版56（上）中通り10号墳　玄室と玄門……46
（下）　同　上　前室床面……46
図版57（上）中通り10号墳　前室土器出土状況……46
（下）　同　上　墓道土器出土状況……46

図版58（上）中通り10号墳　玄室床面刀子・鉄鏃出土状況……47
（下）　同　上　玉類出土状況……47
図版59（上）中通り10号墳　出土装身具類……48
（下）　同　上　出土鉄製品（鉄刀・鉄鏃・刀子）……51
図版60　中通り10号墳　出土スエ器……50
図版61　中通り10号墳　出土スエ器……50
図版62（上）中通り11号墳　玄室全景……54
（下）　同　上　玄門……54
図版63（上）中通り11号墳近景……54
（下）　同　上　墓道と土器類出土状況……54
図版64（上）中通り11号墳　玄室床面……54
（下）　同　上　墓道土器類出土状況……55
図版65（上）中通り11号墳　玄室床面玉類出土状況……55
（下）　同　上　遺物出土状況……55
図版66（上）中通り11号墳　出土装身具類……56
（下）　同　上　出土スエ器……57
図版67　中通り11号墳　出土スエ器……57
図版68　中通り11号墳　出土スエ器……57
図版69　中通り11号墳　出土スエ器（上３段）・ハジ器（下２段）……57
図版70（上）中通り12号墳　羨門と袖積み……59
（下）　同　上　羨道……59
図版71（上）中通り12号墳　羨道と玄門……60
（下）　同　上　玄室奥壁……60
図版72（上）中通り12号墳　玄室床面……60
（下）　同　上　鉄鏃出土状況……61
図版73（上）中通り12号墳　玄室内、金耳環出土状況……61
（下）　同　上　耳環・鉄鏃出土状況……61
図版74（上）中通り12号墳　玄室内鉄鏃・勾玉出土状況……61
（下）　同　上　耳環出土状況……61
図版75（上）中通り12号墳　出土装身具類……61
（下）　同　上　出土ハジ器盤……62
図版76　中通り12号墳　出土鉄製品（鉄鏃）……63
図版77（上）中通り13号墳　羨門……64

（下）　同　上　墓道……64
図版78（上）中通り13号墳　前室と墓道……64
（下）　同　上　袖石と羨門部……64
図版79（上）中通13号墳　墓道東袖積み……64
（下）　同　上　玄室奥壁……64
図版80（上）中通り13号墳　前室馬具出土状況……64
（下）　同　上　土器・馬具・鉄鏃出土状況……64
図版81（上）中通13号墳　出土耳環……64
（下）　同　上　出土鉄製品（鉄鏃）……67
図版82　中通り13号墳　出土馬具・スエ器……67

第2次発掘調査

図版83（上）第2次調査全景……75
（下）第2次調査分近景（左：14号墳　右：13号墳）……80
図版84（上）中通13号墳　調査前の状況……80
（下）　同　上　墳丘（北西から）……80
図版85　中通13号墳　墳丘と石室全景（西から）……81
図版86（上）中通13号墳　墳丘と周溝……81
（下）　同　上　周溝……81
図版87（上）中通13号墳　石室全景（南から）……81
（下）　同　上　閉塞石……81
図版88（左）中通13号墳　石室裏面……81
（右）中通13号墳　墓道……81
図版89（上）中通13号墳　石組墓道……81
（下）　同　上　墓道出土遺物(須恵器)……82
図版90（上）中通14号墳　調査前の状況（南から）……85
（下）　同　上　石室全景（北から）……85
図版91（左）中通14号墳　石室全景（南から）……85
（右）中通14号墳　石室内遺物出土状況……85
図版92　中通14号墳（1奥壁　2左壁　3右壁　4右袖石）……85
図版93　中通14号墳　出土遺物（須恵器）……86
図版94　中通14号墳　出土遺物（須恵器・石器）……86
図版95（上）中通14号墳　出土遺物（鉄製品）……98

（下）　同　上　出土遺物（装身具類）…… 95
図版 96　中通Ａ窯跡群全景（左：Ａ－１窯　右：Ａ－２窯）（気球写真）……100
図版 97（上）中通Ａ窯跡群より対岸を見る……100
（中）中通Ｂ窯跡群全貌（対岸より）……115
（下）中通Ａ窯跡群全貌（対岸より）……100
図版 98（上）中通Ａ窯跡群発掘前（伐採後）……100
（下）中通Ａ窯跡群発掘区全景……100
図版 99（上）中通Ａ窯群全景……100
（下）中通Ａ窯跡近景（左：Ａ－１窯　右：Ａ－２窯）……100
図版100　中通Ａ－１窯全景……100
図版101（左）Ａ－１窯全景……100
（右）Ａ－１窯近景……100
図版102（上）焼成最後段階遺物出土状態……102
（下）焼成最初段階遺物出土状態……102
図版103（上）遺物出土状態……103
（下）焚口部と出土遺物（焼成当初）……103
図版104（上）窯本体の閉塞の一部……103
（中）スサ・杭の残痕……103
（下）杭列の痕跡……103
図版105（上）Ａ－１窯焚口部右側の柱穴……103
（下）Ａ－１窯焚口部状態……103
図版106（上）中通Ａ－２窯近景……106
（下）Ａ－２窯全景……106
図版107　Ａ－２窯全景（東から）……106
図版108（上）Ａ－２窯灰原堆積状態……106
（下）Ａ－２窯焚口部の状態……106
図版109（上）窯尻と排水溝の状態（南から）……106
（下）窯尻と煙出近景（西から）……106
図版110（上）中通Ａ群灰原の状態……112
（下）灰原堆積状態……112
図版111（上）中通Ｂ窯伐採後の状態……115
（下）発掘後Ｂ窯の全貌（東から）……115
図版112　Ｂ窯全景（東から）……115

図版113（上）Ｂ窯焚口部断面……115
（中）Ｂ窯焚口部断面……115
（下）Ｂ窯前庭部……115
図版114　Ｂ窯の全貌（西から）……115
図版115（上）窯焼成室の状態……116
（下）窯尻と煙出近景……116
図版116（上）排水溝と壁面の工具痕……116
（下）窯床面の階段の状態と窯入れの状態……116
図版117（上）中通Ｃ窯伐採後の状態……121
（下）Ｃ窯煙出の状態……121
図版118（上）Ｃ窯全景……121
（下）排水溝と煙出部状態……121
図版119（上）Ｃ窯窯床階段……121
（下）Ｃ窯窯尻の状態……121
図版120（上）窯本体と竪穴状態……121
（下）竪穴全景……121
図版121　中通Ａ－１窯　出土遺物①……103
図版122　Ａ－１窯　出土遺物②……103
図版123　Ａ－２窯　出土遺物①……107
図版124　Ａ－２窯　出土遺物②……107
図版125　Ａ灰原　出土遺物①……107
図版126　Ａ灰原　出土遺物②……112
図版127　Ａ灰原　出土遺物③……112
図版128　Ａ灰原　出出遺物④……112
図版129　Ｂ　窯　出土遺物①……117
図版130　Ｂ　窯　出土遺物②……117
図版131　Ｂ　窯　出土遺物③……117
図版132　Ｃ　窯　出土遺物①……123
図版133　Ｃ　窯　出土遺物②……123
図版134（上）近世墓石組全景……139
（下）近世墓墓坑状態（石組除去）……139
図版135（上）１号近世墓上部構造（墓標）……139
（下）１号近世墓下部構造（土坑墓）……139
図版136（上）３号近世墓上部構造……139
（下）３号近世墓下部構造（土坑墓）……139

図版137（上）５号近世墓上部構造……141
（下）５号近世墓下部構造（土坑墓）……141
図版138　近世墓周辺部出土遺物……143

第３次発掘調査

図版139（上）中通遺跡Ｄ地点調査前……151
（下）中通遺跡Ｄ地点気球写真……152
図版140（上）中通Ｓ１号墳全景……154
（下）同　上　墳丘断面……154
図版141（上）中通Ｓ１号墳右壁……155
（下）同　上　奥壁……155
図版142（上）中通Ｓ２号墳閉塞状況……156
（下）同　上　……156
図版143（上）中通Ｓ２号墳石室……157
（下）同　上　……157
図版144（上）中通Ｓ２号墳石室（墓道より）……158
（中）同　上　奥壁……158
（下）同　上「前室」右壁……158
図版145（上）中通Ｓ２号墳東西トレンチ断面……158
（下）同　上　墓道土師器出土状態……158
図版146　中通Ｓ２号墳出土遺物……159
図版147（上）中通Ｓ３号墳閉塞状況……162
（中）同　上　……162
（下）同　上　墓道断面……162
図版148（上）中通Ｓ３号墳全景……162
（下）同　上　……162
図版149（上）中通Ｓ３号墳奥壁……162
（下）同　上　石室構築状況……162
図版150（上）中通Ｓ３号墳「前室」羨道右壁……162
（下）同　上　遺物出土状態……162
図版151（上）中通Ｓ３号墳土師器出土状態……162
（下）同　上　須恵器出土状態……162
図版152（上）中通Ｓ３号墳№１トレンチ断面……162

（中）同　上 ……162
（下）同　上　№3トレンチ断面……162
図版153　中通Ｓ３号墳出土遺物……164
図版154（上）中通Ｄ－１窯全景……167
（下）同　上 ……167
図版155（上）中通Ｄ－１窯第１次床面（窯上部より）……168
（下）同　上　燃焼部・焼成部の境付近……168
図版156（上）中通Ｄ－１窯最終（Ⅲ）床面……171
（中）同　上　Ⅱ床面……171
（下）同　上 ……171
図版157（上）中通Ｄ－１窯Ⅱ床面……171
（下）同　上　Ⅱ床面遺物出土状態……171
図版158（上）中通Ｄ－１窯横断面……171
（下）同　上　第１次床面遺物出土状態……171
図版159　中通Ｄ－１窯各床断面……173
図版160　中通Ｄ－１窯出土遺物……173
図版161　中通Ｄ－１窯出土遺物……173
図版162　中通遺跡　地点出土須恵器ヘラ記号……173

上平田窯跡発掘調査

図版163（上）上平田窯跡群遠景……197
（下）上平田１号窯全景……197
図版164（左）１号窯最終操業時床面……198
（右）１号窯第１次床面……198
図版165（上）１号窯灰原縦断面……201
（下）１号窯灰原横断面……201
図版166（上）１号窯最終操業時床面遺物出土状況……201
（下）１号窯最終操業時床面焼台出土状況……201
図版167（上）１号窯最終操業時床面遺物出土状況……201
（下）１号窯第１次又は第２次床面遺物出土状況……201
図版168（上）１号窯窯外須恵器出土状況……201
（下）１号窯窯外土師器出土状況……201

図版169（上）上平田２号窯遠景……201
（下）２号窯全景……201
図版170（上）２号窯煙道部（内側より）……203
（下）２号窯煙道部（外側より）……203
図版171（上）上平田３号窯……203
（下）同　上……203
図版172（上）３号窯灰原縦断面……203
（下）３号窯灰原横断面……203
図版173　上平田４号窯……204
平田Ａ地点窯跡……187
平田Ｄ地点窯跡……188

巻頭カラー

１．中通遺跡群全景（航空写真南から）
２．（左）中通Ａ－１窯断面（東から）
（右）中通Ａ－２窯煙出し部全景（南から）
３．（上）中通Ｂ窯断面（東から）
（下）中通Ｃ窯煙出し部（東から）
４．（上）中通Ｄ－１窯全景（西から）
（下）中通Ｄ－１窯断面から（西から）

表　目　次

第１表　調査一覧表……３
第２表　牛頸周辺遺跡地名表……５
第３表　中通遺跡工程表（第２次調査）……80
第４表　土器観察表……92
第５表　玉類計測表……95
第６表　土器観察表……127
第７表　近世墓計測表……143
第８表　中通窯跡群計測表……147
第９表　土器観察表……159・160
第10表　中通Ｄ－１窯出土須恵器観察表……172
第11表　牛頸窯跡群発掘調査一覧表……186
第12表　牛頸窯跡群の年代……190

挿　図　目　次

第１図　中通遺跡周辺の遺跡分布図（1/5,000）……折り込み
第２図　削られた中通丘陵と平野ハイツ……3
第３図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）……折り込み

第１次発掘調査

第４図　中通り１号・２号墳地形実測図（1/200）……11
第５図　中通り１号墳石室実測図（1/50）……12
第６図　中通り１号墳出土遺物実測図（鉄製品1/1）……13
第７図　中通り２号墳石室実測図（1/50）……14
第８図　中通り２号墳遺物配置図（1/50）……15
第９図　中通り２号墳出土遺物実測図 ①（玉類1/1）……15
第10図　中通り２号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……16
第11図　中通り２号墳出土遺物実測図 ③（土器1/3）……17
第12図　中通り２号墳出土遺物実測図 ④（土器1/3）……18
第13図　中通り３号墳石室実測図（1/50）……19
第14図　中通り３号墳出土遺物実測図 ①（装身具1/1）……20
第15図　中通り３号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……21
第16図　中通り４号墳石室実測図（1/50）……22
第17図　中通り４号墳遺物配置図（1/50）……23
第18図　中通り４号墳出土遺物実測図 ①（土器1/3）……24
第19図　中通り４号墳出土遺物実測図 ②（装身具1/1）……25
第20図　中通り４号墳出土遺物実測図 ③（鉄製品1/2）……25
第21図　中通り５号墳石室実測図及び遺物配置図（1/50）……折り込み
第22図　中通り５号墳出土遺物実測図 ①（土器1/3）……27
第23図　中通り５号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……28
第24図　中通り５号墳出土遺物実測図 ③（鉄製品1/2）……29
第25図　中通り６号墳石室実測図（1/50）……30
第26図　中通り６号墳遺物配置図（1/50）……31
第27図　中通り６号墳出土遺物実測図 ①（玉類1/1）……32
第28図　中通り６号墳出土遺物実測図 ②（玉類1/1）……33

第29図　中通り６号墳出土遺物実測図 ③（土器1/3）……34
第30図　中通り７号墳石室実測図（1/50）……36
第31図　中通り７号墳出土遺物実測図 ①（土器1/3）……折り込み
第32図　中通り７号墳出土遺物実測図 ②（鉄製品1/2）……37
第33図　中通り８号墳石室実測図（1/50）……39
第34図　中通り８号墳遺物配置図（1/50）……40
第35図　中通り８号墳出土遺物実測図 ①（玉類1/1）……41
第36図　中通り８号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……41
第37図　中通り８号墳出土遺物実測図 ③（土器1/3）……折り込み
第38図　中通り８号墳出土遺物実測図 ④（土器1/3）……折り込み
第39図　中通り９号墳石室実測図（1/50）……42
第40図　中通り９号墳出土遺物実測図 ①（鉄製品1/2）……43
第41図　中通り９号墳出土遺物実測図 ②（装身具1/1）……44
第42図　中通り10号墳石室実測図（1/50）……46
第43図　中通り10号墳遺物配置図（1/50）……47
第44図　中通り10号墳出土遺物実測図 ①（装身具1/1）……48
第45図　中通り10号墳出土遺物実測図 ②（玉類1/1）……49
第46図　中通り10号墳出土遺物実測図 ③（土器1/3）……折り込み
第47図　中通り10号墳出土遺物実測図 ④（土器1/3）……50
第48図　中通り10号墳出土遺物実測図 ⑤（鉄製品1/2）……51
第49図　中通り11号墳石室実測図（1/50）……54
第50図　中通り11号墳遺物配置図（1/50）……55
第51図　中通り11号墳出土遺物実測図 ①（装身具1/1）……56
第52図　中通り11号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……57
第53図　中通り11号墳出土遺物実測図 ③（土器1/3）……折り込み
第54図　中通り11号墳出土遺物実測図 ④（土器1/3）……折り込み
第55図　中通り12号墳石室実測図（1/50）……60
第56図　中通り12号墳遺物配置図（1/50）……61
第57図　中通り12号墳出土遺物実測図 ①（装身具1/1）……62
第58図　中通り12号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……62
第59図　中通り12号墳出土遺物実測図 ③（鉄製品1/2）……63
第60図　中通り13号墳石室実測図（1/50）……折り込み
第61図　中通り13号墳遺物配置図（1/50）……64

第62図　中通り13号墳出土遺物実測図 ①（耳環1/1）……64
第63図　中通り13号墳出土遺物実測図 ②（土器1/3）……65
第64図　中通り13号墳出土遺物実測図 ③（鉄製品1/2）……67
第65図　中通り13号墳出土遺物実測図 ④（鉄製品1/2）……68

第２次発掘調査

第66図　中通り13・14号墳発掘作業風景……77
第67図　重機を使用しての表土剝ぎ（Ｂ窯）……77
第68図　Ａ－１窯発掘作業風景……77
第69図　Ａ－２窯発掘作業風景……79
第70図　現地説明会（南コミュニティセンター）……79
第71図　現地説明会風景（９月16日　Ｂ窯）……79
第72図　中通遺跡地形図（1/2,000）……折り込み
第73図　中通13号墳発掘区（1/100）……82
第74図　中通13号墳石室実測図（1/60）……折り込み
第75図　中通13号墳墳丘断面図（1/60）……83
第76図　中通13号墳墳丘・墓道出土土器実測図（1/3）……84
第77図　中通14号墳発掘区（1/100）……86
第78図　中通14号墳石室実測図（1/60）……折り込み
第79図　中通14号墳出土遺物実測図 ①（1/3）……87
第80図　中通14号墳出土遺物実測図 ②（1/3）……89
第81図　中通14号墳出土遺物拓影図 ①（1/3）……90
第82図　中通14号墳出土遺物拓影図 ②（1/3）……91
第83図　中通14号墳出土玉類・耳環実測図（1/1）……96
第84図　中通14号墳出土鉄器類実測図（1/2）……97
第85図　中通14号墳出土石器実測図（1/3）……99
第86図　中通Ａ群窯跡遺構配置図（1/200）……101
第87図　中通Ａ－１窯跡実測図（1/100）……102
第88図　中通Ａ－１窯跡縦断面図（1/40）……折り込み
第89図　中通Ａ－１窯跡横断面図（1/40）……折り込み
第90図　中通Ａ－１窯跡出土遺物実測図 ①（1/3）……104
第91図　中通Ａ－１窯跡出土遺物実測図 ②（1/3）……105
第92図　中通Ａ－２窯跡実測図（1/100）……折り込み

第 93図　中通Ａ－２窯跡横断面図（1/40）…… 折り込み
第 94図　中通Ａ－２窯跡焚口部縦断面図（1/40）…… 折り込み
第 95図　中通Ａ－２窯出土遺物実測図 ①（1/3）……108
第 96図　中通Ａ－２窯出土遺物実測図 ②（1/3）……109
第 97図　中通Ａ－２窯出土遺物実測図 ③（1/3）……110
第 98図　中通Ａ－２窯出土遺物実測図 ④（1/3）……111
第 99図　中通Ａ群窯跡灰原１トレンチ断面図（1/60）…… 折り込み
第100図　中通Ａ群窯跡灰原２トレンチ断面図（1/60）…… 折り込み
第101図　中通Ａ群窯跡灰原トレンチ内出土遺物実測図 ①（1/3）……113
第102図　中通Ａ群窯跡灰原トレンチ内出土遺物実測図 ②（1/3）…… 折り込み
第103図　中通Ｂ窯跡実測図（1/100）……116
第104図　中通Ｂ窯跡焚口部横断面図（1/40）……117
第105図　中通Ｂ窯跡焚口部縦断面図（1/40）……117
第106図　中通Ｂ窯跡出土遺物実測図 ①（1/3）……118
第107図　中通Ｂ窯跡出土遺物実測図 ②（1/3）……119
第108図　中通Ｃ窯跡実測図（1/100）……122
第109図　中通Ｃ窯跡焚口部縦断面図（1/40）……123
第110図　中通Ｃ窯跡横断面図（1/40）……123
第111図　中通Ｃ窯跡出土遺物実測図 ①（1/3）……124
第112図　中通Ｃ窯跡出土遺物実測図 ②（1/4、1/8）……125
第113図　中通近世墓遺構配置図（1/30）…… 折り込み
第114図　中通１号近世墓実測図（1/30）……140
第115図　中通２号近世墓実測図（1/30）……140
第116図　中通３号近世墓出土遺物実測図　（1/1）……140
第117図　中通３号近世墓実測図（1/30）……141
第118図　中通５号近世墓実測図（1/30）……142
第119図　その他の遺物実測図 ①（1/3）……144
第120図　その他の遺物実測図 ②（1/3）……145
第121図　その他の遺物実測図 ③（1/3）……146

第３次発掘調査

第122図　発掘風景……153
第123図　発掘風景……153

第124図　発掘風景 …… 153
第125図　中通　S1 号墳石室実測図（1/40）…… 155
第126図　中通　S1 号墳墳丘断面図（1/40）…… 155
第127図　中通 D 地点地形図（1/100）…… 折り込み
第128図　中通　S2 号墳石室実測図（1/60）…… 157
第129図　中通　S2 号墳墓道出土土師器実測図（1/3）……159
第130図　中通　S2 号墳出土遺物実測図（1/2）……160
第131図　中通　S2 号墳墳丘灰層出土須恵器実測図（1/3）……161
第132図　中通　S3 号墳石室実測図（1/60）……折り込み
第133図　中通　S3 号墳墳丘断面図（1/60）…… 163
第134図　中通　S3 号墳墓道断面図（1/40）…… 164
第135図　中通　S3 号墳出土遺物実測図（1/3）……165
第136図　中通　S3 号墳出土遺物実測図（1/2）……165
第137図　中通S 3号墳墳丘灰層出土遺物実測図（1/3）…… 165
第138図　中通D— 1 窯実測図（1/100）……168
第139図　中通D— 1 窯断面実測図（1/40）……169
第140図　中通D— 1 窯縦断面実測図（1/40）……169
第141図　中通D— 1 窯内出土遺物実測図（1/3）……171
第142図　中通D— 1 窯灰原出土遺物実測図（1/3）……173
第143図　中通 D— 1 窯灰原出土遺物実測図（1/3）……175
第144図　中通D地点土坑ＳＫ 1 実測図（1/10）……177
第145図　大野城市牛頸地区の推移……182
第146図　牛頸窯跡群窯構造の変遷（1/100）…… 192
第147図　上平田窯跡群地形実測図（1/1, 000）……199
第148図　上平田 2 号窯実測図（1/100）……200
第149図　上平田 1 号窯出土遺物実測図（1/3）…… 202
第150図　上平田 2 〜 4 号窯出土遺物実測図（1/3）…… 204

付図　大野城市牛頸中通遺跡群地形図（1/800）

I. 序　　章

1. 調　査　の　経　過

1972年九銀興産株式会社は自社の業務として大野城市牛頸地区の山林を購入して宅地として開発する計画を実施した。

その際この土地の埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課に諮問があり、同課において現地の踏査を実施した結果、中通り丘陵東斜面において２ケ所にスエ器片の散布を認めた。また西斜面においては古墳の石室の石材と見られるものが数ケ所に露出するのを認め、開発前これらの発掘調査の必要性を回答した。

九銀興産株式会社に於いては直ちにこれら文化財に対する調査を県教育委員会文化課に依頼すると共に法に定めた埋蔵文化財発掘届を提出した。県としては文化庁の指示を仰ぎこの調査について立案したが、この当時は公共事業を含めて年間計画はその限度に達し、とても調査人員の配置は困難な状況下に置かれていた。

しばらく事態の好転を待ったのであるが、依然として好転せずますます悪化する傾向にあり、九銀興産側もこの事態の打開を計ってはいたが、県教育委員会以外の考古学者を擁する大学等もこれに応ずる事は不可能な状況であった。万策尽きた両者はそれでもいたずらに時の流れを眺める訳にはいかず、窮余の一策として考え出したのが、福岡県文化財保護指導委員前田軍治氏とその研究グループである福岡チブサン会のメンバーによる発掘調査の実施であった。このグループは文化財保護について従来多くの実績を挙げて来たし、その発掘技量についても群を抜くものを持っていた。全体的な調査指導は県文化課の松岡がこれに当り、休日・祭日を利用してメンバー自らの労力により逐次発掘を実施して行った。

中通り丘陵西麓の古墳群についてはその規模も小さく、調査実施も前述の状況下でも十分実施し得たのである。特にメンバーの意欲は目を瞠るものがあり、早朝から日没に至るまで多量の土砂の搬出まで全て自らの手でなし遂げたのである。もっとも中通(ナカドオ)り遺跡群の全土地が九銀興産のものではなく一部に地元の個人所有地もあり、開発はその両者の土地について一括して実施し、後に再配分するとの事であったが、調査開始時にはその間の調整が十分についていず、従って西斜面に露出していたスエ器窯跡の調査は実施不能であった。現時点においては調査不能ではあるが、近い将来には調整できる事が判っていたので、土地所有者に対してそれまでの期間窯跡の保存について強く要請を繰り返した。

また一方では九銀興産側は第一次調査の終了後この土地をミサワホーム株式会社に売却し、調査団としては残りの未調査遺構群の処置について後者と更に協議を重ね、決して調査以前に破壊する事のないよう要請し、ミサワホーム株式会社も快く同意し、第２次調査について更に

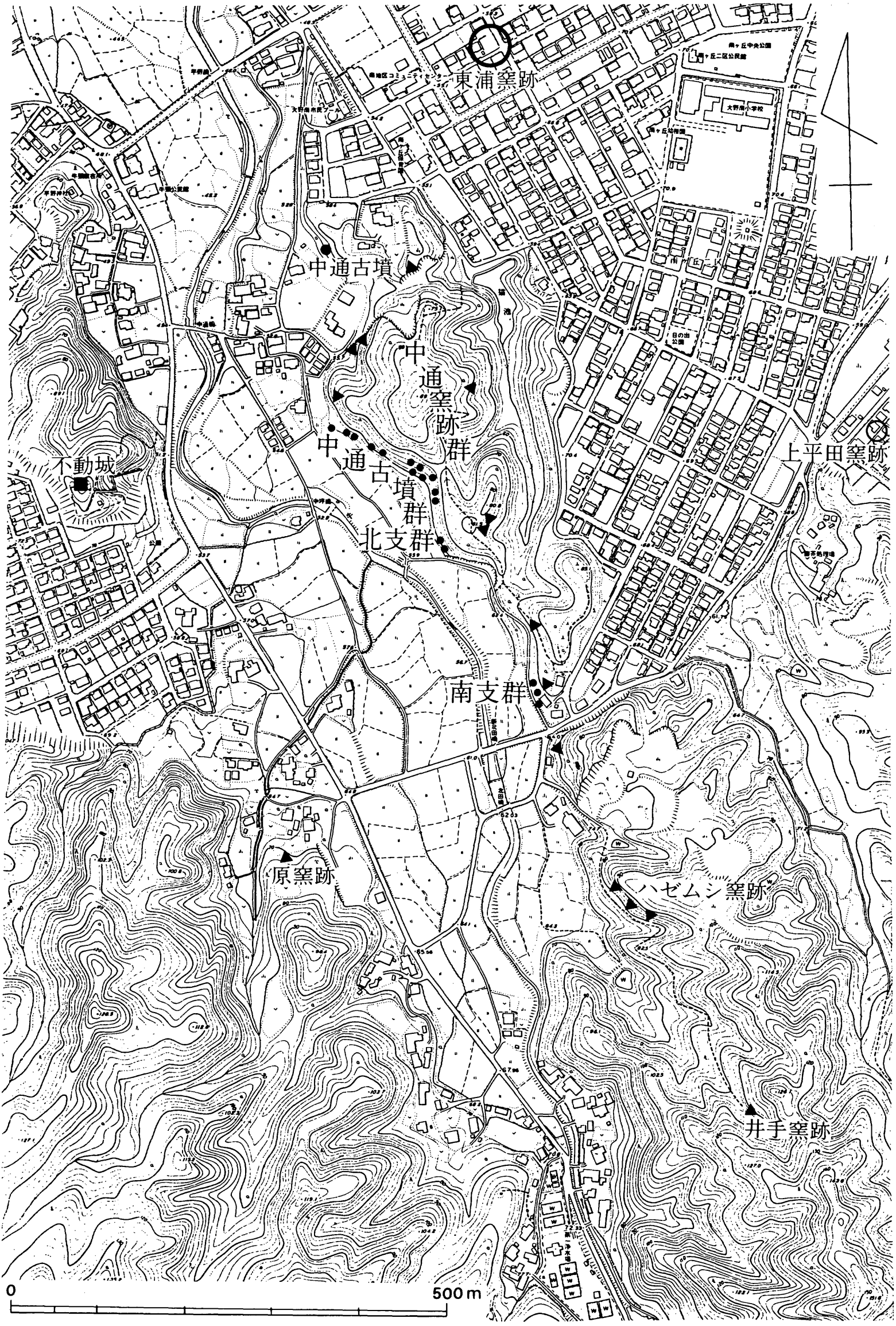
調査を依頼し、必要経費についても全額を負担する等、文化財保護に関して社会的責任を果す姿勢を表明した。そこで調査団としては引続き第２次調査を実施すべく計画し、中通り丘陵西斜面の 須恵器窯址と古墳について 樹木の伐採、 地形の測量を実施し、 地形図の作成を終了した。

他方、大野城市当局は、同市内に於ける相次ぐ開発行為にともない急増する住宅に対する上水道の建設及び水源の確保がついて行けず、中通り丘陵の開発についても当分の間は以上の理由により市長の同意が得られない状況となった。県文化課はこの状況を見て急いで発掘する必要性が不要になったと判断し、第２次調査の延期を調査団に勧告した結果、調査団側とミサワホーム株式会社側とは事態の推移を見まもる事とした。しかしその間、スエ器窯跡群の一部は地元土地所有者自らの手による採土により一基を除いて消滅したのは残念であった。この様な経緯を経ている間に中通り丘陵遺跡群中の 古墳一基（註）が住宅建築にともない消滅する事になり県文化課から技師を派遣し、大野城市教育委員会と協力してこの古墳の調査及び記録の作成に当った。そうする間に、1979年になり昭和54年度の大野城市の都市計画中に中通り遺跡群の開発が取り入れられて開発行為に対する市及び県当局の許可が出た。そこでミサワホーム株式会社側は永年待たされたものでもあり急ぎ着工する事になったのである。残りの遺跡群については調査を再開する事になったのであるが、この年は大野城市教育委員会も市内の文化財保護の体制を確立し、専従職員を確保し、文化財の調査等に当らせる事が可能となった。県教育委員会としては従来調査体制が不備であったため、止むを得ず学識経験者の協力により第１次調査を進めさせた訳であったが、ここに市当局もその責任を果せることになったので、第１次調査のメンバーと協力して県も職員を派遣すると共に三者一体となってあらためて第２次調査を実施した。第２次においてはスエ器窯跡の従来その存在を知られていたものの他に丘陵東斜面の須恵器の散布が見られた場所に新たに窯跡を確認すると共にこれを調査し、また中央丘陵東南斜面に採土によりその所在が判明した窯跡群及び第１次調査の際には開発地域外にあった第13号墳墓道部・14号墳が今回は開発地域にとり込まれた結果、13号墳の墳丘を含めて調査を実施した。

中通り南地区も従来は開発地域外であったが、これも日時の経過と共に開発の波が押し寄せて大野城市当局の手により第３次の発掘調査となった。従来、スエ器窯跡と古墳１基は前田軍治氏により発見されていたが、調査実施した結果、さらに一基の古墳が追加され、中通り丘陵における遺跡の全容が明らかになった。

しかしながら古墳時代九州窯業の大遺跡の中心をなす中通り古墳群とスエ窯跡群が永遠に姿を消した今これを後世に伝えるのは本報告書による他はない状況に置かれたのである。社会の発展は古代文化遺跡の消滅と言う犠牲のもとになし遂げれると言う厳しい現実に我々は注目しなければならない。

註：昭和50年８月　福岡県教育委員会で調査南支群（Ｓ－１号墳）である。第３次調査報告分に含めた。

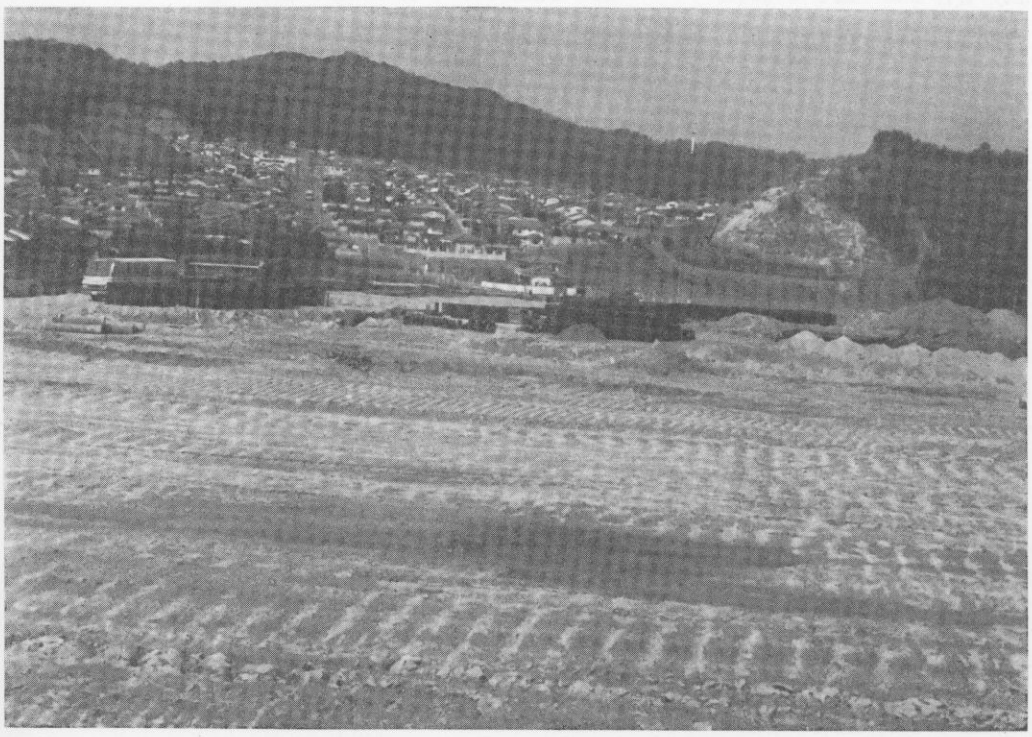


第 1 図　中　通　遺　跡　周　辺　の　遺　跡　分　布　図　(1/5000)

○消滅した窯　▲窯跡　●古墳　■山城

第1表　調　査　一　覧　表

	調査期間	調査担当者	検出遺構	備考
第1次調査	昭和47年11月18日 〜 昭和48年8月19日	松岡　史 前田軍治 福岡チブサン会	古墳13基	九銀興産株式会社 ミサワホーム株式会社
緊急調査	昭和50年8月26日	川述昭人 佐々木隆彦	南支群1基	福岡県教育委員会
第2次調査	昭和54年5月7日 〜 昭和54年9月20日	副島邦弘・川述昭人 小池史哲・馬田弘稔 池辺元明・前田軍治他	古墳2基 近世墓8基 窯4基	大野城市教育委員会 福岡県教育委員会
第3次調査	昭和54年12月10日 〜 昭和55年1月7日	舟山良一	古墳2基 窯1基	大野城市教育委員会



第2図　削られた中通丘陵と平野ハイツ　　(1980. 3)

2. 位 置 と 環 境

中通り遺跡群は、福岡県大野城市大字牛頸字中通、及び字入道堂に所在する。

九州最大の規模を有し、『筑前須恵器窯跡群』として知られる「牛頸窯跡群」は、大野城市と春日市・太宰府町の一部に及んでいるが「中通り遺跡群」は、その中心部に位置する。

福岡平野の南方に位置する標高448mの牛頸山に源を発する牛頸川は、北流して御笠川に注ぐが、その流域は開析されて狭長な谷を形成し、さらに小さな谷が複雑に入り込み無数の支谷を作り出している。

自然地形の丘陵斜面を利用する須恵器窯の立地条件として格好の地形を成し「穴窯」(地下式)を作るのに適した花崗岩バイラン土の丘陵斜面、牛頸山系から容易に得られる燃料と陶土資源が基になり東西約4km、南北4.6kmの範囲に約200基を数える窯跡群が見られ、古墳約40基も分布し、春日市大字上白水(整理池畔)に瓦窯跡2～3基、春日市春日原(旧米軍春日原基地内)に須恵器窯跡2基(註)が確認されている。

また、「牛頸ダム」建設予定地の大野城市大字牛頸字井手・足洗川両地区には30基以上の窯跡が予想(灰原及び須恵器の散布等)され、他の牛頸地区においても須恵器の散布地が数多く見られ、「牛頸窯跡群」は300基以上になることが推測される。

同地域における主な遺跡は次表のとおりで、旧石器～縄文～弥生～古墳～歴史時代と長期にわたり古人の足跡が残されているが、弥生式時代より以前の遺跡については大規模なものは現在まで発見されていない。特に弥生時代について言及すれば、近くに須玖・伯玄社・大南・一の谷・赤井手・門田・辻田・春日原ベース内遺跡など大遺跡が連なっているが、牛頸の谷間には入り込んでいないように見受けられ、もし今後発見されるとしても小規模なものと思われる。それは牛頸の狭長な谷がもたらす当時における生産性(米作等)の低さから来るものと思われ、古墳時代及びそれ以降における古墳、窯跡群の分布と裏腹になるわけであるが、古墳時代以降における牛頸谷の隆盛の原因については稿末「(3)小結」に委ねることにする。

註：赤崎敏男氏ご教示

牛頸周辺遺跡に関して刊行された報告書等(簡単なものを含む)は次のとおりである。

1 福岡県教育委員会『野添・大浦窯跡群』「福岡県文化財調査報告書」第43集 1970
2 大野町教育委員会「大野町の文化財」第1集 1970
3 大野町教育委員会「大野町の文化財」第2集 1971
4 大野城市教育委員会「大野城市の文化財」第5集 1973
5 福岡県教育委員会「大野城市文化財分布地図」1973
6 坂詰秀一編「筑前平田窯跡」雄山閣 1974



第 3 図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図(1/25000)

7　横田賢次郎・川述昭人・酒井仁夫「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」九州考古学(49・50) 1974

8　福岡県教育委員会『向佐野・長浦窯跡の調査』「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第VI集　1975

9　小田浦窯跡発掘調査団「大野城市の文化財」第9集　1977

10　坂詰秀一・上野精志『福岡県小田浦窯跡の調査』「考古学ジャーナル」№170、1978

11　太宰府町教育委員会『神の前窯跡』「太宰府町文化財調査報告書」第2集　1979

第2表　牛頸周辺遺跡地名表

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	大牟田池窯跡	春日市大字春日 1524—57	窯跡1基以上(須恵器)	
2	惣利窯跡群	〃　〃 字惣利	窯跡15基以上(須恵器)	昭和52年春日市教委調査(1基) 昭和55年春日市教委調査(5基)
3	春日平田窯跡群	〃　〃 字平田	窯跡5基以上(須恵器・瓦)	
4	梅頭窯跡	大野城市大字上大利 字梅頭	窯跡1基　(須恵器)	
5	出口窯跡	〃　〃 字出口	窯跡1基　(須恵器)	
6	神の前窯跡群	太宰府町大字吉松 字神ノ前	窯跡2基　(須恵器・瓦)	昭和53年太宰府町教委調査(2基) 昭和54年報告書刊行
7	長浦窯跡	〃　大字向佐野 字長浦	窯跡1基　(須恵器)	昭和47年福岡県教委調査 昭和50年報告書刊行
8	向佐野窯跡群	〃　〃 字前田	窯跡3基　(須恵器)	同　上
9	宮ノ本窯跡群	〃　〃 字宮ノ本	窯跡3基　(須恵器)	昭和54年太宰府町教委調査(3基)
10	華無尾(ケナシオ)窯跡群	大野城市大字牛頸 字華無尾	窯跡2基　(須恵器)	消滅
11	野添窯跡群	〃　大字上大利 字野添	窯跡10基以上(須恵器)	昭和44年福岡県教委調査(2基) 昭和45年報告書刊行
12	谷蟹(タニガニ)窯跡	〃　〃 字谷蟹	窯跡1基　(須恵器)	消滅
13	大浦窯跡群	〃　〃 字大浦	窯跡5基　(須恵器・瓦)	昭和43年福岡県教委調査(2基) 昭和45年報告書刊行
14	平田窯跡群	〃　大字牛頸 字平田	窯跡9基　(須恵器)	昭和47年立正大学調査(2基) 昭和49年報告書刊行 昭和54年大野城市教委調査(1基)
15	上平田窯跡群	〃　〃 字上平田	窯跡4基　(須恵器)	昭和47年福岡県教委調査(4基) (本書　付編)

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
16	浦ノ原窯跡群	春日市大字下白水字浦ノ原	窯跡10基以上(須恵器・瓦)	昭和53年春日市教委調査(7基)
17	畑ケ坂窯跡群	大野城市大字牛頸字畑ケ坂	窯跡3基 (須恵器)	1基消滅
18	後田窯跡群	〃 〃字後田	窯跡5基以上(須恵器・瓦)	
19	月ノ浦窯跡群	〃 〃字月ノ浦	窯跡2基 (須恵器)	
20	胴ノ元窯跡群	〃 〃字胴ノ元	窯跡2基 (須恵器)	
21	東浦窯跡群	〃 〃字東浦	窯跡3基 (須恵器)	昭和43年国士館大学調査(3基)
22	**中通(ナカドオリ)窯跡群**	〃 〃{字中通・字入道堂	**窯跡12基以上(須恵器)**	**(本報告)**
23	原窯跡群	〃 〃原	窯跡3基 (須恵器)	土取りで灰原の一部を残すのみ
24	ハセムシ窯跡	〃 〃字ハセムシ	窯跡12基以上(須恵器)	4基以上消滅
25	井手窯跡群	〃 〃字井手	窯跡3基 (須恵器)	
26	小田浦窯跡群	〃 〃字小田浦	窯跡10基以上(須恵器)	昭和51年立正大学調査 (4基)
27	城の山窯跡	〃 〃字城の下	窯跡1基以上(須恵器)	窯本体が空洞で露出している
28	大谷窯跡群	〃 〃字大谷	窯跡12基以上(須恵器・瓦)	昭和46年国士館大学調査(4基)
29	石坂窯跡群	〃 〃字石坂	窯跡20基以上(須恵器)	
30	足洗川窯跡群	〃 〃字足洗川	窯跡5基以上(須恵器)	
31	道ノ下窯跡群	〃 〃字道ノ下	窯跡6基以上(須恵器)	
32	長者ケ原窯跡群	〃 〃字長者ケ原	窯跡2基 (須恵器)	
33	笹原窯跡群	〃 〃字笹原	窯跡2基以上(須恵器)	
34	(牛頸ダム建設予定地付近)	〃 〃{字井手・字足洗川	窯跡30基以上(須恵器)	須恵器の散布状況から推定
A	大土居水城跡	春日市大字上白水字大土居	土塁	(国指定史跡)
B	惣利遺跡	〃 大字春日字惣利	散布地	縄文～中世

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
C	春日水城	春日市大字春日 字春日	土塁	
D	向谷古墳	〃 〃 字向谷	方墳1基	昭和55年春日市教委調査
E		大野城市大字上大利	散布地	土師・須恵器
F	上大利水城	〃 〃 字横堤	土塁	(国指定史跡)
G	吉松古墳	太宰府町大字吉松	円墳1基	
H	宮ノ本古墳群	〃 大字向佐野 字宮ノ本	6基	昭和54年太宰府町教委調査(6基)
I	宮ノ本遺跡	〃 〃 字宮ノ本	古墓群(3基)等	昭和54年太宰府町教委調査 (買地券出土)
J	大堤古墳群	春日市大字上白水 字大堤	円墳3基	(満水時水没)
K	楠木遺跡	〃 大字下白水 字楠木	甕棺墓	弥生(中期)
L	惣利古墳	〃 大字春日 字惣利	円墳1基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
M	イケ谷古墳群	〃 大字上白水 字イケ谷	円墳3基以上	(春日原ゴルフ場内)
N	浦ノ原遺跡	〃 大字下白水 字浦ノ原	散布地	土師・須恵器
O	塚原古墳群	〃 大字春日 字塚原	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か?
P	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸 字日ノ浦	散布地	縄文～中世
Q	華無尾(ケナシオ)遺跡	〃 〃 字華無尾	散布地	旧石器～縄文(ナイフ形石器 石鏃等出土)
R	後田古墳群	〃 〃 字後田	円墳3基以上	
S	小田浦古墳群	〃 〃 字小田浦	円墳3基以上	昭和51年立正大学調査(1基)
T	月の浦古墳	〃 〃 字月の浦	円墳1基	消滅(横穴式石室)
U	畑ケ坂古墳	〃 〃 字畑ケ坂	円墳1基	
V	胴ノ元古墳	〃 〃 字胴ノ元	円墳1基	
W	**中通(ナカドオリ)古墳群**	〃 〃 **字中通**	**円墳18基**	**(本報告)**

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
X	長者ケ原遺跡	大野城市大字牛頸 字長者ケ原	散布地	縄文（石匙・石鏃出土）
Y	足洗川遺跡	〃　〃 字足洗川	散布地	旧石器（石刃出土）
Z	水城	太宰府町・大野城市	土塁	（国指定特別史跡）

註：○基以上と記入したものは、精査により窯跡・古墳等が増加すると思われるものを示す。

（前　田）

Ⅱ. 発掘調査の記録

1. 第１次発掘調査（昭和47年～48年）

2. 第２次発掘調査（昭和54年夏）

3. 第３次発掘調査（昭和54年冬）

1. 第1次発掘調査

(昭和47年～48年)

本報告書を第一次発掘調査の直後に
急逝された調査団員東和大学講師故
桑幡一郎氏の御霊前に捧ぐ。

本文目次

1）はじめに……9

2）古墳群の調査……10

3）小　結……71

1．調査時の遺構実測図の作成は前田恵美子・松岡操・東中川忠美・前田軍治・松岡史の手によるものである。

2．調査資料の整理・復原・実測図作成は、前田恵美子・合志幸子・村上千鶴子・松岡操・東中川忠美・前田軍治・松岡史がこれを実施した。

1) はじめに

中通り古墳群の調査は、九銀興産株式会社の受嘱を受けて、昭和47年11月、旧山鹿高等学校の考古学部出身者の集りである福岡チブサン会を中心に、福岡県文化財管理調査員である前田軍治管理調査員を長とし、全般的な発掘指導を福岡県文化課松岡史調査係長を充てて、発掘調査団を組織して調査を実施することとなった。

調査団はつぎのとおりである。

調査担当者　福岡県教育庁文化課調査係長（現文化課技術課長補佐）　松岡　史
福岡県文化財管理調査員（現福岡県文化財保護指導委員）　前田　軍治
福岡チブサン会（熊本県立山鹿高等学校・鹿本高等学校（考古学部）
卒業生：福岡地区在住者）
小山公子　黒田千賀子　合志幸子　坂田マス子　高原義照　高宮衛
司　竹原勲　原口克己　福本淳一　前田恵美子　松本修一　松本享
子　三小田祐万　村上千鶴子　山口敬助

調査協力者　山鹿市文化財を守る会会長（現熊本史談会青年部長）　河村　修
熊本県教育庁文化課参事（現文化財調査係長）　隈　昭志
東和大学講師　（故）桑幡　一郎
熊本県教育庁文化課主事（現文化課技師）　桑原　憲彰
熊本県立鹿本高等学校教諭　上妻　信寛
山鹿市文化財を守る会副会長（現会長）　谷　良太郎
山鹿市社会教育課（現山鹿市立博物館学芸員）　中村幸史郎
九州大学学生（現佐賀県教育庁文化課保護主事）　東中川忠美
山鹿市文化財を守る会顧問（西日本新聞記者）　幸　平和
有隅冨美子　江口和子　桑原睦子　桑幡智子　中尾武司　中尾徳四
郎　冨部誠文　松岡操　溝上一義　柳原茂実　山下謙二

調査に際しては、松岡・前田が終始事にあたり遠く熊本から来援された方々及び地元牛頸の山村栄、ふみえ御夫妻には長期にわたり発掘資材の保管場所と飲料水等の提供をいただいたことを明記して深甚なる謝意を表するとともに、調査終了後に他界された故桑幡一郎氏の御冥福を祈る次第である。

中通り古墳群の立地（第１～３図、図版１～５、付図）

立地について

牛頸山を水源として北流する牛頸川の谷口をなす辺りに西に平野神社と不動城跡、東に中通り丘陵が牛頸川を距てて北向する。中通り丘陵は東背部に小さな谷をもち、上空から見れば北に向つて突出し、牛頸川中流の日の浦から春日市惣利・春日に向つて盆地状に拡がりを見せる沖積地の扇の要をなす位置にある。

この丘陵は完全な風化花崗岩からなり地表近くは赤色粘土質、深くなるに従い分解した小粒の花崗岩の各成分結晶が粗い砂状をなし、土木業者の言う「マサ土」である。

「中通り」の地名通り北から牛頸川沖積地を望む時、中通り丘陵の東西には低丘陵が川を距てて相対し中通り丘陵は高低屈曲を終て牛頸山塊が連らなって、背面に屏風を立てた如くに望まれる。この丘陵西側の沖積地は天文年間の大宰府観世音寺文書に見える平野社廿六町に該当するもので、谷口に位置することから最も早く開発された農耕地と考えられる。

古墳群は南北に並ぶ本丘陵地のそれぞれの高まりを背にして丘陵西麓に北群・中央群・南群と別れて営まれている。

第一次調査は北及び中央部群の発掘とこの間に遺存するスエ器窯跡の分布を調査した。

（松岡）

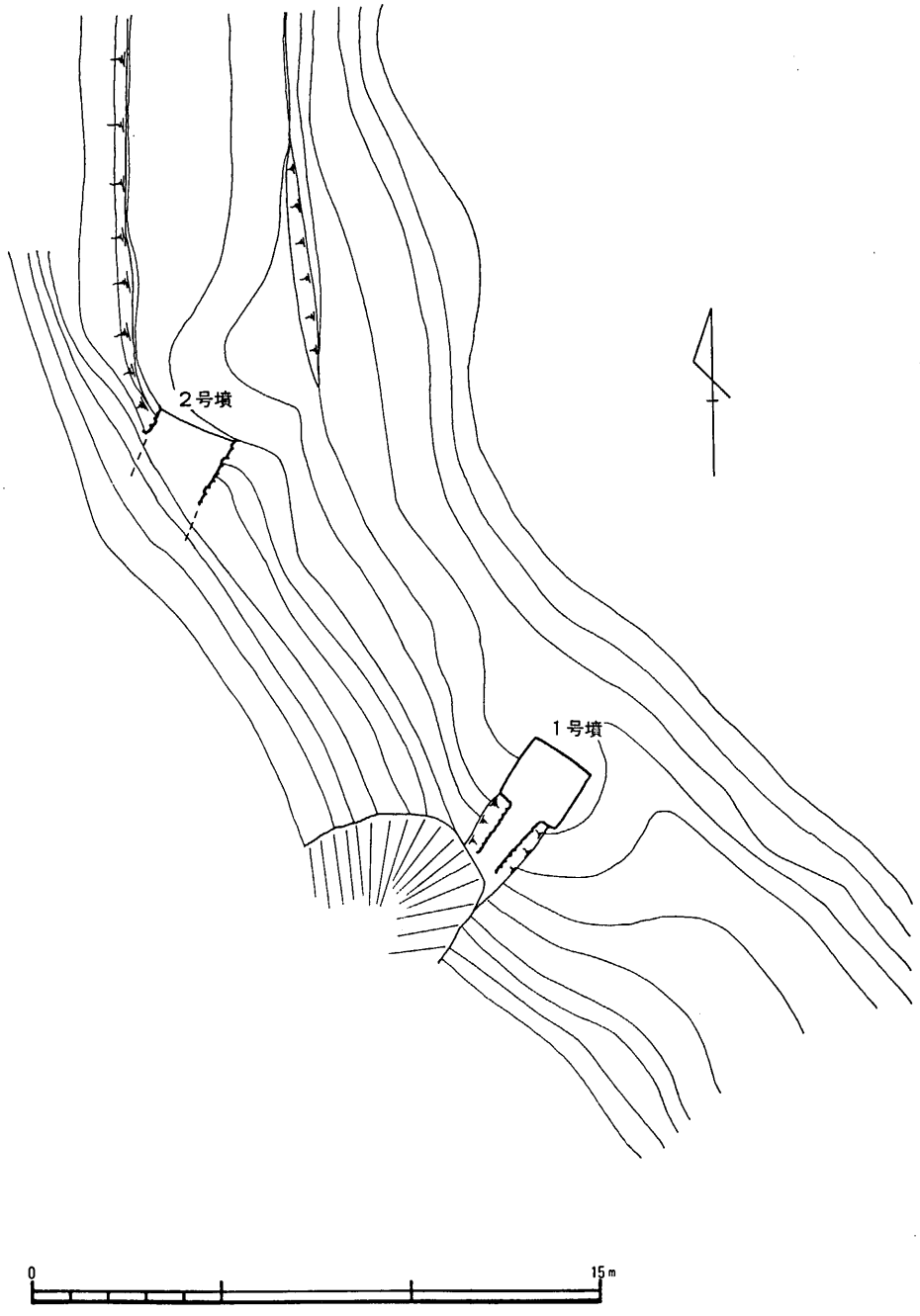
2）古墳群の調査

(1) 中通り１号墳（第４～６図、図版７・８）

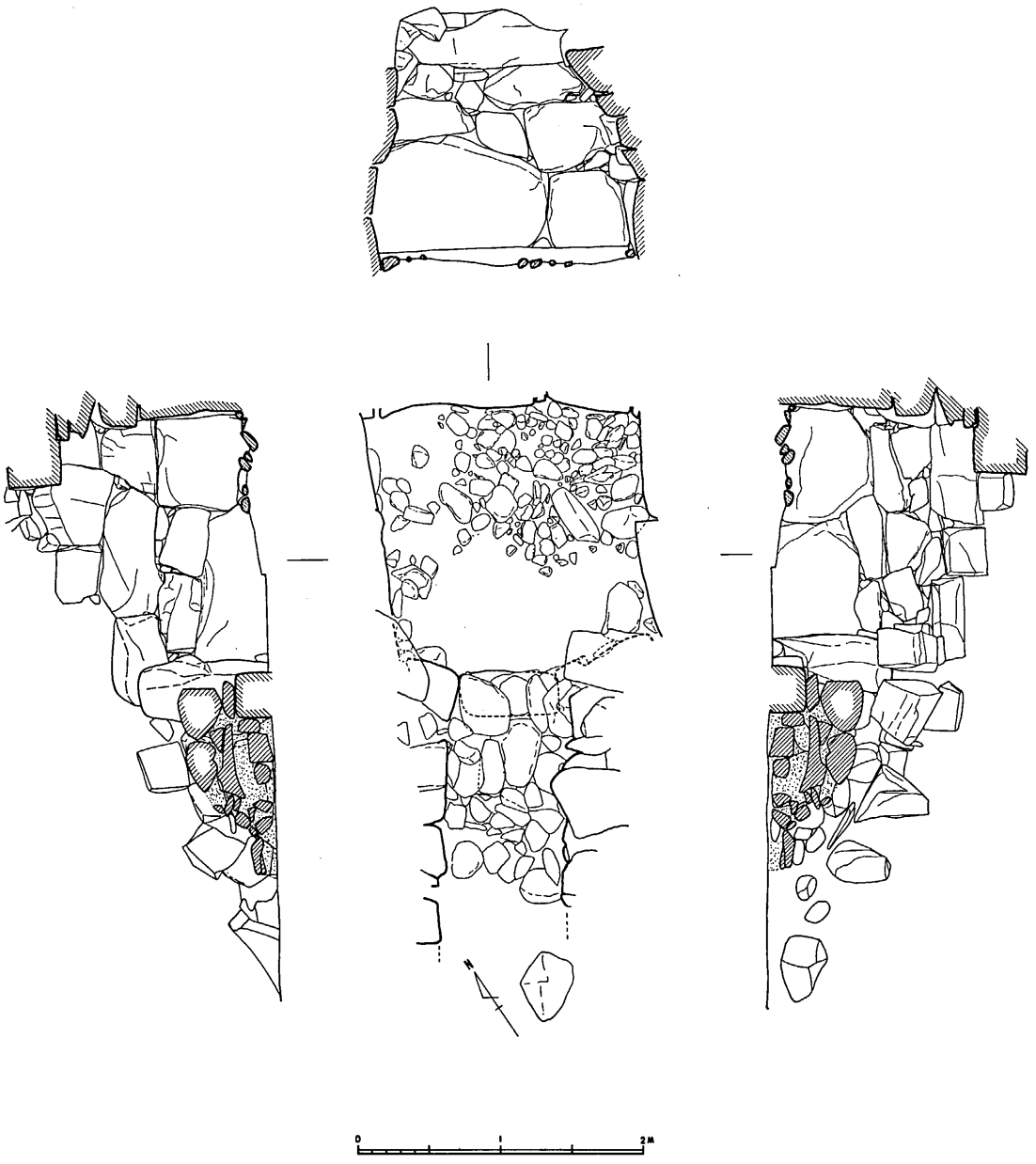
中央群に属し中通り丘陵中央丘西南麓に西南に主軸をもつ円墳であるが、詳細に見れば墳丘背面は丘陵斜面に連続し、横から見れば丘陵斜面にコブ状に貼りついた感がある。古墳の前面は急崖をなし水田面からの比高は約５ｍである。墳丘は左右約８ｍ。前後約６ｍ、本来の姿でない事は言うまでもない。

内部主体は単室横穴式石室、花崗岩自然塊を上手に使い正方形に近い玄室は側壁を４段に積み天井石を構架していたが奥壁上の一石を除き失われている。玄門は袖石以外は失われ、羨道側壁は小形石材を乱れ積みにしているが天井をもったとは思われない。

玄門部に小石塊を積み上げて閉鎖しているが古墳そのものが上部を失っているので閉鎖も下半のみ遺存している。



第4図　中通り1号・2号墳地形実測図（1/200）左：2号墳　右：1号墳
（等高線は0.5m間隔）

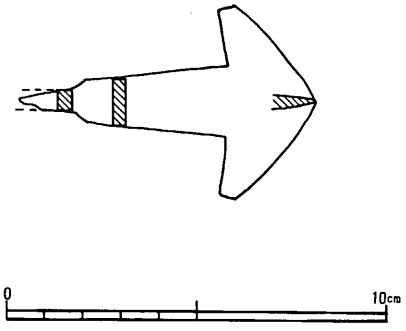


第5図　中通り1号墳石室実測図（1/50）

玄室床面は小石塊のやや偏平なもので礫床をなしている。鏃以外の遺物は全く見られなかった。これは本来副葬品が乏しかった事にも起因するものと思われるが石材採取にともなう内部の攪乱と墓道部の崩落とその土砂の除去により今は遺物の殆んどを見る事ができなくなった

と考えられる。

遺　物（第６図）



第６図　中通り１号墳出土遺物実測図(鉄製品)(1/1)

鏃（第６図）飛燕形をなした大形品である。同形のものは10号・12号墳からも出土した。

丘陵西斜面に地山を掘り込んで墓室下部を作り、石室構築後はその上部のみ盛土で覆う築造法を採り、その結果土木量の減少を計っている。墓道正面から見れば丘陵を背に堂々たる墳丘に見えるが、側面から望めた場合はコブ状の盛り上りに過ぎない。古墳前面は牛頸川とその平野を隔てて低丘陵と対面し、さらにその後面には牛頸山が遠く望まれる。川は古墳から見て左から右に流れ、その上流部も井手部落で丘陵が迫りその先は見えず、下流側も中通丘陵と平野神社丘陵で囲まれてその流末は見えない。

本古墳は北側に丘を背い南側には川に臨む背山臨水、左右両翼の丘陵に抱かれた地勢に立地する。これは中国及び朝鮮半島で言う風水地理そのものである。

副葬品は飛燕形これ一本のみであるが、本古墳群中の10号及び12号に同形のものを副葬し、その葬送年代の近い事を物語っている。（松岡）

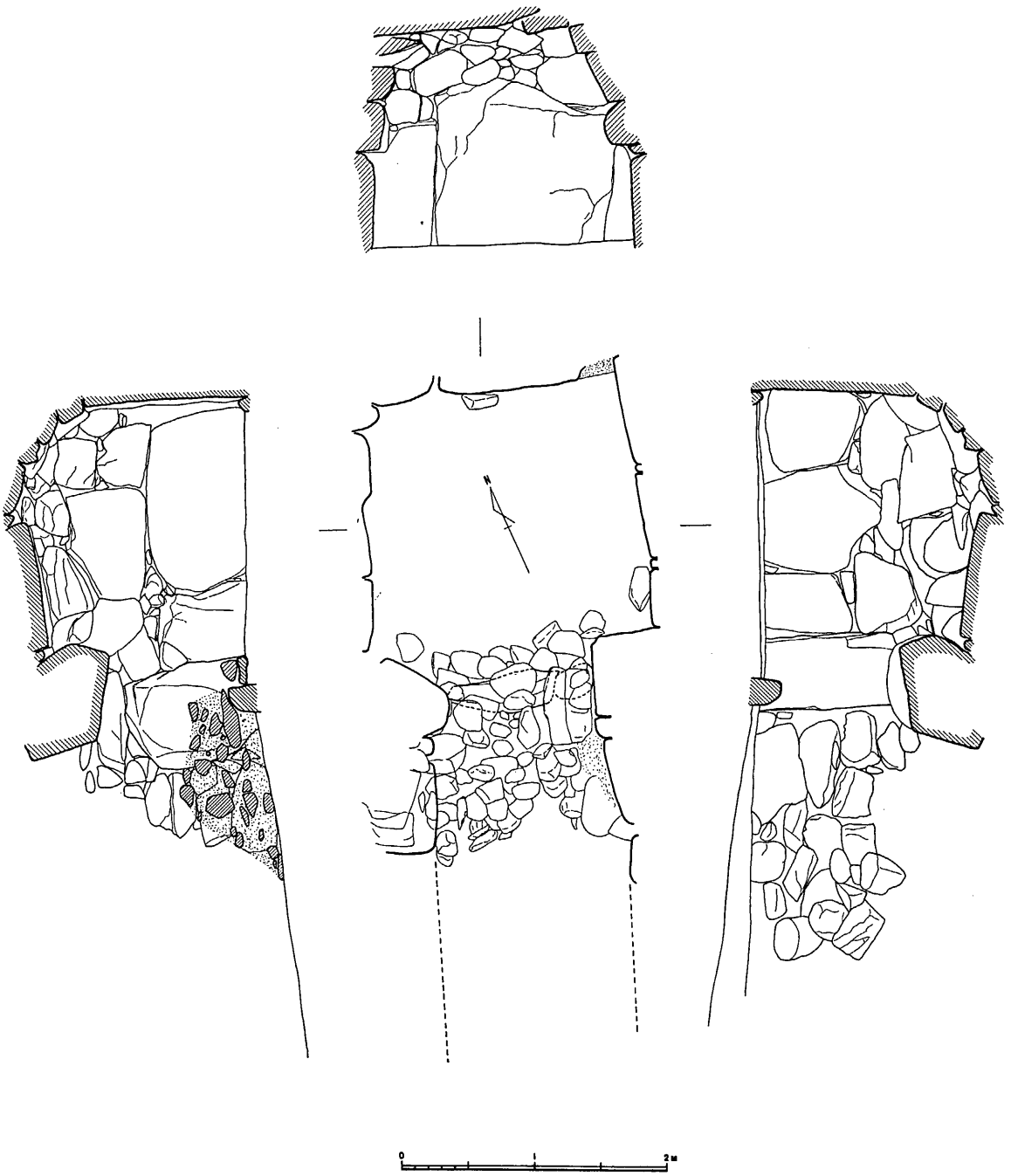
(2) 中通り２号墳（第７～12図、図版９～19）

１号墳の西北14mにあり同じ丘陵斜面に同様に築造している。１号墳より基底面が１m低いだけである。

墳丘は全く斜面のコブとなり平面形は半円であり、前面から望めた時にのみ円墳に見えるだけである。

内部主体は単穴横穴式石室、玄室は正方形の平面をなし、奥壁は一枚の大石を立てその上に小形石材を３段積上げて天井に至る。

北側壁は下に大石二枚を立て上に二段に石材を積む。南側壁は下に大形石材３箇、その上に石材を乱れ積みにしてこれら側壁が内側にせり持った上に天井石二枚を架している。玄門は両側の袖石上に楣石を横にかけ渡し、羨道は天井石はなく袖積石だけであるが、１号墳に較べて幅広である。この部分に小石塊を積み上げて玄門を閉鎖している。墓道は明瞭な幅を示さず前庭をなして、この中央部に石室主軸に平行に墓道北壁下にスエ器類の小堆積があり、墓前祭時の供献品と考えられる。閉鎖石を除去した所、玄門南隅にもスエ器が遺存し、これは第一次埋葬時の供献品であろう。また前に述べた須恵器群に接するように鉄鏃が切先を玄室方向に向け



第7図　中通り2号墳石室実測図（1/50）

て置かれていた。

恐らく破邪の宗教的観念を強く表わしたものと思われ筆者も度々この様な例を見ている。（松岡）.

遺　物（第９・10図、図版17～19）

装　身　具（第９図、図版19）

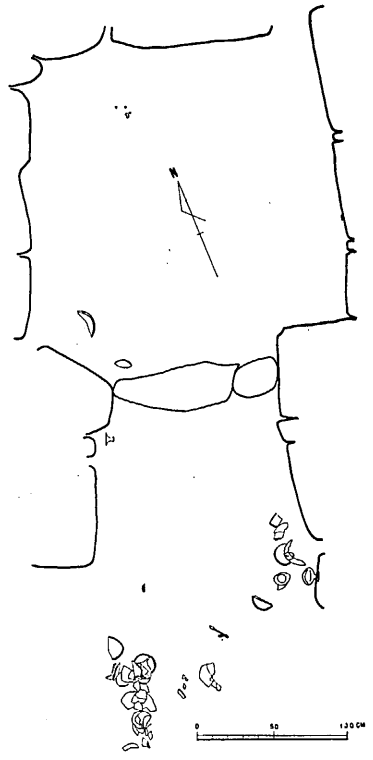
勾玉（１）硬玉製で白色を呈する。片方からの穿孔で、長さ2.86cm、幅1.36cm、厚さ1.1cmを測る。

丸玉（２～５）ガラス製４個が検出された、２は暗青色を呈する稍細長いタイプで径1.29cm、厚さ1.35cm。３は表面が腐蝕して銀色（内部は緑色と思われる。）の光沢を放つ重みのあるもので、鉛ガラス製と思われ、腐蝕で稍小さくなっているが径1.1cm、厚さ0.8cmを測る。

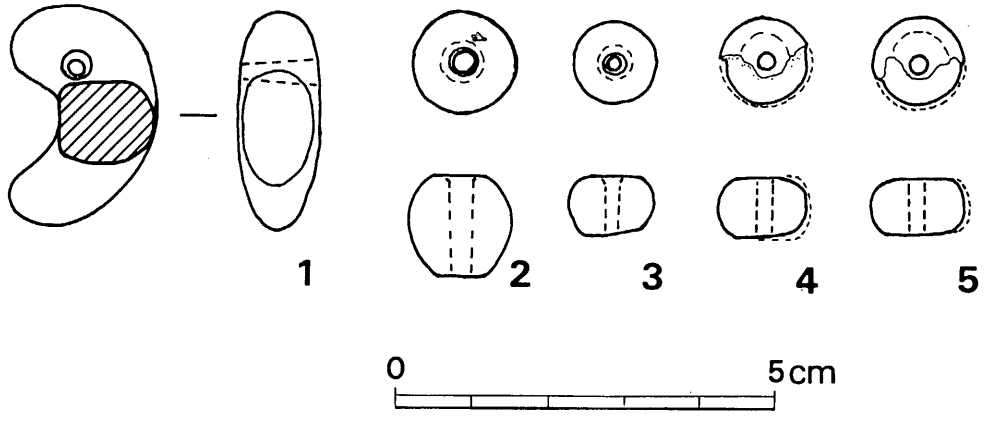
４と５は表面が腐蝕して白色を呈するが、淡緑色をなすものと思われ、残存径約1.2cm、厚さ約0.75cmを測る。（前田）

鉄　製　品

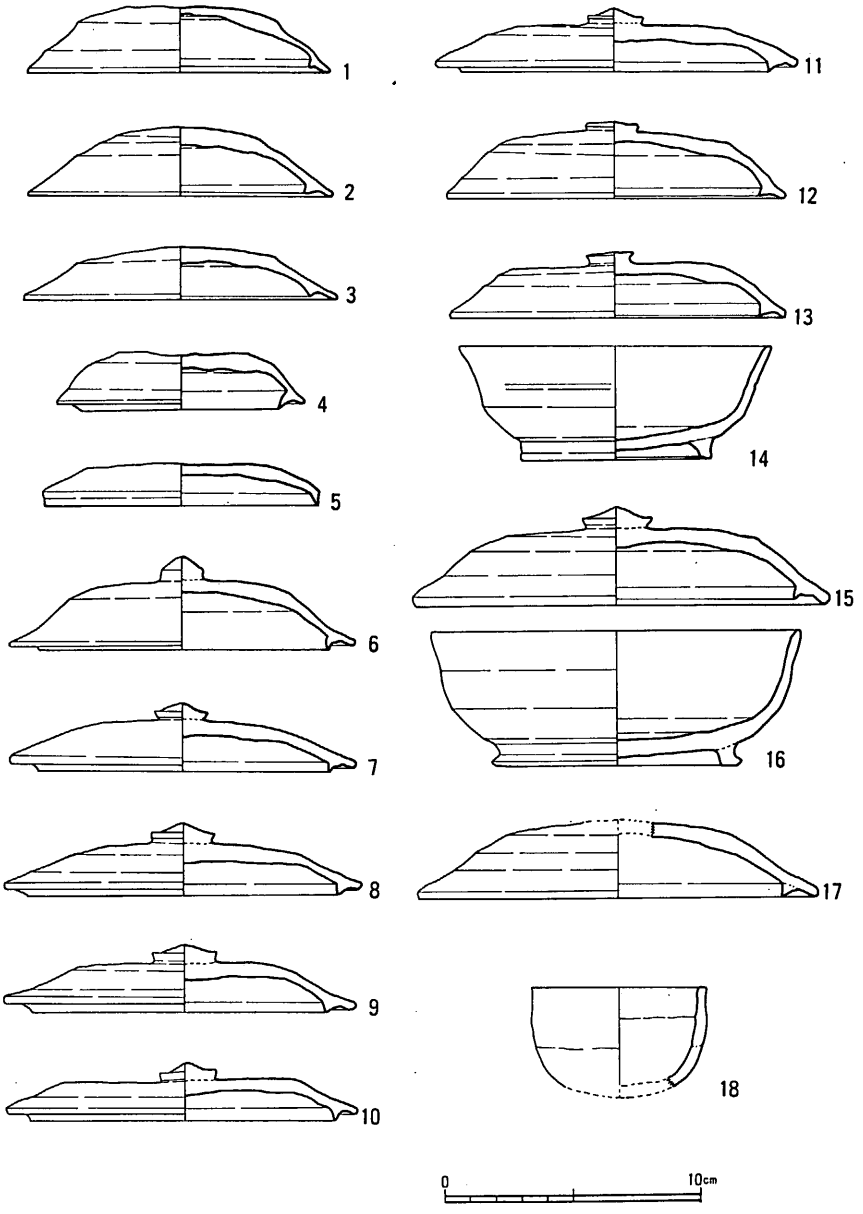
鏃　破片となっているが尖根である。



第８図　中通り２号墳遺物配置図



第９図　中通り２号墳出土遺物実測図①（玉類）（1/1）



第10図　中通り２号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）

刀子　刃部と中茎の二片であるが別個体であり刃部は平造りの普通品である。

スエ器（第10～12図）

杯（第11図）杯身と蓋とが出土しているが組合されるものはなくⅣ式とⅣB式であり、焼成

時に変形した不良品も混っている。

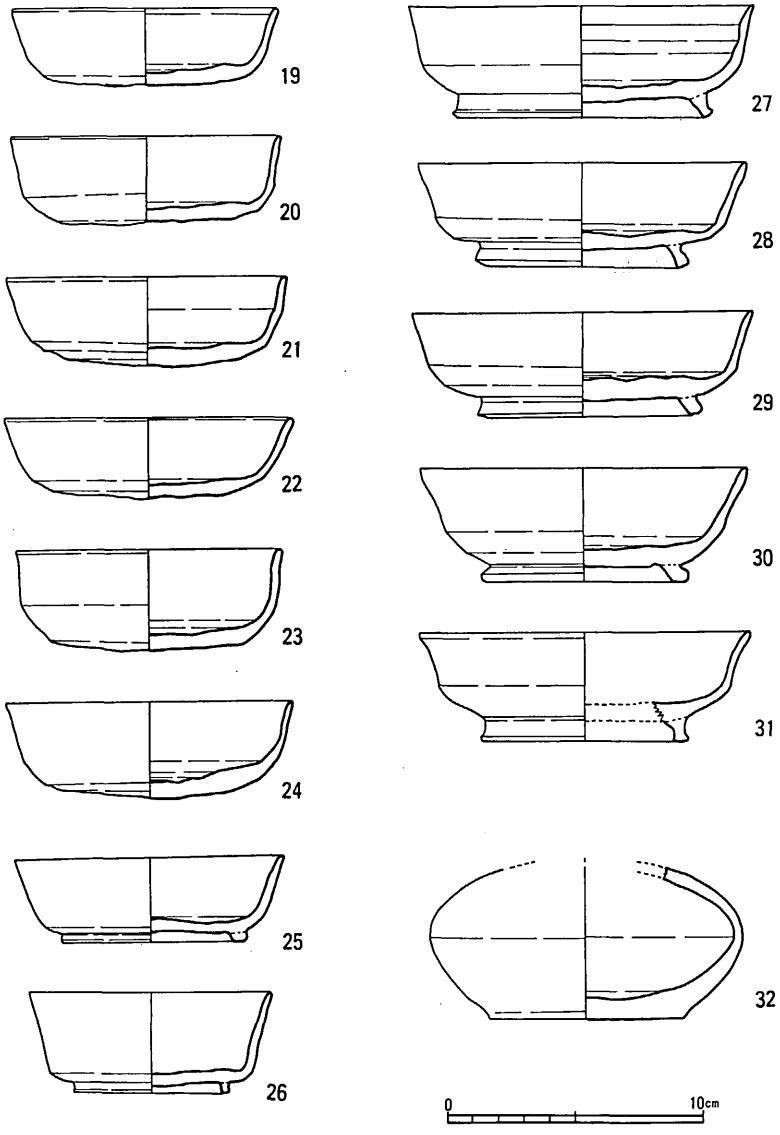
杯蓋は比較的浅いものが多く、口唇部の立上りも非常に低いものである（図版14・16）

蓋杯（第10図）蓋は何れも摘みをもち偏平な造りで、口唇の立上りも非常に低い。

杯身は何れも高台をもつものであり、V式に編年されるものである。（図版15・16）

高杯（33・34）低く開いた脚部と比較的大きな杯部をもつ。他に脚部のみが一個体ある。（図版17）

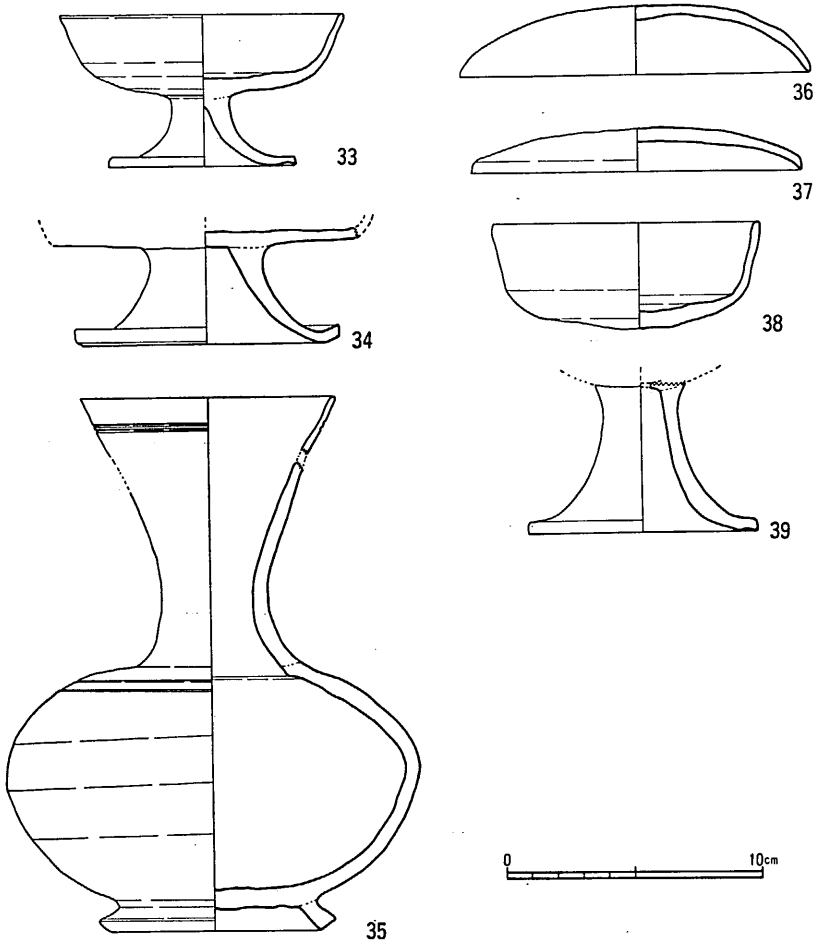
長頸壺（35）口縁部を失っているが、やや上方に開き気味の頸部と偏球形胴部の下に高台をもつ。



第11図　中通り2号墳出土遺物実測図③（土器）（1/3）

ハジ器（36・37）土師器盤が4枚玄室内に遺存していたが、これは床面上の後に侵入した土砂上にあり明らかに後世になり置かれたものである。器形から見て9世紀代のものと考えられる。

2号墳は羨道も幅を増し、これは前の石室墳に比較して前庭状をなし、墓前に供献された土



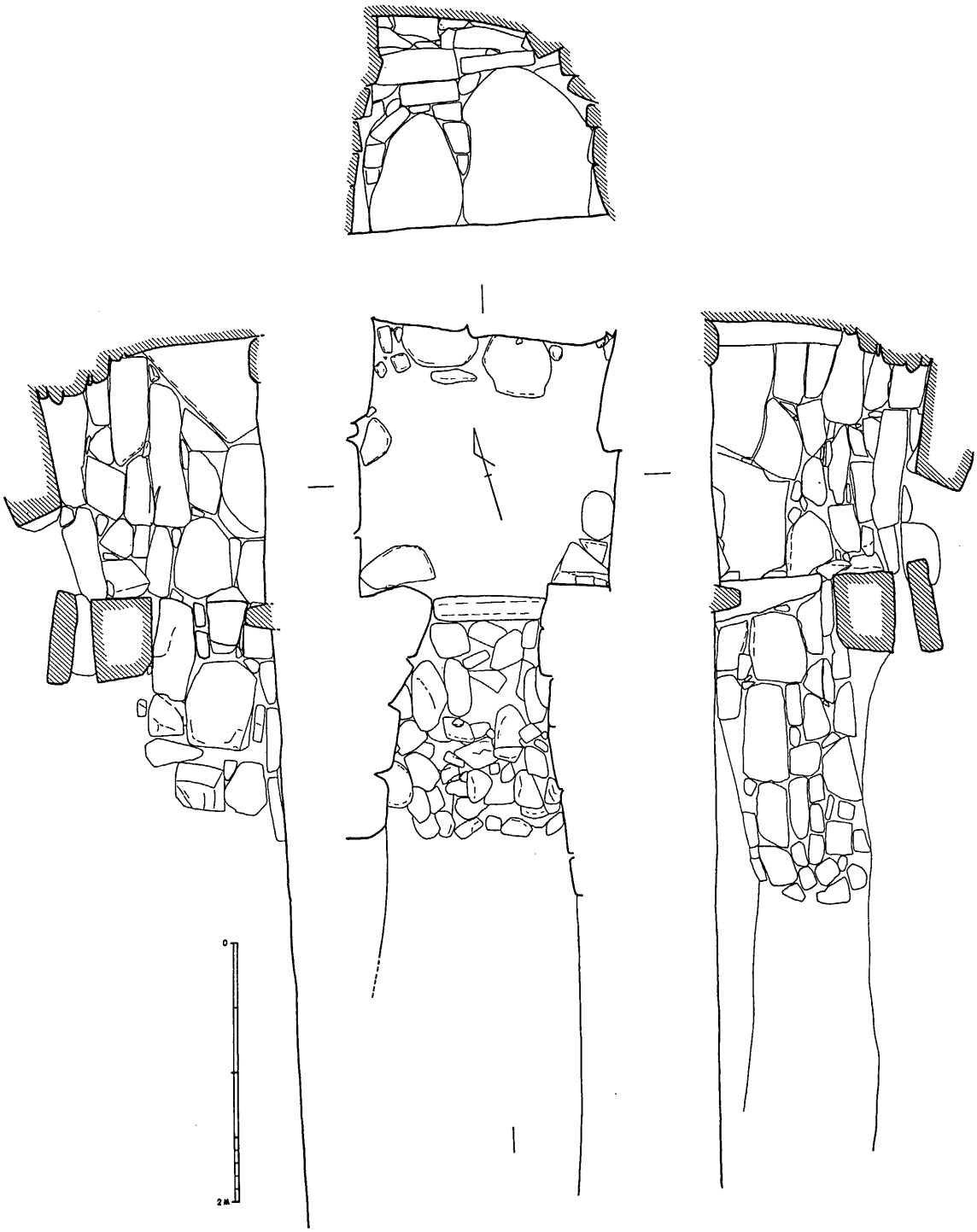
第12図　中通り２号墳出土遺物実測図④（土器）（1/3）

器類と閉鎖石下にあったそれとは形式を異にし、この埋葬室が数回に渉って使用された事を物語る。その時期は７世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられ、横に在る１号墳に続いて営まれたものと考えられる。また供献品のスエ器中に窯中での変形した不良品が含まれ、本丘陵を中心とする牛頸スエ器窯址群と密接な関係を示している。（松岡）

(3) 中通り３号墳（第13～15図、図版20～22）

２号墳より北に少し隔てた丘麓に営まれ、北群の南端に位置する。

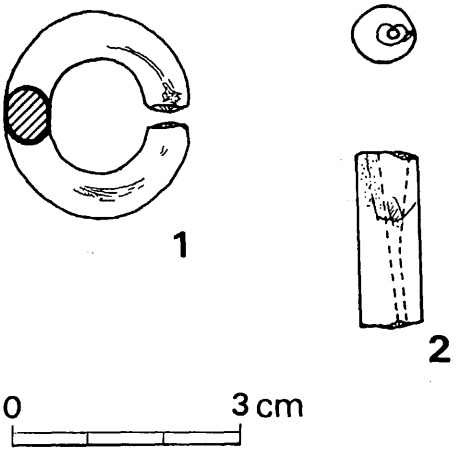
墳丘は失われて石室天井石の露出によりその存在を知った。他の古墳についても同様である



第13図　中通り３号墳石室実測図（1/50）

が、これは丘陵西麓が日当りの良さを利用して早くから開墾されて畑地として利用されたためである。恐らくは2号墳に似た墳形であったと考えられる。

内部主体は西南に開く単室横穴式石室であり、玄室は正方形のプランである。奥壁は2枚の大石を立ててこれに小口が長方形の石材を積み上げて壁体を構成する。東壁・西壁ともに基部にはやや大形石材を置きその上に面が長方形に近い石材を積み上げて行くやりかたであり、玄門袖石は東壁側にのみ立て西壁側は他と異なる事なく唯石材を積み上げているだけである。下にはカマチ石を置いて仕切りをし、羨道天井はマグサ石を横架しただけである。



第14図　中通り3号墳出土遺物実測図①（装身具）
(1/1)

玄室天井は大石二枚で構成されていたが一枚残るのみである。石材は何れも近くに産する花崗岩を使用している。

墓道は袖積みをもち少々開き気味であり、羨門部に石塊を積み上げて閉鎖していた。

しかし過去の開窓時に内部も強く攪乱され僅かの遺物が侵入土砂中に検出されたに過ぎない。（松岡）

遺　物（第14・15図、図版22・23）

装　身　具（第14図、図版22(上)）

耳環（1）銅環に銀を被せたもので、外径2.6×2.42cm、断面0.75×0.6cmで一部に腐蝕が見られ銀が剝落しているが保存は良好である。（羨道の攪乱土から出土）

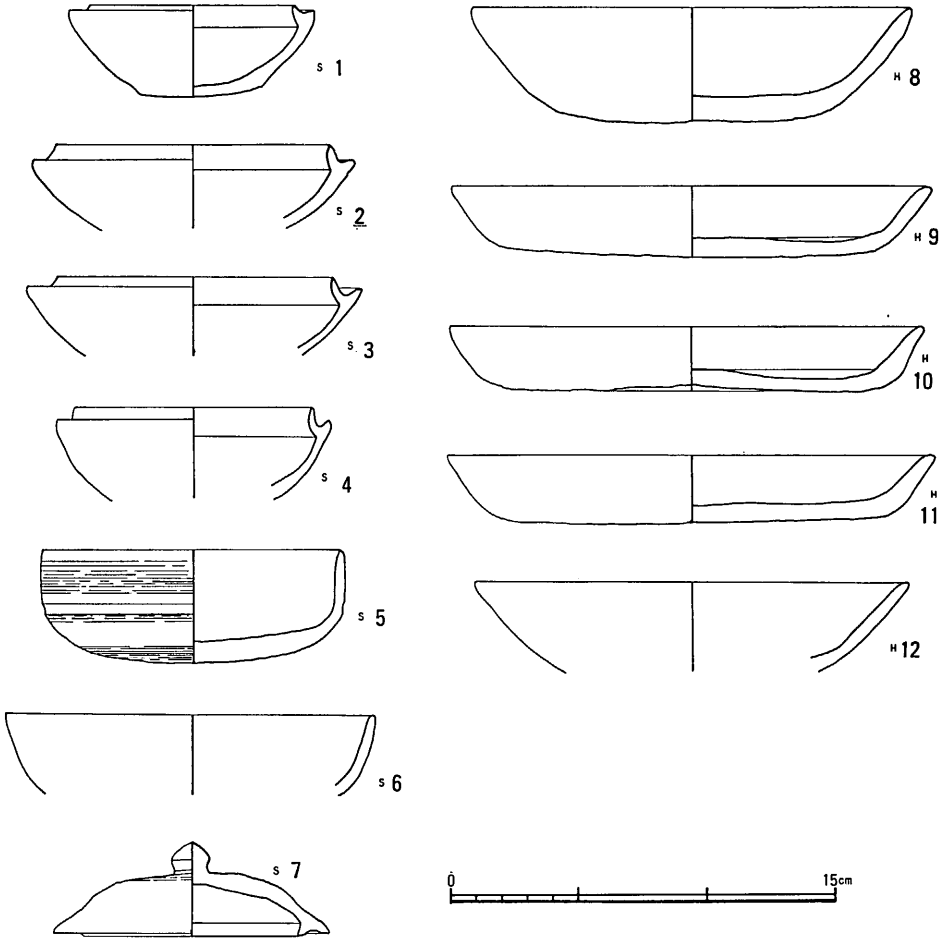
管玉（2）碧玉製で暗緑色を呈し、長さ2.28cm、最大径0.82cm、最小径0.75cmを測り、中心からはずれた位置に片方から穿孔を行なっているが、失敗して彫りなおしている。研磨も不完全で凹みが3箇所あり粗い仕上げとなっている。大孔側に小さなひびが入り、小孔側に少し欠けたところがある。（羨道の攪乱土から出土）（前田）

土　器　類（第15図）

スエ器（第15図1～7）

杯蓋　何れも口唇内側の立上りの低いものでⅣ式に属すものである。

杯身　直立する口縁と平らな底をもつⅣ式のものと緩やかに外傾する口縁をもつⅢB式のも



第15図　中通り３号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）　Ｓはスエ器　Ｈはハジ器

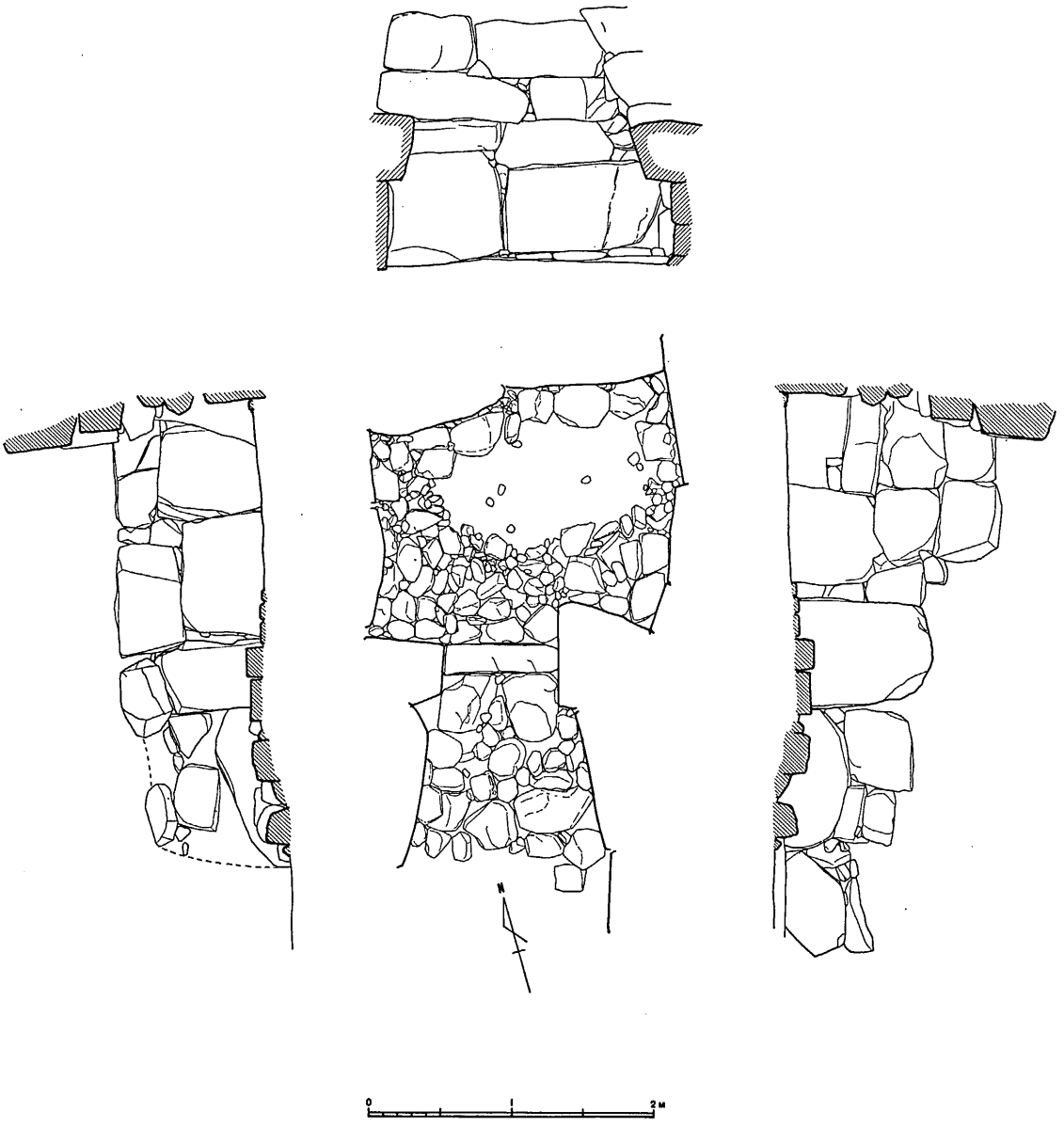
のがある。

蓋杯　蓋のみあり撮みをもつ。

ハジ器（第15図８～12）

ハジ器浅盤　明赤褐色を呈し緩やかにカーブしながら底部に至る断面形をもつもの。

ハジ器盤　平らな底と斜めに立ち上る短い口縁からなる盤であり、これは明らかに９世紀以後の所産である。本古墳では撹乱のため内部に置かれた状況は不明であるが、他の古墳では後世に置かれた事が判明しているので本古墳の場合も同様であったと思われる。



第16図　中通り４号墳石室実測図（1/50）

古墳はⅢＢ式スエ杯が一点出土しているので、造営された時期が６世紀前半期まで溯る事が可能である。そして６世紀後葉まで埋葬が数次にわたり行われたものと考えられる。そして平

安期になりハジ盤を供して宗教上の儀式が行われているが、これは石室が既にこの頃までには開口していたものと思われ、近くに密教寺院の存在を意味する大日寺等の地名を有する所もあり、また大行事の地名も近くにあり密教関係者の再利用、即ち胎蔵界の窟修行が古墳石室を利用して行なわれたものと考えられる。（松岡）

(4) 中通り４号墳（第16～20図、図版23～27）

中通り丘陵の北部高地の麓にあり３号墳の北側に接する位置である。やはり天井石がずれて後方にあり、この事からここにも古墳の存在を知り調査した。

墳形は全く破壊されて不明であるが２号・３号墳と相似たものでより円墳としての姿をもっていたものと思われる。

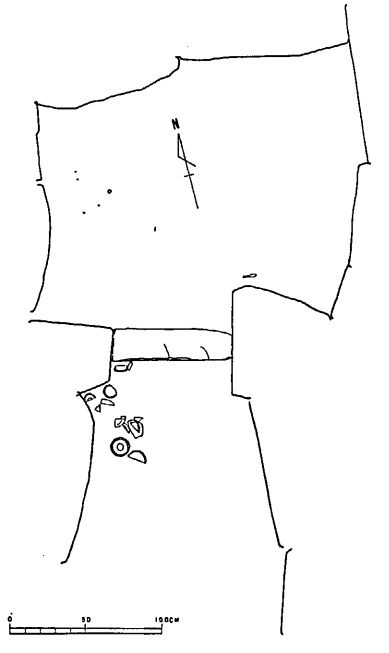
内部主体は西南に開口する単室横穴式石室であり、玄室も羨道もともに天井石は失われていた。玄室は主軸に対して左右のずれた長方形で、横長と変った感じである。床面は礫床であり羨道との境はカマチ石を置いて仕切る。

羨道も礫床でありプランは外開きに開き墓道は東側に袖積み基礎が残る、墓道は幅広く前庭をなしている。

玄室奥壁は方形と長形の二枚の大形石材を基礎に長方形に近い整った石材を積み上げて構築している。東西両側壁もよく似た構築で今までの１～３号墳に較べてより入念である。

玄門の袖石は東が大きく、西は少々小さい。

玄室床面は相当攪乱されてはいたが、礫床の敷石の間に耳環・ガラス玉が遺存し、また羨道床面にも土器が遺存した。（松岡）



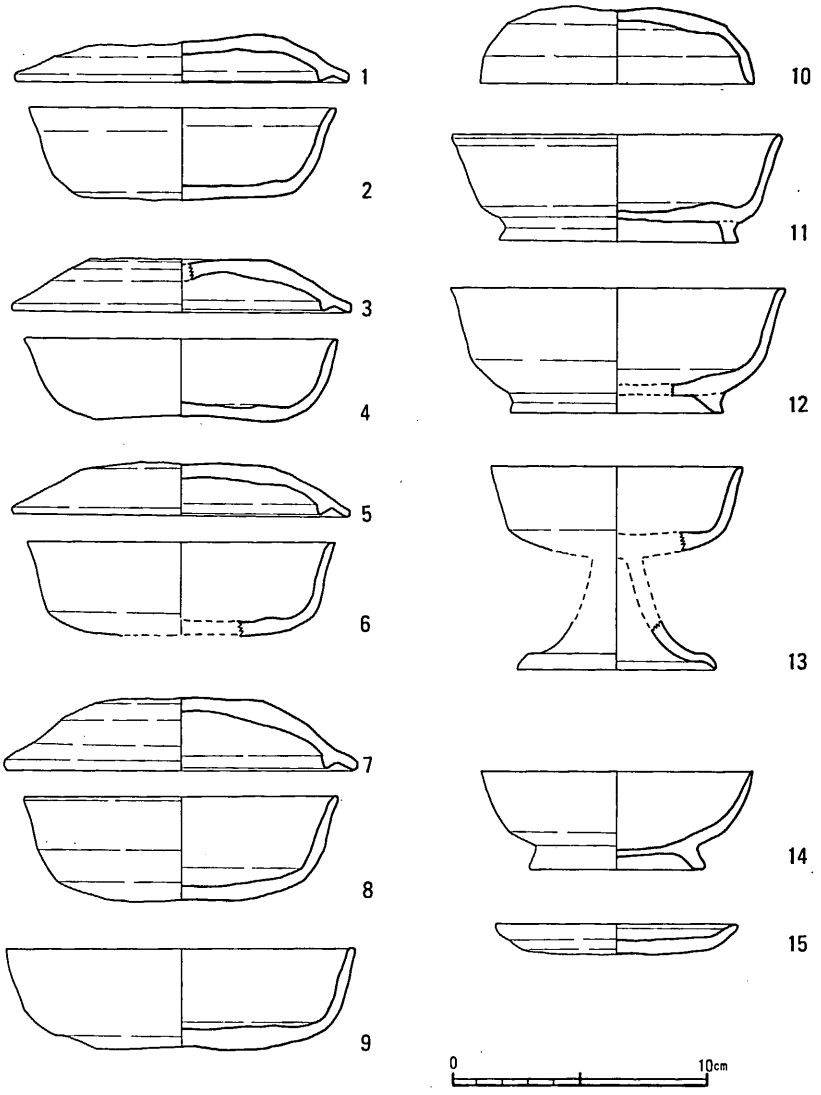
第17図　中通り４号墳遺物配置図（1/50）

遺　物（第18～20図、図版25～27）

装身具（第19図、図版26）

耳環（１）銅環に金を被せたもので、保存が良く黄金色を呈する。外径2.41cm×2.23cm、断面0.81cm×0.53cmで楕円形をなす。

管玉（２・３）碧玉製で濃緑色を呈する。

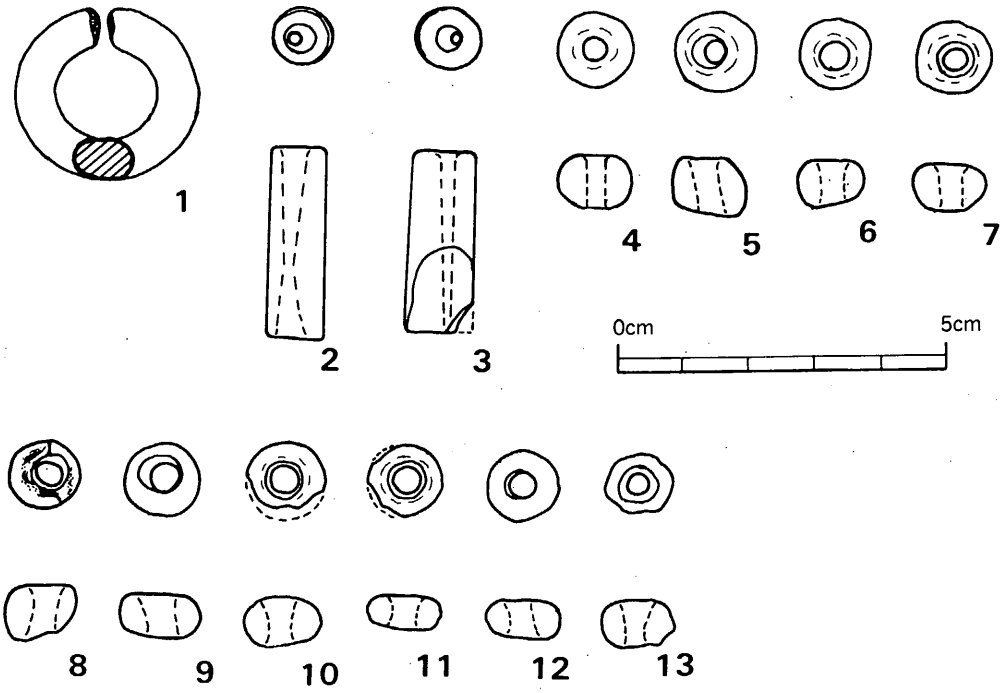


第18図　中通り４号墳出土遺物実測図①（土器）（1/3）

２は、長さ2.53cm、径0.7cmで、両方から穿孔を行なっている。

３は、長さ2.45cm、径 0.85cmで、片方から穿孔を行なっている。小孔側が２度欠損しているが、最初に欠けた部分（実測図の右下）は、面取り（研磨）されているので欠損後も使用されていたものと思われる。

小玉（４～13）18個検出されたが全てガラス製で、腐蝕が著しく表面が白または銀色を呈し



第19図　中通り４号墳出土遺物実測図②（装身具）（1/1）

ているが、いずれも緑色系統である。

原形をとどめるものはなく、比較的残りのよい10点を図示した。残存径１cm～0.7cm、厚さ0.74cm～0.31cmを測る玉である。　（前田）

土　器　類（第18図、図版27）

スエ器（第18図、図版27）

蓋杯　蓋は比較的偏平となり口唇立上りも低く、杯身は横から見れば逆梯形を呈し平底である。ⅣB式

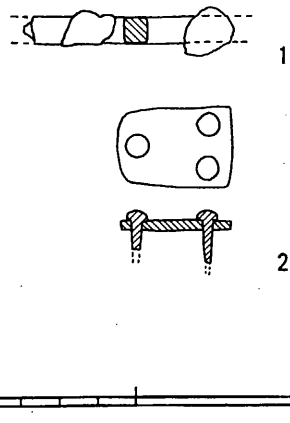
杯　底部に高台をもつものでV式である。

ハジ器

中世ハジ器　浅い円板に近い皿である。

鉄　製　品（第20図、図版25）

鏃（１）中茎及び矢尻を失った篦被の部分のみで断面は正方形である。



第20図　中通り４号墳出土遺物実測図③（鉄製品）（1/2）

革金具（2）長目爪形をした押金具に三本の鋲が打つてある。

丘麓の段丘端に営まれた本古墳は墓道部の大部分は水田化のため失われ、石室上部もまた失われていたが、多少の遺物を検出した事により内容の一端を知り得たのは倖であった。羨道と報告したのであるが敷石をもつことから或いは前室であったかも知れないが、この場所のみは比較的遺物の残りがよく、ⅣB式がV式のスエ器を出した事は葬送の時期がこの頃にあった事を物語り、7世紀初頭を前後する頃に営まれたものと考えられる。　　（松岡）

(5) 中通り5号墳（第21～24図、図版28～34）

4号墳より奥まった丘陵裾に西南に開口するように営まれた単室横穴式石室をもつ円墳であったと考えられる。本古墳もまた早い時期の開墾により墳丘はその姿を留めないまでになっていた。しかし丘麓にあったため墳丘下部のみで石室天井石が露出していた。

玄室は正方形に近いプランであるが東壁袖石が西壁側のそれより40cm程前にあり、かつ厚みも薄いために片袖に近いプランとなっている。

奥壁は1.9×1.2m以上の大石一枚を基礎にして上に二段の長方形石材を積み天井に達している。東壁は1m×1.2mと1m×90cmの大石を立てその上に大小の石材を以て壁を作る。西壁も同様であり、玄門の両袖石も大石を使用してマグサ石を横架する。袖石とマグサ石は幅が等しく90cm程でこの長さが羨道の長さでもある。羨門前面の墓道積石は1.3m程でそれから先は単に地山の掘り込みとなり、羨門から4mの範囲に土器類が遺存した。土器群の最前部に置かれていたのは須恵器高台付長頸壺で墓道の中央に立てられてあり、墓室を閉じる際に供えられた事が強く感じられた。また土器群とともに木炭片が相当数散布していた事は葬送の際の送り火であると共に、これらの大形木炭片が墓道南壁寄りに遺存していた事はタイマツとして葬送儀礼が夜実施された事を思わせ、神事が本来夜に行われる事と軌を一にしている。

遺　物（第22・23図、図版31～34）

土　器　類（第22・23図、図版31～34）

スエ器（第22・23図）

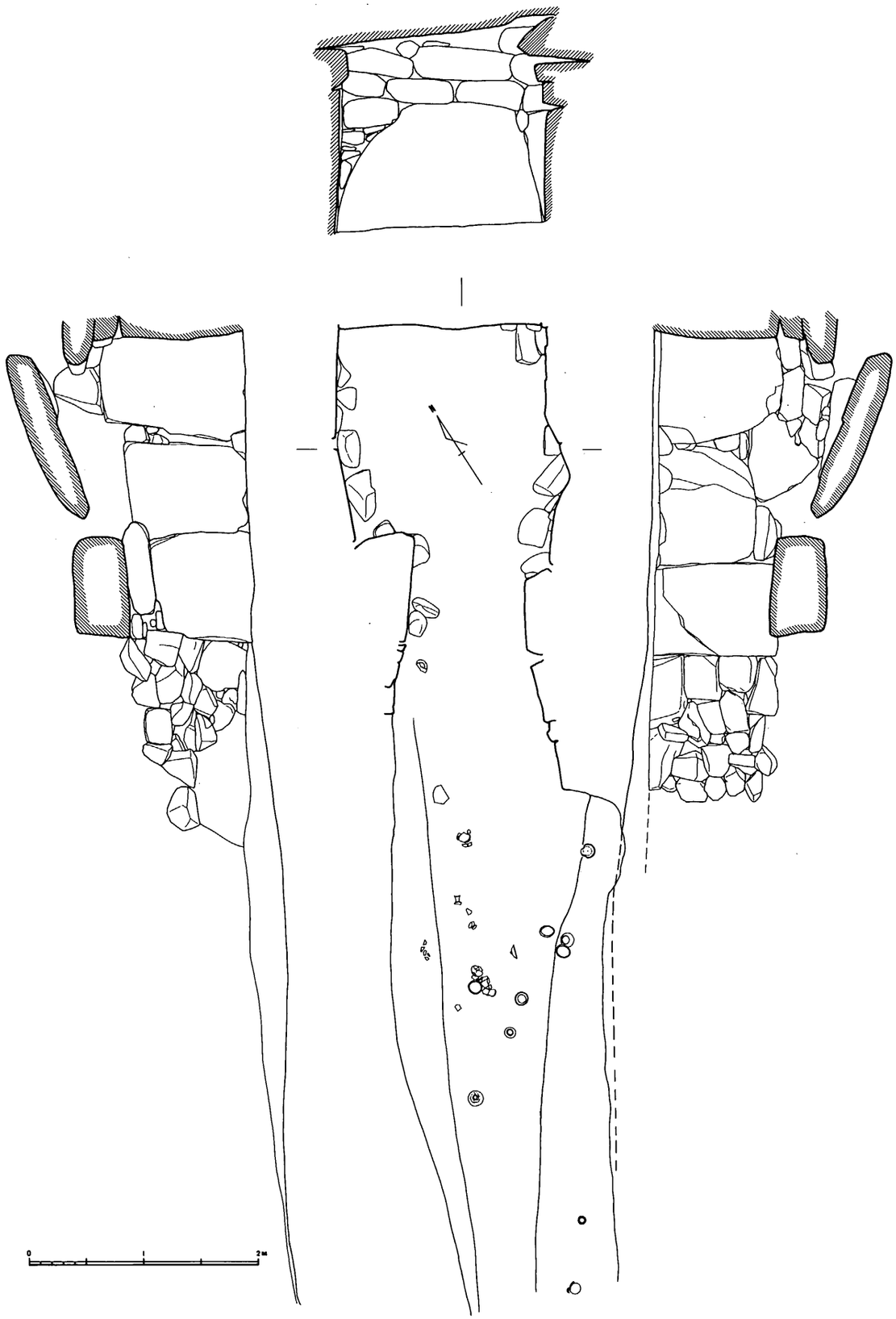
蓋杯　口唇立上りをもつ杯身と直口縁で底の丸い杯蓋からなるⅣA式とこれが逆転し上下が逆になるⅣB式と杯蓋は撮みをもち杯身には底部に高台をもつV式とがある。

脚付長頸壺（45）外に開く長い頸部とやや偏球形胴部に大きく開く脚部をもつ。

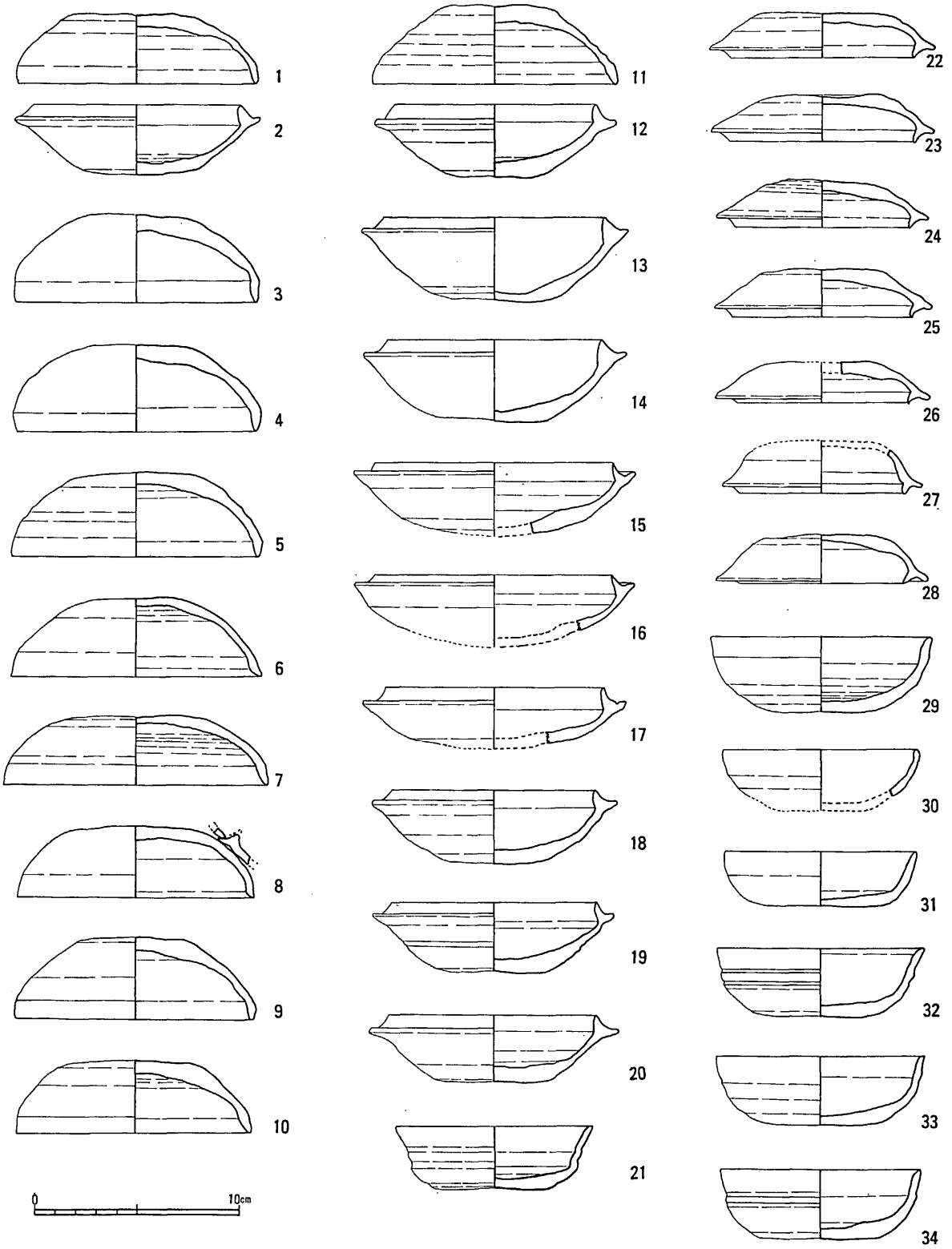
半長頸壺（46～48）偏球形胴部と高さ5cm程の口縁部を付けた丸底壺である。

有蓋短頸壺（51・52）胴径9cm程の小形壺で杯形の蓋をもつ。

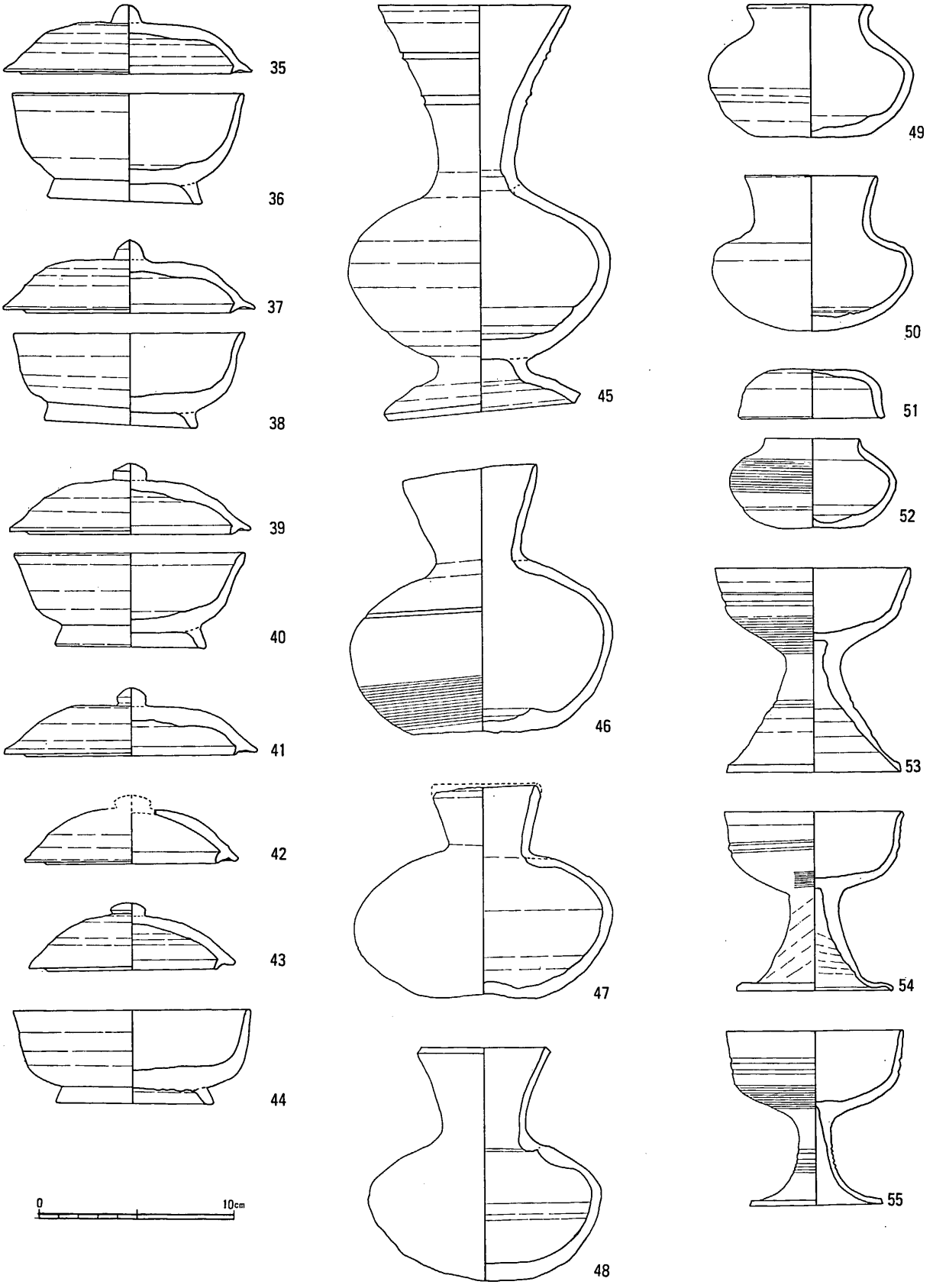
短頸壺（49・50）小形の短い頸部と偏球形胴部からなる壺である。



第 21 図　中通5号墳石室実測図及び遺物配置図（1/50）



第22図　中通り5号墳出土遺物実測図①（土器）（1/3）



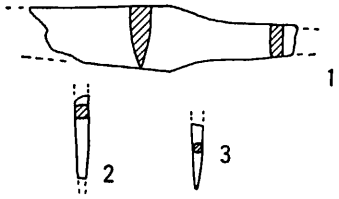
第23図　中通り５号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）

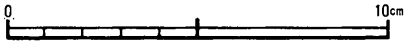
高杯（53～55）３箇あり何れも径に較べて深みのある杯部とラッパ形に開く脚部からなり、杯部と脚部に２条の沈線飾りを付けている。

鉄　製　品（第24図）

刀子（１）平造りの刃部をもつ小刀子である。

鏃（２・３）中茎.先端に近い小破片２箇である。刀子と鏃片は共に玄室床面で検出された。





第24図　中通り５号墳出土遺物実測図③（鉄製品）（1/2）

５号墳は北群の中央部にあり中通北丘陵を背に背山臨水の好地を占める。墓道も本古墳群中最も長く、石室も最大かつ最良の石材を使用し、羨門前は墓道も広く前庭状をなし、数次にわたる埋葬儀礼が行われた事が、供献された土器が少くとも三時期にわたっている事からも推察され、この古墳群中の盟主的存在である。６世紀後葉に造営されてから７世紀前葉まで葬送が行われた事は世代を異にしたものではなく、大家族を構成する当時の家の在り方から考えて家長とその複数の妻を含む年令差の大きい同世代の家族墓と考えるべきであろう。（松岡）

(6)　中通り６号墳（第25～29図、図版35～40）

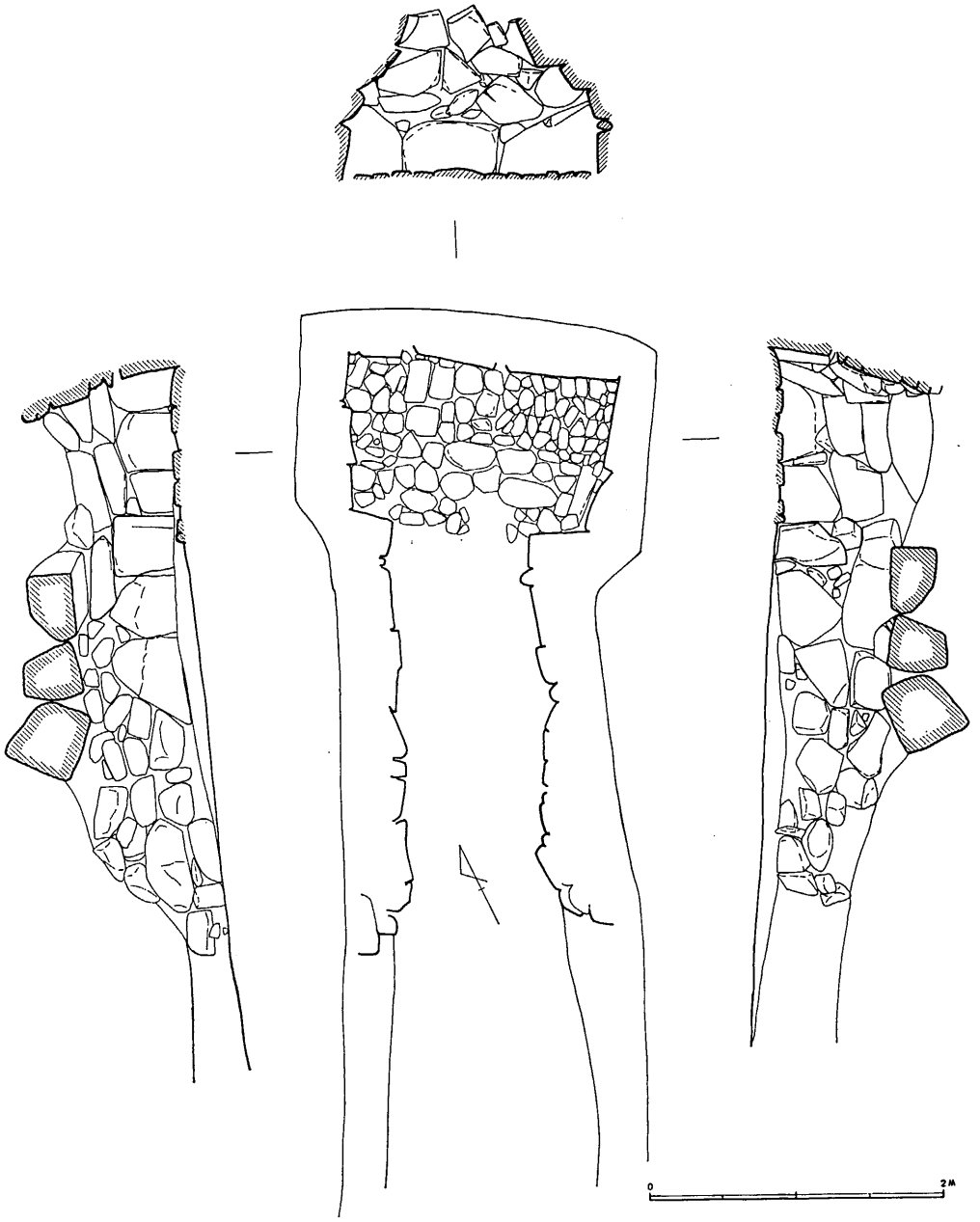
５号墳の北隣にあり北側丘陵の中央部直下の丘麓に営まれ石材の一部が露出していた。墳丘は他と同様に全く失われていたので墳形は知るよしもないが、１号・２号・５号と同様の状況であるので前面からは円墳、側面は丘麓のコブ状の墳丘であったと考えられる。

内部主体は小形の単室横穴式石室であり、玄室は奥行1.1m、東西長は奥壁で184cm、玄門部で159cmの略長方形、深さは1.1mと小さく、床面は礫を敷きつめていた。羨道と結ぶプランは「T」字形をなす訳で羨道は三枚の天井石を用い側壁は石材を乱れ積みに積み上げ敷石はない。また玄門にもカマチ石は特に置かず袖石も特に目立つ石材は使用していない。羨門部が外側の墓道積石は用材も小さく、僅かに長さ１m程両袖を低く積むのみである。

以上の如く石室は非常に小さくまとめられているため墳丘も小さなものであったろう。本古墳だけが過去の盗掘から免がれていたのは全てが小さく目立たなかった事に起因するものと考えられる。

遺物の配置（第26図）

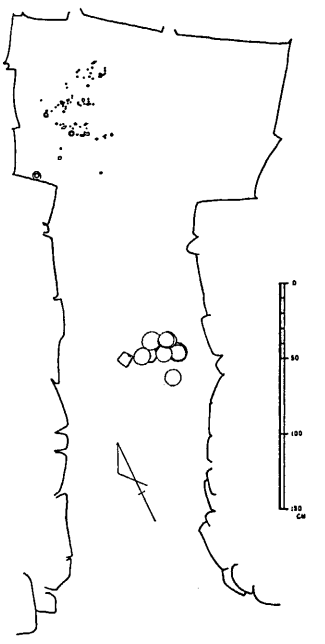
装身具類は玄室西壁寄りに集中し、奥壁に近く勾玉とガラス玉のグループがあり、これに接



第25図　中通り6号墳石室実測図（1/50）

して玄門寄りに耳環・勾玉・切子玉・ガラス玉のグループがあり、西枕に二人を葬った事を思わせる。また玄門西袖石の内側に須恵器小形丸壺があり、これは被葬者が生前に所持していたものかと考えられる。玄室内には以上の他は鉄器類等一切なく他の古墳と異なっている。

羨道部にはスエ器蓋杯等が一括して横に並べられ、埋葬に際して供献されたままの姿を保っていた。　　（松岡）



第26図　中通り6号墳遺物配置図（1/50）

遺　物（第27・29図、図版39・40）

装　身　具（第27・28図、図版39）

耳環（1～3）3個検出された。1は銅環に金を被せたもので、一部に腐蝕が見られるが保存は良い方で、黄金色を呈する。径2.43cm×2.22cm、断面1.02cm×1.28cmで楕円形をなす。

2は銅環に銀を被せたもので、腐蝕が著しく内側にのみ銀が遺存する。径2.34cm×2.18cm、断面0.66cm×0.5cmを測り円形をなす。

3は銅の細環に金を被せたもので、腐蝕が著しく金の遺存は少ない。径1.48cm×1.45cm、断面0.22cm×0.22cmを測り円形をなす小型のものである。

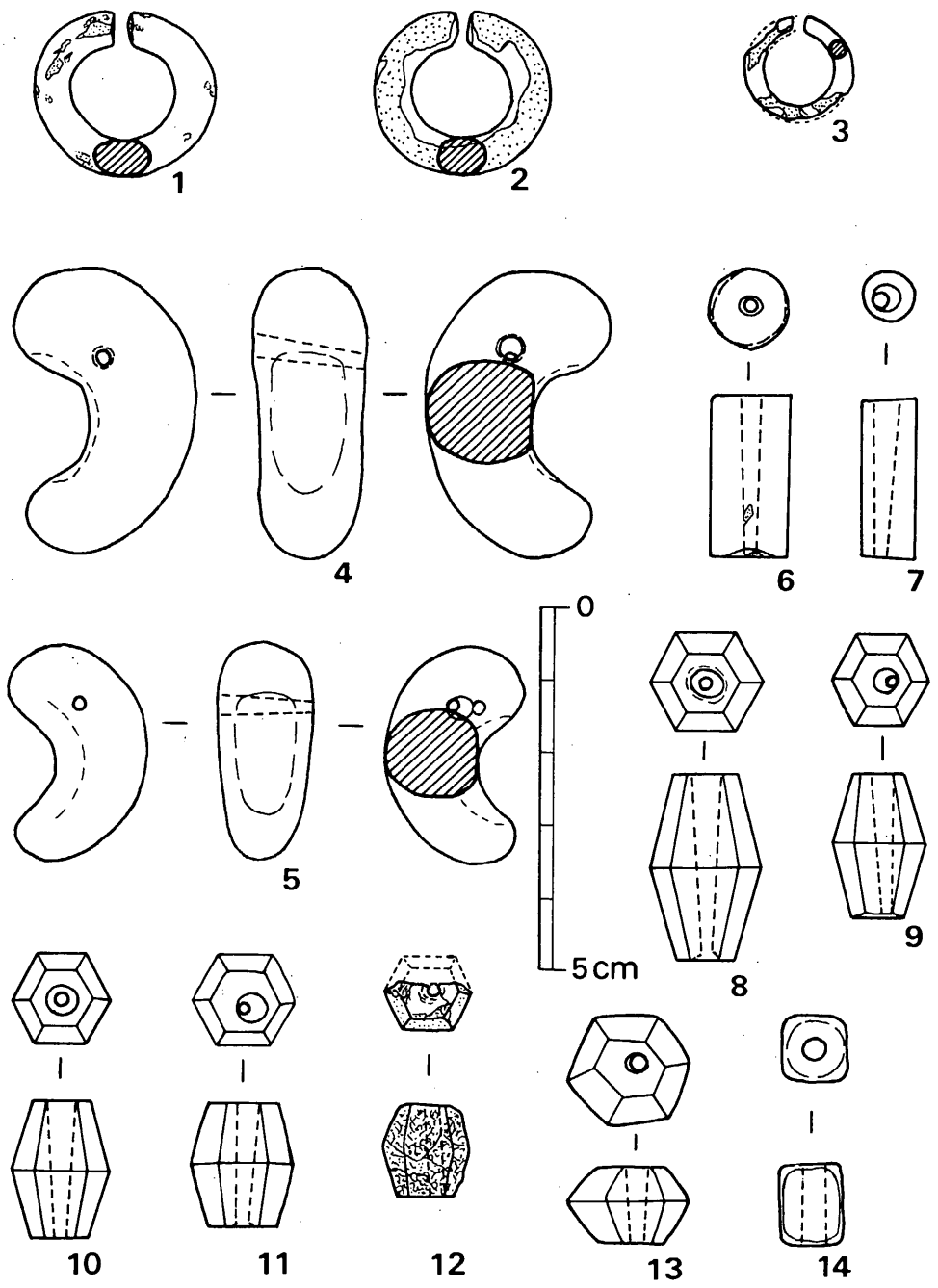
勾玉（4・5）硬玉製2個が検出された。ほとんど白色に近く緑色を散在させたもので、4は長さ3.95cm、幅1.52cm、厚さ0.92cmで片方から穿孔を行なう。5は長さ2.97cm、幅1.30cm、厚さ1.27cmで片方から穿孔を行なっているが、一度失敗（孔が中心を逸れたため）して彫りなおしている。

管玉（6・7）碧玉製2個が検出された。暗緑色を呈するもので、6は長さ2.2cm、径1.07cmで、穿孔は片方から行なっている。小孔側に約0.5cmほど欠けた部分があるが、面取りがなされ、その後も使用されている。7は長さ2.21cm、径0.7cmで穿孔は片方から行なっている。

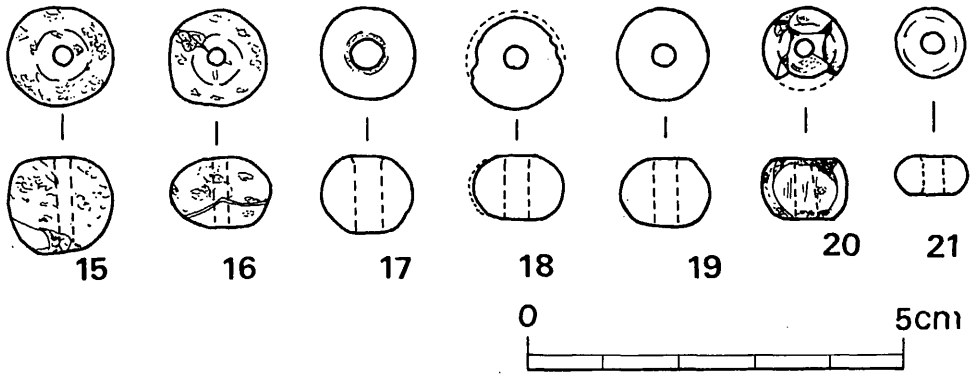
切子玉（8～12）水晶製5個が検出された。すべて片方から穿孔され、8が最大で長さ2.57cm、最大径1.53cmを計り、12が最小で長さ1.28cm、最大径1.2cmで縦に半分から欠損しており、風化が進み全体にひびが入り不透明な部分が多い。

扁平切子玉（13）長さに比して径が大きく算盤玉に稜を付けたものと思えばよく、他の切子玉と区分してここでは扁平切子玉と呼ぶこととした、瑪瑙製で血の色に近い赤色を呈し、稍黒い縞の入った部分もあるが、中通り古墳群から検出した瑪瑙製玉類13点の中で最良質のもので、長さ1.03cm、径1.67cmで片方から穿孔を行なっている。

ガラス製角玉（14）透明な水色を呈し方形をなす玉である。10号墳から同種のもの1点を検出したが、他にあまり類例を見ないので、ここでは角玉と呼ぶこととした。長さ1.05cm、径0.93cmを測る。



第27図　中通り6号墳出土遺物実測図①（装身具）（1/1）



第28図　中通り6号墳出土遺物実測図②（装身具）（1/1）

丸玉（第28図15～19）瑪瑙製2個、ガラス製3個を検出した。15は赤瑪瑙製で径1.4cm、厚さ1.21cm、16は稍淡い赤瑪瑙製で径1.3cm、厚さ0.95cmを計り、15、16とも片方から穿孔を行なっている。17は透明に近い暗緑色を呈するガラス玉で径1.23cm、厚さ1.05cmを計る。

18～19は腐蝕が著しく白色を呈しているが、緑色のガラス玉で径約1.21cm、厚さ約0.8cmを計るが原形は1.2～1.5cmぐらいの玉と思われる。

小玉（第28図20・21）ガラス製32個以上を検出したが、腐蝕が著しいので2個を図示した。20は黄褐色（飴色）を呈し径1.14cm、厚さ0.85cmを計り約$\frac{1}{3}$が欠損しているが腐蝕は見られない。黄褐色をなすガラス玉は、本古墳群出土の玉類で唯一のものである。

21は明緑色を呈し、径0.95cm、厚さ0.49cmを計る。　（前田）

スエ器（第29図、図版39・40）

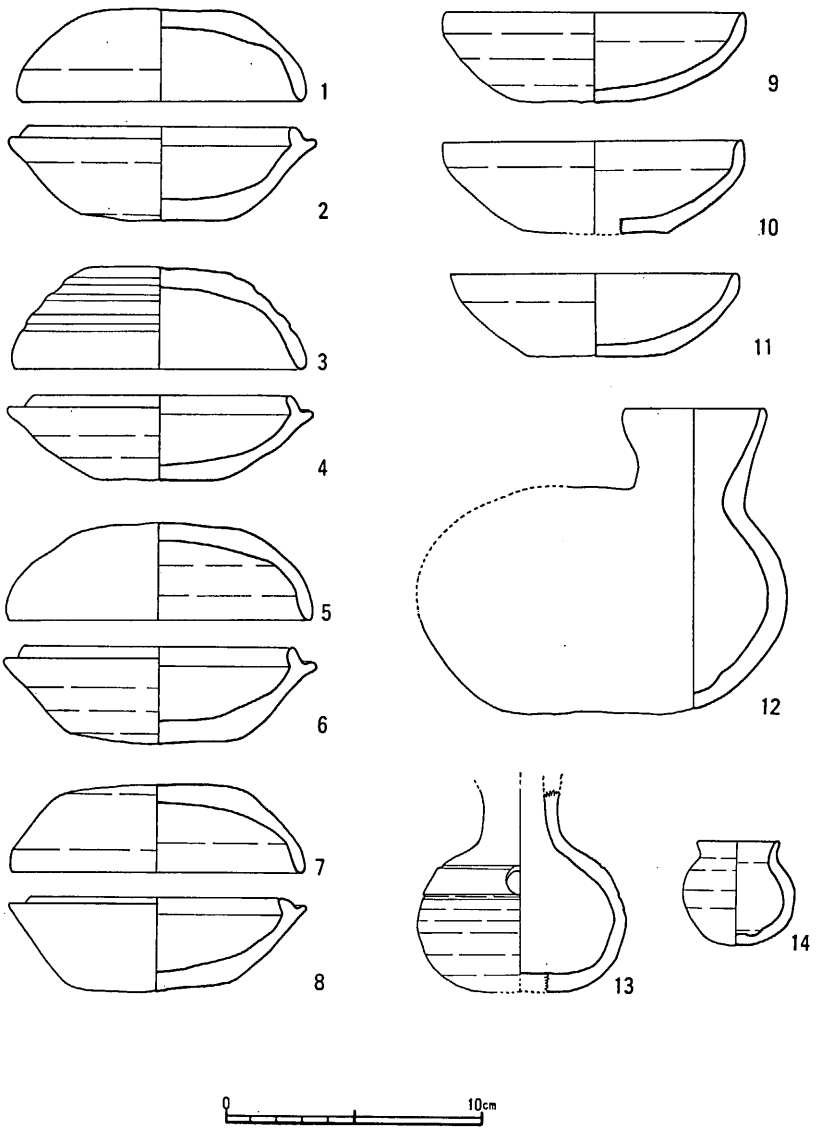
蓋杯類（1～11）全体的に焼成の火度不足が目立つもので、杯身の口唇部立上りもやや低く、器壁も厚ぼったい感じがするもので、羨道に置かれた状況では杯身は口唇部立上りをもつものが下に直口の杯蓋が上に被せて置かれていた。ⅣA式である。

横瓶（12）これも杯と同様の焼成である。

瓶（13）青灰色の焼成良好なものであるが口縁部から頸部の中程までは失われている。

小形丸壺（14）黒灰色を呈しよく焼きしめられている。口径3.2cm、胴径4.5cm、全高4.1cm、底に×印のヘラ記号をもつ。

副葬品から見て女性的な感じを抱かせるが、骨は遺存しなかったので何れとも決め難い。小形で被葬者二人を容れれば玄室はいっぱいになるもので、その点5号墳と対称的である。営まれた時期は6世紀中葉と考えられる。　（松岡）



第29図　中通り６号墳出土遺物実測図③（土器）（1/3）

(7) 中通り7号墳（第30～32図、図版41～45）

6号墳の西寄りの段丘端に主軸を段丘に沿って南々西に開くように営まれていた。

墳丘は完全に失われて地表からその存在を知る手掛りは全くなく、ボーリングステッキによる探査の結果ようやく発見した。墳丘形は恐らく円墳であっと考えられる。

内部主体は複室横穴式石室であり天井石と西側壁の上部は大部分失われていた。これは直下の水田が漸次拡大されるにつれて墳丘を削り続け遂に石室の石材に及んだ結果である。

玄室は奥行1.8m×幅2.1m、奥壁2枚の大形石材を基礎にその上に長方形のやや大形石材を横にして積み上げている。東側壁も玄門袖石と奥壁との間に3枚のやや大形石材を立てその上に横長の石材を積む。西側壁は奥壁に接して一枚の大形石材一枚が立ち、袖石との間は失われているが、その間隔からして全体で2枚の石材を基礎に用いたと考えられる。床面の敷石は殆んど失われている。

玄門部は長い袖石を立ててマグサ石を構架したのであろうが、袖石のみが東西に立っている。前室との間にはカマチ石を置いている。

前室は東西1.5m×奥壁0.8m、基礎は東壁に2枚、西壁は1枚の石を立て、その上に壁石を横積みにしている。床面は敷石が完存しスエ器が遺存した。羨門部の袖石も玄門部と同式である。

墓道は羨門から東壁が1.2m程袖積みがあり、西壁はこれより長く2.8mまで袖積みの墓礎が遺存し、墓道そのものは西に向かってカーブするが水田に至って切れてしまうので本来の長さは不明である。

石室に使用された石材は牛頸川の上流で得られる花崗岩の岩塊を使用している。　（松岡）

遺　物（第31・32図、図版44・45）

スエ器（第31図）

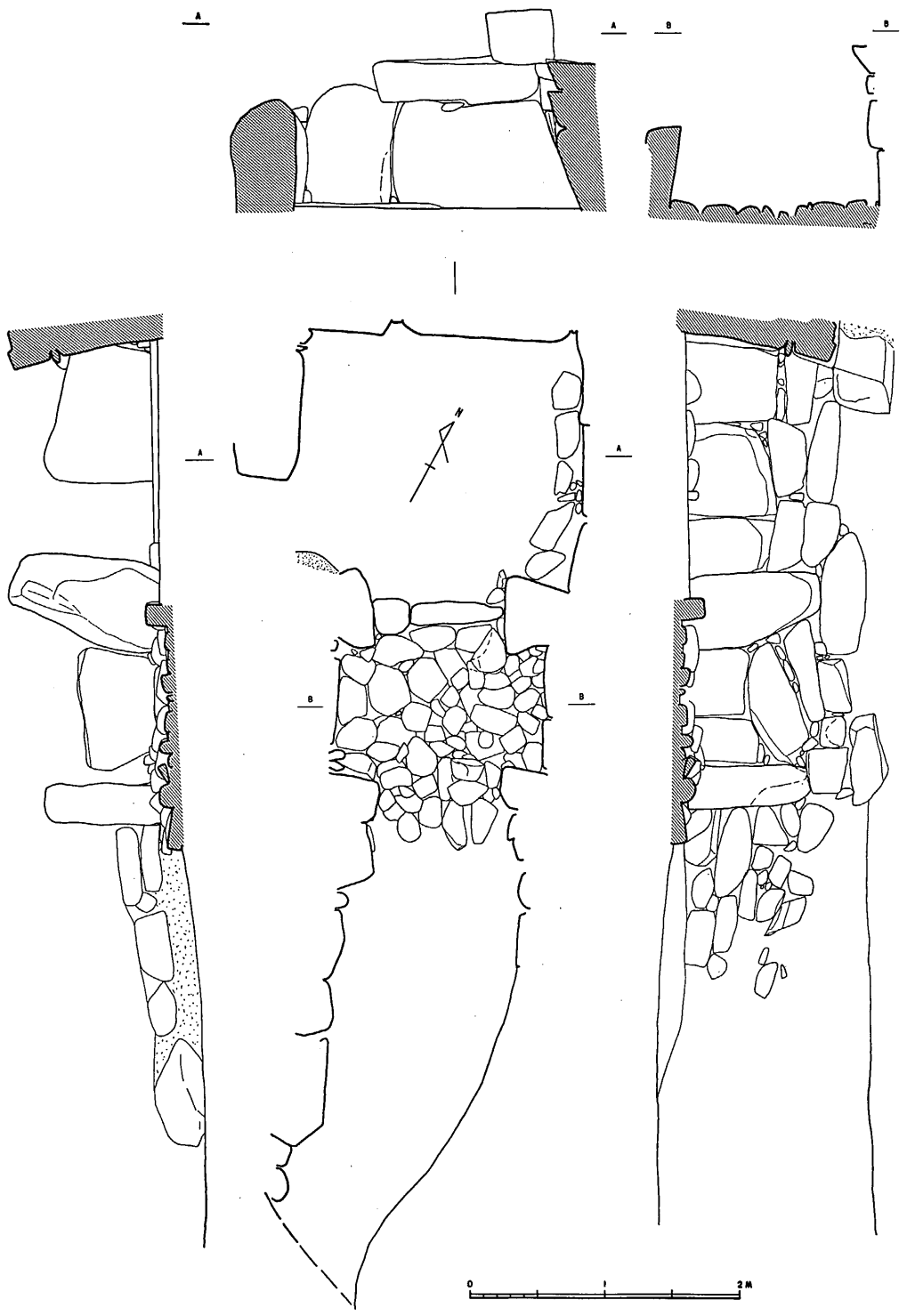
高杯（1～8）小形品であり杯部径8cm～9cm、全高8～9cmでラッパ状脚をもち、2点は焼成良好であるが1点は生焼けである。

杯蓋（9～12）蓋は比較的偏平となり横から見れば台形をなし口唇部の杯身との篏合部の立ち上りも非常に低く蓋としての機能に徹するよう作られている。

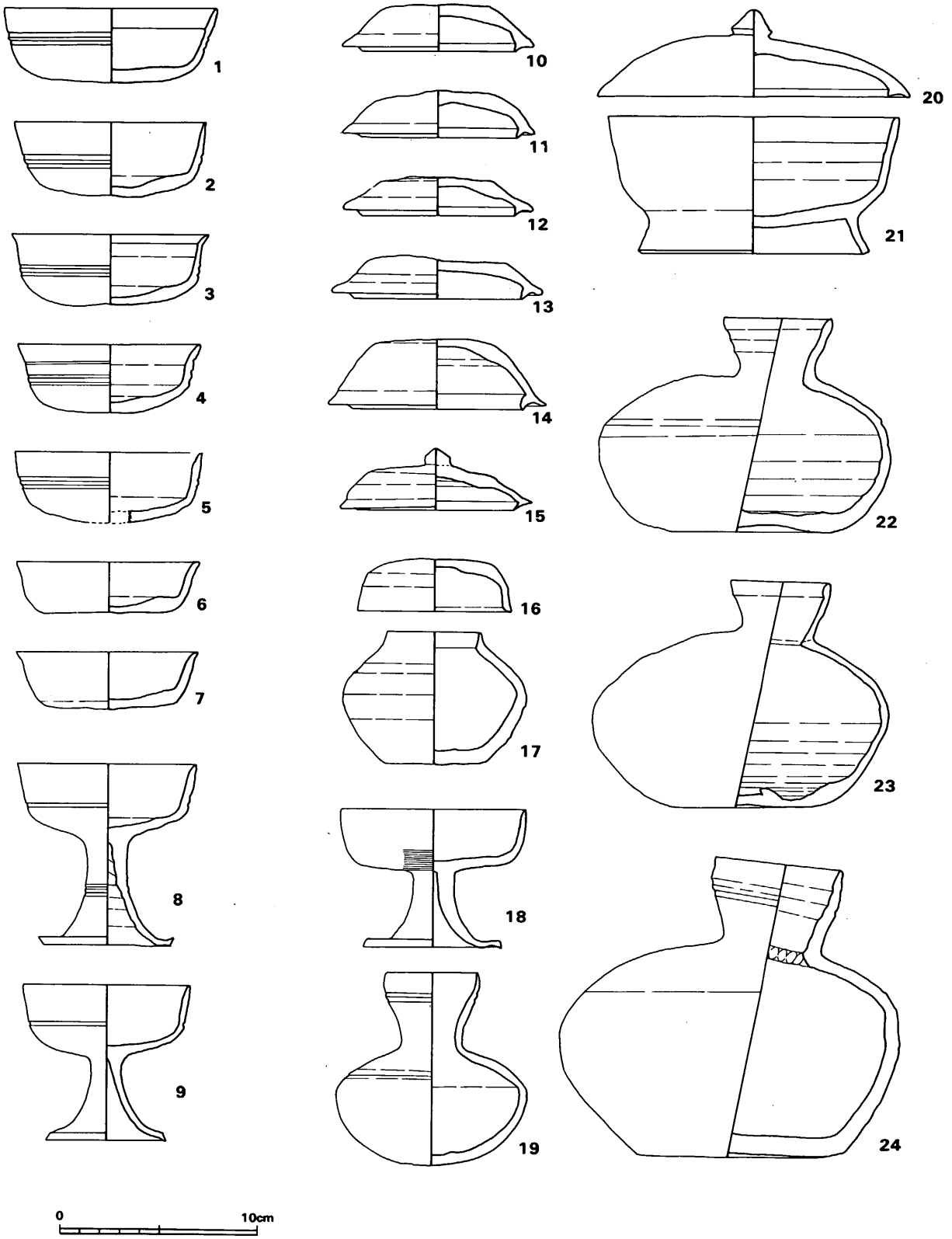
杯身（12～15）直立に縁で底部も少し丸味を帯びたものが蓋と組合さり、これは口縁直下に二条の沈線をもっている。

別に蓋に摘みをもち、杯身は平底になるものがあり、前者と共にⅣB式に属する。

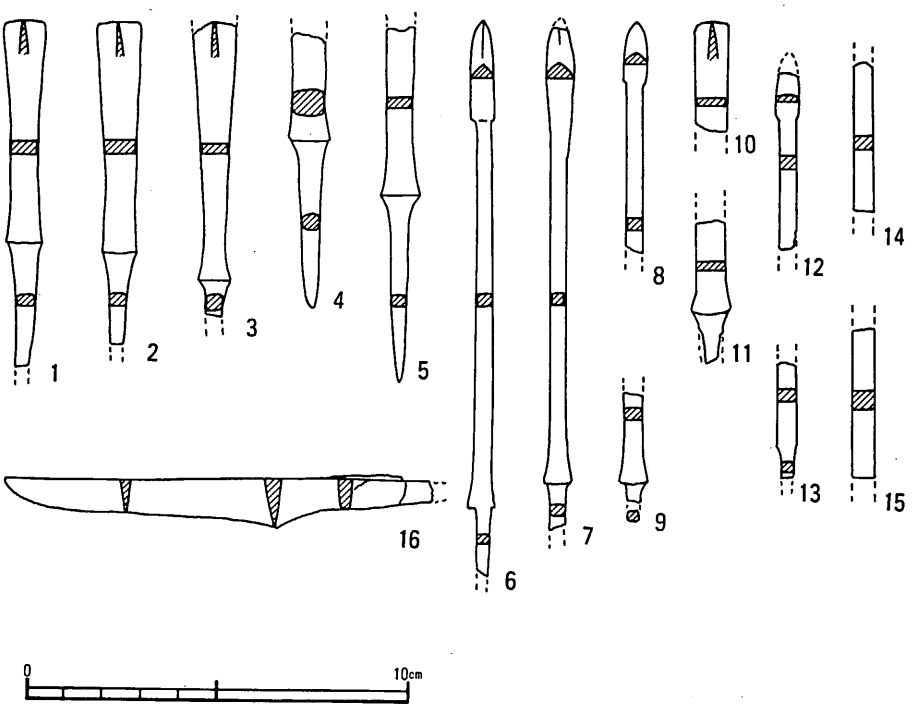
高台付有蓋杯（16）蓋は尖り気味の摘みをもち、篏合部の立ち上りも低い。杯身は高い高台をもつもので前者より後出のV式に属するものである。



第30図　中通り７号墳石室実測図（1/50）



第 31 図　中通 7 号墳出土遺物実測図（土器）①（1/3）



第32図　中通り７号墳出土遺物実測図②（鉄製品）（1/2）

有蓋小形壺（21）径7.8cmの杯形の蓋をもち、高さ6.7cm・口径4.7cm・胴径9.4cmの平底に近い小形壺である。蓋・壺ともに青灰色を呈しよく焼きしまっている。

横瓶（23）３箇あり偏球形の胴部に少し横にづれて口縁を作っている。２個は「Ⅲ」のヘラ記号他は「)(」のヘラ記号が底面にヘラ描きされている。焼成は三者ともに良好である。

鉄　製　品（第32図、図版44）

鏃（１～15）２形式からなり、鏃先端が細く尖り、その断面が半円形に近いもので、篦被が長くその基部が関をなして中茎になる征矢と、鏃先端が撥形をなし篦被が比較的短かく基部に関をもち中茎となる平根鏃である。

刀子（16）刃部は平造りの小刀であり関から中茎に移行する部は刀と異なり段はなく、刃部は研ぎ減りが見られる処から生前被葬者が愛用していたものであろう。

本古墳になると内部主体も復室となり、副葬土器もⅣＢ式からＶ式となり時期が１～６号墳までより一時期下降する。立地も丘陵直下より離れて段丘にしがみつく様な形で営まれ本古墳群中後半期の営造である事を物語る。　（松岡）

(8) 中通り８号墳（第33～38図、図版46～52）

６号墳の北側の丘麓に営まれ、本古墳も他と同様に完全に畑地化した結果地表には何らその存在を知る得るものは残されていなかった。ボーリングステッキによる探査の結果石材が埋没しており、発掘の結果石室上部は完全に失われ下部のみ遺存した複室横穴式石室である事が判明した。

主軸を南西にもつ内部主体の玄室は奥行175cm、東西190cm、正方形に近く、床面は何ら敷石は認められず東北隅にガラス玉が少量遺存した事から被葬者は奥壁に接して東枕、即ち玄門から向かって右に頭を置いて葬られていた事が考えられるが、それ以上の埋葬状況については不明である。

玄室奥壁は高さ１m程の一枚石を使い、その上にどれ程の壁石が積まれていたのかは全く不明である。玄室東壁は奥に大石を立て玄門袖石との間に竪に石材を用いその上に１段だけ壁石を積んでいる。

西壁は奥壁側に１石、袖石に接して１石のみ残りその中間は抜き去られている。

玄門にはカマチ石を置いて前室と区別し、袖石も東壁はより高いものを使っている。

前室には床面に敷石がよく残り、その上にスエ器が散在していた。両側壁とも割合小さめの石材を使い羨門部には目立つ袖石は使用していない。東壁は４段程積石が残り西壁は１段のみであり両側が破壊が大きい。羨門カマチ石は２個の石材を横置し羨道と明瞭に区別している。羨門外の墓道東壁には１m程の積石が残るが、西壁には見られない。墓道はやや開き気味に作られ、羨門から２～3.2m の間に土器類が墓道底面に近く散存し、この辺りで墓前祭を行ったものであろう。丘麓の自然傾斜を考える時、開き気味の墓道は土器の散布が見られた辺りを前庭として旧地表に連らなったものであろう。

この様な状況から８号墳は中通り北丘を背にした正面から見れば堂々たる円墳であり側面はさ程ないと言う後期の省略形の墳丘をもった古墳であったと考られる。　　（松岡）

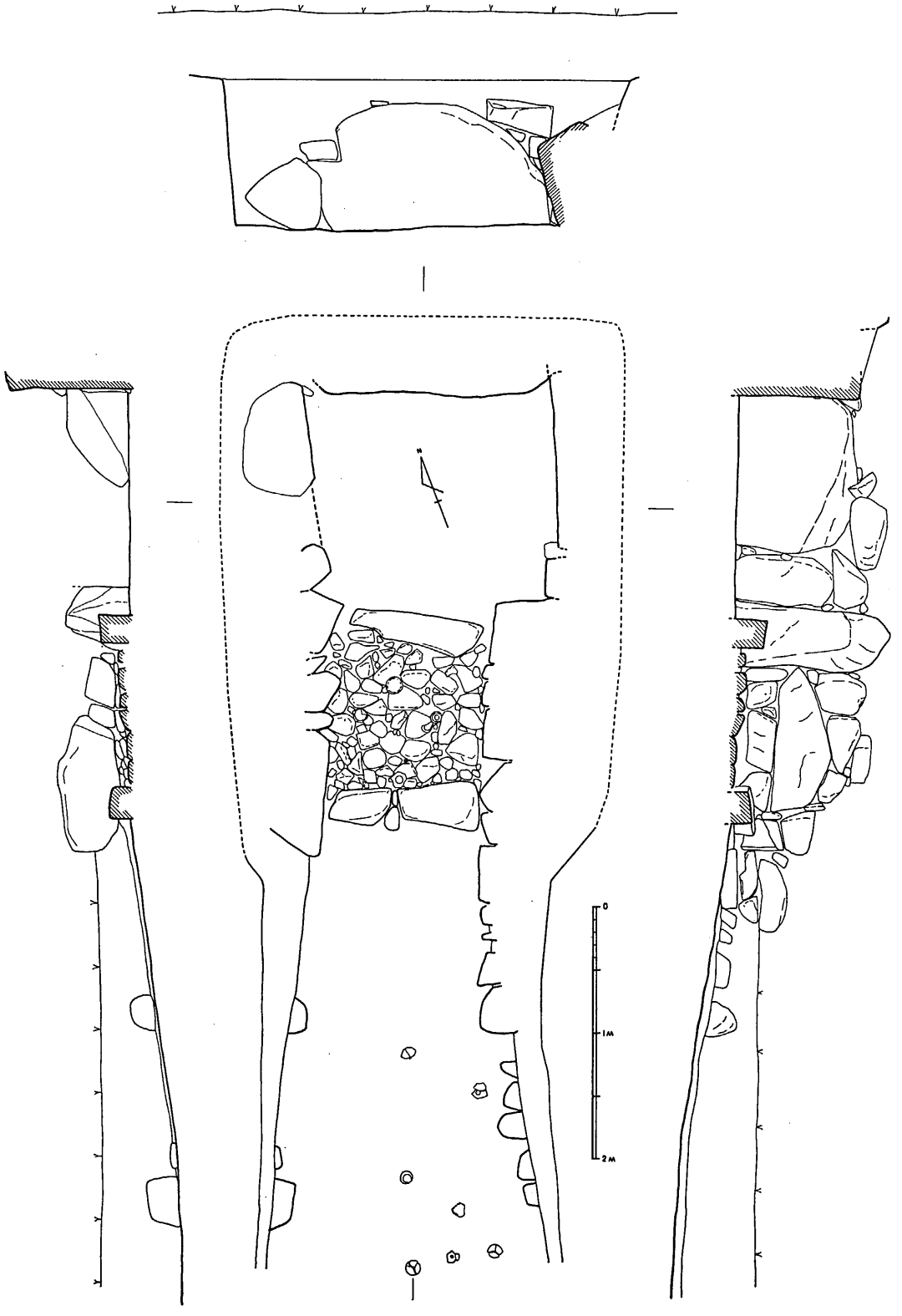
遺　物（第35～38図、図版50・51）

装身具（第35図、図版50）

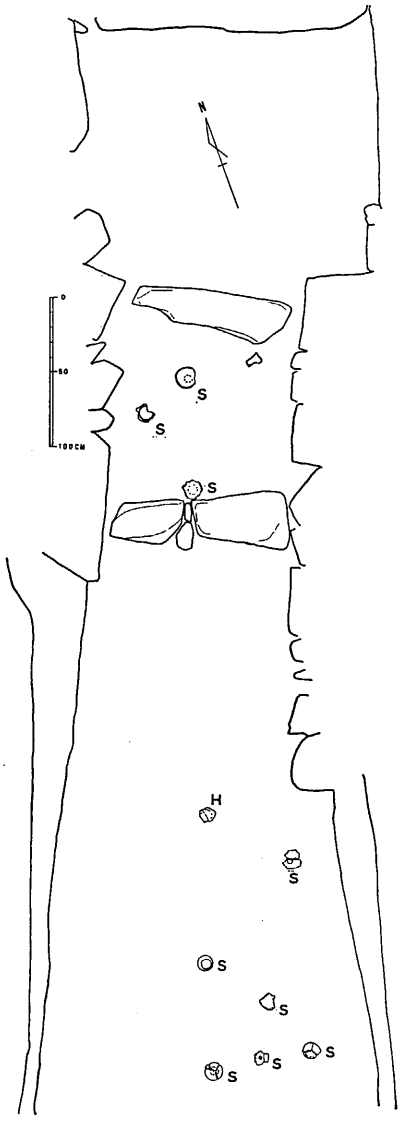
管玉（１）ガラス製で暗青色を呈し、長さ1.44cm、径0.85cmを測る。

丸玉（２～３）ガラス製で、薄緑色を呈し稍風化しかけいるが透明に近いものであったと思われるもので、２は径1.4cm、厚さ0.94cm、３は径1.35cm、厚さ0.85cmを測る。

小玉（４～６）ガラス製９個を検出したが６個は腐蝕が著しいので３個を図示した。４は不透明な青乳色を呈し、径1.15cm、厚さ0.8cmを測る。５と６は紺色を呈し、５は径0.91cm、厚さ0.7cm、６は径0.82cm、厚さ0.44cmを測る。図示していない６個の腐蝕玉は、いずれも緑



第33図　中通り8号墳石室実測図（1/50）



第34図　中通り８号墳遺物配置図（1/50）
Ｓはスエ器　Ｈはハジ器

色系の玉と思われる。（前田）

土　器　類（第36～38図、図版50～52）

スエ器（第36図）

杯（１～16）杯身の蓋との篏合部の立上りが直立しかつ長めであり杯身がやや浅いⅢＢ式杯が一点出土している。何れの杯も本来は有蓋であったろうが、全て遊離し組合せの姿は見る事ができないがこれと同時期の杯蓋が２点あり、直立する口縁部直下に一条の浅い沈線をもち、器壁は比較的薄く底部まで丸く仕上げている。

次に直立口縁をもち全体は丸いが仕上げの粗く器壁もやや厚く底もやや平たい感じになるもの（ⅣＡ式）と、直立口縁でそのまま底部に至り平底のもの（ⅣＢ式）とが分類される。

蓋は篏合部の立上りの低いもの（ⅣＢ式）とやや高い（ⅣＡ式）とがあり、明らかに二時期に分けられる。

撮付蓋杯（１～３）偏平な円板状の撮みをもち口唇篏合部が直口をなすＶ式に属するものと、篏合部に立上りをもつⅣＢ式とがある。

杯身（４～16）前述の蓋を伴なったものと思われる。杯身底面に高台をもち、器表はロクロ水引き仕上げである。（Ｖ式）

高杯（17～19）杯部上半を失ない脚部を主体に残っている。ラッパ状に開く脚の上部に沈線二段に廻らす。

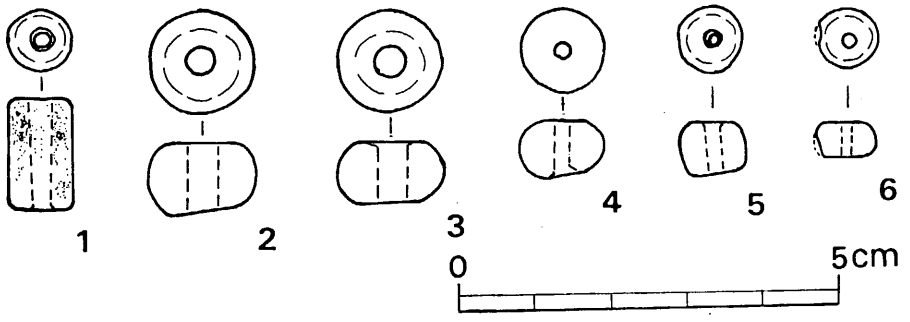
小形無頸壺（20～22）胴径84ミリ程の内すぼみの底部を失っ小壺である。

長頸壺（23～27）口縁と頸部上部のみ遺存。

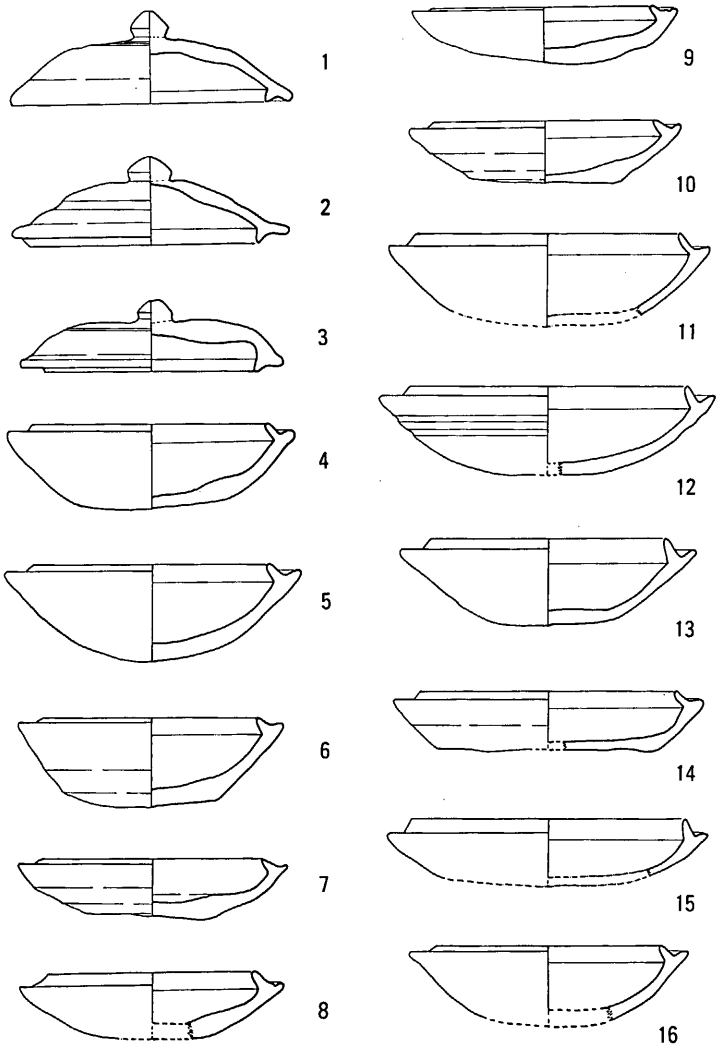
盤（28～31）浅いもので器形は土師と同一である。

ハジ器（第36図）

ハジ器浅器（32～34）やや深めの皿と言うより盌の浅いものと言った器形で器表は磨研され



第35図　中通り８号墳出土遺物実測図①（装身具）（1/1）



第36図　中通り８号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）

ている。

ハジ盤（35～36）底の平らになった浅い盤であり器表は磨研仕上げである。

鎌倉期ハジ皿（37）径 14cm・深 2.5cm の糸切底の中世のものである。

７号墳に続いて本古墳も複室墳であり共に破壊が著しい。破壊された時に玄室は相当ひどく遺物を持ち去られたと思われるが敷石が皆無であった事は破壊によるものでなく営造当初からそうであったと思われ、多分有機質の敷板か敷物でも使ったものであろう。

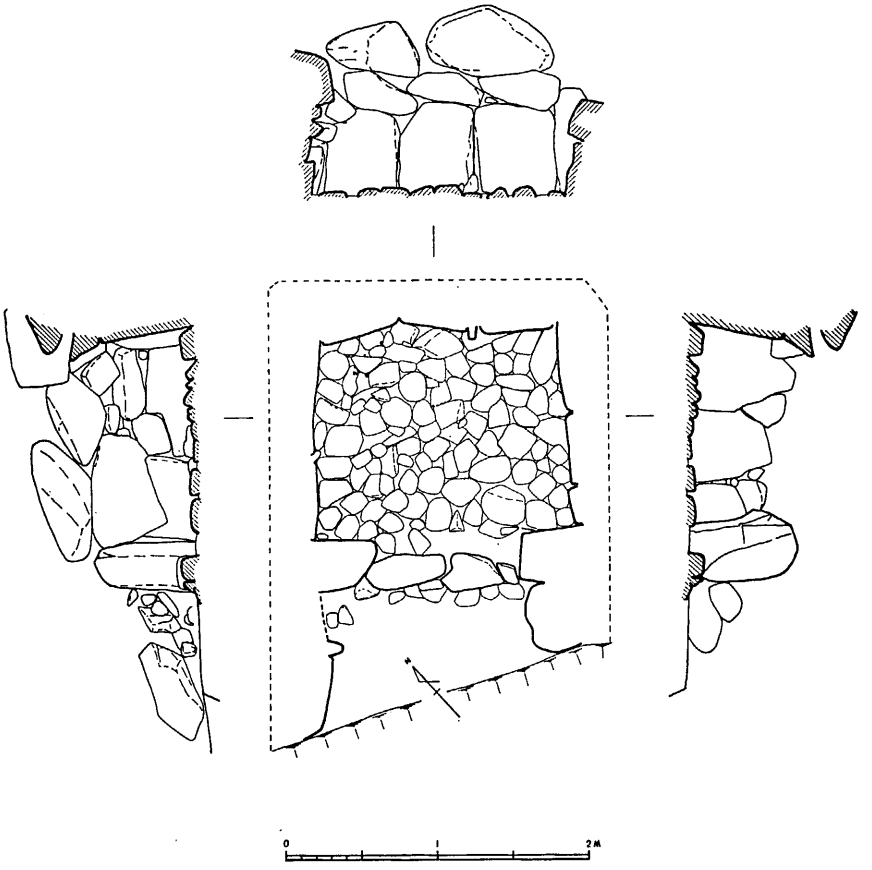
残存した遺物から判断

すればⅢＢ式須恵器が数点あり葬送の上限をこの時期にまで遡る事も可能であり下限はＶ式の時と考えられるが、時間的間隔が空きすぎる感じであり、ⅣＢの時期までに葬送を終り、後は年忌供養的な儀礼の際の供献品と考えれば、最下限の土器が僅かに一点である事も頷けるものである。立地も5号・6号と共に丘麓の最良地に営み石材も他に較べて良好なものを使用しているあたりは本古墳群中でも上位に属する家族墓であったろう。

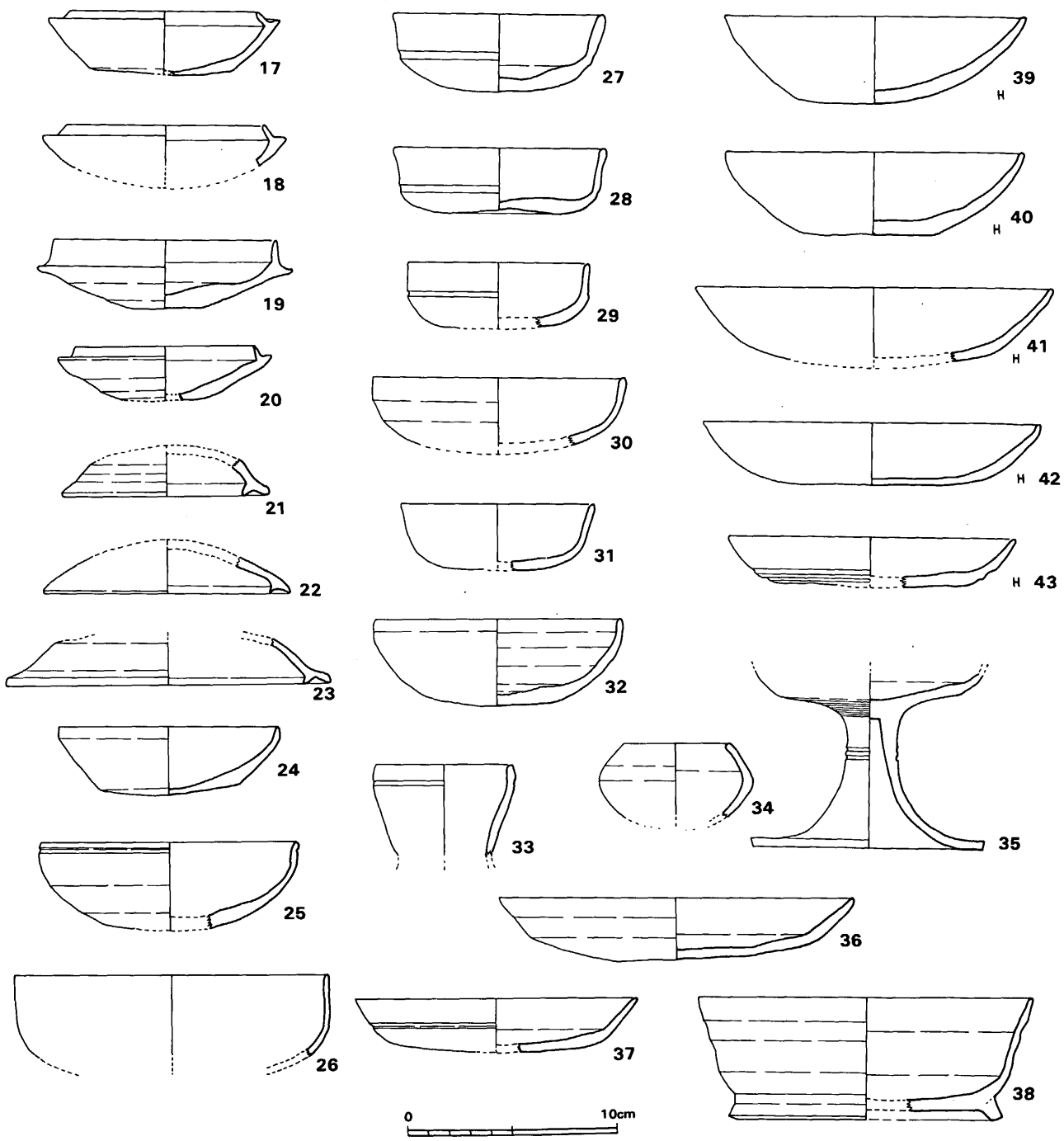
中世になり修験者に再利用された結果、鎌倉期の土師皿が遺されたものと思う。（松岡）

(9) 中通り9号墳（第39～41図、図版53・54）

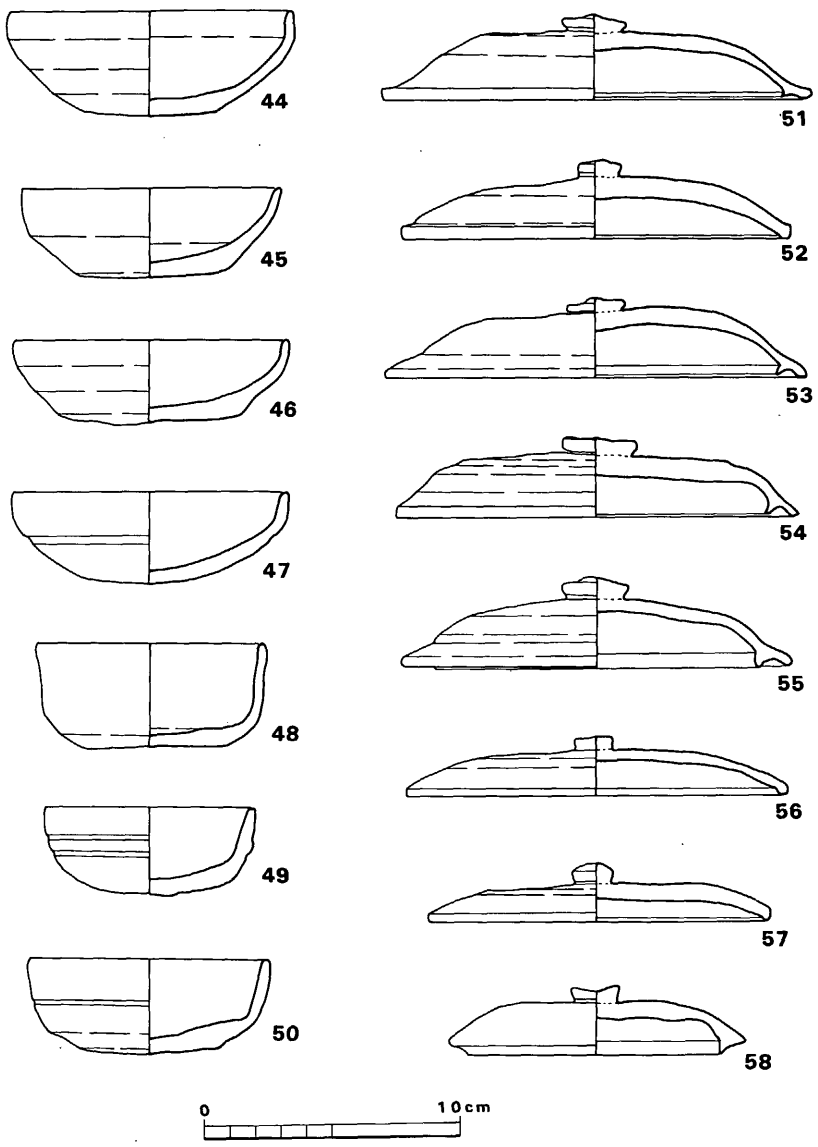
北丘下段丘の西端水田に接する位置にあり、8号墳の西側である。地表には何ら古墳らしきものは見られずボーリングステッキ探査によりその存在を知った。



第39図　中通り9号墳石室実測図（1/50）



第 37 図　中通 8 号墳出土遺物実測図（土器）②（1/3）

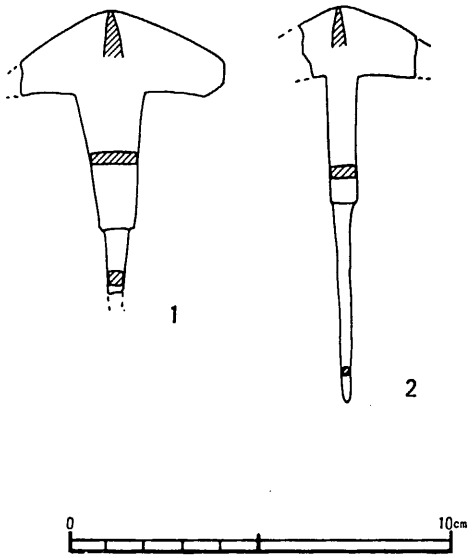


第 38 図　中通 8 号墳出土遺物実測図（土器）③（1/3）

したがって墳丘は消滅しており、内部主体は現在では単室横穴式石室である。石室の上半部及び墓道も水田の拡張により全く失われていた。主軸を西南にもつ玄室は奥行1.5m・幅1.65m、床面の敷石は良く残っていた。玄室奥壁は基部は三枚の石材を使いその上に二段の壁積石が残っている。東壁は同じく3石を並べその上は失われている。西壁は壁石上下の大きさの差はなく平坦面を揃えて乱積みし、東壁よりは保存が良い。

玄門は両側に軸石を立て、その間にカマチ石を置き羨道と区別している。

羨道は幅1.2m、西側袖積みが1m程残り、東側は1石のみ残り、共に上部は失われている。これから先は水田になり完全に失われて、長さも何れ程あったのかも全く判らない。



第40図 中通り9号墳出土遺物実測図①（鉄製品）(1/2)

玄室内の小形石室であったためか床面は完存し敷石上に多少の遺物を検出できた。

遺物出土状況

玄門東袖石の玄室側に接して飛燕形鏃1、そのすぐ横の東壁に接して同形の鏃1が置かれていた。玄室奥壁の北側隅に近く耳環2箇が23cm間隔で床面にあり、その北寄りの壁との間にガラス玉が散布していたので奥壁に平行に北西に頭部を向けて遺骸を安置したものであろう。この他にも耳環1箇、管玉1箇、勾玉2箇を検出したがこれは多少遊離した状況であった。中でも勾玉の1箇は水晶製であるが尾部を欠失し、その破口は磨滅している。これは破損後もなお相当期間着用していた事を物語る。（松岡）

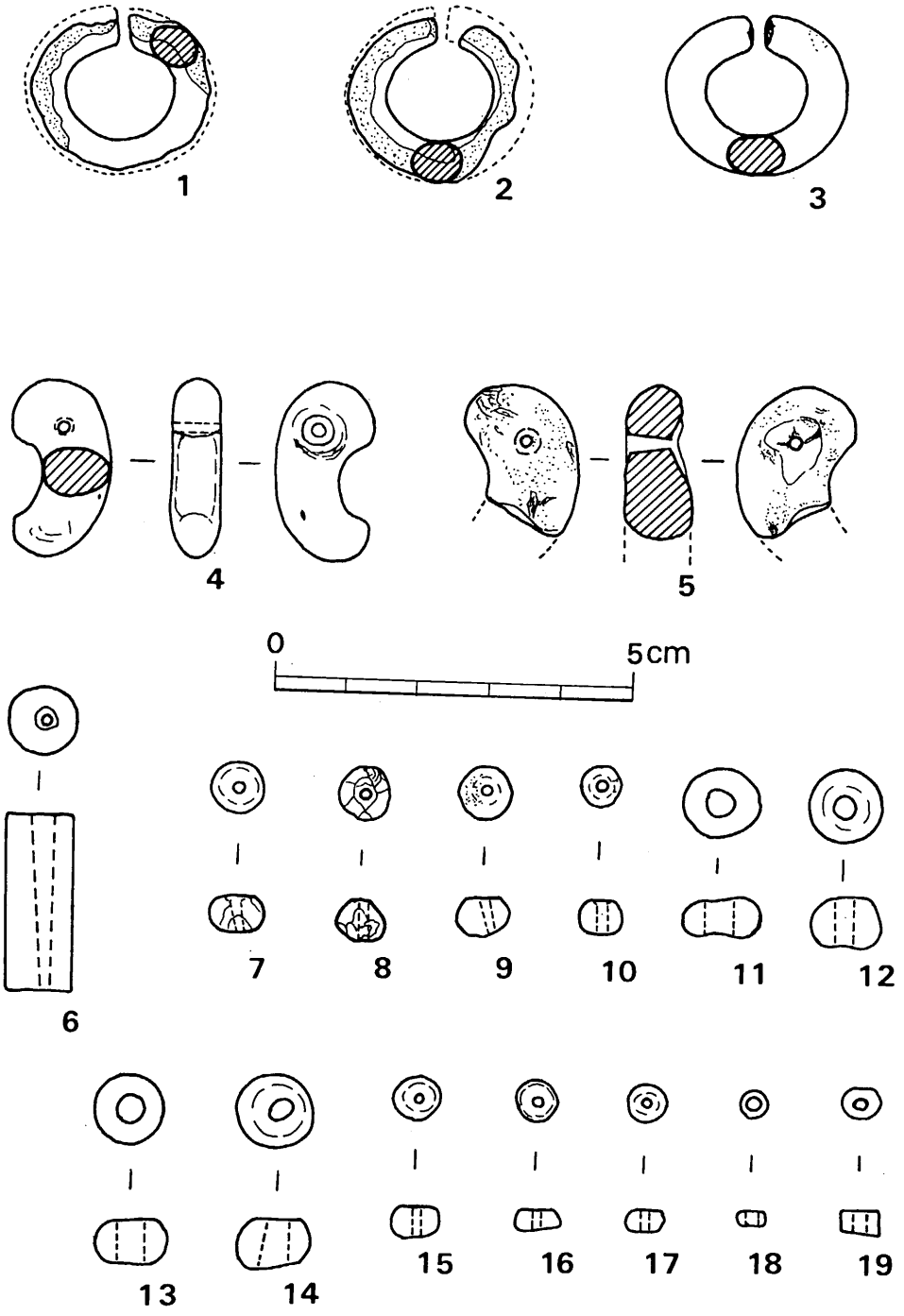
遺　物（第40・41図、図版54）

装　身　具（第41図、図版54）

耳環（1～3）3個検出された、1と2は対をなすと思われ、銅環に銀を被せたもので、腐蝕が著しく銅芯が細くなり内側にのみ銀が遺存し、1の残存値は径2.41cm×2.19cm、断面0.68cm×0.55cmを測る。

3は銅環に金を被せたもので、残りが良く黄金色を呈し、径2.45cm×2.2cm、断面0.77cm×0.53cmで楕円形をなす。

勾玉（4・5）2個検出された、4は滑石製で、淡褐色を呈し黒い胡麻状の斑が入ったもの



第41図　中通り9号墳出土遺物実測図②（装身具）（1/1）

で良質のものではなく、長さ2.5cm、幅0.95cm、厚さ0.7cmで片方から穿孔され、孔を中心に径約0.5cmの縁どり（円形の凹）があり目玉状を呈する。

5は水晶製で、ほぼ中央部から欠損しているが欠けた部分を面取りして更に使用している。残存部の長さ2.1cm、幅1.25cm、厚さ0.95cmで、片方から穿孔を行なう。

管玉（6）碧玉製で暗緑色を呈し、長さ2.5cm、径0.97cmで、片方から穿孔を行なう。

小玉（7～18）瑪瑙製4個、ガラス製9個を検出した。7～10は瑪瑙製で、赤に白い縞が入ったもの（7及び9） 血の色に近いもの（8） 淡赤色（10） 等を呈するが総て 赤瑪瑙で、径0.78cm～0.6cm、厚さ0.59cm～0.45cmを測り、総て片方から穿孔を行なう。

11～18はガラス製で、11～13は腐蝕が著しく白色を呈する部分が多いが緑色の玉で、残存径1.06cm～0.99cm、厚さ0.65cm～0,5cmを測る。

14と16～18は紺色を呈し、径1.02cm～0.42cm、厚さ0.70cm～0.17cm. 15は空色を呈し径0.6cm、厚さ0.4cmを測る。他に青色を呈する径約0.38cm、厚さ不明の破損した玉がある。

臼玉（19）ガラス製1個を検出した。ガラス製で紺色を呈し、径0.5cm、厚さ0.35cmを測る。（前田）

鉄　製　品（第40図）

鏃（1・2）飛燕形をなし大形である。2本の中1本は鏃尖に欠損が見られるが中茎まで揃っていて他方はこの逆である。

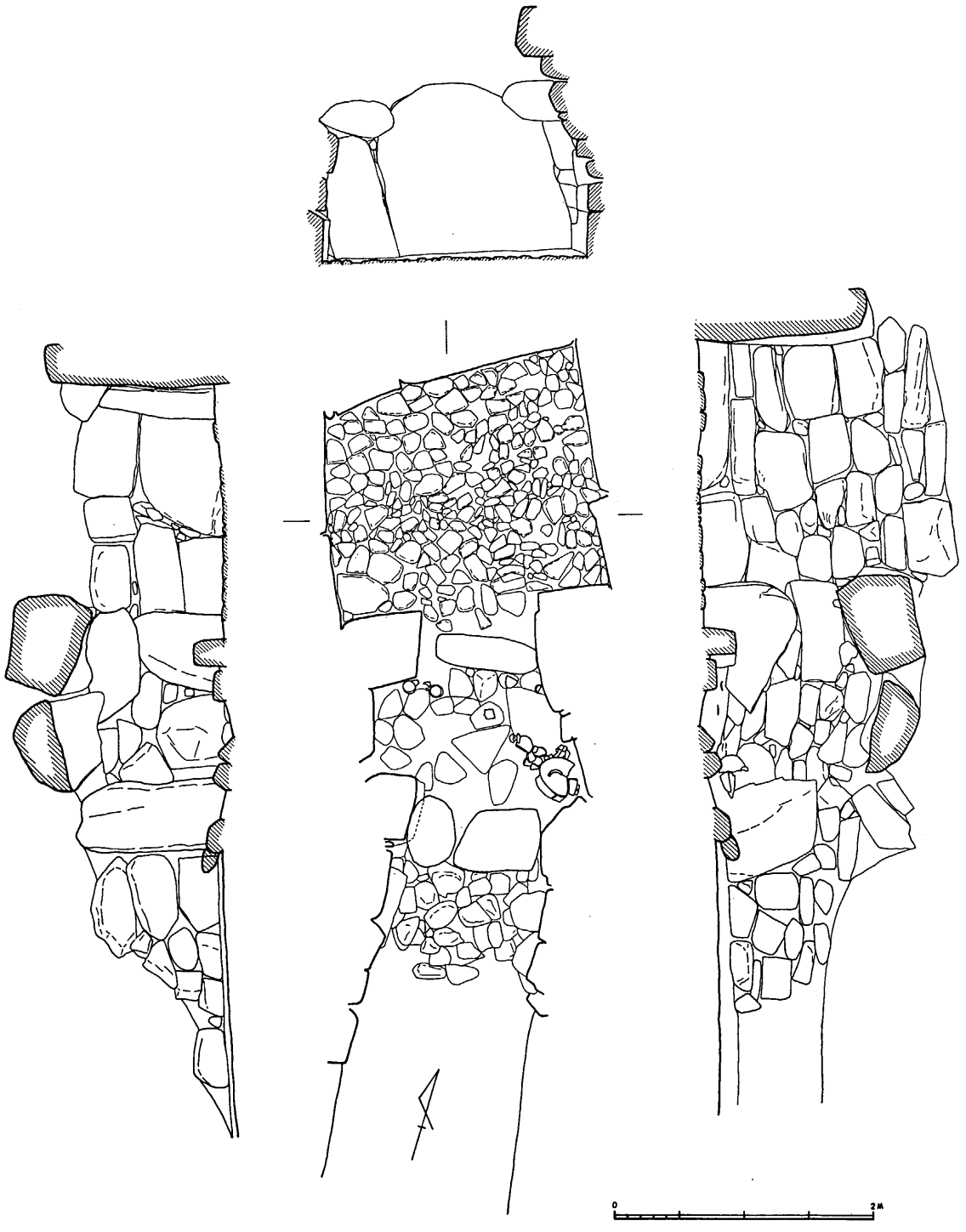
横穴式石室としては小型であり6号墳と共に遺骸を横たえるだけの容積しかない。副葬品も被葬者が着装していたものを除けば僅かに鏃2本のみである。しかし鏃があれば弓も添えたのかも知れないが調査の際には検出し得なかった。鏃もその機能から言えばむしろ威儀を添えるものと言える。恐らく破邪を目的とし死者を護るものであったろう。

営造時代については土器がなく詳らかにしえないが、1号墳と同じ7世紀代に入って薄葬化の傾向をより強くした時期と考えるべきであろう。（松岡）

⑽ 中通り10号墳（第42～48図、図版55～61）

北丘麓ではあるが、7号墳の北側にあり段丘端は南向きに営まれた複室横穴式石室を内部主体とする古墳であるが墳丘は全く破壊され玄室の天井も失われていた。恐らく円墳であったと思われる。

玄室は奥行1.7m・東西幅2.1m、床面は礫床である。奥壁は全幅の7割を占める大石材を東寄りに立て西壁との間に 残りを埋める 竪石材を使っているが 上積みは1石を除き 失われている。東壁は横長の石材2枚を基礎にして原則的に横積みの壁石が8段程残るが、その上は失われている。西壁は東壁より多少大きめの石材を用い奥壁寄りは2段、玄門側は3段積みそれ以上は失われている。



第42図　中通り10号墳石室実測図（1/50）

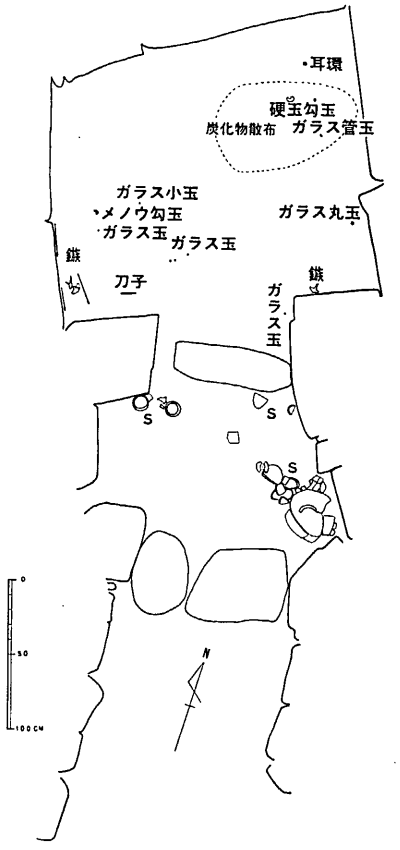
玄門は東西共に2石を重ねその上にマグサ石を構架している。

前室は羨道のその部分が東西に凹みを持った感じのプランであるが、両壁とも小型石材を使用している。床面は礫床である。

羨門は東西両方に竪に長い石材を立てて袖石としているが天井を構成するマグサ石は失われ、前室のみが天井を残している。カマチ石は石材2箇を使って外部と区別する。

羨門外の墓道袖積みはカマチ石の所から東は1m、西は1.6m程残っていた。

羨門部は礫を積み上げて閉塞しており、その石積みの高さが羨門の中程にまで及んでいたが元来はもっと高く完全に閉していたものであろう。この石室を構成する石材は全て近くに産する花崗岩を使用している。



第43図　中通り10号墳遺物配置図（1/50）

遺物の配置（第43図）

玄室内は東北隅に近く卵形に灰と木炭があり、これを取り除いて敷石上に硬玉製勾玉と同平玉とガラス管玉が12～27cmの間隔で遺存した。また東壁に近く玄門よりにも緑色ガラス玉1箇があり、玄門袖石の玄室側に接するように飛燕形鏃1箇が見られ、これは9号墳のそれと同じ位置である。

西壁側では玄門西袖石の玄室側に近く刀子が切先を西に向けて置かれ、西壁直下の隅に近く鏃が先に向けて遺存した。

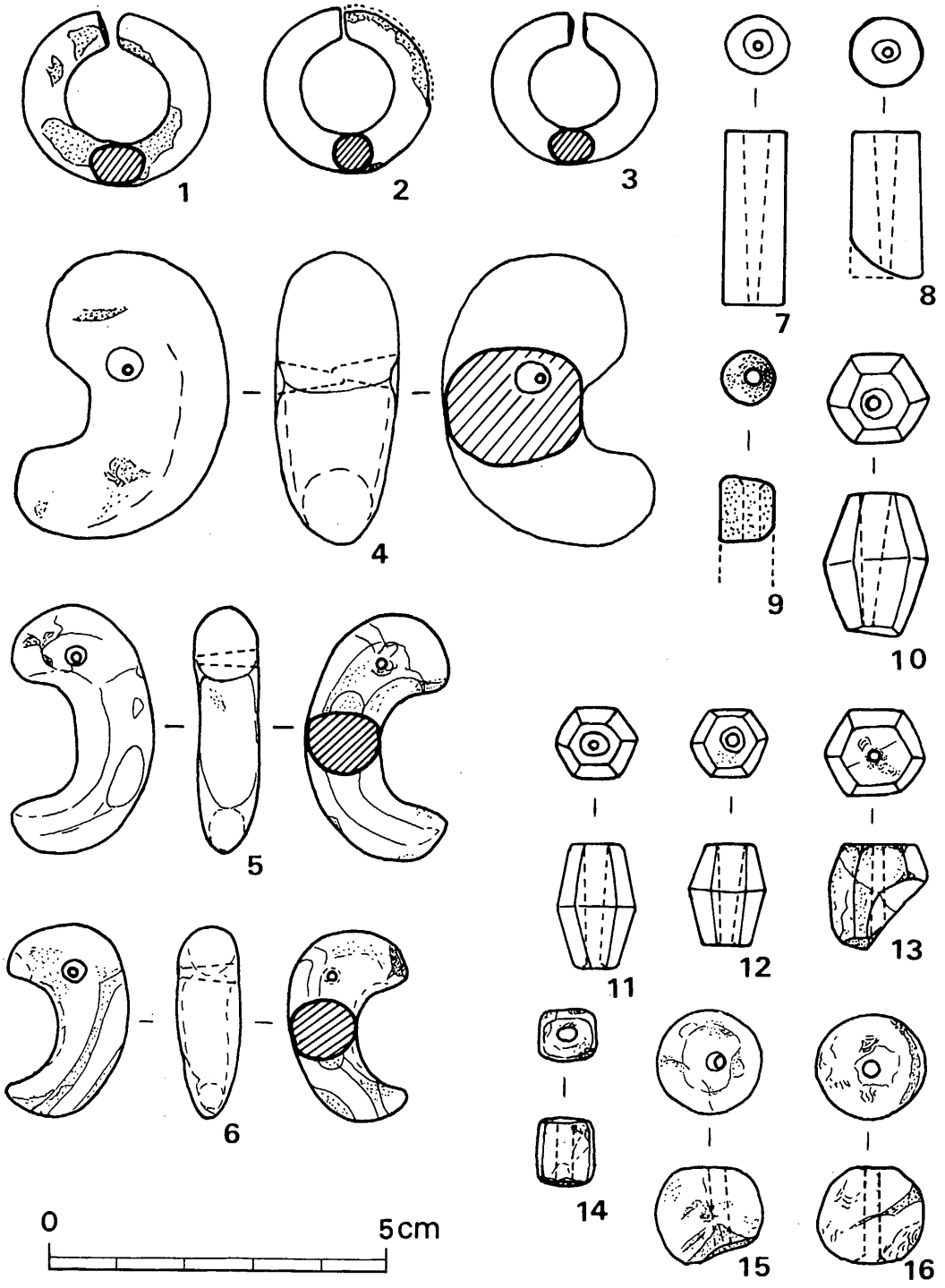
西袖石から50cm北寄りで西壁から少し離れて瑪瑙勾玉とガラス玉があり、これらの遺物の位置関係から奥壁に平行に東枕に1体、玄門寄りに西枕に1体の被葬者が葬られていた可能性がある。

次に前室で東壁に近くスエ器ホトギ（俵形壺）を中心に一括して土器が置かれ、また西側玄門袖石に接しスエ器杯が置かれていた。（松岡）

遺　物（第44～48図、図版59～61）

装　身　具（第44・45図、図版59(上)）

耳環（1～3）3個検出された、1は銅環に銀を被せたもので、2.73cm×2.52cm、断面



第44図　中通り10号墳出土遺物実測図①（装身具）（1/1）

0. 76cm×0. 59cmを測り稍楕円形をなす。

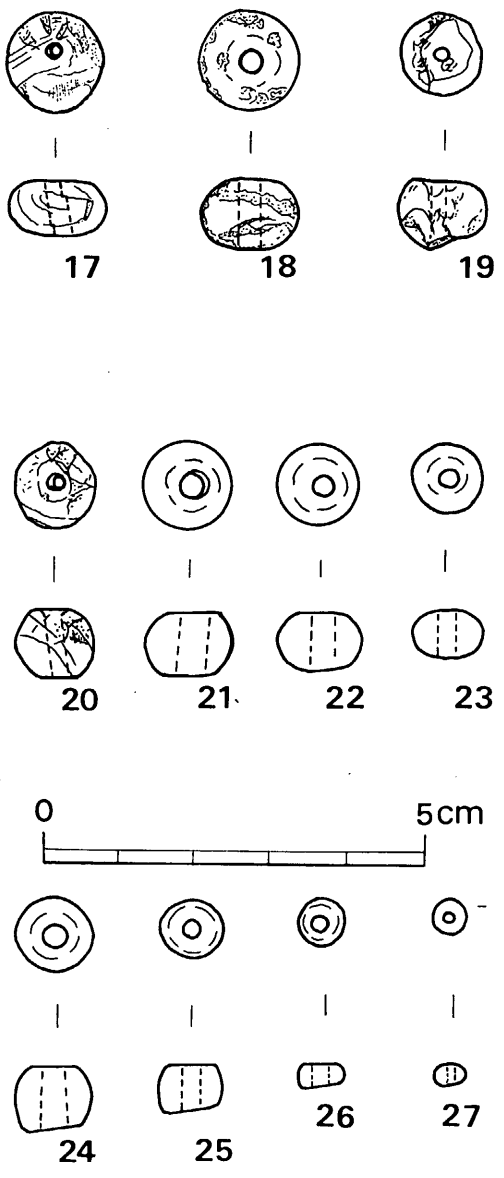
2は銅環に金鍍金したもので、全面緑青に覆われ内側に微かに鍍金の痕跡を止めている、径2. 44cm×2. 37cm、断面0. 56cm×0. 54cmを測り円形をなす。3は銅環に金を被せたもので径2. 39cm×2. 21cm、断面0. 62cm×0. 48cmで稍楕円形をなす。

勾玉（4～6）3個検出された、4は硬玉製で透明度の高い深緑色を呈するもので、表面が風化して白い斑が入った様に見える。長さ4. 3cm、幅1. 98cm、厚さ1. 68cm 重量36. 9gを測り両方から穿孔を行なっているが稍ずれた位置で貫通している。

中通り古墳群検出の11個の勾玉の中で、太さ、質とも群を抜くもので見飽きのしない逸品である。5は碧玉製で暗緑色を呈し、長さ3. 61cm、幅1. 12cm、厚さ0. 92cmを測り片方から穿孔を行なう、表面に凹面が多く荒削りの勾玉である。

6は瑪瑙製で淡い茶色（飴色）を呈し、白い縞が入る、長さ2. 84cm、幅1. 02cm、厚さ0. 9cmを測る。

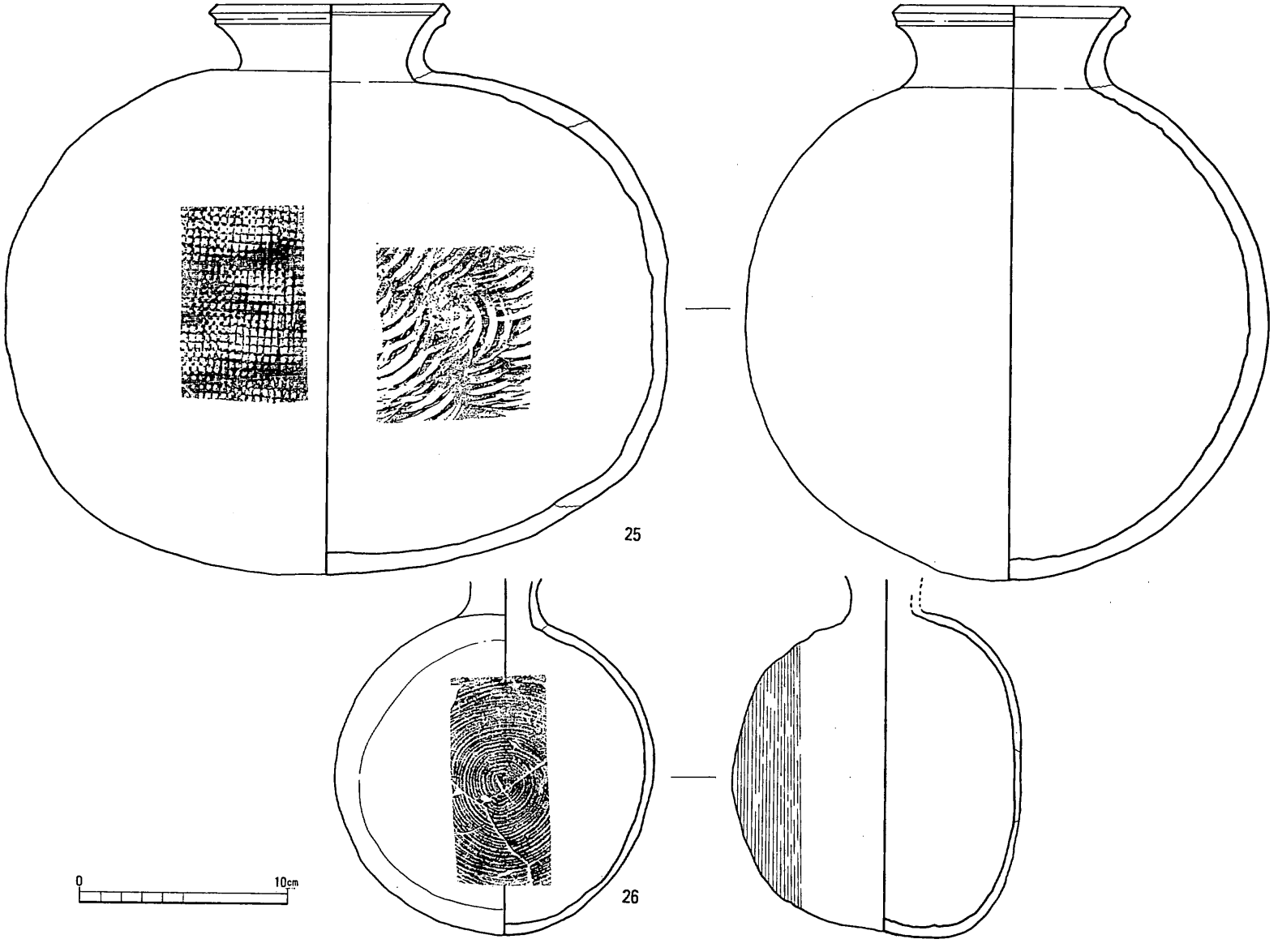
管玉（7～9）3個検出した。7・8は碧玉製で暗緑色を呈する。7は長さ2. 58cm、径0. 88cm。8は長さ2. 12cm、径1. 03cmを測り小孔側が約0. 5cm欠けた部分がある。7・8とも片方から穿孔を行なう。9はガラス製で不透明な空色を呈し欠損している。残存長は0. 95cm、径0. 76cmを測る。



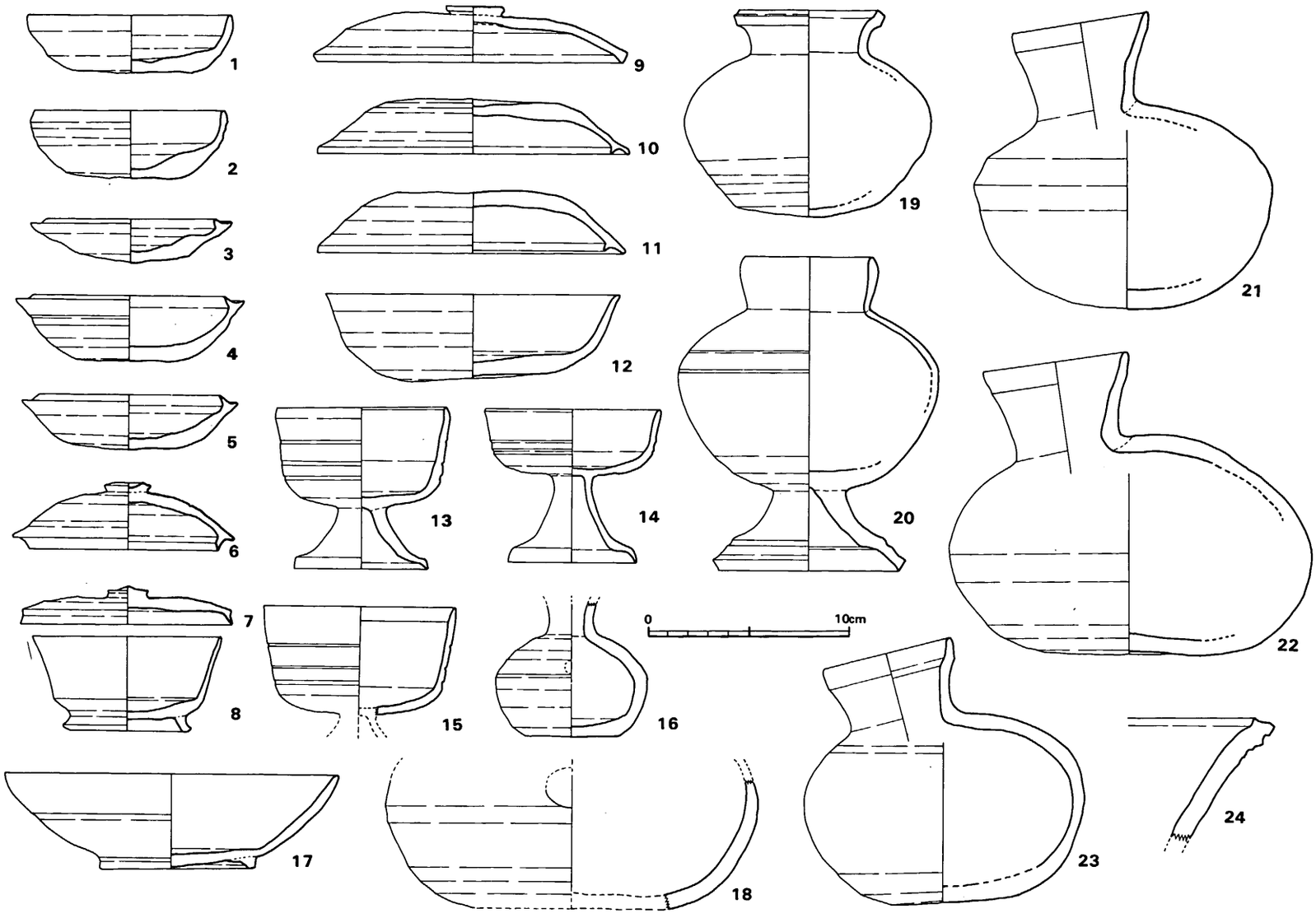
第45図　中通り10号墳出土遺物実測図②(玉類)(1/1)

切子玉（10～13）10～12は水晶製で、10は長さ2. 12cm、径1. 33cm。11は長さ1. 84cm、径1. 1cm。12は長さ1. 52cm、径1. 04cmを測る。

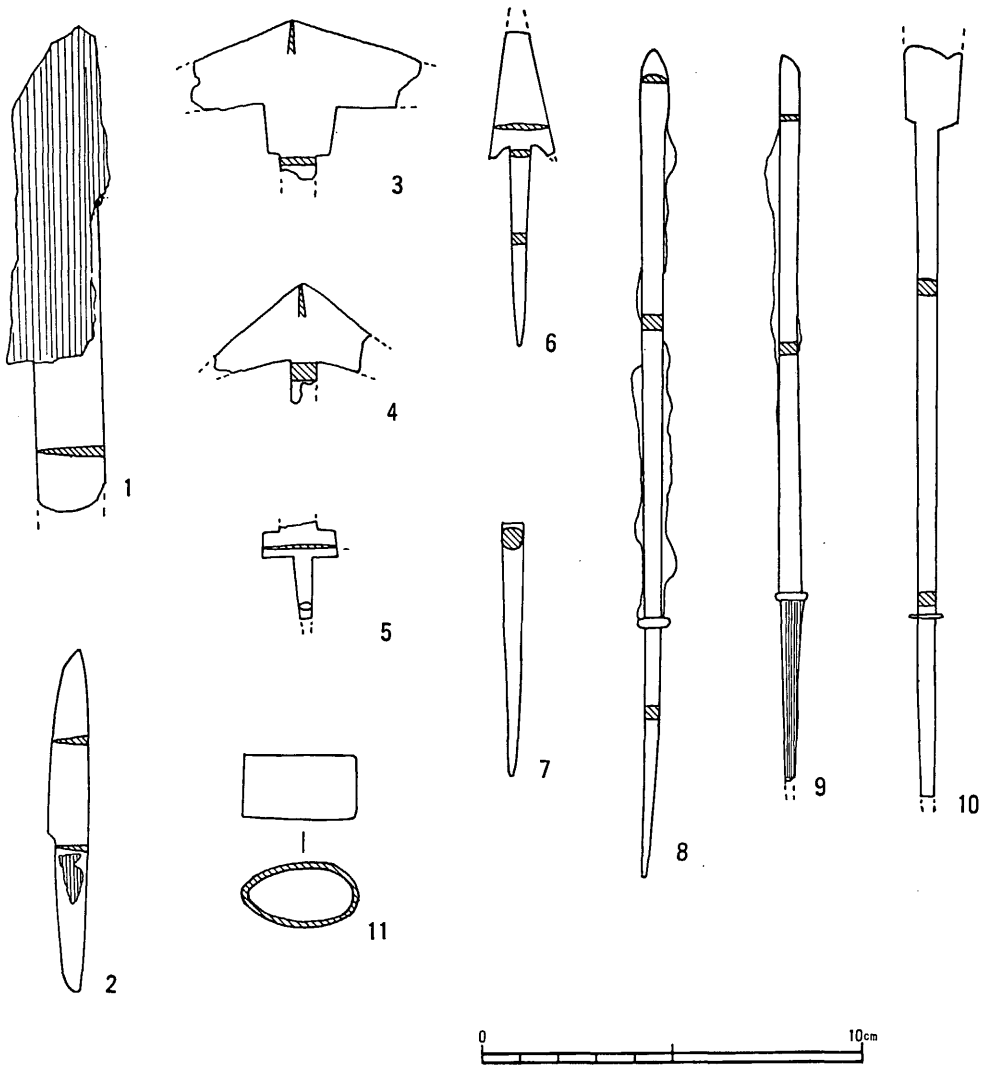
13はガラス製で、透明な水色を呈し14の角玉と同質のガラス製と思われ、欠損した部分を面取りして更に使用している。残存部の長さ1. 54cm、径1. 31cmを測るずんぐりした形で、中央



第47図　中通り10号墳出土遺物実測図 ④（土器）（1/3）



第 46 図　中 通 10 号 墳 出 土 遺 物 実 測 図 （土器）③（1/3）



第48図　中通り10号墳出土遺物実測図⑤（鉄製品）（1/2）

（横）の稜は付けていない。

ガラス製角玉（14）透明な水色を呈し、方形をなす玉で同種のもの1点が6号墳から検出されたが他にあまり類例を見ないものであり、13の切子玉と同質のガラス製と思われる。

長さ1.0cm、径0.86cmを測る。

丸玉（15〜18）4個を検出した、15・16は赤瑪瑙製で、15は径1.58cm、厚さ1.37cm、16は径1.61cm、厚さ1.42cmを測り15・16とも片方から穿孔を行なう。17は硬玉製であるが4の勾玉とは石質を異にする。淡い空色を呈しているが白色の異なる石材が入っているので良質の

ものではなく、径1.84cm×1.28cmの楕円形をなし、厚さ0.72cmを測り平玉と呼ぶべきかも知れない。

18は緑色のガラス玉で、腐蝕して稍細くなり白色を呈する。残存径 1.25cm、厚さ0.86cmを測る。

小玉（19〜27）21個検出されたが、腐蝕著しいものを除き9点を図示した。19・20は瑪瑙製21〜27はガラス製である。19は赤瑪瑙で、径1.08cm、厚さ0.91cm、20は赤に白の縞瑪瑙で、径1.12cm、厚さ0.85cmを測る。21・22は濃緑色、23は緑色、24・25は紺色、26は青色27は空色を呈し、21が最大で径1.12cm、厚さ0.8cm、27が最小で径0.45cm、厚さ0.28cmを測る。

その他の腐蝕玉は、緑色系11個と紺色1個である。（前田）

土　器　類（第46・47図）

スエ器（第46・47図）

蓋杯（1〜6）やや平らな蓋の口唇篏合部の立上りは外に出る事なく口縁より少し内側にあり、杯身は外傾する口縁と少し平らな気味をもつ底部からなるV式属するものと、全体に少し小ぶりで蓋の篏合部立ち上りが少し立ち気味で杯身はやはり平底に近いがまだ丸味をもつものでⅣB式に属するものがある。

撮付蓋杯（7〜9）杯身は不明であるが、口唇篏合部の立ち上りが相当立ったⅣA式と篏合部が簡単なV式のものとが見られる。

撮付有高台蓋杯（10・11）円枚状の撮みをもつ蓋は扁平で口唇部も簡単な構造である。杯身は直線的に外傾する器壁と平底に外開する高台を付けている。

高杯（12〜15）杯部がやや深く直線的に僅かに外傾し外面に三条の沈線を施す。脚は短かくラッパ形に開いて安定を保つ。それと別に杯部が径に較べて浅く脚も少々高い器形のものもある。

蓋（16）上部のラッパ形の口縁部は失われて頸部以下が残る。球形の胴部上方に径8ミリ程の孔をもち頸部は細く締る器形である。

短頸壺（17・18）短い頸部につく口縁は上方に少し屈曲する。胴部の張りはやや上方にあり全体的に少し扁平な球形をなす。胴部下半はヘラ刻りによる整形痕が残る。

脚付壺（19〜21）直立する口縁とやや上方に張りをもつ球形の胴部に基部のしまったラッパ状の脚を着けている。胴部には斜行ヘラ押し文様を間に入れた二条の沈線をもち、脚部下端に近く沈線二条を施しこの部分で脚縁は少し内側に屈曲する。

平瓶（22〜24）3個あり何れも偏球形の胴部の一方に偏って少し外開きの口部を付けている。底部はロクロ仕上げの際のヘラ切り痕を明瞭に残している。

俵形壺（25）胴径256ミリ・長径320ミリ・口径99ミリ、器表に格子目叩文、内面に同心円の叩文があり、胴部中央に32ミリの高さをもつ口縁を取り付けている。

提瓶（26）胴径153ミリ・胴厚140ミリ、口縁部は欠失しているが、頸部は細く径34ミリ、提瓶であるが提耳又は提環は付けられていない。胴部片面にロクロ成形時の指穴を円枚で閉した痕跡を残し胴部側面に別に孔を設けて口縁を付けている。

鉄　製　品（第48図）

刀（1）刃幅18ミリ、棟厚3ミリ、長さは断片であるので不明であるが、平造りの直刀である。永年使用の結果研減りしたとも考えられるが、本来小ぶりの刀であったと思われ、表面に柾目の鞘痕が残る。

刀子（2）全長90ミリ、刃長49ミリ、棟厚2.5ミリの平造り中茎に木質が錆着している。

刀装具（11）長径30ミリ・短径17ミリ、厚さ1ミリ、幅17ミリのれ金具であり、その大きさから前述の刀の装具であったと考えられる。

鏃（3～10）飛燕形2、平根形2、尖根形2、異形1の構成であり、平根の中1本は長三角形の先端をもち中茎は短い。他は先端部に破損があるが、中茎に至るまで大体残り長い形式である。尖根の1本は完存し、全長は218ミリである。

本古墳は5号・8号・13号墳に次ぐ規模をもち、比較的保存の良い方ではあったが、墳丘部と西側は耕地化により大きく削平されていた。

副葬品として大形の勾玉をもち武器類も他に較べて多いと言える。小さいながらも前室をもち、副葬品中土器の示す年代はⅣB式からⅤ式の時期であり、7世紀初頭頃に営まれ、しばらく葬送が続いたものと考えられる。（松岡）

(11) 中通り11号墳（第49～54図、図版62～69）

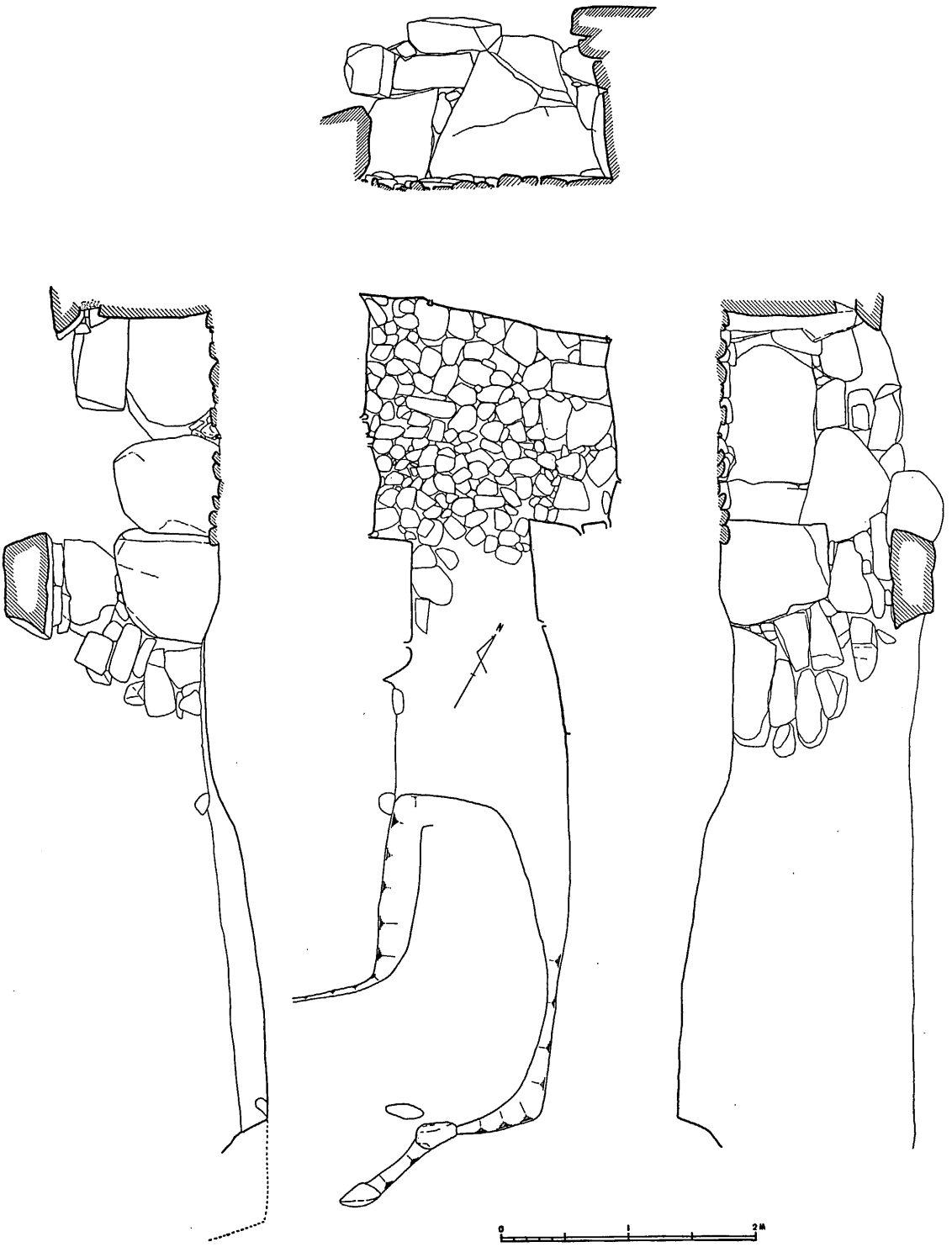
10号墳の北隣の段丘端にあり南東方向に開口する。墳丘は他と同様に失われて地表からは全くそれとは判らなかった。ボーリングステッキによる探査結果存在を知ったのである。

内部主体は単室横穴式石室であり墓道をもち、これは羨門から3.9mで直角に折れて西に開く、これは段丘端に開く事であり、本古墳を築造する際に段丘を利用して石室構築坑を掘り、古墳完成後はその葬送は段丘下の平地から段丘に開く墓道に入るのである。

玄室は玄門西袖石から奥行1.9m、東袖石からは1.5m、東西幅1.9m。東袖石は西袖石より約20cm玄室内に喰い込んで据えられているため玄室も不規則となり、奥壁もまた主軸に斜行して壁石を据えているので、西壁は約1.9m、東壁は約1.4mと短い。

玄室内は大小の扁平な礫を敷いている。玄門の境にはカマチ石を置かず礫床の一部が羨道内に延びている。

玄室奥壁は東壁寄りに大形石材を使い、西壁側はより小さ目の石材を使いその上には横積み



第49図　中通り11号墳石室実測図（1/50）

に壁石を積む。天井は失われているので、本来の高さは知る由もない。

東壁は大形石材を奥壁寄りに使いその上に壁石を積む。西壁も相似た構造であるが、奥壁側を除き上部は失われている。

玄門袖石は東西共に同大のやや大きめの石材を使用している。袖石から外側の袖積は外開きに積まれているし、羨道天井も袖石上にだけ構架しているので短い羨道である。

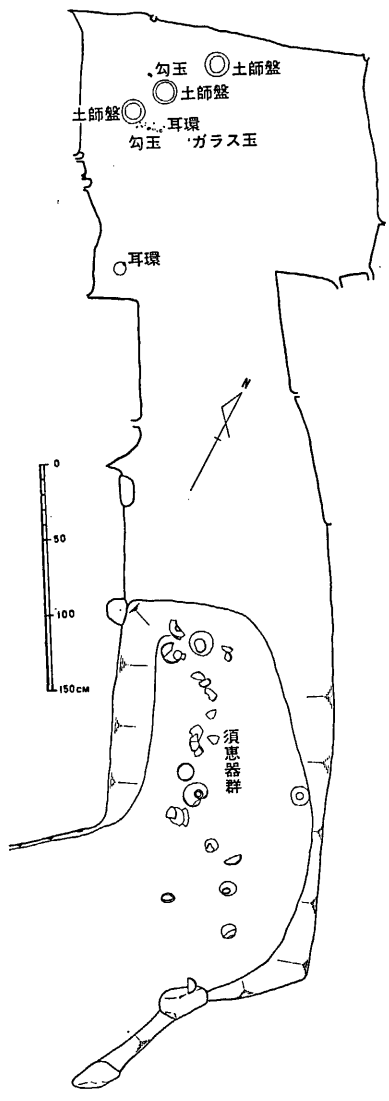
袖積みは東西両壁にあり、東は約1m、西は50cm程に積みそれから先は地山に掘り込まれた墓道壁の土壁となる。

これらの石材は全て花崗岩を使用しているのは他の古墳と同様である。

遺物の配置（第50図）

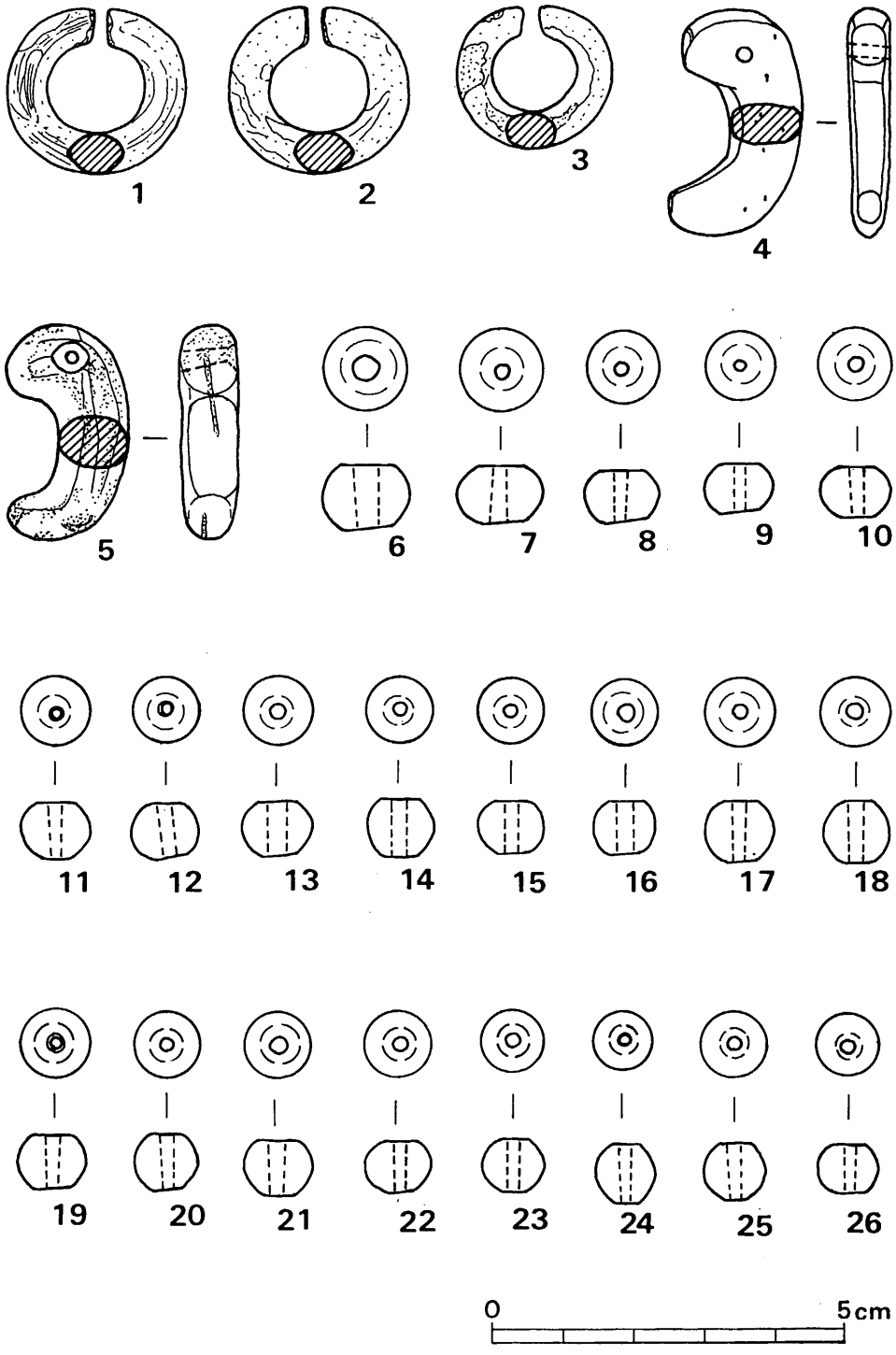
玄室内では礫床面の堆積土直上に木炭混りの灰層があり、その上に赤土が約3cmの厚さに敷かれていた。発掘を進めて行く中にこの赤土層になりこの面を追う中に玄室西北隅に近くハジ盤三枚が置かれていた。これは平安時代のもので古墳とは直接関係するものではない。これらを除去して始めて礫床が明らかになり、古墳本来の遺物が検出された。

玄門を入るとすぐ西側の隅に耳環1ケがあり、中央部西壁寄りに耳環2ケ、瑪瑙勾玉、ガラス玉からなる装身具がまとまってあり、さらに奥壁寄りに滑石製勾玉1ケが遺存した。この事から考えて奥壁に平行に西枕に3体の遺骸が安置された事が考えられる。そして古墳の最後の葬送が終って数世紀を経た平安時代の9～10世紀になり、石室が開口し、これを利用して内部に焚火をして清めその上に赤土を敷いている。この事は恐らく修験道の胎蔵界の修法をこの石窟を利用して行ったものと思われる。

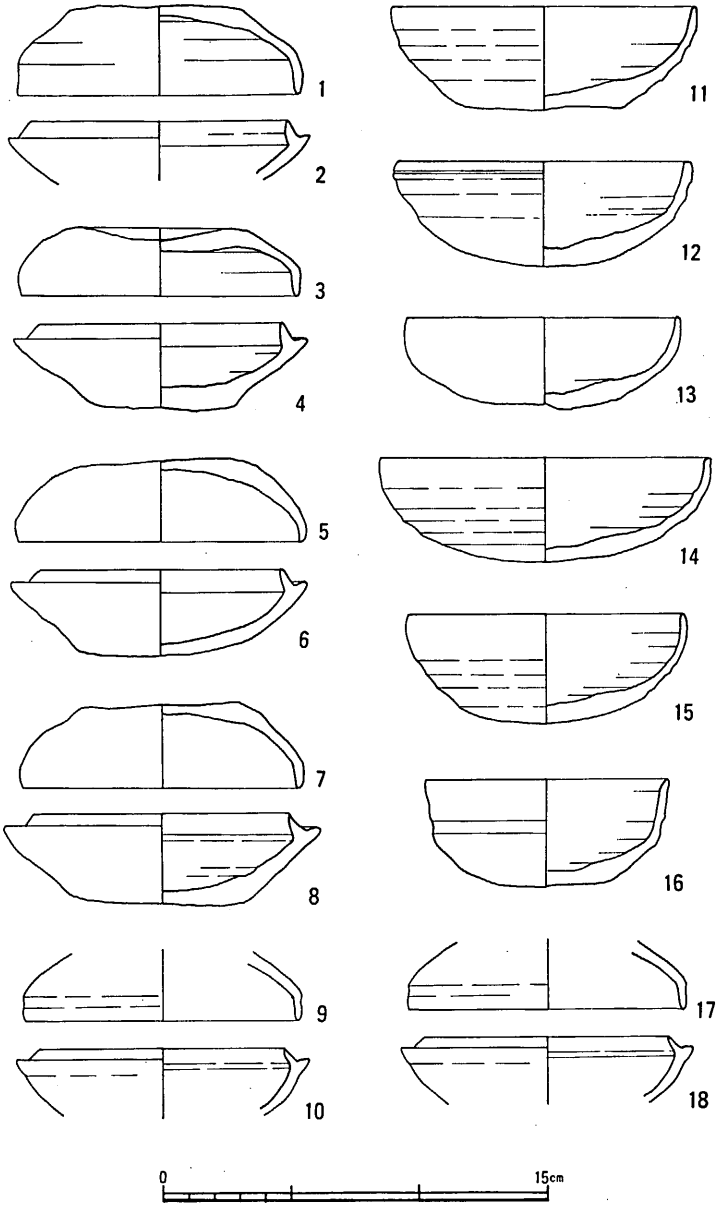


第50図　中通り11号遺物配置図（1/50）

羨道は敷石もなく遺物も見られなかったが、墓道の中程から墓道屈曲部までの2m強の範囲に点々と須恵器が置かれていた。墓前祭の時に供献されたものと思われる。（松岡）



第51図　中通り11号墳出土遺物実測図①（装身具）（1/1）



第52図　中通り11号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）

遺　物

装　身　具（第51図、図版66(上)）

耳環（1～3）3個検出された。1と2は対と思われ、銅環に金を被せたもので、1はやや腐蝕しているが黄白色を呈し、径2.54cm×2.37cm、断面8.76cm×0.55cmで楕円形をなす。

2は全面緑青に覆われ一部に金が遺存し、遺存部は黄白色を呈する。径2.58cm×2.40cm、断面0.80cm×0.55cmで楕円形をなす。

3は銅環に金を被せたもので、腐蝕が著しく内側にのみ金が遺存し、遺存部は黄金色を呈し、径2.20cm×2.02cm、断面0.76cm×0.50cmで楕円形をなす。

勾玉（4・5）2個検出された、4は滑石製で白色を呈し、胡麻状の黒い斑が入ったもので、長さ3.20cm、幅1.06cm、厚さ0.58cmを測り、片方から穿孔が行なわれ、端部がやや角張る。

5は瑪瑙製で、淡黄褐色（飴色）を呈し、研磨が不完全で線状の稜と凹みが数ケ所に見られ稍荒い仕上げで、長さ2.98cm、幅1.0cm、厚さ0.75cmを測り、両方から穿孔が行なわれている。

丸玉（6・7）ガラス製2個が検出された、緑色を呈し、6は径1.23cm、厚さ0.92cmで腐蝕しかかっている部分がある。7は径1.20cm、厚さ0.83cmを測る。

小玉（8～26）ガラス製32個が検出された、腐蝕して白色を呈し実測に耐えないものもあるが、総て緑色をなし丸玉と同質と思われ、完存する19個を図示する。8～26総て深緑色を呈する美しい玉で、径1.06cm～0.88cm、厚さ0.83cm～0.65cmを測り、厚さが稍薄い（平たい）ものと、厚い（丸い）ものとがある。（前田）

土　器　類（第52図～54図、図版66(下)～69）

スエ器（第52・53図）

蓋杯（1～18）蓋は口縁部が直立するがその直下から斜行し底部は平らになりこの部分はヘラ切り痕を残し、ヘラ記号をもつ。杯身も口唇篏合部の立上りも比較的よく立ったもので成形は蓋と同じでⅣA式である。

撮付蓋杯（19～25）杯蓋に尖り気味の撮みをもち口唇篏合部の立上りも低いもので、これを受ける杯身も口径に比較してやや深みをもつⅣB式と考えられるものである。

高杯（26～32）口径80ミリの杯部に基部の径の大きな脚部を付けたものと、杯部は略同大であるが、やや丸味を帯び、これに基部の細い脚部が付くものがあり、これらはⅣB式である。以上の他に深い盌状の杯部と低く二段に屈曲して開く脚部をもつものがある。

短頸壺（33～35）短い口部とやや肩が張り気味の胴部をもち底は平底に近いものである。

長頸小壺（36）直立するやや長目の口部と球形の胴部をもつ器表に三条の沈線を施した全高74ミリの小壺である。

小形俵形壺（38）胴径118ミリ・左右幅135ミリ・口径71ミリ・同高40ミリ、口縁部に沈線一条をもつ。

横瓶（39・40）胴径157ミリ・胴高87ミリ、口径56ミリ・同高36ミリの偏球形胴部の一方に偏って外開きの口部を付けている。

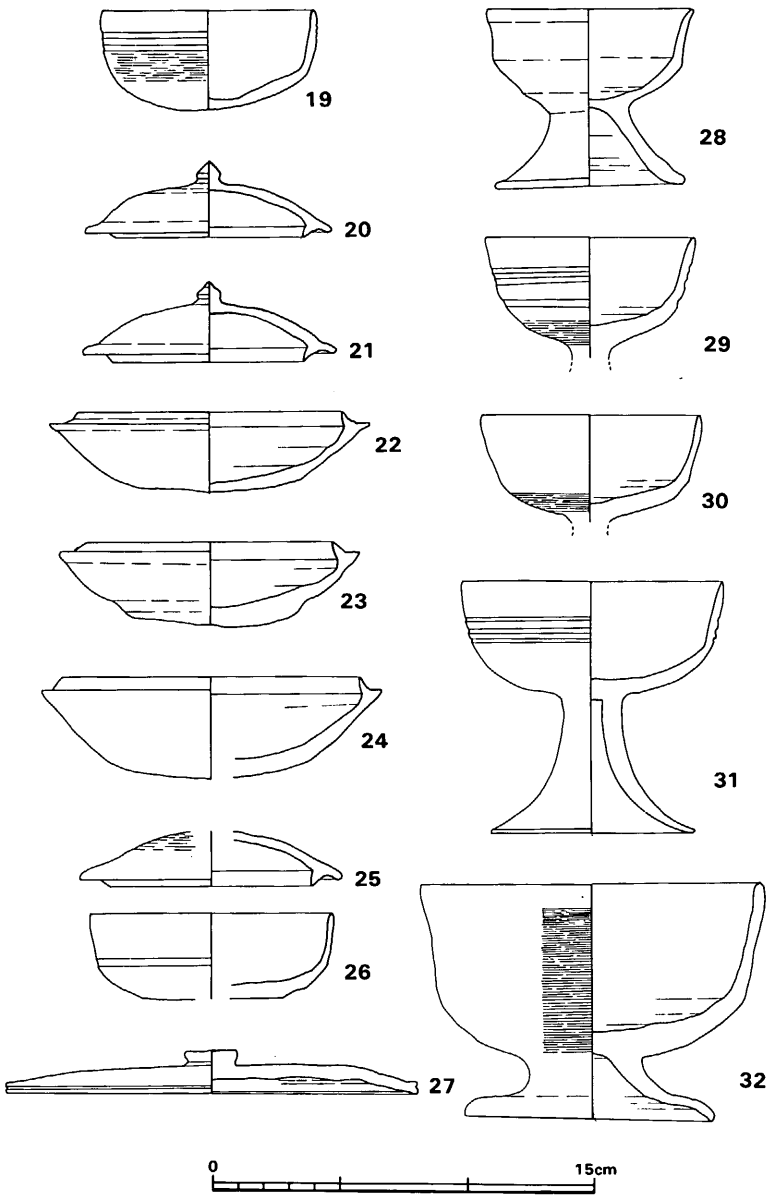
ハジ器（第54図）

ハジ器盤（41～43）口径156ミリ～150ミリ・高30ミリ・底径115ミリと3箇共に同形同大である。これらは玄室内に後世入れられたものであることを前に述べた。

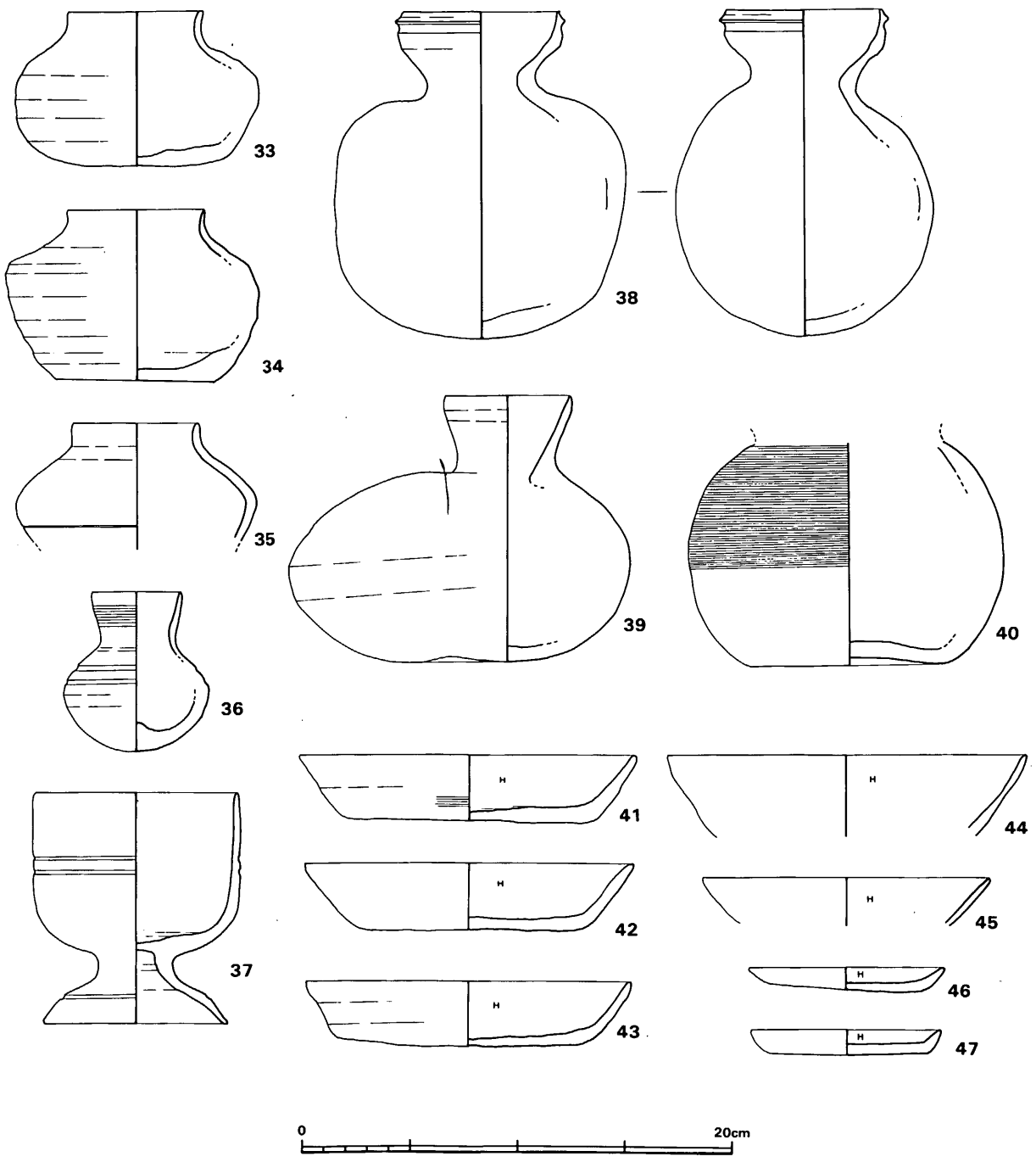
ハジ器小皿（46・47）口径90ミリ、高10ミリ～12ミリの燈明皿と考えられるものが2枚、これも前述の土師盤と同様で修験道胎蔵界修法と関係するものと考えられる。

瓦器鉢（44・45）白灰色の精良な胎土で軟質であるが、底部を欠いたもの2個体、平安時代の10世紀のもので、本古墳から出土した事は前述のとおりである。

本古墳は単室横穴式石室であるが、羨道も短かく、1号墳・2号墳とも共通した形式である。葬送は6世紀後半期から7世紀の前半期にわたり、1家族内の年長者に始まり相当後まで



第 53 図　中通11号墳出土遺物実測図（土器）③（1/3）



第 54 図　中通11号墳出土遺物実測図（土器）④（1/3）　H土師器

生存していた年少者の葬送を以て終ったものと考えられるが、平安時代の10世紀になると開口し、当時全盛を極めた修験道の行者により再利用された事を示している。　（松岡）

⑿ 中通り12号墳（第55～59図、図版70～76）

11号墳の北隣りで北丘の西側段丘端に南向きに営まれ現況では単室横穴式石室墳である。本古墳も墳丘は失われ、ボーリングステッキ探査により発見したものである。

段丘下の水田を少しづつ拡げて行く内に羨道及び墓道の西壁を取り崩し石室の石材に至って拡張を止めたものである。

内部主体の玄室は奥行 1.4m・東西 2 m の長方形であり床面の礫床は中央から奥壁寄りの部分が失われていた。玄室壁面は奥壁・東西両壁とも下部には少し大きめの石材を基礎に置きその上に大小不揃いの石材を乱れ積みにしている。天井石は失われているが、奥壁高は約 1.7m あり壁のせり出し具合から見て大体この上に天井石を構架したものと思われる。

玄門の袖石も小石材を積み上げており、特に長大な袖石は使っていない。玄門幅は 70cm でありカマチ石は置いていない。また玄門部天井石は失われている。

羨道は割合大きな石材を使い西壁の先は失われているものの外開きに作られて天井石も一枚残っている。東側に墓道袖積みが見られるが西は全て失われている。羨道壁石がより整美なものを使っているのと東側墓道袖積み基礎が張り出しているので、あるいは前室であったかとも思われるが、玄門部がやや長く作られて前室との境を長くとっている事からやはり羨道と見るべきであろう。

遺物の配置（第56図）

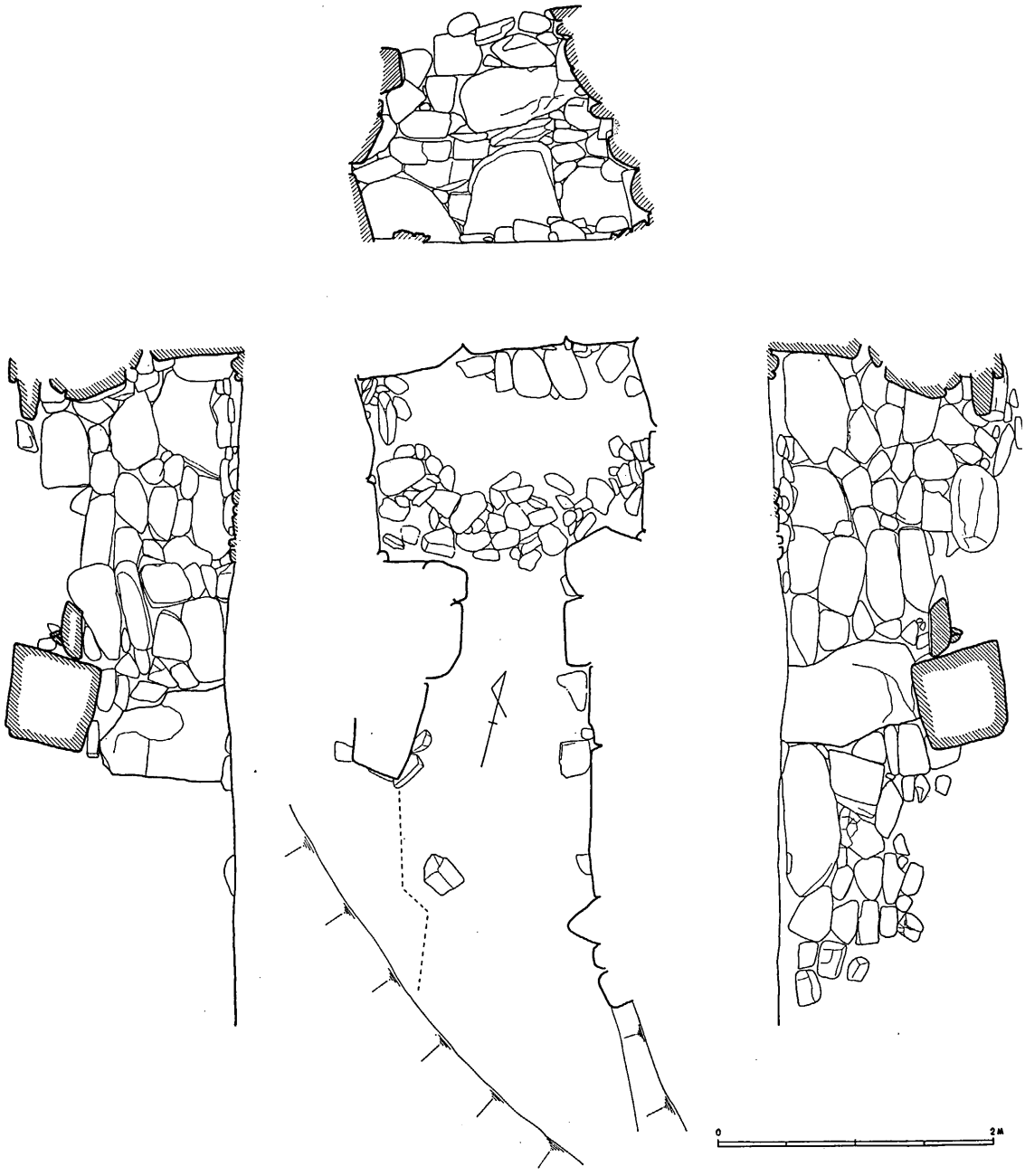
玄室内では敷石上のものが当初の状態に近いと考えられる。玄門西側の袖石に接する様に鏃があり、いかにも矢筒に容れて立てかけられた矢が倒れたと言った感じである。

耳環は玄室中央西壁寄りの敷石下にあったものは敷石の隙間から落ち込んだものと考えられるが玄室内の敷石の半数が抜き去られているため原位置にあるとは言い難い。他に金線を環にした耳環と銅地金張り耳環が玄門から少し入った所と玄室東壁に近い中央部に検出されたが、何れも原位置とは断定できない。碧玉製管玉とガラス玉も検出されたがまとまりがなく、やはり攪乱されている。

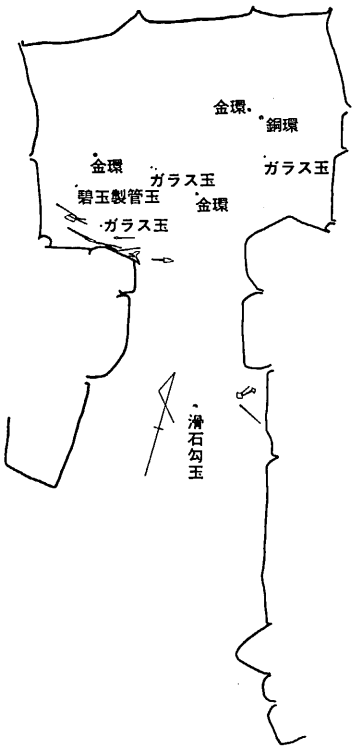
次に玄門に接する羨道奥東壁に接して尖根鏃と飛燕形鏃がまとまって遺存したのもこの隅石に立てかけて置いたものと考えられる。

またこの近くに滑石製勾玉１箇も遺存したが、これは遊離したものと考えられる。

石室内の攪乱土中に平安時代のハジ盤３枚が検出されたが、その遺存理由は12号に述べた通りの事であろう。



第55図　中通り12号墳石室実測図（1/50）



第56図　中通り12号墳遺物配置図（1/50）

遺　物

装　身　具（第57図、図版75）

耳環（１～３）３個検出された。１は全面緑青に覆われた稍大型の銅環で、径 3.25cm×2.76cm、断面 0.65cm×6.61cmを測り円形をなす。

２は銅環に金を被せたもので、金の残りが良く黄金色を呈し、径2.31cm×2.15cm、断面0.71cm×0.5cmを測り楕円形をなす。

３は純金製と思われ、金製の針金を環にしたもので、径2.21cm×2.05cm、断面は不定形な６角状（円形に近い部分もある。）を呈し、0.21cm×0.20cm、重量3.42ｇを測る。

勾玉（４）風化等による損傷を受けているが、蠟状を呈する良質の滑石（蠟石）製で、残存部の長さ2.99cm、副1.06cm、厚さ 0.87cm で片方から穿孔を行なっている。

管玉（５・６）２個検出された。５はガラス製で、不透明な淡緑色を呈し、長さ 1.27cm、径 0.69cm測る。６は碧玉製で、空色を呈し、長さ1.52cm、径0.43cm を測る細身のものである。（前田）

土　器　類（第58図、図版75）

ハジ器

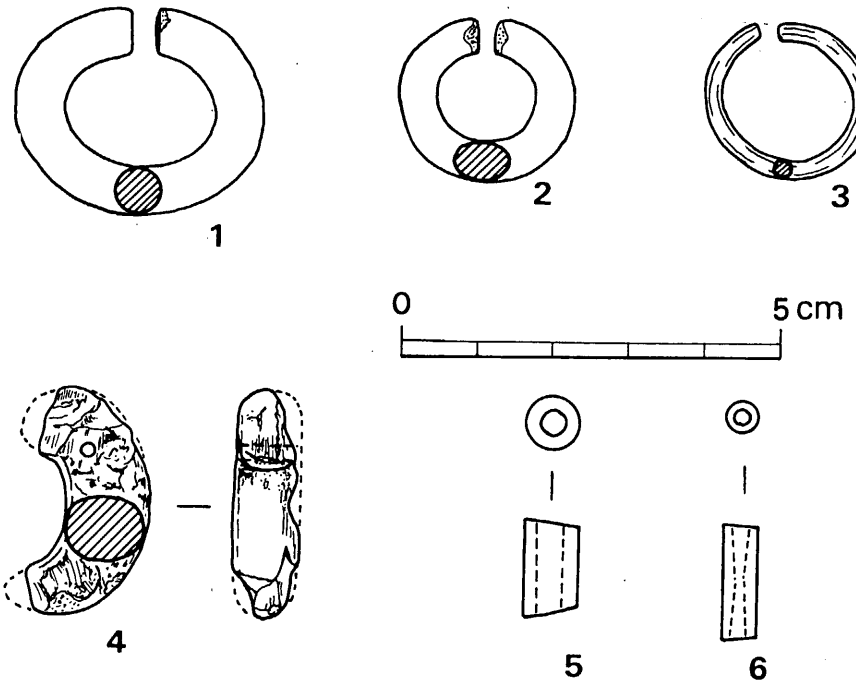
盤（１～３）赤褐色の口径155ミリ、深さ25～30ミリ、底径110ミリ、底はヘラ切りの全く同一人の手になる３枚の盤である。

鉄　製　品（第59図）

平根鏃（６・７）先端は剣の切先状で関の部分で両外側に開き逆刺を作る。篦被は方形断面であり中茎は丸形で鏃尖長72ミリ・全長 145 ミリ、同形で先端と中茎を欠いたものと２本同形があり、何れも先端部は偏平である。

撥形鏃（５）関から先端に向かって拡がり、先端は円弧状をなし、篦被は断面方形、中茎は丸形鏃尖長67ミリ・全長111ミリ。

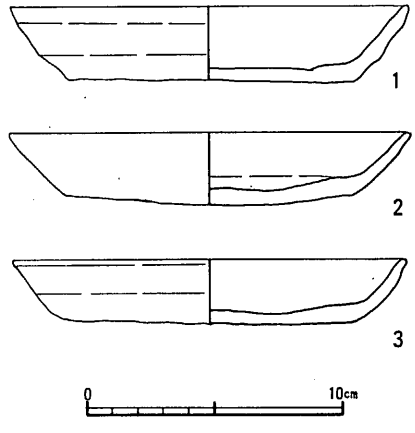
剣形平根鏃（４）斜めに切り上る関から緩かに先が尖る剣形の先端をもち、断面方形の短い篦被下端は段をもって関となり丸形断面の中茎となる、この端は折れているが余り長いものではない。鏃尖長66ミリ、現在全長121ミリ。



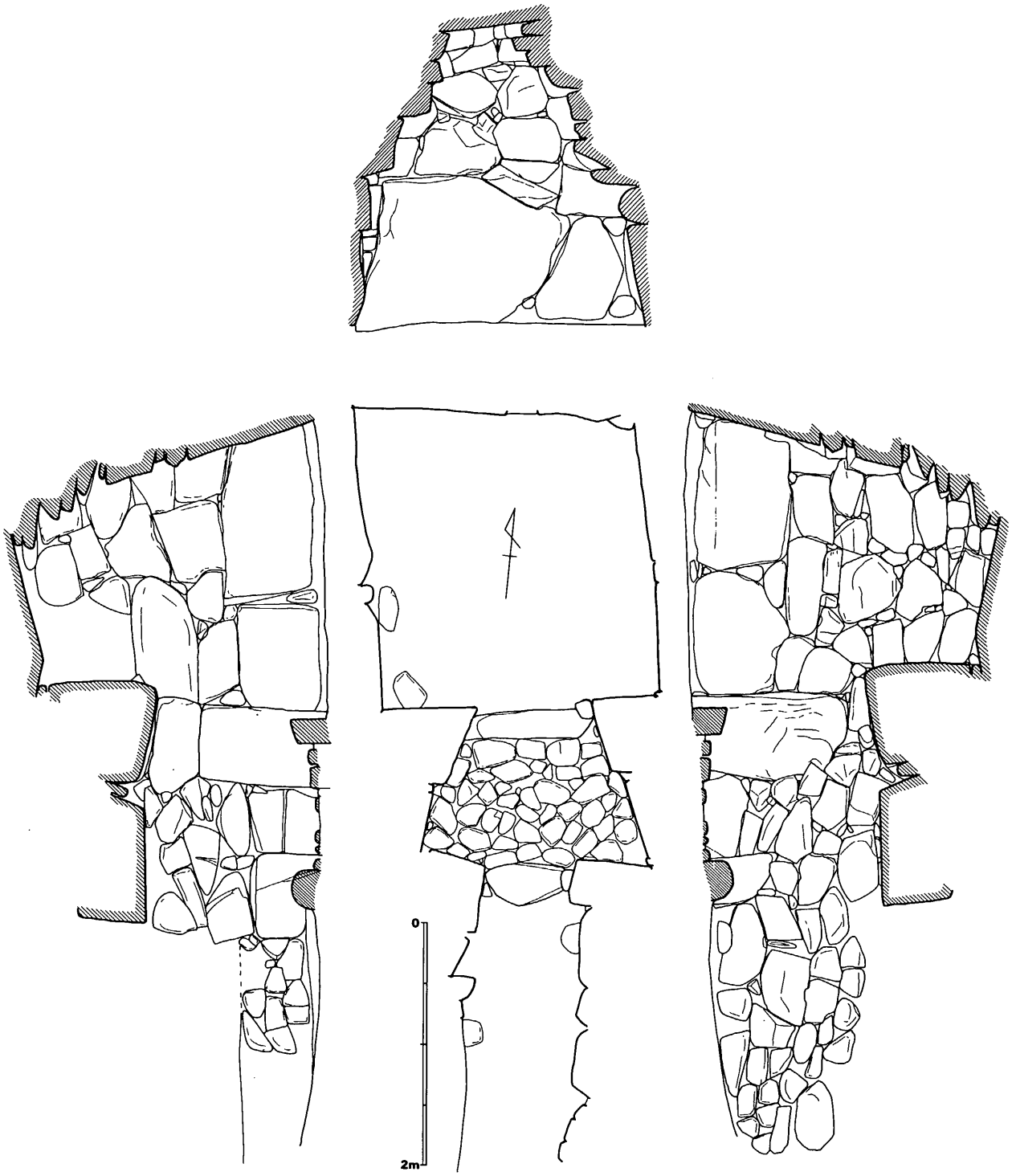
第57図　中通り12号墳出土遺物実測図①（装身具）（1/1）

剣先形平根鏃（３）前述のものに近いが、鏃尖は関が篦被から直角になり、現在の剣先スコップを想わせる。この断面は偏平であり少し厚みを増した長方形断面の篦被に続く、篦被の関の部分で折れて中茎を失っている。鏃尖長37ミリ・現在全長79ミリ。

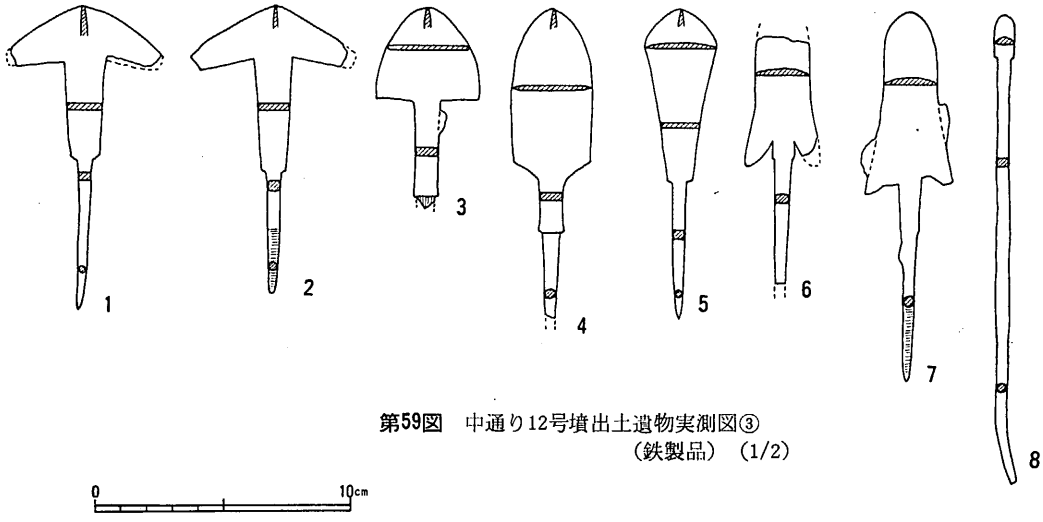
飛燕形鏃（１・２）２本あり後退翼形の鏃尖は左右65ミリ・長21ミリ、関に向かって少し細くなる篦被は偏平であり、中茎は関の所で方形断面、先端部は丸形断面である。全長は１本が113ミリ、他方は119ミリ、鏃が大形であり儀杖的な目的ももっていたであろうが、中通古墳群の立地が山地に近く最近まで鹿・猪の生息していた地域に接していた事を思うとき、飛燕形鏃は皮ふが比較的柔かい人間かまたはこれと同じ鹿狩りに使用されたと考えられる。現在鹿打ち用散弾は９粒のバックショット弾を使用するが、これはそのまま対人用のライエット銃に使用する事は皮ふの抵抗性が相似た事によるから



第58図　中通り12号墳出土遺物実測図②（土器）（1/3）



第 60 図　中 通 13 号 墳 石 室 実 測 図 (1/50)



第59図　中通り12号墳出土遺物実測図③
（鉄製品）（1/2）

であり、飛燕形鏃にもこの事が言えるのである。

本古墳も玄室がやや横長く作られて他のそれと軌を一にしている。しかし羨道は比較的良好な石材を使用する事により外観は堂々とした石室に見えるが玄室はさほどでもない。羨門を大きく堂々と見せるやり方は終末期に近い古墳の特徴でもあり、本古墳中では２号墳と共通し、12号墳は土器を持たないが恐らく２号墳と同一の時期で血縁関係にはあるが別の家族に属する人々の奥津城と考えられる。（松岡）

(13)　中通り13号墳（第60～65図、図版77～82）

12号の北隣にあり段丘端を利用して南向きに築造されていた。

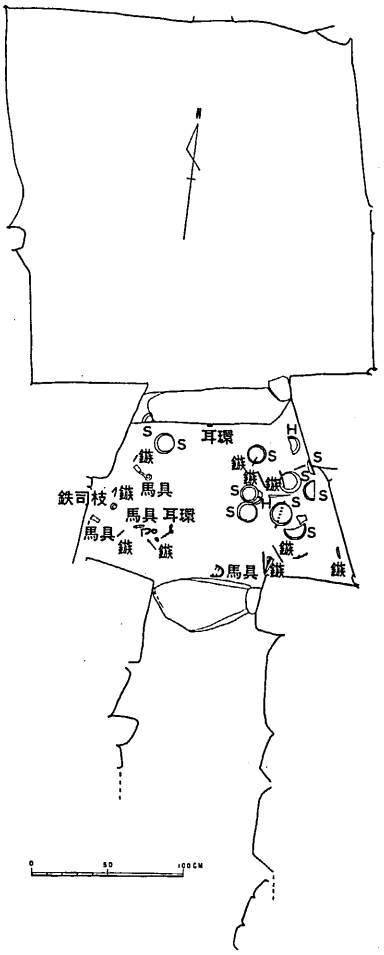
本古墳のみは玄室天井石も完存し、その直下西側壁の上部に孔が穿たれていた。しかし墳丘は現在の地表からは認める事はできなかった。地元の人の話で幼年時代に石室に出入して遊んでいた事があるとの事でその教示に従って段丘崖面の草むらの中に穴を発見したのが前述の石室の穴であった。

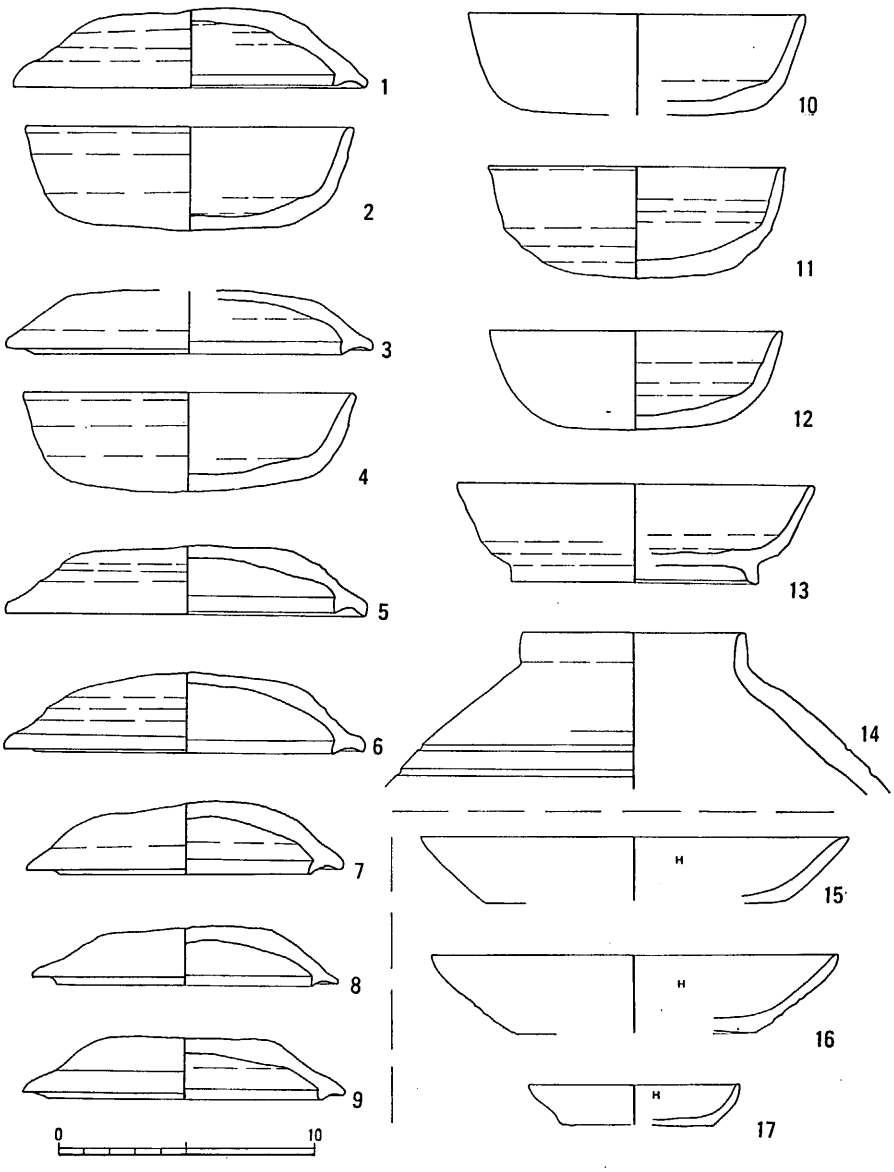
内部主体は複室横穴式石室であり内部は攪乱されていた。

玄室は奥行2,4m・東西幅2,3m、床面は礫床であったが敷石は全く遊離していた。

奥壁は1.5×1.2m以上の大石を西寄りに置き残りの部分を別石を立ててこれらの上に壁石を乱れ積みして床面から2.4m で天井に至る。東西両壁とも最下段は２枚の大石を置きその上に壁石を積んでいる。天井石は大石１枚を蓋にした感じで壁石を抑えて安定化を計っている。

玄門は東西両方とも長方形の袖石を立てその上に１枚の石をのせてそしてマグサ石を構架する。この袖石は平面図で見られる通り玄室側はせまく前室側に外開きになるように配置しその


耳環
鉄
鉄
鉄



第63図　中通り13号墳出土遺物実測図 ②（土器）（1/3）Sはスエ器　Hはハジ器

遺物の配置（第61図）

玄室内は全て遊離して本来の位置は不明であるが前室は比較的良く残っていた。羨門を入って直ぐ東側壁沿いにスエ器杯が一括して遺存し、これらと重なるように鏃が散在していた。西側には馬具類と１本の鏃が散在し、玄門カマチ石に接してスエ器杯があった。しかし馬具類は

破片が不足しているものもあり原位置とは言い難いものがある。また耳環が玄門カマチ石に接して遺存したが、これも同様の事が言えるのである。

遺　物（第62～65図、図版81・82）

土　器　類（第63図）

スエ器（1～14）

蓋杯（1～12）蓋はやや浅く口唇れ合部の立上りは外縁と高さも同じく横に寝た感じである。器表にロクロ成形時の指頭のナデ底が残る。

杯身は口縁部は直線的に外傾し底部はやや平らになる傾向をもつ、他の蓋杯では口唇嵌合部がやや立上り気味のものも見られるが大勢は全て一致している。ⅣB式。

高台付杯（13）直線的に外傾して聞く口縁部と平底に高台を付けているV式の杯である。

短頸壺（14）肩部以下を失つている。12ミリ程の直立する口縁は終88ミリ、斜めに降る肩の部分に2条の沈線を周らせている。

ハジ器（第63図、図版81）

盤（15・16）口径160～168ミリ・深26～31ミリ・底径90～115ミリの浅い赤灰色の磐であり、10世紀のものである。

杯（17）口径83ミリ・深17ミリ・底径60ミリの灯明皿と考えられ、10世紀頃と考えられる。

以上の土師器は他の古墳にも類例が見られる通り平安期に開口して修験者により利用された事を物語っている。

装　身　具（第62図、図版81）

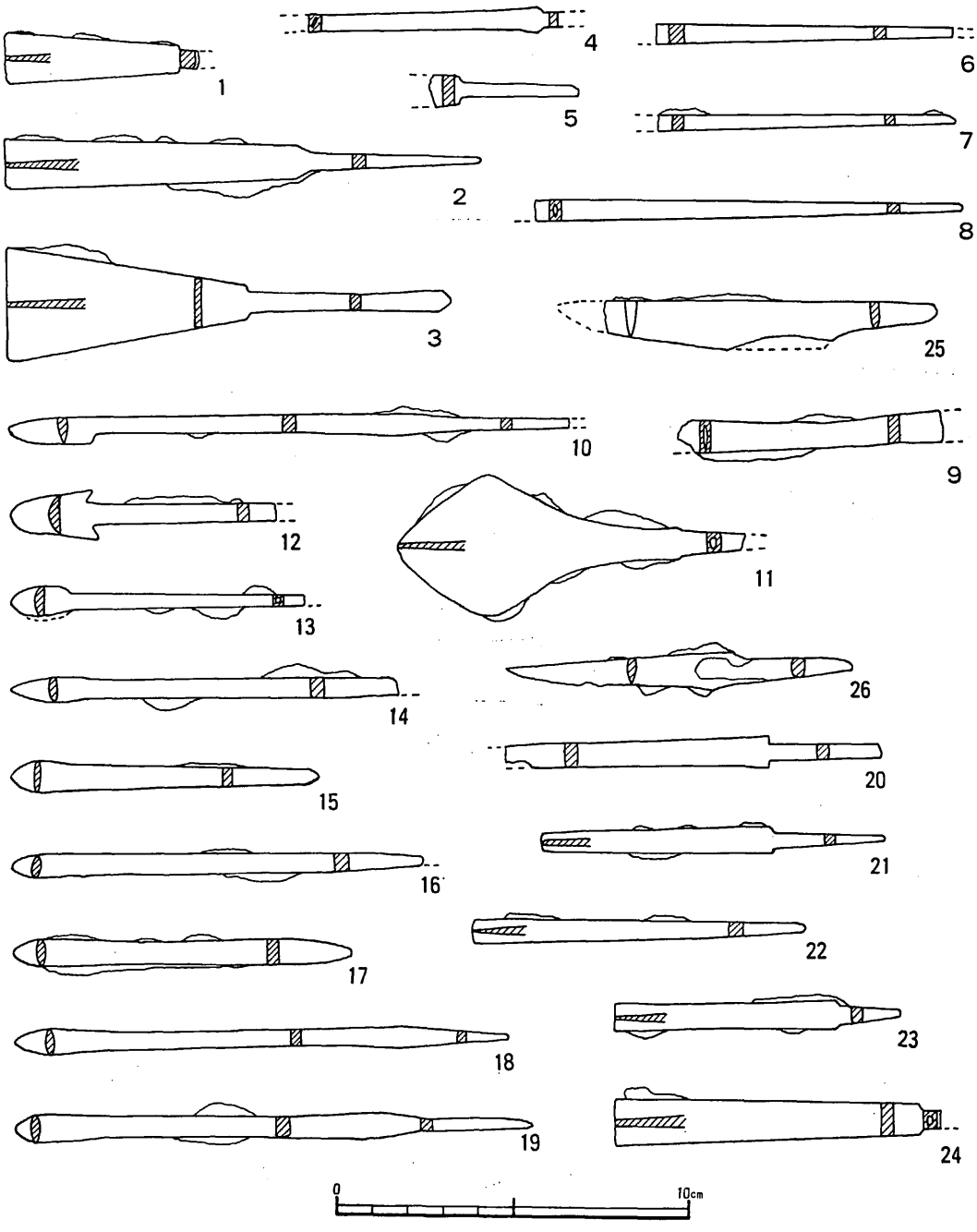
耳環（1～5）5個検出された。1と2は対をなすもので、中空の銅環（銅芯の厚さ0.04cm～0.05cm）に金鍍金を施したものが土中で風化して内側には金が遺存するが外側にはほとんど残っていない。1は径3.15cm×2.94cm、断面0.91cm×0.79cm、2は外側が稍破損しているが、1と同様のもので断面1.03cm×0.72cmの稍楕円形を呈する。

3と4は対をなすと思われ、銅環に金を被せたもので、腐蝕して外側には金分があまり見らないが、内側に遺存する部分は黄白色を呈する。3は径2.44cm×2.23cm、断面0.72cm×0.52cm。4は径2.42cm×2.20cm、断面0.77cm×0.54cmを測り楕円形をなす。5は銅環に金を被せたもので、腐蝕しているが内側の金分は遺存し、黄金色を呈する。径2.43cm×2.25cm断面0.73cm×0.54cmを測り楕円形をなす。（前田）

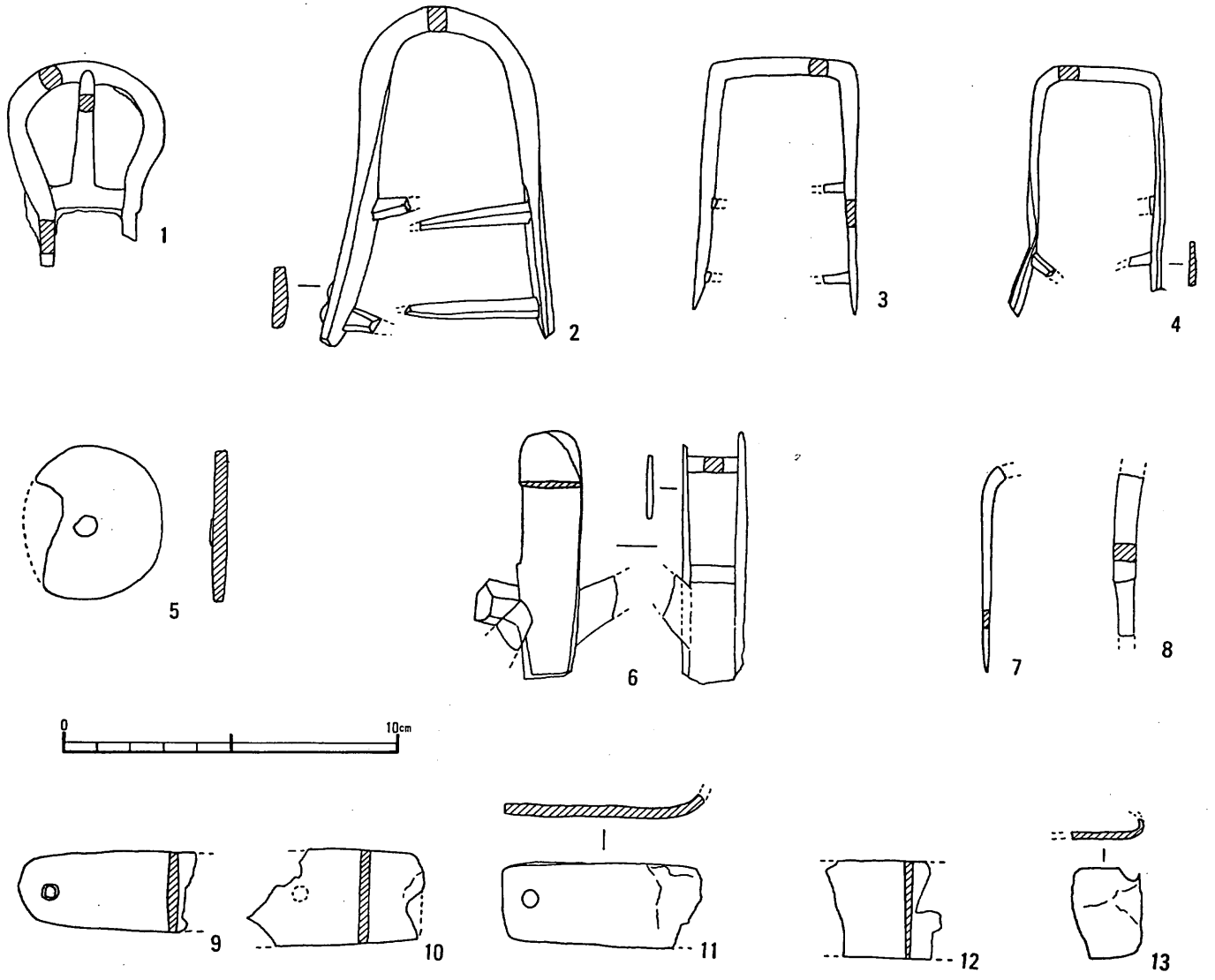
鉄　製　品（第64・65図、図版81）

鏃（1～24）

尖根鏃（13～19）鏃尖は蛇頭の如く篦被の間は自然に連続し、中茎との間も明確な関はなく唯細くなる。鏃尖の断面は長だ円形で篦被は方形断面でそのまま中茎に至る全長147ミリ。



第64図　中通り13号墳出土遺物実測図③（鉄製品）（1/2）



第65図　中通り13号墳出土遺物実測図④（鉄製品）（1/2）

逆刺付鏃（12）剣形の鏃尖の基部は外に開き逆刺を作る。篦被は断面方形であり中茎は失われている。

刀子形鏃（10）鏃尖は25ミリの長さをもち片刃の平造りで棟は篦被にその儘連続するが、刃は刃関をもち長い方形断面の篦被に連なりその先は断面丸形の中茎で終る。現在長161ミリ。

平根撥形鏃（3）鏃尖幅32ミリ・長68ミリの逆三角形をなし、これに方形断面の中茎が付いて全長は126ミリである。

細撥形鏃（1～2・20～24）長逆三角形をなし鏃尖幅は14ミリ、関までの長さ82ミリ、断面方形の中茎をもち全長135ミリ。これと同形であるが鏃尖の短いものもあり、撥形であるが鏃尖が開かず関の部分と同幅が少しせまくなるものもある。これらの形式は尖根形に較べ侵徹性はより少なく、人または人と同程度の皮フ抵抗をもつものに対するものであり傷口を大きくし、筋肉・血管・神経の切断によるダメージを狙ったものと言える。

平根菱形鏃（11）鏃尖幅40ミリ、先端から27ミリの所が菱形の最大になる角をなし、内側に細くなりながら関に至る。中茎は方形断面であるが末端は失われている。鏃尖長80ミリ。対人用とばかりは言えず先項で鹿の事に触れた通りこの鏃も鹿猟を考えて良いものである。

刀子（25・26）2本あり、一方は刃部長60ミリ・中茎長39ミリ本質が付着し、平造り刃関をもつ。

他方は切先を失っているが現刃長54ミリ・中茎長30ミリ、平造りである。

馬具類（第65図、図版82）

尾錠（1）環金具の横幅46ミリ、これに止金具がT字形をなしてはめ込まれた革帯の尾錠であり馬腹帯用とも考えられる。

鞍金具（2）「U」字形をなし中央部は6×5ミリ方形断面をなし、両端では17ミリ×4ミリ厚となり、この部分に4ミリ角の釘を内側に向けて打つている。思うに鞍の前輪下端に取り付けて鐙を垂下する金具と思われるが、そうであればもう一箇なくてはならない。

鞍金具（3・4）長い「コ」字形をなし中央部は5ミリ角・両端は拡がって幅8ミリ、厚3ミリ両側に2本づつ径3ミリの釘を内側に向けて打つ、恐らく鞍橋と居木を固定するための金具と思われる。

座金（5）径45ミリ・厚5ミリ・中央に径6ミリの孔をもつ。

不明金具（6）幅20ミリ・厚1.5ミリ・長さ72ミリの一端は丸頭、他端は角の鉄板を15ミリ間隔で向い合せてその間を5×6ミリ角の鋲で留めている。用途については不明である。

鍱（7・8）破損しているので確かではないが先端は細く尖り5×1ミリと薄く、基部は曲げてあり5ミリ厚で鍱の一端とも考えられるものが2本あり、1本は木質の銹着が見られる。

帯金具（9～13）何れも一端を破損しているが、幅23～28ミリ、丸頭と隅丸方形の先端をもちこの部分に留鋲の痕跡を有する。

本古墳は第２次調査に際して土地所有者を異にする墓道部の調査も実施することができた。また墳丘も排土処理問題も解決してその全容を明らかにし得たのは倖であった。その結果墳丘は周壕をもつ円墳であり、近世に至って開墾により墳丘頂部を刋平し、その土とか丘陵裾を削つた土で周壕を埋めて畑としていた事も判明した。

内部主体も割合よく残り、副葬品からその埋葬年代は６世紀末～７世紀に及ぶものである。他の古墳で見られなかった馬具が見られた事も本古墳群中特異なものとも言える。（松岡）

3）小　　結

1．第１次調査時の装身具類について

装　身　具　類

古墳群13基が総て盗掘を受けており、敷石が無くなるほど攪乱されている古墳も多かったが、敷石の残りが良い６号・10号・11号墳等から多数の出土があった。攪乱された土中から出土した２～３点は羨道・前室等から検出され、他は玄室からの出土で、敷石の間や敷石の下から検出されたものが多い。他の盗掘を受けた古墳に比して、玉類の出土が多いことは中通り古墳群の特徴の一つであり、スエ器作成によって得た豊かな生活の一端が窺がえるような気がする。

１　耳　　環

22個検出され銅地金張り13個、銅地銀張り５個、銅環１個、銅地中空環金鍍金２個、純金細環１個であるが、銅地金張り13個中に含まれる６号墳出土の細環は、環の開きと思われる部分が腐蝕して判然としないので、耳環でなく輪になることも考えられるがここでは耳環に入れておく。

２　玉　　類

180個が確認され、４号・６号・10号墳等には腐蝕した小玉が多く見られ、識別不能なものもあり200個に及ぶものと思われる。

４号墳出土の管玉、９号墳出土の水晶製勾玉、10号墳出土の管玉及びガラス製切子玉は大きく破損した後も面取りして使用していたことが分かり、玉類が貴重なものとして大切に扱われていたことが窺える資料である。

（１）勾　　玉

11個検出され硬玉製４個、碧玉製１個、瑪瑙製２個、水晶製１個、滑石製３個であるが、

10号墳出土の硬玉製で「頭でっかち」のグロテスクな感じさえする大形勾玉（重量36.9ｇ）、は他にあまり例を見ない逸品で特筆すべきものであろう。

（2）管　　玉

12個検出され碧玉製９個、ガラス製３個である。

（3）切　子　玉

９個検出され水晶製８個、ガラス製１個である。

（4）偏平切子玉

６号墳から１個検出され、同類と思われるものが「竹並Ｇ－60号横穴墓」から２個出土（註1）しているが他にあまり例を見ないようである。

（5）ガラス製角玉

２個検出され６号・10号墳から各１個の出土で、同類と思われるものが「竹並Ｄ－48号横穴墓」から３個、「竹並Ｇ－60号横穴墓」から１個出土しているが他にあまり例を見ないものであり、斉藤忠氏が「南鮮古墳発見特殊玉」（註2）とされているものに類するものと思われる。

（6）丸玉・小玉・臼玉

総計145個が検出され硬玉製１個、瑪瑙製10個、ガラス製134個である。

ガラス製の丸玉・小玉の中で117個（87％）が緑色を呈する美しい玉及び緑色と思われる腐色玉で、中通り古墳群出土玉類の特徴の一つとして特筆すべきものであろう。　（前田軍治）

註：1　竹並遺跡調査会「竹並遺跡」（横穴墓）寧楽社　昭和54年
　　2　斉藤忠著「新羅文化論攷」吉川弘文館　昭和48年

2. 歴史的背景と風水

御笠川から牛頸川を溯り春日神社の狭隘部を抜けると南北に細長いがやや開けた牛頸川中流域の平地が展開する。春日市春日と惣利・大野城市牛頸にまたがる盆地をなす地域であり、その中央部に平野神社と不動城跡及びその東に接して位置する中通り丘陵にある遺跡の中、今回調査した古墳群は18基中の13基であり、緊急調査、第２次・第３次を入れるとその中の17基が調査された後に姿を消してしまっている。

この地域は春日市・大野城市・太宰府町にまたがる300基を越えたと思われるスエ窯跡群の中心である。

６世紀から７世紀にかけて中通り丘陵を背山として営まれた古墳はこの盆地内の総数40基に及ぶ古墳の約半数を占め、それが狭い地域に集中して営まれている事は、その場所が特定の集

団の墓地であった事を物語るものと言えよう。

中通り丘陵の各々のピークを主山として古墳が営まれているが、中でも北丘を主山としたものが前述の古墳群中の３号～14号墳であり、その中でも５号墳・６号墳・８号墳が最も良好な位置を占めている。

これらの中心的古墳の場所に立てば背後丘陵から派生した尾根が左右に延び、前面は牛頸川が左から右に流れその水源と流末は丘陵地に阻られて見えない。川の沖積平地が対岸の平野神社・不動城跡丘陵とに続く丘陵に囲まれて盆地を形成し、その向うに牛頸山が望まれる。

古墳の前面に平地と水があり、左右の尾根との間は雨が降れば小さな水流（明堂水）ができる地形であり、周囲が囲まれ、しかもそれが北に丘を負い南に平地が開ける。

この様な地形と古墳の占地（明堂）はまさに風水地理に言う吉地であり、これは他に求められないもので、中通丘陵の西南麓に集中して古墳が営まれたのはこの様な理由からであったと考えられる。

次に古墳と背後の丘陵に作られたスエ器窯跡との関係であるが、古墳副葬の土器中に窯で焼き損った変形したものも含まれていることと年代形式に一致するものが多数を占める事から単に成品とその購入使用者と言うこともできるが、より積極的に生産者自身かまたは同族関係にあった被葬者と考えたい。

しかしながら５号・６号墳を築造する頃に南寄りの１号・２号墳の背後丘陵の窯は稼動していたと考えられるが、１号・２号墳の作られる頃にはこの背後の窯は廃絶していたと考えられ、同一丘陵にあっては窯が先行したと考えられる。

牛頸地区を中心とするスエ器生産は古墳時代を過ぎた後世まで続いて行く。７世紀の半ば過ぎ663年の韓半島における唐・新羅連合軍との百済回復の戦争において日本が白村江において壊滅的打撃を受けた。日本政府は急遽大宰府を現在地に移し、これを防衛するため水城大堤を664年に築造し、その翌年に大野城・基肄城を築く。この時に設計監督に当ったのが亡命百済貴族の憶礼福留・泗沘福夫の二人であった。この水城は大野城市上大利土塁・春日市春日土塁・同市小倉土塁・同市大土居土塁・同市天神山土塁と丘陵と人工土塁を連続して観音山を経て牛頸山に連らなり、さらに基肄城に続く。その先は佐賀県基山駅北隣の関屋土塁を経て永岡に至り延々と大宰府をとり囲む防塁である。

この防禦線内に牛頸盆地が取り込まれているのは西北方面の防禦のためには那珂川及び牛頸川とその間の丘陵地を利用した縦深防禦線の設定が容易であると言う理由ばかりではあるまい。７世紀には依然として須恵器の生産は続けられており、大宰府都城内の人口の増大を予想しての工業生産地の確保が大きな目的であったことと考えられる。

したがって、この地域の人口は農耕生産に従事する人々ばかりでなく工業生産従事者としての窯業それに製鉄関係等のより多い人口の確保は有事の際の兵力として考慮されていたものと

考えられる。

この地域におけるスエ器を生産した工人群の支配的地位にあった氏族が中央部に墓地を設定すると共に、この地域で最も高い山、即ち牛頸山から北東方向に派生する尾根、即ち地脈の末端部が一旦隆起して丘（不動城跡）をなしたその直下で左右からの流水があり、前面には平地を控え流水もその平地で合流するのが至近に望まれ、この平地の左右は丘陵が廻り、合流した流水は丘陵のせまった所から外に流れ出る。この様な場所を明堂として平野神社が営まれている。周囲の丘陵のさらに向うには遠山（若杉・唐山）が望まれて朝山をなし、風水的に完備した場所に社を営なむ事は古墳の立地と相まって、相互に無関係ではあり得ないのである。

この神社の祭神は今来の神であり本来は無名の神であった。今来の神は言うまでもなく韓半島からの渡来神であり、福岡県下では田川郡の香春一の岳の祭神がそれである。共に鉱工業に関係した神と考えられるのであり、平野社の場合はこの様な伝承が元になって平安時代に京都の平野社が勧請されたものと思われる。つまりスエ器生産に従事し、これらを支配した氏族の伝承に遠祖が韓から渡来し、後に転じて九州のこの地に土着した事を強く伝えていたものと思われる。

ちなみに牛頸は昔は牛首と記し、韓国古語で牛首「서울」即ち大村の意味である。また本古墳群出土の玉類中に韓国洛東江流域の５～６世紀の古墳から出土する同種の玉があり、単に彼我の交易結果をもたらされたものとしては年代に多少の隔りがあり、これらは父祖伝来のものと考えた方が良さそうである。

スエ窯と古墳と神社、それも韓国渡来民の伝承が窺われる遺跡群として中通りを注目したいのである。　　（松岡史）

図　　版



中通り遺跡群（上方丘陵）と不動城跡（下方丘陵）航空写真



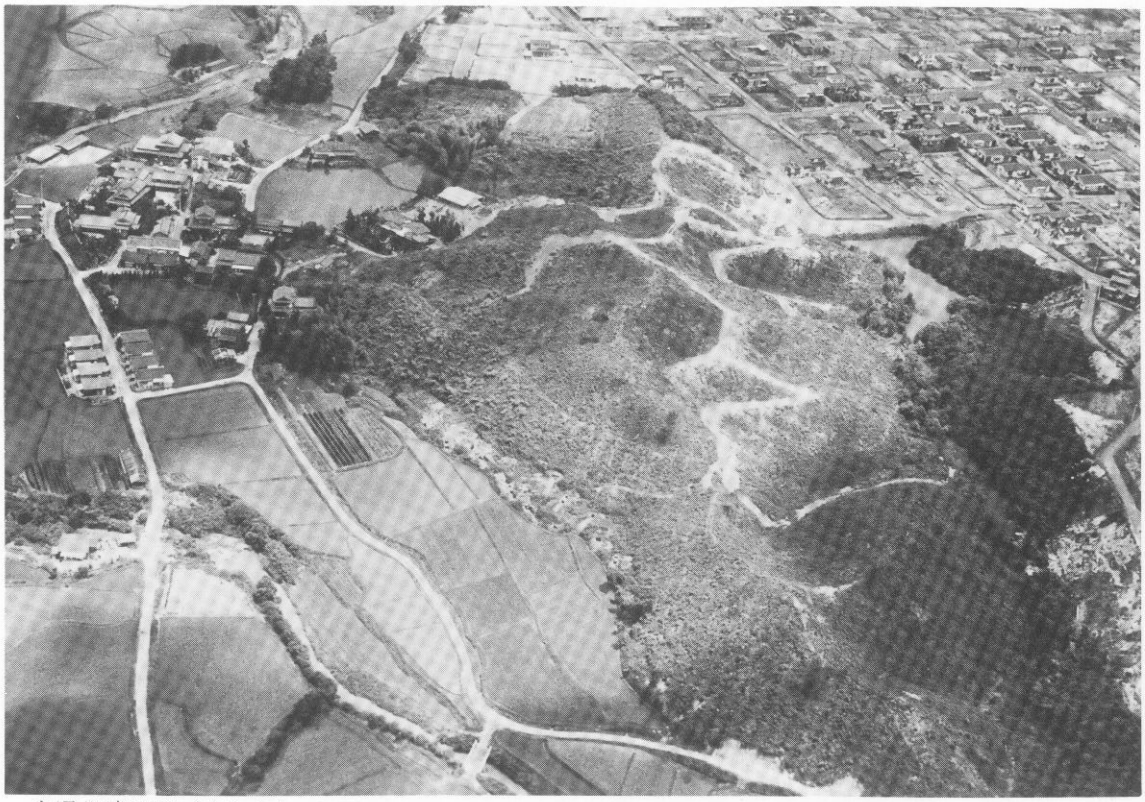
中通り古墳群全景（航空写真）



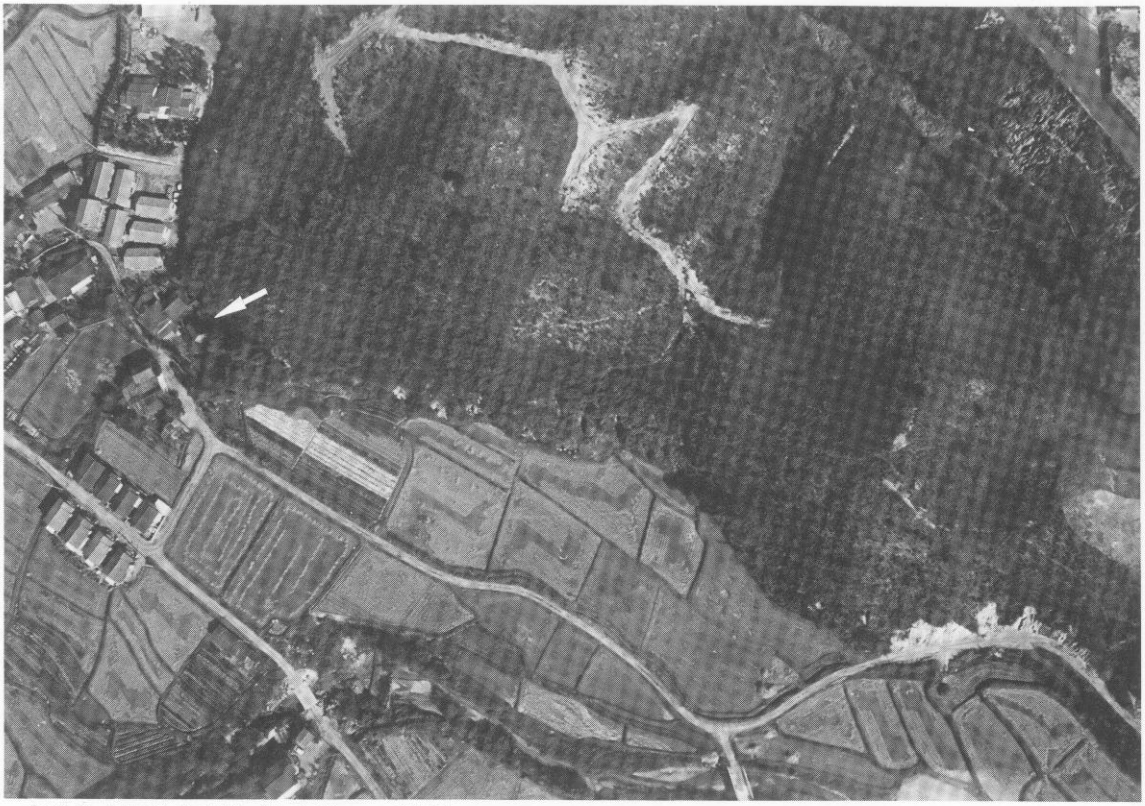
中通り古墳群北支群



中通り古墳群北支群（西から）



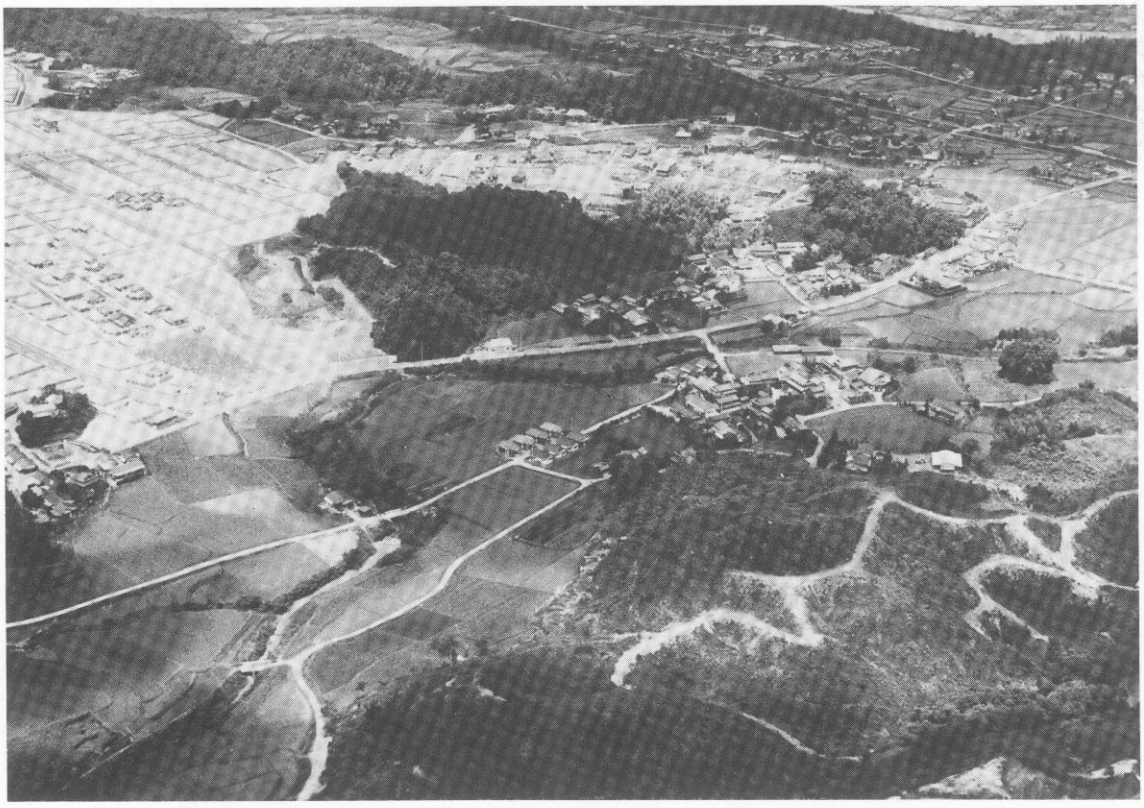
中通り遺跡群（南から）



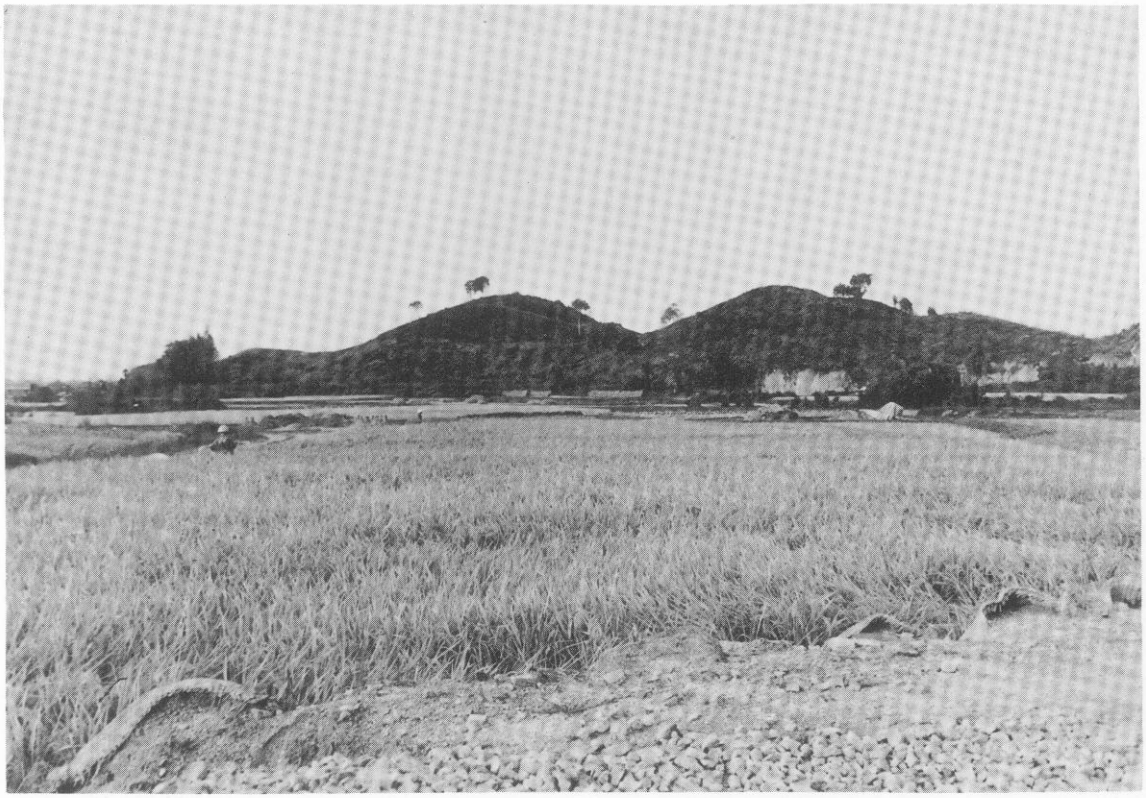
中通り古墳群北支群（矢印はスエ窯跡）



南より見た牛頸中通地域



中通り遺跡群と不動城跡及び平野神社（右上森）



中通り丘陵（南から）



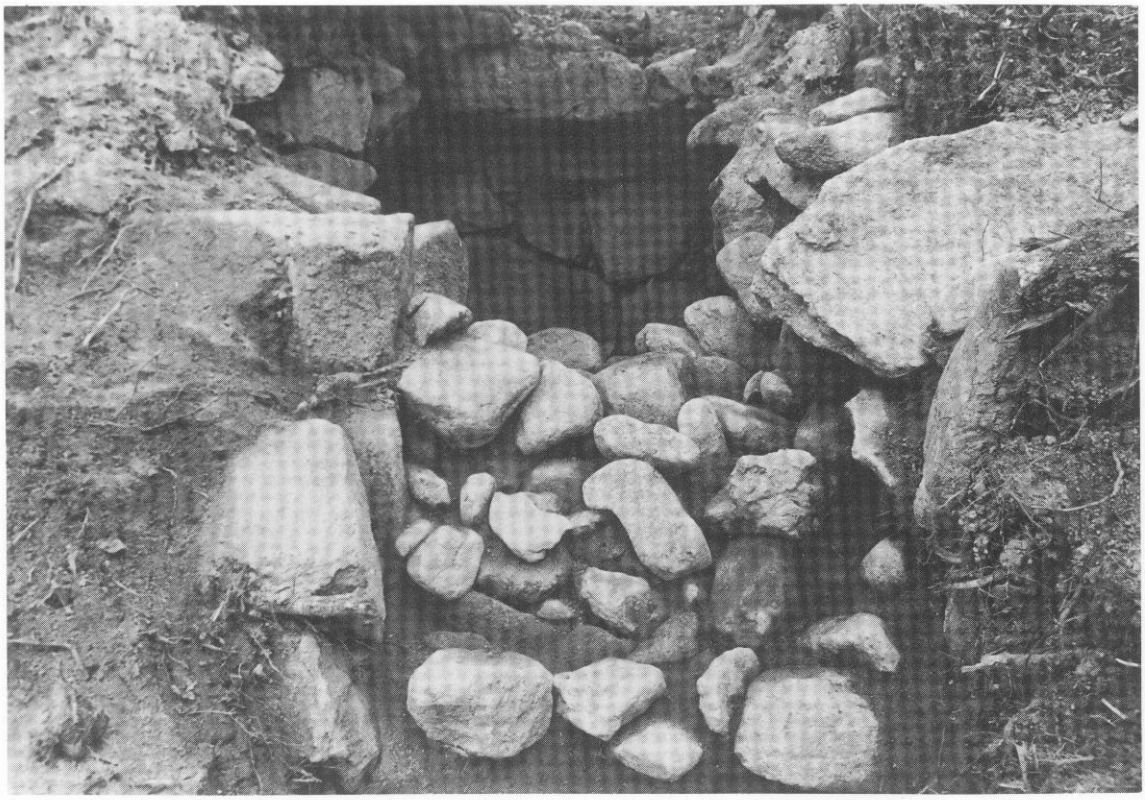
中通り古墳北支群（右１号墳・左２号墳）



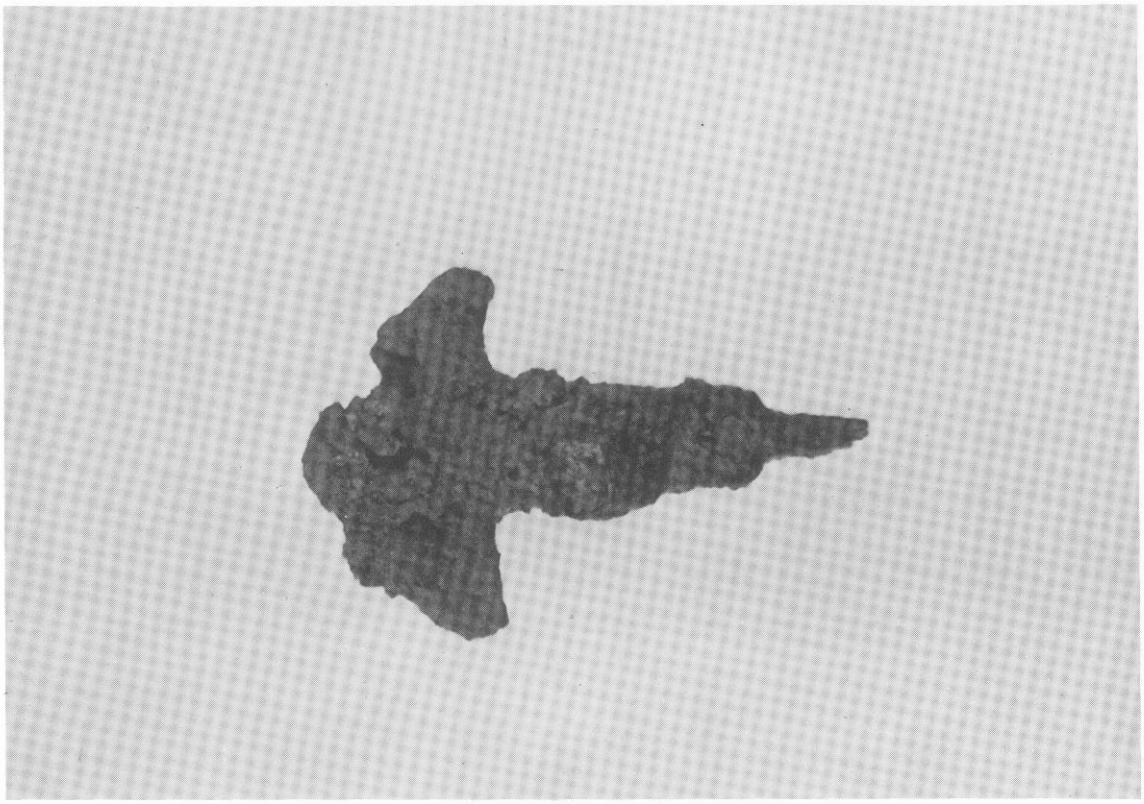
中通り遺跡群Cスエ器窯跡（中央丘）



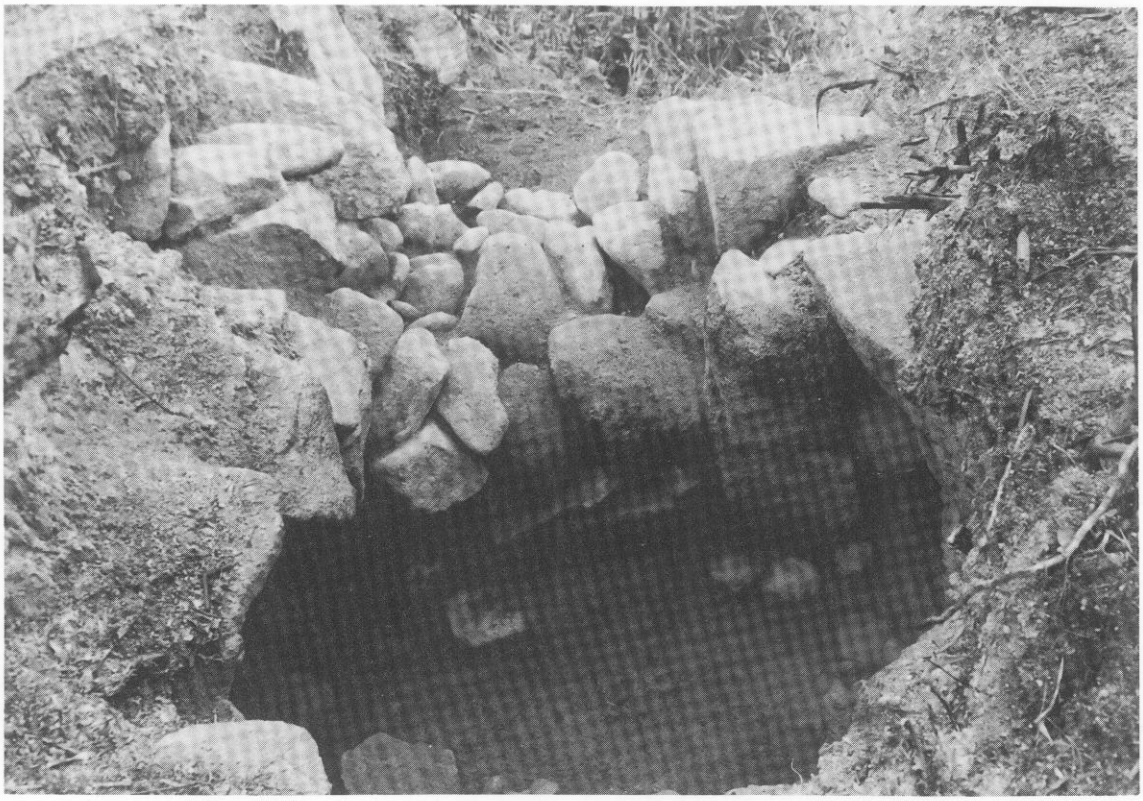
調査前の中通り古墳北支群（古墳の姿は全く判らない）



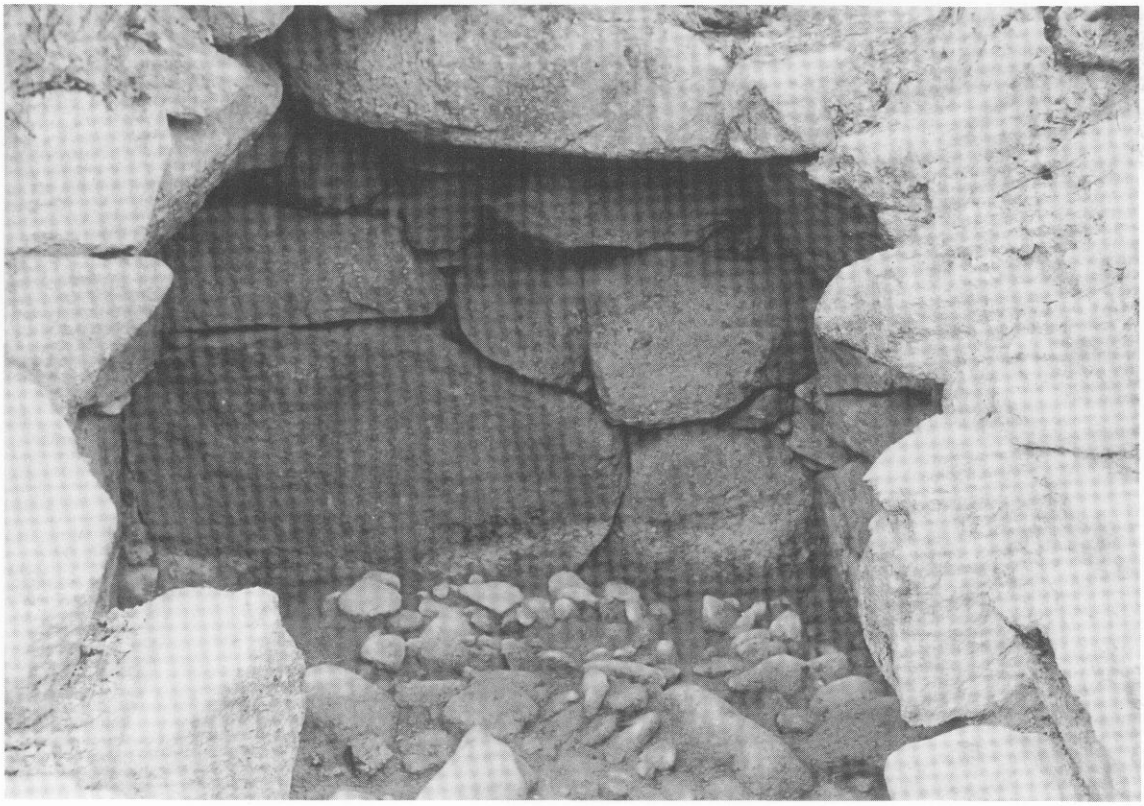
中通り１号墳　羨道閉鎖状況



同上　出土鉄製品（鉄鏃）



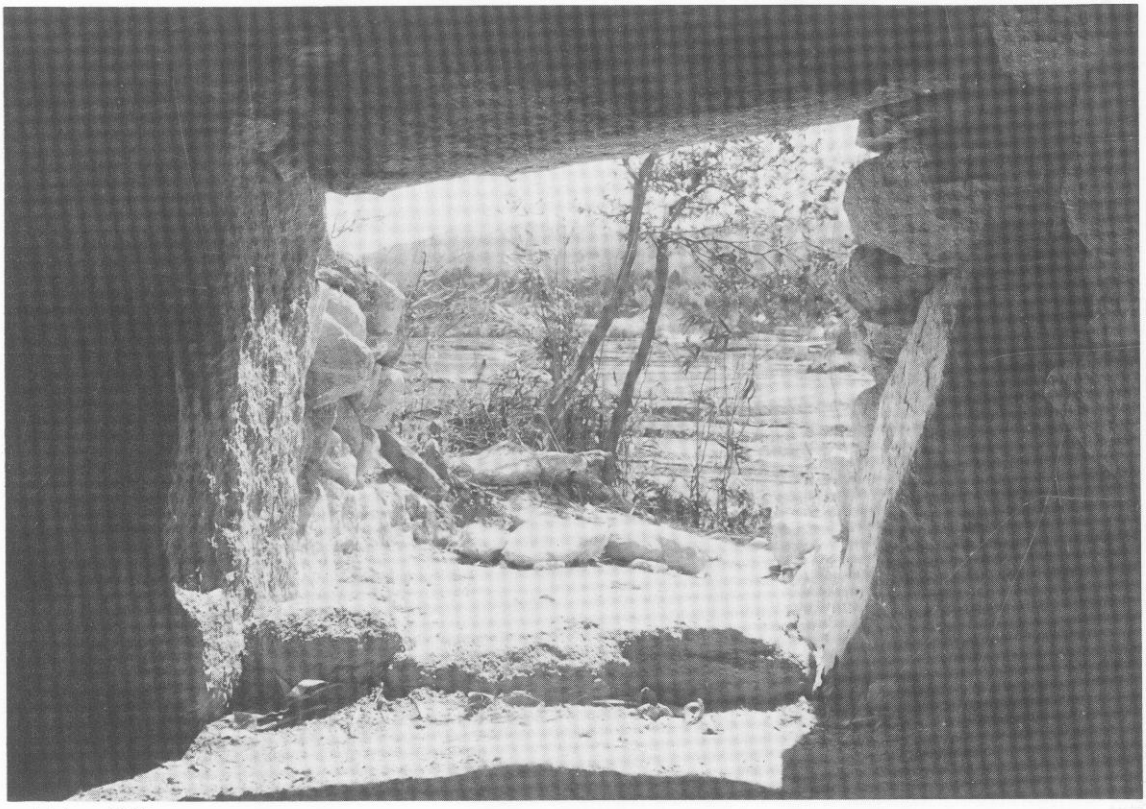
中通り１号墳　玄室と羨道



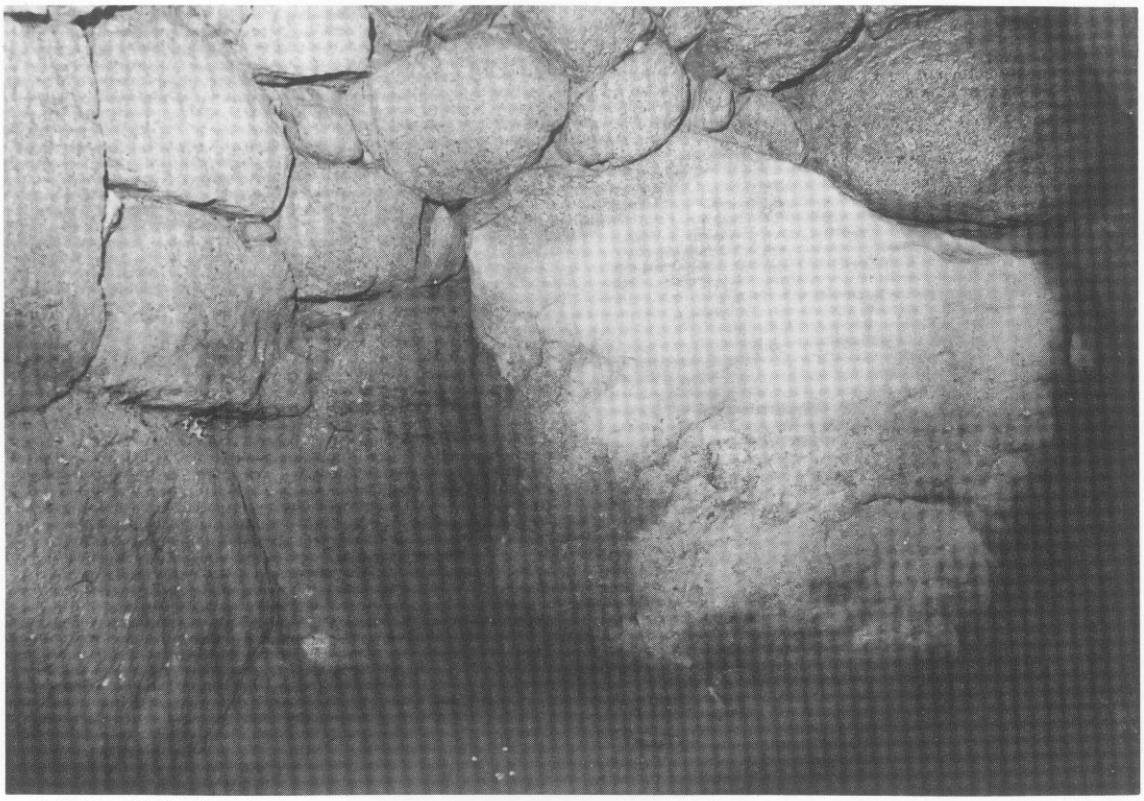
同上　玄室奥壁



中通り 2 号墳 近景



同上　羨道



中通り２号墳　玄室奥壁



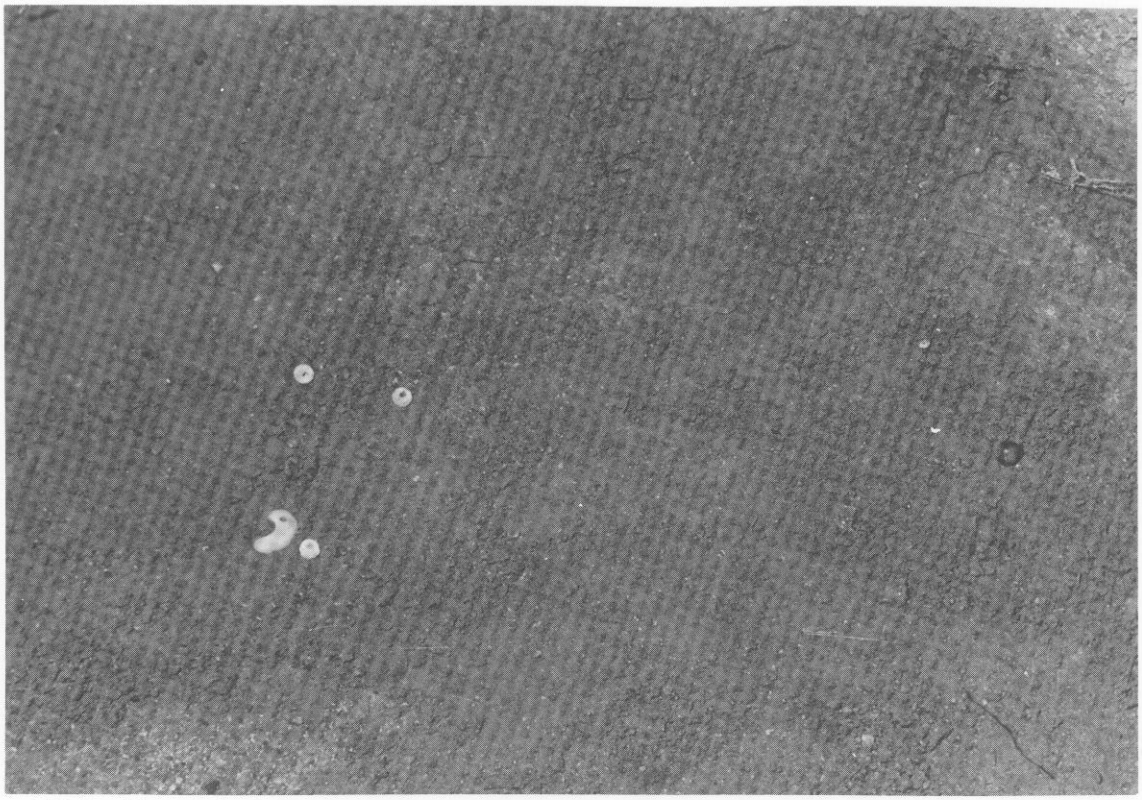
同上　玄門閉鎖状況



中通り 2 号墳　墓道遺物出土状況



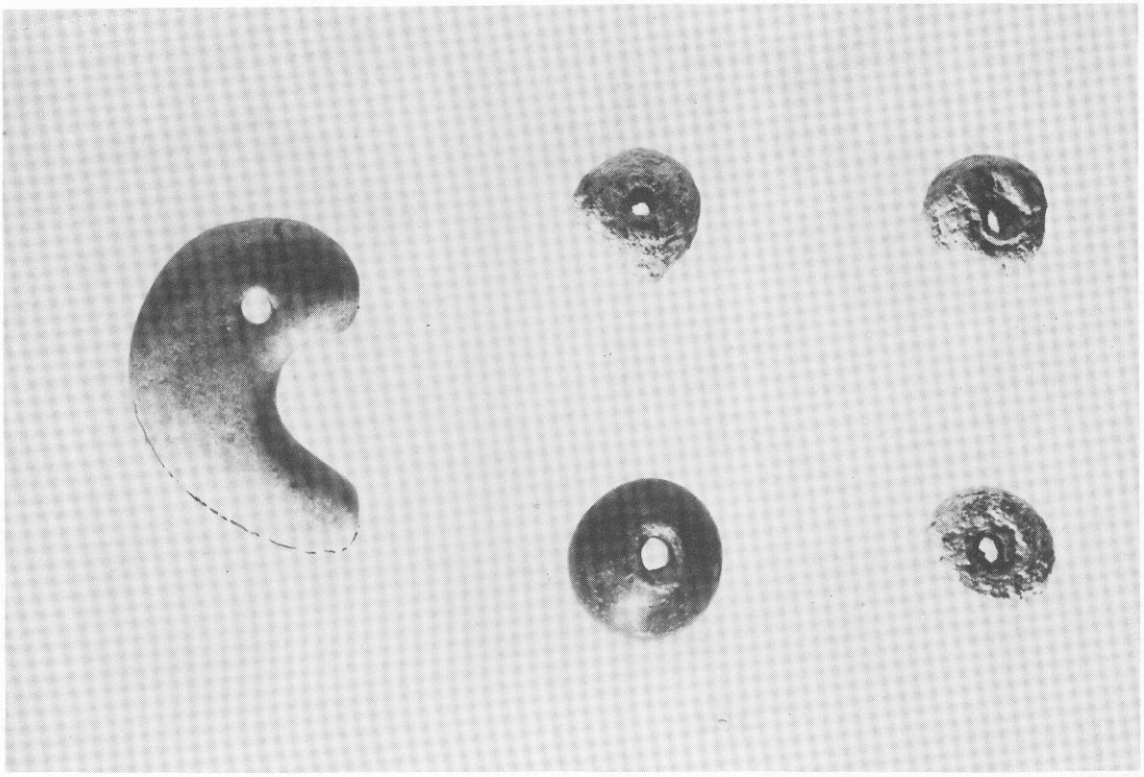
同　上



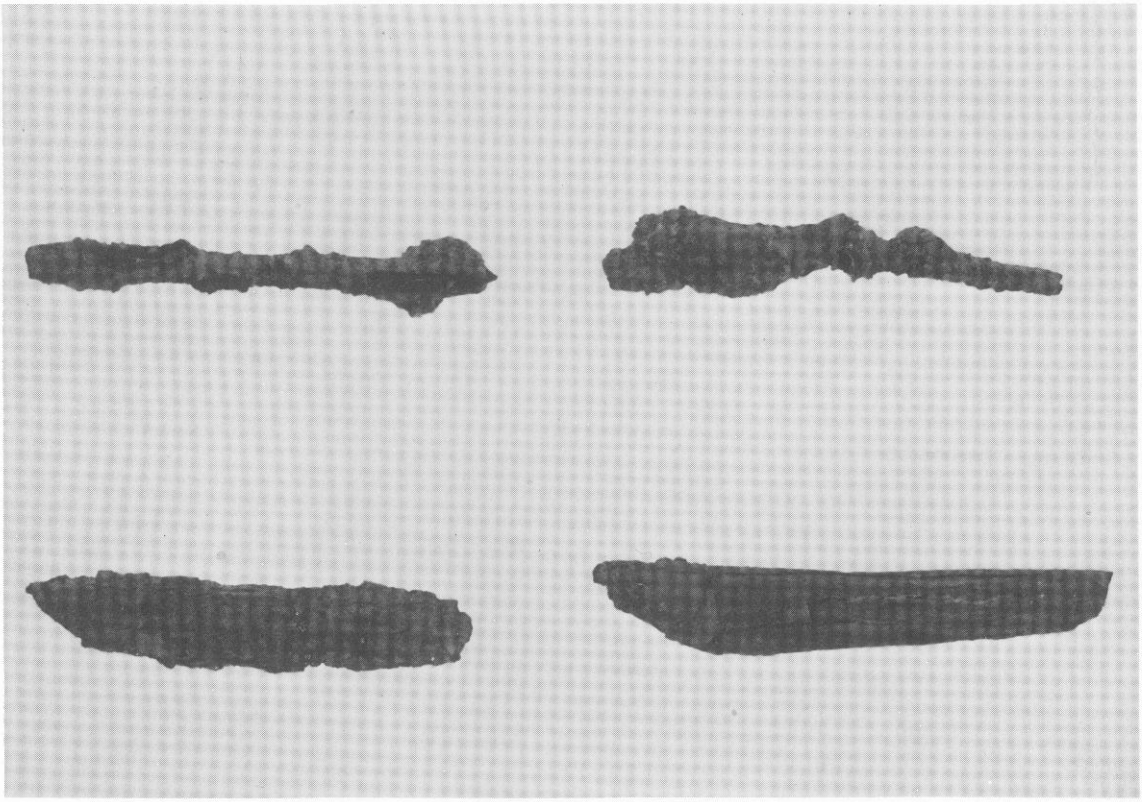
中通り２号墳　玄室床面玉類出土状況



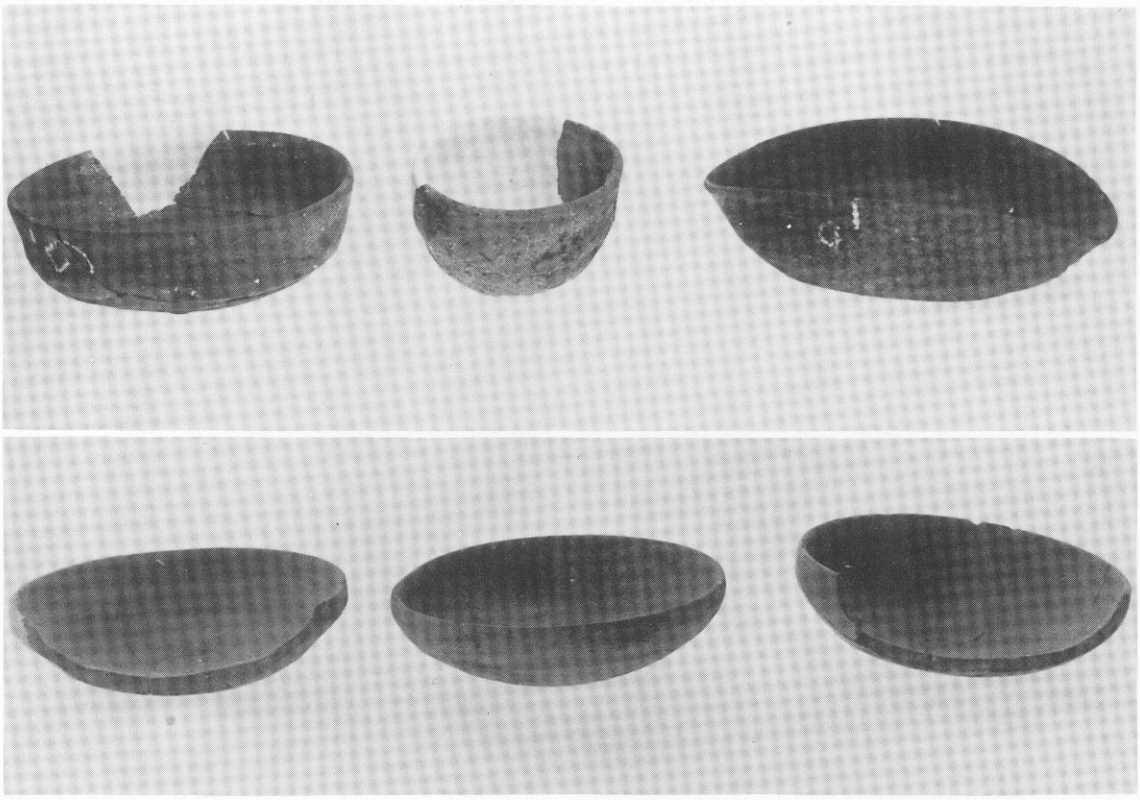
同上　玄門部土器出土状況



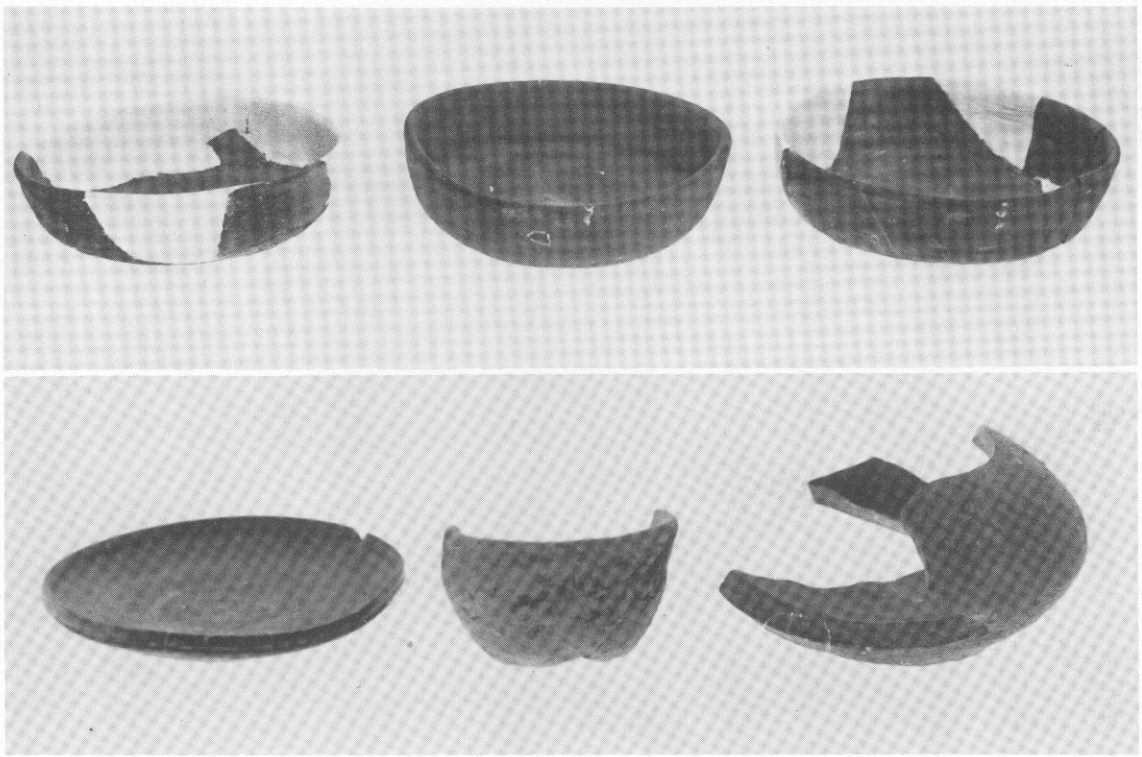
中通り２号墳　出土硬玉製勾玉・ガラス玉



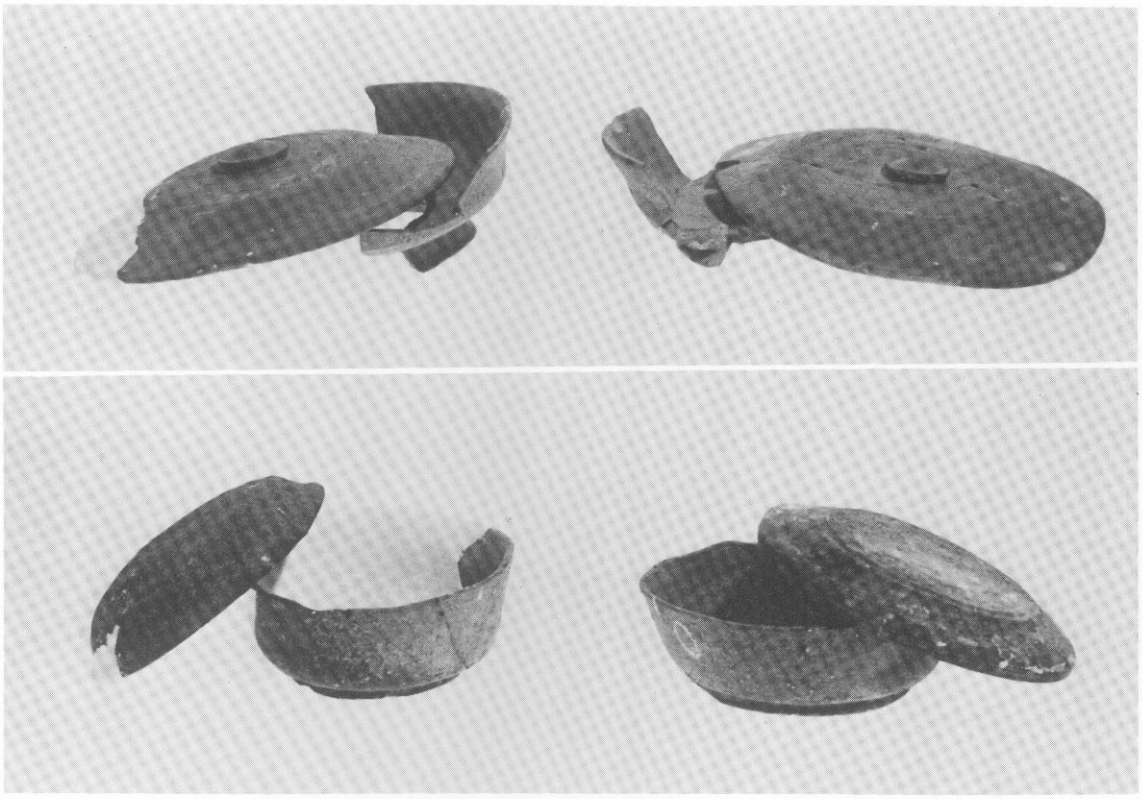
同上　出土鉄製品（鉄鏃・刀子）



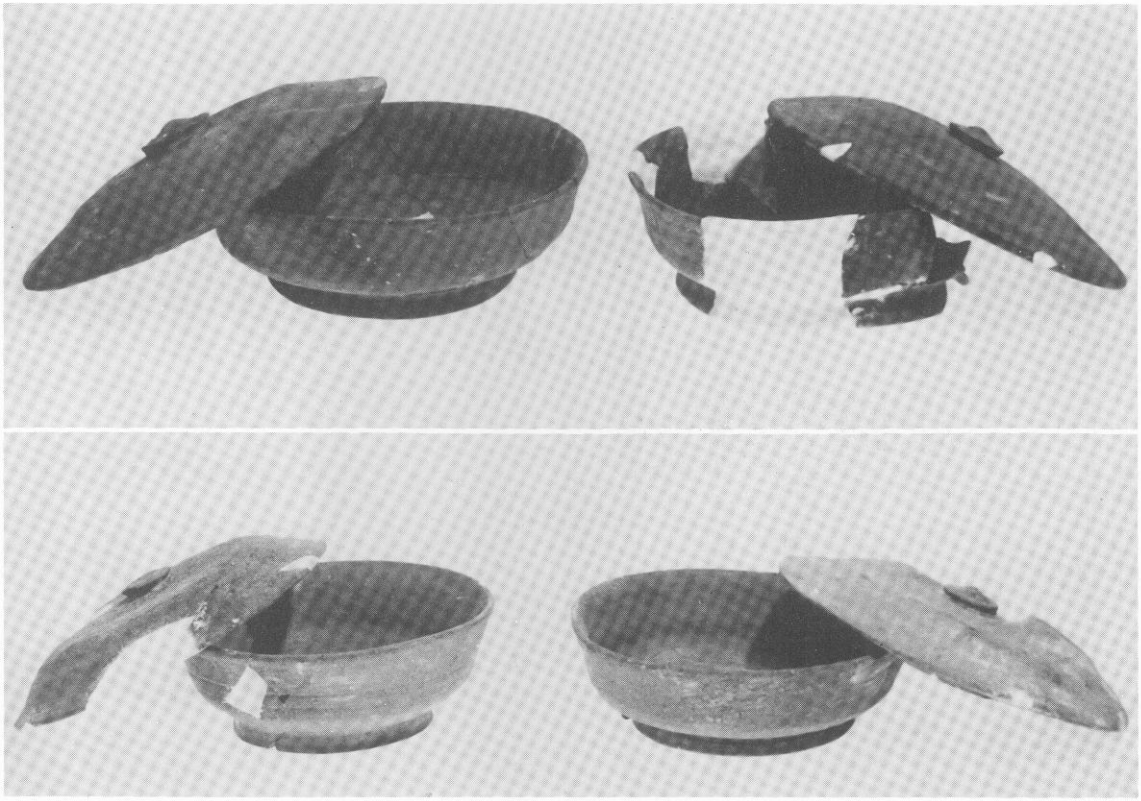
中通り２号墳 出土スエ器



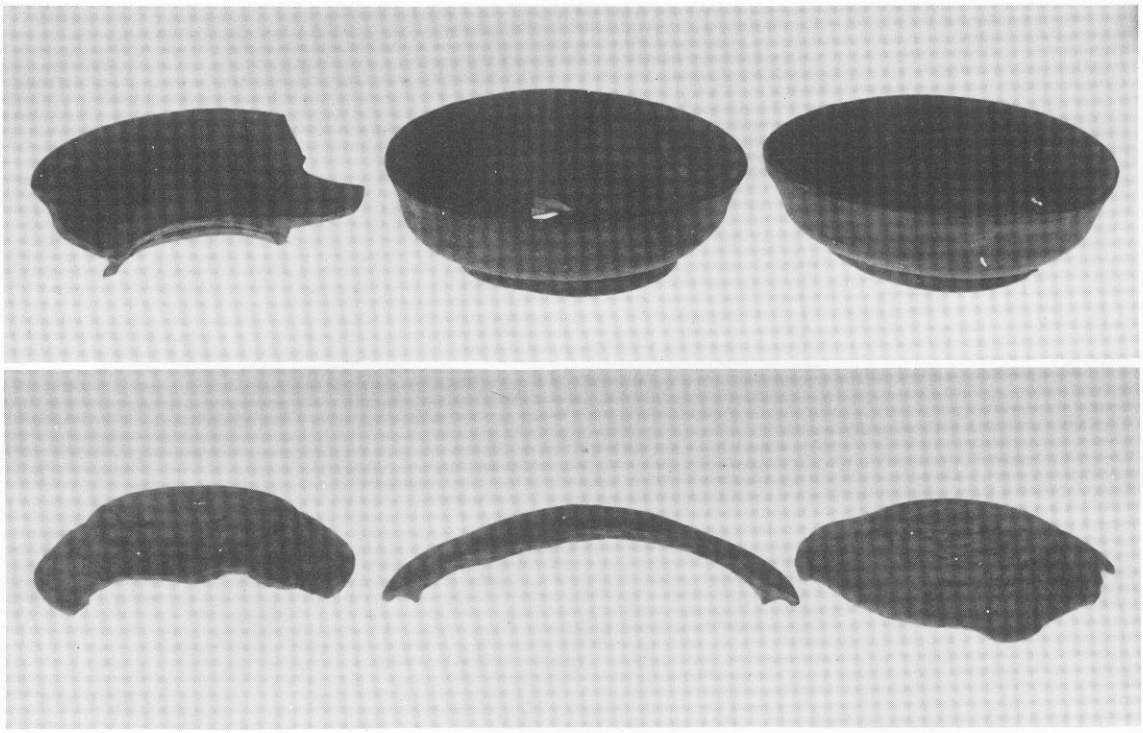
同　上



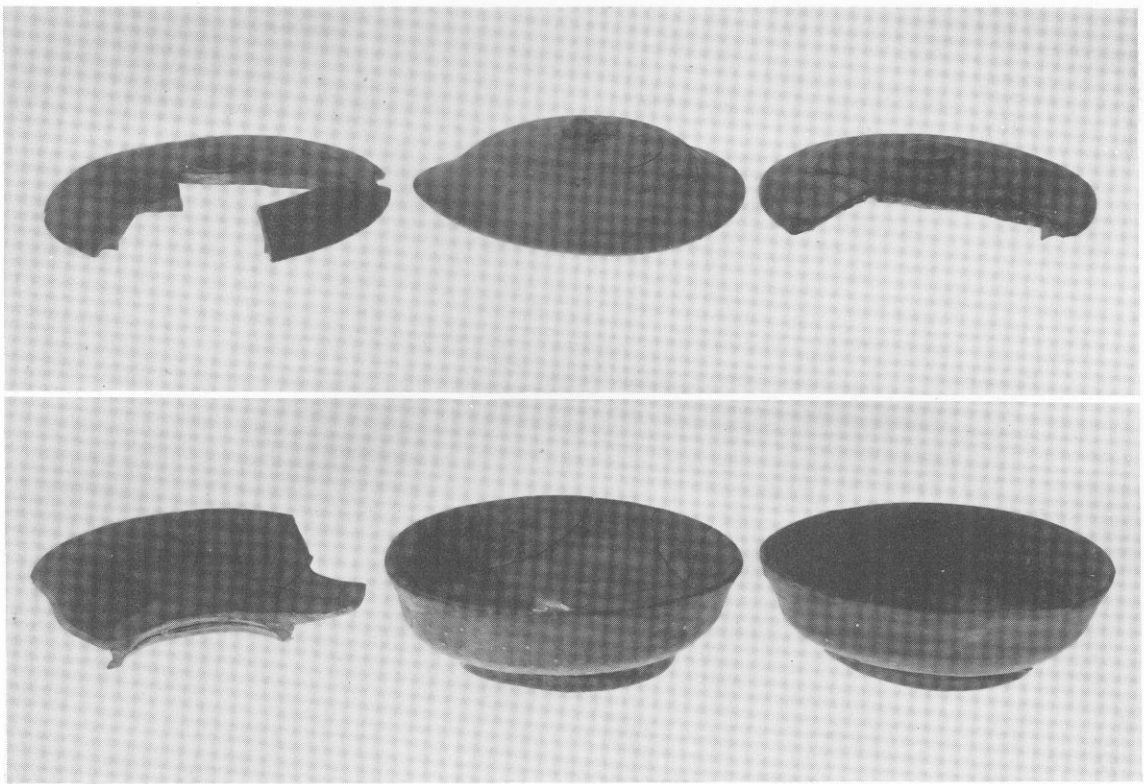
中通り2号墳 出土スエ器



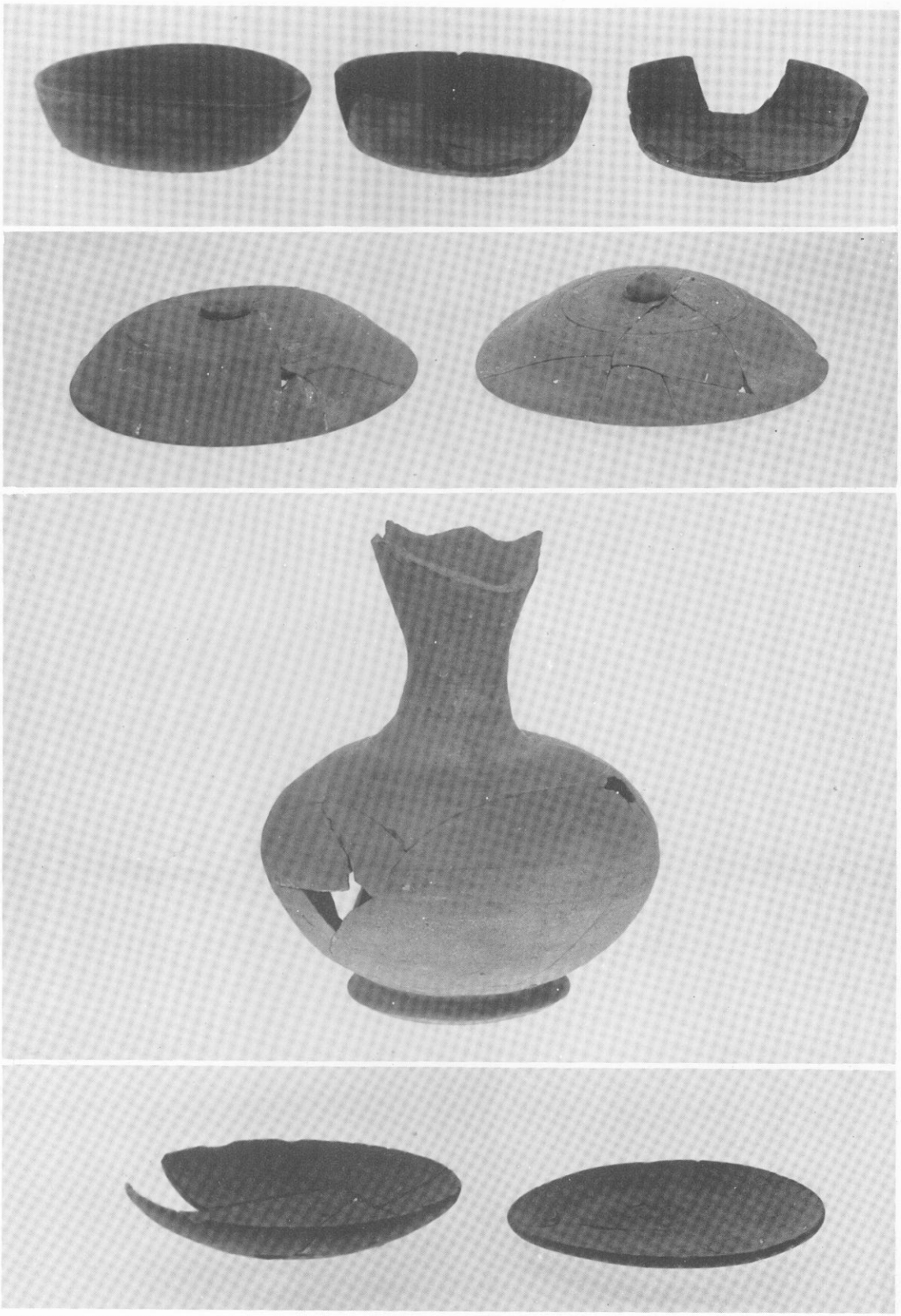
同 上



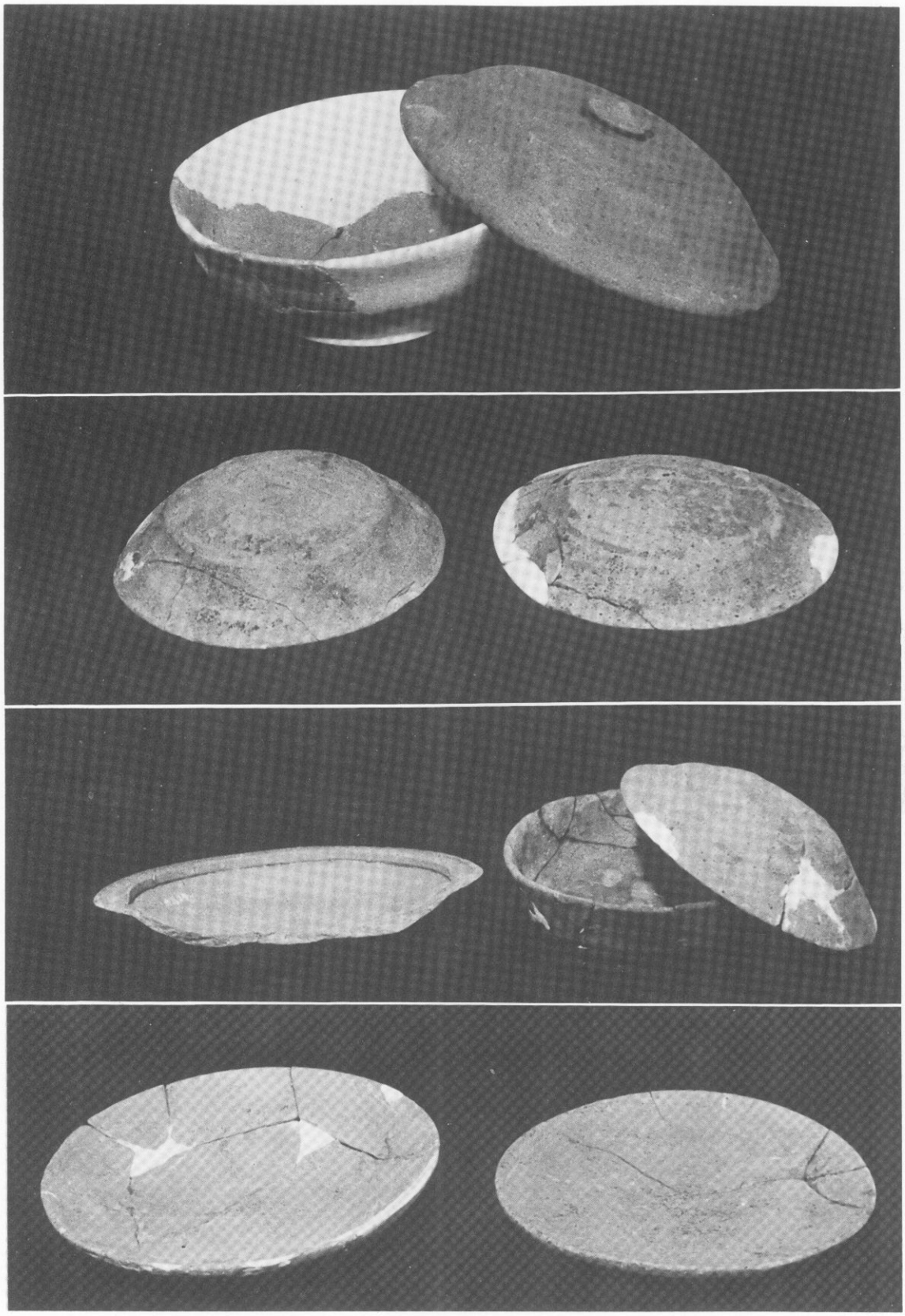
中通り２号墳　出土スエ器



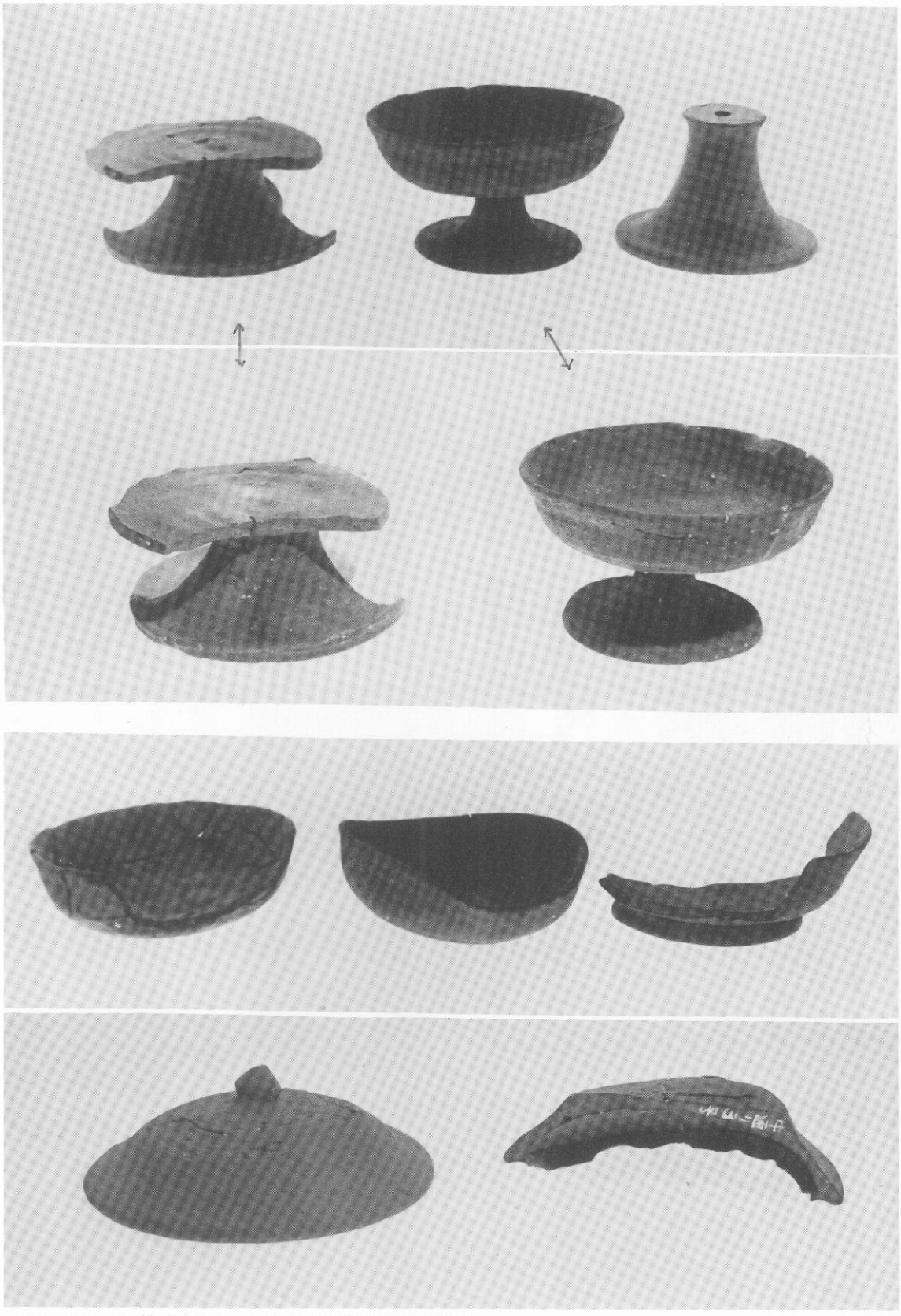
同　上



中通り2号墳 出土スエ器・ハジ器（最下段がハジ器）



中通り２号墳 出土スエ器・ハジ器（最下段がハジ器）



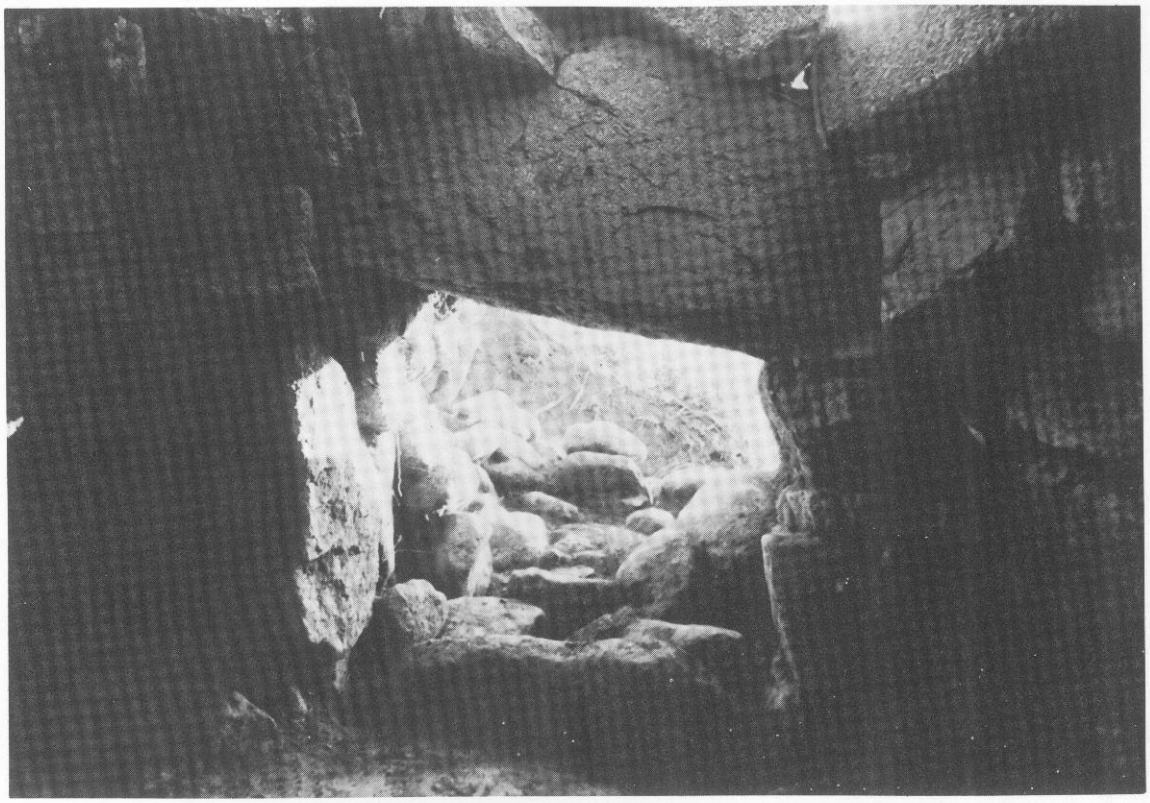
中通り２・３号墳　出土スエ器（最下段が３号墳出土）



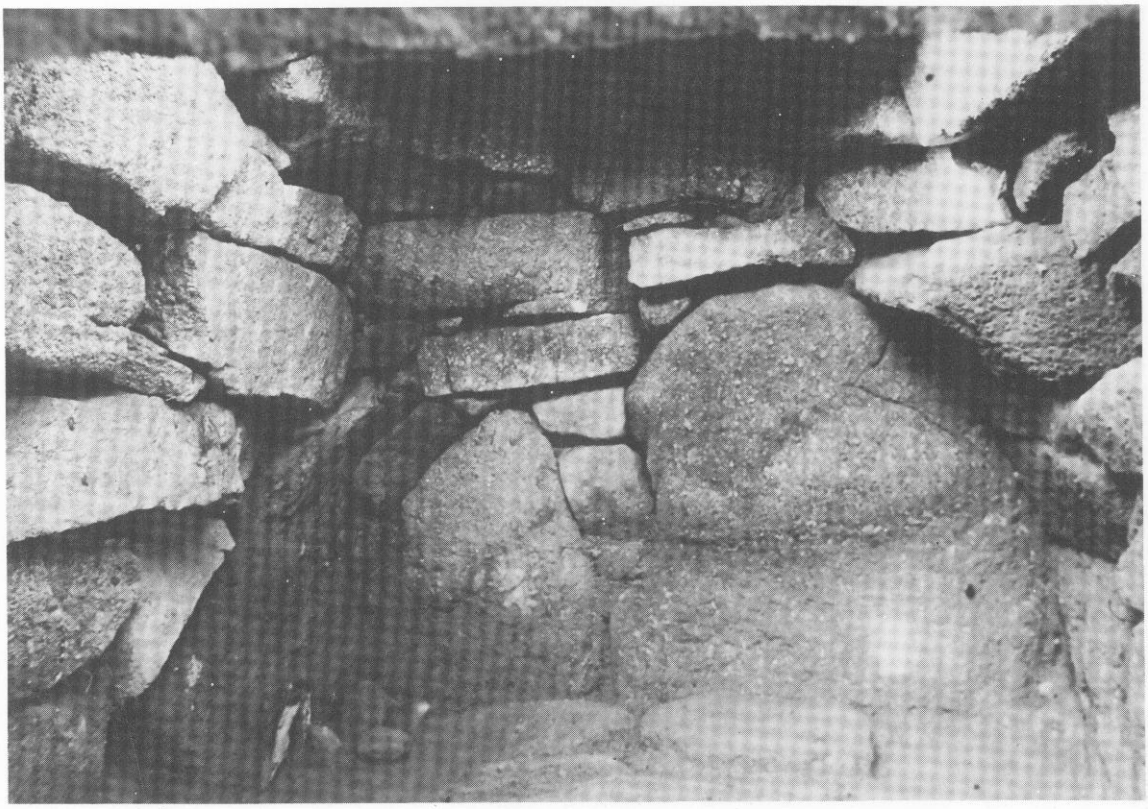
中通り 3 号墳 近景



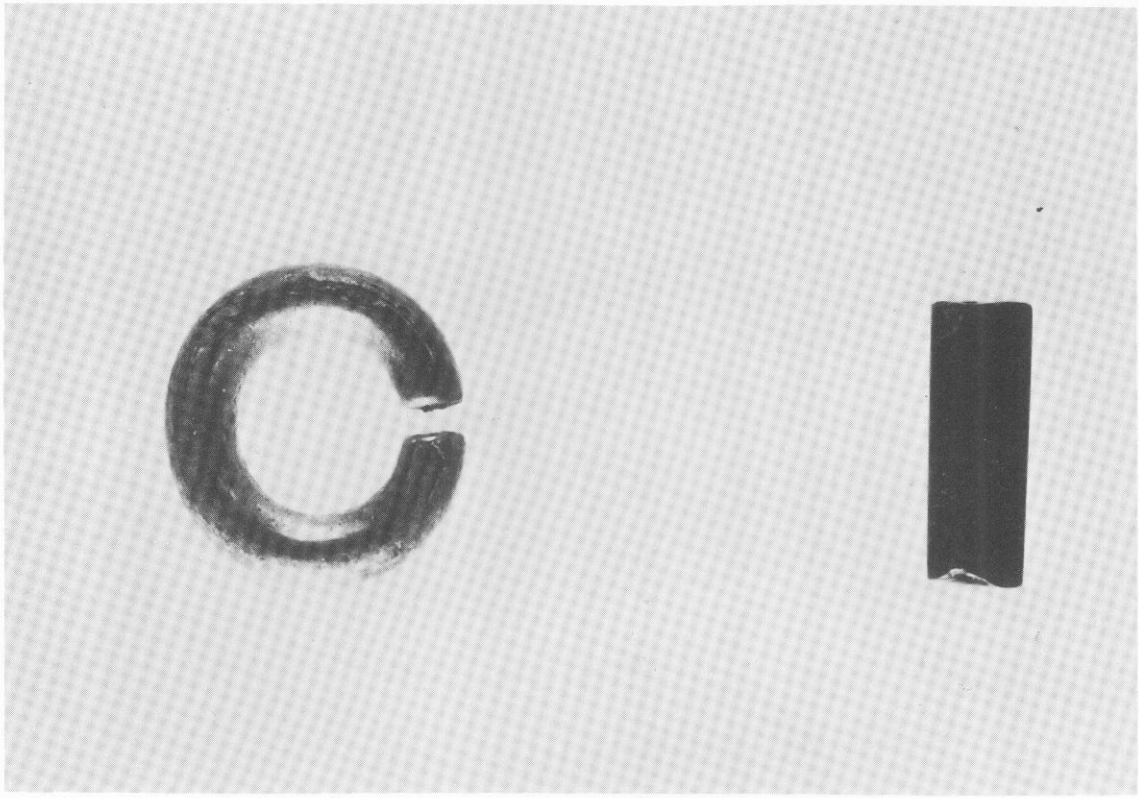
同上　玄室東壁



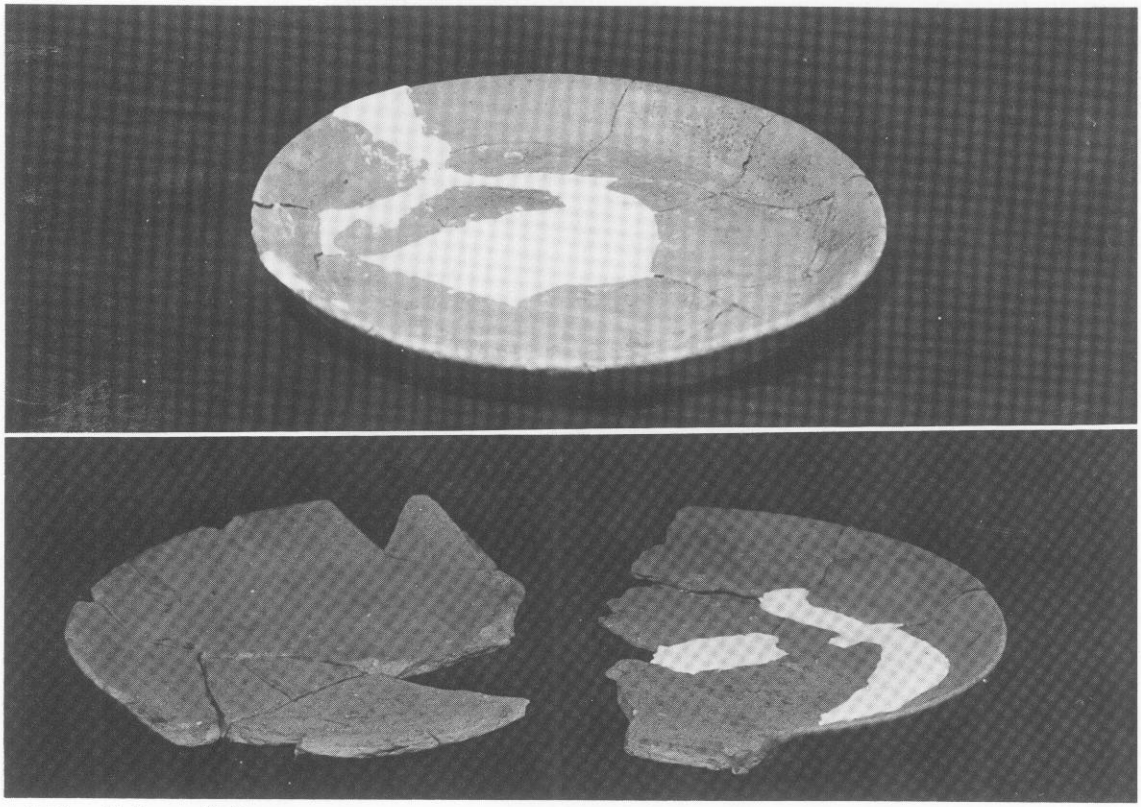
中通り3号墳 羨道閉鎖状況



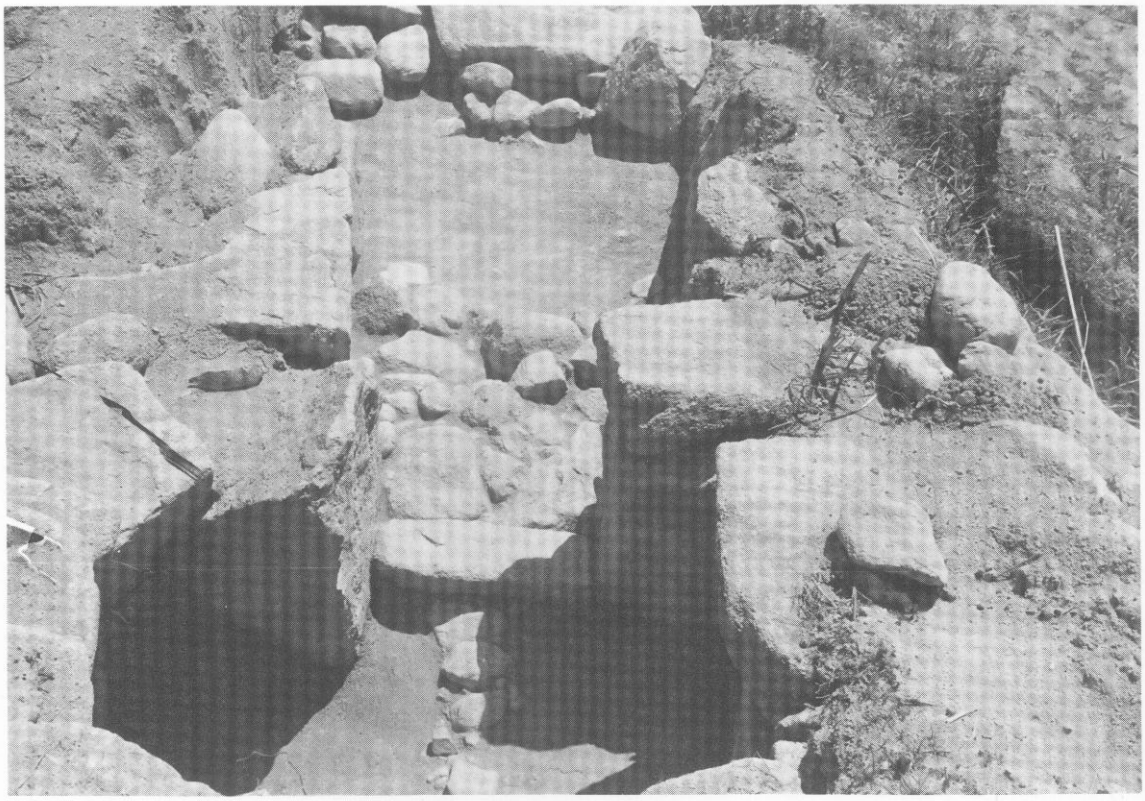
同上 玄室奥壁



中通り 3 号墳　出土耳環・碧玉製管玉



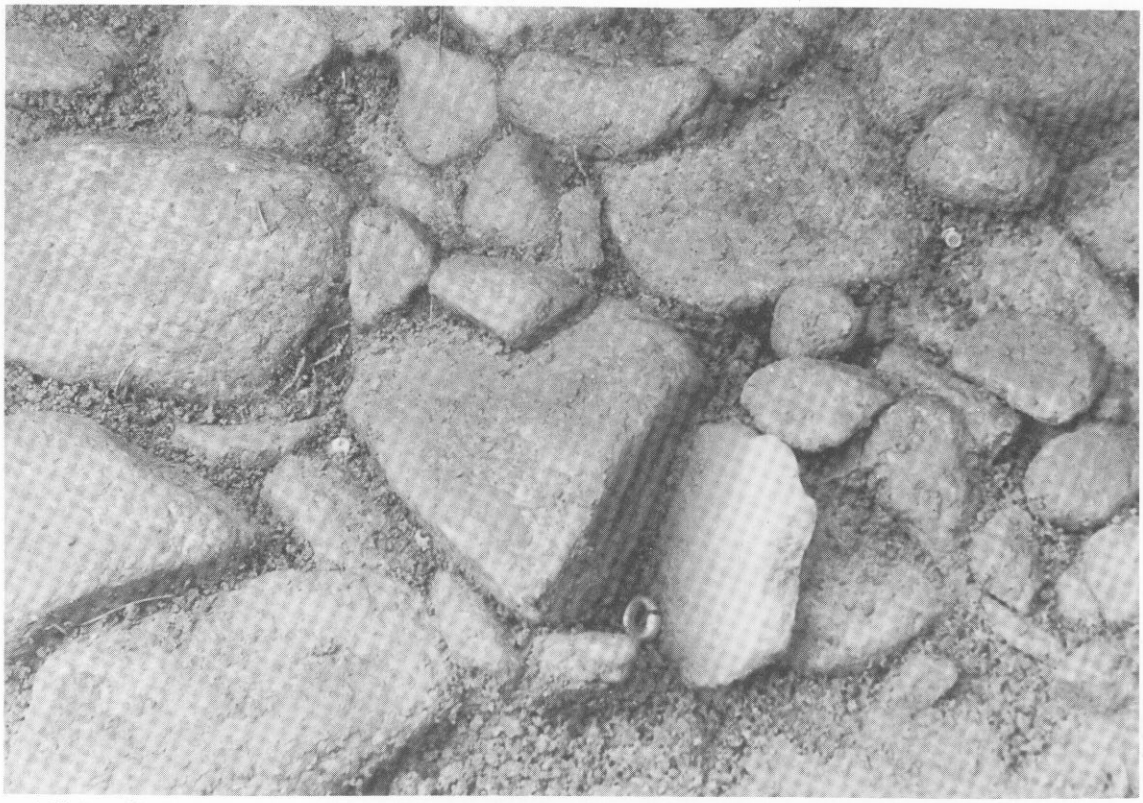
同上　出土ハジ器盤



中通り4号墳　全景（上から）



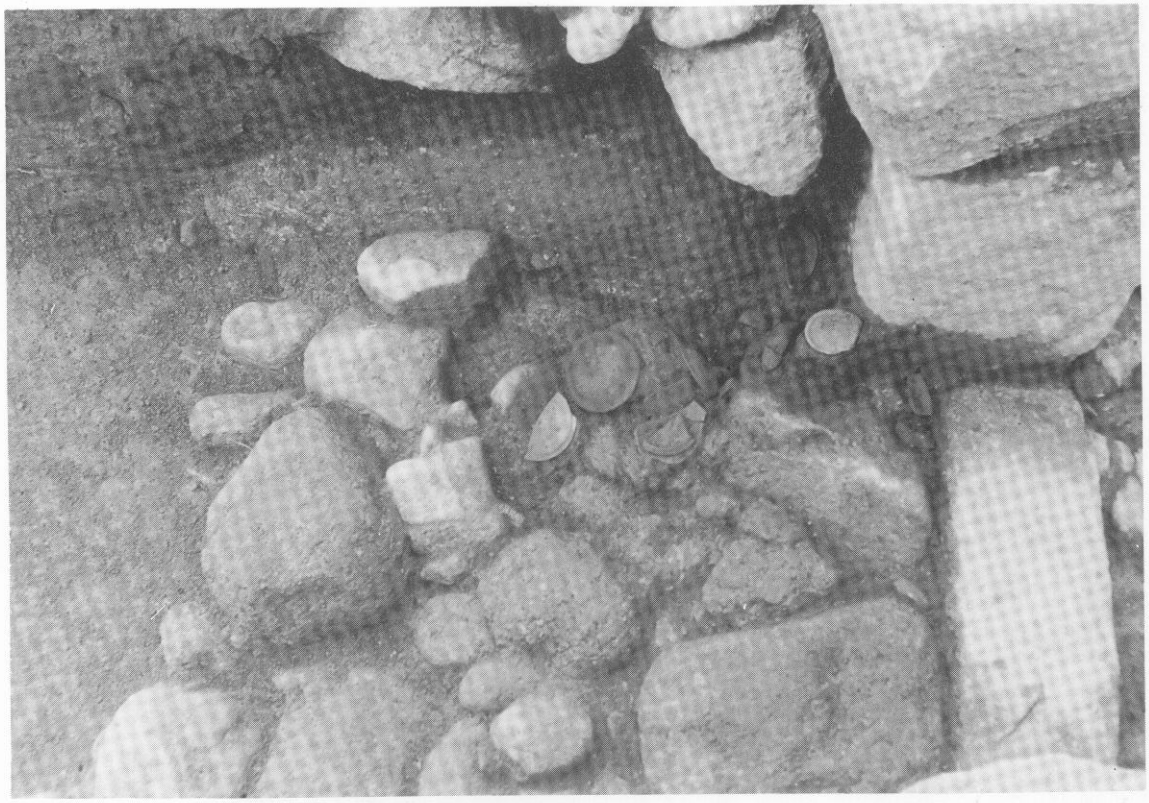
同　上　（羨道部から）



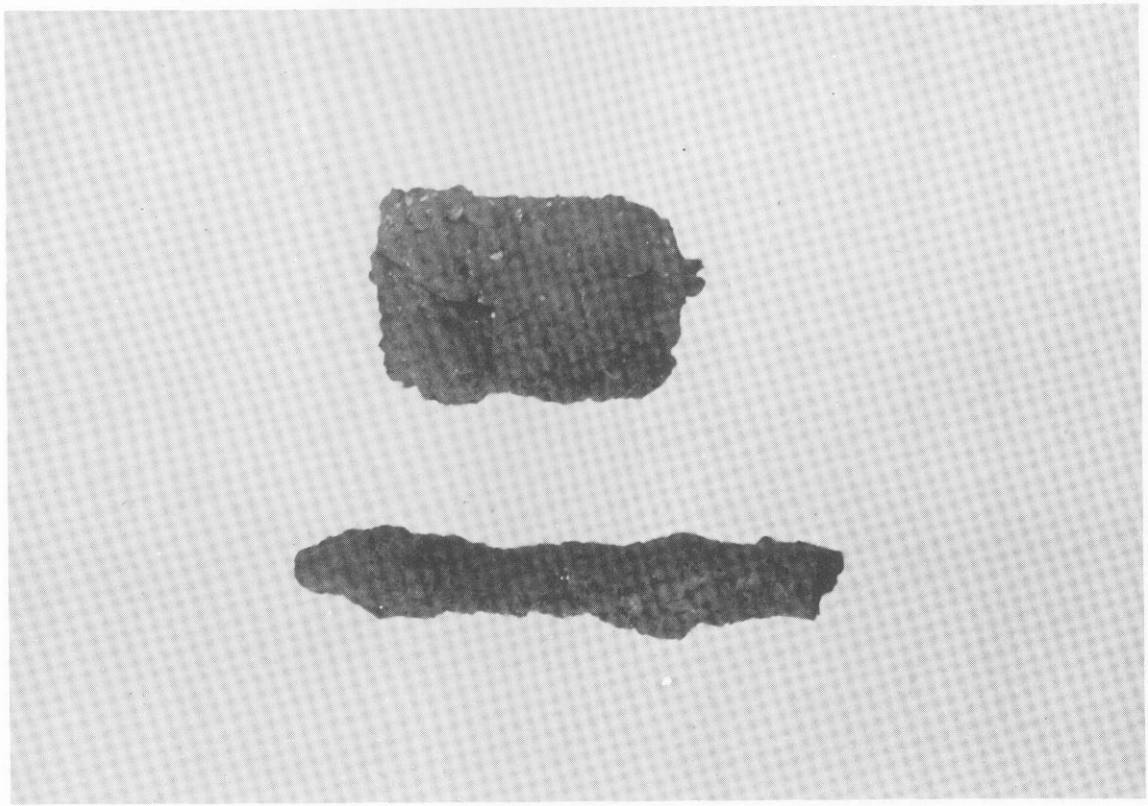
中通り 4 号墳　出土耳環・玉出土状況



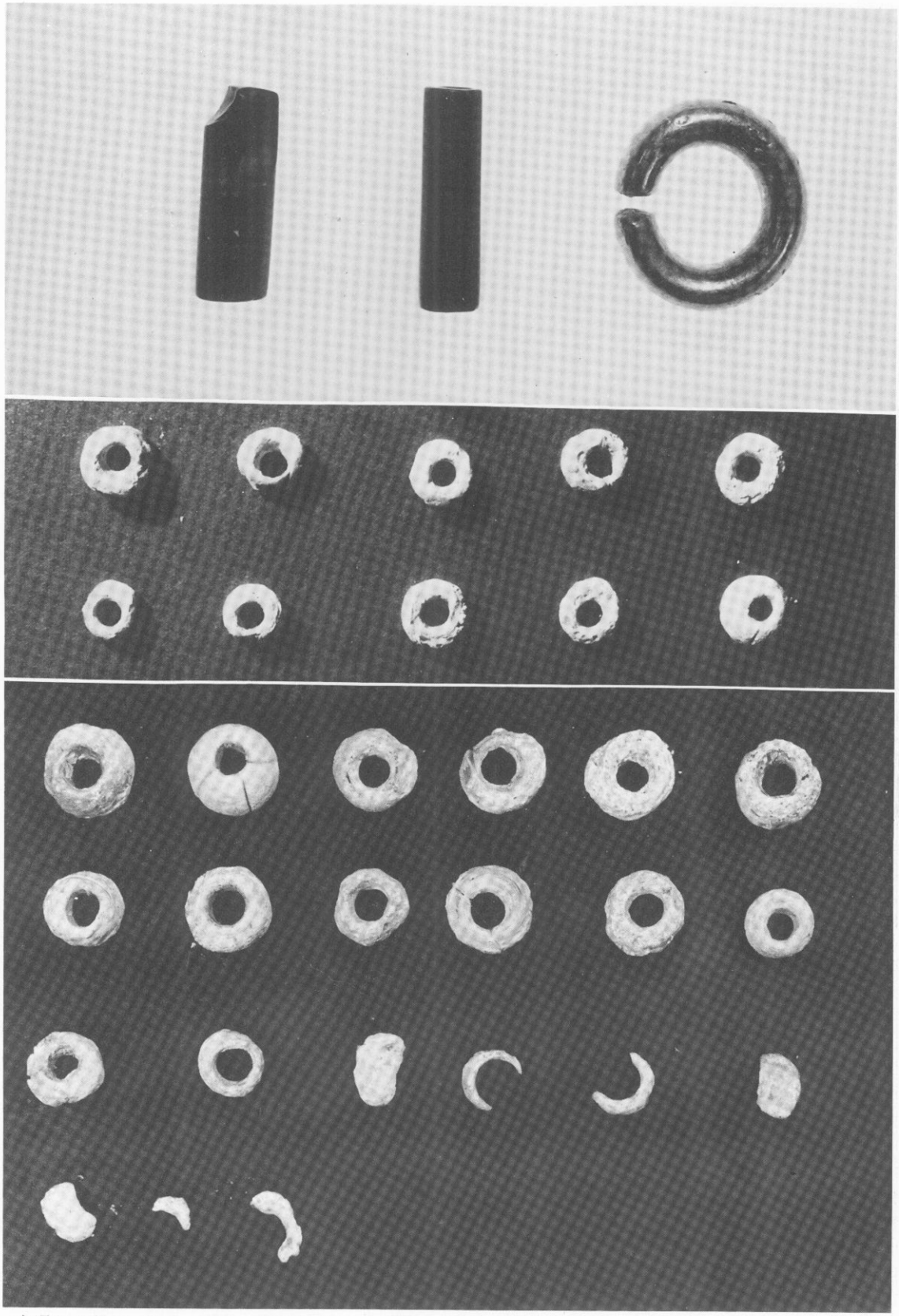
同上　羨道部



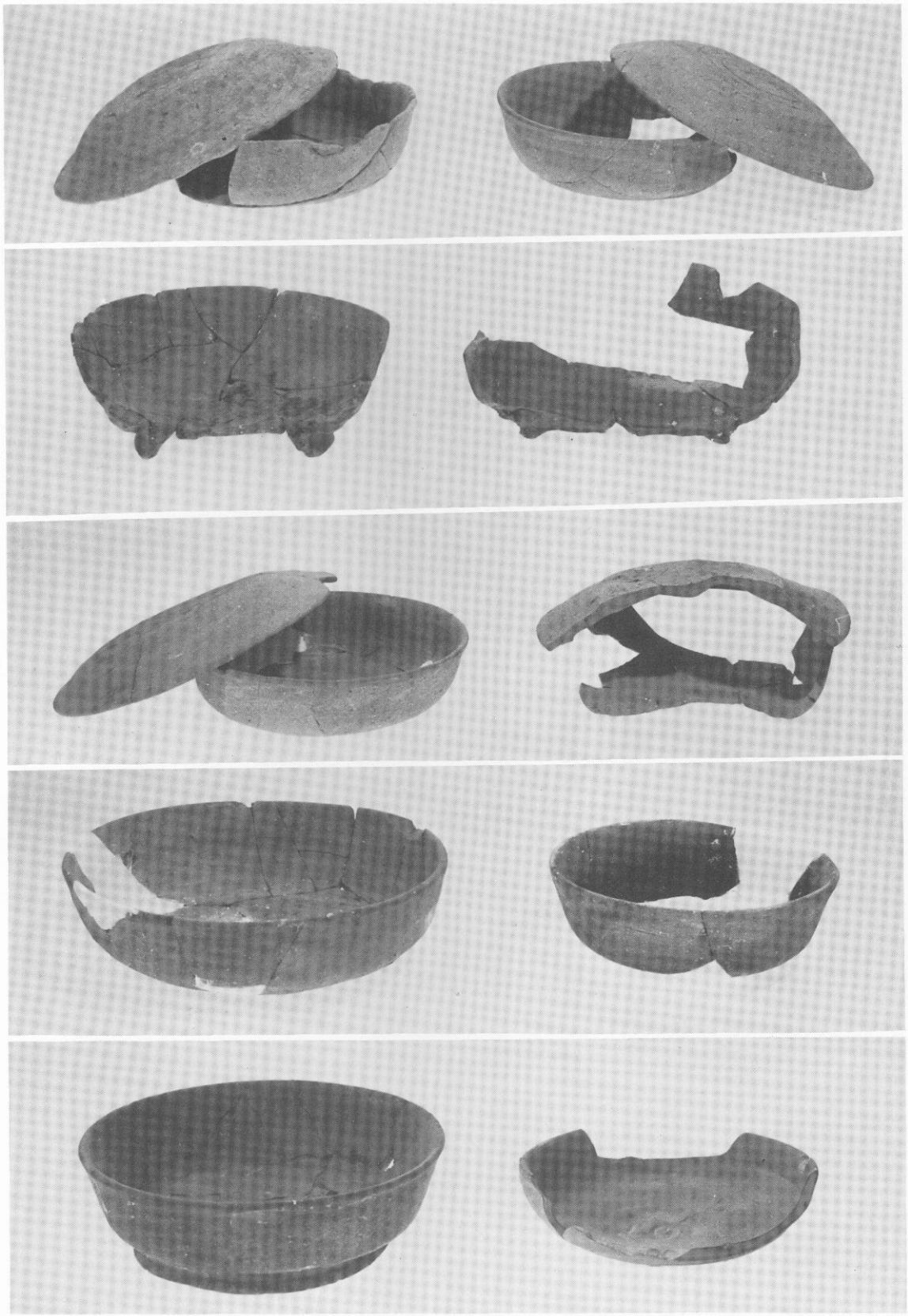
中通り4号墳　羨道部土器出土状況



同上　出土鉄製品



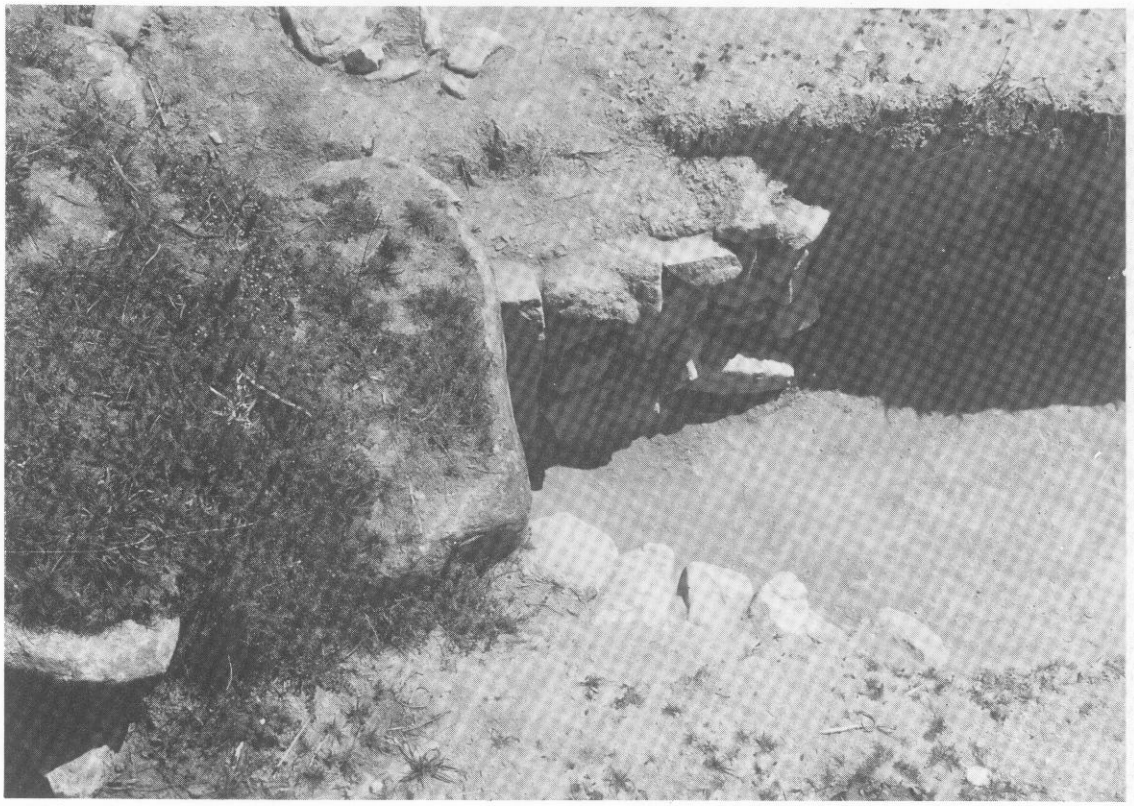
中通り4号墳　出土・耳環・碧玉製管玉・ガラス玉



中通り4号墳 出土スエ器



中通り 5 号墳 近景



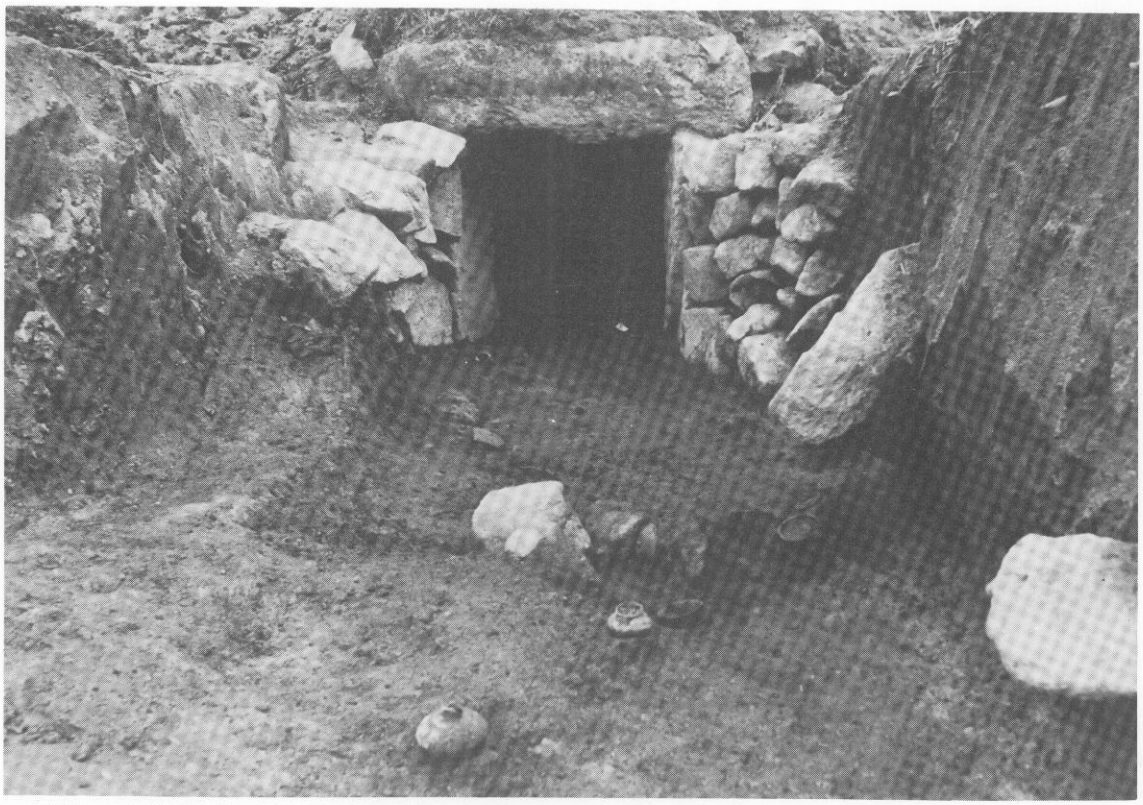
同上　羨道



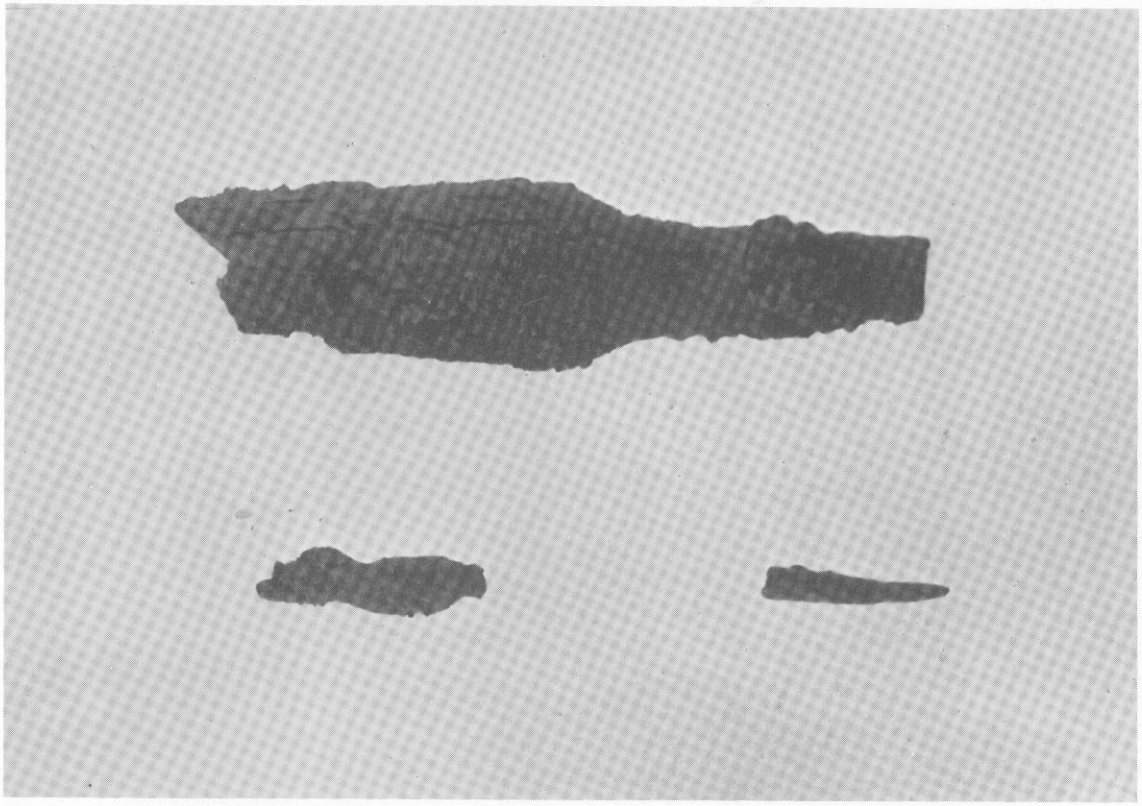
中通り５号墳と前方牛頸山



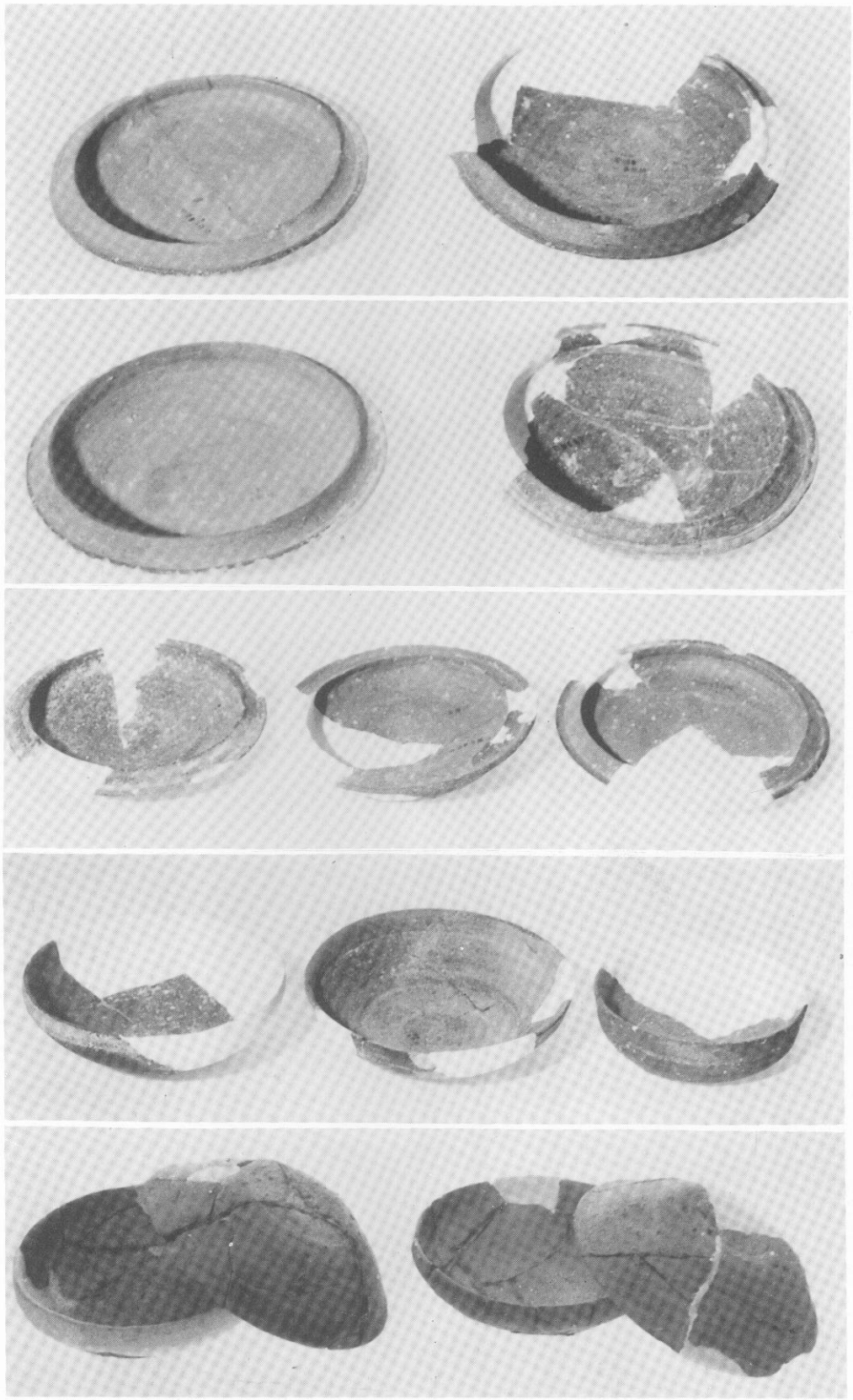
同上　玄室奥壁



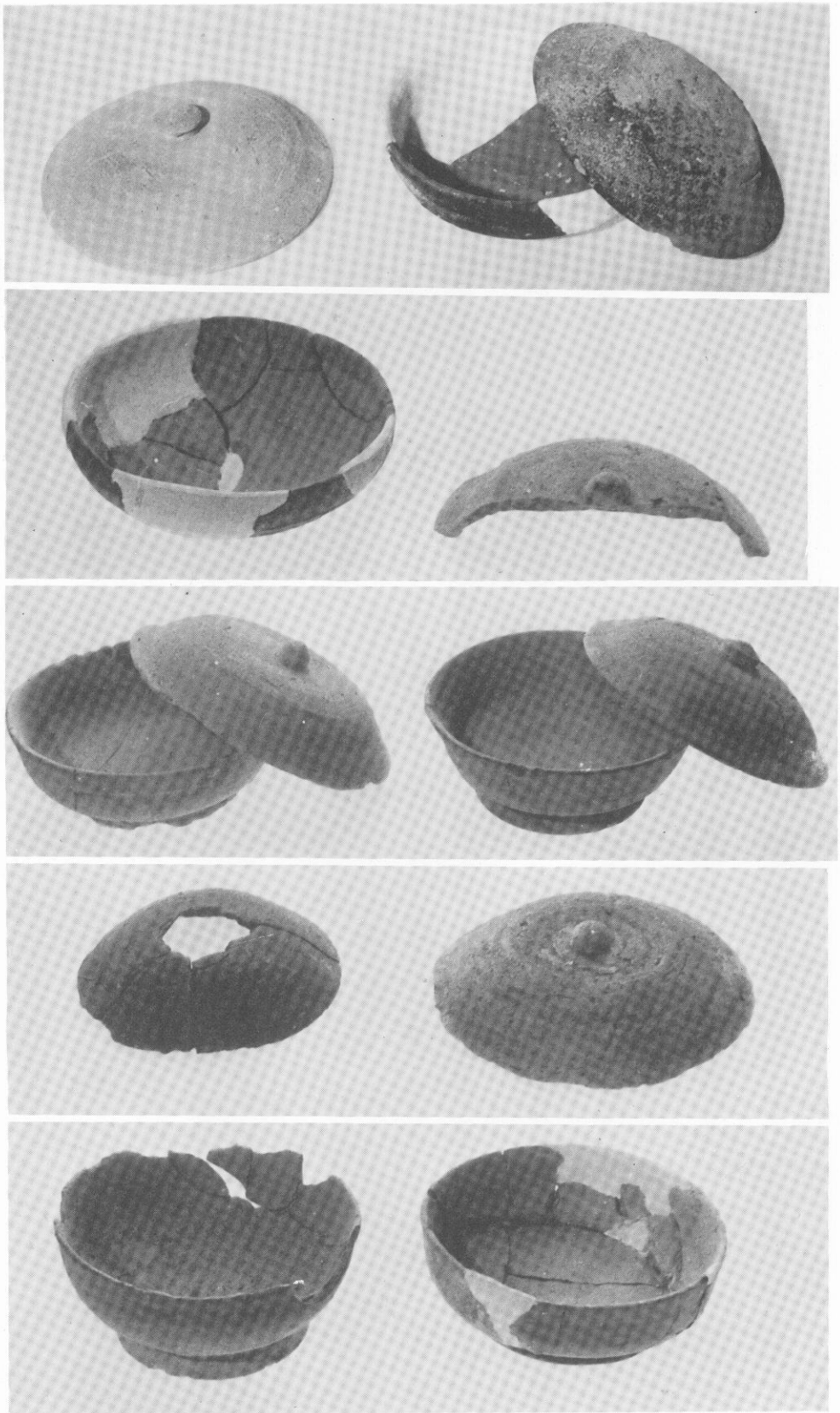
中通り5号墳　墓道土器出土状況



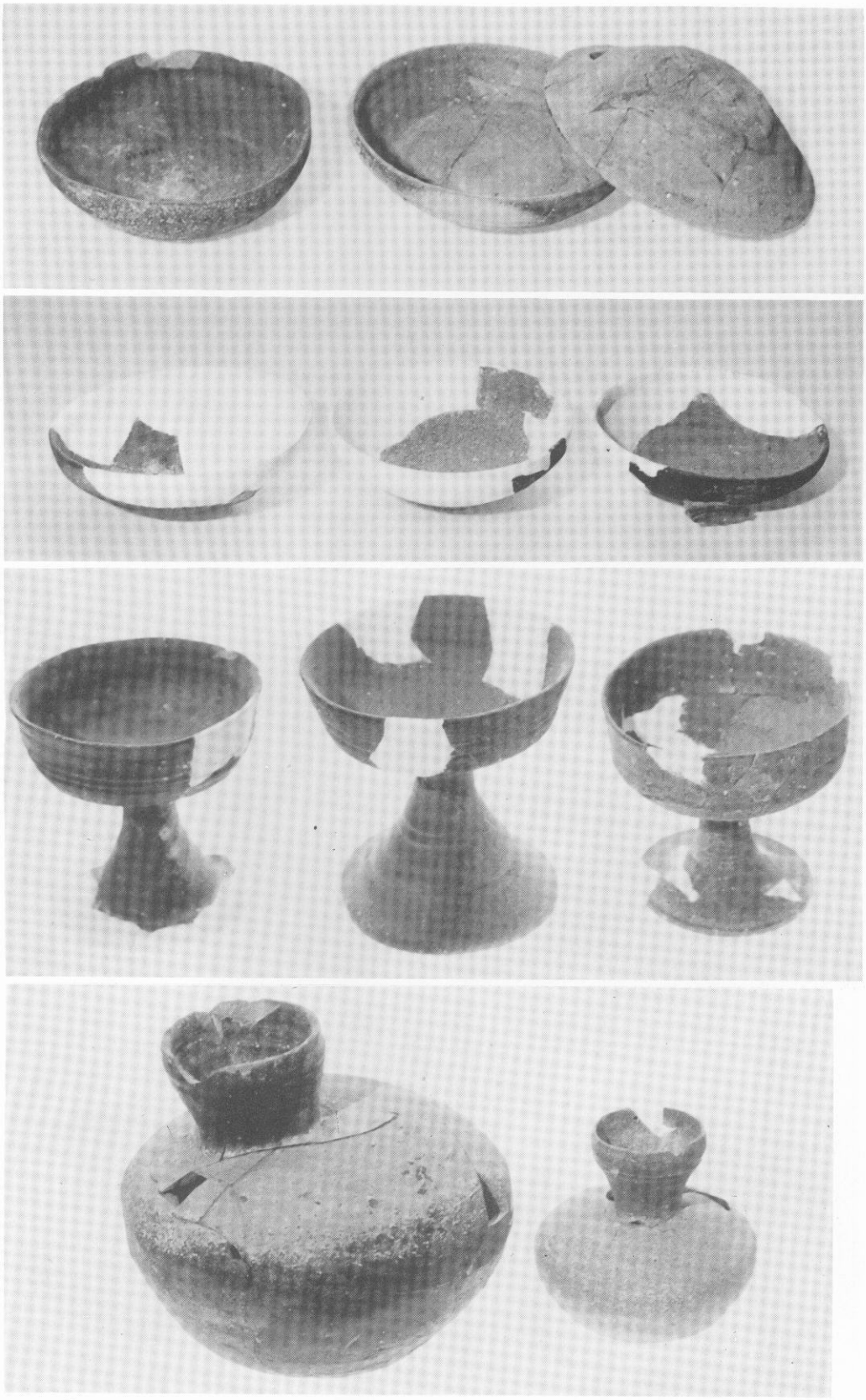
同上　出土鉄製品（刀子・鉄鏃）



中通り5号墳 出土スエ器



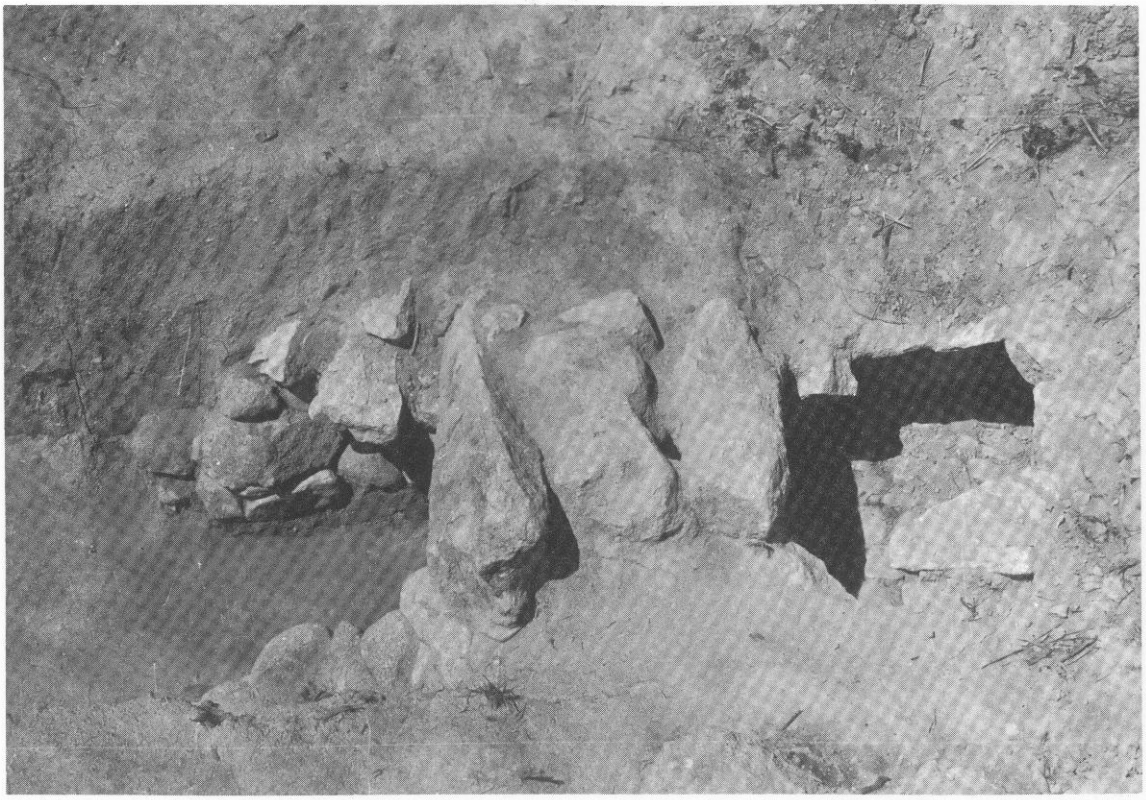
中通り5号墳 出土スエ器



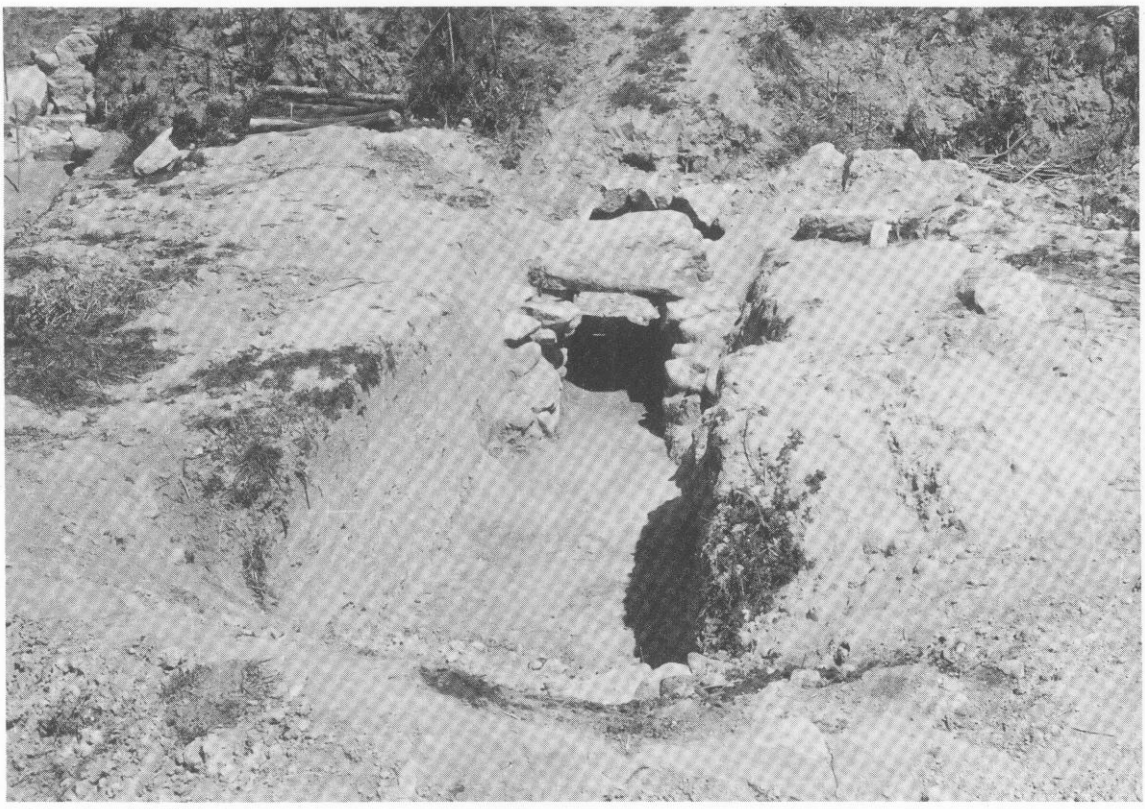
中通り５号墳　出土スエ器



中通り５号墳　出土スエ器



中通り6号墳　全景（上から）



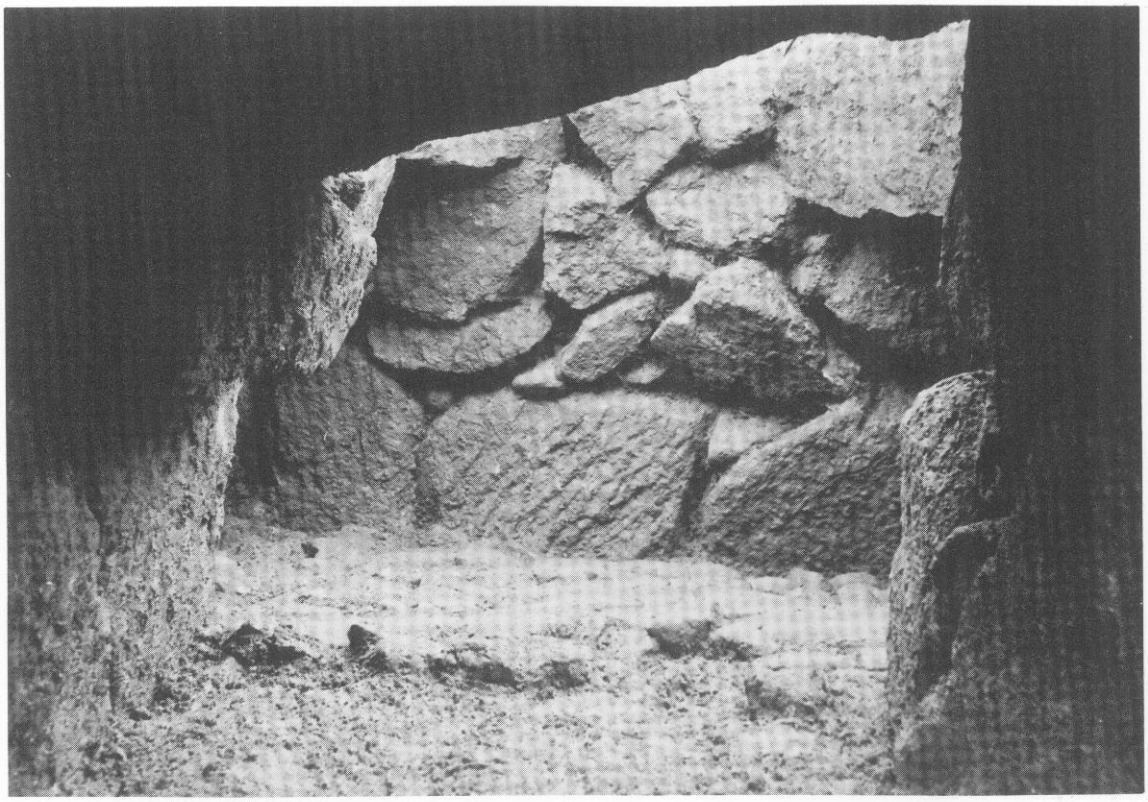
同　上　（羨道部から）



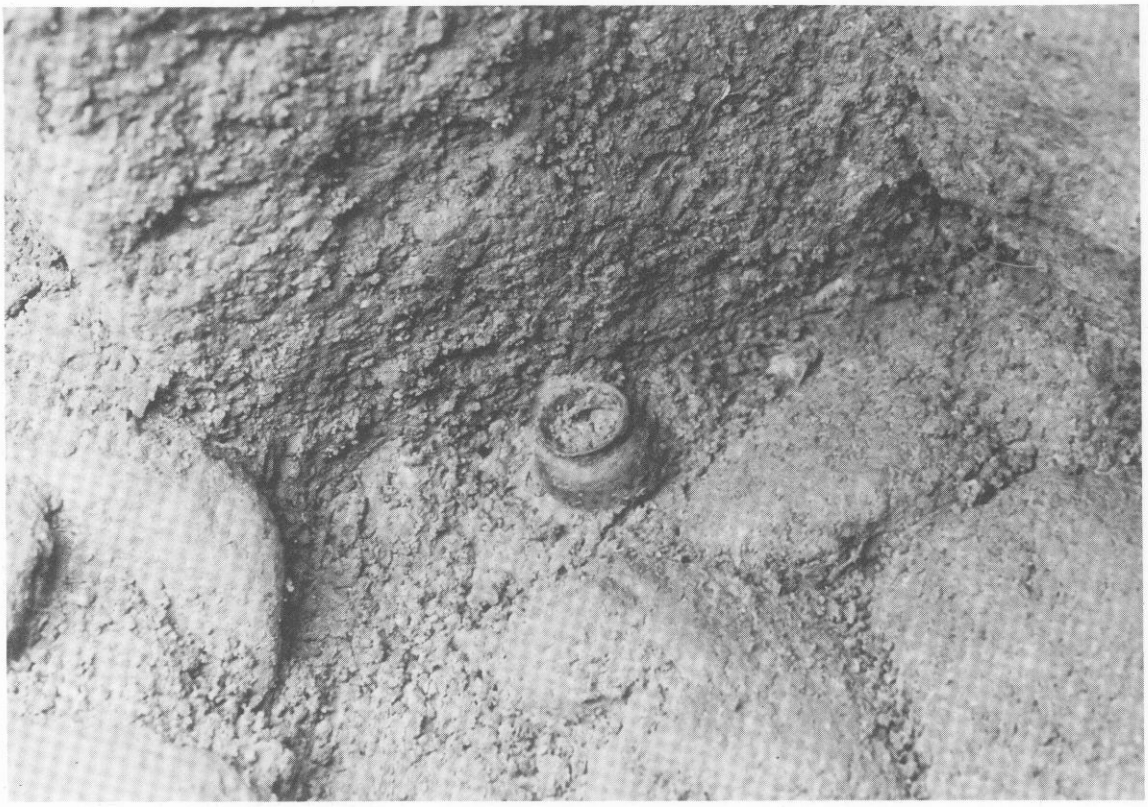
中通り 6 号墳　羨門閉鎖状況



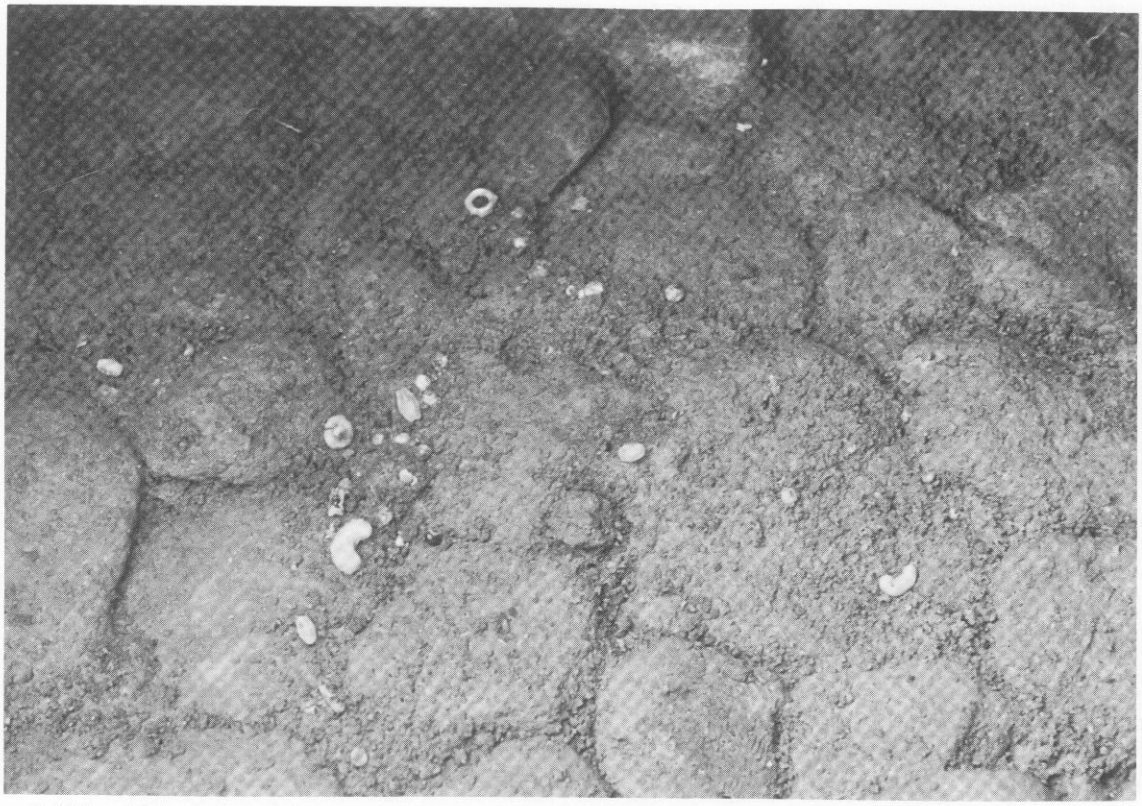
同上　羨道



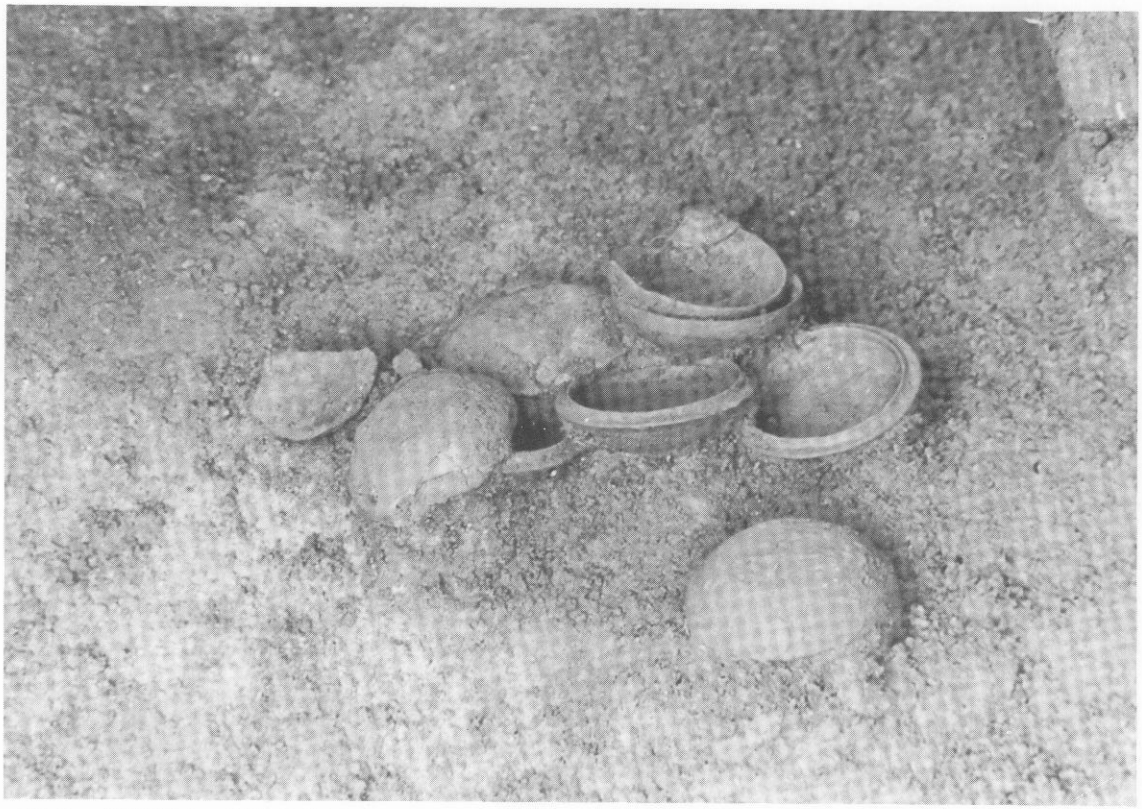
中通り6号墳　玄室奥壁



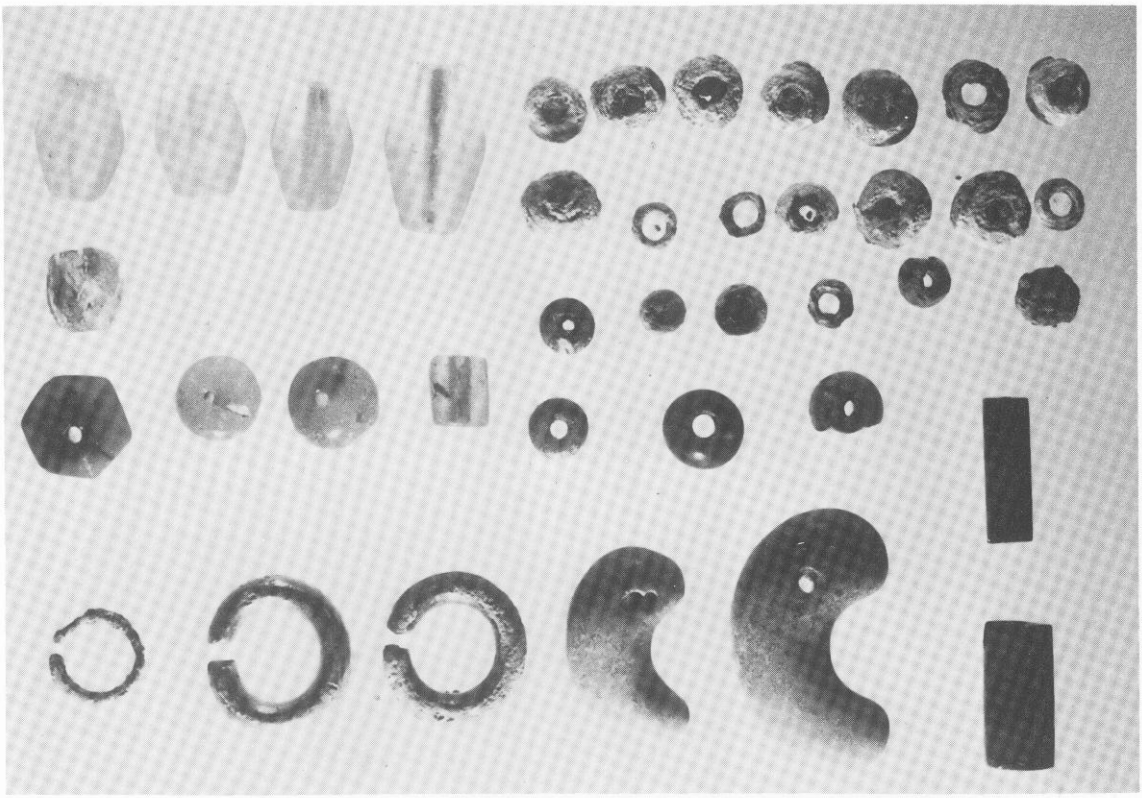
同上　玄室内スエ小坩出土状況



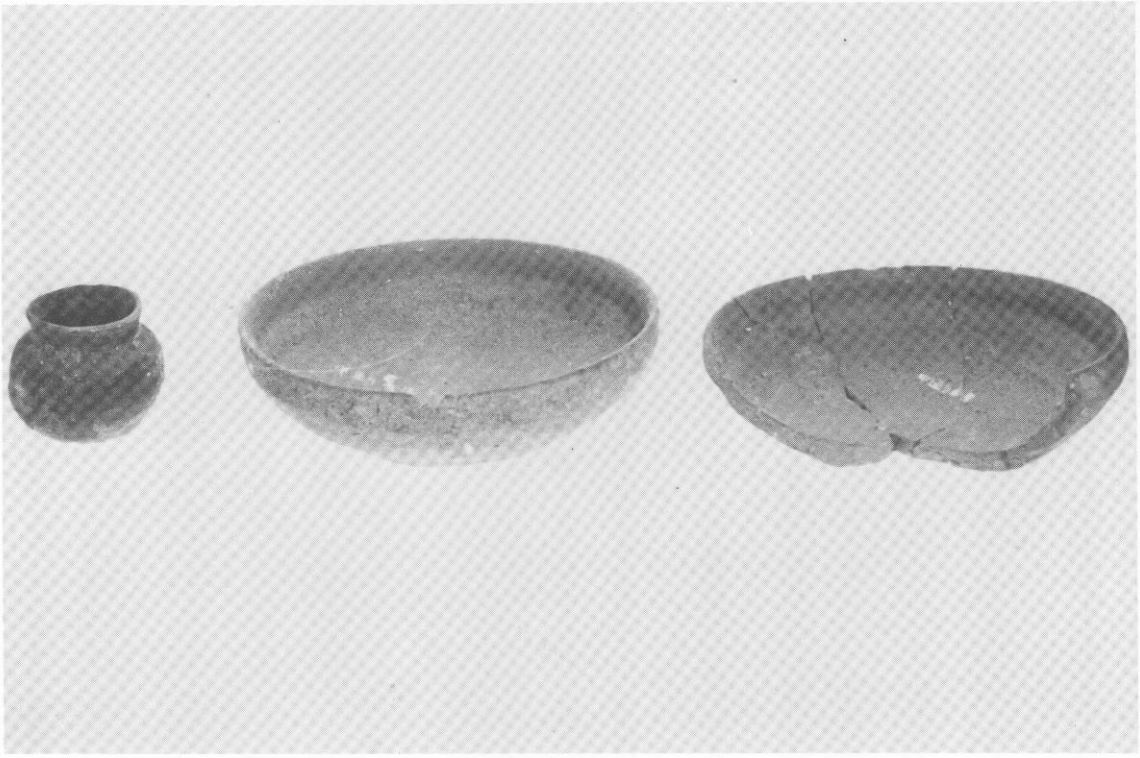
中通り6号墳　玄室内装身具類出土状況



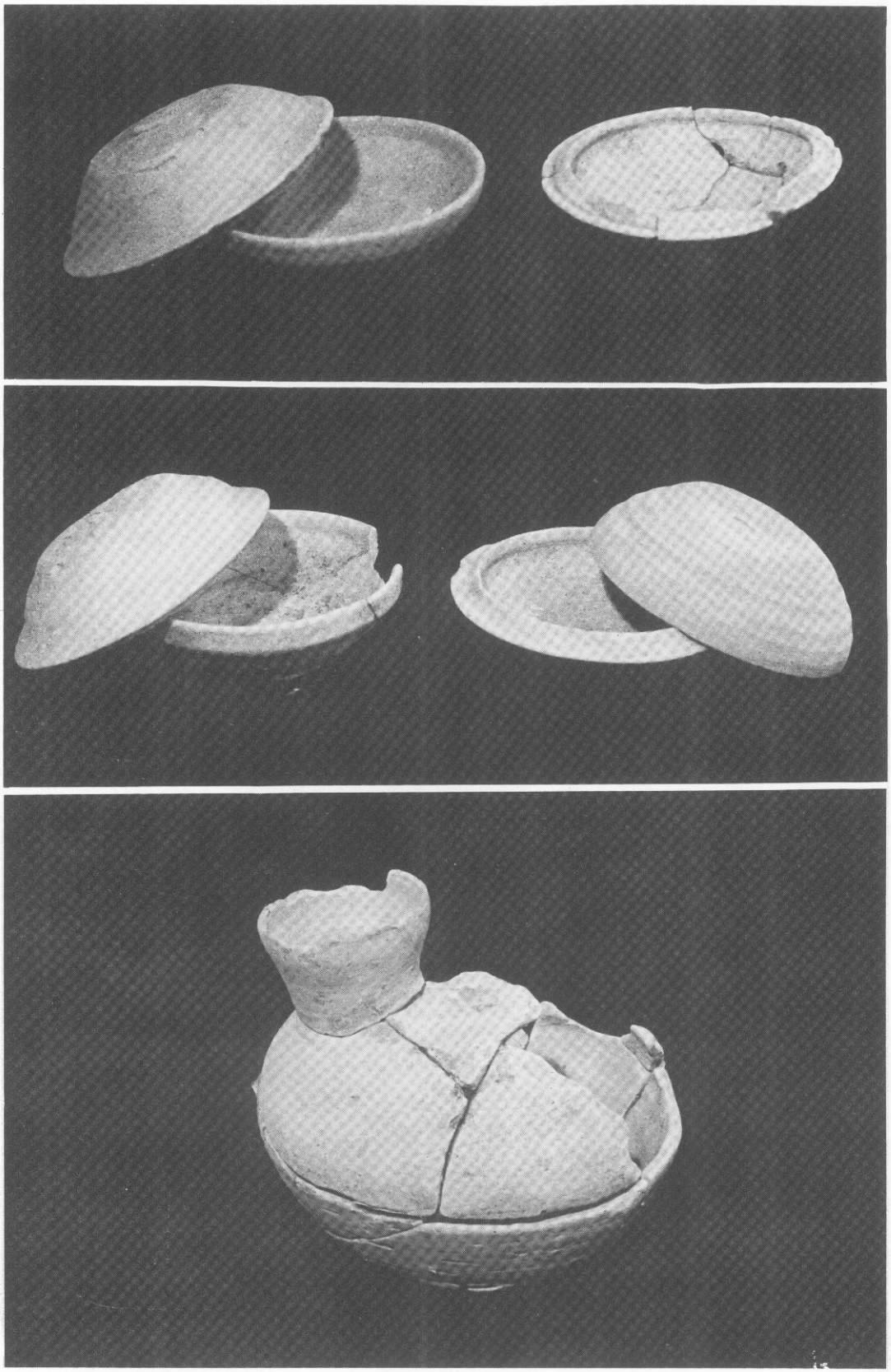
同上　羨道部スエ器出土状況



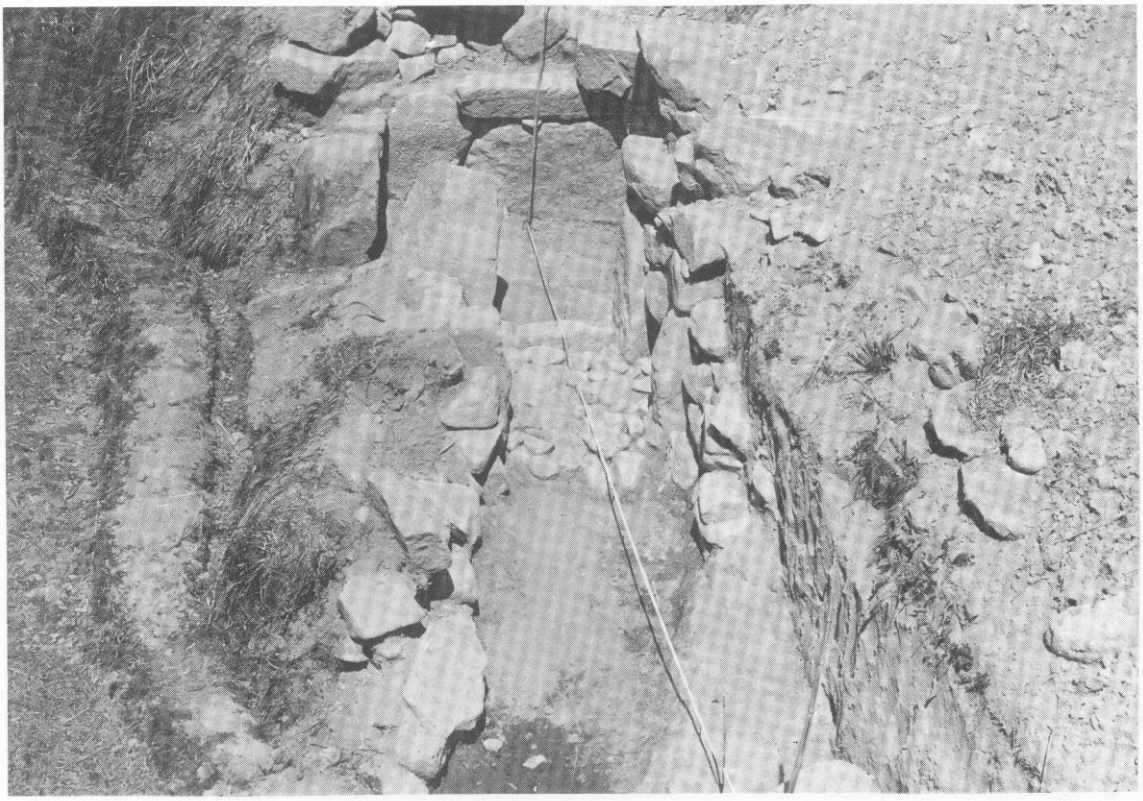
中通り６号墳　出土装身具類



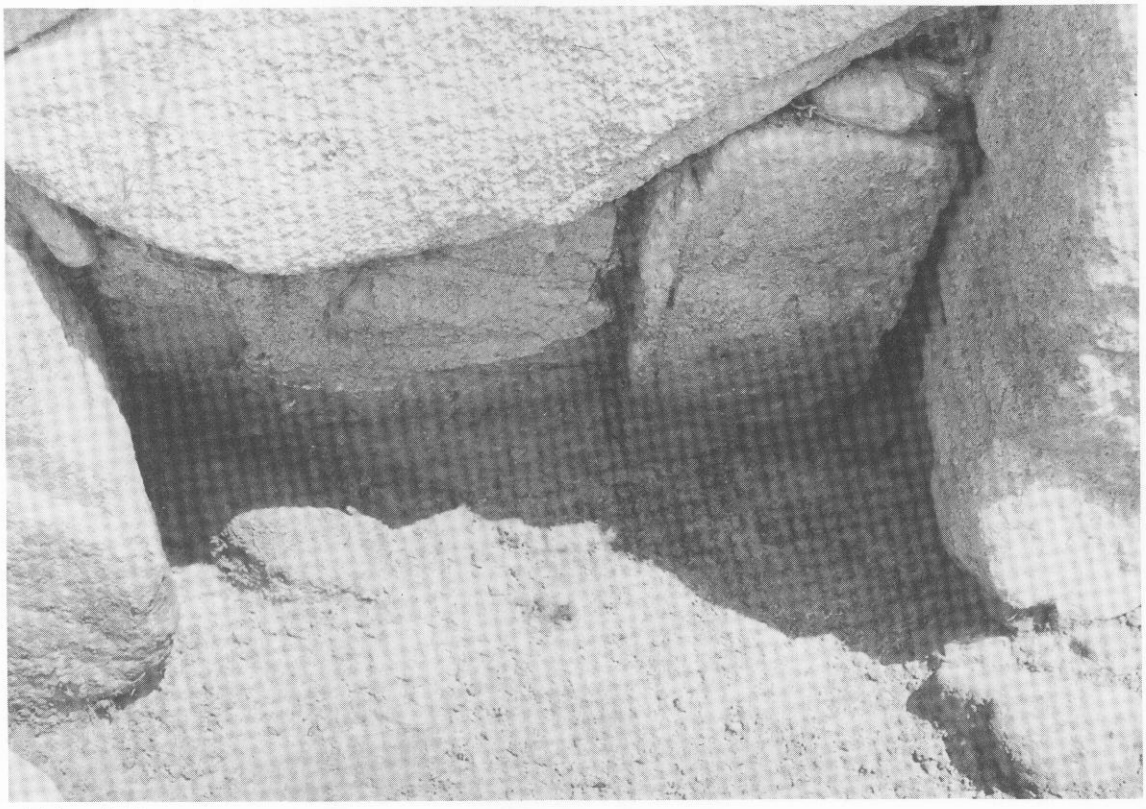
同上　出土スエ器



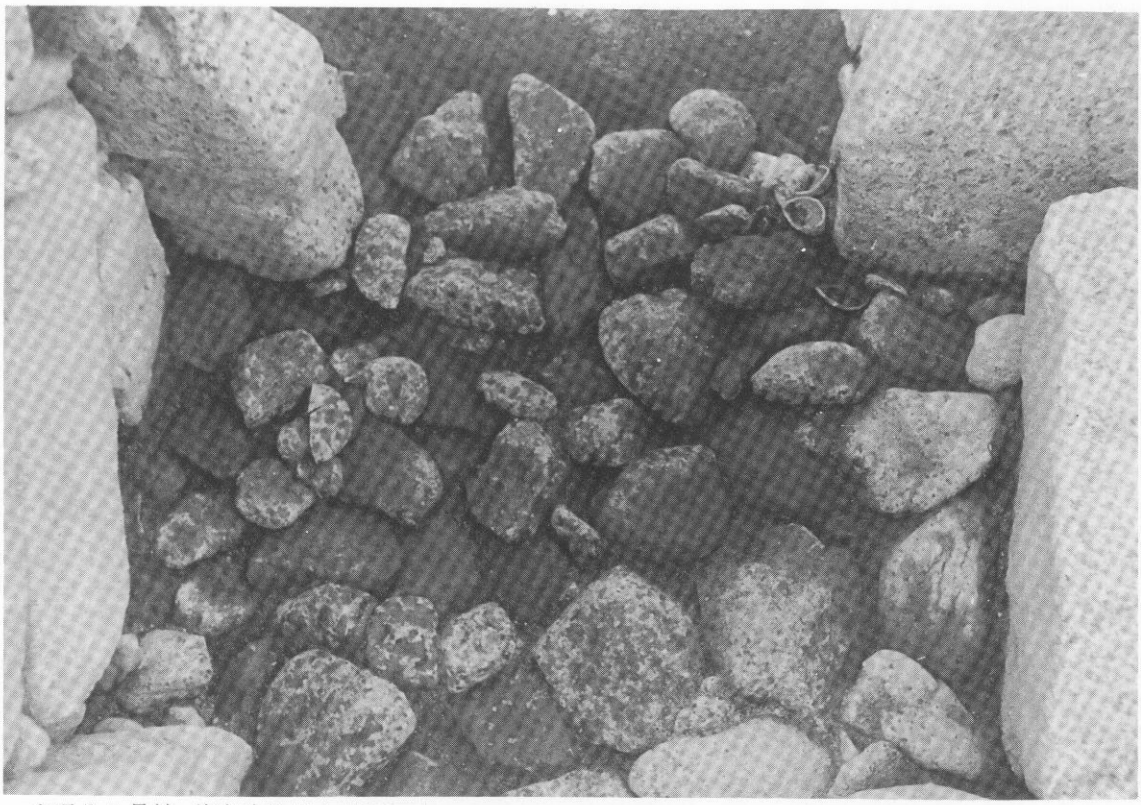
中通り6号墳　出土スエ器



中通り 7 号墳 石室全景



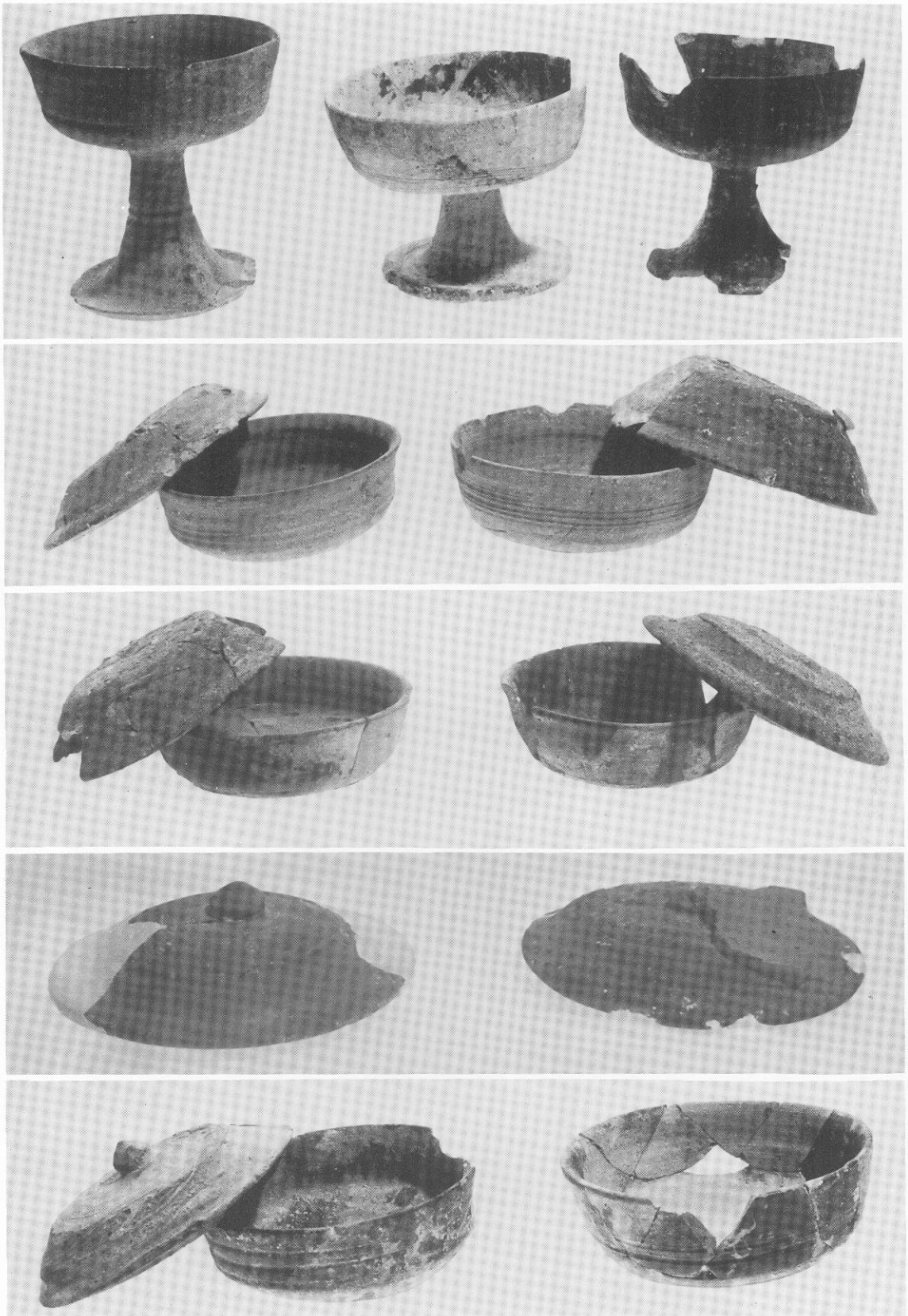
同上　前室



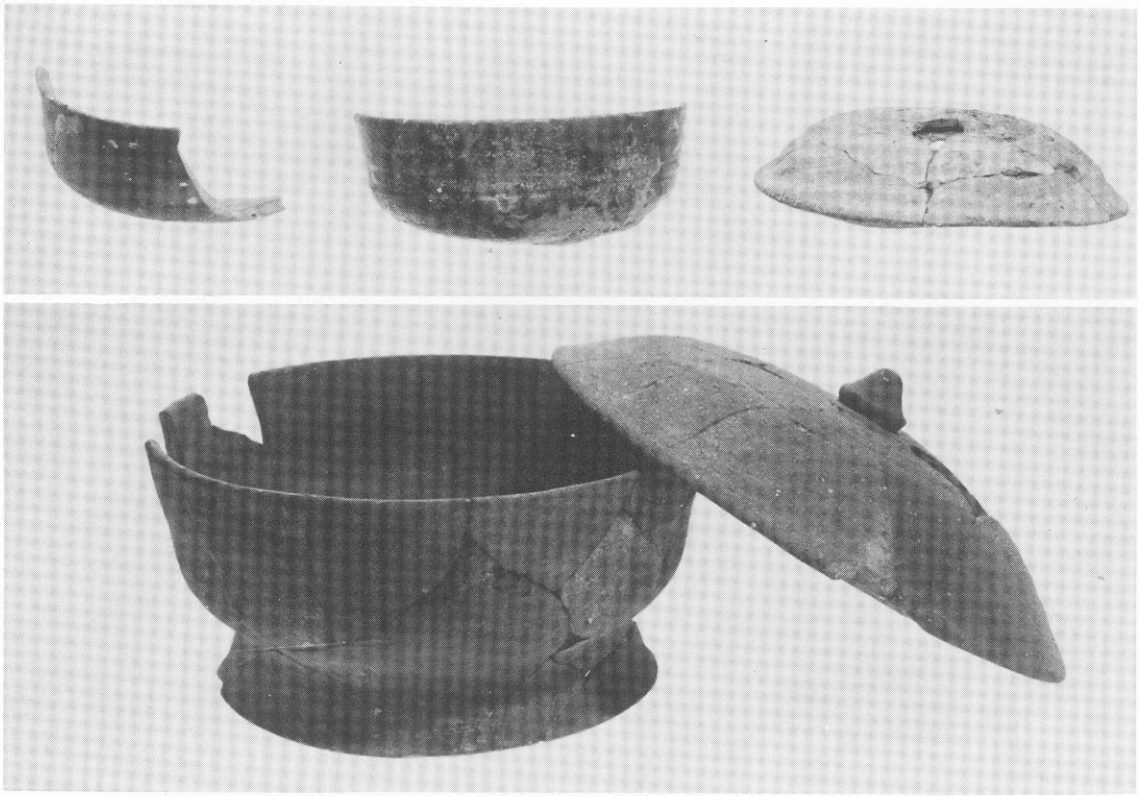
中通り７号墳　前室遺物出土状況



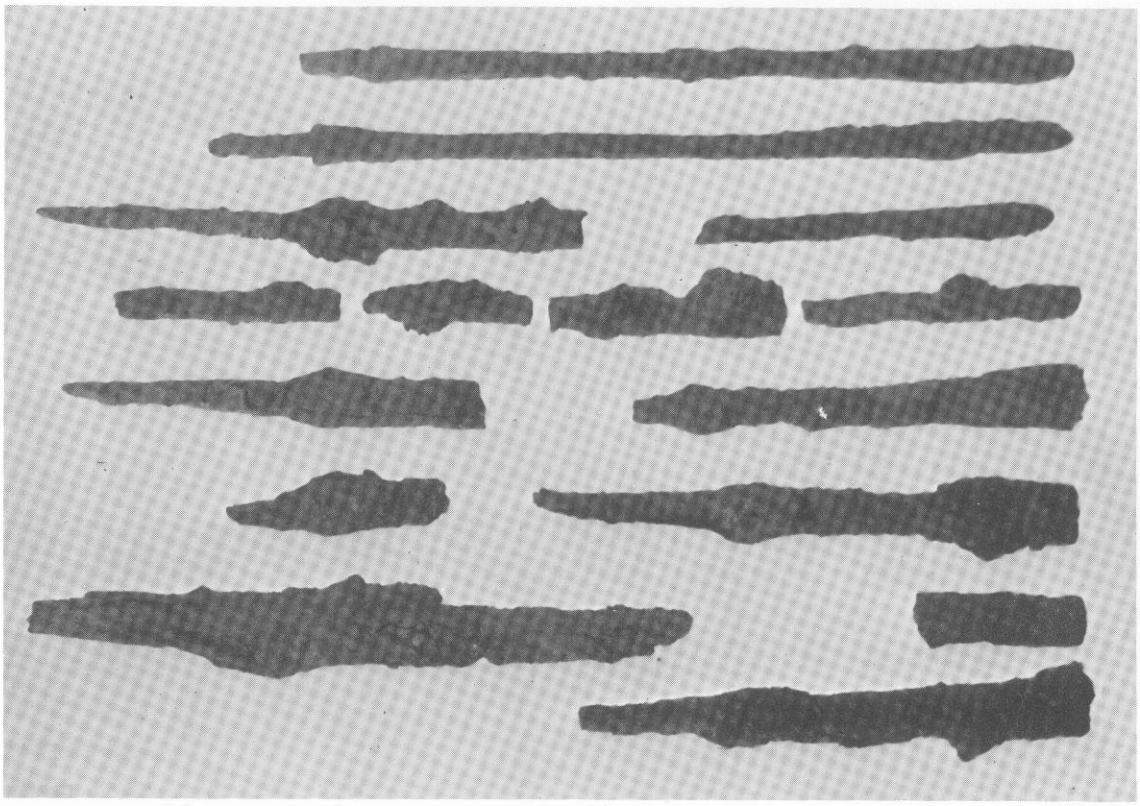
同　上



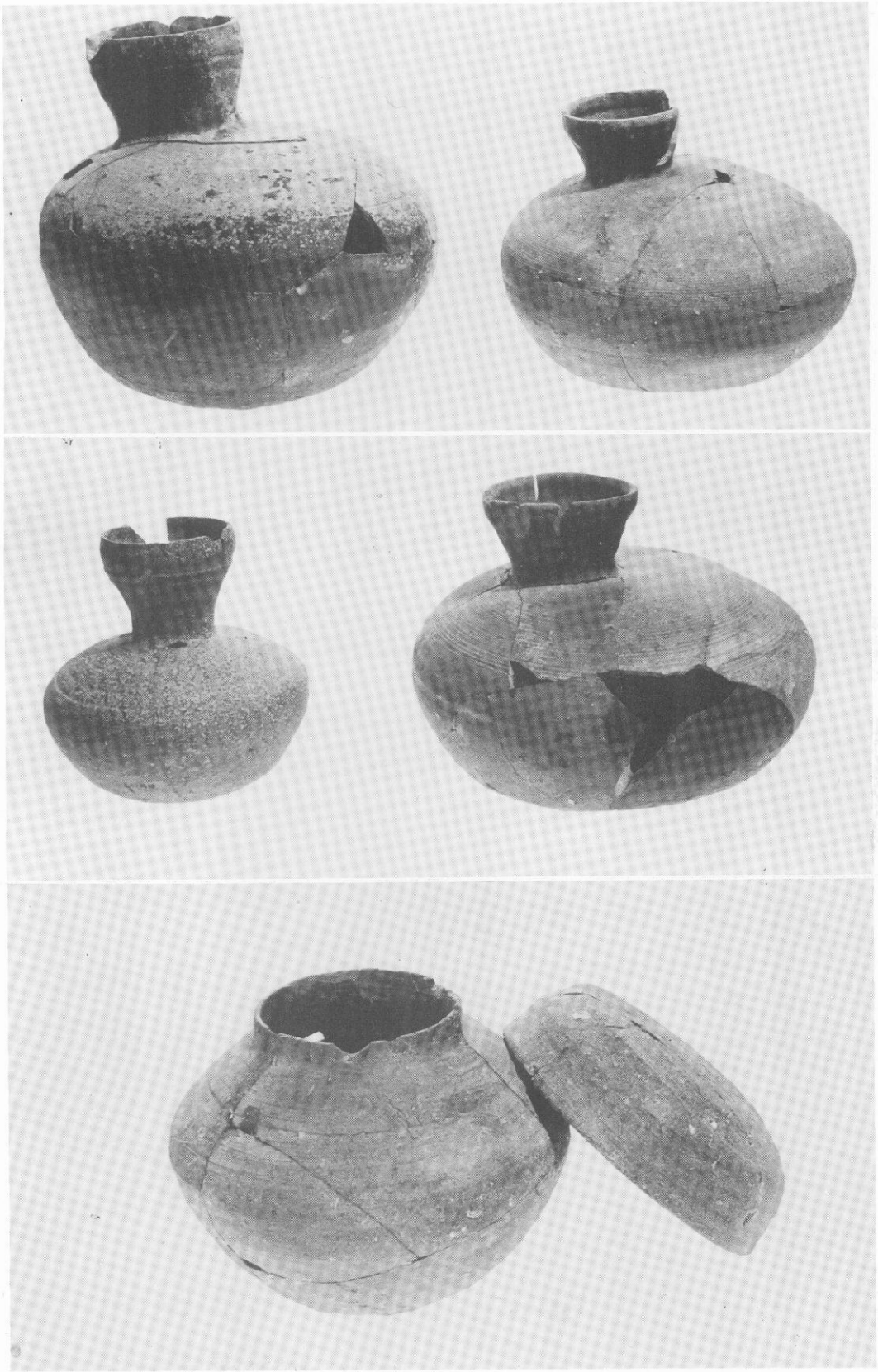
中通り 7 号墳 出土スエ器



中通り７号墳　出土スエ器



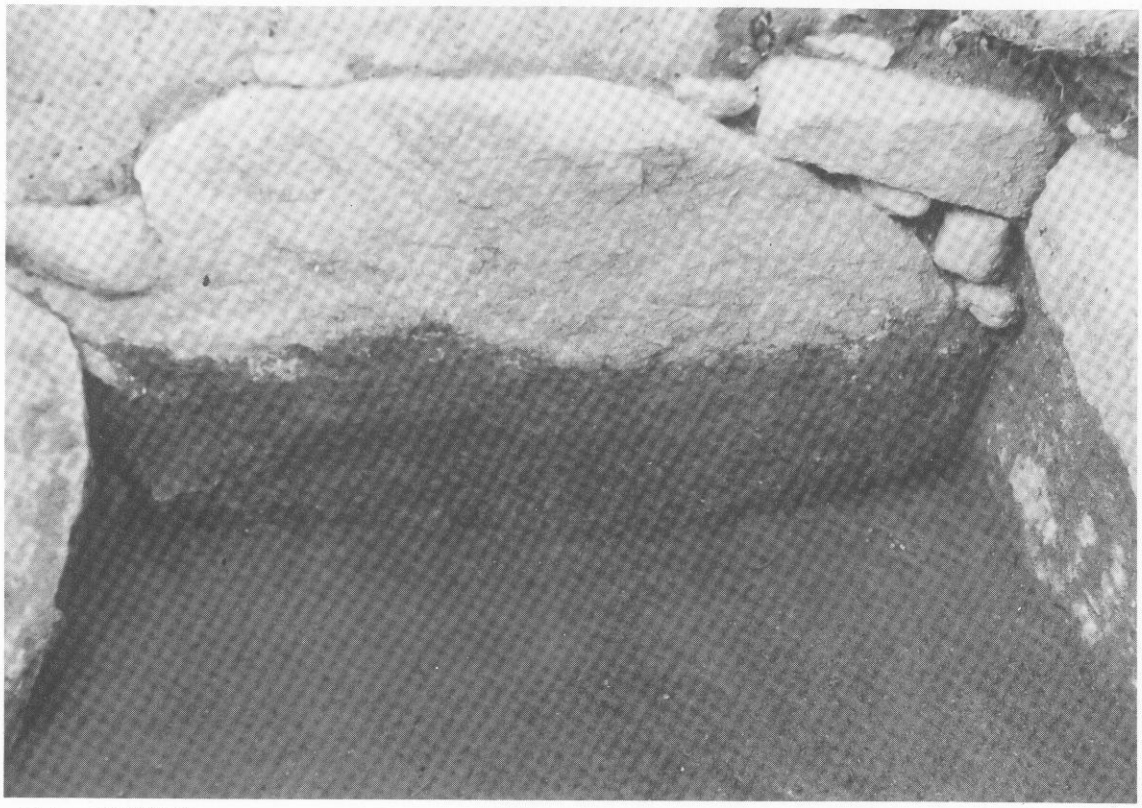
同上　出土鉄製品（刀子　鉄鏃）



中通り７号墳　出土スエ器



中通り 8 号墳　全景



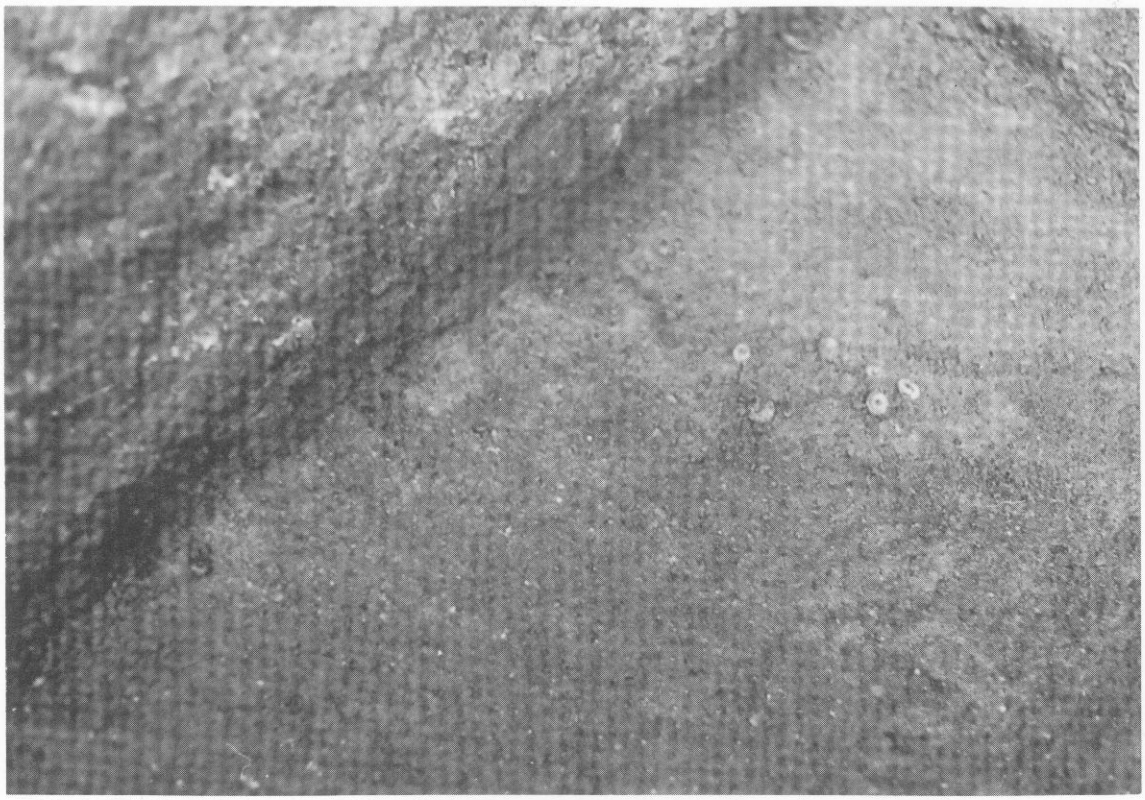
同上　玄室奥壁



中通り 8 号墳 石室全景



同上　前室



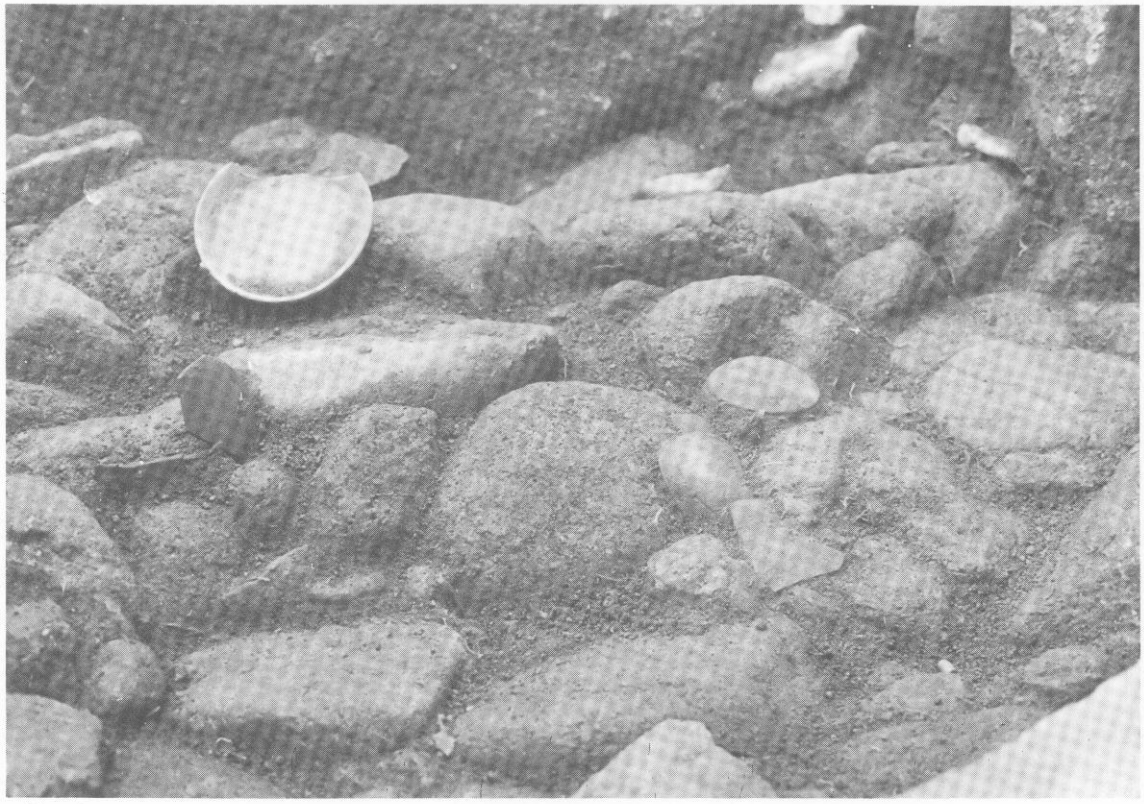
中通り８号墳　玄室内ガラス玉出土状況



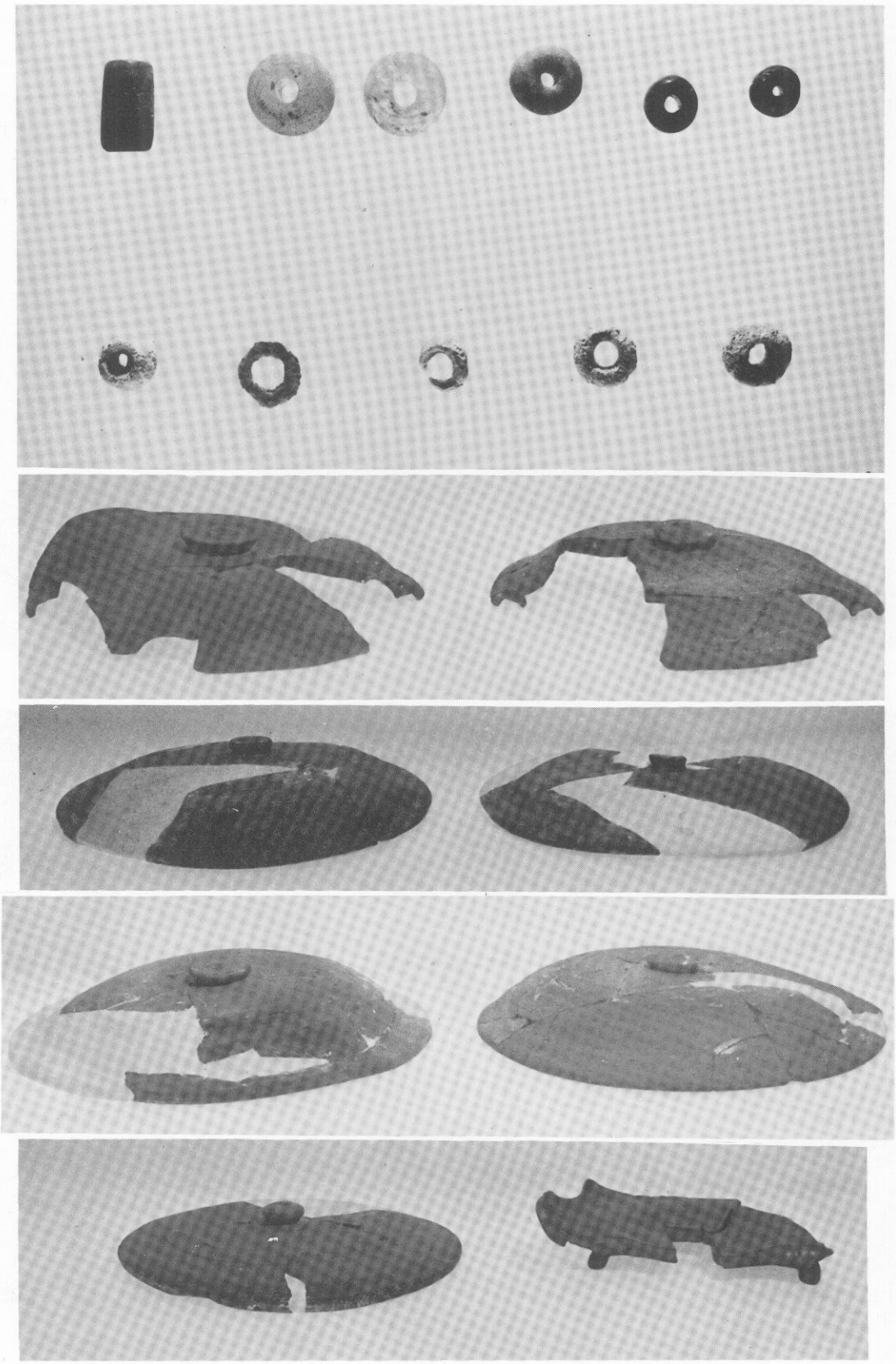
同上　墓道部土器出土状況



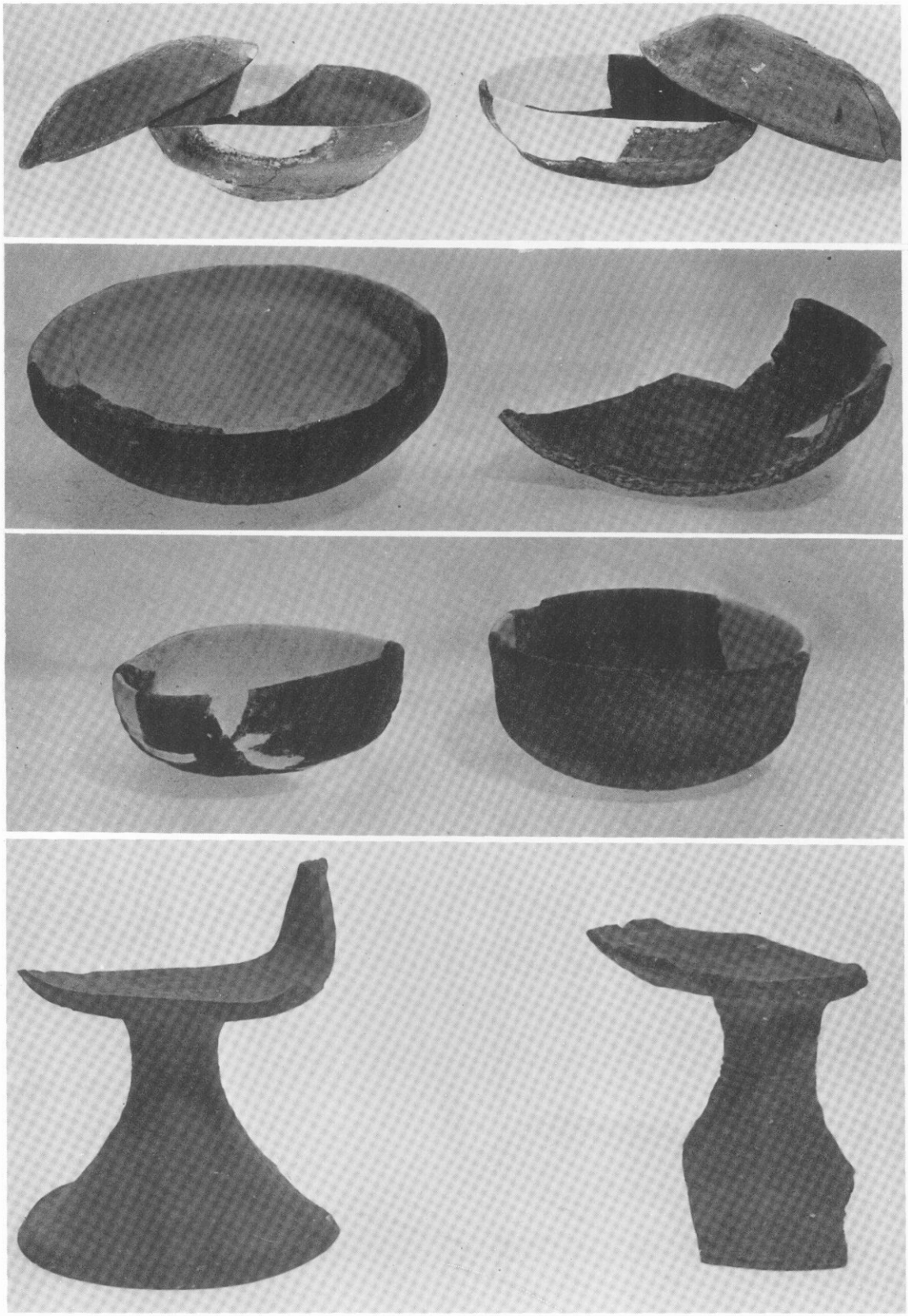
中通り８号墳　前室土器出土状況



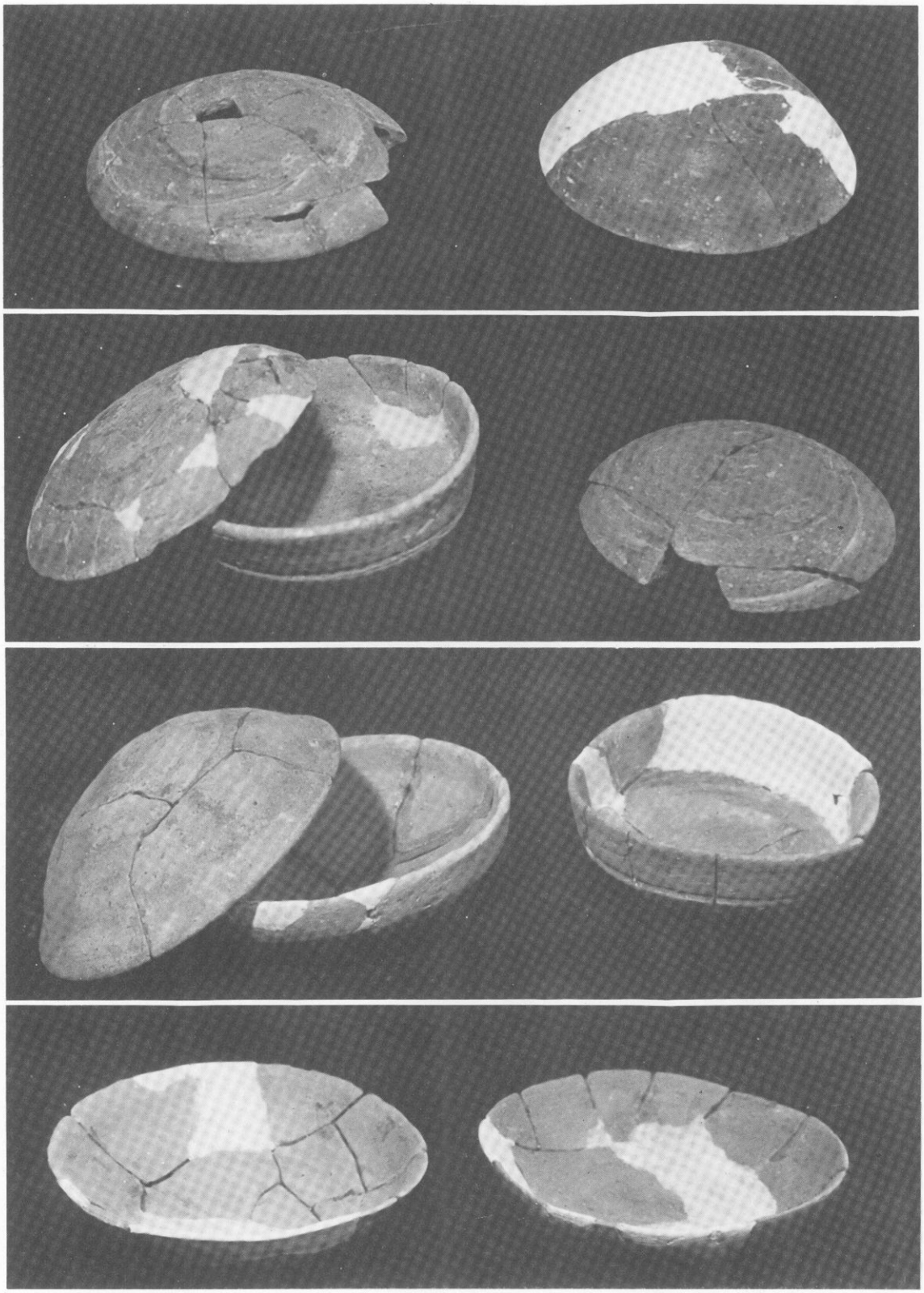
同　上



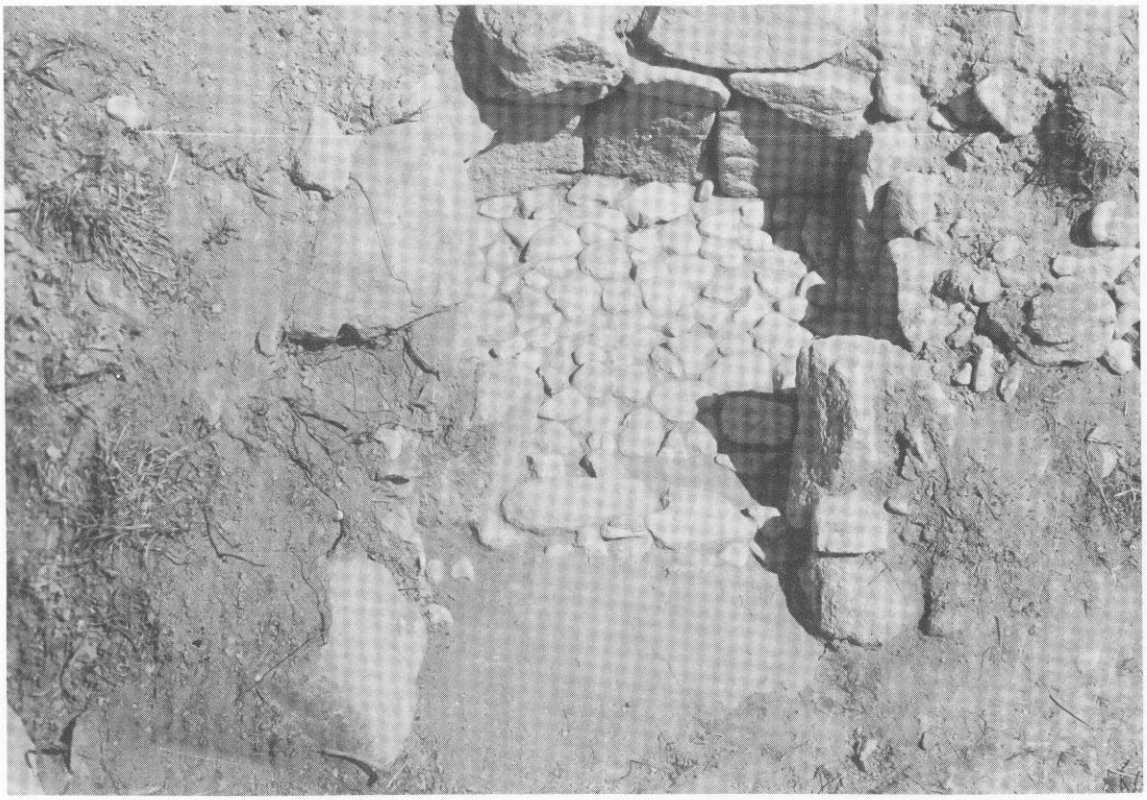
中通り８号墳　出土玉類・スエ器



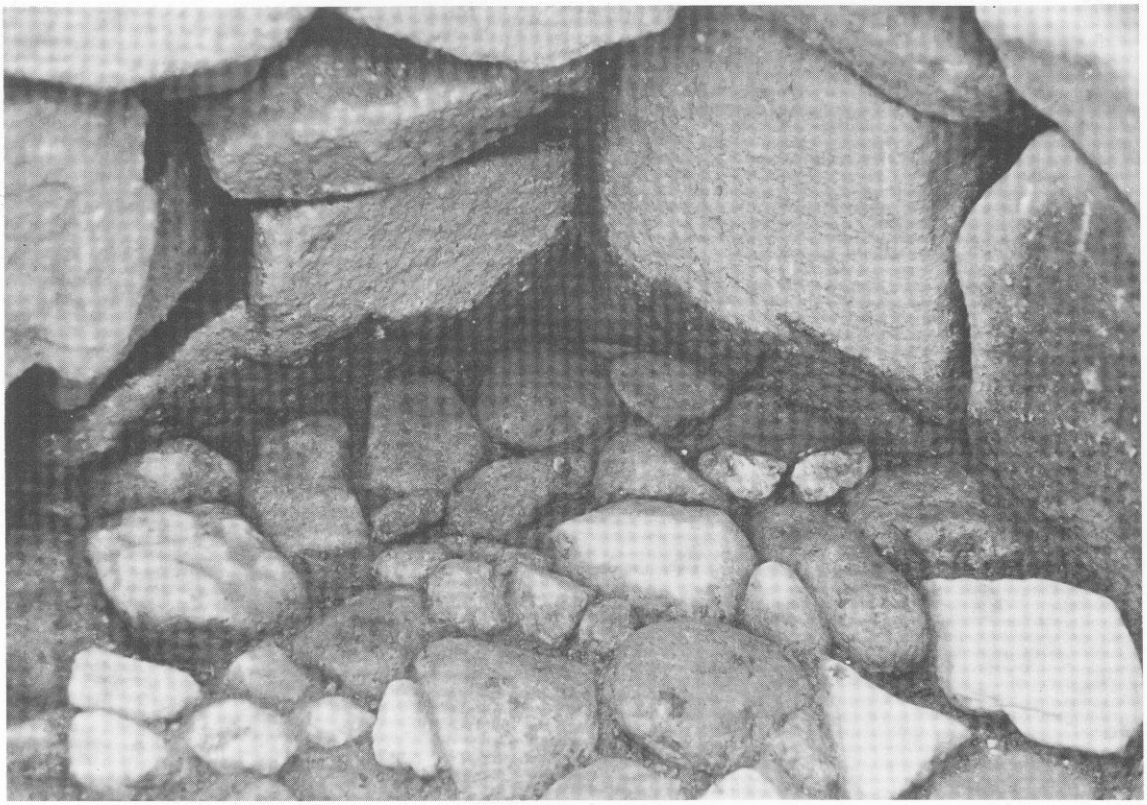
中通り８号墳 出土スエ器



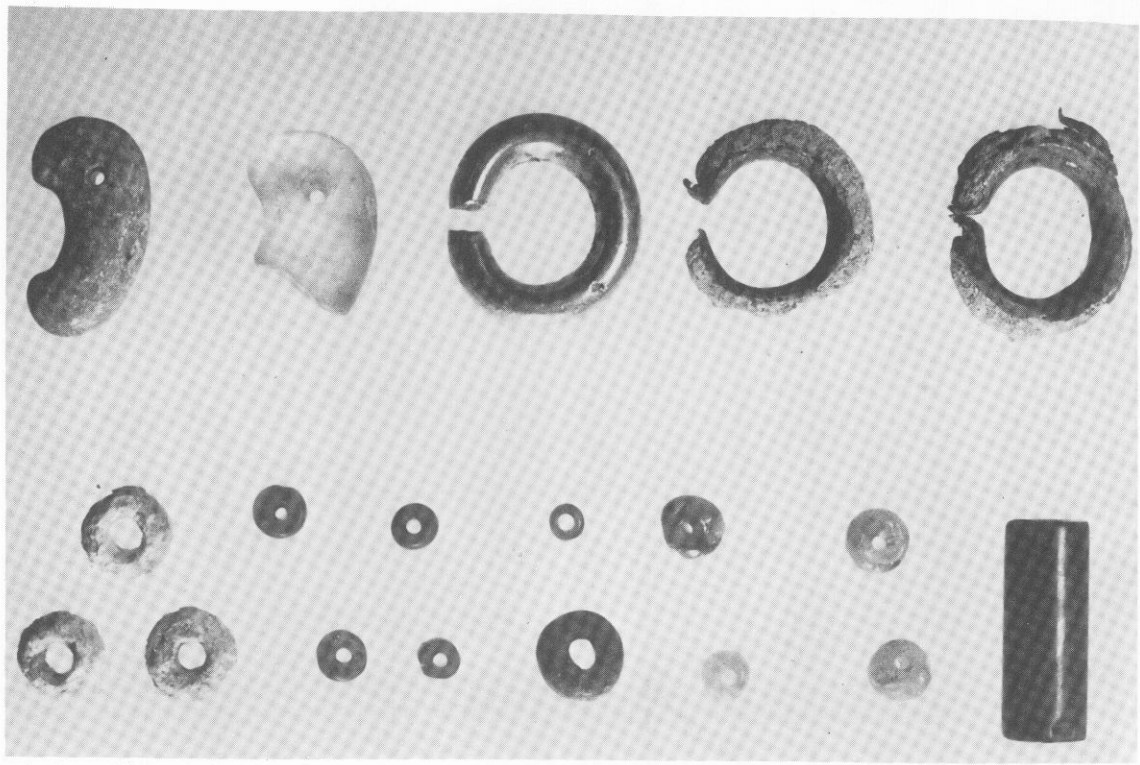
中通り８号墳 出土スエ器



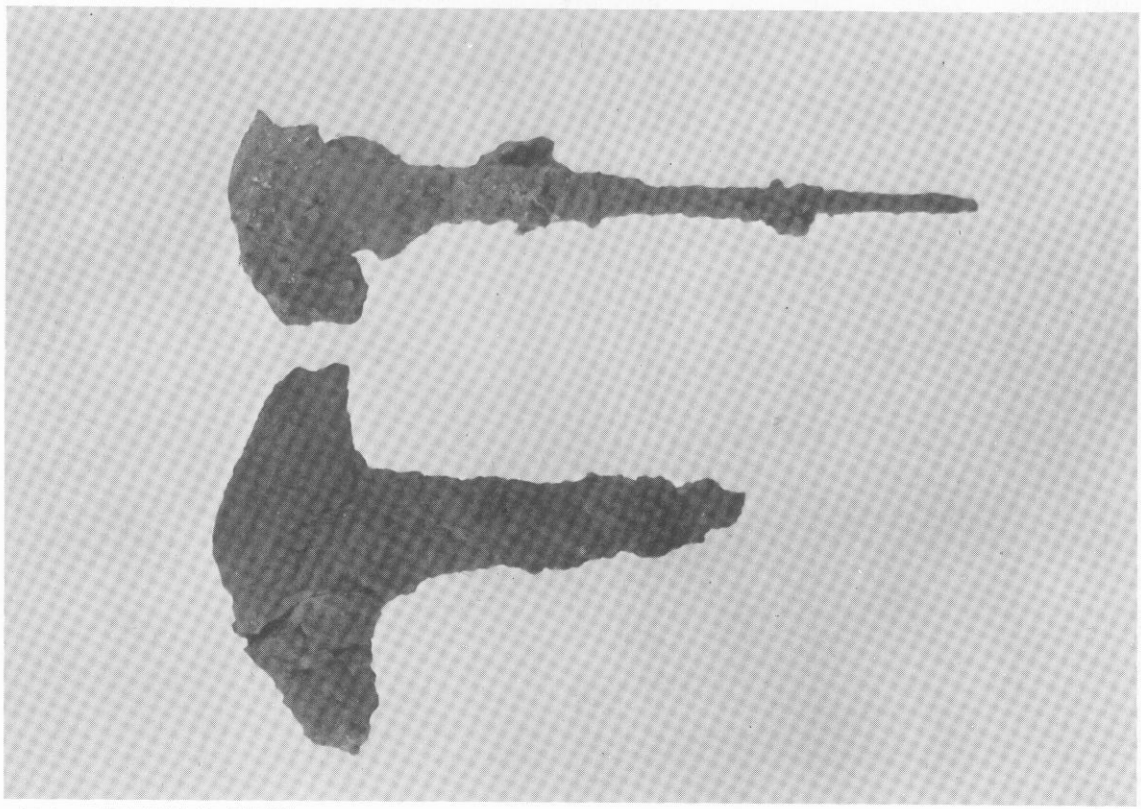
中通り９号墳　石室全景



同上　玉類出土状況



中通り９号墳　出土装身具類



同上　出土鉄製品（鉄鏃）



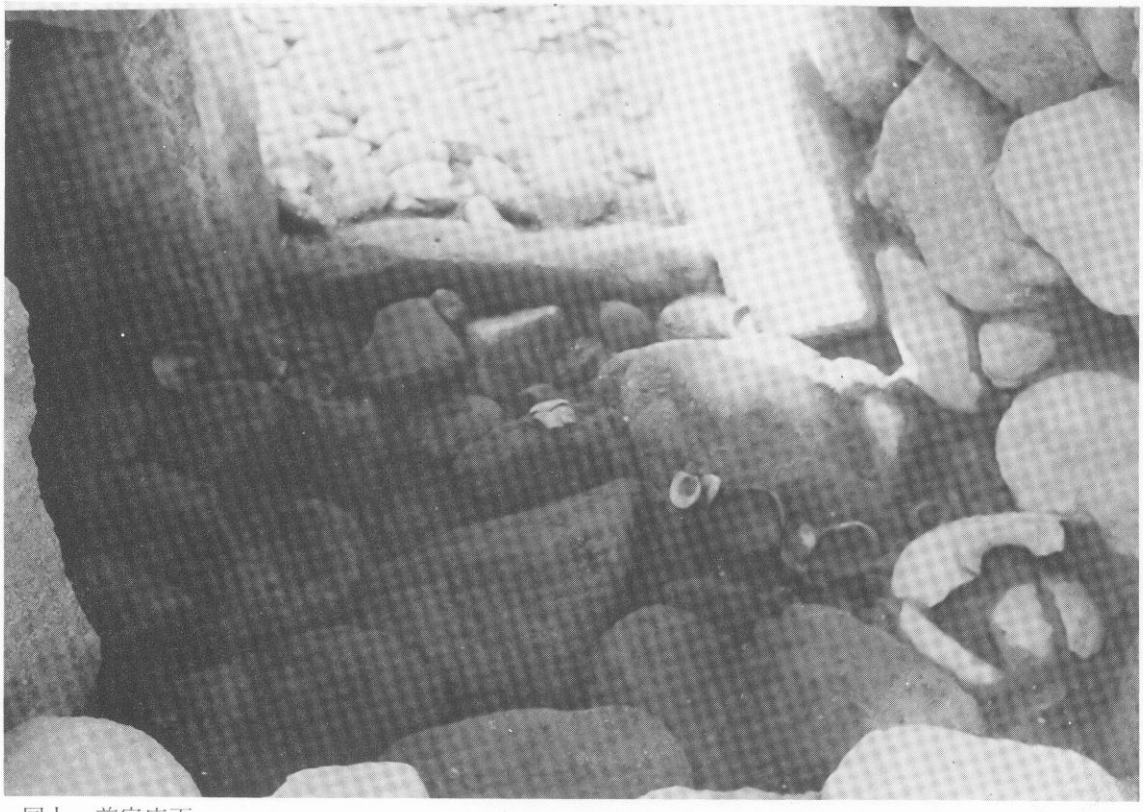
中通り10号墳　前室と玄室



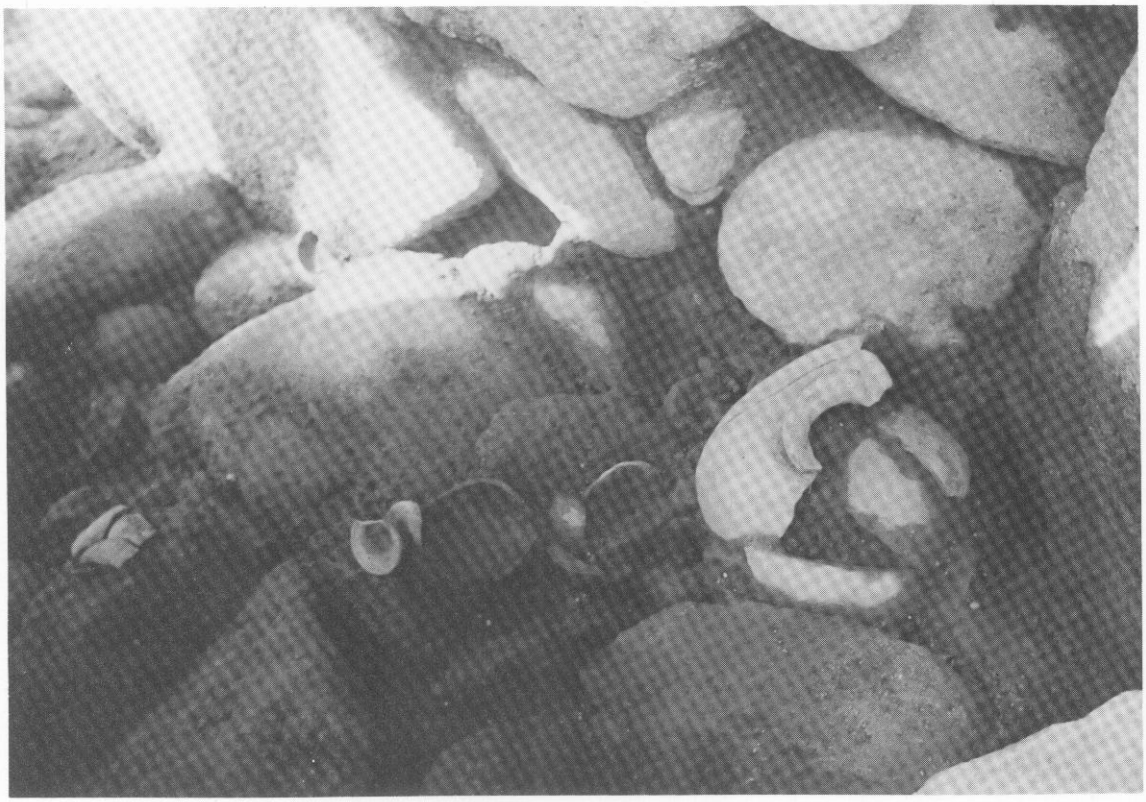
同上　玄室



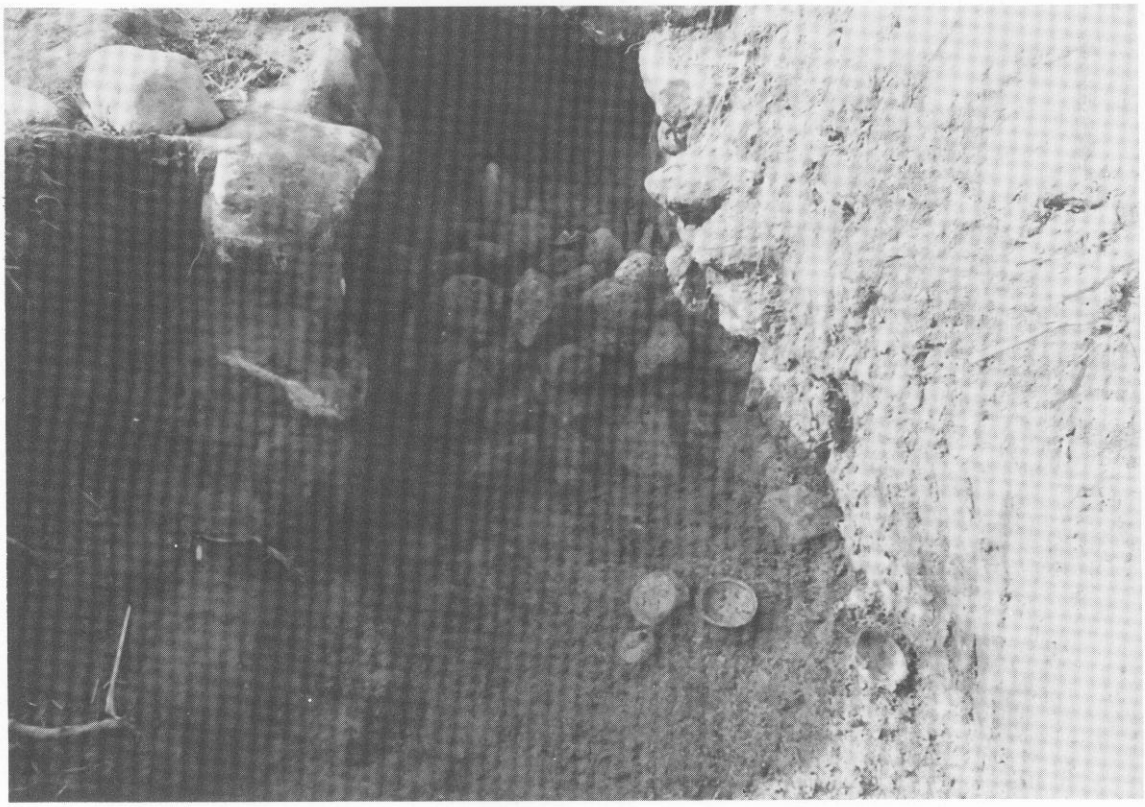
中通り10号墳　玄室と玄門



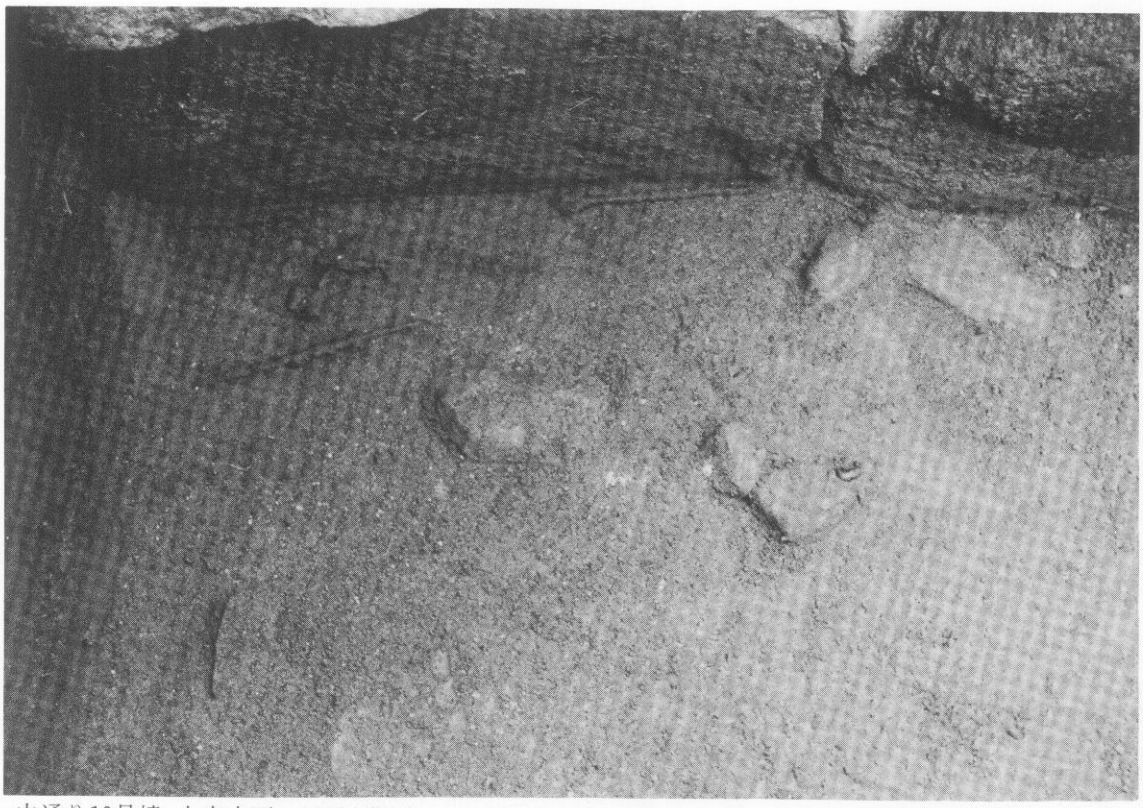
同上　前室床面



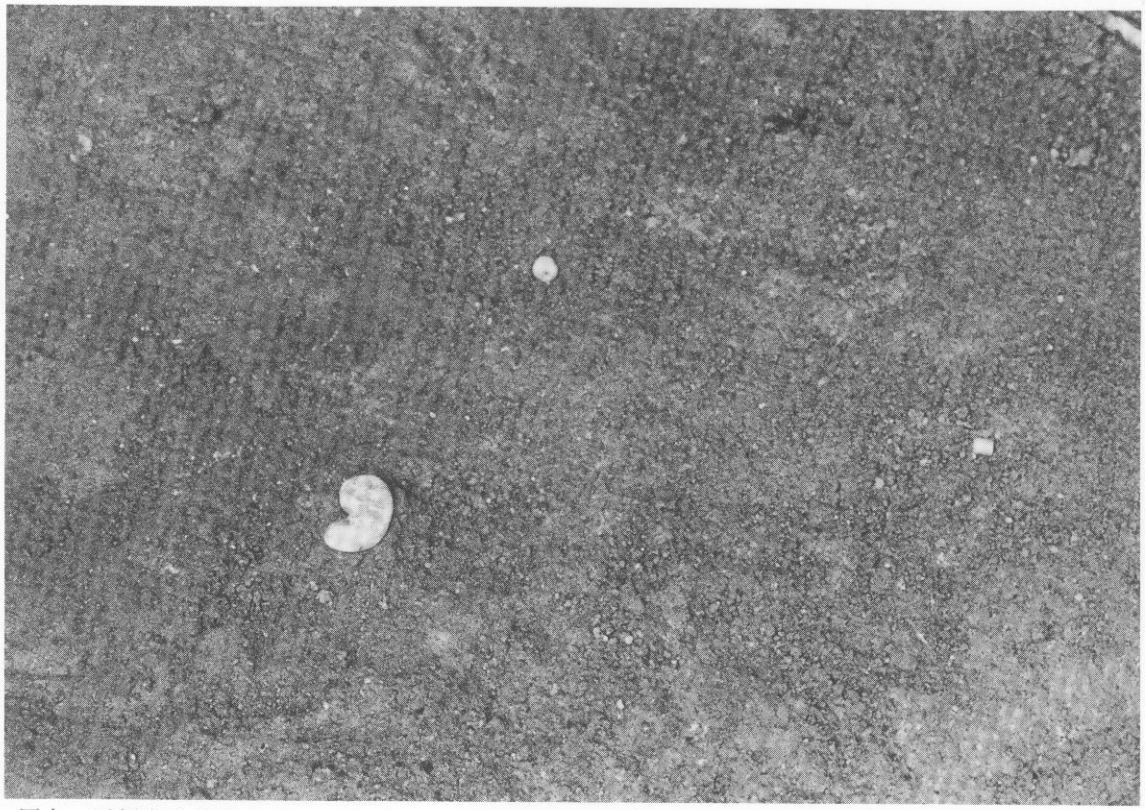
中通り10号墳　前室土器出土状況



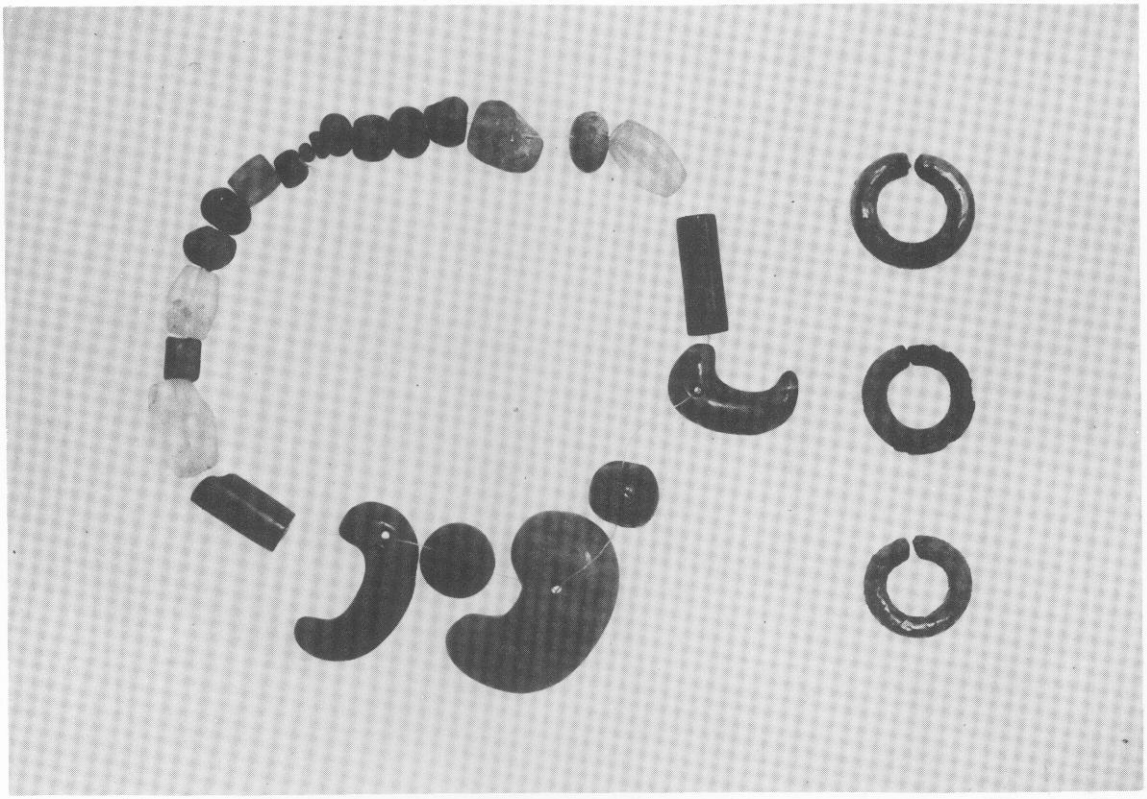
同上　墓道土器出土状況



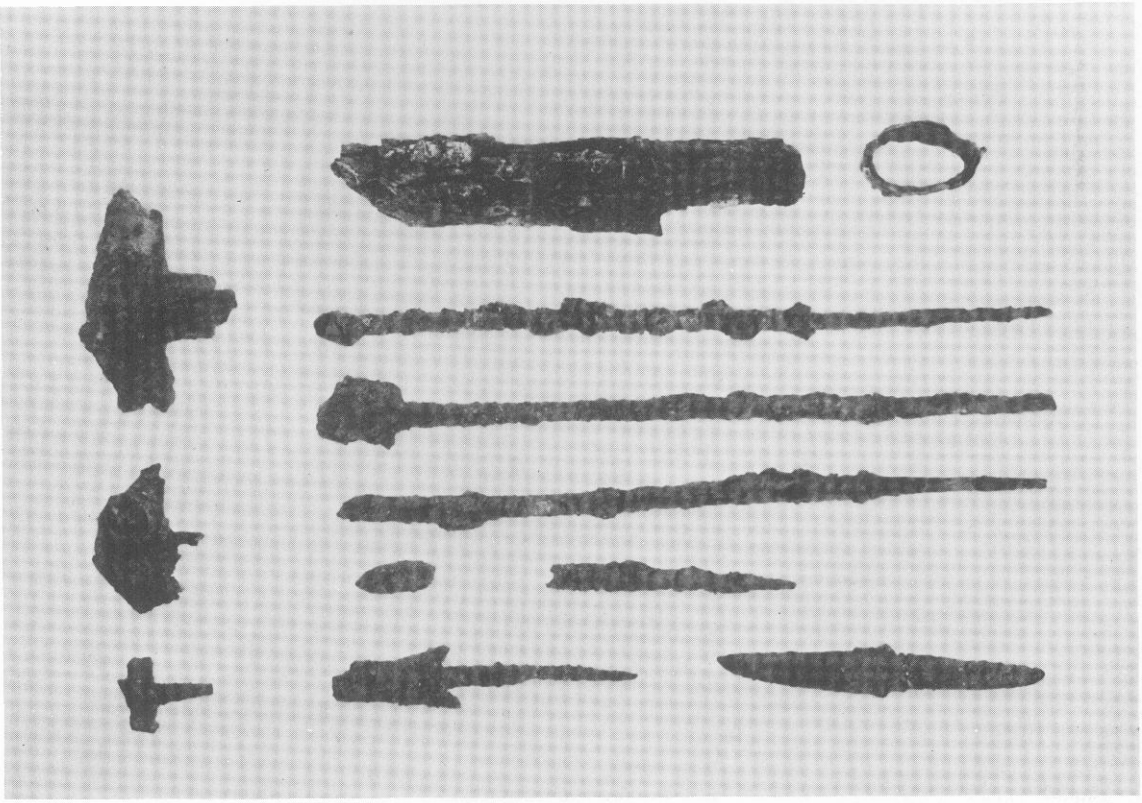
中通り10号墳　玄室床面，刀子・鏃出土状況



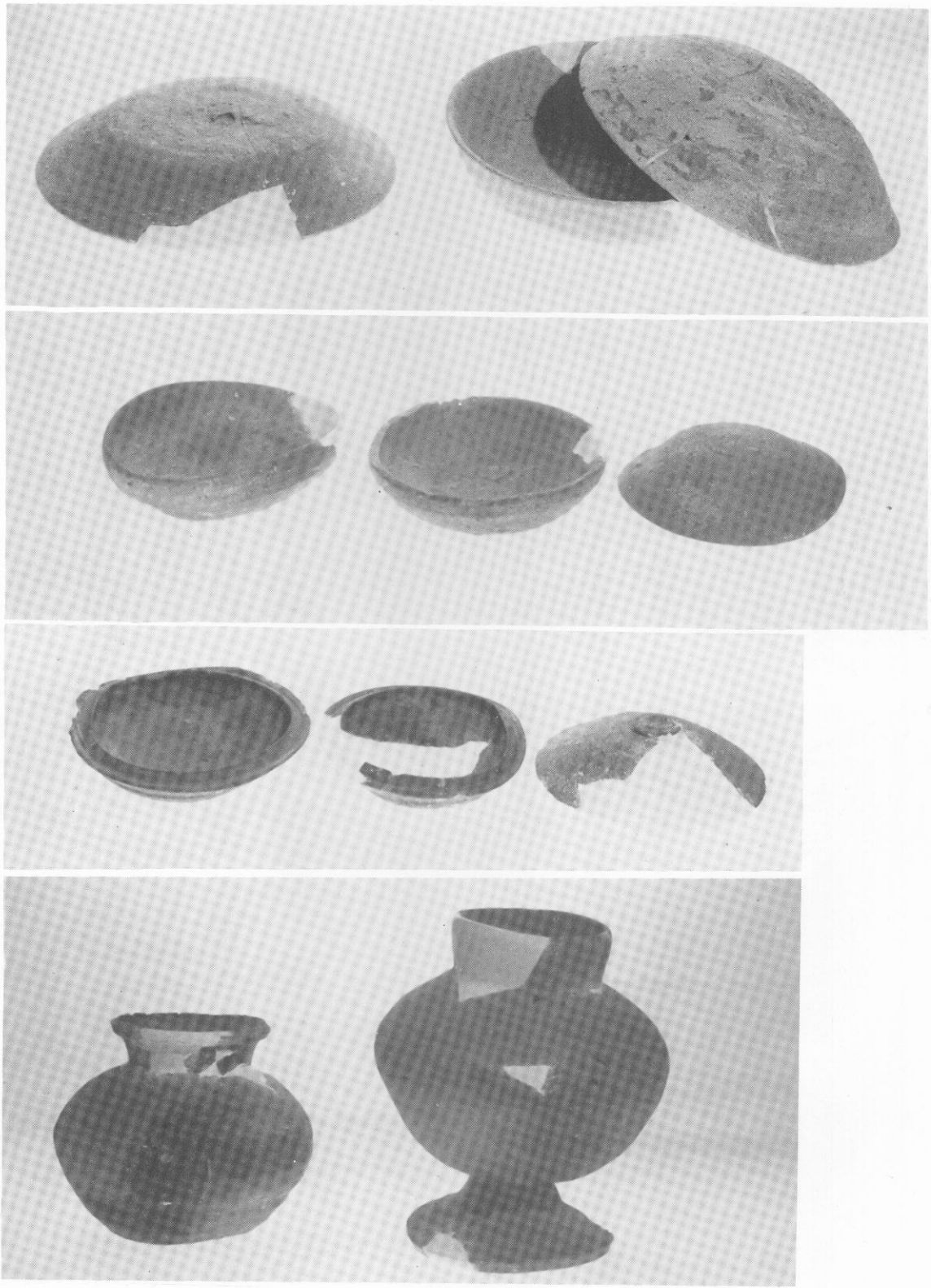
同上　玉類出土状況



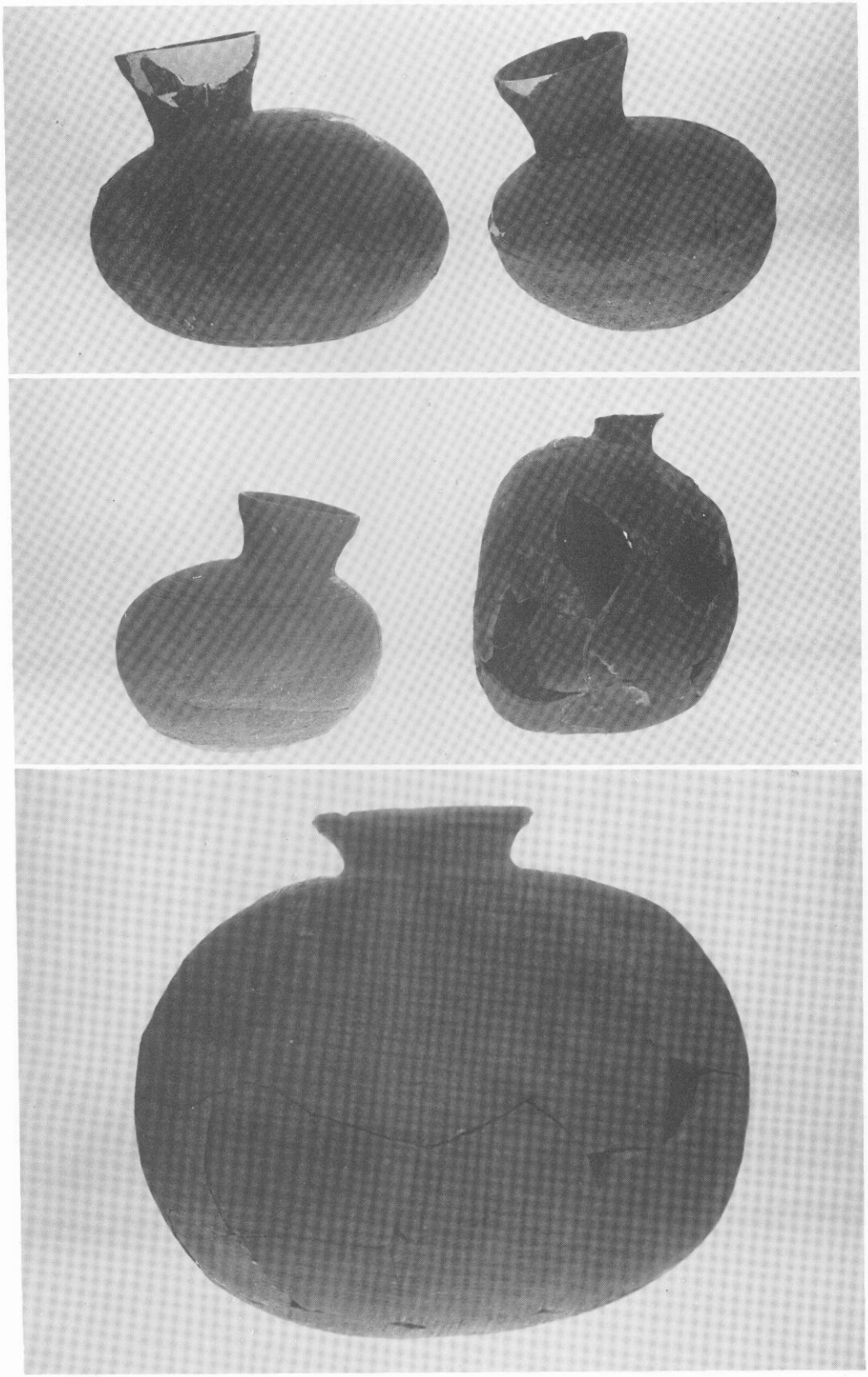
中通り10号墳　出土装身具類



同上　出土鉄製品（鉄刀・鉄鏃・刀子）



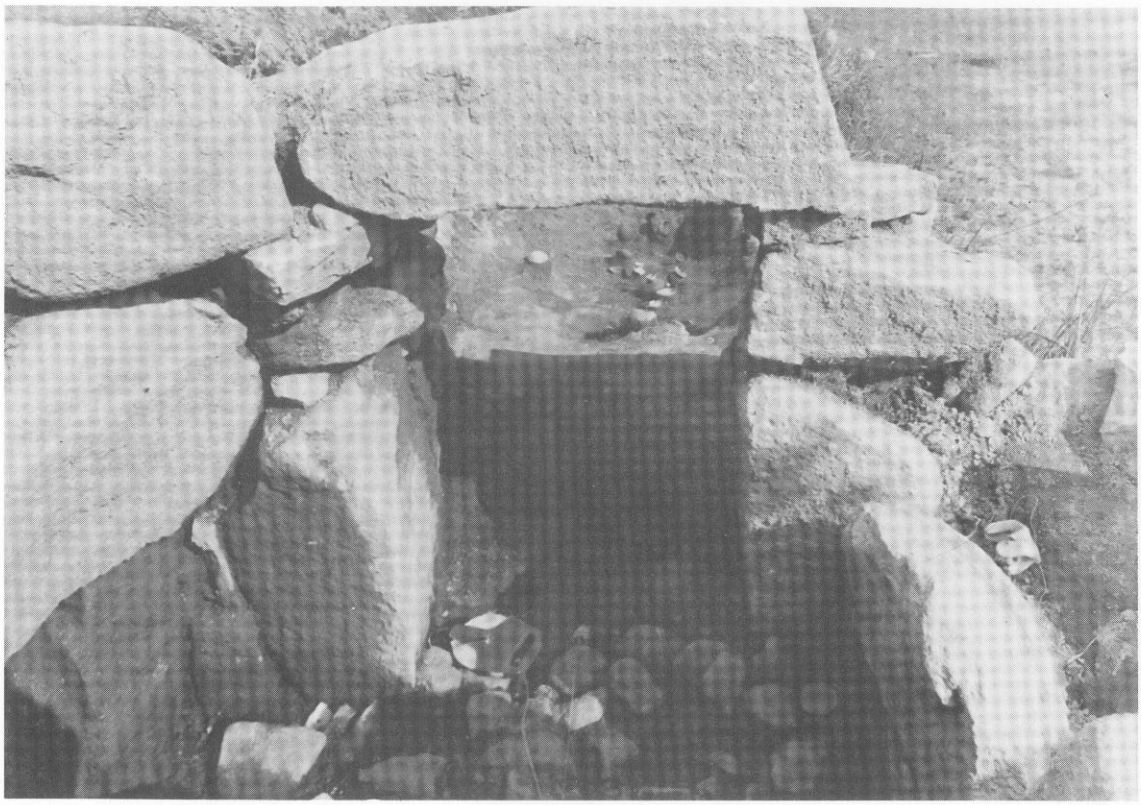
中通り10号墳 出土スエ器



中通り10号墳 出土スエ器



中通り11号墳　玄室全景



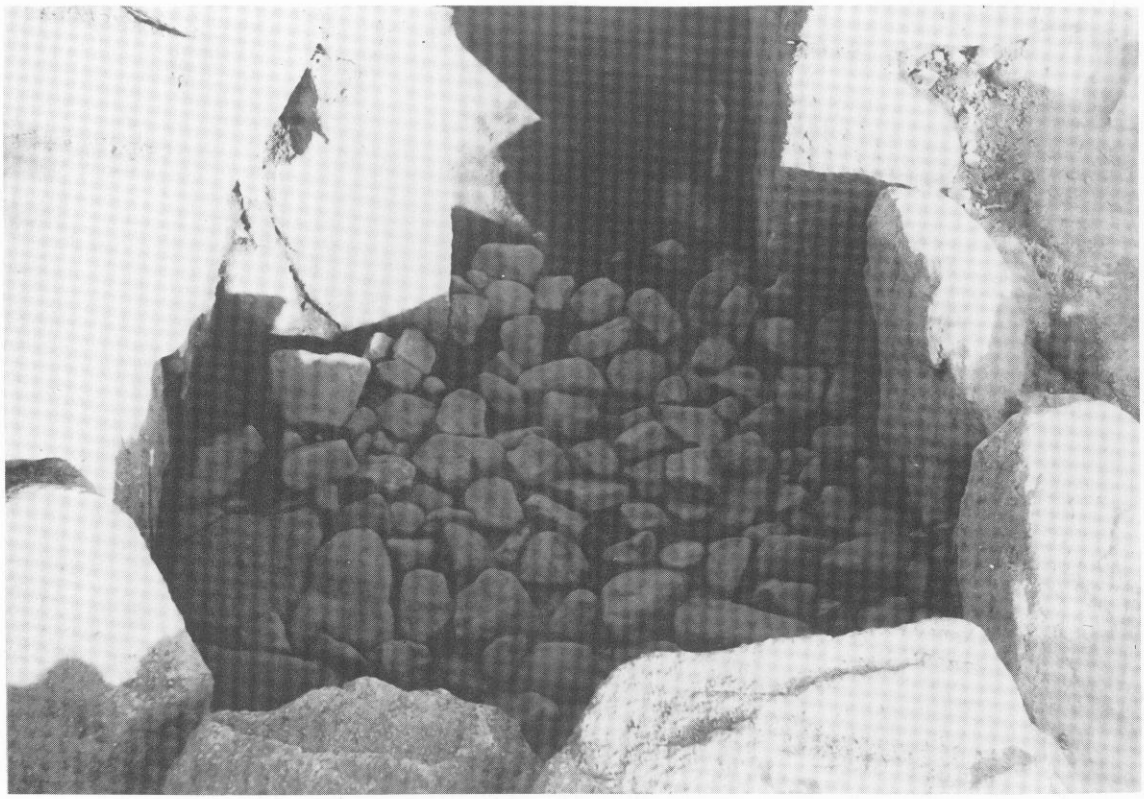
同上　玄門



中通り11号墳　近景



同上　墓道と土器類出土状況



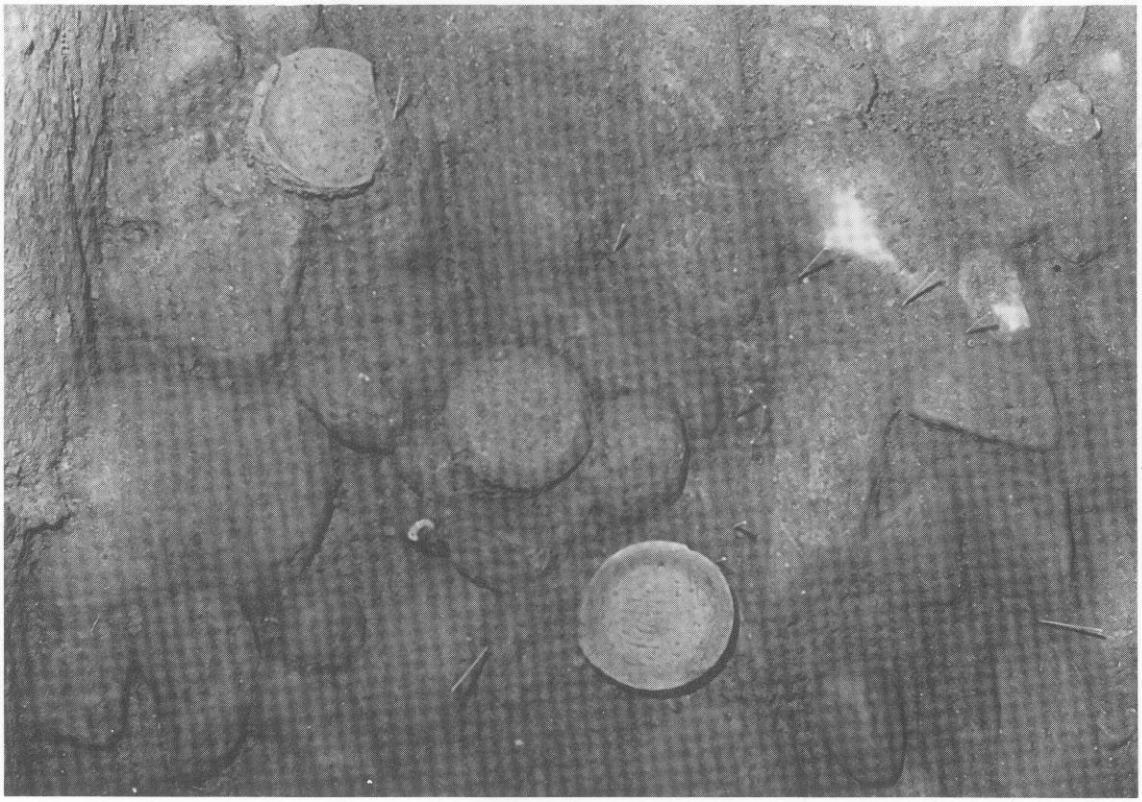
中通り11号墳　玄室床面



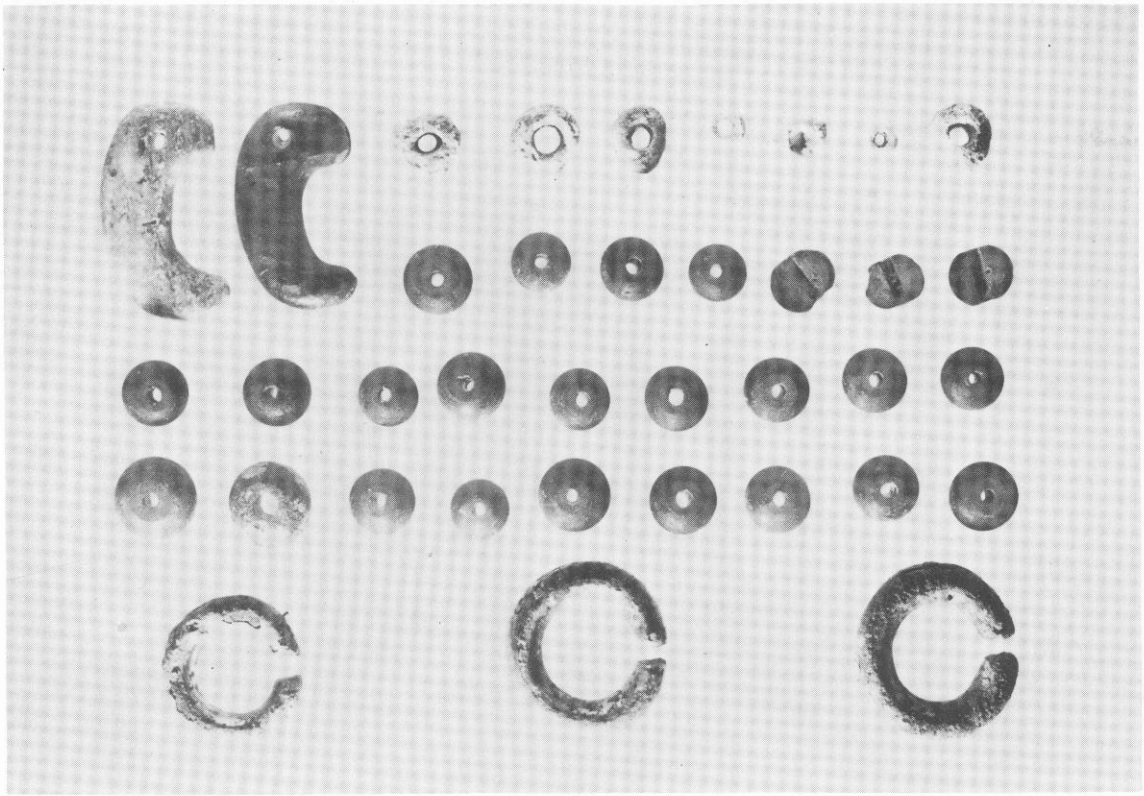
同上　墓道　土器類出土状況



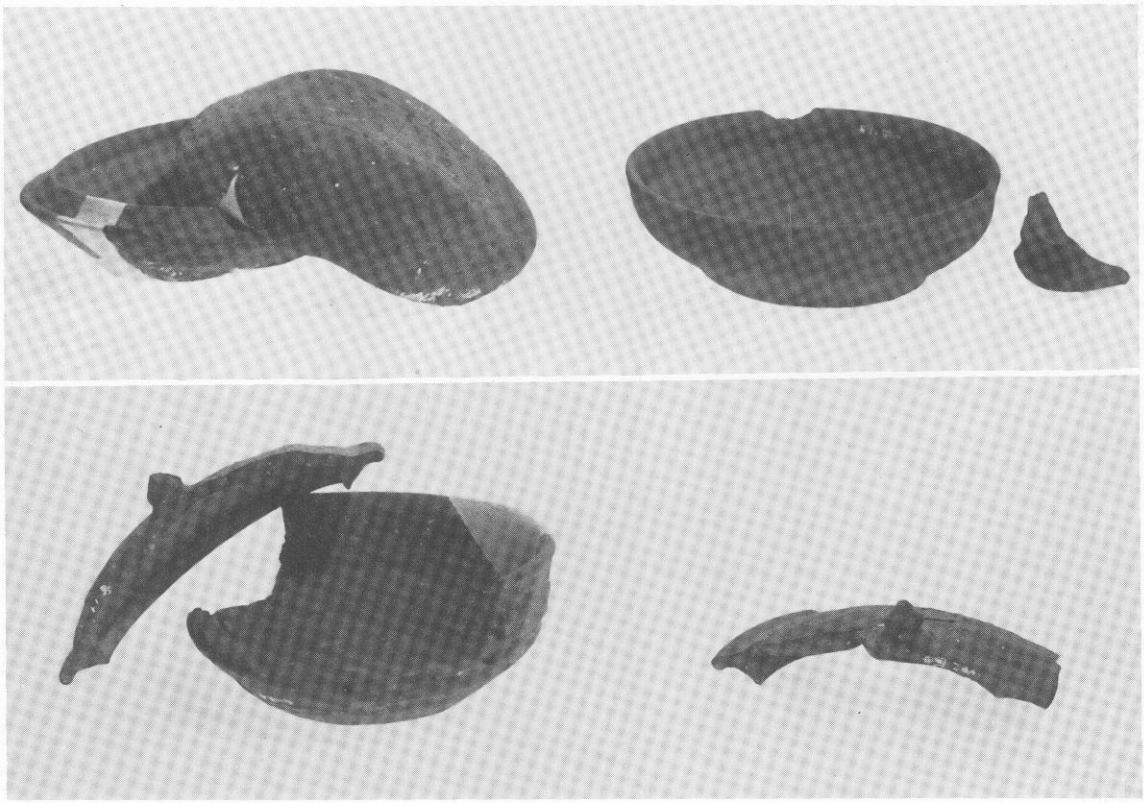
中通り11号墳　玄室床面玉類出土状況



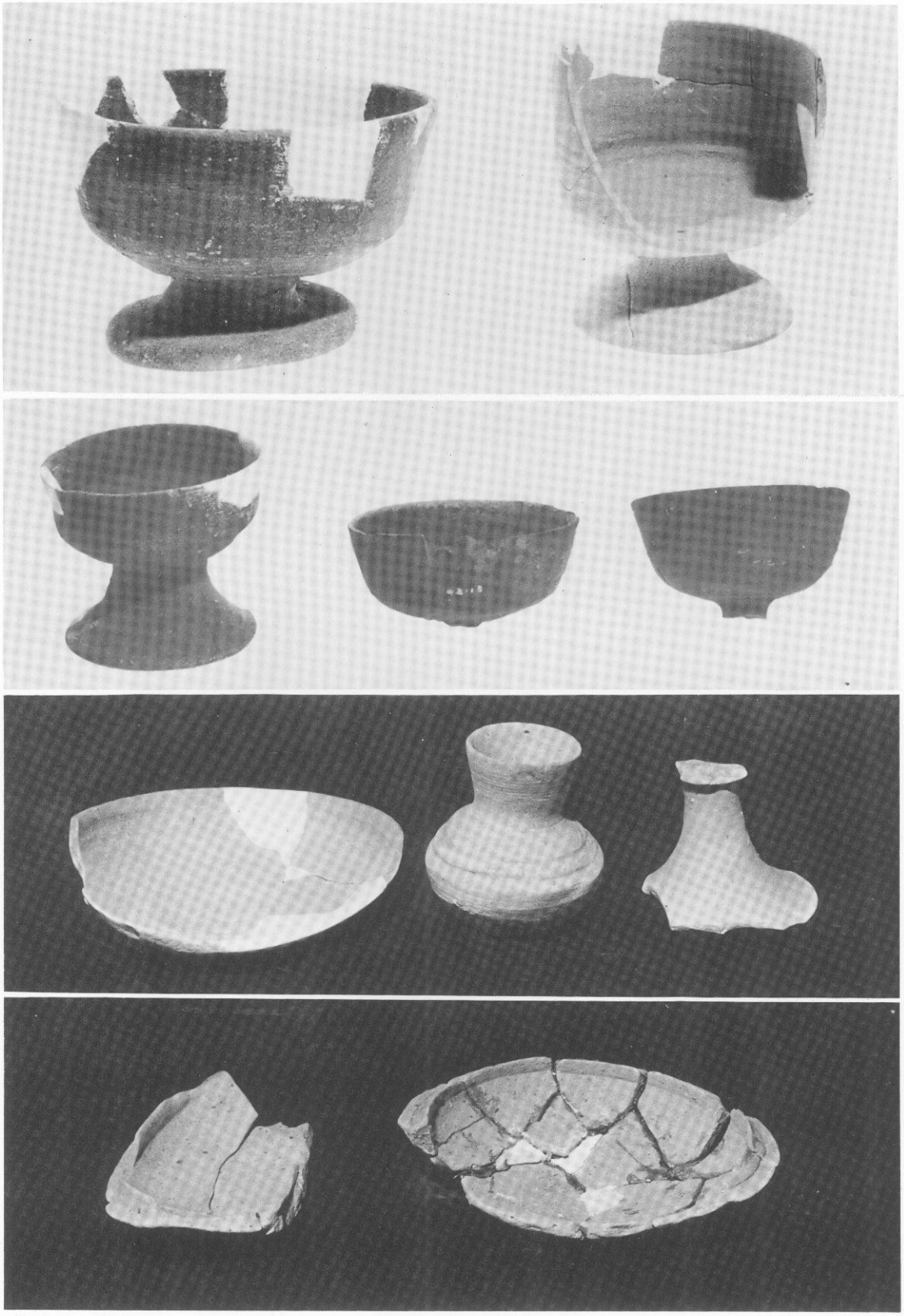
同上　遺物出土状況



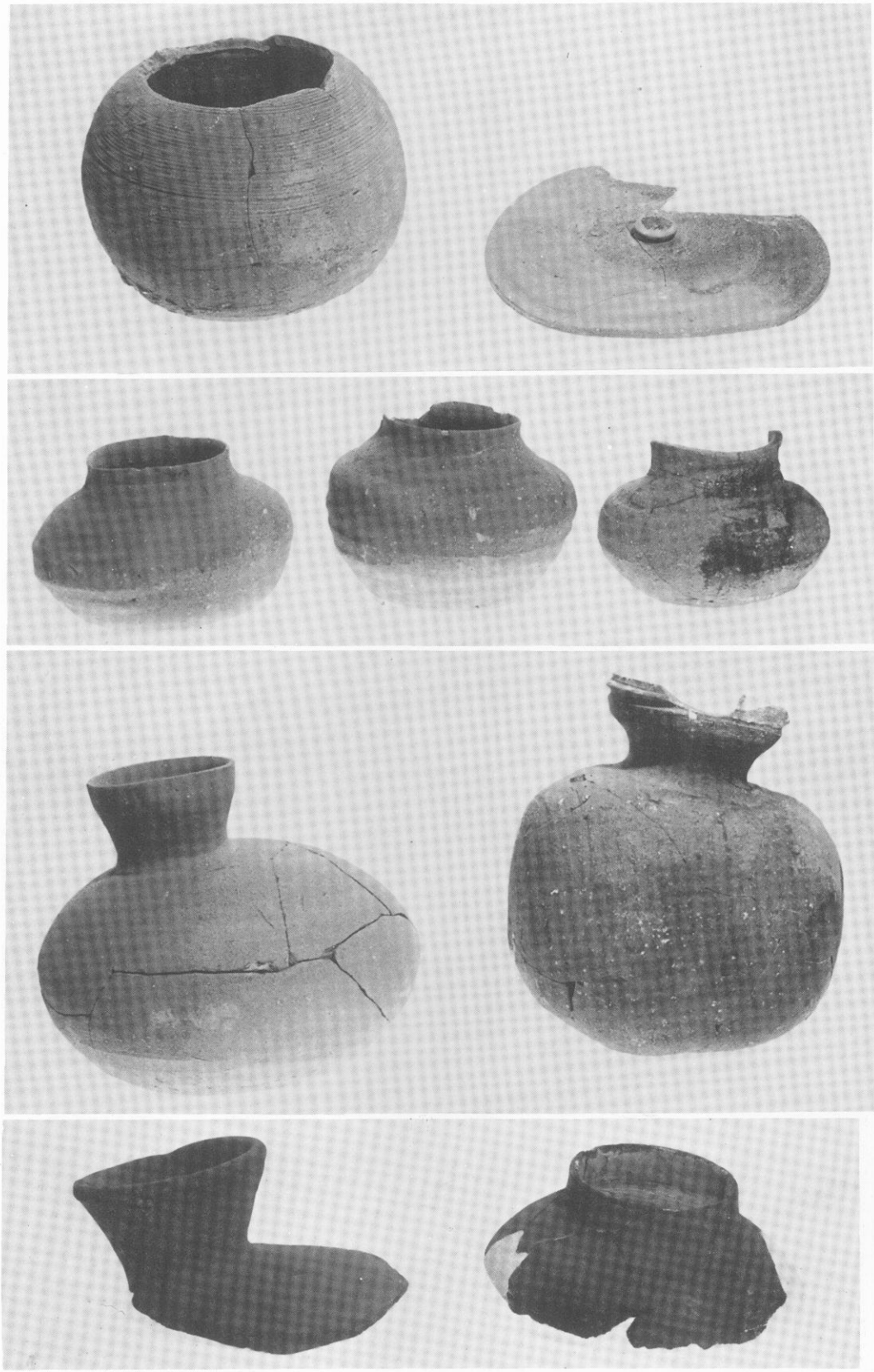
中通り11号墳　出土装身具類



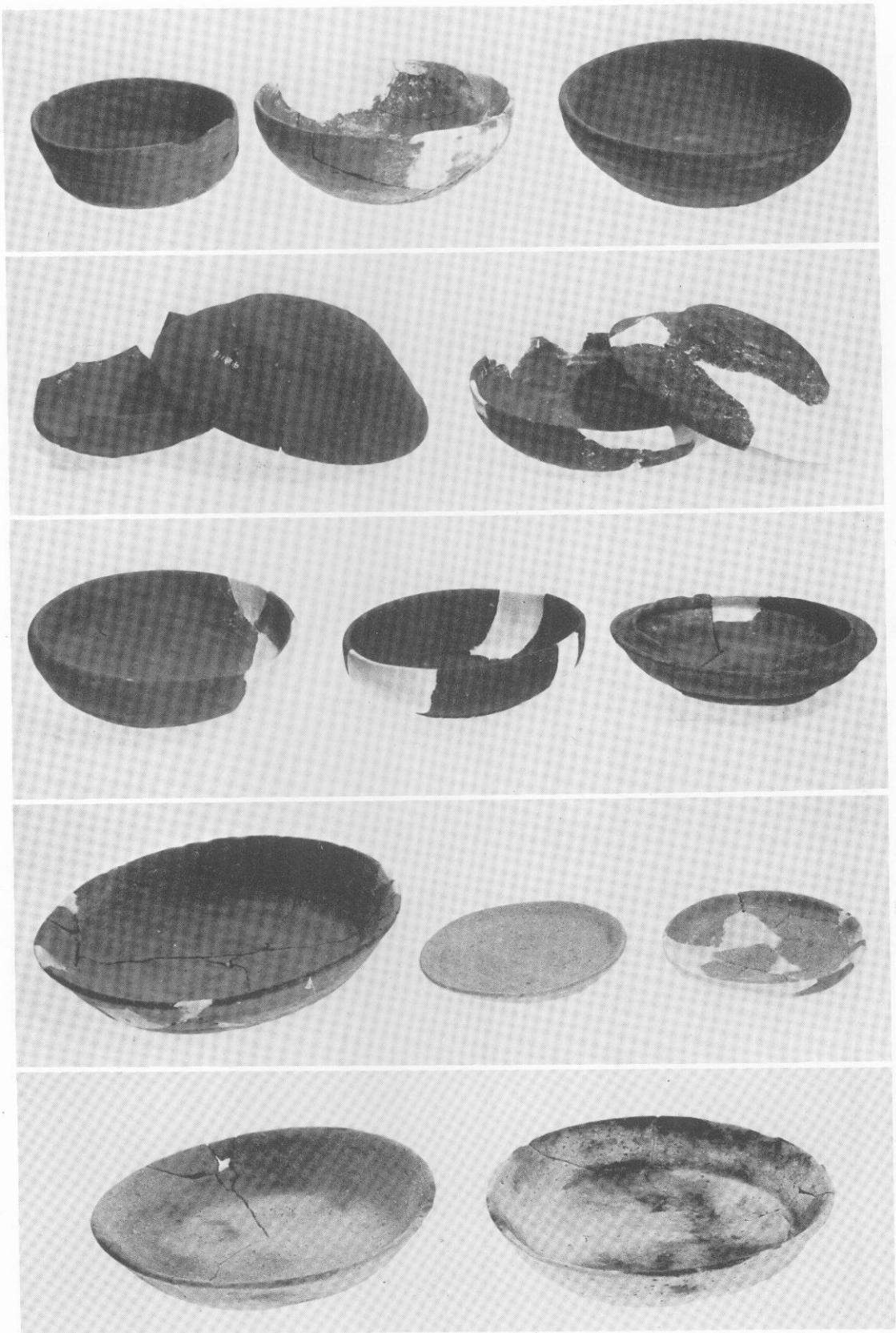
同上　出土スエ器



中通り11号墳　出土スエ器



中通り11号墳　出土スエ器



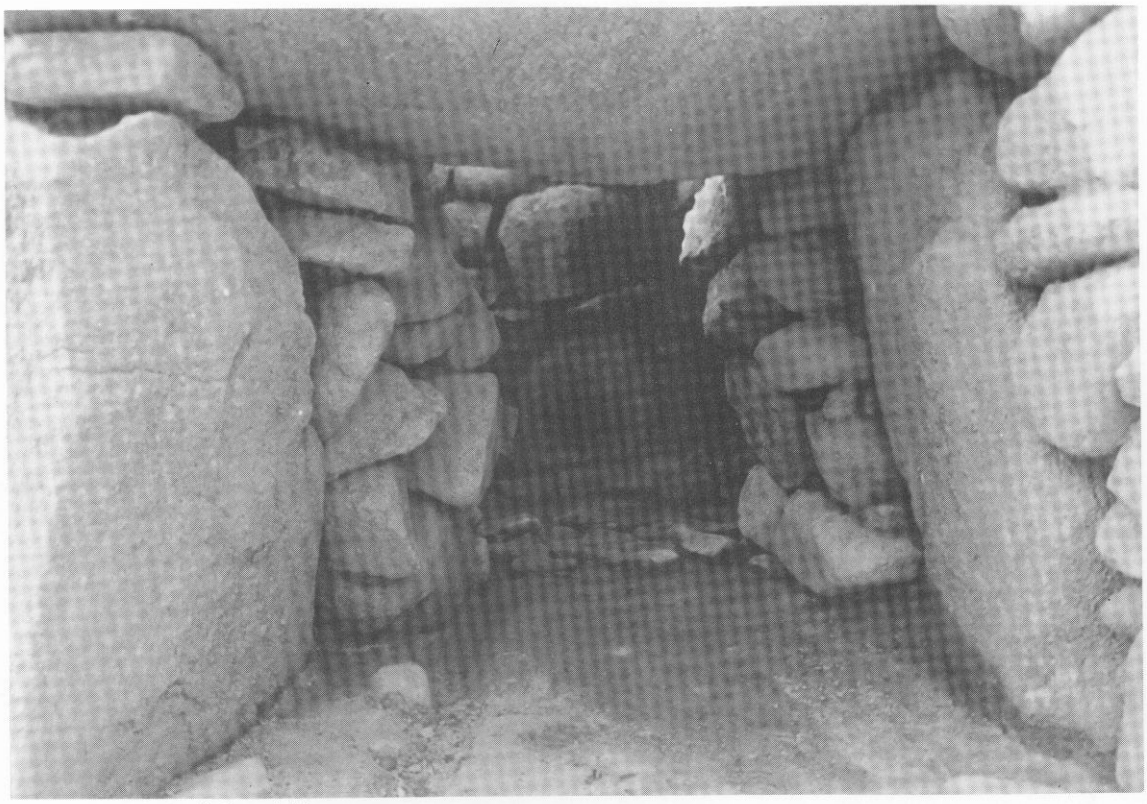
中通り11号墳　出土スエ器（上3段）ハジ器（下2段）



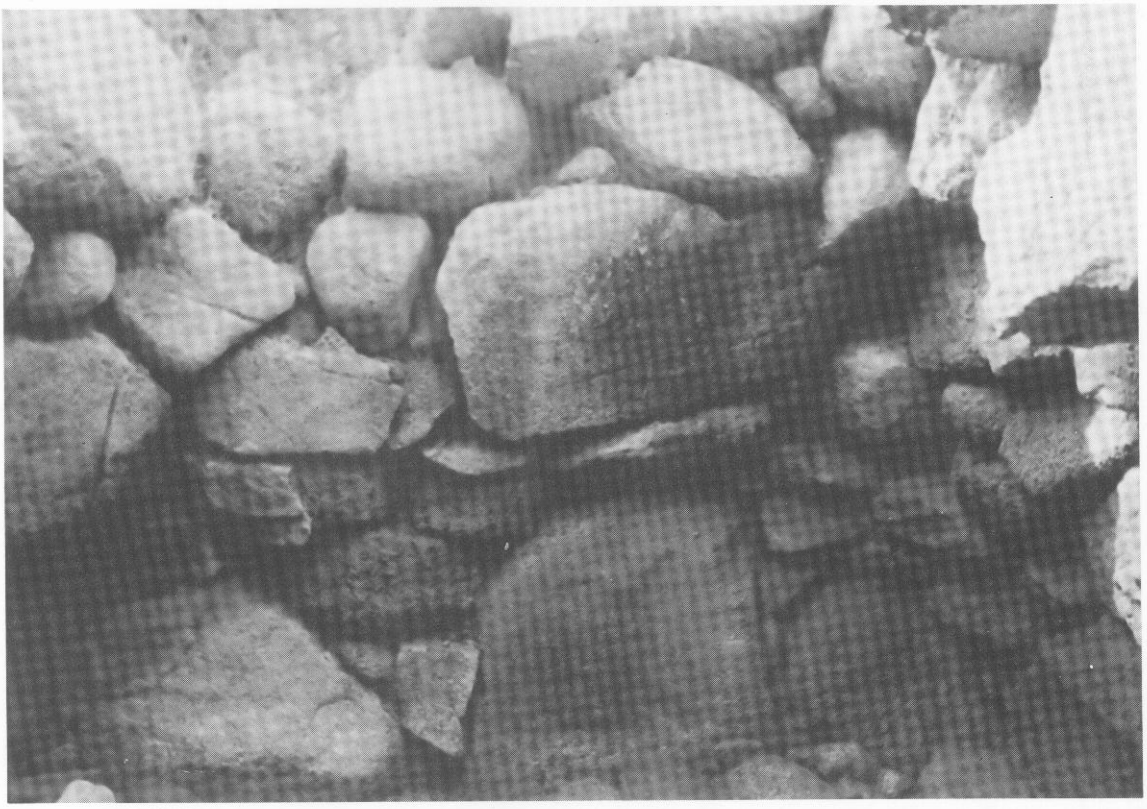
中通り12号墳　羨門と袖積み



同上　羨道



中通り12号墳　羨道と玄門



同上　玄室奥壁



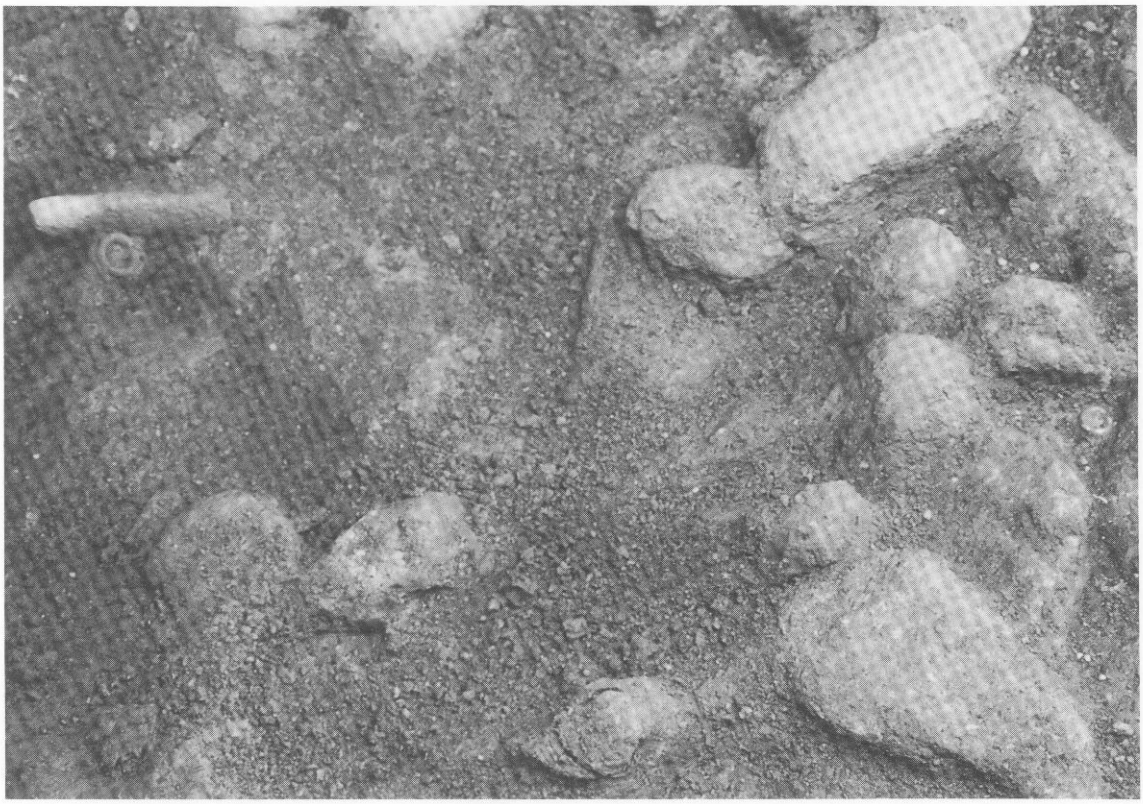
中通り12号墳　玄室床面



同上　鏃出土状況



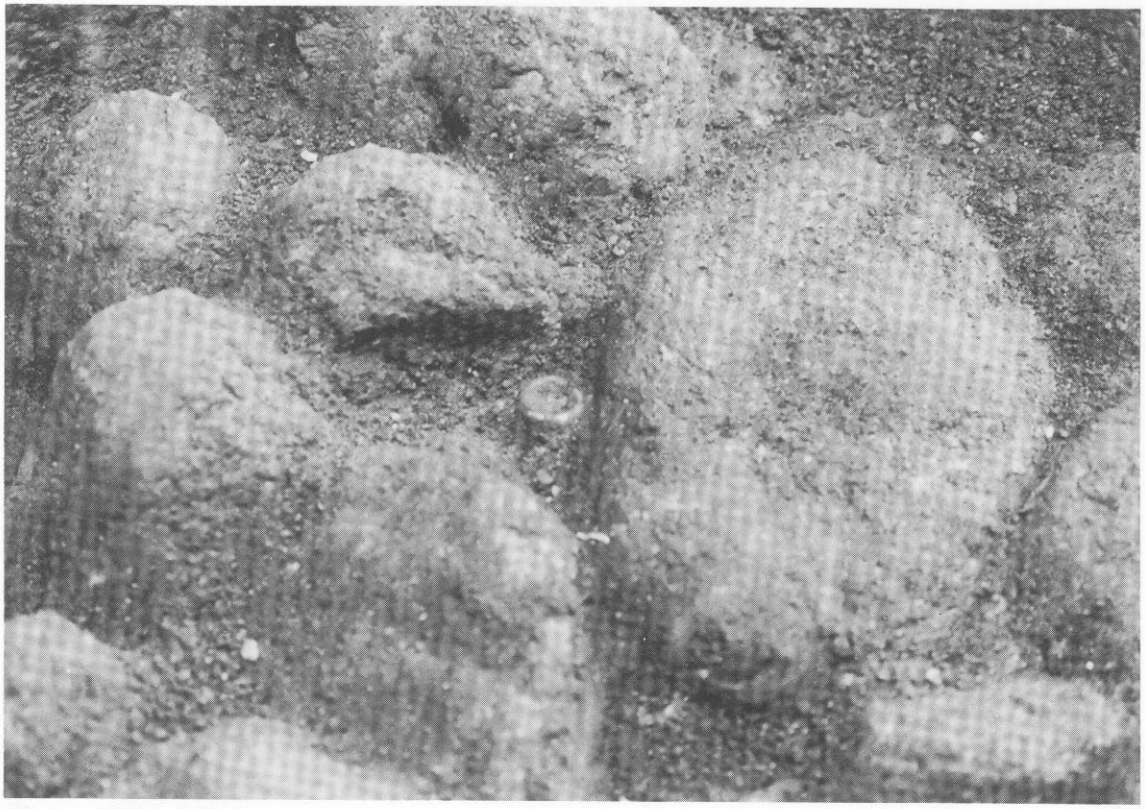
中通り12号墳　玄室内，金耳環出土状況



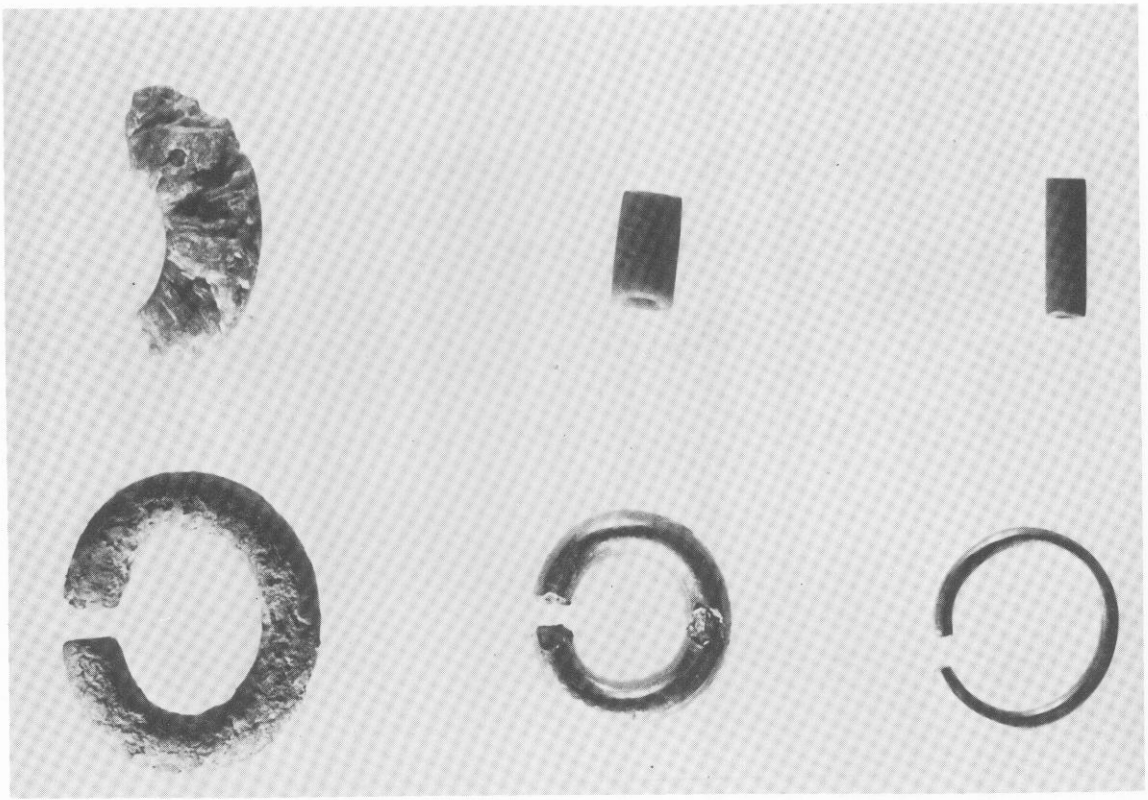
同上　耳環・鉄鏃出土状況



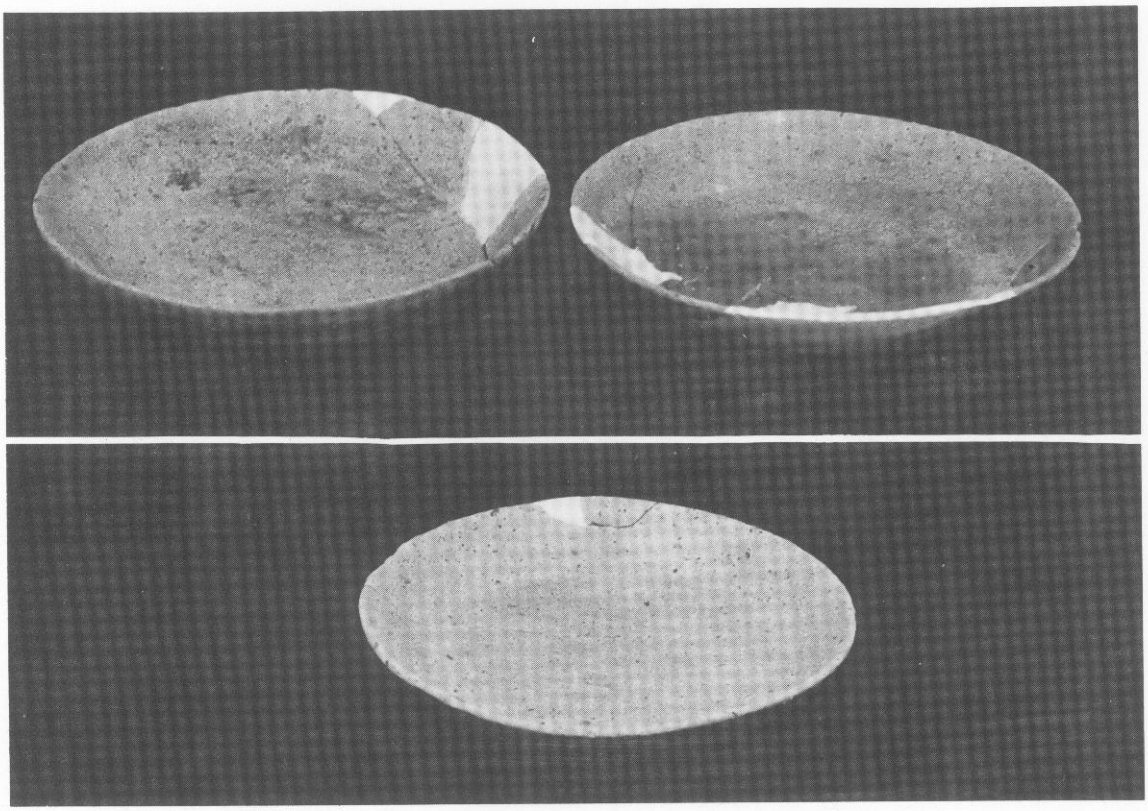
中通り12号墳　玄室内鉄鏃・勾玉出土状況



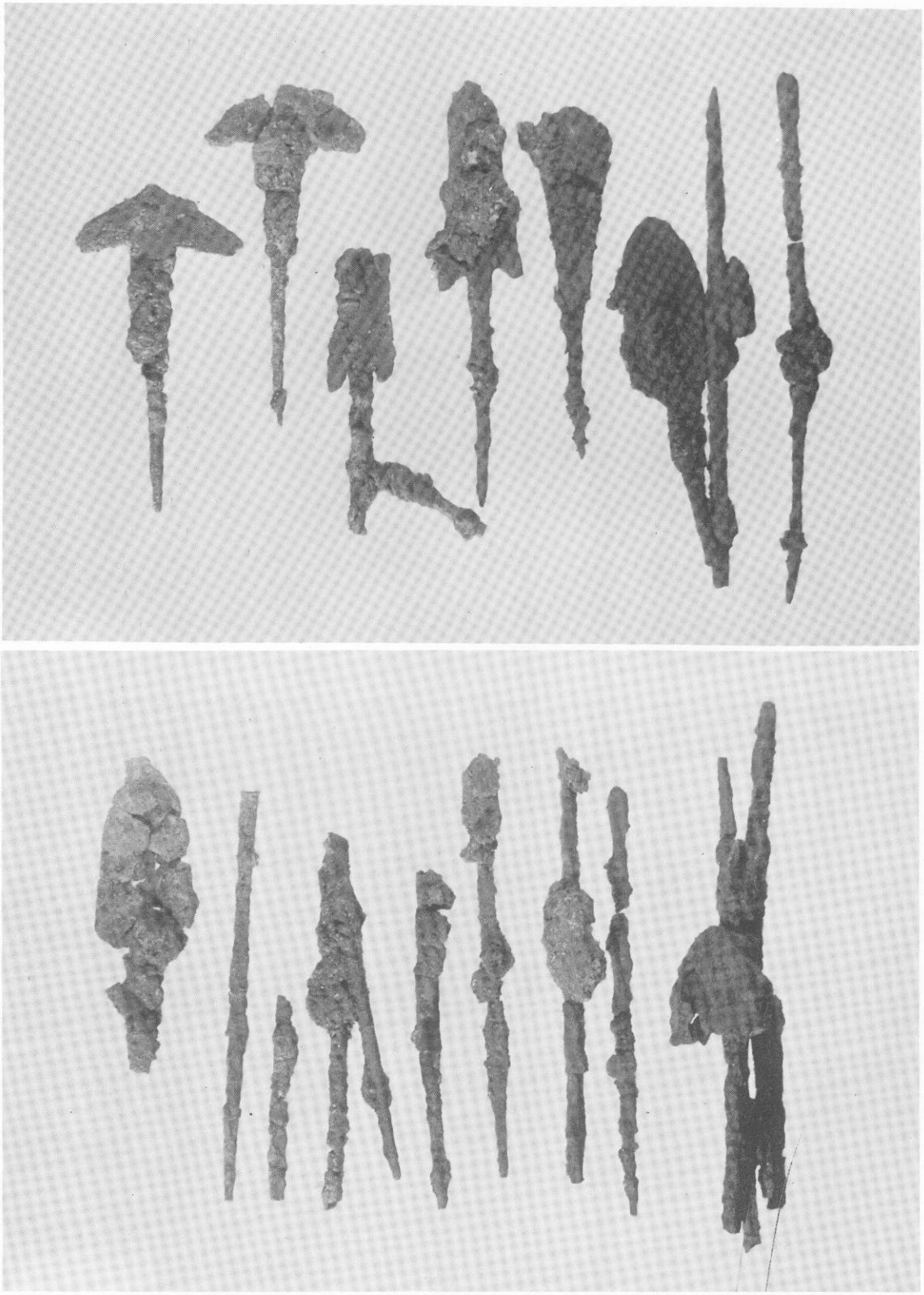
同上　耳環出土状況



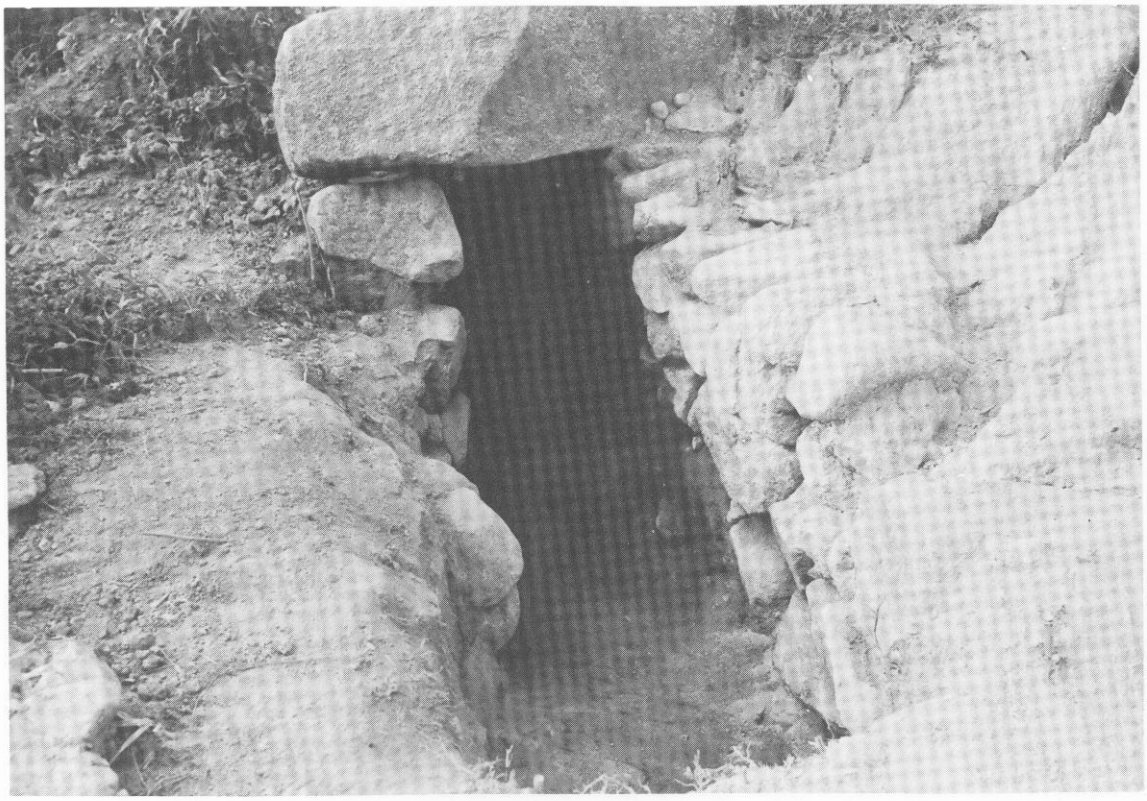
中通り12号墳　出土装身具類



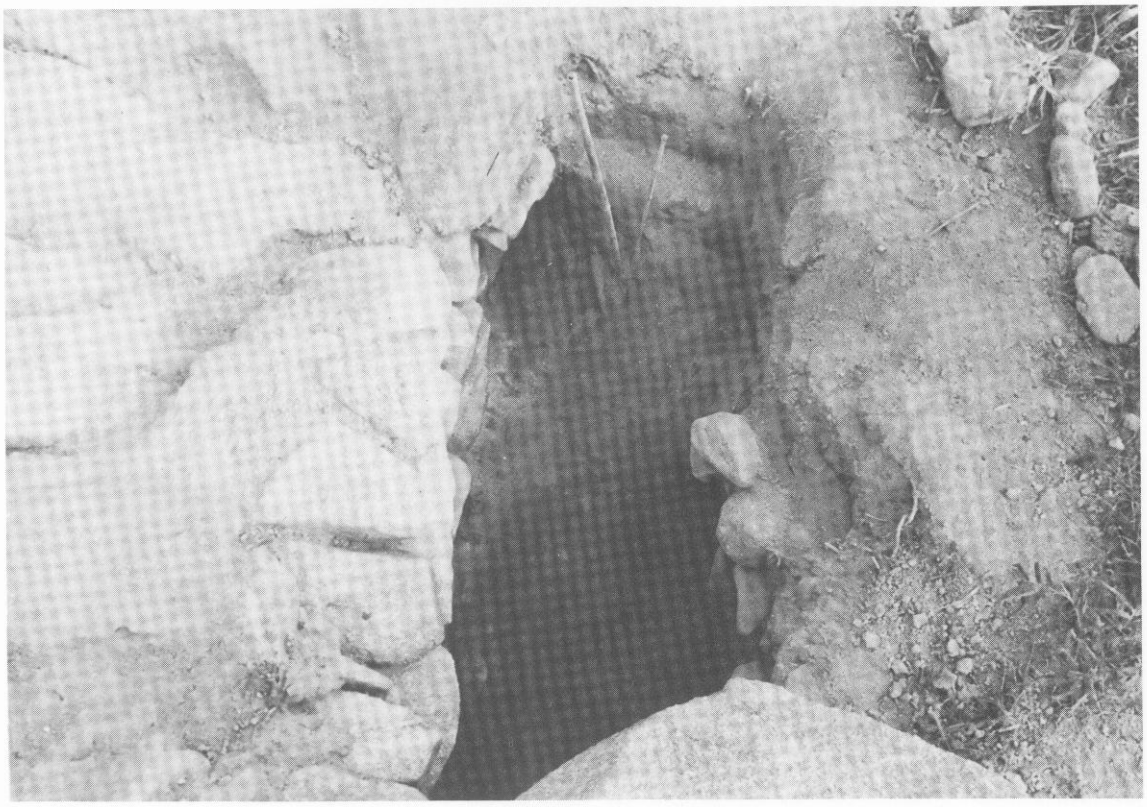
同上　出土ハジ器盤



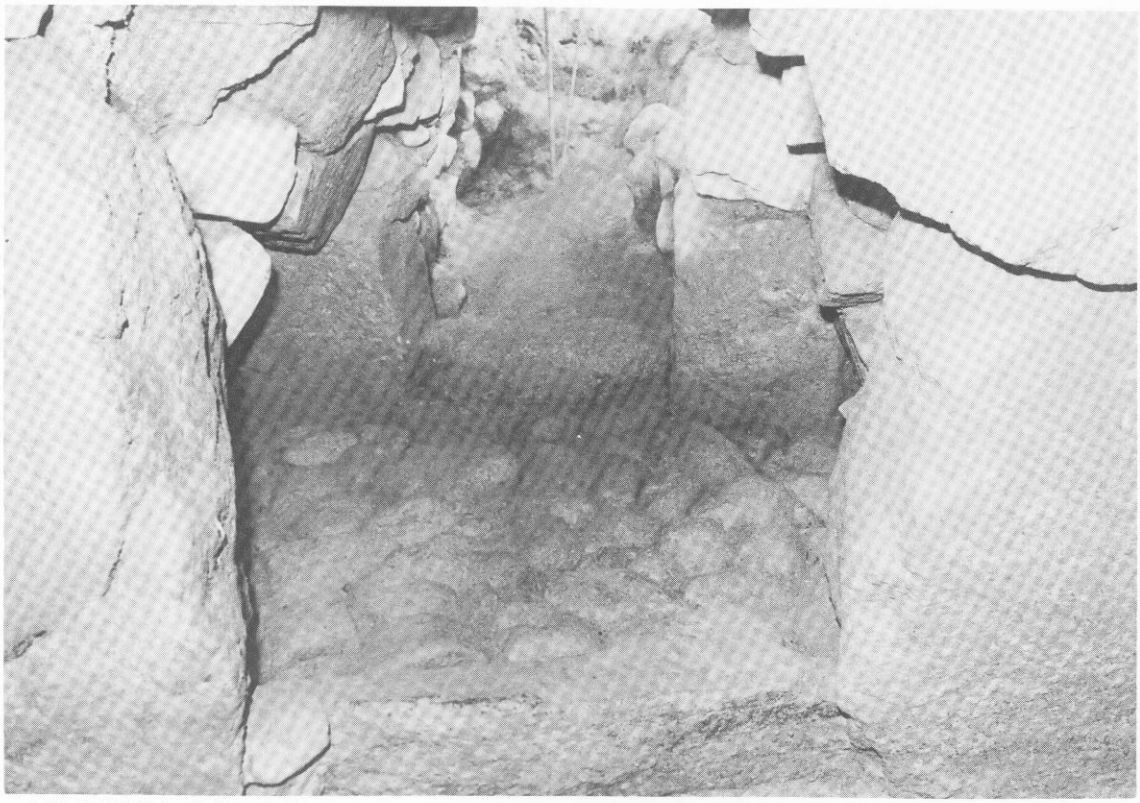
中通り12号墳　出土鉄製品（鉄鏃）



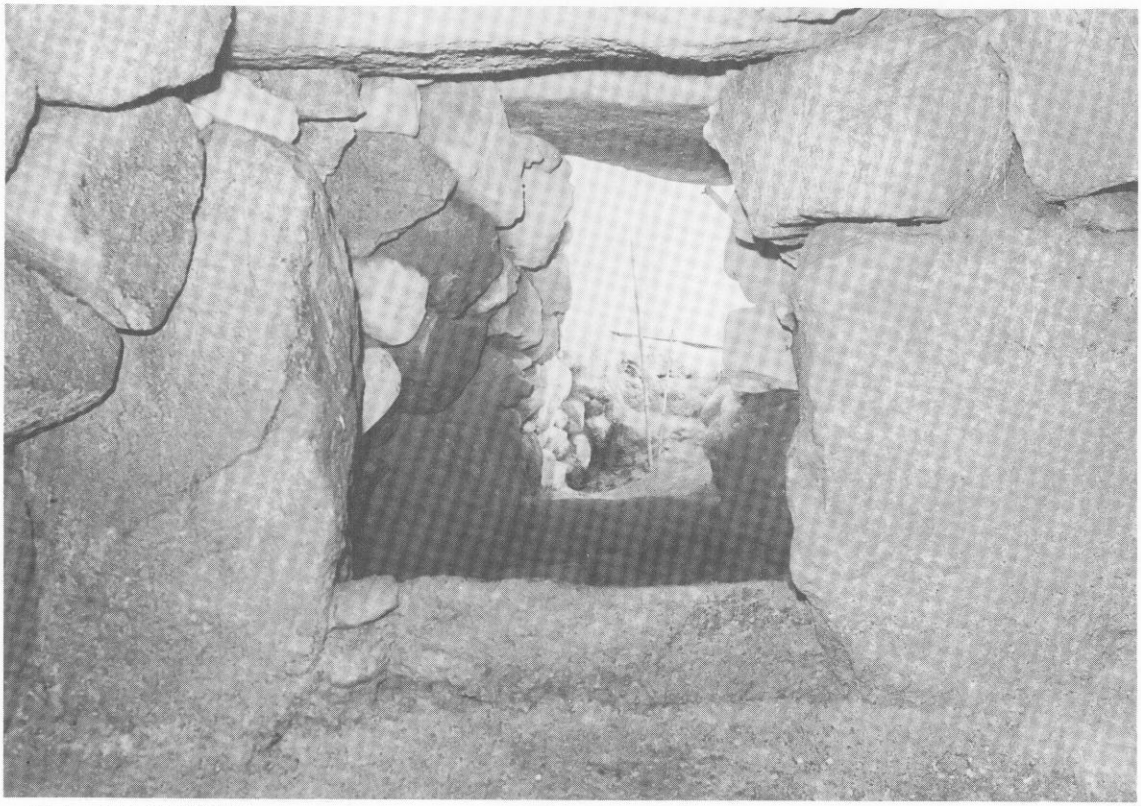
中通り13号墳　羨門全景



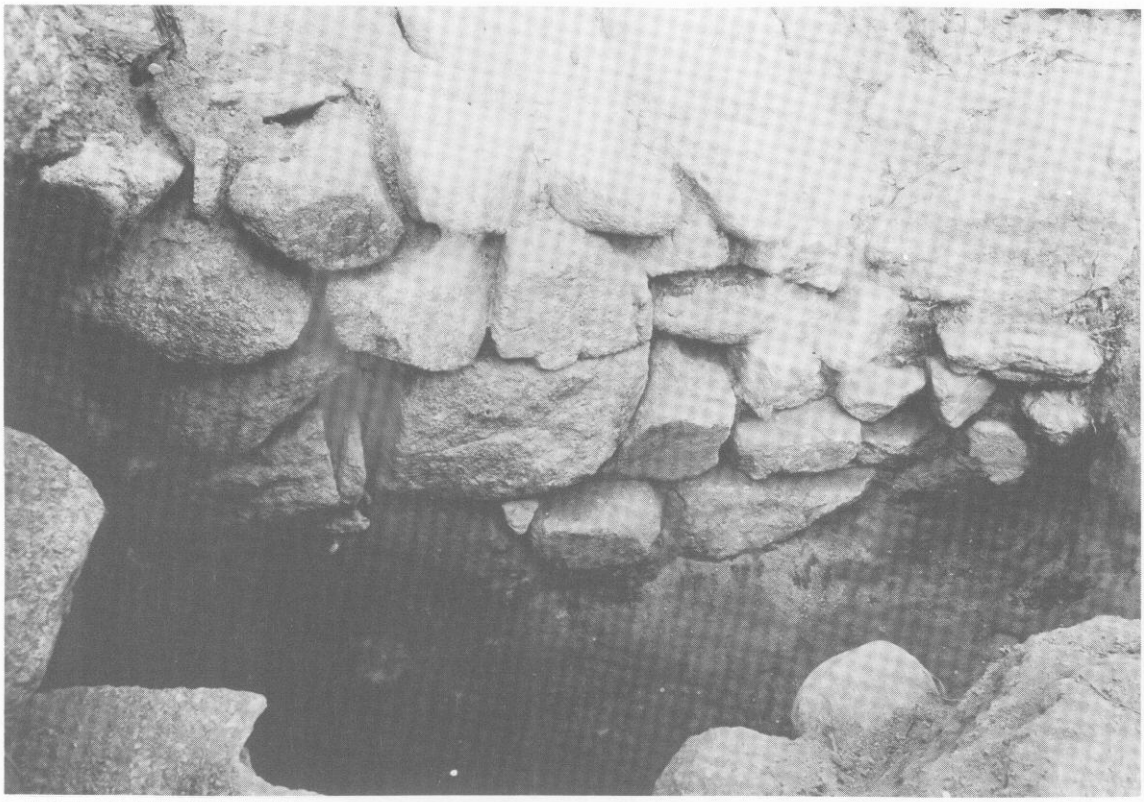
同上　墓道



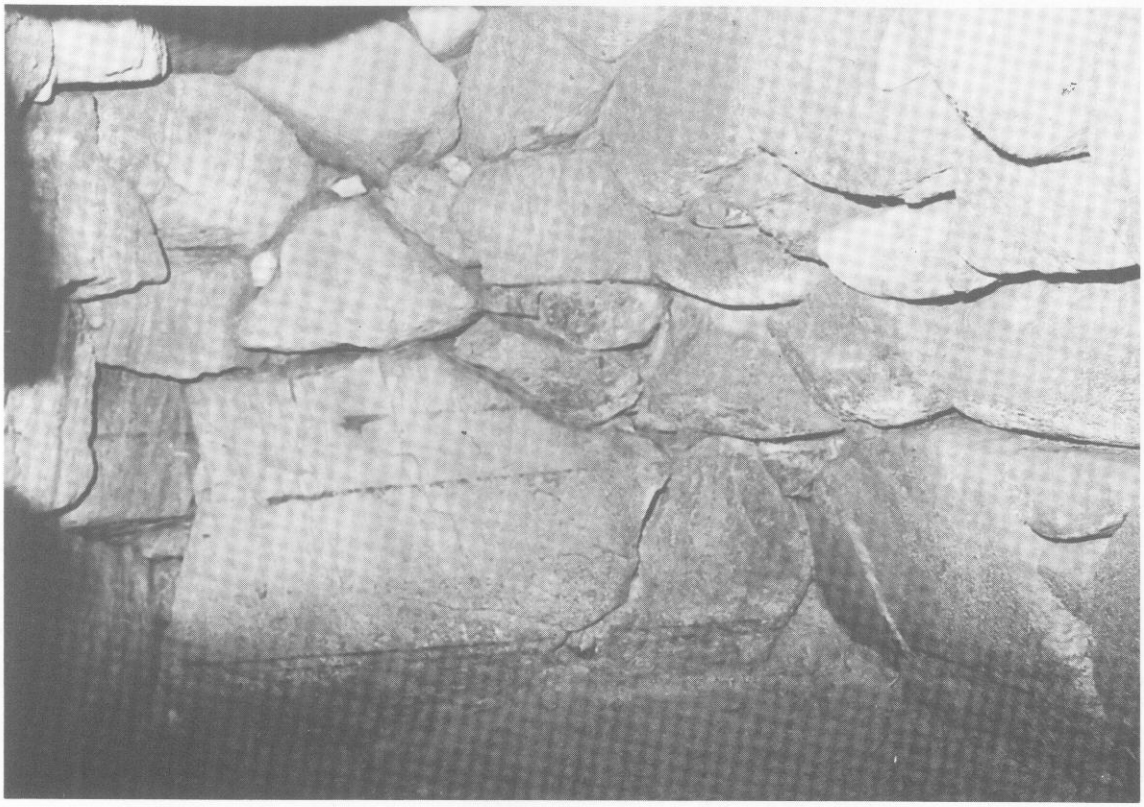
中通り13号墳　前室と墓道



同上　袖石と羨門部



中通り13号墳　墓道東袖積み



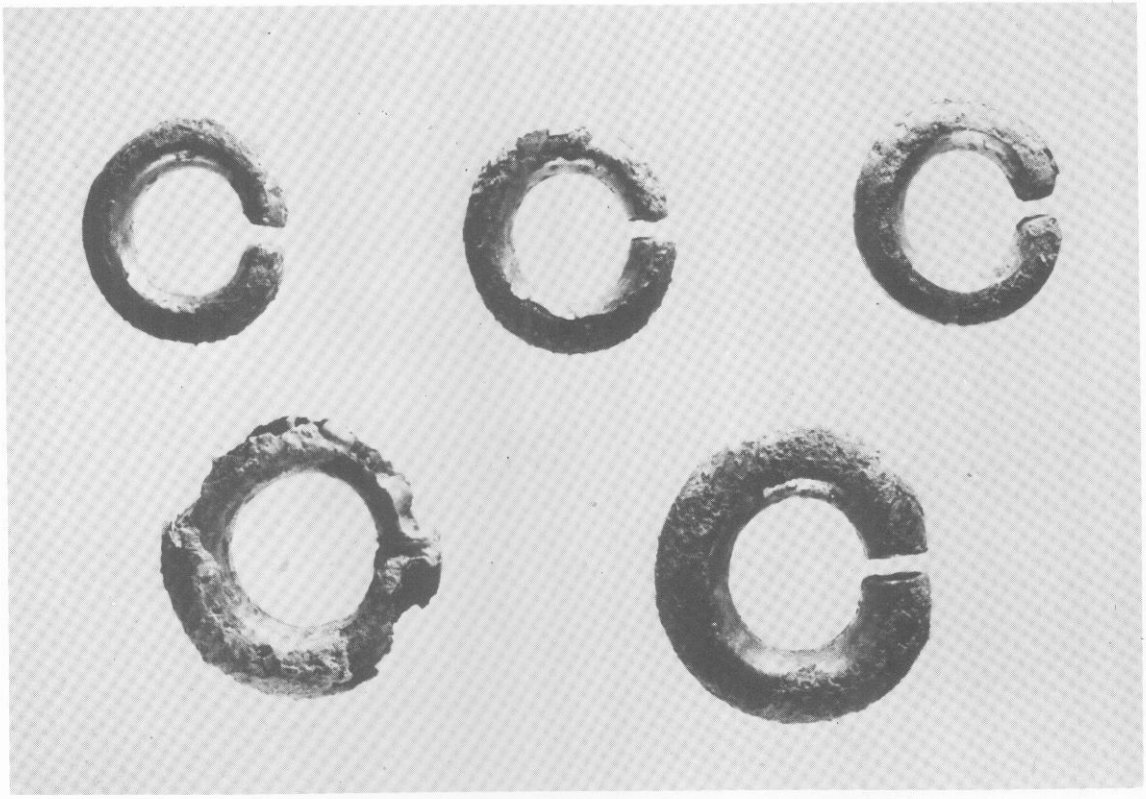
同上　玄室奥壁



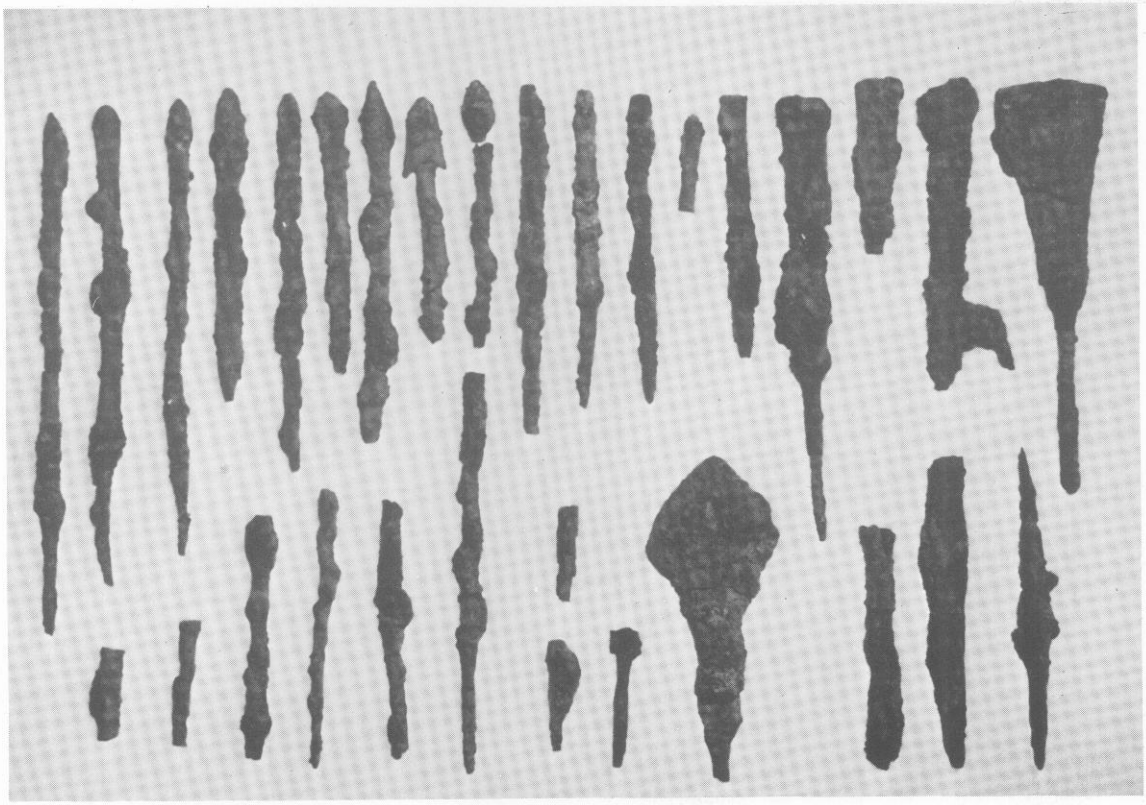
中通り13号墳　前室馬具出土状況



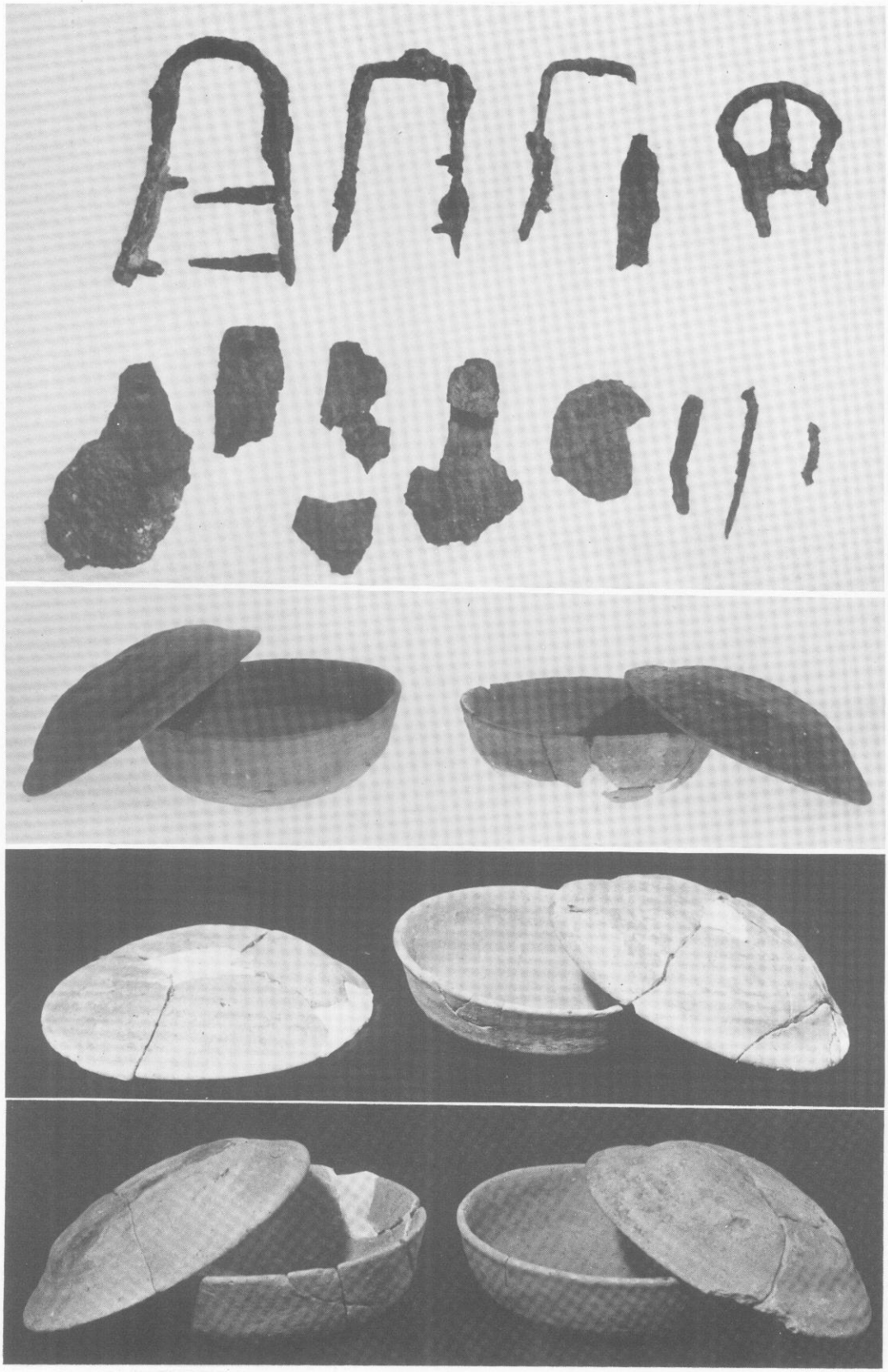
同上　土器・馬具・鉄鏃出土状況



中通り13号墳 出土耳環



同上 出土鉄製品（鉄鏃）



中通り13号墳　出土馬具・スエ器

2. 第2次発掘調査

(昭和54年度)

本文目次

1）はじめに……75

2）古墳群の調査……80

3）窯跡群の遺構と遺物……99

4）近世墓とその他の遺物…… 139

5）小　結…… 146

1) はじめに

昭和54年4月にはいり、水問題等の解決によって、原因者ミサワホーム株式会社、建設担当の竹中土木株式会社等から、大野城市大字牛頸字中通の開発休止中であった8万m² の土地について、宅地造成計画を開始したいという要望等があり、前回からの担当者であった県保護指導委員前田軍治氏と文化課松岡史課長補佐との了解等を得、4月19日、県教委文化課で、県・市・ミサワホーム・竹中土木・前回の担当者であった前田軍治氏との五者にて協議がもたれた。

それを受け、翌20日、現地に県教委文化課宮小路調査一係長、井上主任技師等の派遣を受けて、協議された結果、13号・14号・15号墳とC窯の調査を5月連休明けより開始することとなり、調査期間は1ケ月を充て、調査費用については原因者であるミサワホーム株式会社が調査費200万円を出して、大野城市教育委員会が受嘱することとなった。

また当該地域以外の他部分について、土取りのため出土していた窯跡A－1をふくめて、それ以後の協議として、この期間に再度詳細なる遺跡分布調査を行なうこととなった。

調査主体は大野城市教育委員会で、調査は県教委文化課があたることとなり、調査団の結成となった。

調査関係者はつぎの通り

総　括	大野城市教育委員会教育長	井　上　幸一郎
	大野城市教育委員会教育部長	古　賀　昭　三
	大野城市教育委員会社会教育課長	井　原　信　一
庶　務	大野城市教育委員会社会教育係長	赤　星　健　彦
	大野城市教育委員会文化財担当	後　藤　秀　規
調　査	福岡県文化財保護指導委員	前　田　軍　治
	福岡県教育委員会文化課主任技師	川　述　昭　人
	福岡県教育委員会文化課主任技師	副　島　邦　弘(調査主任)
	福岡県教育委員会文化課技師	小　池　史　哲
	福岡県教育委員会文化課技師	馬　田　弘　稔
	福岡県教育委員会文化課技師	池　辺　元　明
	大野城市教育委員会社会教育課技師	舟　山　良　一

調査途中の、5月24日、福間町の大門遺跡発掘調査現場に、不慮の事故がおこり、安全の見

直しとその対策等が行なわれ、６月19日までの１ケ月間作業を休止した。

この間、安全対策と安全教育の徹底化を策られ、発掘現場二人制の確立が行なわれ、他現場との調整等によって、他一人については、リレー方式にて行なうこととなった。

７月10日、第２回の四者協議会（県文化課、大野城市、ミサワホームK.K、竹中土木K.K）によって、詳細なる試掘の結果を基に、新たに、A－２窯、B窯等の遺構確認が行なわれ、追加契約 800万円（整理、報告書を含み）を行ない、総額1000万円の調査費となった。

調査は約９月中旬までの２ケ月間を充てることとなった。

今回の調査では、牛頸区長森山鉄男氏、旧地権者、高田秀之輔、高田正孝両氏には大変な協力を得た。発掘作業に関しては、ミサワホーム株式会社江炫湧氏、竹中土木株式会社野村朔生氏、道脇勉氏をはじめとする牛頸中通作業事務所方々には、作業員手配から全般的援助を受けた。また筑紫丘高校郷土研究部の諸君には、暑い最中に自主参加していただき記して謝する。

発掘作業には地元牛頸区住民各位の協力があった。その他関係諸氏に深甚なる謝意を表わすしだいである。

では、日誌をもって、発掘作業を振り返ってみよう。

５月７日　機材搬入

５月11日～５月15日　伐採作業

伐採後写真撮影全景

５月16日　13号墳を中心に発掘作業にはいる。十字トレンチを設定する。約 1/4 を総めくりとする。

５月17日　14号墳の天井石を上げるため、重機を入れる。13号墳は継続中なり。

５月18日　13号墳は周溝と石室内の調査、羨道部についても詳細な調査をはじめる。

５月19日　13号墳はほぼ仕上がる。実測のための割付の杭を打つ。

５月20日　14号墳を中心に作業をおこなう。15号墳といわれる部分にトレンチを入れたが、古墳ではなかった。しかし、近世墓を確認した。

５月22日　14号墳を中心に作業、13号墳は写真撮影後、実測中なり。

５月23日　近世墓の検出をはかる。14号墳、墳丘たてわり。

５月24日　昨日にひきつづき近世墓と14号墳石室内にて遺物検出、福間町で事故発生により、本庁へ至急集合のこと電話あり、上野技師殉職する。

５月25日～６月18日　上野技師殉職にて、葬儀等と現場の安全対策及び安全教育の見直し等にて１ケ月休止する。

６月19日　現場再開、現場復旧。

６月20日　伐採等をやりなおす。梅雨にはいり、ぐずついた天気である。

6月23日　14号墳及び近世墓を中心に作業を行なう。13号墳は実測中なり。

6月24日　14号墳、写真撮影の為、清掃を行なう。

6月26日　前日の雨のため、現場に水がたまる水汲を行なう。

6月27日～7月2日　本格的な梅雨のため作業中止

7月3日　現場復旧作業

7月5日　近世墓石組実測を開始、C窯伐採にはいる。

7月6日　C窯伐採を続行する。近世墓実測を終了する。

7月7日　近世墓の石組をはずす。

7月10日　A－1号窯本体部の調査にはいる。須恵器Ⅳの時期が1次床面。

7月11日　A－1号窯本体、窯本体及び灰原にトレンチを設定する。

7月12日　本日梅雨明け宣言あり、Section Belt を残し半分をほり下げる。写真撮影

7月13日　B．M（73,252m）を移動する。A－1窯横ベンチを設定にもってくる。

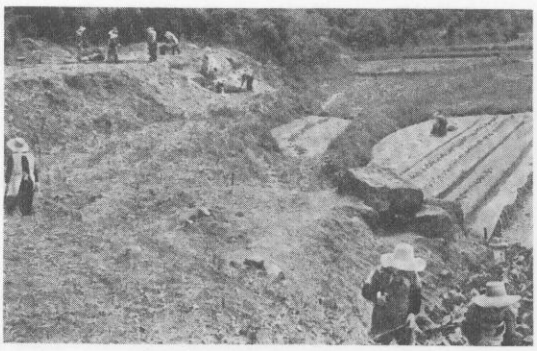
7月14日　A－1窯第1灰層を終了し、黄褐色粘質土迄で掘り下げる。

7月16日　A－1窯本体、半分を縦位方向に掘り下げ窯床まで掘り下げる。

7月17日　戻り梅雨にて作業中止、今後方針を打合わせる。

7月18日　現場復旧作業

7月19日　A－1窯断面を写真撮影



第66図　中通13・14号墳発掘作業風景



第67図　重機を使用しての表土剝ぎ（B窯）



第68図　A-1窯発掘作業風景

7月20日　B窯については伐採後に調査とし、A窯中心に機械力を入れて表土を剝ぐこととする。

7月23日　A区に重機にて表土を剝ぐ、重機導入により、作業員は土器洗い。窯1基検出する。(A－2窯と命名する。)

7月24日　途中、バケツをひっくりかえした様な通り雨、重機にて表土剝ぎを中止、土器洗いを中心に行なう。

7月25日　重機A地点からB地点に移動する。A地点現場復旧、A－1窯とA－2窯との関係を見るため、A－2窯の全貌を表面にてつかむため、全体をカキイタにて掻く。

7月26日　A－2窯掘り始める。A－1窯実測と焚口部分詳細な調査を行ない、柱穴を検出する。B地点の表土剝ぎ終り、窯1基と思われる。

7月27日　重機をC地点にはいる。A－1窯は床面出して、実測終了する。

7月28日　A－1窯、全景の写真撮影。A－2窯2次の床まで出す。窯本体を横断する断面を残しつつ作業を行なう。

7月30日　C窯にはいる。伐採後、カキイタにて表土を集める。

7月31日　C窯本体は推定した通りで、発掘作業にはいる。

8月1日　C窯本体、最終床面、坩と蓋との形品が出土し、窯入れの状態で杯身が出土した。

8月2日　C窯本体の約$\frac{1}{2}$（窯の中央部から窯尻及び排水溝等）をほぼ検出した。

8月3日　土器選別

8月4日　煙出し及び窯尻部分詳細な調査にはいる。窯中央部には、窯床を切って、後世の袋状の竪穴が掘られてあった。

8月6日　小雨のため、土器洗いをプレハブにて行なう。

8月7日　煙出しは、2孔の穴をもつもので、排水溝を弧状を呈している。

8月8日　煙出し、排水溝を清掃し写真撮影

8月9日　B.M移動、66,929mと割付開始、1/20用水糸をくばる。実測開始。

8月10日　A－2窯の煙出しを検出する。煙出し孔4つである。

8月11日　煙出し部写真撮影

8月12日～8月16日　作業中止（旧盆期間）

8月17日　台風接近の為、午前中にて作業中止

8月18日　灰原2Tを設定する。発掘を開始する。

8月20日　A－2窯本体を掘りはじめる。灰原に1Tを設定する。

8月22日　A－2窯と灰原を掘る。

8月23日　窯本体を掘り上がる。しかし、夕立によって、現場復旧作業。

8月24日～8月26日　土器洗い（室内作業）。

8月27日　台風の為、作業中止。

8月28日　A－2窯焚口を出す。

8月29日　A－2窯、上面の焚口で2回と下面焚口の2回焼成している。始めは下面でそして1度に埋め、約4m短かくして上面で焚口である。

8月30日　A－2窯の断面にて明瞭な線を押えることができる。

8月31日　窯全貌の写真及び部分写真、15：00より夕立にて作業中止する。

9月1日　夕立によって、2Tの中に流土が堆積したものを除去する。

9月3日　A－2窯の断面壁を除去する。清掃後写真撮影、午後から実測と補足調査。

9月4日　台風の為作業中止、本庁へ出る。

9月5日　B地点B窯本体の調査と煙出しを検出する。A－2窯実測。

9月6日～9月8日　安全対策の為の研修。

9月11日　煙出し写真撮影（B窯）A－2窯実測。

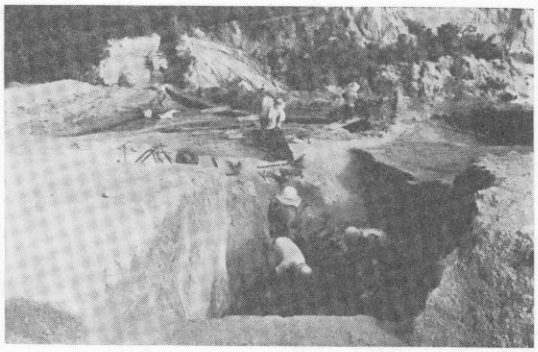
9月12日　写真撮影、空中写真撮影A－1、A－2窯。

9月13日　A－2窯割付。

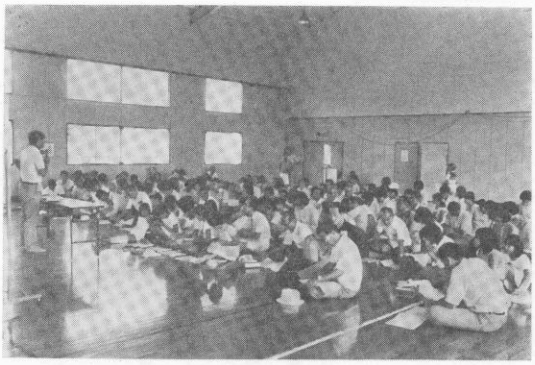
9月14日　清掃及び写真撮影（B窯）煙出し等微細写真、窯中に煙出し。

9月15日　B窯、最初床を出す。A－2窯実測中。

9月16日　現場説明会を行なう。南区コミュニティセンター約200名の参加。午後より発掘調査及び清掃、完全に掘り上がる。



第69図　A-2窯発掘作業風景



第70図　現地説明会（南コミュニティセンター）



第71図　現地説明会風景（9月16日B窯）

9月17日　　B窯全貌写真撮影、対岸から写真撮影、A－2窯終了する。

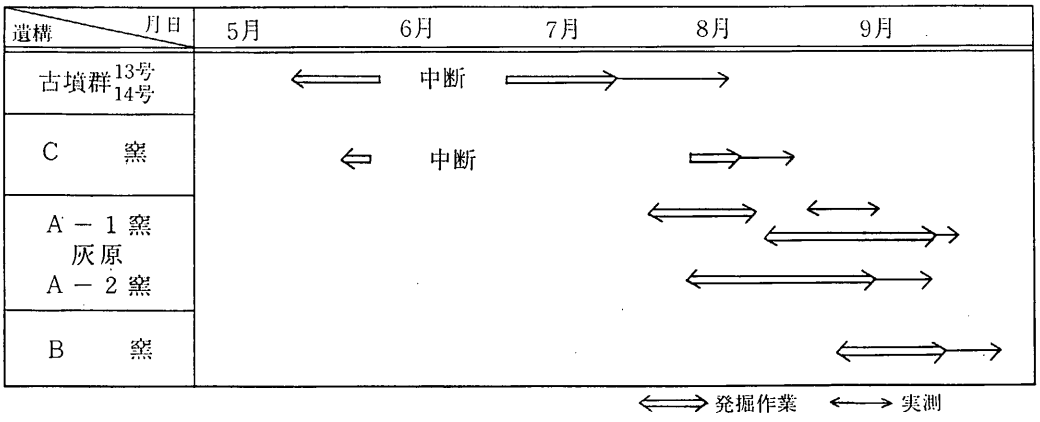
9月18日　　B窯割付及び実測する。

9月19日　　B窯実測中。

9月20日　　長かった牛頸中通遺跡群の調査も本日をもって終了する。機材搬出する。

次節より、遺構と遺物の説明にうつる。　　（副島）

第3表　中　通　遺　跡　工　程　表（第2次調査）



2）古墳群の調査

1．13号墳・14号墳の立地の概要

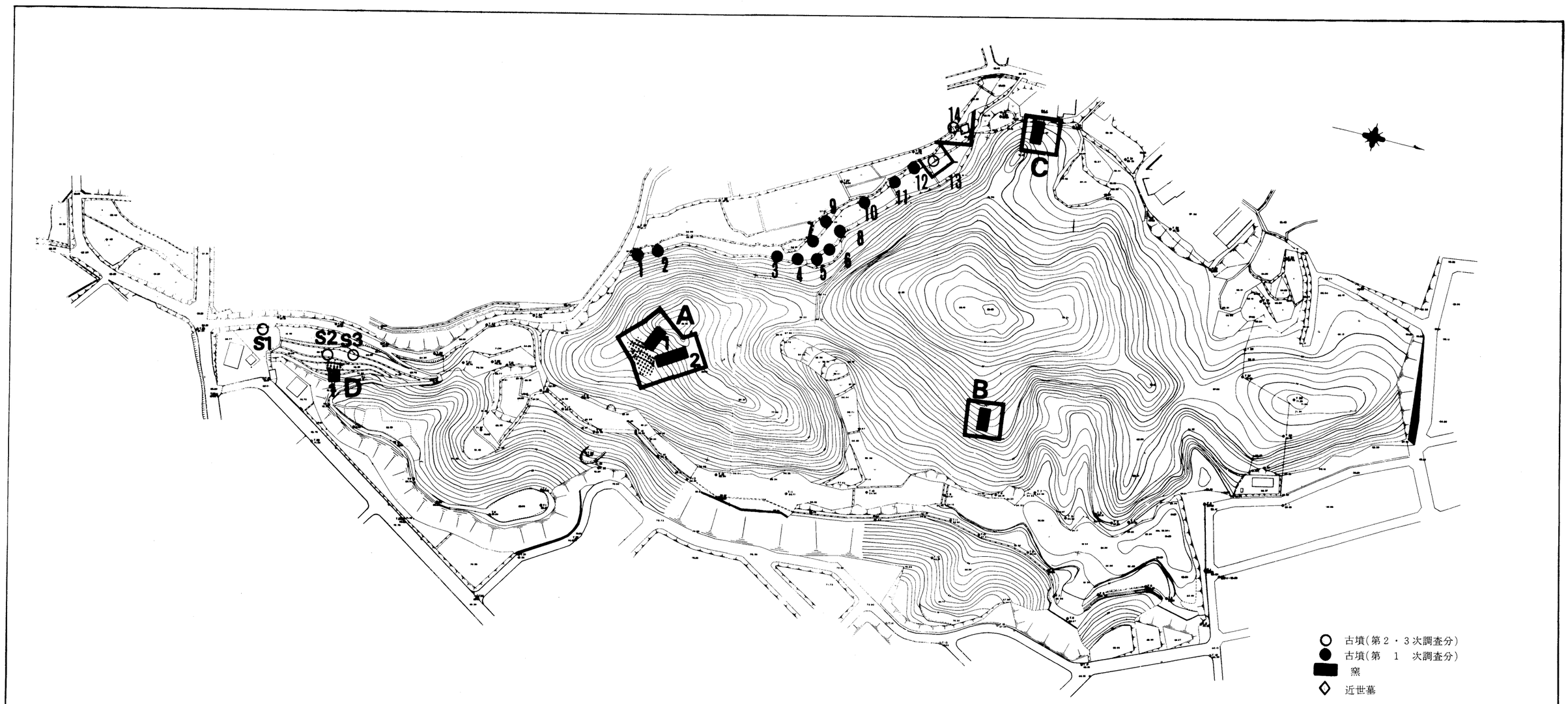
中通古墳群の立地については、Ⅰ．序章の中で述べてある。

13号墳の立地

中通遺跡の南側の裾分に立地するもので12号墳西側の隣接地に位置している。

13号墳は天井石と眉石が露出していため、古くから開口していた。玄室の左側の上部の一石は抜かれていた。墳丘上部は完全に削平されて畑地となっていた。墳丘の断面をみると、中世期に墳丘を削平にならしている。

13号墳の規模は直径20mで巾2m周溝をもつものである。第1次調査の折り石室内部の調査が行なわれ、墳丘の調査までにはいたっていなかったため、今回墳丘のたち切りと周溝の確認とを基本に規模等の把握につとめた。



第72図　中通遺跡地形図(１/2000)

14号墳の立地

13号墳より西側約50mに無残な形で、石室が半壊の状態で残っているものであった。

伐採後、天井石及び眉石については、危険防止のため、石を重機にてはずしてから、石室内の調査を行なった。

石室の内はゴミ溜になっているため中世より近世にかけての茶碗のかけら等が投げこまれていた。

墳丘を見るため奥壁に直行する様にトレンチを入れて、周溝を確認した。

では各々について、詳細に記載しよう。　　（副島）

2．中通13号墳

(1) **墳丘**（第73図、図版84～86）

墳頂部は既に削平され、北側、東側と共に平坦に整地されており、南側と西側は水田開削によって削られているため、墳丘全体の形状が把握し難い状況であった。このため北西側¼の部分を剝ぎ取って墳丘と周溝を確認し、また石室東側に設けた試掘溝では周溝を検出した。この結果、直径10m内外の円墳であることが推定できた。なお墓道部を掘り下げた結果、石組墓道の前方を削られているものの、石組墓道の残存する部分から石室後方の墳丘裾までの距離が10.8mを有していることからして、直径10mを若干上廻る規模であることが考えられる。

墳丘は、地山と同様な黄褐色系の粘質砂を堆積させ若干乳白色粘土・灰褐色粘性土を含み、約0.8mの厚さが残存する。

周溝底面は、東側で標高58.20m・北側58.20mを測るが、7mの距離をおいた北西側では標高57.25mとなり、西側へ勾配をもたせている。

なお墓壙は、墳丘の東寄りに施設され、幅4m程度で、標高55.80m位まで掘り下げられている。石室は、墓壙範囲ぎりぎりの位置に横積みの石がある。おそらく腰石も範囲内一杯に据えられたと思われる。

墳丘出土遺物（第76図⑥～⑧）

墳丘露呈中に出土した遺物は、須恵器甕片と土師器片が数点である。また墓道部の上層から須恵質擂鉢片が出土している。

須恵器

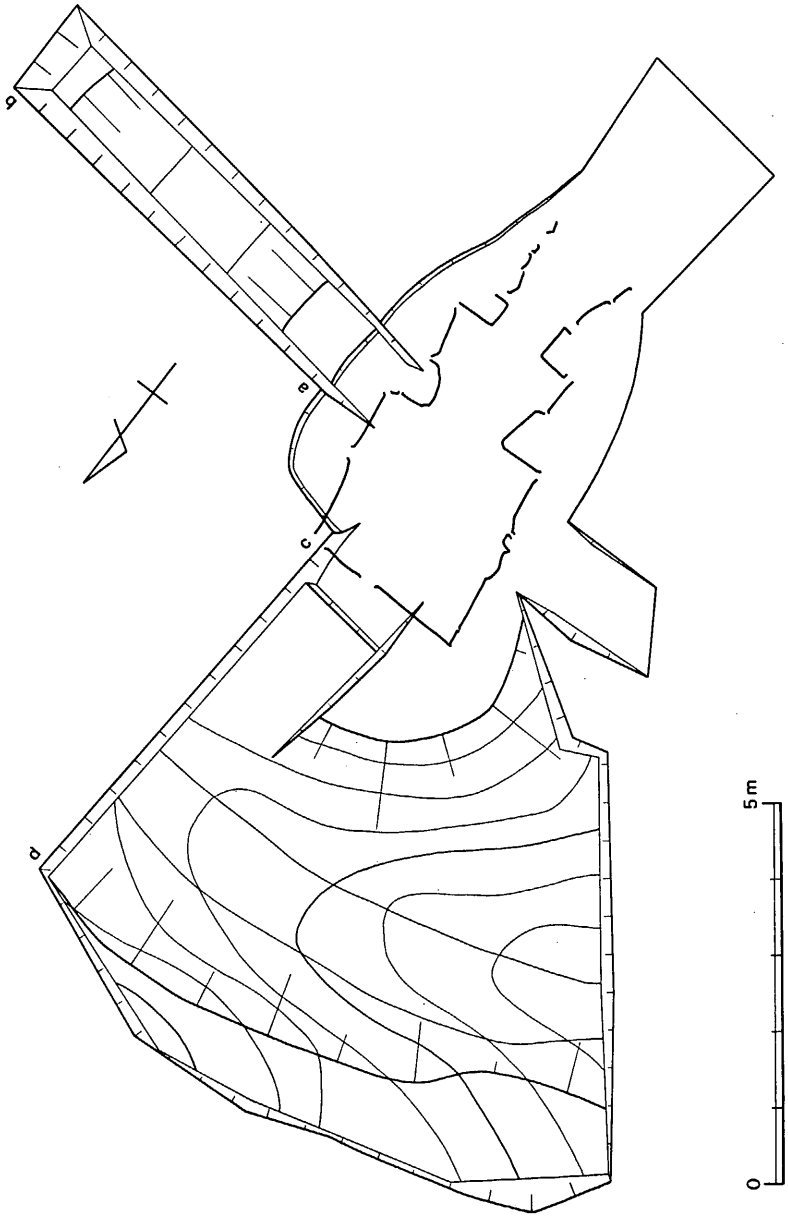
甕（⑥）口外径19.8cmを復原値で得られる口縁部破片で口唇部外面に貼りつけ突帯がめぐらされる。ナデ調整されるが内面にヘラ記号が付されている。

擂鉢（⑦）復原口外径20cmを測る。カキ目調整され、破片の下部に縦方向の目がみられる。

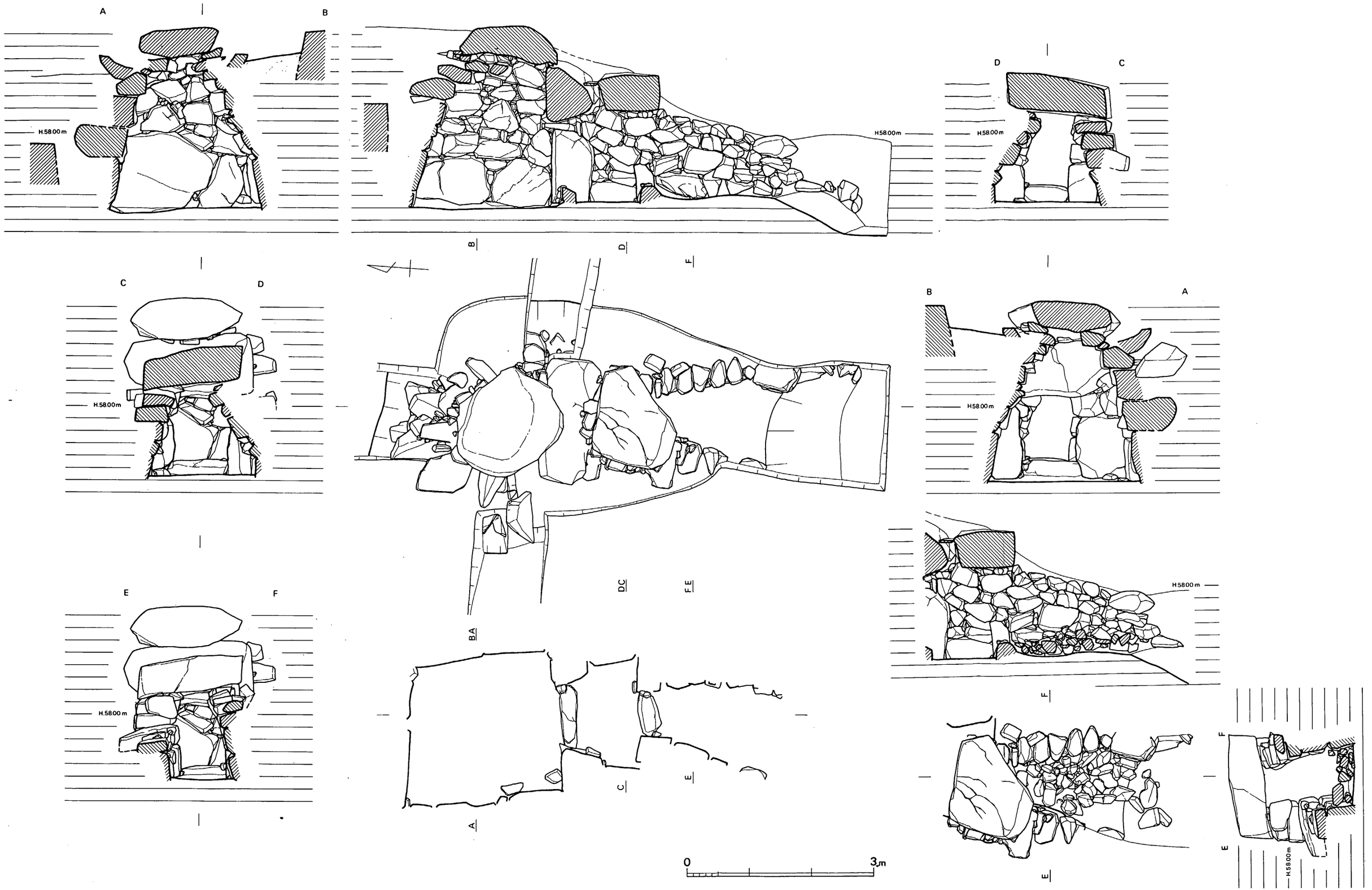
土師器

小皿（⑧）復原口径9.7cm、底径7.5cm、器高1cmを測る。底面には糸切り痕が残される。御笠川南条坊遺跡土師器編年の五条Ⅱ－1類に相当し、12世紀後半ないしは末頃の年代が与えられる(註)。少なくともこの時期迄は墳丘が旧状に近かったと思われる。

註　前川威洋　1978、筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡（4）、福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集下　福岡県教育委員会。



第73図　中通13号墳発掘区（1/100）



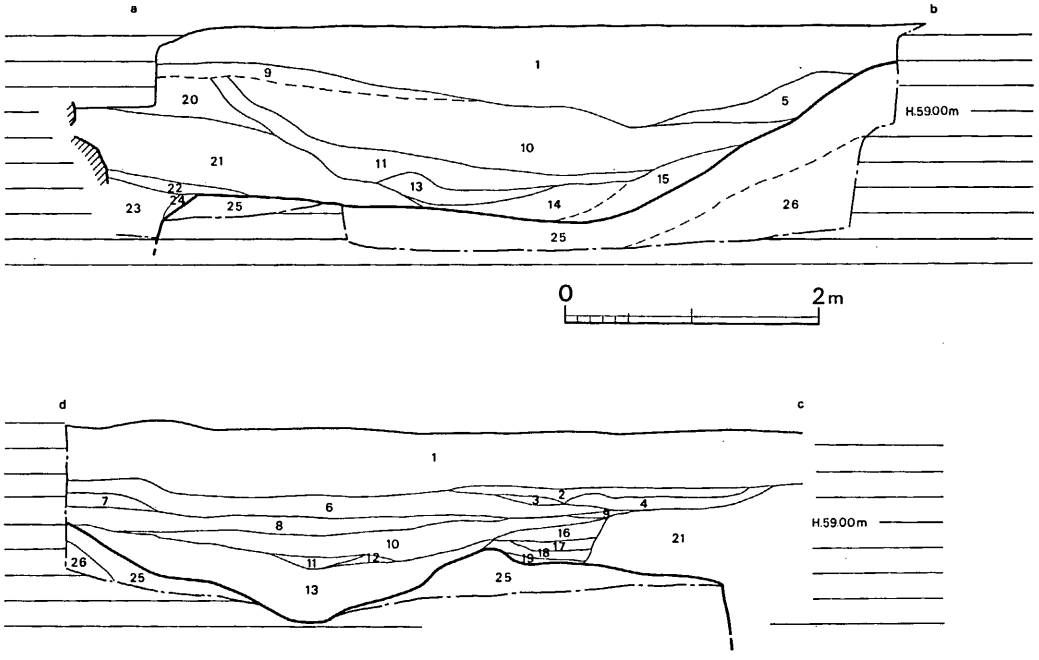
第74図　中通13号墳石室実測図(1/60)

墓道（第74図、図版88）

前室框石前方４ｍ分を調査し、閉塞石の残存状況、石組墓道を検出した。

閉塞石は、花崗岩質の礫を用い、前門框石に接して、高さ最高50cm程度、長さ2.5ｍにわたって残存する。框石から50cm程度はややまとまった積み方がみられる以外散乱した状況であり、左側壁寄りでは1.1m程度の長さの先が空白となることからみて、本来１ｍを上まわらない範囲で、50cmに近い部分に積まれていたものと考えられる。前室の天井石になる眉石のかかる部分が、前門框石の位置よりそれほど前方に至らない点からみても、前門框石に接した形で閉塞を積まざるを得ないものと推測される。

石組墓道は、前室の主軸に対して西側に反り加減で八字形に開き、前方が既に削平されてい



1.耕作土　暗黄褐色砂質土
2.黄灰色砂質土
3.暗灰褐色土
4.暗灰褐色砂質粘性土
5.乳白色粘質砂
6.淡灰褐色砂質土
7.灰褐色砂質土
8.暗灰色粘質砂
9.黄灰色粘質砂
10.乳白色・黄褐色混じり粘質砂
11.暗灰褐色粘性土
12.黄灰色粘質砂
13.黒色砂質粘性土
14.暗茶褐色粘性土
15.暗黄褐色砂質粘性土
16.暗灰褐色土
17.灰褐色土
18.灰黄褐色土
19.黄褐色土
20.淡黄褐色砂質土
21.黄褐色粘質砂
22.乳白色粘土
23.黒色土混じり黄褐色粘質砂
24.黒色粘性土
25.地山　黄褐色粘質砂
26.地山　黄褐色砂礫質土

第75図　中通13号墳墳丘断面図（1/60）

るため、床面は框石内側から2.2m の距離を有するのみである。従って石組墓道につづく素掘りの墓道については確認できない。

残されている石組は、前門内側から右壁で3.7m、左壁で2.15mを検出できた。前室袖石から1番目まで前室と同様の腰石を据えているが、これより先は小振りの石が配せられる。側壁は、右壁で横積みの4段目まで確認できるが、左壁では2段目までしか残存しない。

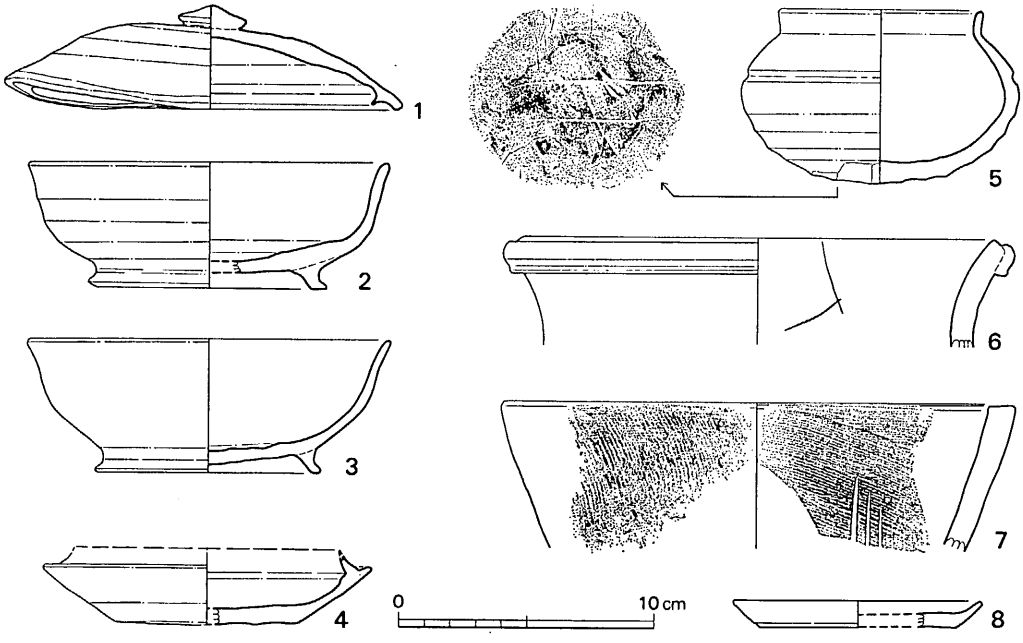
墓道出土遺物（第76図①～⑤、図版89）

石組墓道の左壁よりの空白部から須恵器杯蓋と杯身が転倒した状態で出土し、閉塞石の前方側から須恵器杯身、短頸壺等が出土した。また削平されて崖面となった部分から鉄釘1点が出土している。頭部がL字状に折り曲げられる角釘で後世のものであろう。

須恵器

杯蓋（①）宝珠形のつまみのつくもので、口縁端部では、かえりが外方から隠れるように短く内傾する形状の杯蓋。ひずみを生じているが、口径13.5cm、稜径15.6cm。つまみ部を除いた器高3.2cm、つまみ部の径2.6cm、高さ0.9cmを測る。天井部は回転ヘラ削りされる。

杯身（②～④）②・③は高台を有し、口縁部がやや外反して立ち上る形状の杯身である。2は口径14.1cm、器高50cmを有し、胴下半をヘラ削りの後高台を付して高台の周囲をヨコナデ、ナデ仕上げしている。①の杯蓋とセットになる。③は口径14.2cm、器高5.2cmを有し、底部



第76図　中通13号墳墳丘・墓道出土土器実測図（1/3）

ヘラ切りのままで高台を付した部分のみナデられる。①・②に比して黄褐色系の色調が強い。

④は、口唇端部を欠失しているが、口径10.2cm程度、稜径12.8cm、器高3cm程度で、かえりが内傾して立ち上る杯身で、底外面はヘラ削りされる。

短頸壺（⑤）口縁部がわずかに外に開いて短く立ち上り、胴部上半に1条の沈線をめぐらせて、底外面をヘラ削りさせている。口径8cm、器高6.9cm、胴最大径10.9cmを測るやや扁平な壺である。底外面に平行する直線2条のヘラ記号が付される。

これらの須恵器は①～③が7世紀中葉、④・⑤が6世紀後半の年代に属し、セットの杯の存在から7世紀半頃まで追葬されていたと考えられる。

3．中通14号墳

(1) 墳　丘（図版90）

南側及び西側を水田開削によって削られ、頂部も平坦に削られているため、墳丘の詳細は不明である。ただし、石室主軸方向の後方に試掘溝を設定して検出し得た周溝が、玄室中心から5mの距離を有していることから、径10m程度の円墳を想定することも可能である。この周溝は幅2m以上、深さ50cm程度を有し、溝底面は玄室床面より約80cm高い位置になる。墳丘盛土は淡褐色と暗褐色の砂質粘性土等が互層となって堆積されているが、上部を削平されて60cm程度の厚さを残すのみである。なお石室東側については排土の都合で調査をしていない。

(2) 石　室（第78図、図版91・92）

両袖単室の横穴式石室で、羨道部が調査区域外に延びるため全体の形は不明。主軸方位は、N15°Wで、南に開口するが、羨道部は玄室の主軸に対してやや西に寄る。

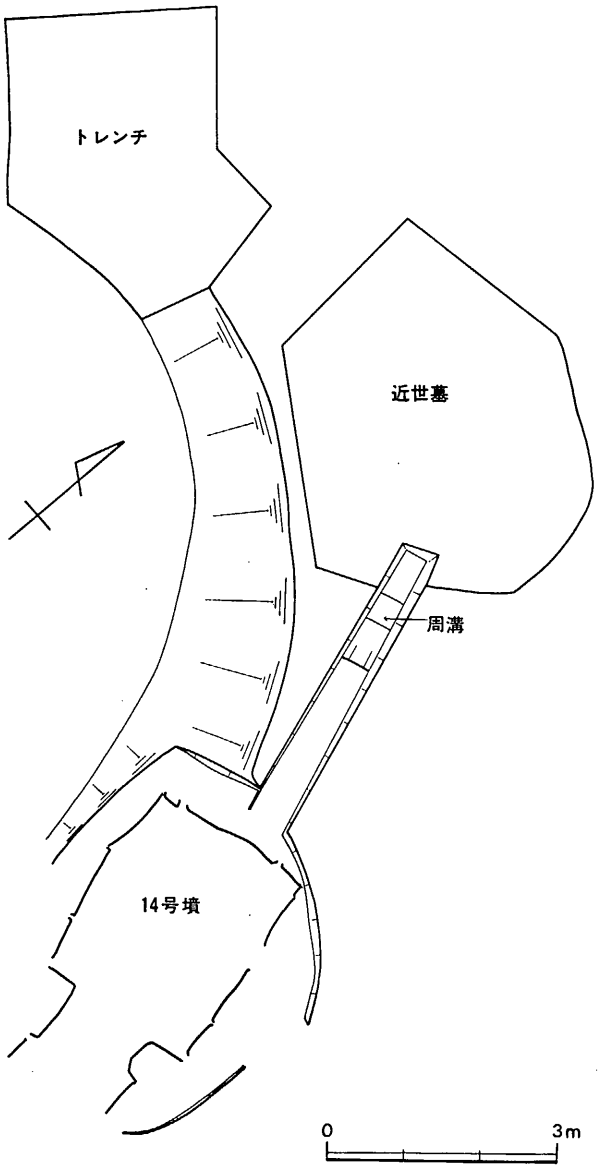
天井石と眉石が架された状態で残っていたが、既にズレており、眉石が割られていた（図版90—上）。我々はそのまま調査するのが危険であるとみなし、調査着手時に重機を用いて、天井石と眉石を排除した。天井石は約2m径の巨石であった。

石室は全て花崗岩で構築されているが、玄室は、長さ2.8m、幅2.2～2.3mを測り、左側壁でわずかに胴の張る長方形プランとなる。腰石は両側壁共3個並べ、奥壁は1枚の大きな石を立て左右の隙間を埋めるように、小さ目の石を並べており、それぞれ3個配して立てられたことになる。腰石の据え方は、奥壁15°、右壁15°、左壁25°内側に傾くが、それより上はそれぞれ横積みによって重ねられる3段目まで直線的に内傾し、4段目が折れるように内側にせり出す。天井石は、この4段目の上に乗ることになり、高さ1.8mの空間を与える。

玄門では、袖石の突き出しが左袖45cm、右袖60cmで、玄門幅1.13mを測るが、床面には框

石がなく、閉塞石の散乱が及んでいる。袖石は左右共に約1.2mの高さを有するが直接大きな眉石が架せられていた。

羨道部は、玄門内側から左側1.3m、右側1.1mまでを調査範囲としているが、それぞれ1個の腰石しか残されていない。この腰石の前面から奥壁までの距離は4.5mである。羨道部床面には閉塞石が散乱しており、土器片、玉類、鉄器類等も散在する。玄室内がひどく攪乱を受けている状況であったが、羨道部も攪乱されたことがわかる。



第77図　中通14号墳発掘区（1/100）

(3) 遺　物（第79～85図、図版93～95）

出土状態

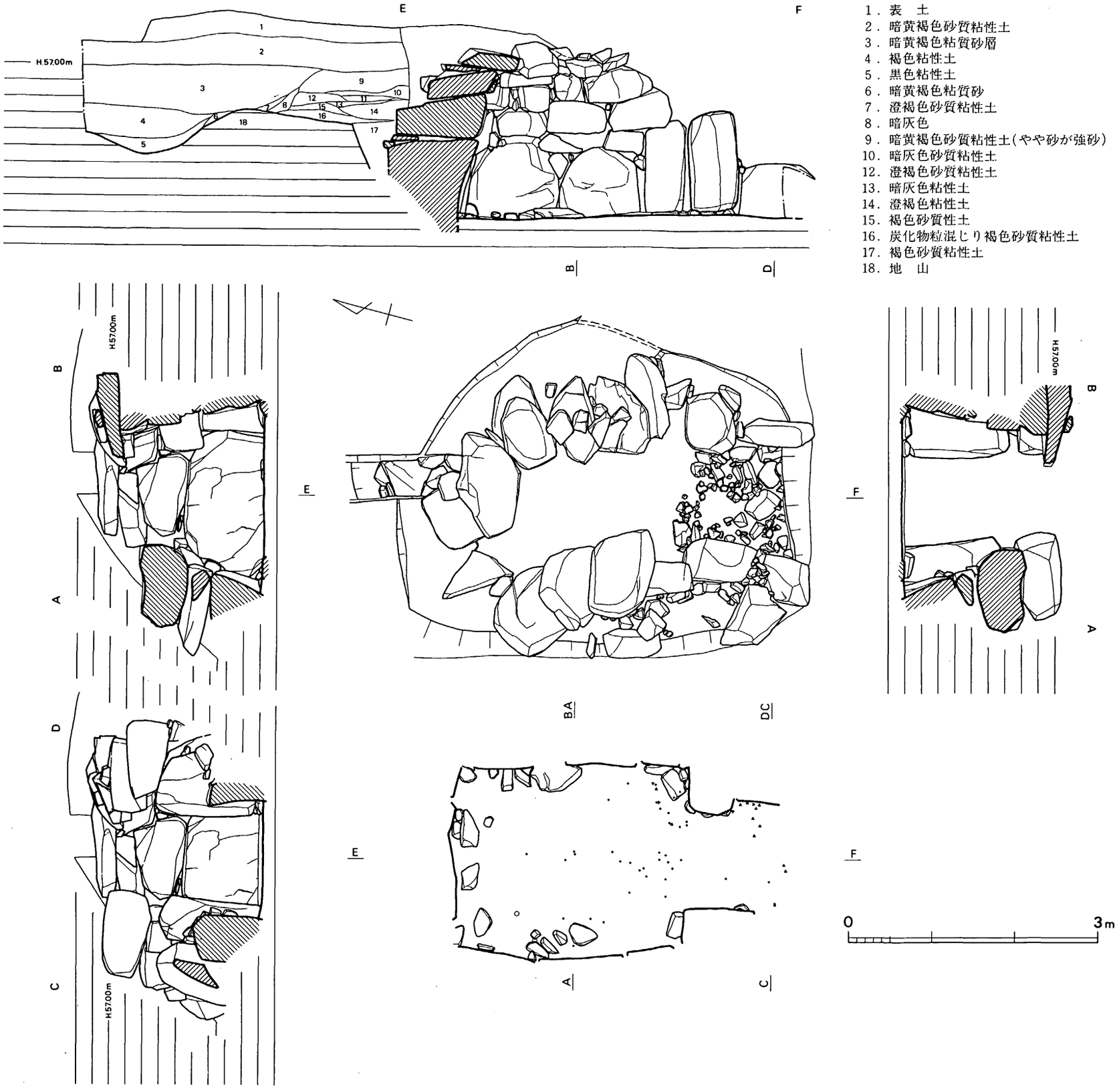
墳丘部の調査は不充分であったが、周溝内から短頸壺1点と、甕片、墳丘盛土中にも甕片が出土している。墳丘内の破片は小片であるため築造時期を決し得る資料ではない。

石室内は、床面に接して、土師器椀、黒色土器片が出土しており、須恵器杯・高杯・長頸壺・瓶・平瓶・甕、耳環・玉類、鉄器類、石器等が出土している。

須恵器（第79～82図、図版93・94、第4表）

器形の窺える資料を図示し、出土位置、法量等を一覧表に、ヘラ記号及び甕形土器胴部破片等は拓影を示した。なおヘラ記号はX字形をA　扁X字形をB、Y字形をC、単直線をD、長S字形をE、3本の扇状になる川字形をF類として区別している。

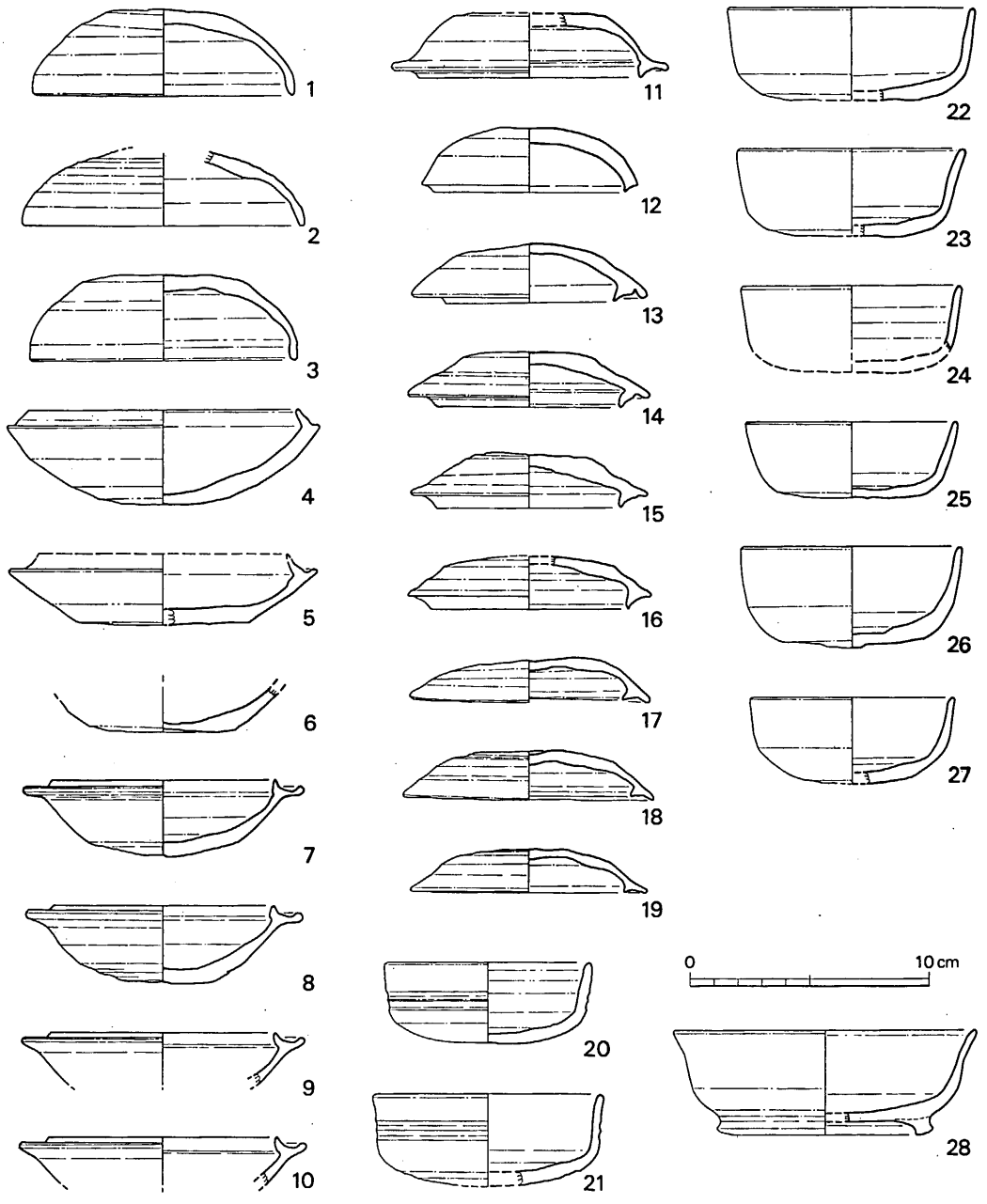
杯蓋（①～③、⑪～⑲）①～③は、かえりを有さない杯蓋で、口唇端部内側がわずかに肥厚



1．表　土
2．暗黄褐色砂質粘性土
3．暗黄褐色粘質砂層
4．褐色粘性土
5．黒色粘性土
6．暗黄褐色粘質砂
7．澄褐色砂質粘性土
8．暗灰色
9．暗黄褐色砂質粘性土(やや砂が強砂)
10．暗灰色砂質粘性土
12．澄褐色砂質粘性土
13．暗灰色粘性土
14．澄褐色粘性土
15．褐色砂質性土
16．炭化物粒混じり褐色砂質粘性土
17．褐色砂質粘性土
18．地　山

0　3m

第78図　中通14号墳石室実測図(1/60)



第79図　中通14号墳出土遺物実測図①（1/3）

する。器高3.6cm程度でつまみはみられない。この中で②は天井部が丸味を帯び口径12cmを有す。①・③は口径11cmで天井部がやや平坦になる。この相違点から前者を杯蓋1類、後者を杯蓋1′類と区別する。

⑪〜⑲は、かえりを有し受け部を形成する杯蓋である。この種の杯蓋のうち⑪は稜径11.6cm、器高2.7cmで、口縁部は大きく外反し天井部が低平なため扁平なイメージを与える。つまみについては不明。杯蓋2類としたい。

⑫〜⑲は稜径が小さく10cm前後で器も2cm前後のタイプである。このうち12は稜径9.0cm、器高2.7cmで体部に丸味をもち、口縁部の形状が他のものと異なる。口縁部の形状をみると、⑬〜⑯はかえりが杯蓋2類と同様に垂下しており器高は天井部と口縁端部の高さとなる。⑰〜⑲では内側に短く出るのみで、稜が下に延びて器高は天井部と稜の高さとなる、このため前者の器高が2cmを越すのに比して、後者では2cmを上まわることがないようである。

この要素を重視してここでは、前者を杯蓋3類、後者を杯蓋4類と区分しておく必要があろう。

なおヘラ記号では、1・2類にF類、3・4類にB・C・D類のまとまる傾向がある。

杯身（④〜⑩、⑳〜㉘）④〜⑥はかえりを有す杯身で、蓋1類のようなかえりを有さないで蓋と対応する種類のものである。かえりは内傾して延びており、稜径は13cm程度を有す。この類を一応杯身1類とする。しかし4は体部が扁平で平坦面を形成しており4と同様に扱うには疑問が残る。あるいは杯蓋と考えた方が妥当かも知れない。

⑦〜⑩は、かえりを有す杯身であるが、稜径12cm程度で器高3cm以上、体部は丸味をもち口縁部の立ち上りは直になる。身1′類として区別したい。

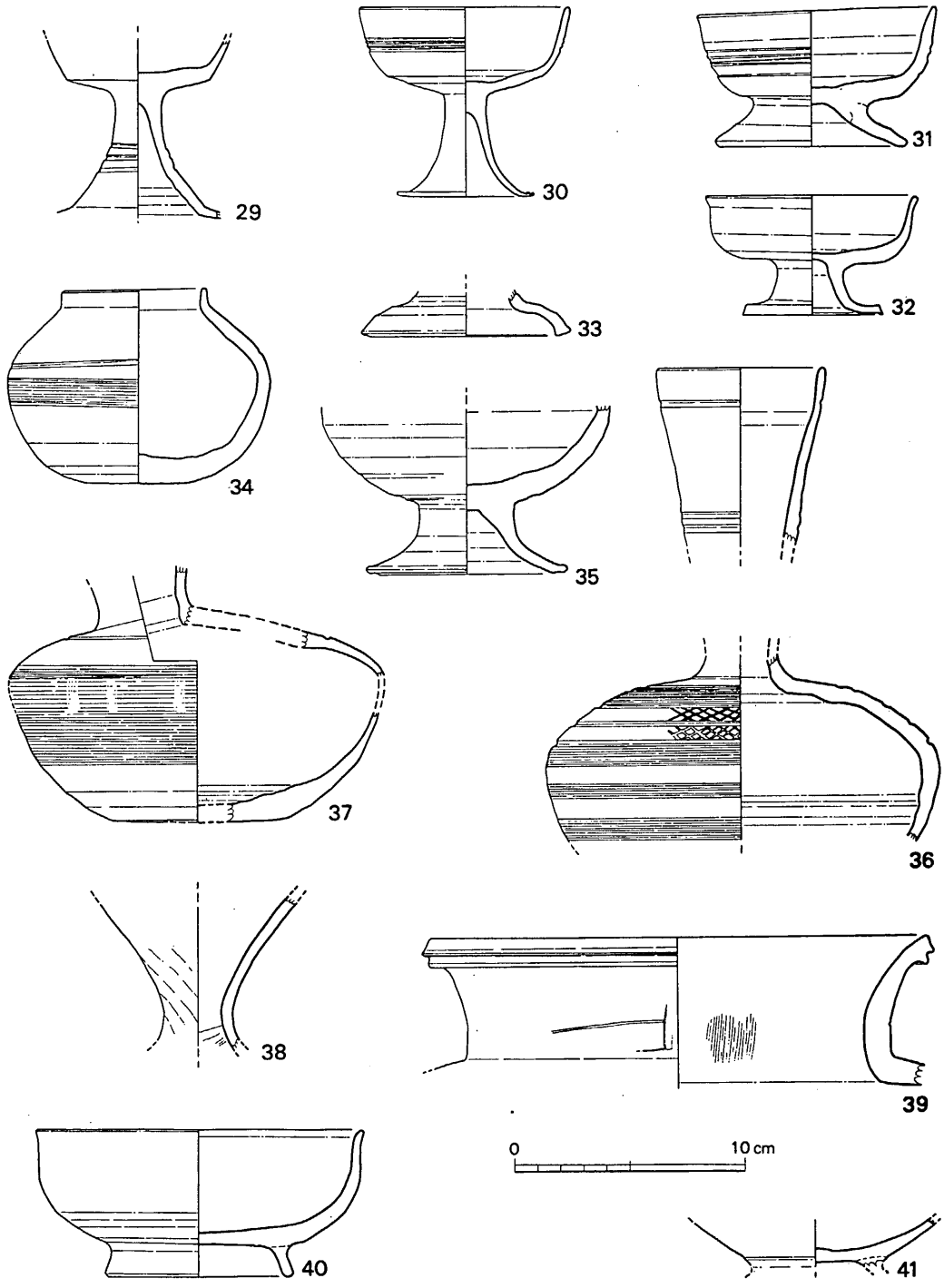
⑳〜㉖は、かえりを有さないタイプの杯身で体部は直に近く立ち、口縁部でやや反る例がある。このうち⑳・㉑は体部外面に2条の沈線を有すが、⑳は小ぶりで口径9cmを下まわる。⑳に近い法量の例では沈線を有さないが25〜27がある。㉑はひと廻り大きなもので23・24が法量的にも器形的にも近い。また㉒は口径10cmを越している。法量等の要素によってこの種の杯身は3種類に細分できるが、杯蓋2〜4類と直ちに対応し難い。敢て対応させるとすれば、口縁部がやや外反することを新しい傾向とみて、㉑・㉓・㉔を4類に、法量的に大きな㉒を2類に他を3類に考えなければならないであろう。

㉘は、高台を有す杯身で、口縁部は外反して開き口径も大きくなる。杯身5類と区別する。

杯身に付されるヘラ記号では1類にA類、1′類にE類、2類にD・F類、3・4類にB・D類、5類にA類がみられる。

高杯（㉙〜㉜）㉙・㉚は柱状部の長い高杯であるが、柱状部に透し孔はない。㉙は口縁部、脚裾部を欠失しているが、柱状部に3条の沈線がめぐり、縦方向に走る単直線ヘラ記号の一部が確認できる。㉚は完形になる資料で、杯部外面に3条の沈線があるが柱状部はナデ調整のみで、裾部は反り返って端部を平坦にさせている。㉙・㉚共に杯部底面はヘラ削りのままである。㉚の杯部の形状は杯身3類に近い。

㉛は、短い柱状部で台部と云った方が理解し易い形状である。杯部外面に3条の沈線を有し



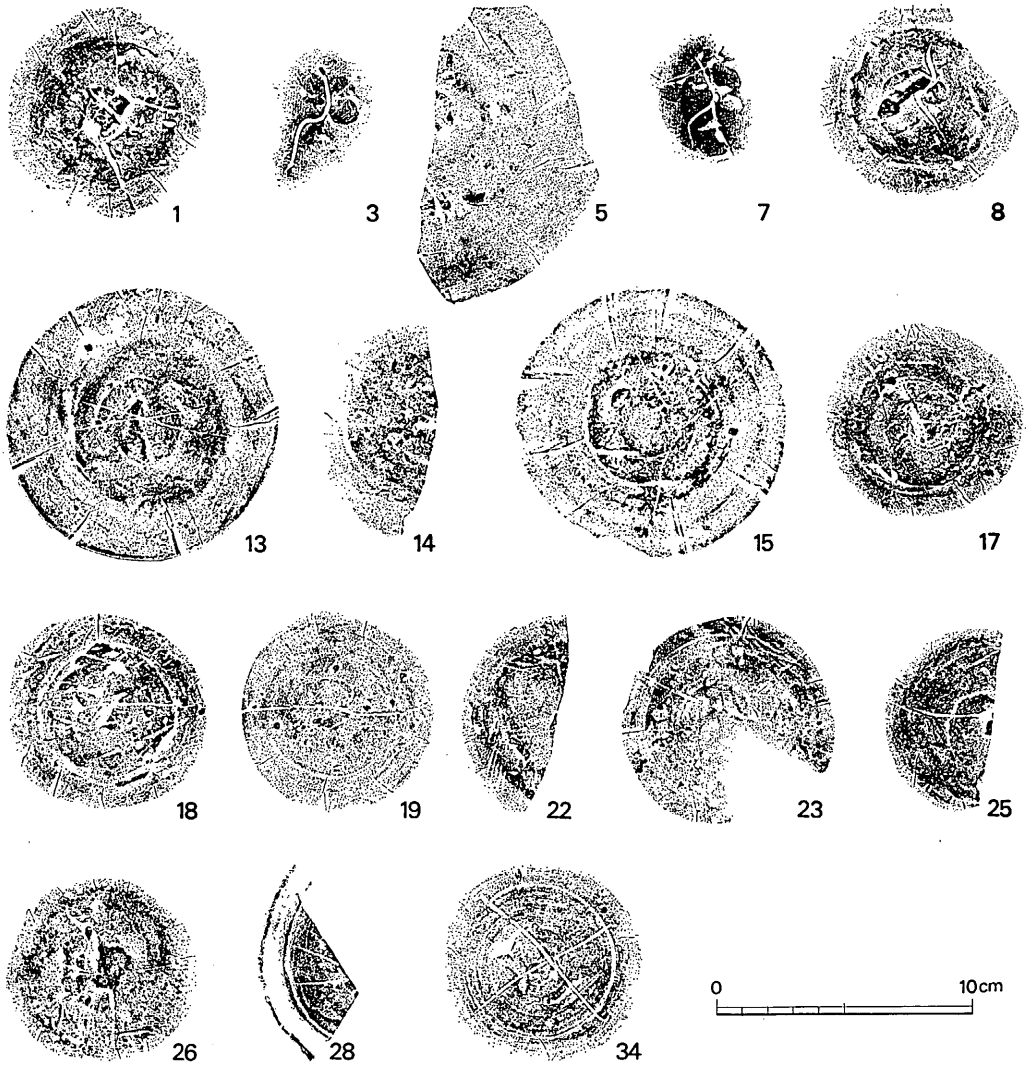
第80図　中通14号墳出土遺物実測図②（1/3）

脚部は大きくハ字形に広がり安定した形状になる。杯部の法量は杯身㉒に近い。

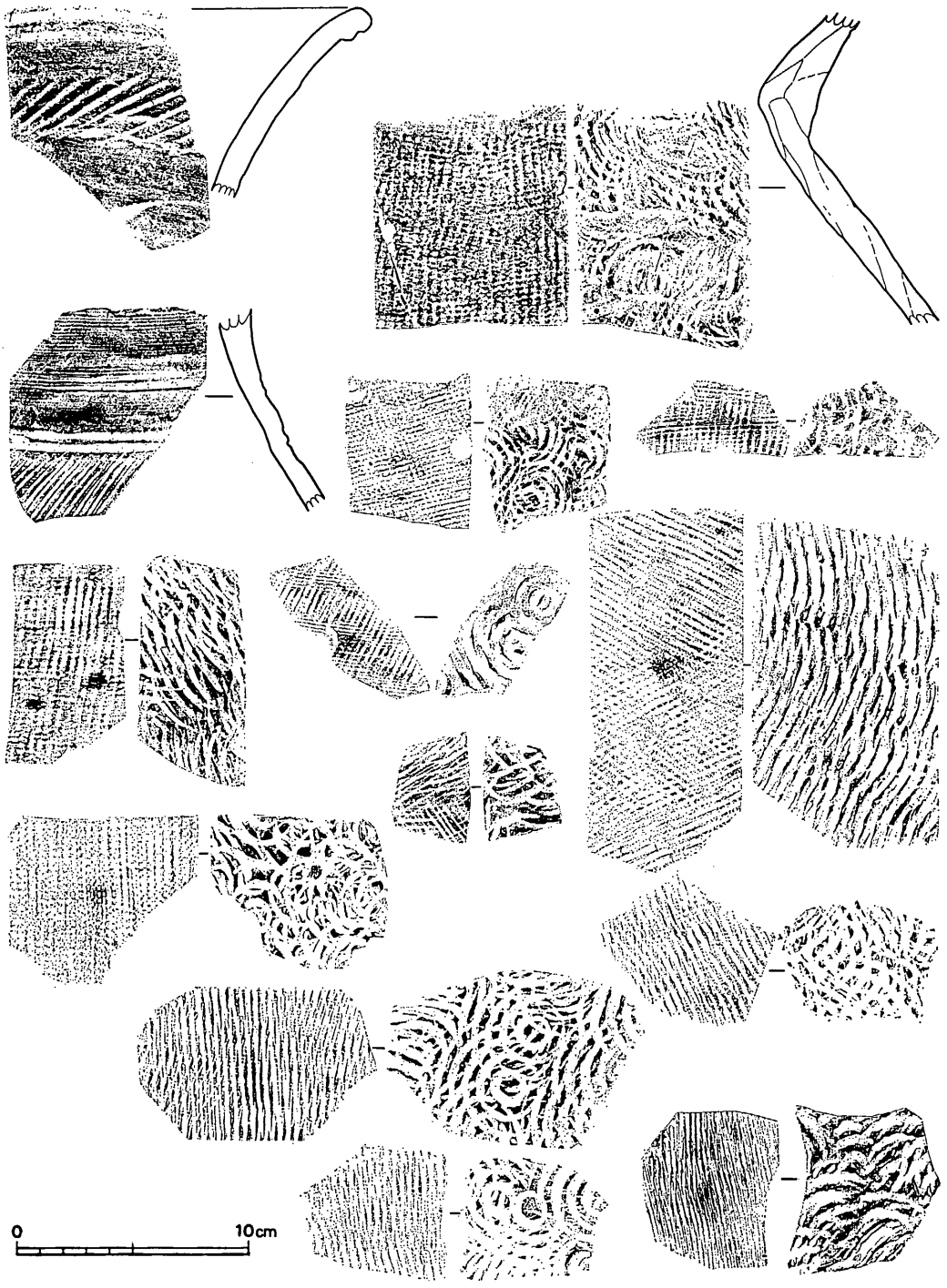
㉜は、低平な杯部と短い柱状部からなる高杯で、杯部口縁は外反する 。裾部は屈曲して広がり端部に至つて短く下に折れ、外方に平坦面をみせる。杯部の形状は杯身５類に相似し、裾部端の形状は時期の下る杯蓋部に似る。ただし法量的には㉘に比して小さい。

㉝は脚台部の破片で大きく踏ん張る形を呈す。

短頸壺（㉞）周溝内より出土した資料である。口縁部は直に短く立ち上り、肩部はカキ目のあとナデられる。胴下半はヘラ削りのままで底面にはＡ類ヘラ記号が付されている。



第81図　中通14号墳出土遺物拓影図①（1/3）



第82図　中通14号墳出土遺物拓影図②（1/3）

第4表　土　器　観

No.	器種	出土位置	法量 ①口径 ②器高 ③受け部稜径 ④立上り高 ⑤脚裾径 ⑥胴最大径	ヘラ記号
1	杯　蓋	羨　道	①10.7　②3.65	E
2	杯　蓋	玄　室	①11.8　②(3.1)	
3	杯　蓋	閉塞石床	①11.1　②3.6	E
4	杯　身		①11.1　②3.9　③13.0　④0.6	A？
5	杯　身	羨道付近	②(2.75)　③12.8	A？
6	杯　身			
7	杯　身	閉塞石床	①9.4　②3.2　③11.7　④0.4	E
8	杯　身	羨　道	①9.2　②3.3　③11.6　④0.5	E
9	杯　身	閉塞石床	①9.4　②(2.7)　③11.8　④0.4	
10	杯　身		①9.5　②(2.0)　③12.0　④0.4	
11	杯　蓋	閉塞石床	①9.2　②2.7　③11.6　④0.4	
12	杯　蓋	羨　道	①8.0　②2.7　③9.0　④0.4	
13	杯　蓋	玄　室	①7.0　②2.45　③9.8　④0.3	B
14	杯　蓋	閉塞石床	①7.7　②2.3　③10.0　④0.5	B？
15	杯　蓋	羨　道	①7.6　②2.3　③9.8　④0.5	C
16	杯　蓋	石室内	①8.2　②(2.2)　③10.2　④0.5	D？
17	杯　蓋	羨　道	①7.8　②1.8　③10.0　④0.1	C
18	杯　蓋	玄室床面	①8.5　②2.0　③10.4　④0.05	A
19	杯　蓋	羨　道	①7.9　②1.8　③9.8　④0.1	D
20	杯　身	玄室床面	①8.7　②3.4	
21	杯　身	石室内	①9.6　②(3.8)	
22	杯　身	閉塞石床	①10.3　②3.9	D？
23	杯　身	玄　室	①9.5　②3.7	D
24	杯　身		①9.2　②2.8	
25	杯　身	石室内	①8.8　②3.2	D？
26	杯　身	閉塞石床	①9.2　②4.2	B
27	杯　身	石室内	①8.5　②3.6	D？
28	杯　身	玄室床面	①12.6　②4.3　⑤9.0	A？
29	高　杯	石室内		有
30	高　杯	閉塞石	①9.1　②8.2　⑤6.0　脚高4.4	
31	高　杯	石室内	①10.3　②5.9　⑤8.2　脚高1.9	
32	高　杯	羨　道	①9.2　②5.15　⑤6.0　脚高2.2	
33	脚台片	玄　室	⑤9.0	
34	短頸壺	周溝内	①6.2　②8.4　⑥11.4	A
35	台付壺	玄室床面	⑤8.7　⑥12.5	F
36	長頸壺	羨　道	①7.3　⑥17.0	
37	平　瓶	石室内	②(11.1)　⑥16.2	A？
38	甕	玄室床面		
39	甕	玄　室	①21.4	有
40	土師器、椀	玄室床面	①13.2　②6.3　⑤8.1	
41	土師器、椀	玄　室		

察　表

〔単位cm、(　)は現存値を示す〕

調整および特徴			
調整	胎土	焼成	色調
天井部ナデ、	胎土精	焼成良	淡褐色、灰褐色
天井部回転ヘラ削り、		焼成良	黒褐色
天井部ヘラ切り、ナデ、	胎土精	焼成良	灰緑色
底外面ヘラ削り、	胎土精	焼成良	暗灰褐色、灰緑色
底外面ヘラ削り、	砂粒を含む	焼成良	暗緑灰色灰
底外面ヘラ切り、ナデ、	砂粒多い	焼成良	褐色、紫灰色
底外面ヘラ切り、ナデ、	胎土精	焼成ややもろい	灰褐色、緑灰色
底外面ヘラ切り、ナデ、	胎土精	焼成やや甘い	灰褐色
	胎土精	焼成良	灰褐色
	胎土精	焼成良	淡褐色
天井部ヘラ切り、ナデ、	胎土精	焼成やや甘い	茶褐色　灰緑色
天井部ヘラ切り、	胎土精	焼成良	灰褐色
天井部ヘラ切り、ナデ、	砂粒多い	焼成良	黒褐色、暗褐色
天井部ヘラ切り、ナデ、	やや砂粒を含む	焼成良	灰褐色
調整不明	砂粒多い	焼成良	淡灰色、紫灰色
天井部ヘラ削り、		焼成良	灰白色
天井部ヘラ切り、ナデ、			灰白色
天井部ヘラ切り、ナデ、			暗青灰色
天井部ヘラ削り、	胎土精	焼成良	灰白色
底外面ナデ、　　沈線2条	若干砂粒を含む	焼成良	暗灰色
底外面ヘラ削り、	砂粒を含む	焼成良	灰白色
底外面ヘラ切り、ナデ、	胎土精	焼成良	青灰色
底外面ヘラ切り、ヘラ削り、	胎土精	焼成良	青灰色
	胎土精	焼成良	暗灰色
底外面ヘラ切り、ヘラ削り、	砂粒を含む	焼成良	青灰色
底外面ヘラ切り、	砂粒を含む	焼成良	青灰色
底外面ヘラ切り、	胎土精	焼成良	灰褐色
底外面ヘラ切り、高台を付けてナデ、	胎土精	焼成良	灰白色
柱状部に沈線3条、	砂粒を含む	焼成良	暗灰色
杯部外底面ヘラ削り、杯部沈線3条	胎土精	焼成良	暗灰色、灰白色
杯部外底面ヘラ削り、杯部沈線2条	胎土精	焼成良	灰白色、黒灰色
	胎土精	焼成良	灰色
	胎土精	焼成良	灰色
胴上半カキ目、下半ヘラ削り、	砂粒を含む	焼成良	暗灰色、自然釉
胴上半にカキ目、脚部内面にヘラ記号、	小砂粒を含む	焼成良	暗灰色、自然釉
胴部にカキ目、肩部にヘラ描き格子目、	胎土精	焼成良	青灰色、暗灰色
胴部にカキ目、底部ヘラ切り、ヘラ削り、	胎土やや粗	焼成普通	暗褐色
頸部絞り込み、	胎土精	焼成良	黄褐色
	胎土精	焼成良	暗灰色
高台付、	やや砂粒を含む	焼成普通	淡黄褐色
高台付、		焼成普通	黄褐色

台付壺（㉟）おそらく広口になるものと思われる。内面の下部には砂粒が無数に付着しており、内外面共に自然釉を被る。脚台部は体部製作後に取り付けられ、脚部内面にF類ヘラ記号が刻まれる。

長頸壺（㊱）口頸部と体部の破片があり、接合しないが同一個体になるものと考えられる。口頸部は緩やかに開いて延び、口唇部がやや窄まるが、口縁下に1条と中程に2条の沈線がめぐる。体部はカキ目が施され、肩部にめぐらされる5条の沈線のうち胴最大径位側の3条によって区画された部分を、ヘラ描きの斜行格子目文様で充填している。また胴下半部ではカキ目の間を帯状にナデ消した部分もある。

平瓶（㊲）破片資料で、口縁部、胴部をを欠失しているが、図上の復原を試みた。体部は上位に最大径を有し、外面をカキ目調整するる。胴下部はヘラ削りのまま、底面はヘラ切りのまま放置される。

甕（㊳）頸部破片で口縁側に大きく広がり外面に絞り込みの痕跡が残る。

甕（㊴）口径21.4mを測る甕形土器口縁部破片部内面に同心円叩き文がみられ、頸部内面の一部に細かいハケ目が縦位に付されている。頸部外面に横方向単直線のヘラ記号があり、欠損部付近に直交するヘラ痕があるものの記号全体については不明。

なお、他の甕破片については器形の特徴を知り得る資料がなく、調整方法等を拓影によって示すが、断面図を付した例では接合の状況を窺うこととができる。

土師器（第80図、図版95）

高台付椀（㊵・㊶）㊵は完形に復原できる資料で、口径13.2cm、器高6.3cm、椀部の高さ5cmを測る。体部は丸くふくらみ、口縁下はやや強くヨコナデされるためにくびれ、内面にわずかな稜を生じる。㊶は底部破片であるが㊵と同様の器形であろう。また同じく玄室床面から出土した黒色土器片も法量的にみて近似するものとみられる。

これらの土師器は、前述の須恵器の年代とかけ離れて後出する時期のものである。

装身具類（第83図、図版95、第5表）

玉類及び耳環がある。玄室内床面と、羨道部閉塞石に混って出土しており、当初の位置を失っていると思われる。玉類の法量は計測表に一括した。

滑石製勾玉（①・②）石室平面図に○印で示すように玄室左側壁寄りから出土した。やや大形の勾玉で孔の穿たれる部分が扁平で尾側が厚くなる。

ガラス製勾玉（③）小形の勾玉でやや暗めのスカイブルーの色調を呈す。

碧玉製管玉（④）径5.2mm、厚さ9.3mmを測る管玉で、孔は両端から穿たれるが一端から主に穿たれている。緑がかってはいるが灰白色に近い色調である。羨道部出土で■印で示す。

角のある玉類（⑤〜⑦）⑤は楕円形断面を有するものの孔の穿たれる面からは扁平な形を呈すもので、気泡の少ないガラス製である。⑥は立方体に近い形のガラス玉で、⑦は三角形の扁

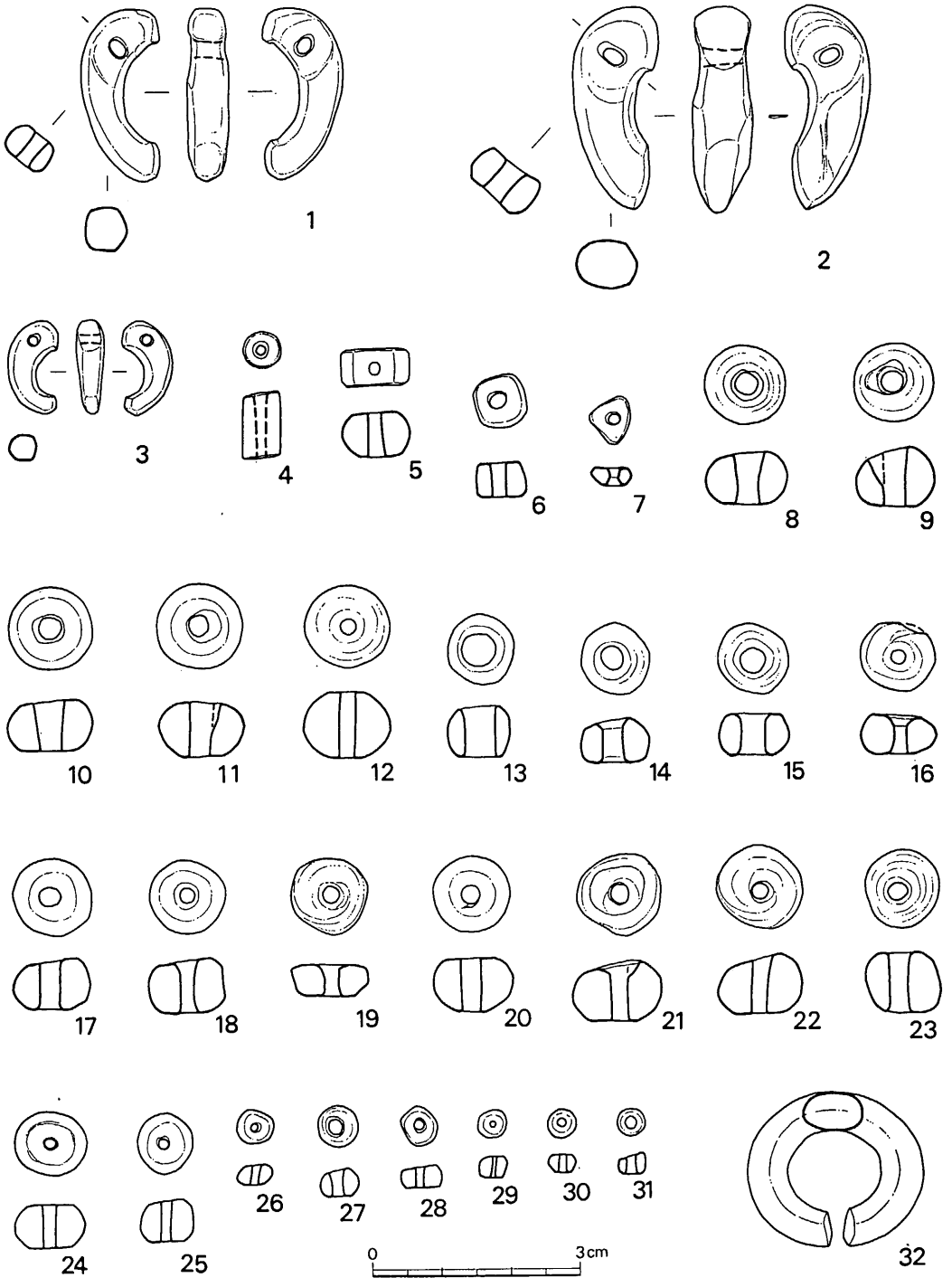
平な形状になる硬玉質の玉で濃いグリーンの色調。

ガラス製丸玉（⑧～㉕）径10mm 以上になる例がほとんどである。⑧～㉓は風化によって乳白色になっている例もあるがライトグリーン・或いはアメ色を呈すずんぐりとしたタイプのもので、風化の進まない例では２ｇ以上の重量を有す。製作方法は巻きつけによるものであり、いわゆる鉛ガラス製である。丸玉１類とした。

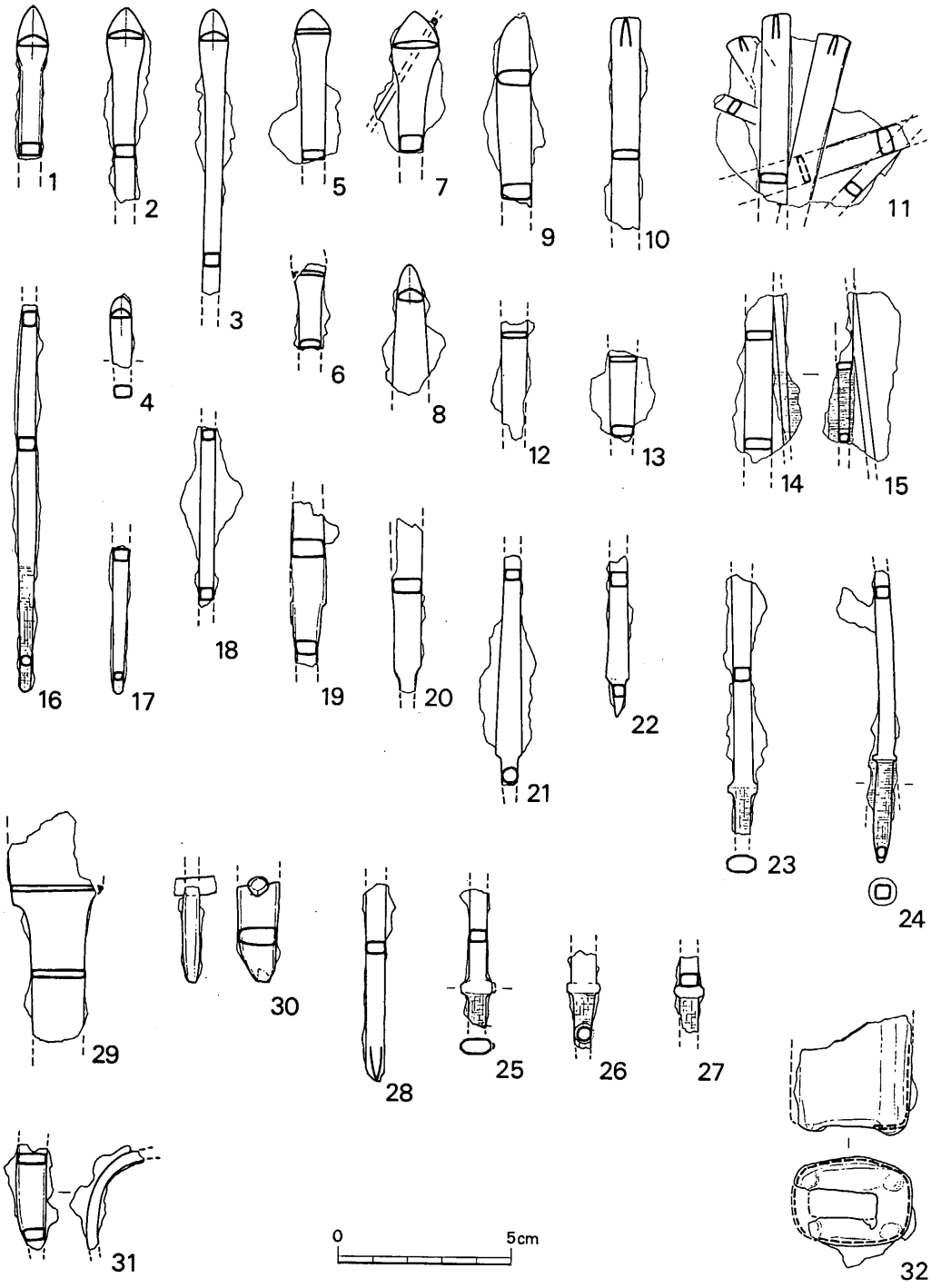
24・25は、コバルトグルーの色調で丸玉１類に比して端整な形状を呈す。重量は１ｇ以下と軽く、ガラスに気泡がみられる。丸玉２類とした。

第５表　玉　類　計　測　表　（単位mm、ｇ）

No.	長	径	幅	厚	孔径	重さ	色　調	分　類	材　質
1	25.1		7.4	6.2	1.8	2.1	淡灰色	勾　玉	滑　石
2	29.3		11.0	7.2	1.6	3.9	〃	勾　玉	〃
3	13.6		5.1	4.0	1.1	0.4	スカイブルー	勾　玉	ガラス
4		5.2		9.3	1.1	0.5	グレー	管　玉	碧　玉
5	9.9		5.2	6.6	1.7	0.7	ライトグリーン	角丸玉	ガラス
6	7.3		7.2	5.0	2.0	0.5	コバルトブルー	〃	〃
7	6.8		5.9	2.7	1.4	0.1	濃いグリーン	〃	硬玉？
8		11.8		7.6	3.0	2.2	ライトグリーン	丸玉１類	ガラス
9		11.5		8.4	2.9	2.5	〃	〃	〃
10		12.0		7.5	3.0	2.6	〃	〃	〃
11		12.1		8.1	2.8	2.9	〃	〃	〃
12		12.0		9.5	2.0	1.6	アメ色	〃	〃
13		10.1		7.2	5.0	1.2	乳白色	〃	〃
14		10.0		6.7	2.9	1.1	〃	〃	〃
15		10.8		6.0	3.7	1.1	〃	〃	〃
16		10.9		5.9	1.9	1.2	〃	〃	〃
17		11.2		7.5	2.7	1.5	〃	〃	〃
18		11.0		7.5	1.8	1.1	〃	〃	〃
19		11.0		4.8	1.9	0.7	〃	〃	〃
20		11.2		7.7	2.6	2.3	アメ色～乳白色	〃	〃
21		11.9		8.7	2.5	2.6	乳白色	〃	〃
22		12.5		8.6	2.1	2.8	ライトグリーン、乳白色	〃	〃
23		11.4		8.3	2.4	2.1	乳白色	〃	〃
24		10.1		6.2	1.2	0.9	コバルトブルー	丸玉２類	〃
25		8.8		7.0	1.3	0.6	〃	〃	〃
26		5.1		2.9	1.0	0.1	スカイブルー	小　玉	〃
27		6.0		3.9	1.1	0.15	ライトブルー	〃	〃
28		5.4		3.2	1.1	0.15	スカイブルー	〃	〃
29		4.0		3.1	0.5	0.1	〃	〃	〃
30		4.0		2.6	1.0	0.05	〃	〃	〃
31		4.0		3.1	1.2	0.03	〃	〃	〃



第83図　中通14号墳出土玉類・耳環実測図（1/1）



第84図　中通14号墳出土鉄器類実測図（1/2）

ガラス製小玉（㉖〜㉛）いずれも気泡のみられるガラス製で、色調は㉗がライトブルーである以外大略スカイブルーを呈す。

なお丸玉、小玉の類で床面に接した例を石室平面図に●で示している。

耳環（㉜）中実の銅地金箔張りであるが、大半は剝落する。断面が楕円形を呈し、横外径2.6m、横内径1.3cm、重14.6gを測る。

鉄器類（第84図、図版95）

鉄鏃（①〜㉘）約40片の鉄鏃片は、いずれも細根形式の鏃であるが、完形になる資料はない。このうち34片を図示した。先端部破片の数量から13点程度の鏃があったものとみられる。これらの鏃は先端部の形状から、片丸造鑿箭式（①〜③）、関無片丸造鑿箭式（④）、端刃鑿箭式（⑤〜⑦）、腸抉片丸造鑿箭式になると思われる例（⑧）、片刃造鑿箭式（⑨）、方頭細根斧箭式（⑩・⑪）に細分でき、⑪には3点の先端部破片と茎部破片及び他の形式の茎部破片が錆着している。

基部破片では、茎部と篦被部との界に段を有さない例（⑯・⑰・㉘）、段を有す例（⑮・⑲〜㉒）、棘状突起を有し棘篦被と称される例（㉓〜㉗）に区分できる。先端部との対比は明確になし得ないが、⑲・⑳のような段を有す例が方頭細根斧箭式に近く、棘篦被の例は端刃鑿箭式・片丸造鑿箭式に近いと言えよう。なお⑫〜⑭は方頭式の破片であろう。

直刀（㉙）鉄刀片が数点出土しており、形状の明確な破片のみ図示した。関部の破片で刃幅2.8cm程度、背の厚さ2mm、茎部幅1.5cm厚さ2.5cmを測る。

刀子（㉚）刀子の茎部破片が1点ある。幅1.2cm、厚さ5mmで、端部から2.8cmの、目釘孔の部分より、先は欠失している。目釘は直径0.5cm程度で1.2m長さが残存する。

鞘金具（㉛・㉜）㉛は足金具片であろう。幅8mm、厚さ3mm程度で過半を欠失する。内側に若干木質が錆着しており、木目は金具と直交方向になる。㉜は鞘尻金具であろうか。1mm程度の厚みを有し、やや長方形に近い楕円形の筒形で、端部は袋状となるが中央に長方形の窓がある。端部四隅には小さな突起を有しており、あたかも脚の如き形状をなす。

石器（第85図、図版95）

玄室内から出土した安山岩製削器が1点ある。縦長剝片の主要剝離面側を調整して刃部としている。重量49.1gを測る。

墳丘盛土中に、器面が風化しているものの胎土の質感から縄文土器と思われる破片1点と黒曜石片が出土している。このことからみて縄文時代に属す遺物と考えられ、この時期の遺構が周辺にあった可能性があり、石室内に混ざり込んだものであろう。

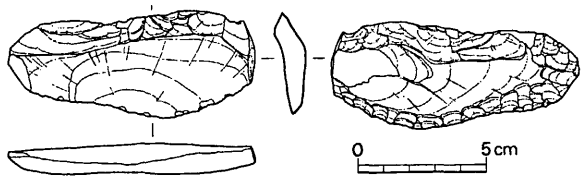
当該古墳の年代については、出土須恵器に時期的な幅がありセット関係を正確に把握し得ないが、須恵器杯1類の時期が築造期で、杯5類時期まで追葬等の利用があったと考えたい。九

州地方須恵器編年（註1）との対比では、１類が３Ｂ期末ないしは４Ａ期、２類が４Ｂ期、３類が５期、４類が５期末～６期初、５類が６期後半に相当し、６世紀後半～７世紀中葉の時期が与えられる。

また玄室床面出土の土師器高台付椀は御笠川南条坊遺跡出土土器の編年（註2）から10世紀後半頃が与えられ、この時期に石室内が攪乱を受けれと思われる。　　（小池）

註1　小田富士雄　1979　九州の須恵器　世界陶磁大系２　日本古代小学館

註2　前川威洋　1978　筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡（４）福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第８集下　福岡県教育委員会



第85図　中通14号墳出土石器実測図（1/3）

3）窯跡群の遺構と遺物

1．概　　要

中通窯跡群については、第１次発掘調査の折りＣ窯が崖断面に窯本体が表われていた（付図参照）。

他の窯については、窯本体が断面に表われていたが、土取りや雨等により崩壊して、完全に消失していた。

しかしながら、Ｃ窯についてはかろうじて、窯本体の半分が、調査を実施することができた。

“水等の問題”にて造成が中止されていたが、地元の業者によって土取工事がおこなわれ、新たにＡ－１窯の灰原が前田軍治氏によって発見され、通報された。このことを受けて、県文化課は上野技師を派遣し、土取範囲について、窯に影響のない部分を指示し、今回の調査にいたったわけである。

このことを踏まえて、古墳群の調査中の５月半に、詳細なる分布試掘調査を行なって、Ａ－２窯及びＢ窯を確認した。

本調査で窯跡は４基であった。

中通の丘陵は、九千部・背振山を中心に東西方向に連なる筑紫山系の一部をなす牛頸山から派生する舌状台地は、あたかもやつでの葉の様に（標高40m～100m）丘陵が連なる。

当遺跡の存在する丘陵は、西に牛頸川、東に小水城横を通る小川が南ケ丘団地までいたって

いる。開沃される狭長な谷が東西にはいり、そして牛頸川と小川は水城の築提の前面を通り御笠川に合流する。そのほぼ牛頸丘陵の中央部に位置する。

この残った丘陵は完全に今回、消失し、地形が変化する。

A－1窯・A－2窯は、ほぼ南側中央部に、B窯は東側の中央部に、C窯は西側に位置する。この他に消滅した窯は約5基をを数え、ほぼ西側に位置し、焚口は西側に向いていた。

2. 窯跡群の調査

A群窯跡（図版96～110）

中央部の南側に位置するA群窯は、土取によって、灰原が検出された表土を剝いでその広がりを追及したところ、あまりにも広範囲に灰原が広がるため、他にもあることが推定されることから重機を導入して表土を剝いだところ、新たに1基を検出した。前者をA－1窯とし、新たに検出した窯をA－2窯とした。

灰原には、地形に沿って、F字状にトレンチを入れるとともに、A－2窯には焚口から東西方向にトレンチを設定し、堆積状態を調べた。

また、A－1窯については、土取の影響によって、窯の煙出し部分と窯本体の上部半分が、一部崩壊したため、危険防止の意味から、窯本体の焚口部半分のみの調査を行なった。

A－1窯（第86～91図、図版100～105）

採土によって灰原が検出されたもので、窯本体の一部の焚口部付近は若干削平されていた。

東側に傾斜する斜面を利用してつくられており、丘陵の鞍部に排水溝をもっているもので、孤状の排水溝は南側に傾斜しながらいくものと推定されたが、採土によって窯本体の一部が崩壊したため、危険防止の意味から、焚口から約7mの所まで調査を行なうこととした。

窯は N-68°20′-E の方向に焚口をもつ、地下式の窯である。

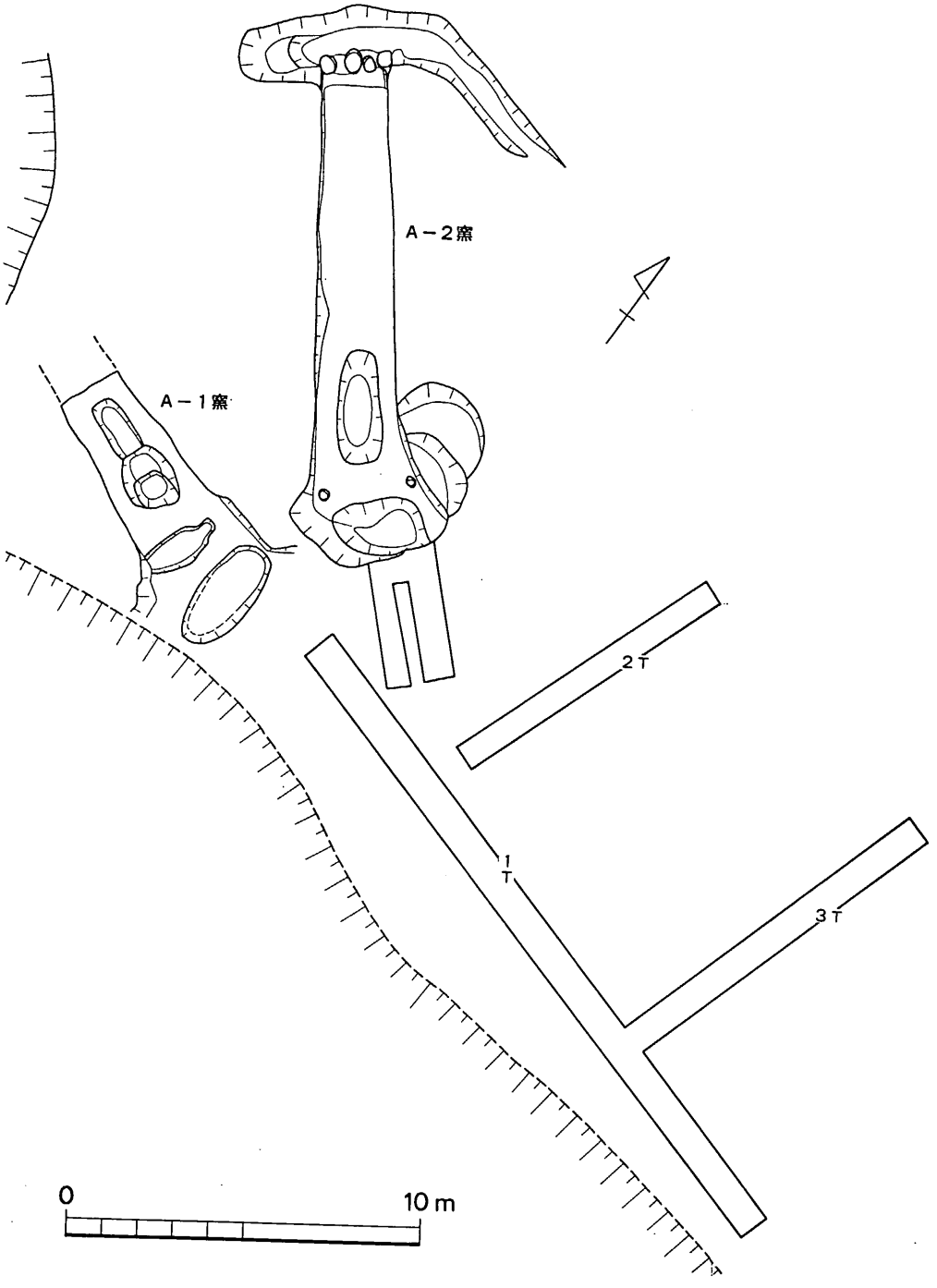
尾根線直下に排水溝の付設と煙道部をもつもので、煙道部と焼成部上半について、崖端に近いため、危険防止の意味から、焼成部下半と焚口部の約7mについて調査を行なった、全長から推定すると約½というところである。

3回にわたって、大改修が行なわれ、各回ごとに数次の小修理がみられる。

築造当初の構造について述べ、それから改造とそれに伴なう構造の変遷について述べたい。

焚口部　幅2.4mで床面緩傾斜面をなしている。左右側面に柱穴を有している10～20cm内外を有している。左右の壁は、ほぼ直立に近い数値をとっている。前庭部からつづく炭層は焚口の床面より下にもぐるので、2回以上の窯改造にともなう床上げが予測される。

燃焼部　焚口から窯内のどのあたりまでを燃焼部として考えるかは識別がむずかしいが、こ

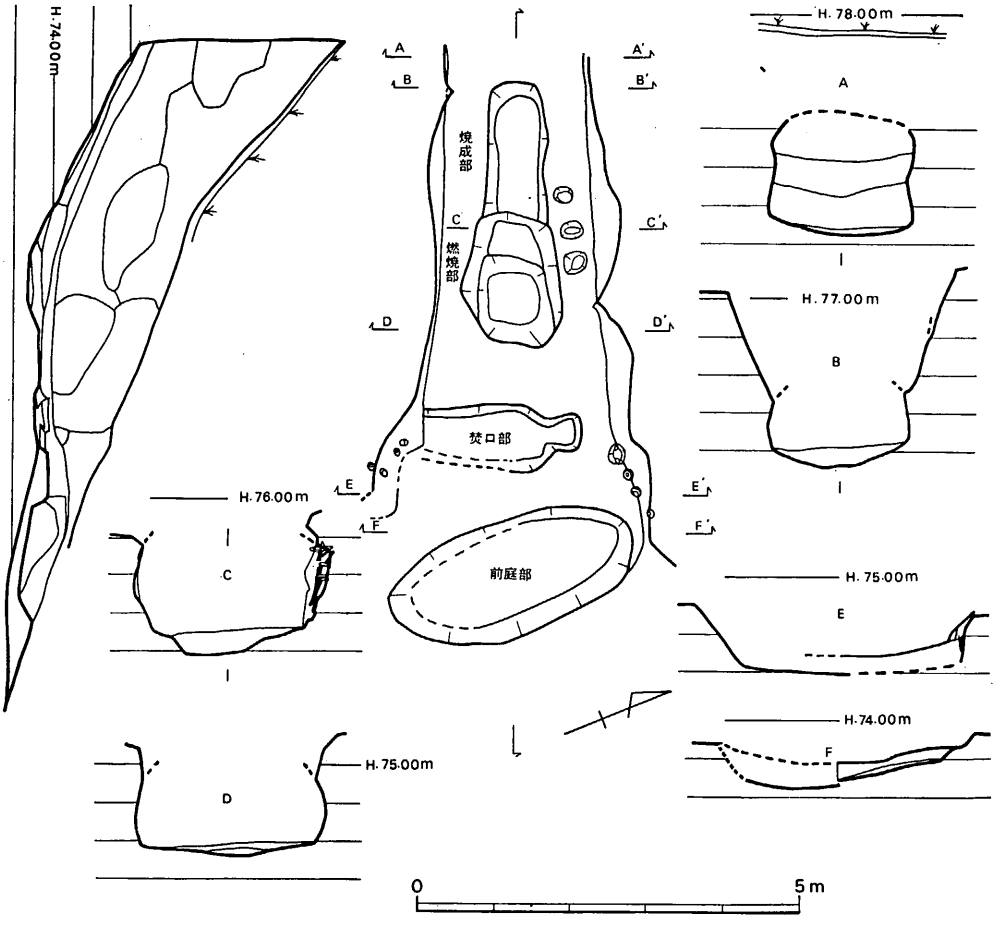


第86図　中通A群窯跡遺構配置図（1/200）

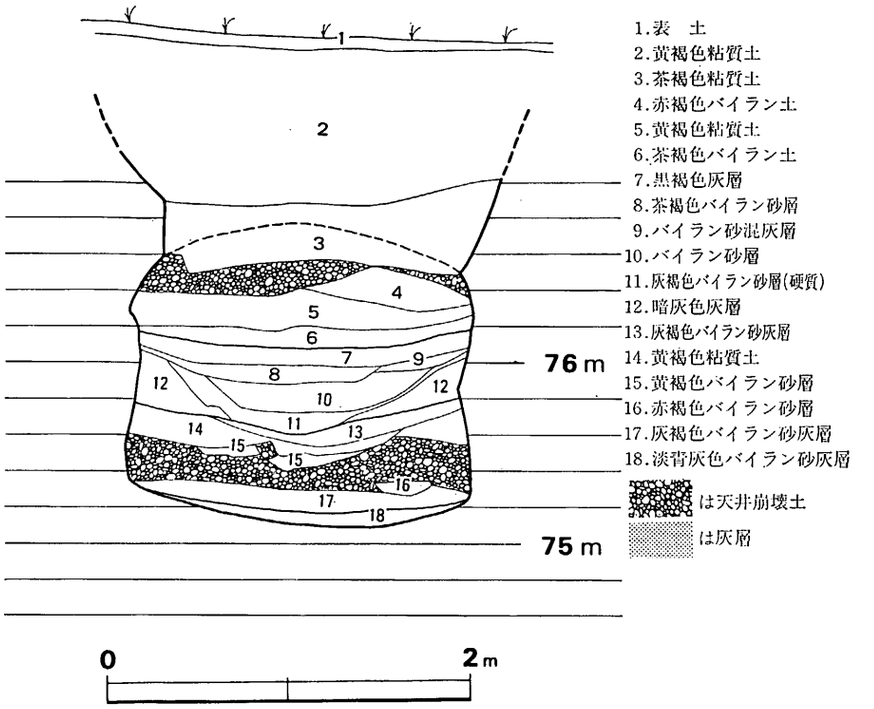
こでは焚口部より2.70m奥にすすむと舟底状の pit (c) から、床面の傾斜角度が大きく変化する。これを燃焼部にあててよいと考える。

焼成部　燃焼部より床面傾斜が急になり、28°を測る、窯全体幅は奥に進むにしたがって、だんだん短かく2m前後となる。A—A′の断面では不整形に近い楕円形を呈し、操業後約3回以上の大改修が行なわれている。最終段階では改造後窯本体は操業時よりも5m前後短かくして焚口として利用している。また（C—C′）はその断面には壁を補強するためのスサ入りの粘土と須恵器の甕の破片を利用し、またその中に直径5cmぐらいの杭をもって補強材として使用している（図版104）。天井までは約1mである煙出部及び排水溝については安全対策上発掘をあきらめた。ただ窯構造は排水溝と多孔式の煙出しを有す形を呈するものと考えられる。

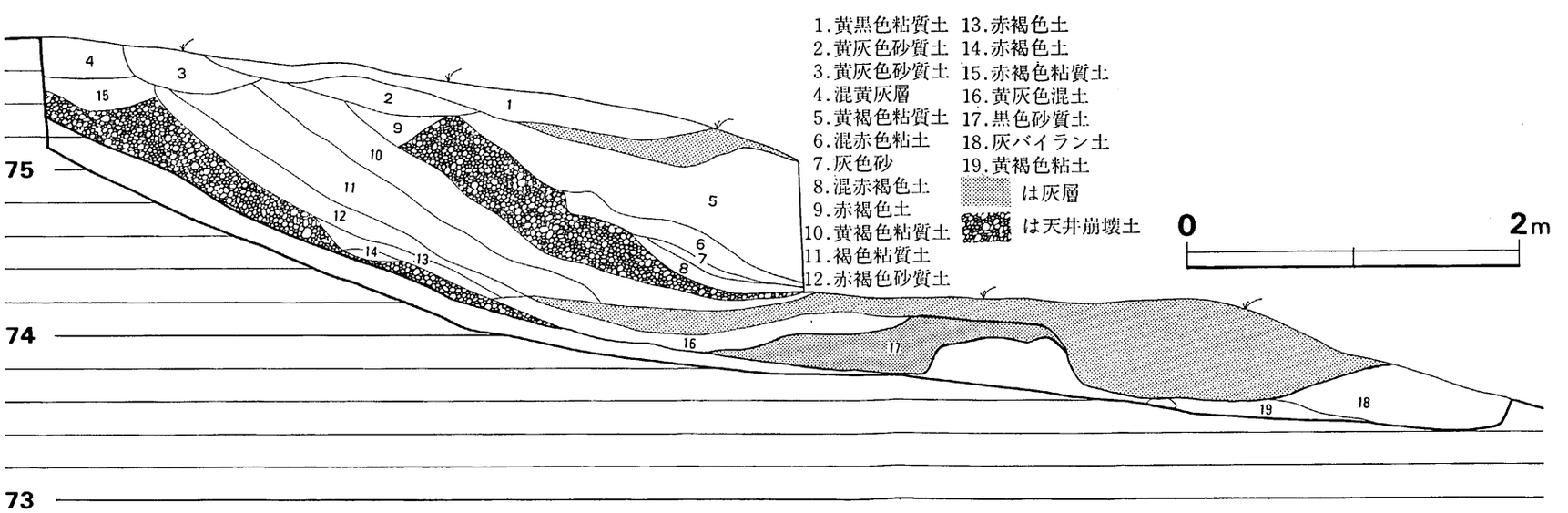
前庭部　焚口部の左右の壁は平面形で「ハ」の字状を呈している。窯内の床面や壁面が鼠色に還元焔焼成色を呈しているものに対して赤く酸化焔色を呈している。この部分の床面の炭灰



第87図　中通A-1窯実測図（1/100）



第89図
中通 A-1 窯跡
横断面図
(1/40)



第88図　中通A-1窯跡縦断面図 (1/40)

の堆積して厚さ25cmに及んでいるし、焚口面50cm前面に幅1m、長さ3mの楕円形の pit を有している。その右壁をA－2が切っていた。

窯改造について　前庭部から焼成部主軸にそってトレンチを設定し、窯改造に関する調査を行なった。窯体幅にはほとんど変化がみられない。A—A′ の断面からみると大きく3回の大改修がおこなわれ、操業時の右側壁の断面図から、ほぼ天井の高さが1.6m 前後を有すと推定される。最終床面から天井の高さは1.5m 前後と推定され、縦断面から3回目改修後窯本体を短かくして使用したため上面の一層の下に炭灰がみられる。このことから、操業時、2回目改修後に行なわれた同様なことが行なわれた。この大改造が行なわれたが、須恵器はほぼ一型式以内にわたっている。

窯内遺物の出土について　窯内部の発掘にあたっては焼成部、燃焼部、焚口付近で完形の杯蓋等が検出された。（図版103）操業時と最終床面（3回改造）とでは形式変化はなかった。

遺　物（第90・91図、図版121・122）

A－1窯出土の遺物について、器種を大別すると、杯蓋・杯身・平瓶・甕に分類できる。それぞれ個々の特徴については、第5表の観察表にて説明する。

杯蓋（第90図①～⑪）細部の形態上3種に分類される。

(a)は①～⑨で口径11～13cm前後で、器高2.6～4.4cm で、天井部はヘラケズリで、それ以下はヨコナデである。全体として器壁は厚手である。(b)は⑩で口径9.6cm、器高3.9cmで天井部はヘラ起しで、ヘラ調整を行なっている。(c)は⑪で口径8.0cmで器高2.6cmで、返りを有するものである。調整は他のものと変化がない。

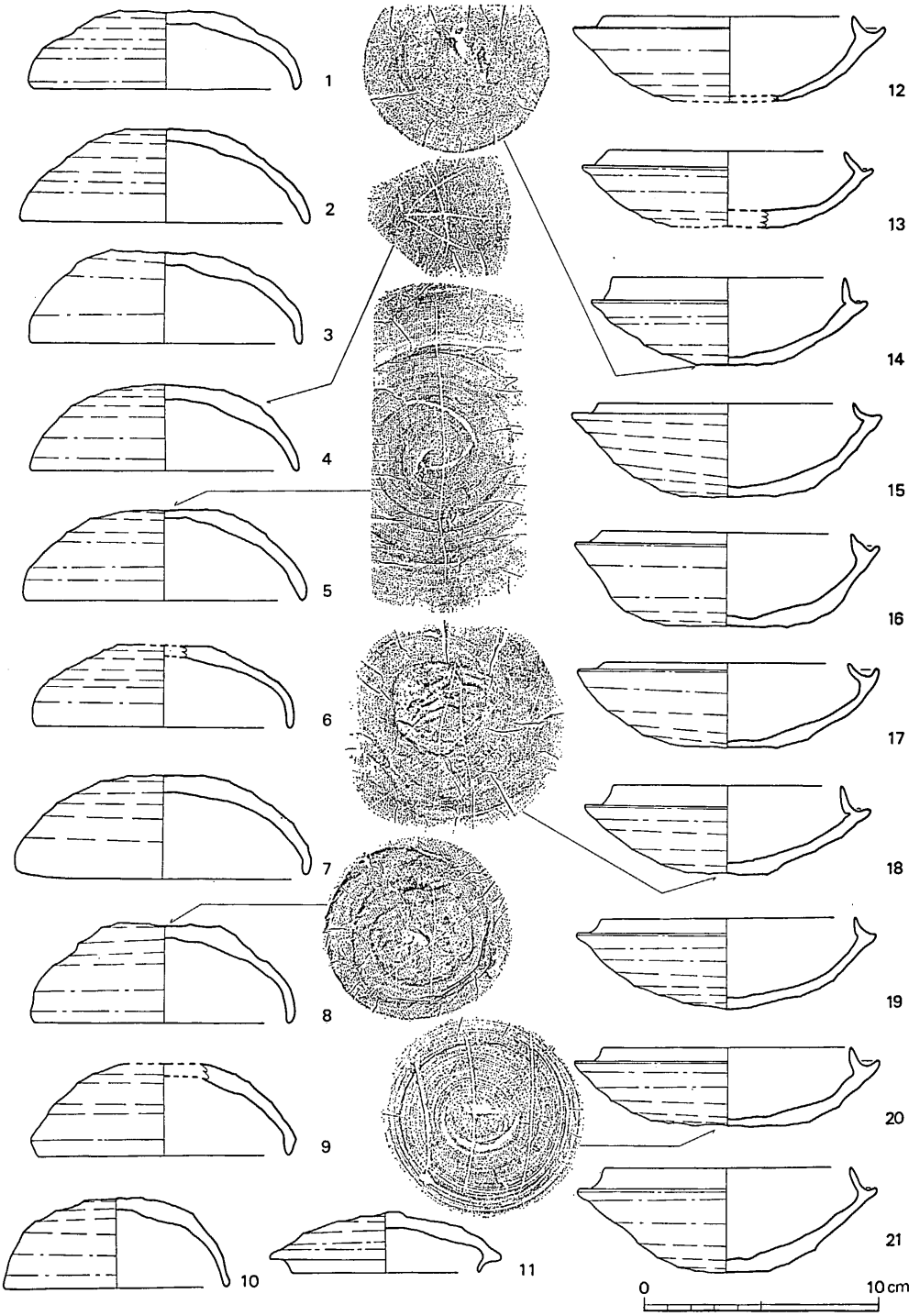
杯身（90図⑫～㉑）口径は12cm～13.3cm前後をとり、器高は3.3cm～4.5cm である。分類すると器高が高い者⑮・⑯・㉑と低い者⑬・⑳、中間の者とに3分類できる。しかし、窯内の出土状態からは明確に器高の高低からは何も言えないもので、最上層床面から最下層の床面まで、器形的に分離することはできない。

甕（第91図㉒～㉕）大型の甕（㉓～㉕）と小形の甕（㉒）に大別できる。㉒は内外面ともヨコナデである。㉓・㉔は口縁部である。いずれも口縁端下に1～2条の凸帯を有し、頸部に数条の沈線を施している。㉓・㉔は沈線間に斜行連続沈線をめぐらしている。㉕頸部付近は破片で、ラッパ状に開く接合部の破片である。

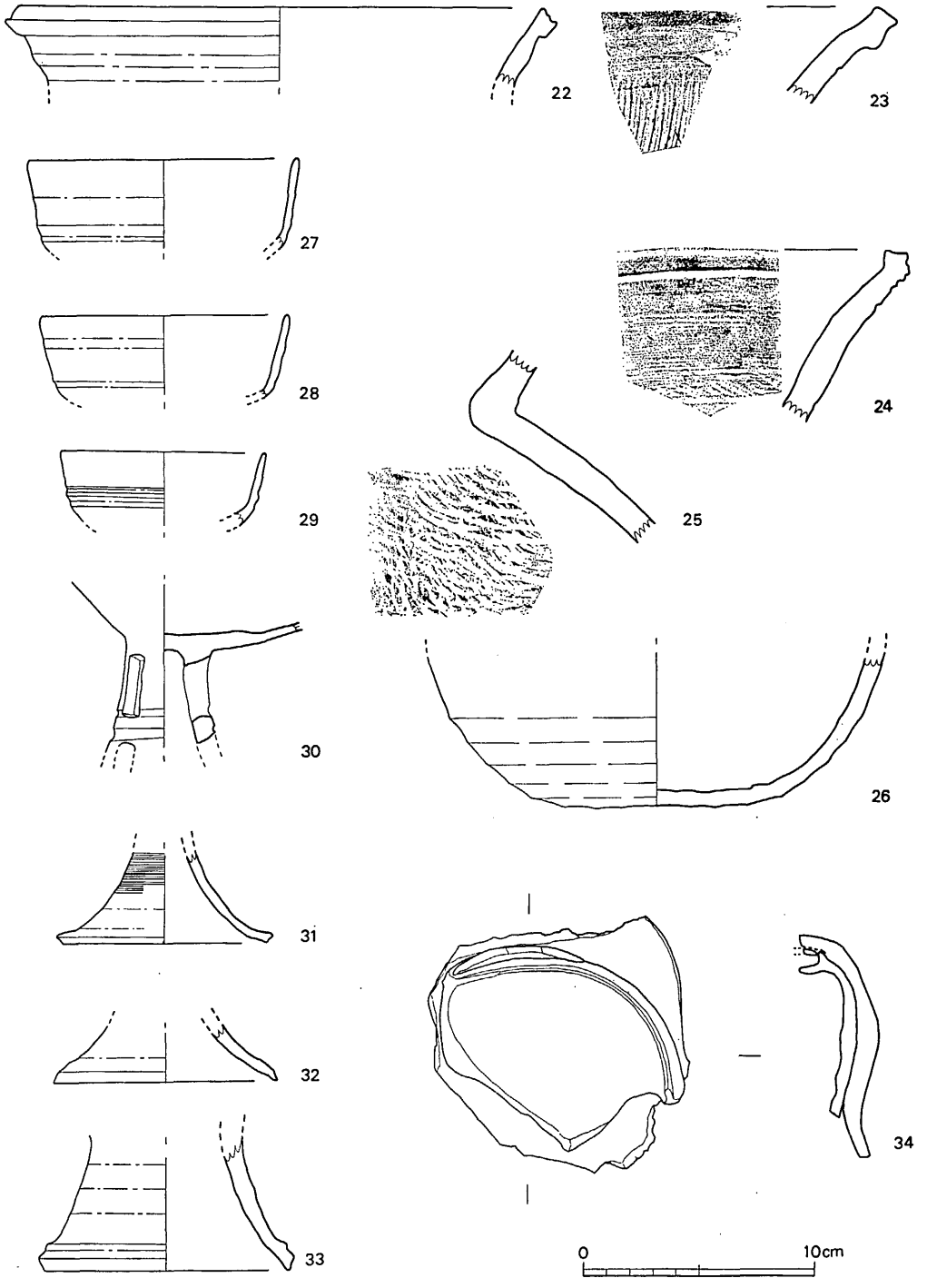
平瓶（第91図㉖）底部の破片で、ヘラ記号を有している。

高杯（第91図㉗～㉝）㉗・㉘・㉙は杯部の破片で㉚～㉝までは脚部の破片である。

㉗・㉘・㉙の口縁部直下に二条の沈線を有する。㉚は脚部で方形の二段透しである。㉛・㉜は小形品の脚部で、㉝は大形の脚部で、脚裾端を強くナデつけて薄手にし、裾を広く取るもの㉚・㉛・㉜とそうでない㉝とがある。



第90図　中通A-1窯出土遺物実測図①（1/3）



第91図　中通A-1窯出土遺物実測図（1/3）

杯身と焼台（第91図㉞）甕の破片を焼台と使用したもので、その上に杯身を置いていたもので、焼成時にゆ着したものである。窯入れの様子が推定される。

以上がA－1窯の窯の内より出土したもので、全般的に、上位と下位との窯内での器形の変化はみられず、杯蓋・杯身の形態にも変化がないが、蓋は倭小化し、返りを有するものが出現している。

いわゆる小田氏編年ではⅣa期にあたり、酒井氏等のⅣ期に比定できる。

A－1窯自体、3回にわたって大改造を行ない約5m前後短かくして最終操業を行なったと推定されるが、須恵器の器形の変化はみられないが、時期的に大浦1号窯に近い。

A－2窯（第92～98図、図版106～111）

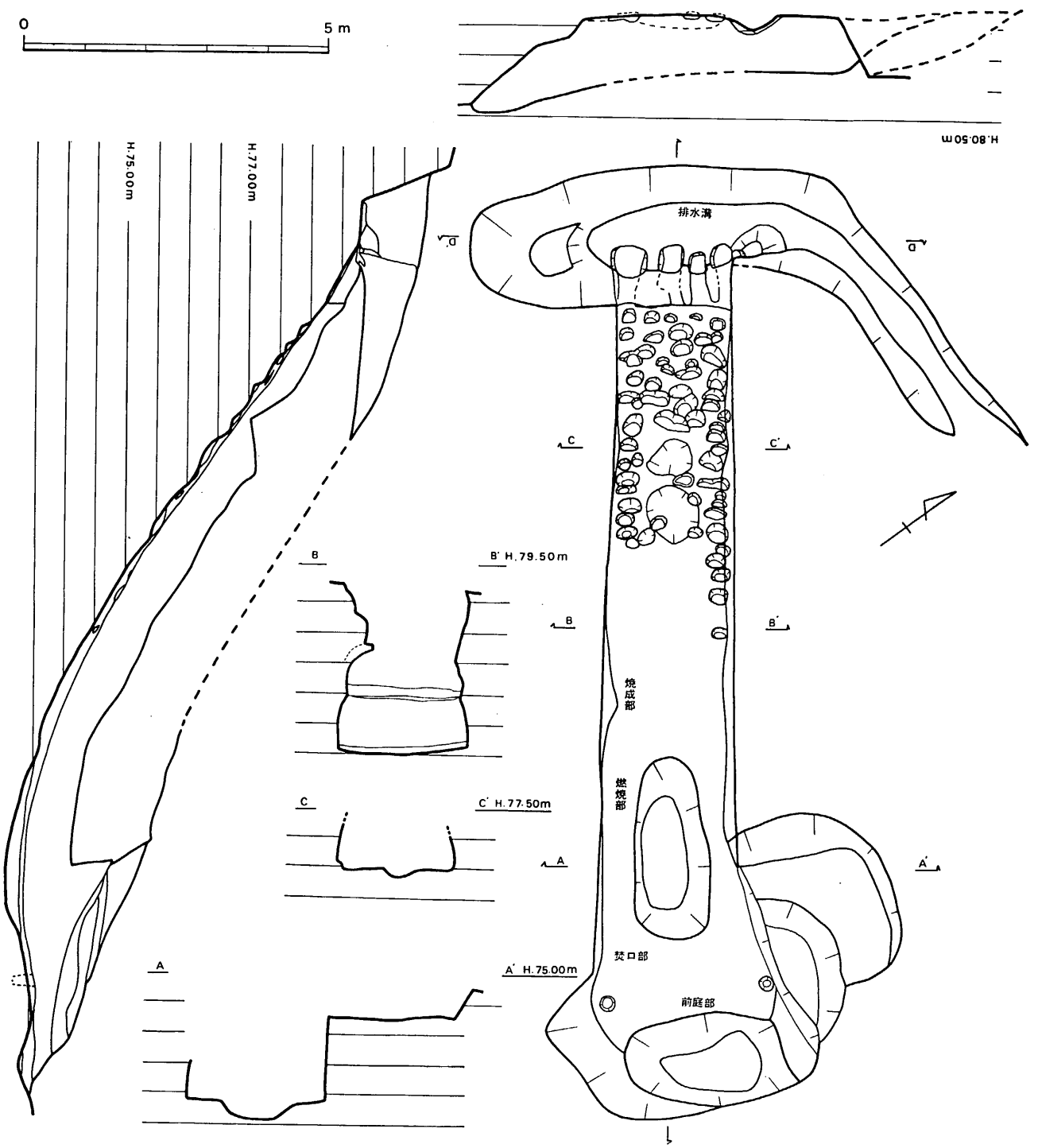
A－1窯の横にあって、A－1窯は切ってA－2窯がつくられている。しかしながら、形式的にはほぼ同時期であるため、ほぼ平行して操業している。主軸をN－38°－Wに焚口は南東方向である。前庭部から排水溝まで全長16mで煙道に付設して直交する様に排水溝が北側に弧状を描きながら、傾斜に沿ってなくなっていく。全長9m測る。窯本体の平面形は焚口が若干ひらくが本体そのものは長方形のずん胴を呈している。前庭部には凹穴を有し左右側壁面に径20cm～25cmの柱穴を有し、右側には1.30m高さに一段平坦面をもっている。柱穴を利用して覆をつくたものと思われる。雨よけとした。

焚口部　幅2.5mで床面は緩傾斜面をなしている。左右側面に柱穴を有している。直径10cm～20cm内外を呈している。左右の壁は、ほぼ直角に上がる。前庭部からつづく灰黒色土（灰層）が焚口の床面より下にもぐる2回以上の窯改造にともなう床上げがなされている。

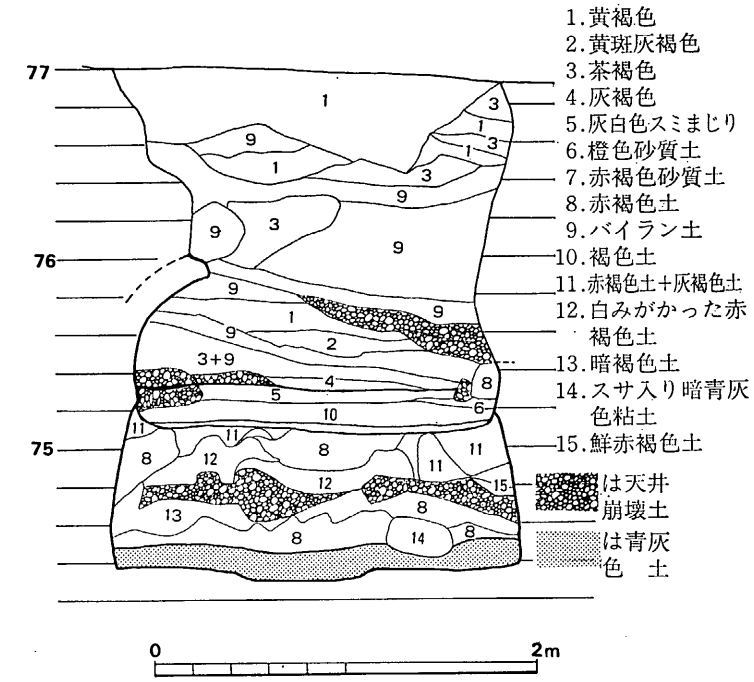
燃焼部　焚口から窯内のどのあたりまでを燃焼部と考えるかは区別がむずかしいが、焚口部より3.00m奥にすすむと舟底状のpitから、床面の傾斜角度が大きく変化する。これを燃焼部にあてる。

焼成部　燃焼部より床面傾斜が急になり30°を測る。窯体幅は2.15mで、煙道付近では幅1.90mを測る。焚口から5mで、階段状の有段を有する。階段状の凹地内には焼台として、こぶし大や頭大の土塊や須恵器を利用した（杯の天井部を丸く打欠いたものや大甕片）ものがあり、台として安定させ焼成したことが理解され、この段によって垂平にしてバランスを保させた。B－B′の断面はかまぼこ型を呈している。この窯は断面から操業後2回以上の改造を行なっている。最終段階では改造後窯本体は操業時よりも5m短かくしている。操業時よりも2.5mを盛土をして大改造している。

煙出し部　焼成部より一段高く4つの煙出しをもつ多孔式で、幅1.5m、長さ9mの煙道部に付設して直交する様な排水溝が北側に弧状を呈している。



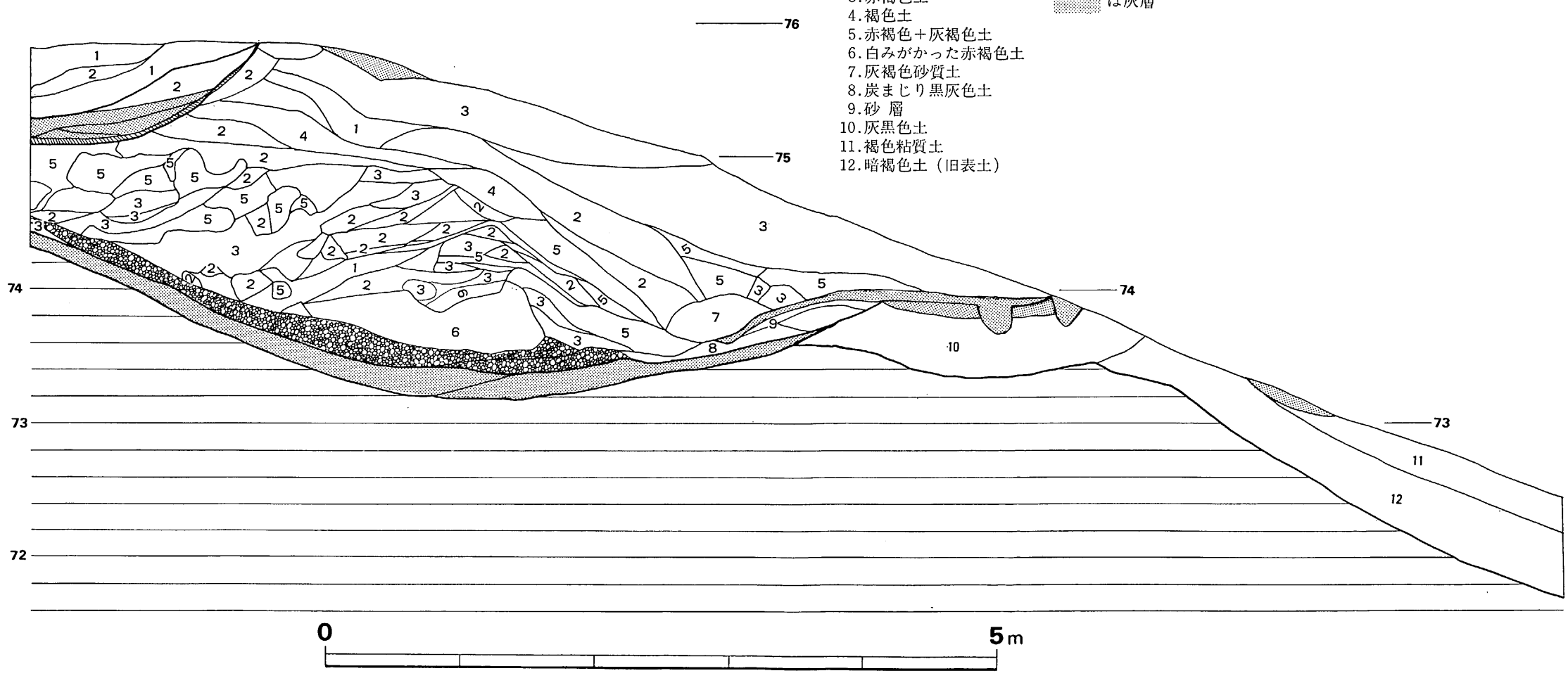
第92図　中通A-2窯跡実測図（1/100）



第93図
中通A-2窯跡横
断面図（1/40）

1.黄褐色土
2.灰褐色土
3.赤褐色土
4.褐色土
5.赤褐色＋灰褐色土
6.白みがかった赤褐色土
7.灰褐色砂質土
8.炭まじり黒灰色土
9.砂 層
10.灰黒色土
11.褐色粘質土
12.暗褐色土（旧表土）

は天井崩壊土
は灰層



第94図　中通A-2窯跡焚口部縦断面図（1/40）

前庭部　焚口部の左右の壁は若干開き気味であるが、細長いずん胴を呈している。窯内の床面や壁面が青灰色（鼠色）に還元焔焼成色を呈している。この部分の床面の炭灰、灰黒色の堆積が25cm～50cm厚さに及んでいる。左右の側壁の付近には柱穴を有し径20cm～25cmで、窯に付設する覆をつくったもので、雨よけと考えられる。端に若干の凹穴を有している。

窯改造　前庭部から焼成部主軸にそってトレンチを設定し窯改造に関する調査を行なった。

横断面からみると2回の大改修が行なわれ、主軸にそった断面から、操業時よりも2.50mに盛土して、ならした上で、操業時窯本体より5m短かくして、上部はそのままで窯を改造して使用している。2回目改造後の天井を推定すると90cmで断面はかまぼこ形を呈する。この大改造が行なわれても窯内の須恵器はほぼ同一時期である。

窯内遺物の出土状態　窯内部の発掘にあたって焼成部と改造後の焚口付近で完形の杯蓋等を窯積めの状態で検出された。操業時と最終床面とでは型式変化はない。

遺　物（第95～98図）

A－2窯内から出土したものは、蓋杯・高杯・甕・平瓶等である。その特徴については第6表観察表に記入している。

まず第96図の煙出し部出土の遺物から述べてみよう。

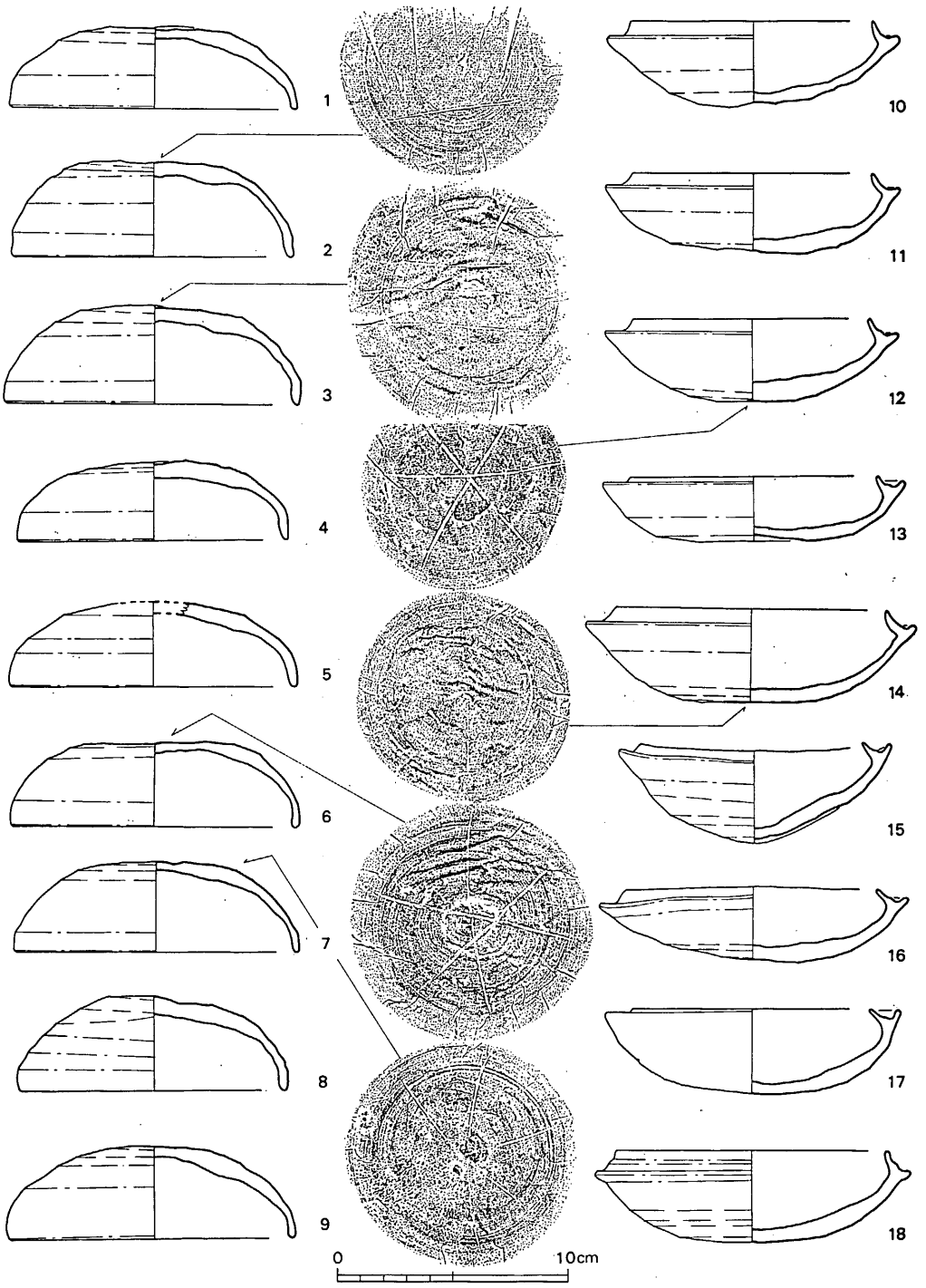
検出した場所は煙出し部の多孔式のトンネルの中より、壁を補強するかの様にして検出されたもので、完全な姿ではなくひずんでいる。⑲は有蓋高杯の蓋の部分である。他はすべて杯蓋である。㉒はひずんでいる。

杯蓋（第95図①～⑨、第97図㉓～㉞）口径が10cm～12.7cm器高3.4cm～4.5cmを測る。形態的には、操業時の床面と最終床面では器形そのものに変化はない。しかし形態的には若干差がある。(a)器高の低いものと(b)器高の高いものとに分類できる。

(a)器高の低いものは3.4cm～3.9cmもので、①・④・⑤・⑥・⑦・㉔・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉞があてはまる。(b)器高の高いものは4.0cm以上のもので、②・③・⑧・⑨・㉓・㉕・㉝である。調整はヘラケズリを天井部と体部⅓で、後はヨコナデ仕上げである。このことは(a)・(b)）にも言えることである。

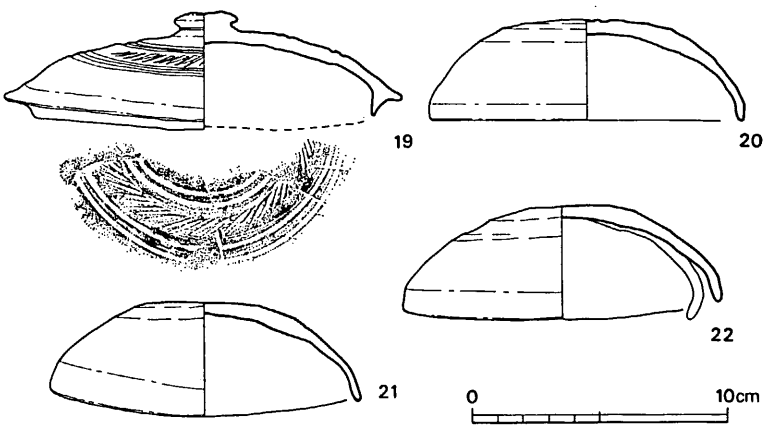
杯身（第95図⑩～⑱、第97図㉟～㊵）口径は9.6cm～12.7cmで、器高は2.8cm～4.1cmを測るものである。口径が10cm台を測っているものは最終床面より出土している。また口径が11cm～12cm台のものは操業時の最初焚口部であった。このことから、大→小の小形化の傾向を考えることがある。身受け部の感じは、若干内傾するが高い。器高は浅いものと深い感じのものがあるが2.8cm～4.1cmを測っている。一般的に倭小化に気づく。

甕（第97図㊶）口縁部破片は少なく、その代表的なもので、中形、小形の甕の口径破片ではなかったか。㊶は大形の甕で、内外面ともヨコナデ、外面はカキ目を施した後、斜めのヘラ描



第95図　中通A-2窯出土遺物実測図①（1/3）

き沈線を入れている。胎土精良で焼成良好である。窯内より出土している（第2次焼成床面）。



第96図　中通A-2窯出土遺物実測図②（1/3）

高杯（第96図⑲、第97図㊷～㊺）

有蓋高杯と無蓋のものとがある。⑲・㊷はその蓋である。⑲は蓋で、煙出し部の補強として使用されていたものである。内面に返りを有している。口径13.2cm、器高4.6cm、ツマミを持ち、外面天井部は調整方法不詳で、中位から斜めのヘラ描がはいり、その下から内面にかけて、ヨコナデ内面天井部は不定方向にナデで、一部自然釉が付着している。大形の高杯である。㊷は口径12.2cm、器高4.8cm、ツマミを持ち、外面天井部はヘラケズリ、それ以下から内面にかけてヨコナデ仕上げである。窯内より検出された。㊸・㊹・㊺は杯部と脚部である。㊸は前庭部より出土したもので、口径9.3cm、器高11.6cmで、裾端に折りかえしのあるもの。㊹は口縁直下に二条の沈線を有する杯部である。㊺は口径8.4cmで、三者とも小形の高杯である。

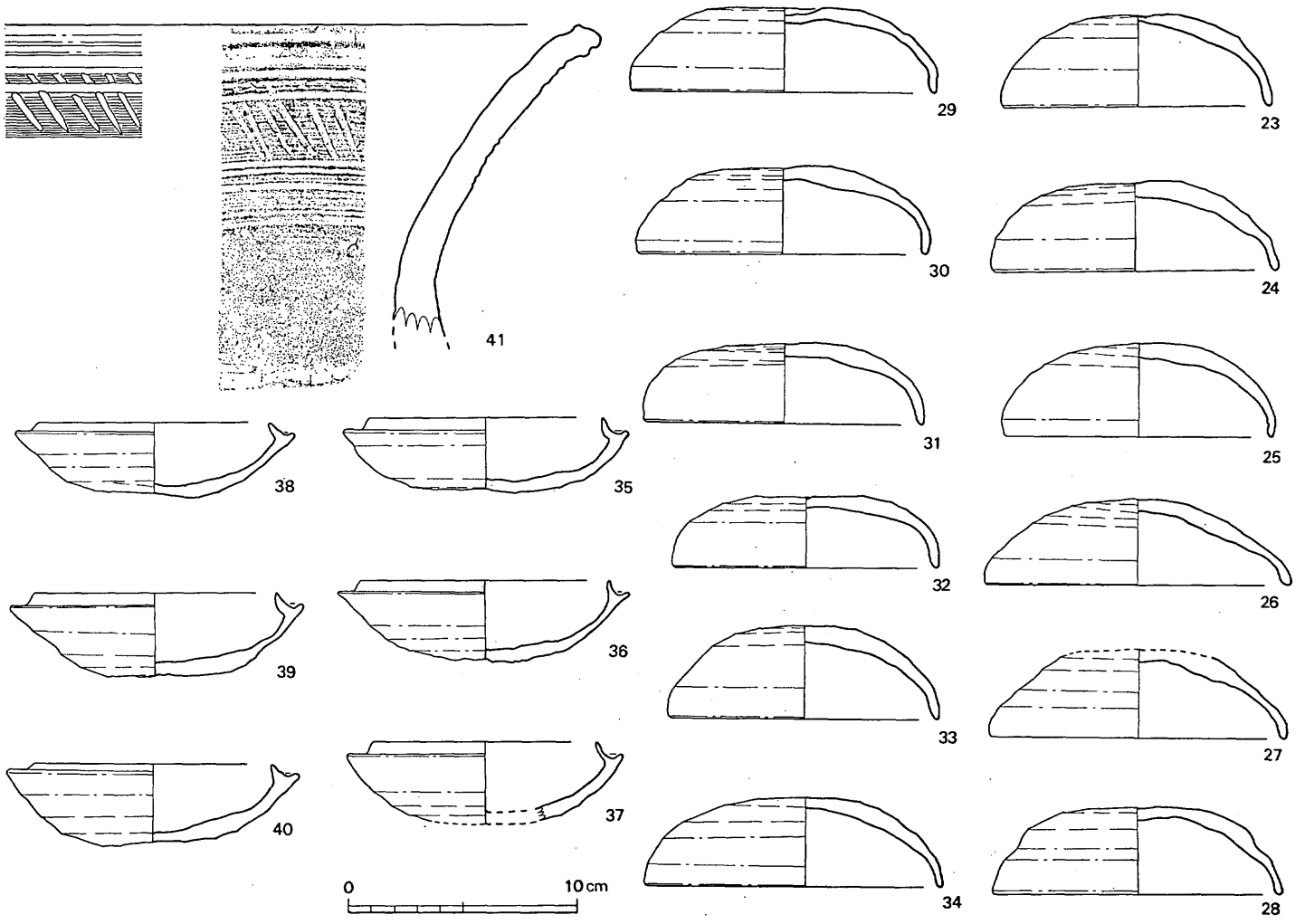
杯身（第98図㊻）口径14.4cmの杯身で、口唇部は直角である。底部は丸底で、ヘラケズリで、側面、カキ目、口唇は比較的平坦で仕上げはナデ仕上げである。

平瓶（第98図㊼・㊽）口縁部と胴部の破片である。㊼は口縁部で、㊽は胴部破片で、胴部径は22.7cmで、外面カキ目一部ヨコナデ、ヘラ記号が体部から底部にかけてVの字を描いている。

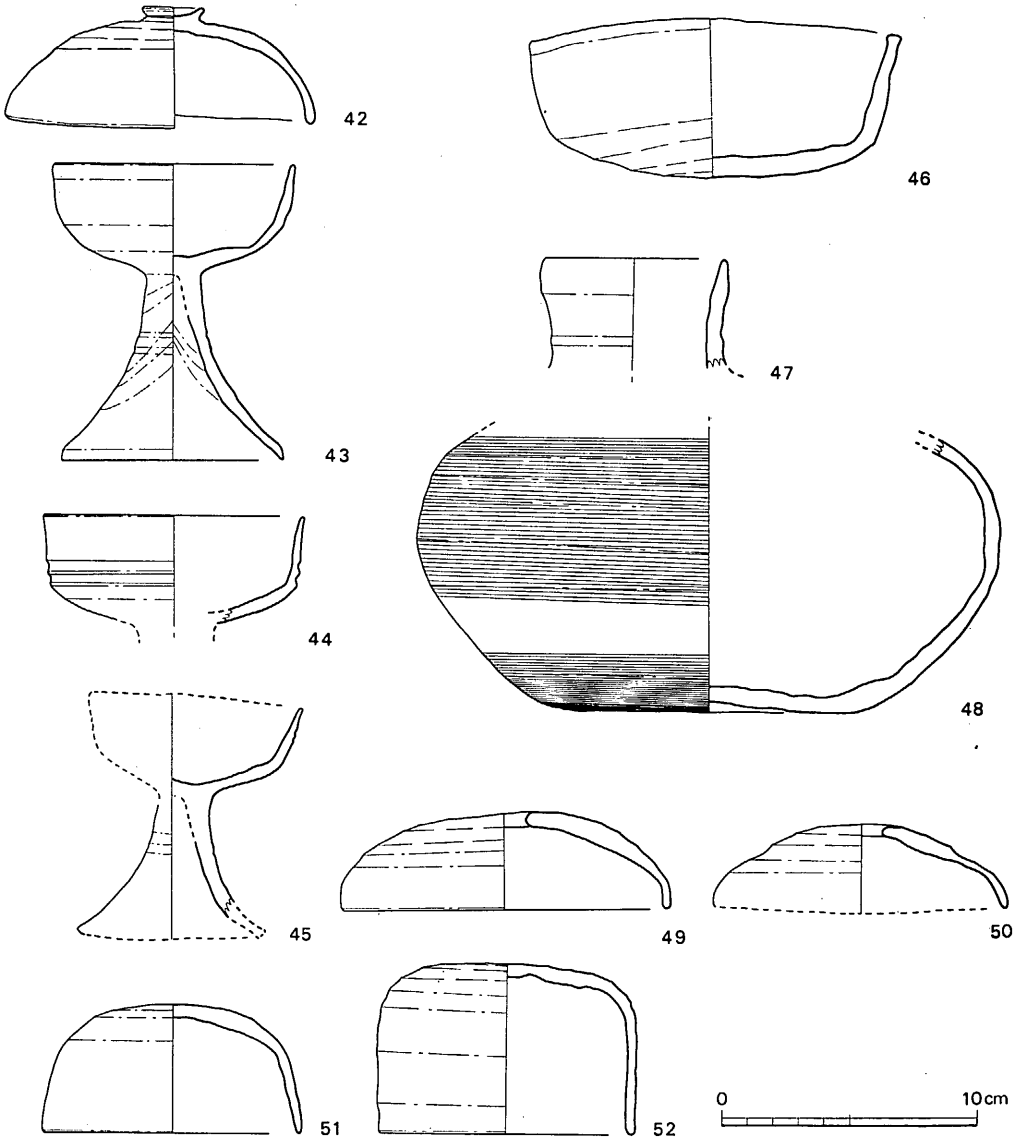
焼台（第98図㊻・㊿）杯蓋を利用したもので焼成後に天井部を穿孔している。㊾は内外面ともヨコナデ、天井部付近は不定方向ナデ、㊿は外面天井部ヘラケズリ、それ以下はヨコナデ、内面調整方法は不詳、内外面とも黒灰色で自然釉が付着している。

蓋（第98図(51)・(52)）短頸壺の蓋と考えられるもので、若干疑問を残す。(51)は、復原口径10.3cm、器高5.6cmで、調整付外面はカキ目で底部付近は調整不明、内面ヨコナデである。(52)は径9.7cm、器高6.7cm、外面天井部はヘラケズリで、外面はカキ目で、側面から内面にかけてヨコナデである。天井部にはヘラ記号を有している。体部の一部には黒変している焼成は強緻である。

ヘラ記号　一覧表を参照されたい。主なものを図示すると、米・卅・川・Ⅱ・×・Ⅿ・Λである。その中でも米が杯身と杯蓋に付されていて、全体の20%以上である。



第97図　中通A-2窯出土遺物実測図③（1/3）



第98図　中通A-2窯出土遺物実測図④（1/3）

このことから、米と卅が主体を占めている。ヘラ記号に関しては、C窯の後に若干の総括を行ないたい。またA群だけの比較はA灰原の中で記載する。

以上のことから、杯類によって、操業時の折には、大形と小形の杯が、最終的の床面には完全に小形化する傾向がみられる。このことは杯身と杯蓋にもいえるわけで、倭小化することは

把握できる。ただ6世紀後半の中頃から後半にかけての段階で、小田氏の言うところの、ⅣA期からⅣB期の過渡期に比定してよいだろう。

A群灰原（第100図、図版110）

A－1窯、A－2窯の灰原について、その広がりを求めるため、下字上にトレンチを設定した。A－1窯の主軸を伸ばし、地形に沿って縦に1T を設定、等高線に並行して 2T、3T を設定し、その広がりを求めた。しかしA－1窯の南側は完全に崩壊しているため、左側不可能となり、右側のみ把握できた。その断面図（第100図）である。

このトレチで層位ごとに遺物を採出したが形式の変化はみられなかった。
全ての灰原中に含まれている遺物については採集した。

遺　物（第101・102図）

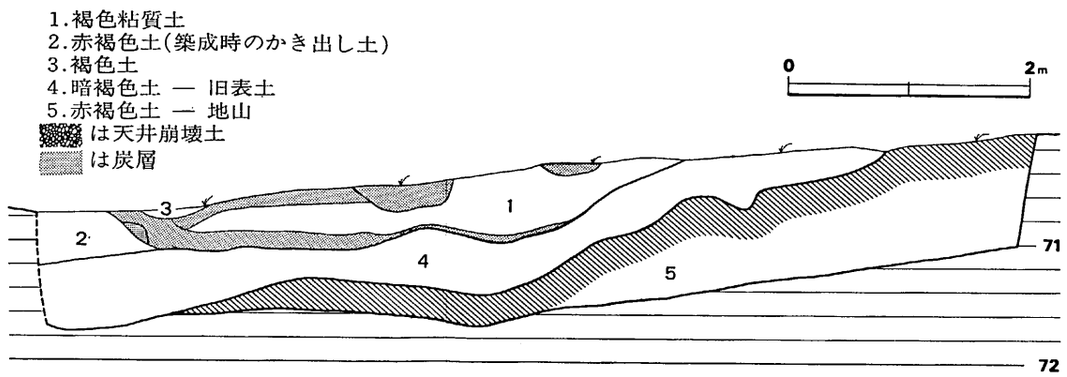
A－1窯、A－2窯から掻出された灰や炭層に傷物や破損したものを捨てたもので、扇状に堆積していたと思われる。これにF字にトレンチを入れ、層位的に採集した。器種は杯蓋・杯身・甕・高杯・坩・平瓶・硯等である。

杯蓋（第101図①～⑬）口径 11.cm～12.6cmで、器高は 3.0cm～4.2cmまでを測る。(a)器高が低いもの(b)器高の高いものとに分類でき、また口径が11cm台と12cm以上に分類できる。12cm台のもので(b)のものは①・⑨・⑩、11cm 台で(a)のものは②・③・④・⑥・⑫である。形態的には大小の差はあるが、天井部等の調整方法は同じである。

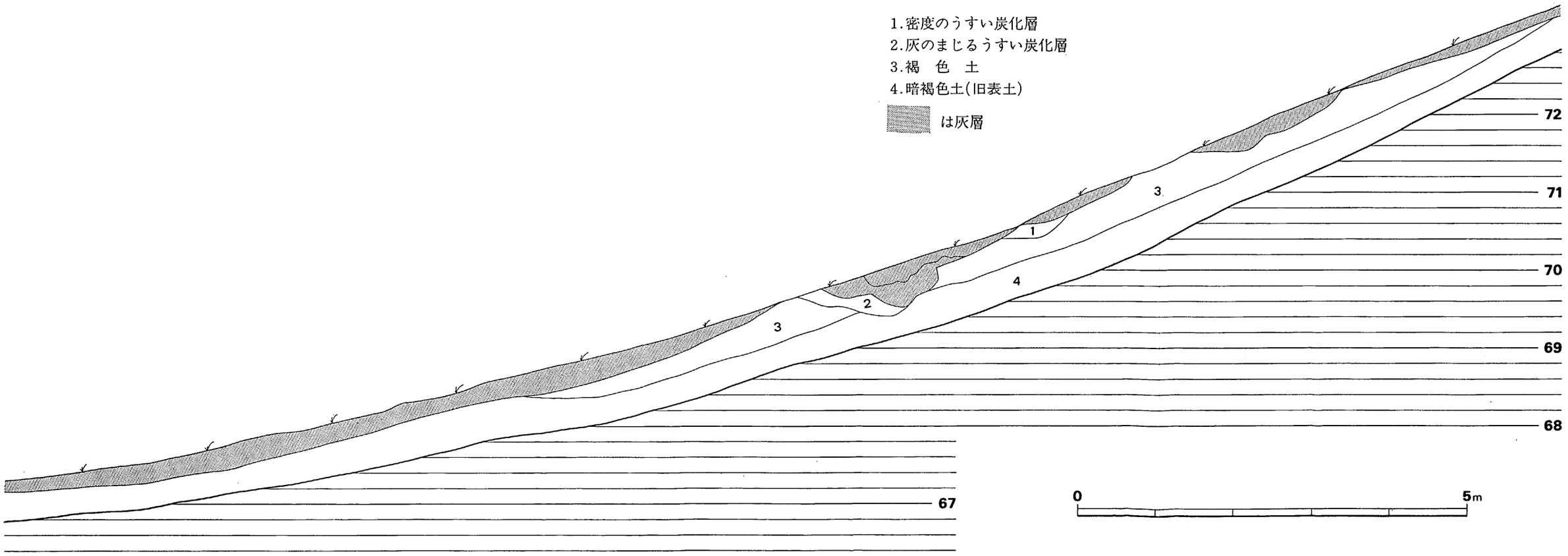
杯身（第101図⑭～㉓）口径は9.8cm～11.2cmで、器高 3.6cm～4.1cmを呈している。口径が10cm前後と、11cm前後のものとに二分できる。前者は⑭・⑰・⑳・㉑・㉒・㉓で、後者は⑮・⑯・⑱・⑲である。しかしながら身受部は、若干内傾するが、両者とも大差はない。器高は若干の差があるが、相対的に深いという考じはなく、均整のとれた身の感じである。ヘラ記号は身よりも蓋の天井部に多い。

甕（第102—㉔～㉖） 口縁部破片で、㉔・㉖ は大形の甕、㉕中形の甕である。㉔は外面カキ目の後にヘラ描きし、また口唇から内面にかけて ヨコナデしている。㉖も㉔ に同様な調整である。㉕はナデ仕上げで、口唇部の特徴のみである。

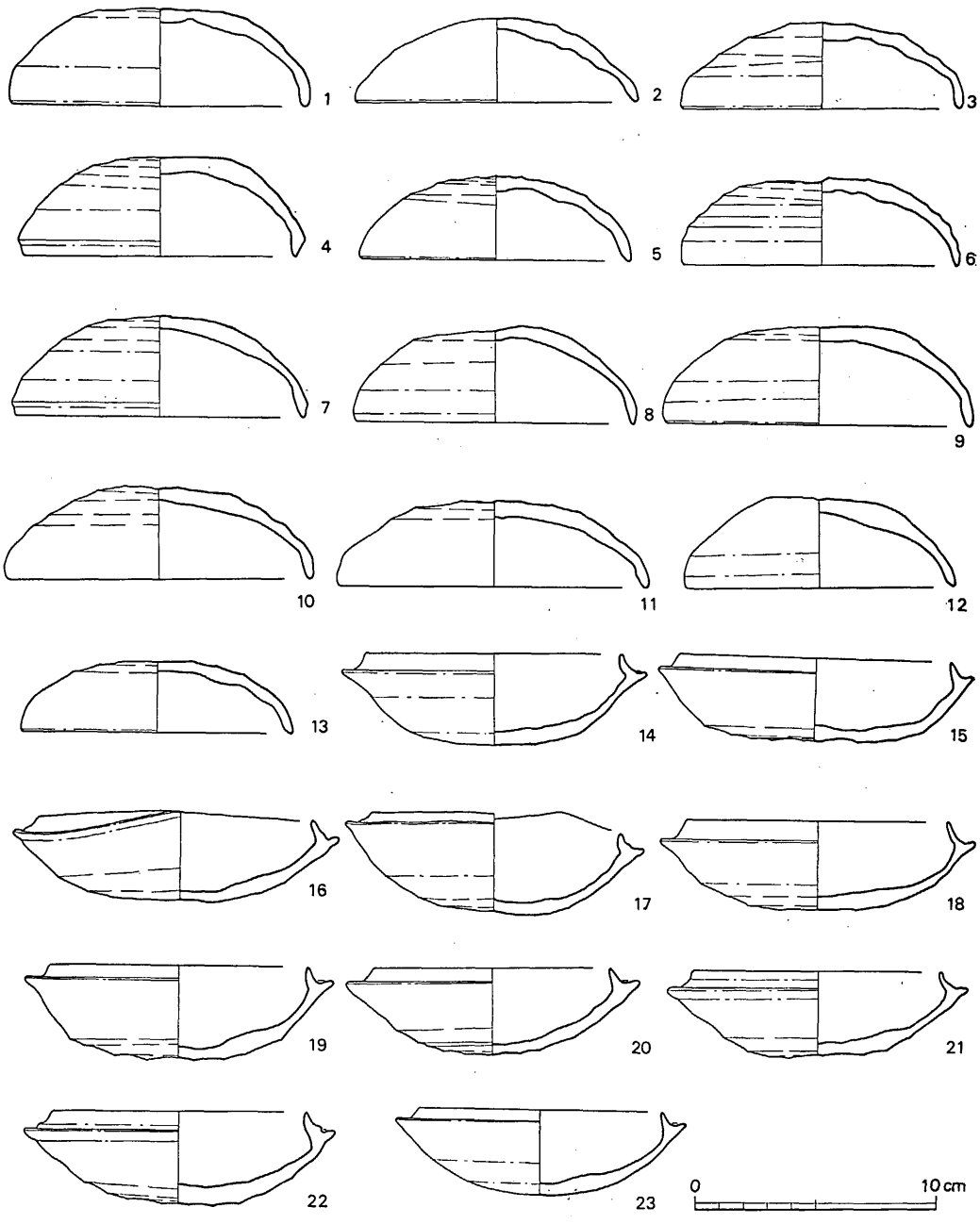
高杯（第102—㉗～㉙・㉛～㉝）有蓋高杯と無蓋のものとがある。㉗・㉘は蓋で、前者は口径13.4cmで、器高4.3cm、外面ツマミを有し、天井にカキ目、沈線をはさんで、それ以下はヨコナデ、天井付近では、部分的にカキ目の痕跡を残している。内面は不定方向のナデ仕上げである。㉘はツマミを有し、天井部付近はヘラ削り、それ以下はヨコナデ、内面天井不定方向ナデである。両者とも焼成堅緻である。㉙口縁直下に二条の沈線を有し、杯部外面にはカキ目、



第100図　中通A群窯跡灰原２トレンチ断面図（1/60）



第99図　中通A群窯跡灰原１トレンチ断面図及び灰原２トレンチ断面図（1/60）



第101図　中通A窯灰原出土遺物実測図①（1/3）

内面はヨコナデ、脚部内外面はヨコナデ、小形の高杯である。㉛は脚部の中央部付近で、外面にカキ目を施し、内面はヨコナデである。㉜㉝は脚部裾部の形態が相違する。㉜は裾部を広く

とり、内面にヘラ記号が施されている。㉝は杯部内面から脚部外面にかけて、自然釉が付着している。そのために調整方法不詳な点がある。

壺（第102図㉞）口径10cmで、頸部から下半まで、外面頸部から内面にかけてヨコナデ肩付近には沈線を有し、それ以下にはカキ目である。

坩（第102図㉟・㊱） ㉟には外面に自然釉が付着して調整方法不詳、内面ヨコナデである。㊱は内外ともヨコナデで器面に付着物がある。両者とも焼成は良好である。

平瓶（第102図㊲・㊳） ㊲は灰原の唯一の完形品である。外面底部はヘラケズリで、胴部から口縁、内面にかけてヨコナデ、胎土に若干の砂粒を含む、焼成不良で、器面に亀裂を有している。色調は灰白色である。㊳は底部で、底部はヘラケズリで、それ以外は内外面とも自然釉が付着して調整方法は不詳である。

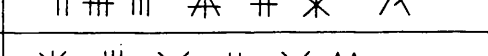
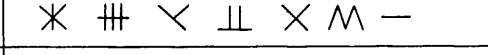
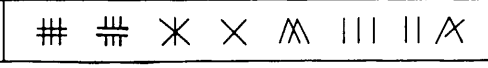
甕（第102図㊴～㊷）㊴は頸部破片で、他は体部である、㊴は頸部がラッパ状に開いたもので、内外面ともナデ仕上げである。㊵・㊶・㊷は頸部より上を欠失している。体部から底部にかけて停止ヘラ削りしている。体部上半の2条沈線をめぐらしている。㊵は2条の沈線間に、斜行櫛刺突紋を配している。調整方法は体部下半から底部はヘラケズリで、穿孔は外から内へとあけられている。

杯身Ⅱ（第102図㊸～㊻）大形の杯身で器高が深いものである。㊸外面底部ヨコナデ、側面カキ目口縁から内面にかけてヨコナデ、口縁直下に2条沈線を有する。㊹・㊺・㊻の調整は、外面底部はヘラケズリ、側面から内面にかけてヨコナデ焼成は堅緻である。

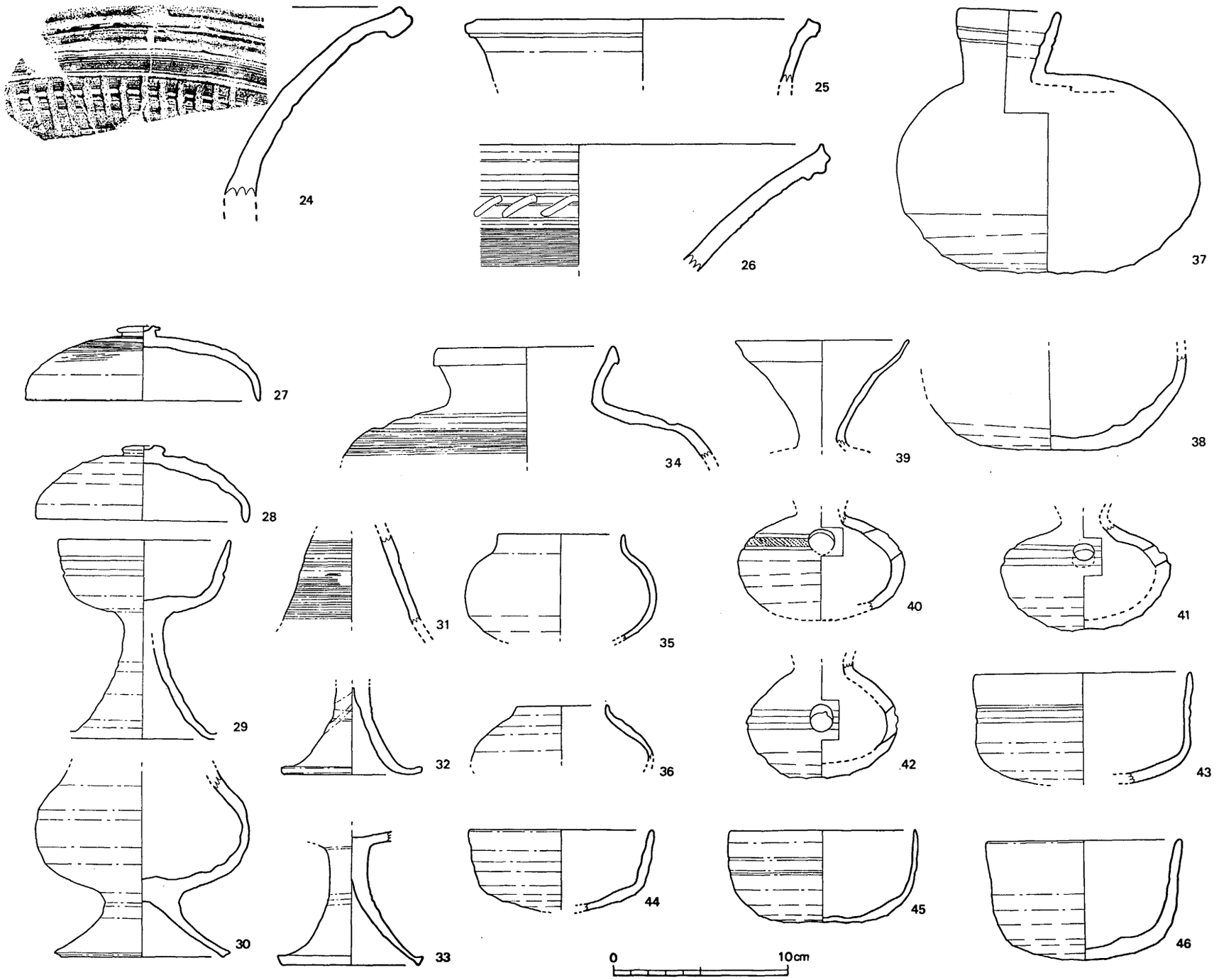
以上のことから、A群の灰原は、その主体がA－2窯であるため、その時期は6世紀後半で、小田氏の言うIVA、IVB期、酒井氏のいうIV期ということとなる。

A群の窯のヘラ記号について

A群のヘラ記号をまとめると

A－1窯	
A－2窯	
A　灰	

主なものを上げたが、ヘラ記号が付されている器種は90%以上杯蓋・杯身である。他に平瓶・甕・高杯の脚部等に付されている。これをみると、この窯だけの特徴というべきものは、引き出すことはむずかしい。



第102図　中通A窯灰原出土遺物実測図②（1/3）

ヘラ記号からは、A－2窯の米の様に20%以上を示めるものもある。同一ヘラ記号はほぼ杯の中で身と蓋が一致する。これからみると、A－1、A－2窯の工人達はヘラ記号によって窯積めの目安として使用していたものと思われヘラ記号の存在の意義づけは、生産側の意志によって行なわれていたと考えた方が妥当である。

B　窯（第103～107図、図版111～116）

中央部の東斜面の中腹に位置し、標高69m～75mの間に窯本体が造られている。

窯は試掘調査の折、本体焚口部の一部を切ったことによって確認された。

調査に先立って、表土を重機を使用して剝いだ表土の堆積は30cm前後、地山であった。天井の崩壊等によって、地山と窯との境界が若干の色調査を有しているが、平面でプランを押えることは難しかった。ただ排水溝はその落ち込みを平面でとらえることは容易であった。

この窯本体の発掘は、排水溝から行ない、また、焚口の一部を試掘の段階で押えていたことから本体を完全に把握することができた。

窯はN—75°—Eで東南に焚口部を営けて、地下式の窯である。丘陵の東斜面の中腹に排水溝を付設し、前庭部から排水溝まで全長16.90mで、煙道に付設してほぼ直交する様に排水溝が南側に弧状を描きながら、約全長7mで、標高74.50m前後で傾斜面と一致する。

窯本体の平面形は焚口が若干開くが、本体そのものは、長方形でずん胴を呈している。

前庭部には、左右側壁面に直径20cm～30cm前後の柱穴を有するものと思われ、右側については断面をみるためにトレンチを設定したため柱穴をとらえることはできなかった。

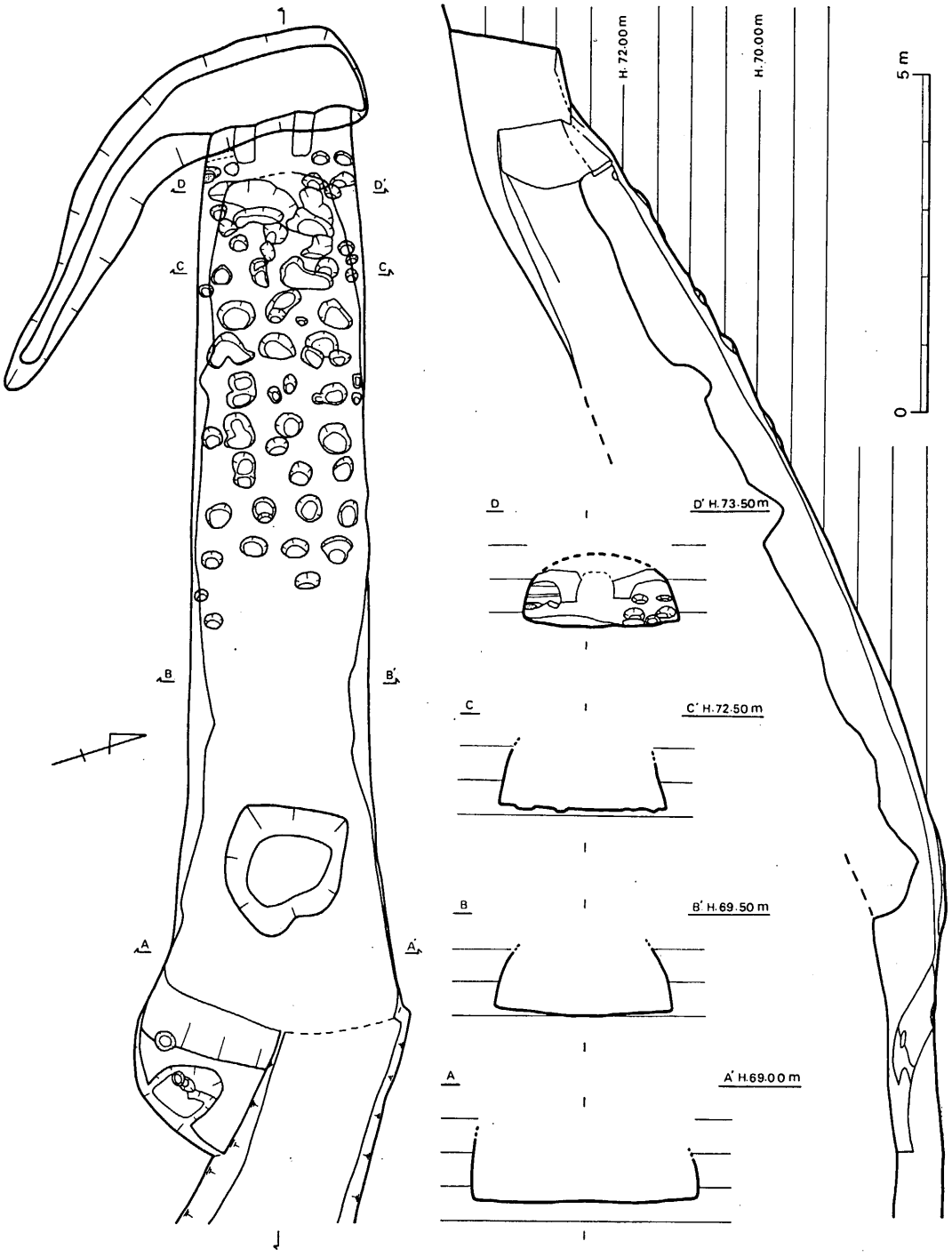
然しながら、窯の操業期間は短期間であったため、灰原の堆積がみられなかった。窯の主軸に、傾斜面に沿って、十字のトレンチを設定したが、捕足することができなかった。

焚口部　幅3.30mで床面は緩傾斜面をなして、左に柱穴を有して、右側にも有していたものと推定され、左右の壁はほぼ直角に上がる。前庭部からつづく灰黒色土（炭層）は焚口部で15cmを測る。焚口部の断面（B—B′）を見ると炭層が間層をはさんで互層をなしている。

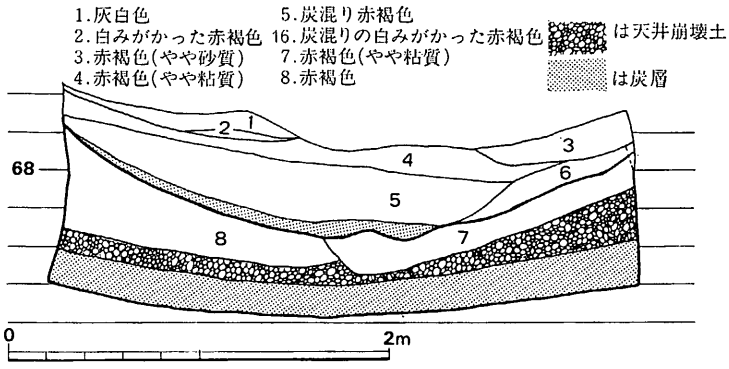
燃焼部　焚口から窯内のどのあたりまでを燃焼部と考えるかは区別が難しいが、焚口部より3m奥に進むと、舟底状のPitから、床面の傾斜角度がA－1・A－2窯に比べ少ないが、若干の変化点を有する。これを燃焼部にあてる。

焼成部　燃焼部より床面傾斜が20°から煙道近くでは30°を測る。

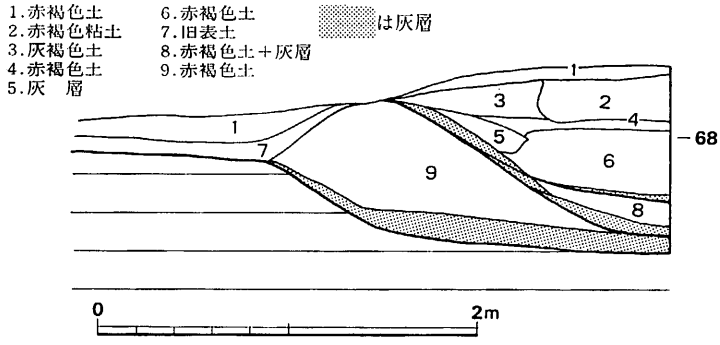
窯体幅は2.60mで、煙道付近で2.10mを測る。焚口から7mで、階段状の段を有している。階段上の凹地内には焼台として、こぶし大の土塊や甕破片等の須恵器を利用したものによって台としたもので、窯積めの状態でこぶし大の塊をもって安定された状態の高杯の蓋の部分が検出され、その状態を立証することができた。横断面から天井を推定すると、最終床面より90cm～1m前後で、断面はかまぼこ型を呈している。この窯は2回目操業後に廃棄された。窯



第103図　中通Ｂ窯跡実測図 (1/100)



第104図　中通Ｂ窯跡焚口部横断面図（1/40）



第105図　中通Ｂ窯跡焚口部縦断面図(1/40)

の改造等はみられなかった。短期間で廃棄されたものと考えられる。

煙出し部　焼成部より一段高く３個の煙出しをもつ多孔式で、幅１ｍ、長さ７ｍの煙道に付設してほぼ直交する様な排水溝が南側に弧状を呈し、先端に至って消失してしまう。断面はＵ字形を呈するものである。その壁面には、工具の加工痕が（図版 116）が残っている。

前庭部　焚口部の左右の壁は若干開き気味で、楕円形を呈する。

窯内の床面や壁面が青灰色鼠免に還元焼成色を呈しているのに対して、赤く酸化焼成色を呈している。この部分の床面には25cm前後の炭層が堆積している。左側の壁面には柱穴を有し、右側にもあったものと考えられる。その端部には若干の凹を有している。

窯改造の前庭部から燃焼部主軸にそって断面を断ち切ってみた。その結果、大改修は行なわれていないことが判明し、使用期間の短さが理解できた。

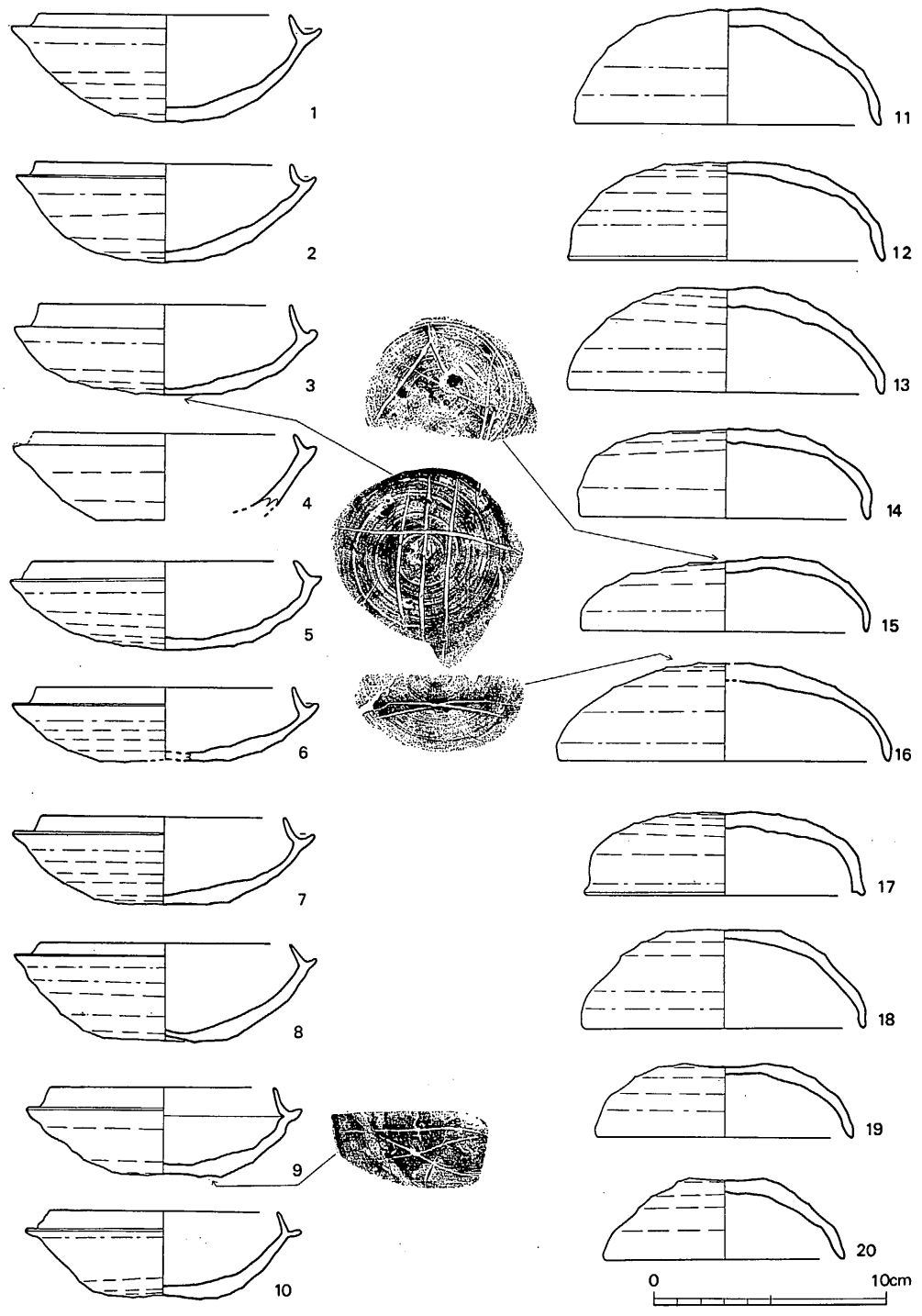
窯内遺物の出土状態

窯内部の発掘では空積めの状態で高杯の蓋の部分の検出のみで、後は焼台として使用された甕の破片だけであった。操業自体短期間で、崩壊以前に廃棄されたものである。

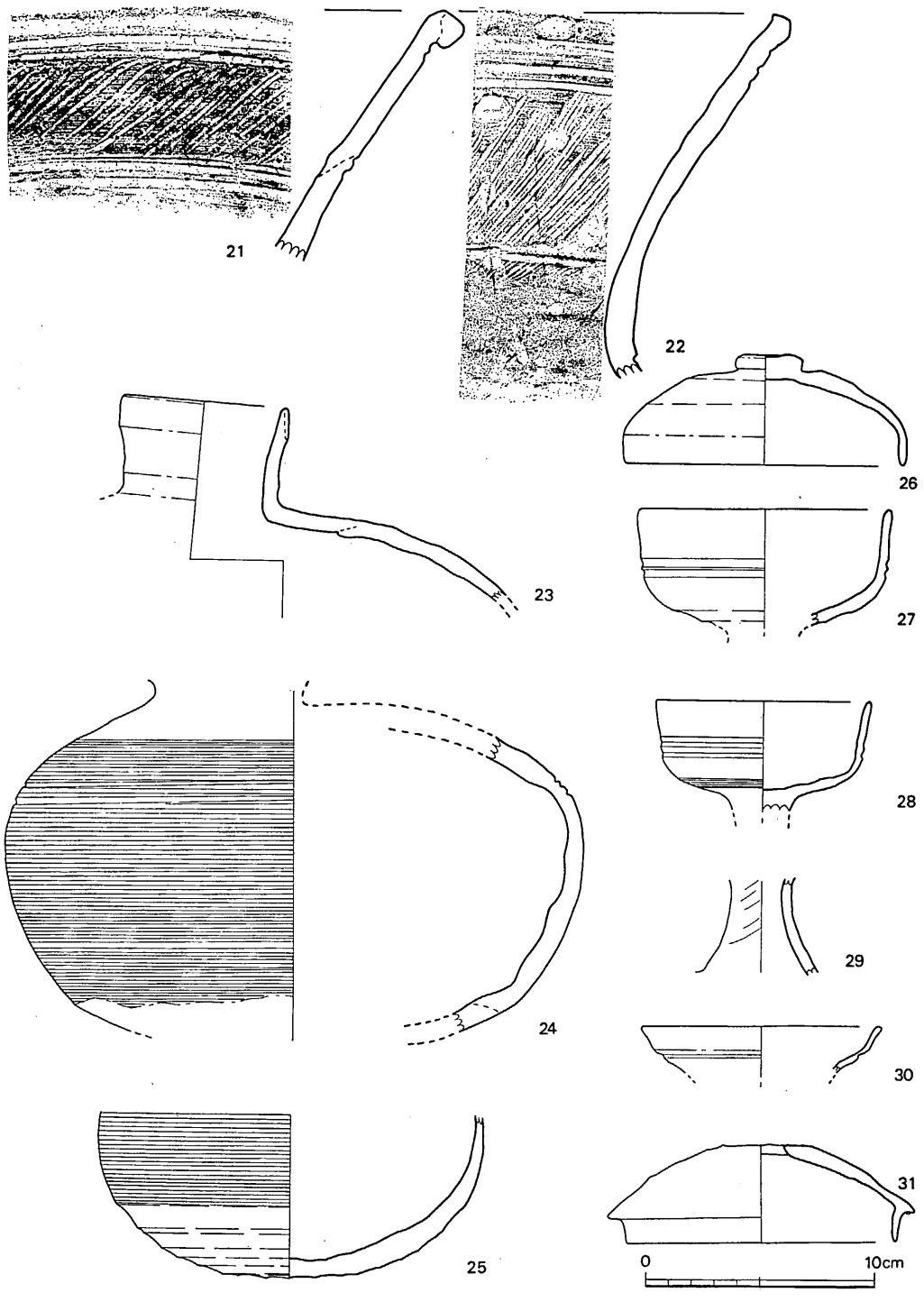
遺　物（第106・107図、図版128・129）

器種を大別すると杯身・杯蓋・甕・平瓶・高杯・鼈・焼台等に分類できる。

杯身（106図①～⑩）口径 11.0cm～13.0cm、器高 3.7cm～4.7cm を測る。身受け部も内傾しながら高位置を占める。調整はヘラケズリを底部から受け部まで、立上がりはヨコナデ仕上



第106図　中通Ｂ窯出土遺物実測図①（1/3）



第107図　中通Ｂ窯出土遺物実測図②（1/3）

げである。

杯蓋（第106図⑪～⑳）口径10.4cm～14.2cm、器高3.1cm～5.0cmを測る。器高の浅いものと（⑭・⑮・⑰・⑲・⑳）器高の深いものと（⑪・⑫・⑬・⑯・⑱）に分類できる。調整方法は天井部から⅔はヘラ削りで、それ以下はヨコナデである。⑰の口唇部は押え込まれて、段を有している他のものとは相異する。

甕（第107図㉑～㉒）大形の甕の口縁部破片である。㉑は外面はカキ目の後にヘラにて斜行の沈線を描き、その下に二条の横位の沈線を施している。㉒はカキ目の後し櫛にて斜行文を施し、その下に一条の横位の沈線を施している。

平瓶（第107図㉓・㉔・㉕）㉓は口縁部破片、他は胴部と底部の破片である。調整は胴部にはカキ目、底部に叩きが残り、内面には青海波文の叩きを行なっている。㉕は同様な調整を行なっている。

高杯（第107図㉖・㉗・㉘・㉙）㉖は蓋、㉗・㉘は杯部、㉙は脚部の破片である。㉖は窯内の窯積めの状態（図版116下）の出土したもので、口径12.2cm、器高4.8cmで、ツマミを有している。調整は天井部はヘラケズリで、それ以下から内面にかけてヨコナデとナデ仕上げである。㉗・㉘は口縁部下半に二条の沈線を有している。㉗は大形のもので、㉘は小形のものである。㉙は脚柱である。

鉢（第107図㉚）口縁部破片で、ラッパ状に開いたところである。口縁部直下に一条の沈線を有して、内外面ともヨコナデである。

焼台（第107図㉛）杯身を焼台として転用したもので、焼成後の穿孔であった。口径13.3cm器高（残）4.3cmであった。

ヘラ記号　杯身の底部と杯蓋の天井部が中心で、平瓶の底部にⅢの記号が付きれていた。

　B窯　Ⅲ　卅　廿　𠆢　×　一　他

この中でも、Ⅲ・廿・×が主流を占める。A群の窯に類似するものである。

以上まとめてみると、時期的には6世紀後半の一時期で、窯自体の操業時期は短期で、廃絶されたため、灰原の存在を捕足することができなかった。操業して2回目で終局していたと思われ、その後A群に移っていくことが考えられる。

B窯が立地している中央部は、丘陵の東斜面の中腹部に位置し、北東に小さな尾根線があるが、立地条件は良くないため排水溝の施設を設けて、完備したが、操業早々に焼成部中央部で崩壊が起因したため、廃棄して、つぎのA群の斜面へと動いたことが、立地、その他諸条件の環境の変化に起因すると考えた方が妥当である。

ヘラ記号について、詳細に観察すると、筆順施文位置・方向等に規則的な入れ方がみられ、このことはひとつの記号が複数工人によって描かれたものと考えるよりも、同一工人の可能性

を考えた方が妥当である。A群の窯や灰原でも、記号を比較した結果、同様なことが言及され、同じ記号では筆順等も位置することがいえる。このことは何を物語っているのだろうか、また近隣の他窯跡等の記号についても研究する余地を残している。

C　窯（第108～112図、図版117～120）

第1次調査の折、西側斜面の崖面に窯本体が断面にでていたため発見されていた。

調査が中断の間に、雨等によって崖面が崩壊したため、窯本体の焚口部分から燃焼室の部分まで崩壊していた。また、境界が崖の先端部であるため、先端から1m手前からの発掘調査となった。

発掘に先立って、重機をもって表土剝ぎと、排水の為の水道を設けた。

窯は標高65～70mにつくられ、西斜面尾部に営まれている。焼成部半分と、煙出し部、窯尻部8mについて調査を行なった。地下式の窯である。

窯の焚口方向は N－103°－E で、窯の平面形は長方形のずん胴形で、排水溝が直交する様に弧状を有するものと推定される。

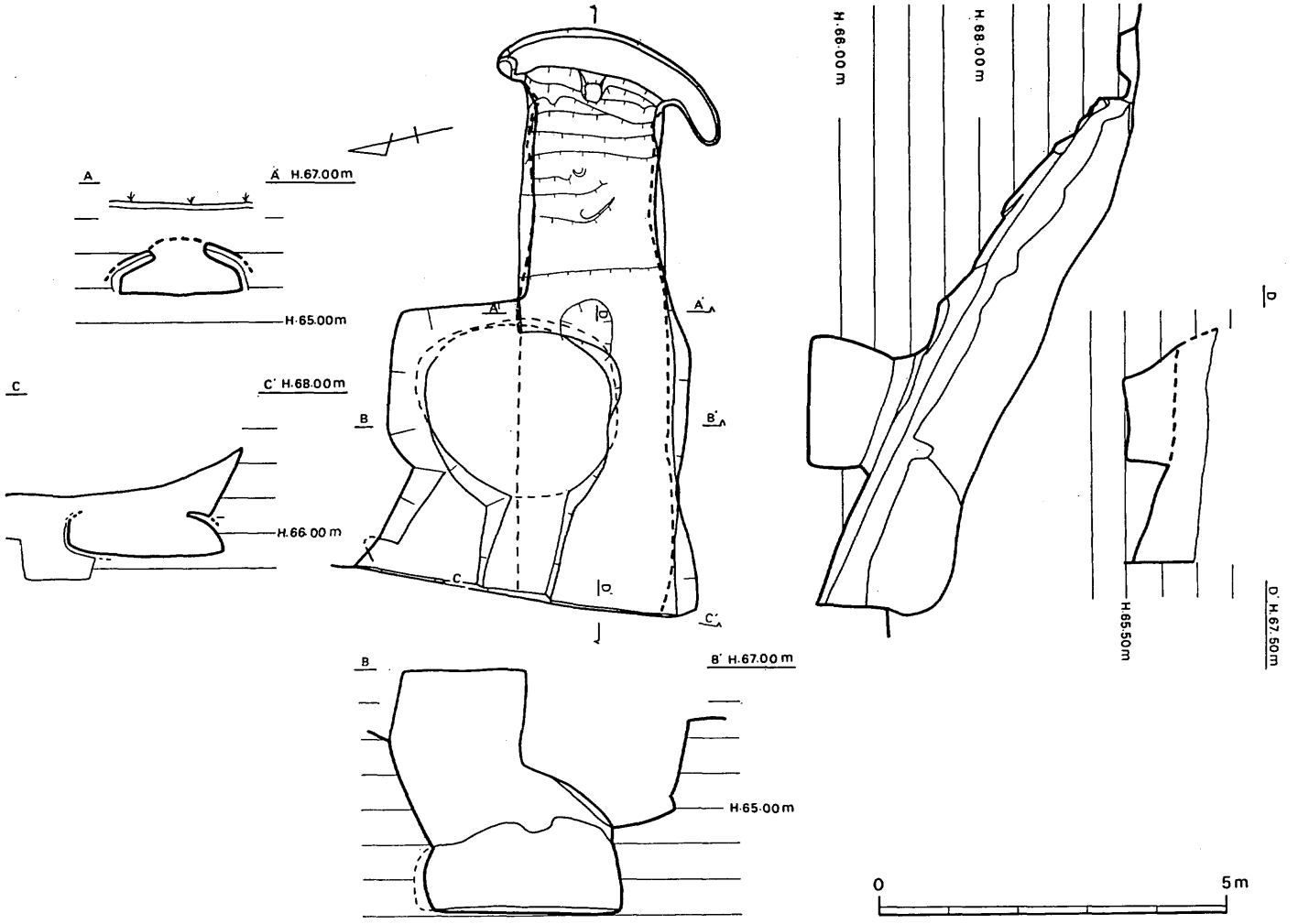
窯本体の焼成部半分を切って袋状を呈する後世の竪穴が掘られているため、一部攪乱を受けている。この竪穴からは出土遺物はみられない。時期を明白に捕えることができなかった。

ここでは焼成部と煙出し部について記する。

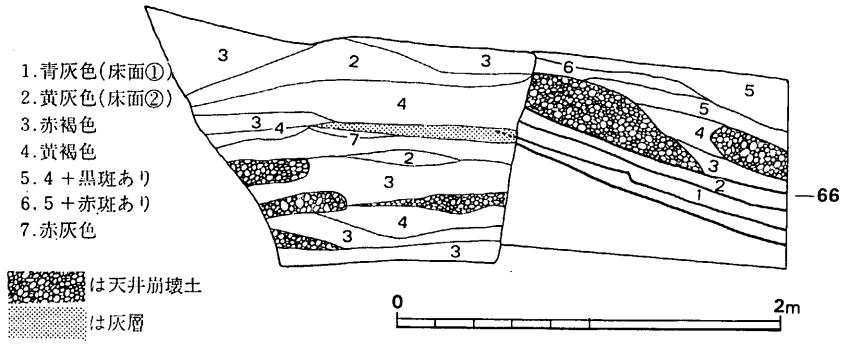
焼成部　幅2m強、煙出し付近幅1.80m強を測る。傾斜角25°、煙出し付近には階段状の有段を有し、器物を安定させた。天井部までの推定の高さは、A－A′の断面によって理解できる80mである。これは焼成部の上部に位置する。しかし、ほぼ中央部で C－C′ でも同様な数値であるから、これを天井の高さと考えてよいであろう。焚口部、燃焼部の調査を行っていないため、改造、修理については明白ではないが、C－C′ の断面でみる限り、2回ほど焼成床面が判断できる。

煙出し部　中央部に窯壁体とその横に角石等があるため、多孔式の煙道を設けたものと考えられる。孔は4つと推定され、角石をも壁体として考えれば、等間隔に並ぶことが理解できる。それを直交する様に付設の排水溝が南側に弧状を描きながら、全長3m、標高70mの傾斜面で一致する。排水溝は、断面はU字形を呈している。傾斜に沿うため、煙出し部が深くだんだん浅くなっていく。

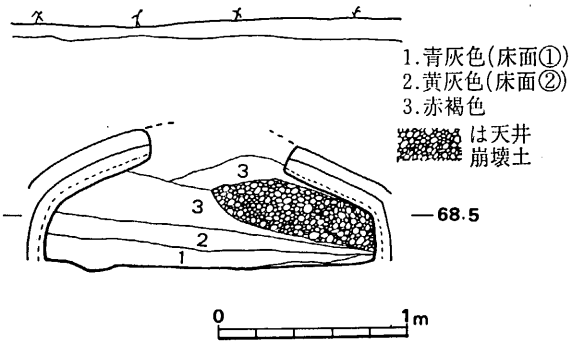
窯内遺物出土状態　C－C′ の右側の天井の崩壊土中より完形品が窯積め状態で出土している。短頸壷と蓋のセット、蓋杯、杯身のセット4個体分、蓋と身は窯積め時は身上で蓋が床面にという状態であった。セットは全て同じであった。短頸壷と蓋は壷の横に蓋があった。天井と窯壁とが刺身状になったため、その空間に辛うじて破壊することなく検出された。



第108図　中通C窯跡実測図（1/100）



第109図　中通C窯跡焚口部縦断面図（1/40）



第110図　中通C窯跡横断面図（1/40）

このことは最終時の操業時には天井か壁体の崩壊があり、その後窯自体を廃絶したものと考えられる。そして完形品は取り残された遺物となった。

遺　物（第111、112図）

器種を大別すると杯蓋・杯身・甕・高杯・平瓶・蓋付短頸壷・焼台等に分類できる。

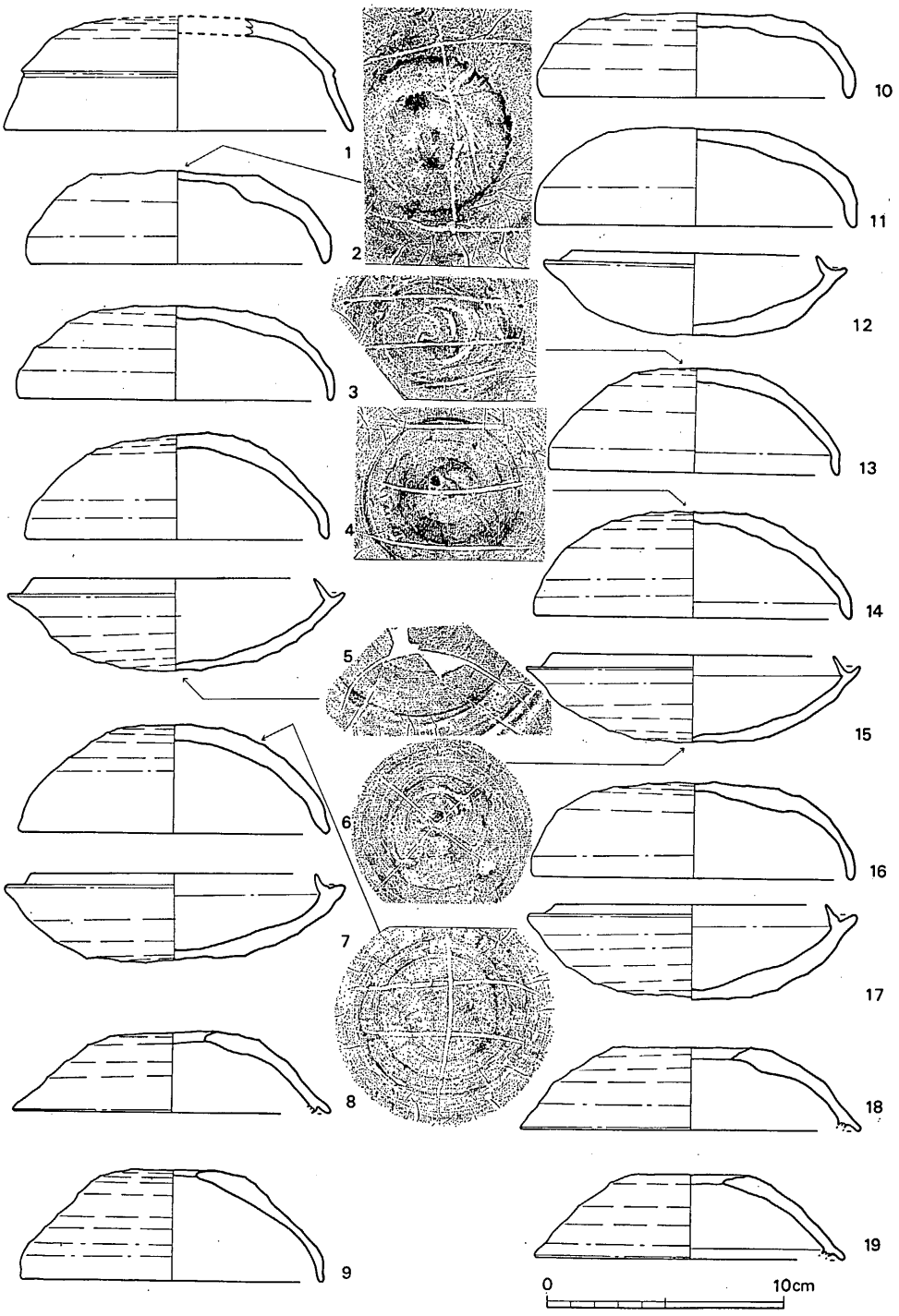
杯蓋（第111図①～④・⑥・⑩・⑪・⑬・⑭・⑯）口径が12.2cm～14.3cmである①は古い様相を残している。他は一般的に器高も浅いし、調整も同様なものである。焼成も窯内からセットで出土したものが④—⑤、⑥—⑦、⑪—⑫、⑭—⑮、⑯—⑰となる。ヘラ記号も有しているものもある。セットは最終床面より出土した。

杯身（第111図⑦・⑫・⑮・⑰）口径12.7cm～14.4cmまでのもので、器高も4cm前後で、身受け部も内傾しながら高い。調整はヘラケズリが体部全体に施され、受け部から立上がりはヨコナデ仕上げ。

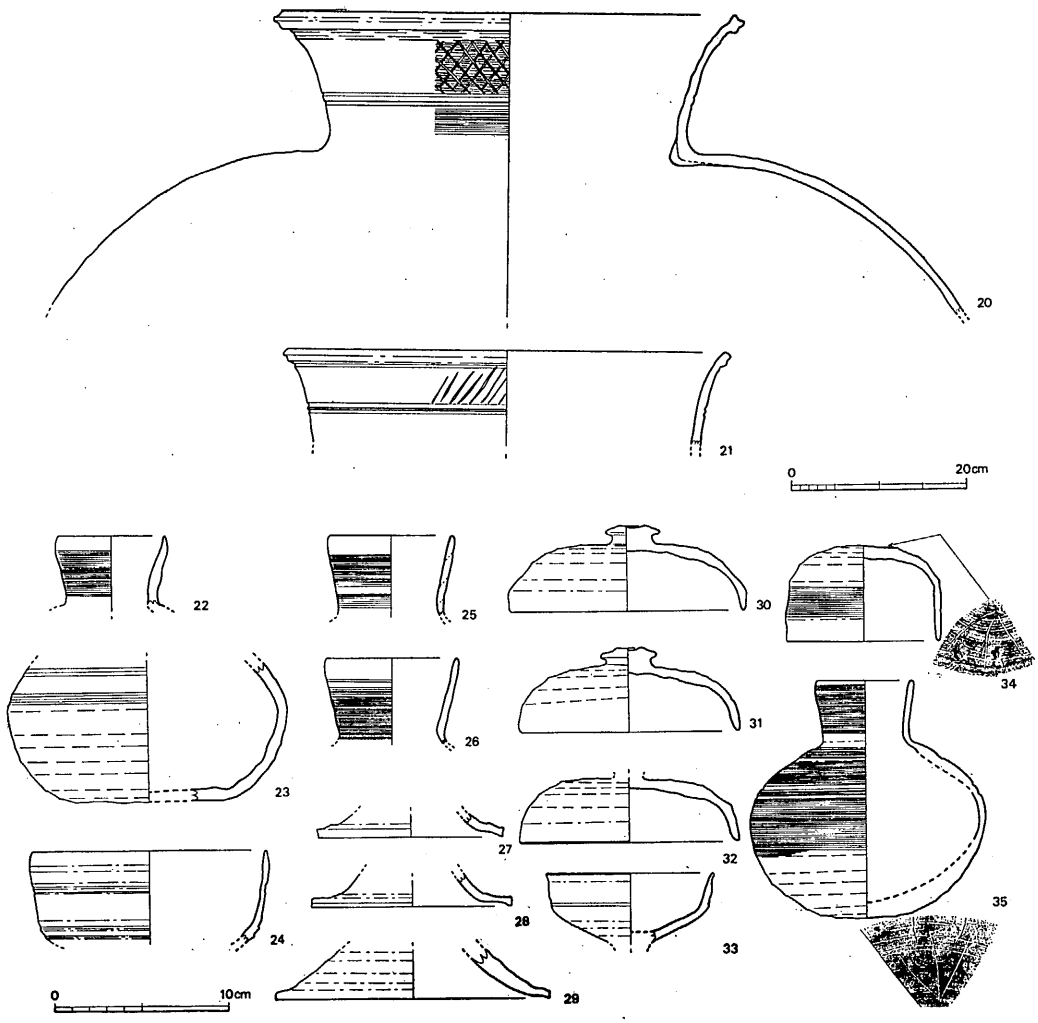
焼台（第111図⑧・⑨・⑱・⑲）蓋と身を利用したもので、蓋は⑨で他は身で、天井部と底部を穿孔。

甕（第112図⑳・㉑）両方とも大形の甕である。⑳は口縁直下にヘラ描き沈線にて斜行格子目を描きその下に二条の沈線そしてカキ目となっている。内面にヨコナデで頸部接合部下半、青海波文の叩きである。外面は簾状の叩きである。

平瓶（第112図㉒・㉓・㉕・㉖）口縁部の破片と胴部破片である。窯内から出土したもので、口唇直下はカキ目を施している。㉓は外面胴中位以上はカキ目及びヨコナデ以下はヘラケズリである。



第111図　中通C窯出土遺物実測図①（1/3）



第112図　中通C窯出土遺物実測図②（1/4、1/8）

高杯（第112図㉔・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝）　㉔・㉝は杯部で、㉚・㉛・㉜は蓋、㉗・㉘・㉙は脚部の破片である。杯部は口縁直下に二条の沈線、胴下半に二条の沈線を有るもので、また㉝にも一条の沈線を有している。㉗・㉘・㉙は裾部が開いたものである。中形及び小形の高杯である。

短頸壺（第112図㉞・㉟）最終床面で検出されたもので、蓋㉞とセットで出土したものである。ヘラ記号が特徴的である。（図版150—①）

以上のことから、窯の存在年代は、6世紀後半ごろに位置づけられる。ただ、6世紀半でも前半頃に比定される。

この窯で興味をひくのはヘラ記号で、短頸壺と蓋のセットである、蓋と壺には同じ記号が付されていた。

ヘラ記号について　窯跡の調査はA群・B・Cの4基の窯と灰原を調査した。その結果は5）小結の中でまとめるとして、ヘラ記号について若干のまとめを記したい。

ヘラ記号の意味について、先学諸氏の研究によって、論究されている（註1）。八女市塚の谷窯跡群の報告の中（註2）で、石松好雄氏によって若干のまとめが記載されている。このヘラ記号は生産者の立場から必要とされているものであるとされている。

	ヘラ記号種類	主体ヘラ記号
中通A－1窯	‖ 卄 ⫼ 卅 米 ⅄ ⅄	卅 ⫼
A－2窯	卅 ⫫ × ∧ 米 ⅄ ― ⅄	米 卅
A群灰原	卅 ― × ⅄ ⫼ 米 非 ⅄	×
B　窯	⫼ 卅 卄 ⅄ × ―	卅 卄 ×
C　窯	卄 ⌒ ⫼ × ― ⅄	卄

それぞれの窯出土のヘラ記号を一覧すれば、ほぼ同じ様な傾向を表わしている。

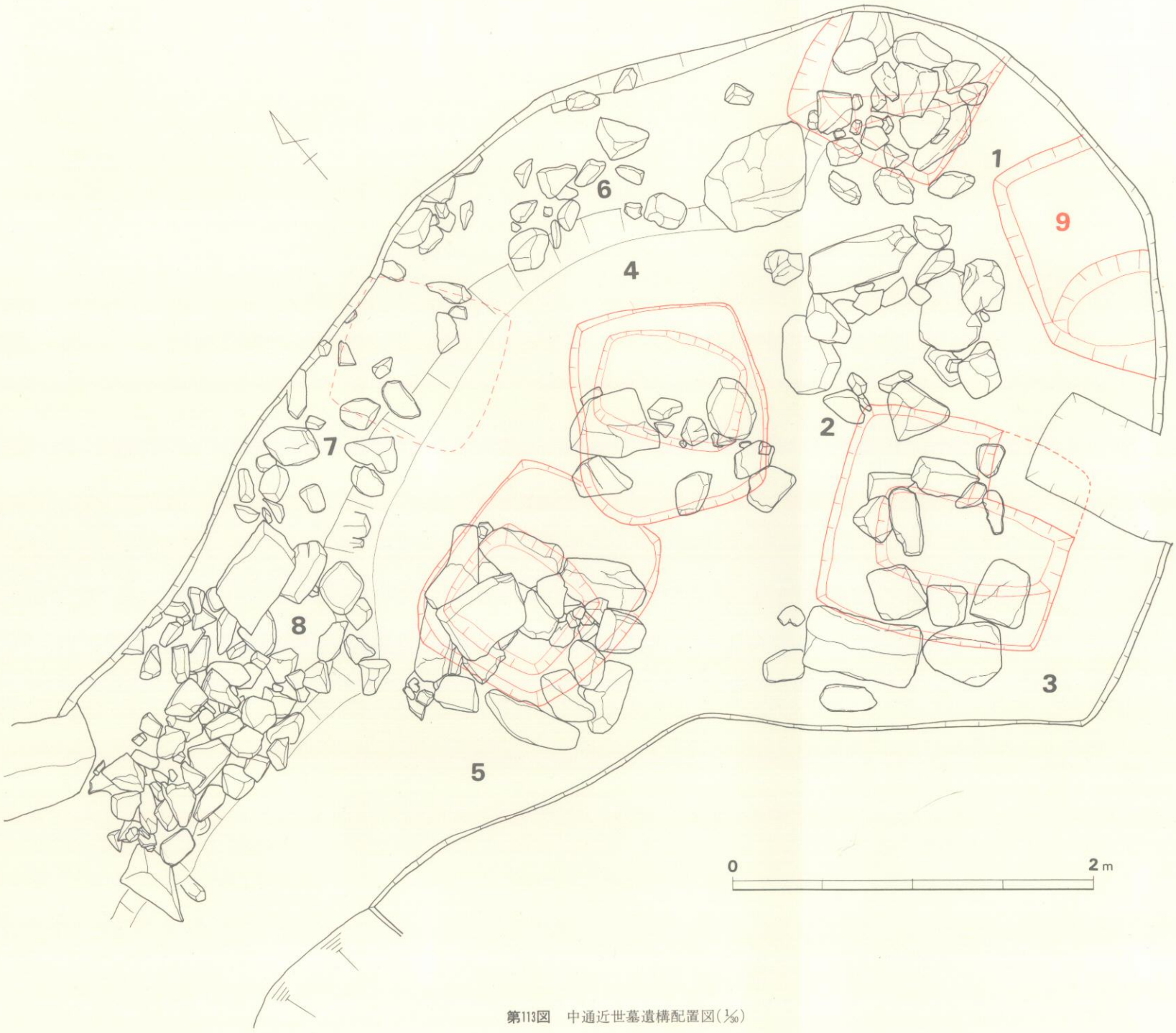
このことから、ヘラ記号の性質を考えると、窯個々では、ヘラ記号が相違するということは言及しかたい。C窯短頸壺と蓋（第112図34、35）の一例ではセットとして窯積めの時の目安としての記号付けであると思われる。陶邑ＴＫ321号窯で天井崩壊した窯の資料による「ヘラ記号」が一定の条件のもとに配置されていた。その記号は窯内での「窯積め」、「窯出し」の段階の目安とされた。同一の器種で、他とまぎらわしい蓋杯について圧倒的に「ヘラ記号」を有するものが多い。また重ねられている部分ごとに検討した結果、ブロックごとに目印をするかのような状態で「ヘラ記号」を有して、配列されていたという。

このことから、ヘラ記号がもつ社会的な意義について、同一窯を複数の、対等の工人が、共同利用する場合においてはじめて必要なものであると考えられる。生産側の必要のみで、窯積めの目安として付されたと考えた方が妥当である。　（副島）

註

註1．田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園創立十周年記念研究論集10　1966
　　中村浩他『陶邑』Ⅰ～Ⅳ　大阪府教育委員会　1976～1979

註2．小田富士雄、石松好雄、宮小路賀宏他『塚の谷窯跡群』八女市教育委員会　1969年3月



第113図　中通近世墓遺構配置図(1/50)

第９表　土器観察表

Ａ－１窯

（　）内数値は現存値

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
第90図－19	杯蓋	最上層	①3.4 ②11.6		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調青灰色	残存½ 反転
2	杯蓋	焚口上層	①4.0 ②12.4		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子を含むが精良。焼成良好色調青灰色	反転
3	杯蓋	最初床面No.6	①4.0 ②11.7		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を多し含む。焼成良好、色調青灰色	
4	杯蓋	１次－２次床	①3.7 ②11.6		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部からやや下位にかけて不定方向のナデ、胎土精良。焼成不良、色調明灰黄色	残存⅓ 反転
5	杯蓋	最初床面No.1	①3.9 ②12.1		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含むが精良。焼成良好、色調青灰色、外面一部灰かぶり	一部灰かぶり
6	杯蓋	１次－２次床面	①(3.5) ②11.2		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成堅緻、色調自然釉がかかり暗灰色	残存⅓ 反転
7	杯蓋	窯内	①4.4 ②12.7		外面口縁部を除き、ヘラ削り、口縁付近から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調青灰色	
8	杯蓋	窯内	①4.3 ②11.5		外面天井部よりやや下位までヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子をわずかに含むが精良。焼成良好、色調天井部のみ灰白色他青灰色	
9	杯蓋	１次－２次床面	①3.7 ②11.6		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面は天井から下位にかけて不定方向のナデ、胎土精良。焼成不良、色調明灰黄色	残存⅓ 反転
10	杯蓋	窯内	①3.9 ②9.6		外面天井部ヘラおこしの後未調整、やや下位までヘラ削りその下はヨコナデで内面まで続く、胎土に粗粒子で長石を含む。焼成堅緻、色調暗青灰色	口縁のみ反転
11	杯蓋	窯内	①2.6 ②8.0		外面天井部ヘラ削りその下から内面にかけて、ヨコナデ内面天井部は不定方向のナデ、胎土やや粗粒を含む。焼成堅緻、色調、外面青灰色に灰かぶり内面暗青灰色	
12	杯身	最上層	①(3.7) ②13.2		外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に大粒子含む。焼成良好、色調青灰色	残存⅓ 反転
13	杯身	最上層	①(3.3) ②12.4		外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調暗青灰色、外面まだらに自然釉がかかる。	残存⅓ 反転
14	杯身	窯内	①3.8 ②12.0		外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、内面底は不定方向のナデ、胎土に細砂含むが精良、焼成良好、色調青灰色、内面灰白色	
15	杯身	窯内	①4.0 ②13.3		外面受け部直下までヘラ削り受け部から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調、天井部わずかに灰白色、他青灰色、内面淡青灰色	
16	杯身	焚口上層	①4.0 ②13.0		外面底部ヘラ削りそれより上から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成良好、色調、外面淡紫褐色、内面淡青灰色	反転
17	杯身	窯内	①3.7 ②12.8		外面底部から受け部下位にかけてヘラ削りそれより上から内面にかけてヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を多く含む。焼成堅緻色調暗紫灰色、内面青灰色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
18	杯身	窯内	①3.8 ②12.2		外面底部から受け部下位にかけてヘラ削り受け部から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成良好、色調青灰色	
19	杯身	最終床面	①3.9 ②12.8		外面底部、ヘラ削りそれより上から内面にかけてヨコナデ、内面底部、不定方向のナデ、胎土密で長石を含む。焼成堅緻、色調暗青灰色、灰かぶり	残存¾
20	杯身	最終床面No.2	①3.4 ②12.9		外面底部、ヘラ削り受け部よりやや下位から内面にかけてヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子含む。焼成良好、色調青灰色	
21	杯身	最終床面No.4	①4.5 ②12.8		外面底部、ヘラ削りそれより上から内面にかけてヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成良好、色調淡黄灰色	
第91図−22	甕口縁	最上層	②23.5(復原)		内外面ともヨコナデ、胎土密。焼成良好、色調青灰色	
23	甕口縁	窯内			内外面にヨコナデを施したあとヘラ描き更に上から軽いヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	
24	甕口縁	窯内			内外面にヨコナデを施したあと、部分的に斜めの櫛目がある。胎土精良。焼成堅緻、色調黄灰白色	
25	甕頸部	前庭灰原			外面、ヨコナデ、内面くびれの上までヨコナデ、胴部は青海波文、胎土精良。焼成堅緻、色調黒灰褐色	
26	平瓶底部	窯内			外面ヘラ削り、胴中位になると雑にナデがある。内面ヨコナデ、胎土に小砂粒を若干含む。焼成不良、色調黄灰白色	
27	高杯杯部	最上層	②11.6		内外面ともヨコナデ、胎土精良。焼成不良、色調灰白色	反転
28	高杯杯部	窯内	②10.8		外面釉がかかった調整不明、内面ヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調黒灰色、灰色まだら、内面自然釉が一部かかり黒色	反転
29	高杯杯部	最上層	②8.8		内外面をもヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調黄灰色	反転
30	高杯	窯内			長脚二段透しの高杯、表面はヨコナデ、杯部の底は調整方法不明、胎土精良。焼成むらがある。色調灰白色に自然釉が全面にわたってかかる。	
31	高杯脚部	最上層	④9.4		脚上部はカキ目それ以外は内外面ともヨコナデ、胎土密。焼成堅緻、色調外面暗灰色、内面黒灰色	反転
32	高杯脚部	最上層	④9.6		内外面ともヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調内外面灰青色	
33	高杯脚部	窯内	④10.8		内外面ともヨコナデ、胎土密。焼成良好、色調青灰色、外面黒色で灰かぶり	反転
34	杯身と焼台	前庭灰原			杯身が窯内で焼台にくっついたものである。焼台の下面は青海波文があり、甕の胴部を転用したものである。	

A－2窯　須恵器観察表

（　）内数値は現在値

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
第95図－1	杯蓋	表上層	①3.4 ②12.3	⼗	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井からやや下位にかけて不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調紫褐色	
2	杯蓋	最初焚口灰層	①4.1 ②11.9	卅	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井付近、不定方向のナデ、胎土に大小砂粒をかなり含む。焼成良好、色調紫褐色	
3	杯蓋	最終床面一括	①4.3 ②12.5	卅	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井付近、調整方法不明、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調灰緑色	
4	杯蓋	焚口	①3.4 ②11.5		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒多量混入。焼成堅緻、色調暗灰色	
5	杯蓋	焚口東	①3.7 ②12.2		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調灰緑色	反転
6	杯蓋	最終床面	①3.7 ②12.2	⼗	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含むが精良。焼成堅緻、色調暗灰色、黒灰色	
7	杯蓋	床面	①3.9 ②12.4	⼗	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調内面灰白色、外面緑灰褐色	
8	杯蓋	焚口西側	①4.2 ②11.4	丩	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含むが精良。焼成堅緻、色調暗灰色	
9	杯蓋	窯内	①4.0 ②12.2	⼗	外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調青灰色	
10	杯身	最終焚口灰層	①3.8 ②12.2	卅	外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部付近、不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調灰紫色	
11	杯身	最初焚口灰層	①3.5 ②12.7		外面底部ヘラオコシの痕跡が残り、雑にヘラナデがおこなわれている。内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調青灰色	
12	杯身	最終床面一括	①3.6 ②10.2	⼗	外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒をかなり含む。焼成堅緻、色調灰黒色	
13	杯身	最終床面	①2.8 ②10.7	⼗	外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面の調整方法不明、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調暗灰色	
14	杯身	第2灰層セクション	①4.1 ②11.7	㇒	外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好。色調明茶色、茶褐色	
15	杯身	最終床面	①4.0 ②9.7(後原)	⼗	外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒を多く含む。焼成良好、色調暗灰色	反転
16	杯身	窯内	①3.2 ②10.8	⼗	外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調暗灰色	
17	杯身	焚口床面	①3.8 ②10.2	⼗	外面底部ヨコナデ、受け部下位から立ち上がりにかけて、ヨコナデ、内面調整方法不詳、胎土精良。焼成良好、色調灰緑色	反転

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
18	杯身	第2次黄褐色粘質土	①4.0 ②11.6		外面底部ヘラ削り受け部下位から立ち上がりまでヨコナデ、内面不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調淡緑灰色	
第96図-19	高杯蓋	煙出し	①4.6 ②13.2		外面天井部は調整方法不鮮、中位から斜めのヘラ描きがはいりその下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土精良。焼成不良、色調暗緑灰色、一部自然釉付着	
20	杯蓋	煙出し	①(3.7) ②12.2		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調灰緑色	
21	杯蓋	煙出し	①4.5 ②12.1		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部は調整方法不明、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調内面黄灰色、外面黒灰色	
22	杯蓋	煙出し	①4.5 ②12.4		外面天井部ヘラ削りそれ以下から口唇まで調整方法不明、内面ヨコナデ、天井部は不定方向のナデ胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調内面灰黒色、外面灰色一部黒変	
第97図-23	杯蓋	最終一括	①4.0 ②11.5		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に大小砂粒をかなり含む。焼成良好、色調内面暗青灰色、外面灰黒色	
24	杯蓋	窯内	①3.8 ②12.2		外面天井部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井からやや下位にかけて、不定方向のナデ、胎土に小砂粒を若干混入。焼成良好色調茶色	
25	杯蓋	焚口西側	①4.1 ②11.5		内外面とも調整方法不明瞭、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調茶っぽい灰色	
26	杯蓋	最終床面	①3.8 ②13.1		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向ナデ、胎土に大きい砂粒を含む。焼成やや不良、色調灰色	
27	杯蓋	焚口西側	①(3.5) ②12.7		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調灰緑色	
28	杯蓋	灰褐色灰層	①3.3 ②12.4		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土に砂粒をかなり含む。焼成不良、色調明茶色	
29	杯蓋	窯内	①3.6 ②12.9		外面、自然釉が付着して調整方法不明、内面ヨコナデ底部は不明、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調灰黒色	
30	杯蓋	表土層	①3.8 ②12.4		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井、不定方向のナデ、胎土に大小砂粒をかなり含む。焼成良好、色調灰黒色	
31	杯蓋	焚口床面	①3.4 ②11.9		外面天井ヘラ削りそれ以下から口縁内面にかけてヨコナデ内面、不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調内面黒褐色、外面黒褐色一部灰緑色	
32	杯蓋	窯内	①3.1 ②11.3		外面天井ヘラ削りそれ以下から口縁内面にかけてヨコナデ内面天井、不定方向のナデ、胎土に大小砂粒を若干含む。焼成良好、色調暗灰緑色、天井部灰色	
33	杯蓋	最初焚口灰層	①4.0 ②11.5		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ内面天井は不定方向のナデ、胎土に小砂粒を混入。焼成良好、色調褐灰色、外面一部黒変	
34	杯蓋	焚口床面	①3.9 ②12.7		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ内面天井付近は不定方向のヨコナデ、胎土に大小砂粒を若干混入。焼成良好、色調淡灰緑色	
35	杯身	最初焚口灰層	①3.3 ②10.0		外面底部不定方向のナデ底部から体部にかけてヘラ削り受け部下位から内面にかけてヨコナデ内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調外面灰青色、灰かぶり、内面暗灰色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
36	杯身	最初焚口灰層	①3.5 ②10.7		外面調整方法不詳、受け部から内面にかけて、ヨコナデ内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒を多量に混入。焼成良好、色調内面灰黒色、外面灰色底部に燃料の樹脂付着	
37	杯身	焚口	①(3.4) ②9.6		外面底部へラ削り受け部より下位から内面にかけて、ヨコナデ内面底部は不定方向のナデ、胎土に小砂粒を若干混入。焼成良好、色調褐色	
38	杯身	窯内	①3.3 ②10.0	＋	外面底部へラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ内面底部は不定方向のナデ、胎土に若干の砂粒を含むが精良。焼成良好、色調緑灰色	
39	杯身	焚口南側	①3.6 ②10.5	内 外	外面底部へラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ内面底部は不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混良。焼成良好、色調内面暗灰色、外面青灰色、一部黒灰色	
40	杯身	灰褐色	①3.6 ②10.3	✳	外面へラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ内面の底部不定方向のナデ、胎土に粗粒子をやや含む。焼成不良、色調灰白色	
41	甕口縁	窯内			内外面ともヨコナデ、外面は、カキ目を施したあと斜めのへラ描きがある。胎土精良。焼成良好、色調暗灰色	
第98図－42	高杯蓋	窯内	①4.8 ②12.2		外面天井部へラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調内面青灰色、外面灰緑色	
43	高杯	前庭灰原	①11 6 ②9.3 ④8.6		杯部、外面ヨコナデ、内面調整方法不詳、脚部、外面調整方法不詳、内面ヨコナデ、脚部はしぼった跡がある。胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調淡灰緑色一部黒灰色がまだらにはいるほぼ全面に自然釉がかかる。	
44	高杯杯部	焚口灰層	②10.1(復原)		全面に自然釉の付着がみられ、調整方法不詳、胎土精良。焼成良好、色調内面黒灰色、外面灰色	
45	高杯	第2灰原セクション	②8.4(復原)		脚内面ヨコナデ、その他は、自然釉が付着して調整方法不明、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好色調灰色一部黒灰色	
46	杯身	焚口床面	①6.3 ②14.4		外面底部へラ削り、側面カキ目、口唇は比較的平らに仕上げる。内面ヨコナデ底部は不定方向のナデ、胎土に砂粒を多量に混入。焼成良好、色調暗緑灰色、外面底部の一部は黒灰色	
47	平瓶口縁	窯内	②7.2		内外面ヨコナデ、胎土精良、焼成堅緻、色調灰白色	
48	平瓶	最初焚口灰層	③22.7	∧	外面カキ目、一部ヨコナデ、内面ヨコナデ、へラ記号は体部から底部にかけての部分にある。胎土砂粒をかなり含む。焼成良好、色調内面紫褐色、外面淡紫灰色一部自然釉がかかる。	
49	焼台	窯内	①3.8 ②12.6	✳	内外面ともヨコナデ、内面の天井部は不定方向ナデ、天井部の穿孔は、焼成後、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調茶褐色	
50	焼台	焚口堆積土	①3.5 ②11.5		外面天井部へラ削りそれ以下はヨコナデ内面、調整方法不詳、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調灰青色一部内外とも黒灰色、自然釉付着	
51	蓋	窯内	①5.0 ②10.3(復原)		外面カキ目、底部付近、調整不明、内面ヨコナデ底部、調整不明、胎土に砂粒を含む。焼成良好、色調暗灰緑色	
52	蓋	焚口	①6.7 ②9.7	＋＋	外面天井部へラ削り、側面から内面にかけてヨコナデ、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調内面体部褐色天井部灰黒色、外面褐色(体部の一部は黒変)	

A灰原　須恵器観察表

（　）内数値は現存値

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
第101図－1	杯蓋	第2灰原セクション	①4.1 ②12.0(復原)		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土精良。色調暗灰緑色	反転
2	杯蓋	灰原	①3.5 ②11.5		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色、いったんヘラ記号をつけそれをナデて消した跡、一本ヘラ記号をつける。	残存½ 反転
3	杯蓋	灰原	①3.6 ②11.3		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調赤灰色	残存½ 一部反転
4	杯蓋	第2灰原セクション	①9.1 ②11.2		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰緑色	
5	杯蓋	灰原	①3.5 ②11.0		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	残存½
6	杯蓋	第2灰原セクション	①3.5 ②11.2		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調青灰色	
7	杯蓋	第2灰原セクション	①4.2 ②11.9		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調灰色	反転
8	杯蓋	灰原	①3.8 ②11.4		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調灰黒色	
9	杯蓋	A－2窯、最初焚口灰原	①4.1 ②12.4		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成良好、色調暗灰緑色	
10	杯蓋	灰原	①3.9 ②12.4		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	残存¼ 反転
11	杯蓋	灰原	①3.6 ②12.6		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	残存½
12	杯蓋	灰原	①3.8 ②11.0		外面天井ヘラオコシの痕跡が残る。あとで雑にナデている。内外面ともヨコナデ、胎土精良。焼成不良、内面灰白色地に鉄分が付着している。	
13	杯蓋	灰原	①3.0 ②11.2		外面天井ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に粒子あらい。焼成むらあり、色調灰白色	
14	杯身	灰原	①3.8 ②10.5(復原)		外面底部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調灰緑色	反転
15	杯身	灰原	①3.5 ②112		外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻ややむらあり、色調灰白色	残存½ 反転
16	杯身	灰原	①3.7 ②11.2		外面、自然釉が付着して調整方法不詳、内面ヨコナデ、胎土に砂粒を多量に含む。焼成不良、色調灰黒色	
17	杯身	灰原	①4.1 ②10.3		外面底部ヘラ削りそれ以上から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成不良、色調暗灰色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
18	杯身	A－2窯 最初灰層	①3.7 ②10.7		外面底部ヘラ削り受け部下位から受け部にかけて調整方法不詳、立ち上がりから内面にかけてヨコナデ底部、不定のナデ、胎土に若干砂粒を含む。焼成良好、色調黒灰色	
19	杯身	灰原	①4.0 ②10.7	|||	外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	残存½
20	杯身	灰原	①3.9 ①9.8		外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調黄灰色	
21	杯身	灰原	①3.6 ②10.2	×	外面底部ヘラ削り受け部の下位から内面にかけてヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に若干の砂粒を含む。焼成良好、色調灰白色	残存⅔
22	杯身	灰原	①3.9 ②10.5	—	外面底部ヘラ削り受け部下位から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調あずきがかった灰色、外面に薄くワラバイが付着	残存½
23	杯身	灰原	①3.7 ②10.0(復原)		外面、全面にわたり自然釉が付着し、調整方法不詳。内面ヨコナデ底部不定方向のナデ、胎土に若干の砂粒を含む。焼成良好、色調黒灰色	反転
第102図－24	壺口縁	灰原	②48 (復原)		外面、カキ目の後ヘラ描き、口唇から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好色調灰緑色	
25	壺口縁	灰原	②20 (復原)		両面ともナデ仕上げ	
26	壺口縁	灰原	②46 (復原)		外面、カキ目の後、ヘラ描き、口唇から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好。色調灰色	
27	高杯蓋	灰原	①4.3 ②13.4		外面つまみヨコナデ、天井カキ目、それ以下から内面にかけて、ヨコナデ、天井付近、部分的にカキ目の痕跡あり、内面天井不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調淡黄灰色	残存½ 一部反転
28	高杯蓋	灰原	①4.3 ②12.0		外面つまみヨコナデ天井、ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井、不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調淡黄灰色	残存½ 反転
29	高杯	A－2窯 灰原	①11.4 ②9.7		杯部外面カキ目、内面ヨコナデ、底部不定方向のナデ、脚部内外面ヨコナデ、胎土に砂粒をかなり含む。焼成良好、色調緑灰色	反転
30	台付坩	A－2窯 灰原 第2灰原	③12.2 ④10.0		外面全体と脚部内面、全面に自然釉が付着し調整方法不詳、胴部内面、ヨコナデ、胎土に小砂粒を含む。焼成堅緻、色調灰色	
31	高杯脚部	1トレ内			外面カキ目、内面コヨナデ、胎土精良。焼成堅緻色調黒灰色	
32	高杯脚部	A－2窯 最初灰層	④8.1	/\	全面ヨコナデ、内面にヘラ記号、胎土に砂粒を若干含む。焼成良好、色調灰緑色	
33	高杯脚部	A－2窯 灰原	④7.8		杯部内面から脚部外面にかけて自然釉が付着し調整方法不詳、脚部内面ヨコナデ、胎土に砂粒を若干含む。焼成堅緻、色調灰緑色	
34	壺	灰原	②10.0		外面頸部から内面にかけてヨコナデ肩付近、カキ目、胎土精良。焼成堅緻、色調灰青色	反転
35	坩	灰原	②7.2(復原) ③11.0		外面、自然釉が付着して調整方法不詳、内面ヨコナデ、胎土に砂粒を若干混入。焼成堅緻、色調内面灰色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
36	坩	灰原1T内	②5.2 ③10.4		内外面ともヨコナデ、胎土精良。焼成良好であるが器面に付着物あり、色調青灰色	
37	平瓶	灰原	①5.6 ②15.3 ③17.2		外面底部ヘラ削り、胴部から口縁、内面にかけてヨコナデ、胎土に若干の砂粒を含む。焼成不良、器面に亀裂あり、色調灰白色	
38	平瓶底部	灰原			外面底部ヘラ削りそれ以外は内外面とも自然釉が付着して調整方法不詳、胎土精良。焼成堅緻、色調明灰色	
39	瓶類頸部	灰原	①9.8		内外面ともヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調黒色、内面灰色	
40	瓶類体部	灰原	③9.6		体部下位、ヘラ削り上位から内面にかけて、ヨコナデ外面、胎土精良。焼成堅緻、色調灰褐色	
41	瓶類体部	灰原	③9.7	X	外面底部ヘラ削り、側面ヨコナデ、内面調整方法不詳、穿孔は外から内へ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	
42	瓶類体部	灰原	③8.6	##	外面底部ヘラ削り、側面ヨコナデ、内面調整方法不詳、穿孔は外から内へ、胎土精良。焼成良好、色調灰白色	
43	杯身	灰原	①(7.0) ②12.5		外面底部ヨコナデ、側面カキ目、口縁から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰褐色	
44	杯身	灰原	①(4.9) ②10.4		外面底部ヘラ削り、側面から内面にかけて、ヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰白色	残存½ 反転
45	杯身	1T内	①5.3 ②10.7		外面底部ヘラ削り、側面から内面にかけて、ヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調灰色	
46	杯身	灰原	①6.9 ②11.0		外面底部ヘラ削りそれ以外は自然釉が付着し調整方法不詳、胎土に砂粒をかなり含む。焼成堅緻、色調黒灰色	反転

B窯　須恵器観察表

（　）内数値は現存値

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
第106図 −1	杯	身	窯内	①4.7 ②13.3		外面底部ヘラ削り受け部から立ち上がりまで、ヨコナデ、内面は調整方法不詳、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成不良、色調淡青灰色、内外面天井部は黄褐色	
2	杯	身	窯内	①4.3 ②12.8		外面底部ヘラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は調整方法不詳、胎土に粗子をわずかに含むが精良。焼成不良、色調淡青灰色	
3	杯	身	窯内	①3.9 ②13.0		外面底部ヘラ削り受け部下方から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土、胎土に粗粒子。長石を含む。焼成堅緻、色調外面淡青灰色、内面青灰色	残存½
4	杯	身	窯内	①3.8 ②12.9		外面底部ヘラ削りそれ以外は調整方法不詳、胎土に粗粒子を含む。焼成不良、色調淡青灰色、摩耗がはげしい	
5	杯	身	窯内	①3.7 ②12.2		外面底部ヘラ削り受け部下方から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。長石を含む。焼成堅緻、色調青灰色	
6	杯	身	窯内	②11.0		外面底部ヘラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含むが精良、焼成良好、色調淡青灰色	残存½ 反転
7	杯	身	窯内	①3.8 ②12.9		外面底部ヘラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に粗粒子わずかに含むが精良。焼成良好、色調外面淡青灰色、内面青灰色	反転
8	杯	身	窯内	①4.3 ②12.9		外面底部ヘラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調青灰色	
9	杯	身	窯内	①3.8 ②11.7		外面底部ヘラ削り受け部から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調青灰色	
10	杯	身	窯内	①3.8 ②11.8		外面底部ヘラ削り受け部下方から内面にかけて、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子わずかに含むが精良で長石を含む。焼成良好色調青灰色	
11	杯	蓋	窯内	①5.0 ②13.2		外面天井調整不詳、口唇付近、内面外ともヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に粗粒子わずかに含む。焼成軟質、色調淡黄灰色、外面一部黒変	残存⅔
12	杯	蓋	窯内	①4.2 ②13.6		外面天井部からやや下位にかけてヘラ削り、口縁部ヨコナデ、内面は調整方法不詳、胎土に粗粒子をやや含む。焼成軟質、色調黄白灰色、天井部に黒変	
13	杯	蓋	窯内	①4.5 ②13.5		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調淡青灰色	
14	杯	蓋	窯内	①3.8 ②12.5		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を多く含む。焼成良好、色調青灰色、内面は明灰色	残存¾
15	杯	蓋	窯内	①3.3 ②12.4		外面天井部はヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をやや含む。焼成堅緻、色調淡紫灰色、外面一部黒変	残存¾
16	杯	蓋	窯内	①4.2 ②14.2		外面天井部はヘラ削り、口縁付近は内外面ともヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含むが精良。焼成良好、色調黄褐色	
17	杯	蓋	焚口床面	①3.5 ②12.0		外面天井部からやや下位にかけてヘラ削り、口縁部から内面にかけてヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調暗青灰色、外面一部青灰色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
18	杯蓋	竈内	①4.2 ②12.2	##	外面天井部調整不詳、一部ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調淡青灰色	
19	杯蓋	竈内	①3.1 ②11.0		外面天井部から下位にかけてヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調自然釉が一部かかる青灰色	
20	杯蓋	竈内	①3.5 ②10.4		外面天井部から下位にかけてヘラ削り、口縁部から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部は不定方向のヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調暗紫灰色、内面明灰紫色	残存¾
第107図−21	甕口縁	竈内			外面、カキ目のあとヘラ描き、口唇は粘り付ける内面ヨコナデ、粘土帯接合時の指圧が残る。胎土精良。焼成堅緻、色調黒灰褐色	
22	甕口縁	竈内			外面ヨコナデの後ヘラ描き、内面ヨコナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成良好、色調黒灰褐色	
23	平瓶	竈内	②7.1		内外面ともヨコナデ、胎土精良。色調青灰白色	
24	平瓶胴部	竈内	③25.2		外面底部タタキ、胴部カキ目、内面ヨコナデ、部分的に不定方向のナデ、底部付近は青海波文が残残る。胎土精良。焼成悪くひずみがある。色調表面灰白色、裏面黒灰褐色	
25	平瓶底部	竈内	③16.8	|||	外面底部ヘラ削り、胴中位、カキ目、内面ヨコナデ、胎土精良。焼成むらがありひずむ、色調灰白色	反転
26	高杯蓋	竈内	①4.8 ②12.2		外面天井ヘラ削りそれ以下から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成不良、色調淡青灰色	
27	高杯杯部	竈内	②10.7		外面底部付近ヘラ削り、内面と残る外面はヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調青灰白色	反転
28	高杯杯部	竈内	②9.4		内外面ともヨコナデ、一部カキ目がはいる。胎土密。焼成良好、色調明紫褐色、脚部淡黄灰色	残存¾
29	高杯杯脚	竈内			内外面ともヨコナデ、しぼりの痕跡が残る。胎土精良。焼成堅緻、色調青灰白色	
30	鉢口縁	竈内	②10.0		内外面ともにヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調青灰白色	反転
31	焼台	竈内	①4.3 ②13.3		外面、調整方法不詳、内面粗粒子を含む。焼成不良、色調外面灰白色、内面灰色	

C窯　須恵器観察表

（　）内数値は現存値

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
第111図－1	杯蓋	最終床面	①(4.9) ②14.8		外面天井からやや下位にかけてヘラ削りそれ以下はヨコナデ、内面は調整不詳、天井付近にわずかなナデの痕跡がある。胎土に粗粒子含むが精良。焼成不良、色調灰白色	反転
2	杯蓋	最終床面	①4.0 ②12.8	＋	外面天井からやや下位にかけてヘラ削りそれ以下から内面にかけてはヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好色調暗灰白	
3	杯蓋	最終床面	①4.0 ②13.4		外面天井からやや下位にかけてヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土精良。焼成良好、色調暗灰色	
4	杯蓋	最終床面	①4.5 ②12.8		外面天井付近ヘラ削りそれ以下から内面口唇付近までヨコナデ、内面は不定方向のナデ、胎土に粗粒を含む。焼成不良、色調暗灰色一部灰色、内面白灰色	
5	杯身	最終床面	①4.0 ②14.2	⌒	外面ヘラ削り、受け部から立ち上がり、内面にかけてヨコナデ、胎土密。焼成良好、色調外面淡紫褐色、内面青灰色、	ロクロ時計まわり
6	杯蓋	最終床面	①4.6 ②13.1	＋	外面天井ヘラ削り残りはヨコナデ、胎土に粗粒子含む。焼成良好、色調黒灰色、内面淡黄灰色	
7	杯身	最終床面	①3.8 ②14.4		外面ヘラ削り受け部から立ち上がり、内面にかけてヨコナデ、胎土密。焼成良好、色調外面青灰色内面淡赤褐色	
8	焼台	最終床面	①3.4 ②13.4		外面天井からやや下位にかけてヘラ削りそれ以下から内面天井付近までヨコナデ、天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成良好、色調灰紫褐色、内面暗灰紫色	
9	焼台	窯内	①4.7 ②12.8		外面天井部からやや下方にかけてヘラ削り、口唇部付近から内面にかけてヨコナデ、内面天井部付近は不定方向のナデ、胎土密。焼成良好、色調淡黄灰色	残存½反転
10	杯蓋	最終床面	①3.6 ②13.4	|||	外面ヘラ削り、口唇付近から内面にかけて、ヨコナデ、内面天井部付近は不定方向ナデ、胎土に粗粒子含むが精良。焼成堅緻、色調暗赤灰色	残存½反転
11	杯蓋	最終床面	①4.2 ②13.6		外面天井付近、調整方法不明、外面ヘラ削り、口唇から内面にかけて、ヨコナデ、胎土密。焼成軟質不良、色調黄褐色	
12	杯身	窯内	①3.5 ②12.7		受け部、立ち上がり付近はヨコナデ、内面底、不定方向のナデ、外面底付近は自然釉がかかり調整不詳、胎土密で長石入。焼成堅緻、色調外面自然釉一部暗灰色、内面灰色	
13	杯蓋	最終床面	①4.4 ②12.2		外面天井付近ヘラ削りそれ以下から内面にかけてヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ、胎土に粗粒子含む。焼成軟質、色調青灰色	
14	杯蓋	最終床面	①4.5 ②13.4	|||	外面天井付近ヘラ削りそれ以下から内面にかけてはヨコナデ、胎土に粗粒子を含むが精良。焼成良好、色調黄灰色で一部黒変、内面彩黄色	
15	杯身	最終床面	①3.7 ②14.0	X	外面ヘラ削り受け部、立ち上がり内面にかけて、ヨコナデ、内面底付近は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含むが精良。焼成良好、色調外面紫灰色内面黄褐色	ロクロ時計まわり
16	杯蓋	最終床面	①4.1 ②13.6		外面天井付近ヘラ削りそれ以下から内面にかけて門睨なヨコナデ、内面天井付近は不定方向のナデ胎土に粗粒子を含む。焼成不良、色調外面白灰色内面淡黄褐色	
17	杯身	最終床面	①4.1 ②13.9		外面ヘラ削り受け部から立ち上がり内面にかけてヨコナデ、胎土にわずかに粗粒子を含むが精良。焼成良質、色調青白灰色、内面淡黄褐色	

挿図番号	器種	出土地点	法量(cm) ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
18	焼台	最終床面	①3.5 ④14.3		外面天井から口唇付近にかけてヘラ削り、口唇付近から内面天井付近までヨコナデ、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含む。焼成良好、色調淡紫褐、内面暗灰紫色	
19	焼台	窯内	①3.6 ②13.2		外面ヘラ削り、口唇から内面にかけて、ヨコナデ内面天井付近は不定方向のナデ、胎土に粗粒子をわずかに含むが精良。焼成堅緻、色調灰白色	
第112図−20	甕	窯内	②51.6(復原)		口縁、内面ヨコナデ、外面は斜めにヘラ描き、胎土精良。焼成堅緻、色調黒灰色	反転
21	甕口縁	窯内	②49.6(復原)		外面口唇部から内面にかけて、ヨコナデ、以下はカキ目、胎土密。焼成堅緻、色調暗紫灰色	反転
22	平瓶口縁	窯内	②6.4		外面胴中位以上はカキ目及びヨコナデ以下はヘラ削り、内面ヨコナデ、胎土にわずかに粗粒子を含むが密。焼成堅緻、色調暗紫灰色	残存½ 反転
23	平瓶胴部	窯内	③16.0		内外面ヨコナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調暗赤褐色	残存½ 反転
24	高杯杯部	最初床面中青灰内	②13.8		内外面ヨコナデ、胎土精良。焼堅緻、色調暗赤褐色	反転
25	平瓶口縁	窯内	②7.2		外面口唇部から内面にかけて、ヨコナデ以下はカキ目、胎土精良。焼成堅緻、色調青白灰色	残存½ 反転
26	平瓶口縁	最終床面			外面口唇部から内面にかけて、ヨコナデ以下はカキ目、胎土良。焼成良好、色調紫灰白色	残存½ 反転
27	高杯脚部	窯内	④10.6		内外面ともヨコナデ、胎土緻密。焼成堅緻、色調暗灰色	反転
28	高杯脚部	窯内	④11.4		内外面ともヨコナデ、胎土に粗粒子わずかに含むが密。焼成堅緻、色調暗灰色	反転
29	高杯脚部	窯内	④15.6		内外面ともヨコナデ、胎土緻密。焼成堅緻、色調暗青灰色	反転
30	高杯蓋	青灰層中	①4.9 ②13.6		つまみはヨコナデ、天井付近ヘラ削り残りはヨコナデで、内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調暗茶褐色一部、黒変	残存½ 反転
31	高杯蓋	最終床面	①4.8 ②12.7		つまみはヨコナデ、天井からやや下位にかけてヘラ削り以下はヨコナデで内面まで続く、内面天井付近、不定方向のナデ、胎土密。焼成堅緻色調暗青灰色、内面に自然釉	残存½ 反転
32	高杯蓋	最初床中青灰	①(3.6) ②12.6		外面、天井からやや下位にかけてヘラ削り残りはヨコナデで内面天井付近は不定方向のナデ、胎土精良。焼成堅緻、色調暗青灰色一部茶褐色	
33	高杯杯部	青灰層中	②9.6		円外面ともヨコナデ、胎土に粗粒子多く含む。焼成堅緻、色調青灰色一部口縁は黒色	残存¼ 反転
34	短頸壺蓋	最終床面	①5.5 ②8.8	|/	天井ヘラ削り、外側面から内面にかけて、ヨコナデ内面天井部は不定方向のナデ、胎土に粗粒子を含むが精良。焼成堅緻、色調暗青灰色	
35	短頸壺	最終床面西側	①13.6 ②13.3 ③13.1	|/	外面、口縁から胴部にかけて、カキ目、底部付近はヘラ削り、胎土に粗粒子を含む。焼成堅緻、色調外面暗青灰色、底部黄灰色	ロクロは時計まわり

4）近世墓とその他遺物

1．概　　要（第113図、図版132）

14号墳の西側の隣接地帯に一群の近世墓地を検出した。石塔や墓碑名等が欠失しているため、改葬したものかと思われたが、調査の結果徹底した改葬されたとは考えられない。

この地区は最初石の露出がみられていたため、古墳の石材と考えていたが発掘調査を行なっている内にそれぞれに、一群ごとに集石がみられた。この結果、墓碑と考えられる立石が1基検出された。

約10基前後を数え、調査では7基確認調査を行なった。伝承等について聞込調査を行なったが、明瞭に時代等を捕足することができなかった。

1号近世墓（第114図、図版133）

立石を有するもので、これが墓碑の役割をはたす。碑名はみられない。墓石の組み方は、河原石や転石を利用し、立石については安山岩の角礫を利用している。ほぼ1mの正方形を呈して、河原石、角礫をくんで墓域をつくっている。

組石を除去すると、棺を入れたと思われる。1m方形を呈する深さ90cm土坑があらわれる。その中からは遺物等はみられない。

2号近世墓（第115図）

120cm×110cmの方形の石組で、腰石だけ残ったもので、墓碑または石碑部分も完全に失なわれている。中央部は立石の部分だけが取り除かれている様に見え、改葬されていたと考えられる。石を取り除いて、土坑のプランを出すため、表面を掻いたが土坑のプランを検出することができなかった。

葬送形態が相違するためで、中央部に骨壺を入れていたものと考えられる。当然土坑は掘られていなかったのではないだろうか。遺物等はみられなかった。

3号近世墓（第116図、図版134）

腰石の部分しか残っていないもので、腰石の平面形は長方形を呈するもので、腰石を除去した後に墓坑を検出した。墓坑の平面形は隅丸長方形で、断面は二段掘りで、深さは上面より83cmを測る。下段より、歯部分が残存していた他部分は土にかえっていた。歯部分は歯冠であ

る埋葬された人は成人ではないだろうか、他に棺についていた釘類を検出した。

遺　物（第116図）

鉄製品で棺についていたもので、留釘類である。

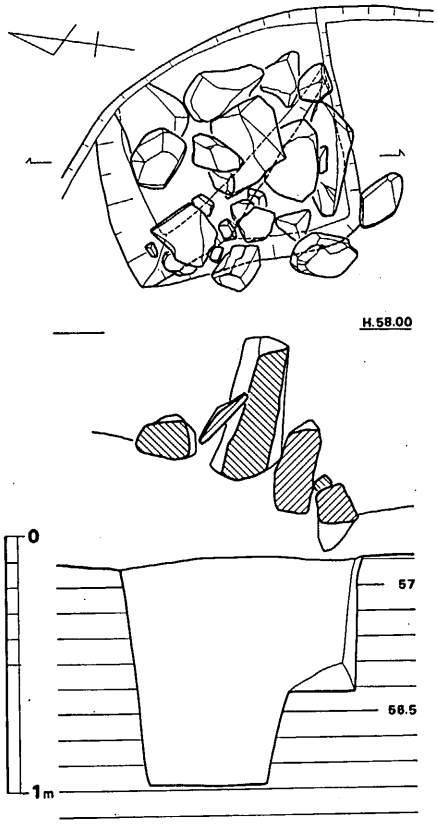
①は貫入式の棺の留となったもので、錆化して、木質部が若干残っていた。

②・③は留釘である。

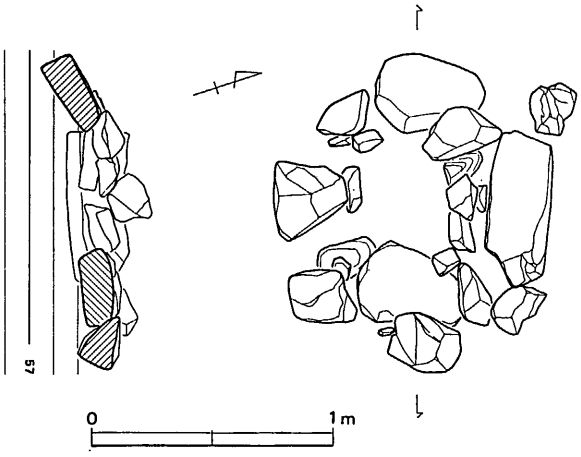
4号近世墓（第113図）

5号近世墓の切り合い関係があるもので、墓坑自体が切り合い、上部構造には腰石のみで、腰石も半分は破壊されている。腰石は南側は完全に抜石されているが北側と東西には腰石として残っていた。方形の基台をつくったものである。

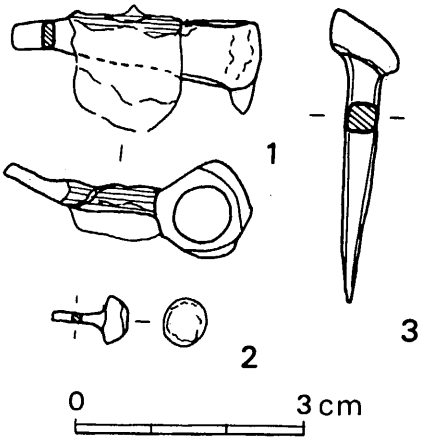
腰石を除去して平面のプランを出すと隅丸方形を呈するもので、断面は二段掘りである。遺物等の検出はみられない。



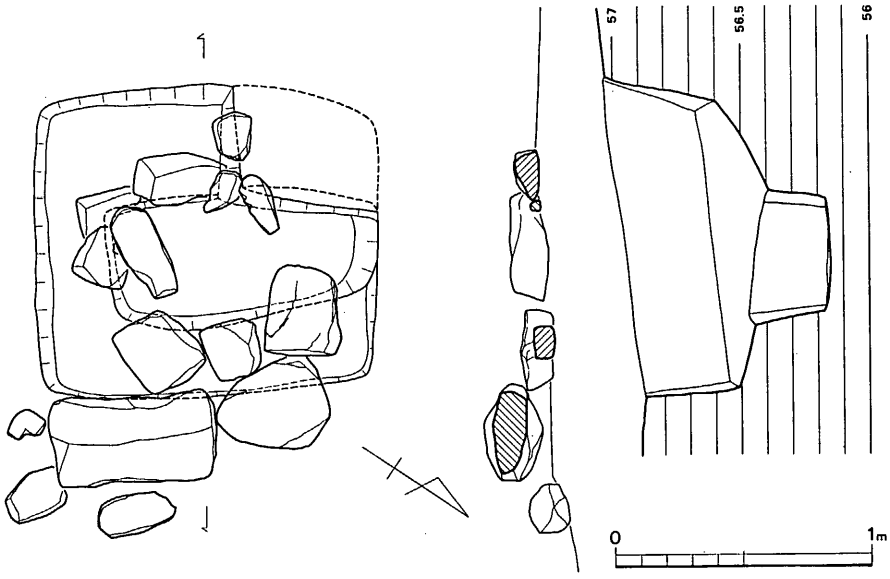
第114図　中通1号近世墓実測図（1/30）



第115図　中通2号近世墓実測図（1/30）



第116図　中通3号近世墓出土遺物実測図（1/1）



第117図　中通3号近世墓実測図（1/30）

5号近世墓（第118図）

腰石の基壇が残っているもので、90cm×90m の方形を呈するものであった。この上に墓標がのるものである。改葬された折り若干のづれがある。二段掘りながら、二段目は不整円形を呈するもので、丁度早桶を入れた様な形態の墓坑を呈している。墓坑底面まで深さ102cmを計測する。

墓坑内からは遺物等の検出はみられない。

6号近世墓（第113図）

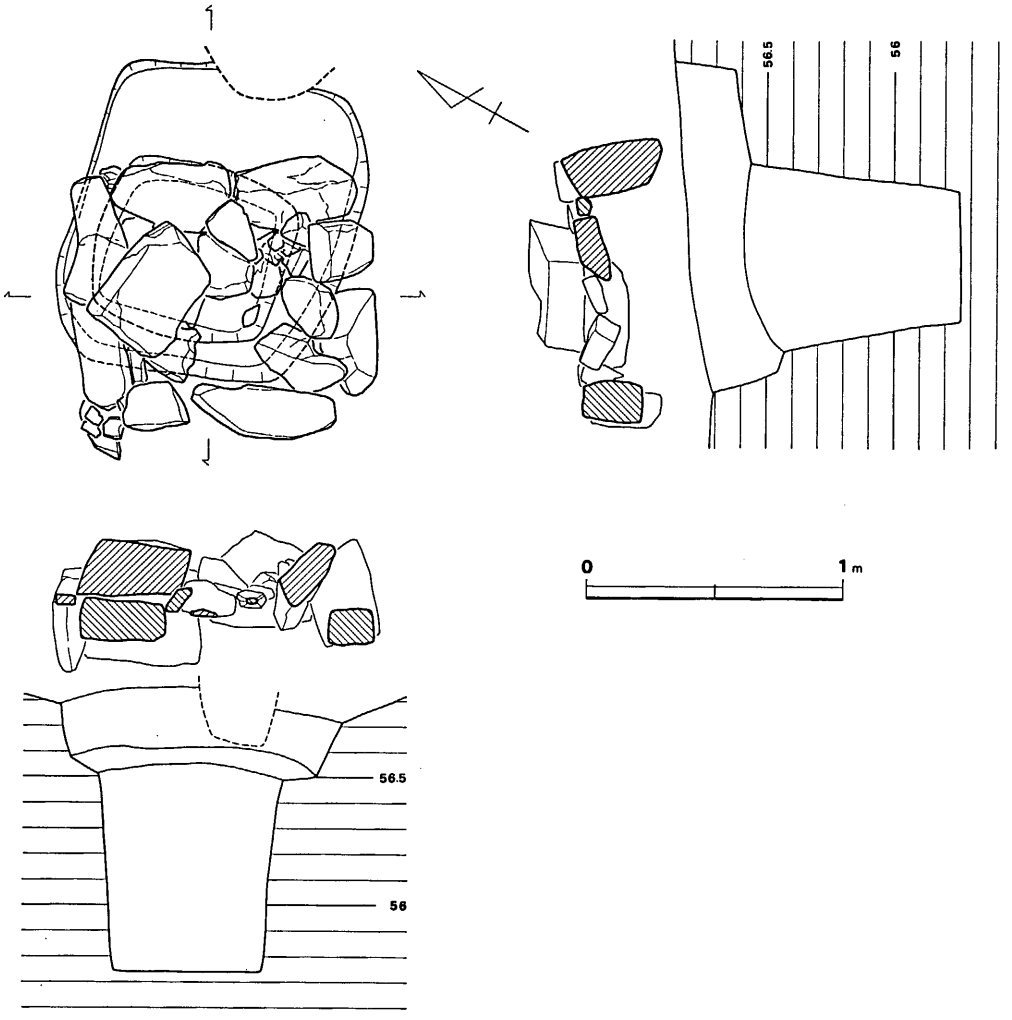
4号近世墓の北側にあるもので腰石のみのもので、除去した時、方形の墓坑を確認した。

7号近世墓（第113図）

6号近世墓の西側にあるもので、腰石のみのもので、方形墓坑らしきものは確認できた。

8号近世墓（第113図）

7号近世墓の西側にあるもので、集石のみで検出された。集石を除去すると、墓坑らしきものは確認できなかった。



第118図　中通5号近世墓実測図（1/30）

9号近世墓（第113図）

腰石の部分は完全に除去されていたもので、土坑の平面形を出す時に確認された。

平面形は長方形を呈するもので、その一部は調査区外である。断面は二段掘りである。出土遺物なし。

以上、まとめると上部構造を除去して、墓坑を出して、棺を検出したが、二段掘りのA類と早桶型のB類の二形態に分類できる。

これを分類すると次表の通りとなる。

第7表　近　世　墓　計　測　表　　〔単位はm、（　）は現存値を示す〕

	施設の形態		上部構造		内部構造					備考
					上段		下段		深さ	
	上部構造	下部構造	たて	よこ	たて	よこ	たて	よこ		
1号近世墓	基壇石散乱石碑あり	二段掘	0.84	0.90	0.95	—	—	—	0.82	
2号　〃	基壇石残存	な　し	1.31	1.14	—	(1.38)	—	0.68	0.66	
3号　〃	基壇石残存	二段掘	1.28	1.09	1.33	1.21	1.05	0.52	0.83	釘．歯出土
4号　〃	基壇石散乱	二段掘	1.20	0.76	1.06	1.17	0.53	0.63	0.58	切り合い5→4
5号　〃	基壇石残存	二段掘	1.01	1.07	1.07	1.22	0.74	0.60	1.02	切り合い5→4
6号　〃	基壇石散乱	な　し	(1.0)	(0.72)	—	—	—	—	—	不　明
7号　〃	基壇石散乱	な　し	—	—	—	—	—	—	—	未　掘
8号　〃	基壇石散乱	な　し	—	—	—	—	—	—	—	未　掘
9号　〃	な　し	二段掘	—	—	—	(1.38)	—	0.68	0.66	

このことから、時期的な相違等はみられないが、両形式にて併続しながら埋葬されたであろう。正確に時期を決定するものはなく、一応ここでは、近世墓としてとらえる。

その他の遺物（第119～121図）

近世墓周辺部と13号墳・14号墳の石室内・周辺部から出土した。中世及び近世陶器類を中心にまとめてみた。

中世期遺物（第119図）

近世墓の周辺部から出土しているもので、白磁・青磁と摺鉢等が出土した。

青・白磁（①・②）①は白磁で近世墓周辺で出土したもので、玉縁をもつもので、その下に沈線を有している。胎土に細粒砂とカオリン質を含んでいる。

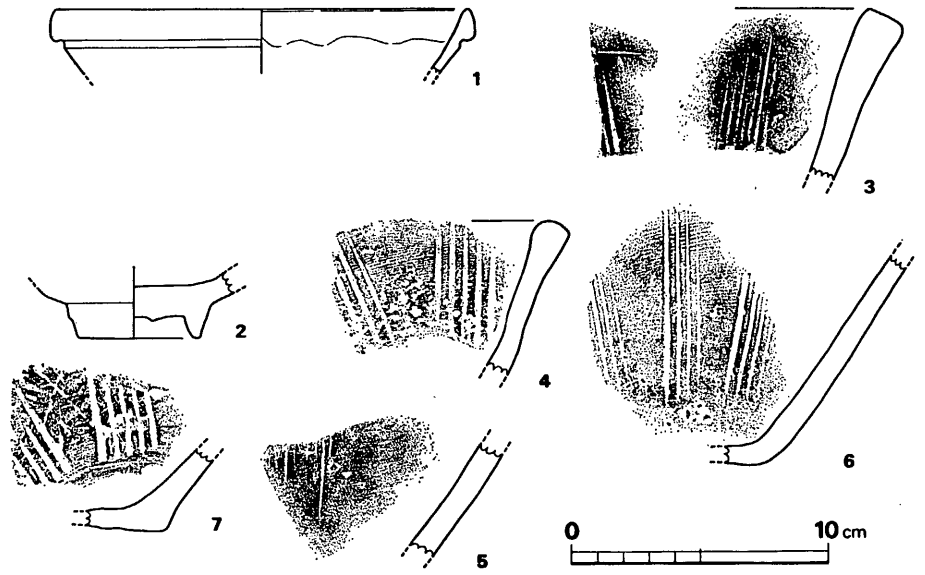
②は青磁で、高台の畳付の部分で、見込みに花文（牡丹）を描いている。見込みの部分には施釉されていない。釉は草釉である。

擂鉢（③～⑦）口縁部破片は③・④・⑤・⑥は底部破片である。擂目が4本のものと6本のものがあり、胎土に小砂を含み、焼成は軟質で、素焼のもので、色調は灰褐色を呈し、一部黒変している。

近世陶器（第120図）

14号墳の石室の中に、ゴミ溜がわりとして使用されていたものが大部分である。

江戸時代中頃から後半期に作陶されたものを、ここでは実測した他に、近代明治以後のものと擂鉢類もあるが、一応ここでは磁器物中心に上げる。器種的には、茶碗と皿（向付）、命名



第119図　その他の遺物①（1/3）

皿・甕等である。有田系くらわんか手のものと、福岡の須恵焼がある。

有田系くらわんか手（第120図①～⑥）①・②・⑤ 向付で、内面の文様には花と風景等が描かれ、手描によるもので、呉須をつかったものである。

⑤は見込みに印判を使用している。外面には枝葉をコバルトにてアレンジしている。

③・④・⑥は茶碗である。表の絵柄は松を中心に抽象化したものである。

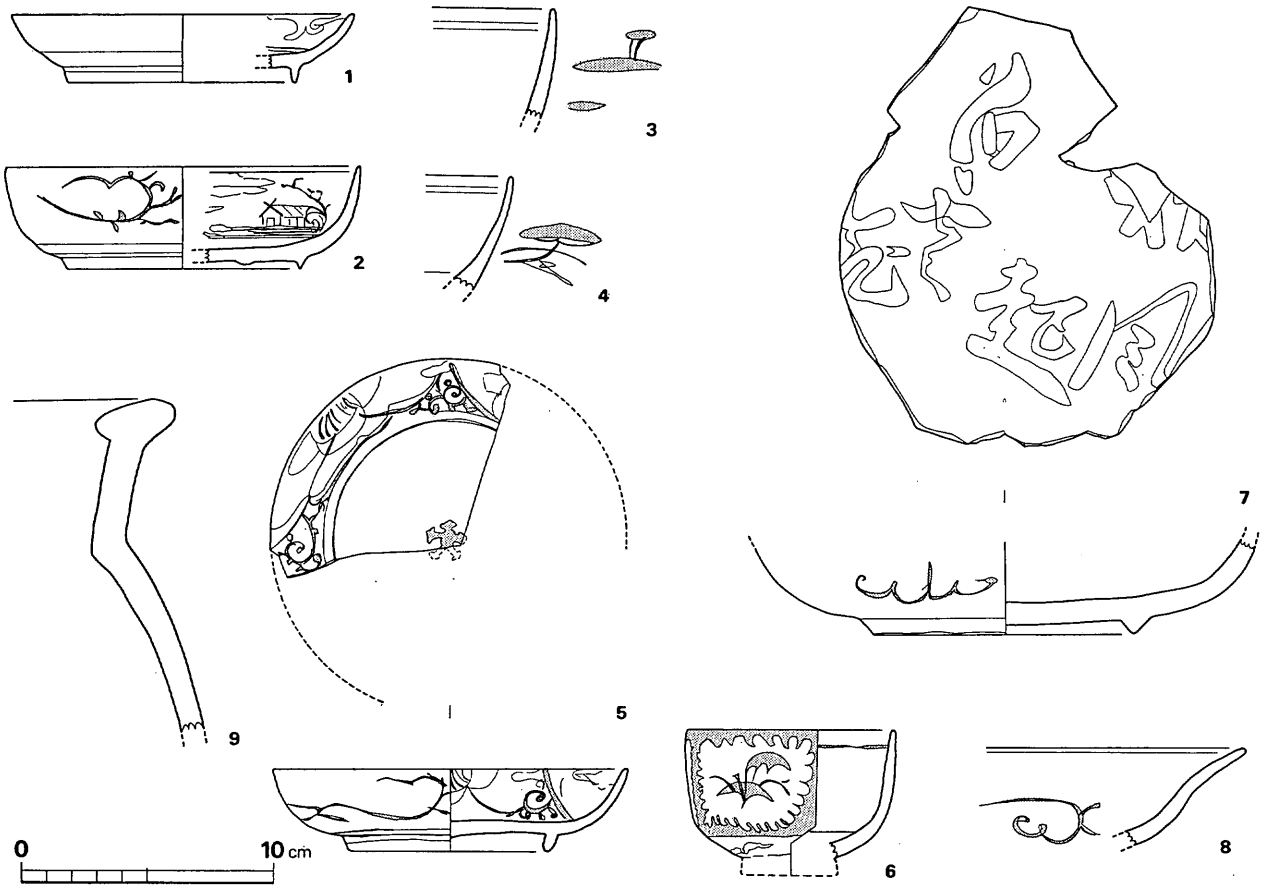
その他（⑦、⑧、⑨）⑦は命名皿で、見込みには「秋風起……（云々）」と書いてある。外面にコバルトにて枝葉をアレンジしている。

⑧は大皿の口縁の破片で、外面にコバルトを使用して、枝葉の文様を描いている。

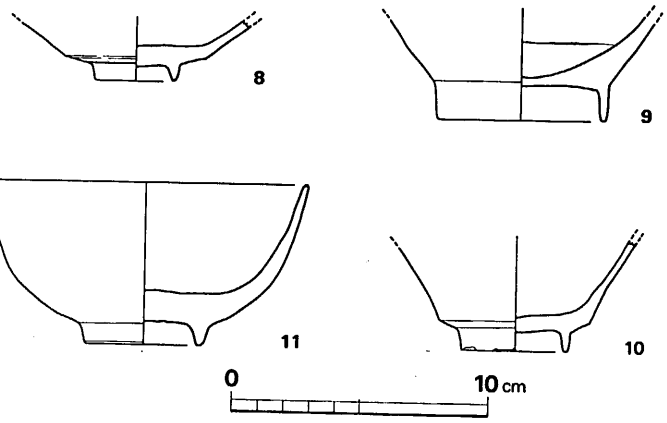
⑨は小石原産の甕、全面に鉄釉を施す。

須恵焼（⑩～⑬）江戸時代後期につくられた粕屋郡粕屋町須恵で焼かれた磁器物で、黒田藩の藩窯として焼かれた青磁類で、その器種は多種であったが、当遺跡からは、茶碗類が出土している。その特徴は、高台とその畳付とにある。釉は薄い青がかかっていて、白色の強い青という感じである。⑪は見込に文字が記されているが、判読できなかった。胎土に天草石を利用したもので、焼成は良好で、発色の感じが弱しい感じで、清貧な感じである。

以上のことから、各時期のものが採集されたが、この付近がもっとも盛えた時代が、古墳時代末から歴史時代の初期にかけてである。（副島）



第120図　その他の遺物実測図②（1/3）



第121図　その他の遺物実測図③（1/3）

5）小　　結

今回の発掘調査から判明したことは次の様である。

1．当遺跡群は牛頸窯跡群のほぼ南に近い中央部に位置する。丘陵尾根線近くと、中腹に窯跡を有し、西南裾部に古墳群をもっている。

2．調査では4基窯跡（A－1・A－2・B・C）と裾部に古墳14基から成る古墳群の内（一次調査で未調査の14号墳と一部調査の13号墳）の2基と、近世墓9基を検出した。

3．古墳の開口方向はほぼ南西すなわち、牛頸川にむいてひらいている。時期的には6世紀後半から7世紀後半までの約100年間に渡って利用されていた。

4．古墳出土の須恵器について、14号墳からは、精成品の須恵器は少なく、傷物に近い須恵器が出土している。

一般的には、精成品を埋葬することが多いわけで、精成品よりも、傷物を副葬させていることが、この古墳の一つの特徴といってよいであろう。古墳の築造年代と窯跡の存在年代とはほぼ一致することが言えよう。

5．窯跡の下、丘陵の裾部に古墳群が存在する窯跡が工人集団の仕事場で、その埋葬の場として古墳群が存在すると思われる。この中通周辺部の耕地面積から古墳を築造するだけの富の蓄積ができたとは考えられない。そのため後方の丘陵地での窯業生産によって、生活をささえていたと考えた方が妥当である。

窯積め前の工房跡（アトリエ）は現状では検出できなかったが、窯出し、製品の運搬

等を考えると、牛頸川に広がる水田面に集落と工房跡等が検出できると考えられる。

このことを踏まえて考えるべきである。工人集団の生産の富が、この古墳群を築き、そして工人集団を埋葬した。この集団の墳墓の地であるということが言えるのではなかろうか。

6．中通窯跡群の特徴

窯を構築する場合、適度の傾斜をもった地形と風向、水、薪材の豊富なところなどの条件が必要となってくる。そこで中通窯跡群について、その立地をみると、擂鉢状に中央が低く、周囲が壁をなす地形を選び、その尾根に近い急傾斜の高所を利用したもの（A群）、斜面の中腹から尾根線に近いやや緩傾斜を利用する（B・C）の二つのタイプがある。

今回の調査した4基について窯規模、構成などをまとめれば次表のとおりである。

第8表　中　通　窯　跡　群　計　測　表

	主軸方位	立　地	煙出し部多孔式有無	排水溝付設有無	全長(cm)	最大幅(cm)	天井部高さ(cm)	傾　斜	大改造	時　期	備　考
A—1窯	N-68°20′-W	尾根直下	?	有?	700＋α	240	150	28°	3	6世紀後半～7世紀初頭	A-2より古い同時操業
A—2窯	N-38°-W	尾根直下	4	有	1600(前庭部含)	250	80～90	30°	2	6世紀後半～7世紀初頭	
B　窯	N-75°-W	中　腹	3	有	1690(前庭部含)	330	90～100	25°-30°	ナシ	6世紀後半	
C　窯	N-103°-E	尾根直下	4	有	820＋α	220	80	25°	ナシ	6世紀後半	

このことから窯は地下式で排水溝と多孔式の煙出しをもつもので、6世紀後半から7世紀前半頃に位置づけられ、排水溝と多孔式の煙出しをもつことが、中通窯跡について特徴的である。

古墳時代末から歴史時代始め頃にかけて、窯自体その構造はだんだん短かくなっていく、奈良時代にはいると、なおさら短かくなって、窯の構造も地下式から半地下式となる。

この牛頸窯跡群で、発掘調査された窯について若干のまとめをⅢ章で記して、これからの研究の糧としたい。　（副島）

第2次調査では、下記に記した方々に協力と御援助を受けた、記して感謝いたします。

地元協力者

永野文子、松本靖子、佐藤幸登、田中金太郎、平田涼子、篠原純子、河野房子、田中美栄子、高山和恵、田中清子、樋口紀子、田中フミ子、角田恵子、戸上貴美子、藤島ミトセ、手塚アツコ、山上ヒロコ、川辺敏子、大賀信弘、中山さつき、森山鉄男、高田秀之輔、高田正孝、

筑紫ケ丘高校郷土研究部（野村俊之、清原健次、高原惣一朗、富田邦敬、橋口典平、田口威、安永幸司）

工事関係者

ミサワホーム株式会社、竹中土木株式会社、西武建設株式会社

報告書作製のおり実測、清書等

片岡宏二、平田倫子、平田春美、大谷龍代、豊富弥生。

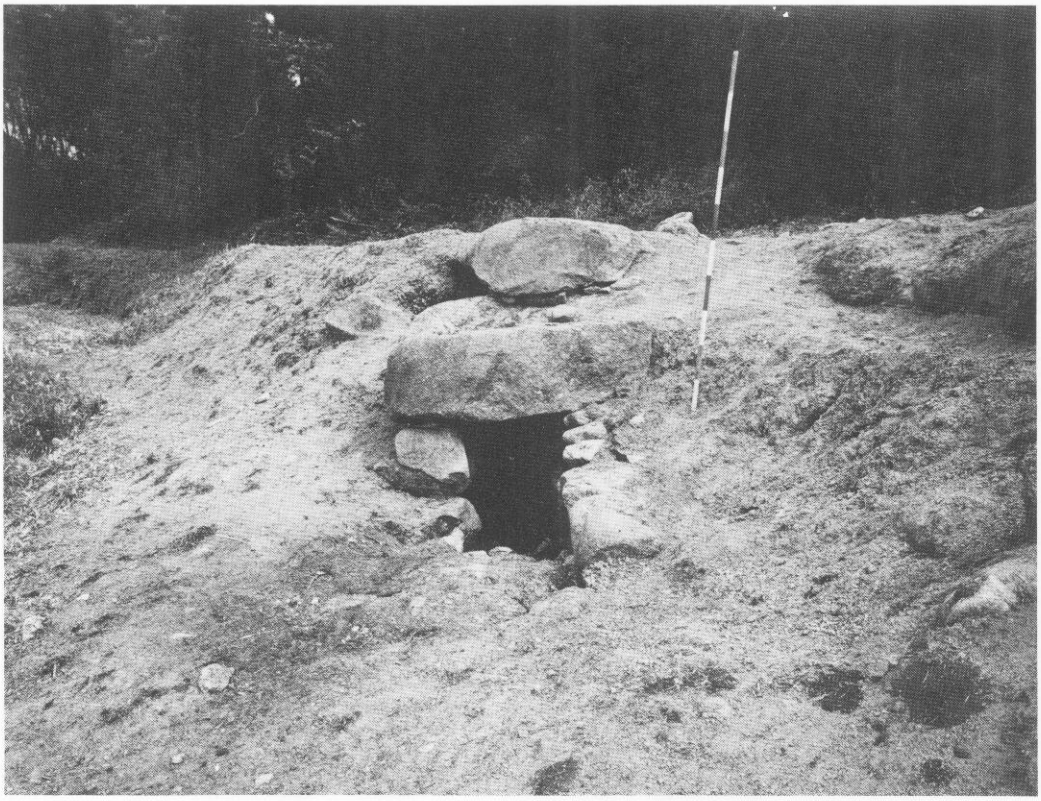
図　　版



第 2 次調査全景



第 2 次調査分近景(左:14号墳　右:13号墳)



中通13号墳　調査前の状況



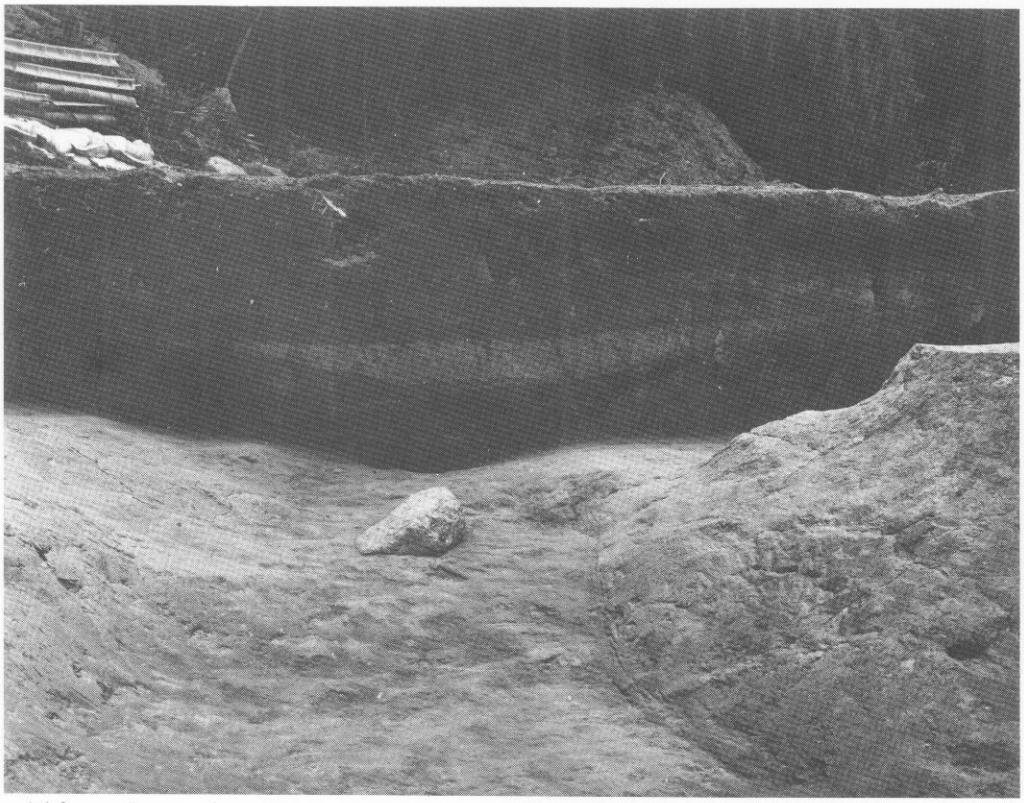
同上　墳丘(北西から)



中通13号墳　墳丘と石室全景(西から)

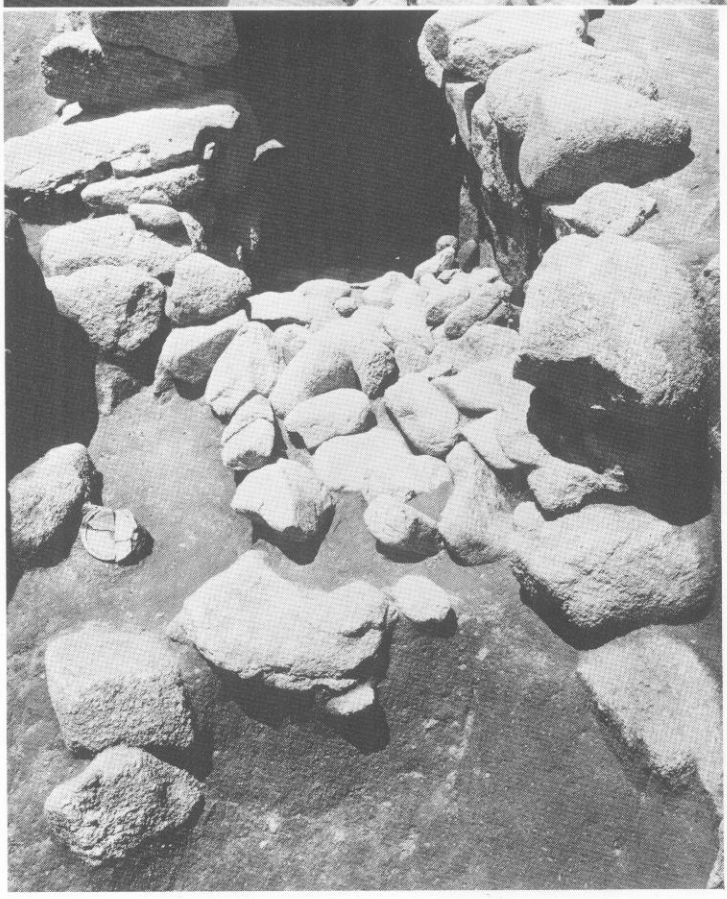


中通13号墳　墳丘と周溝



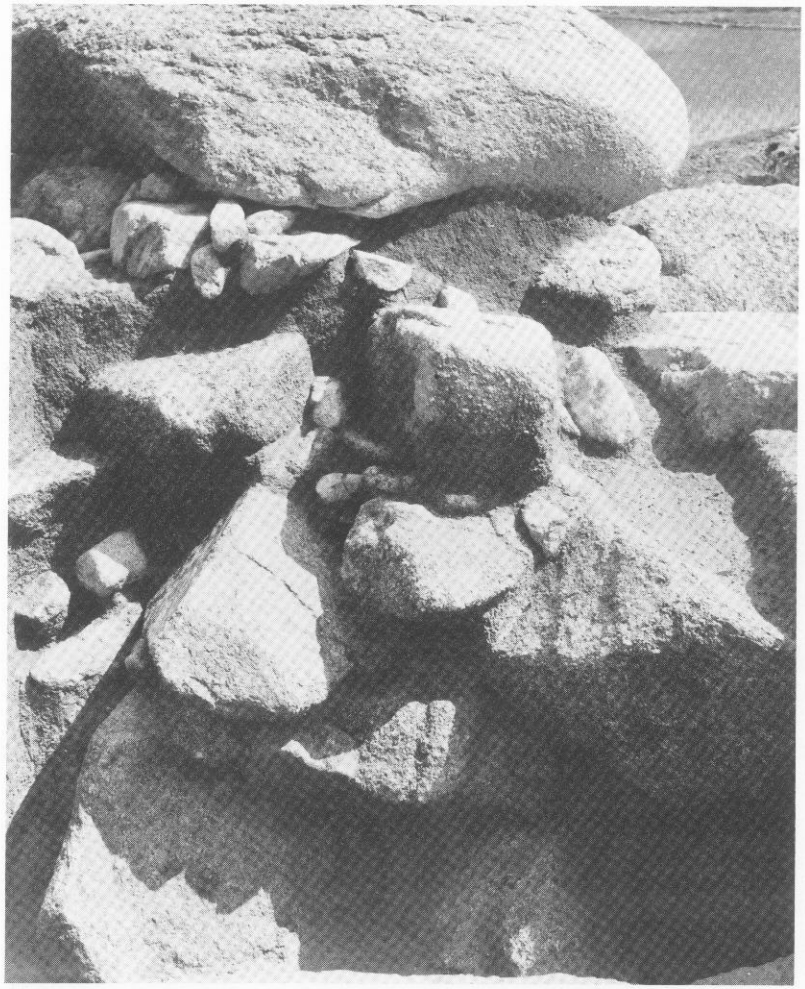
同上　周溝



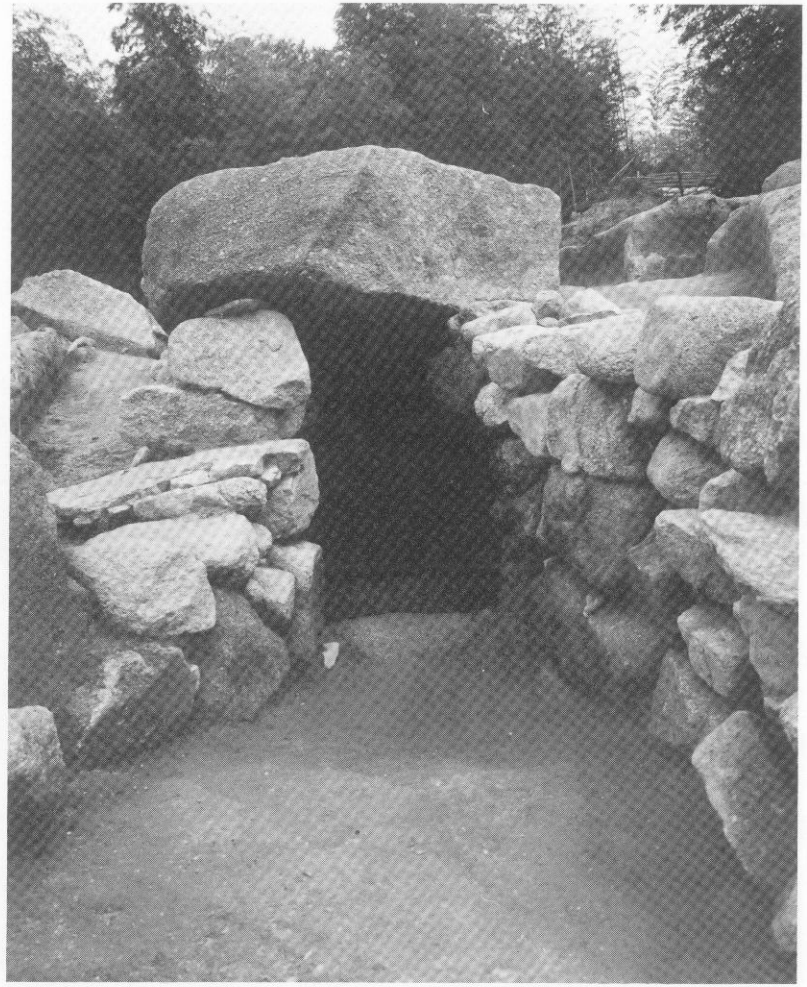


(上)
中通13号墳　石室全景(南から)

(下) 同上　　閉塞石



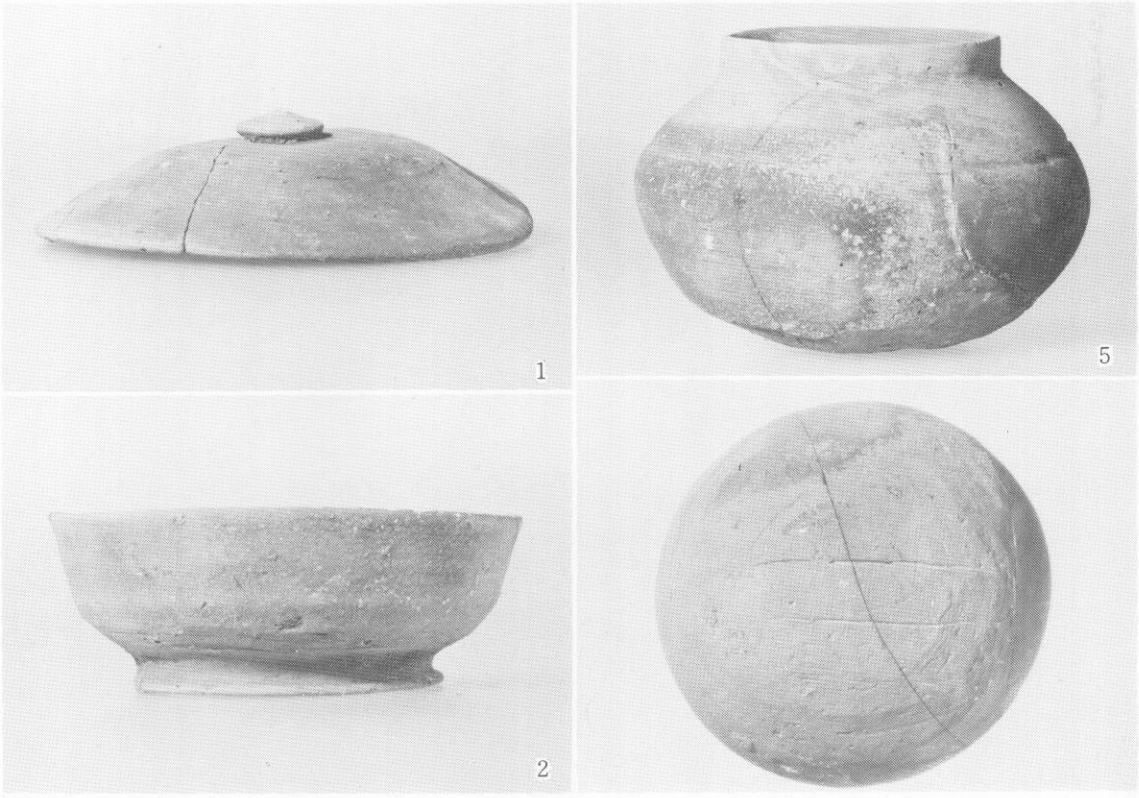
中通13号墳　石室裏面



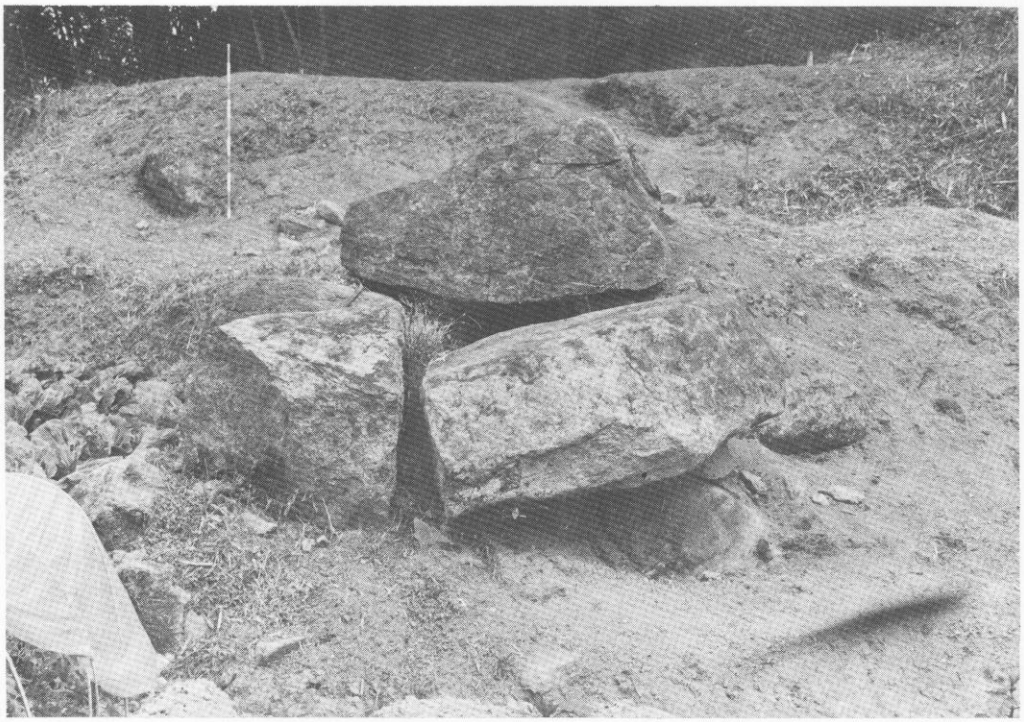
中通13号墳　墓道



中通13号墳　石組墓道



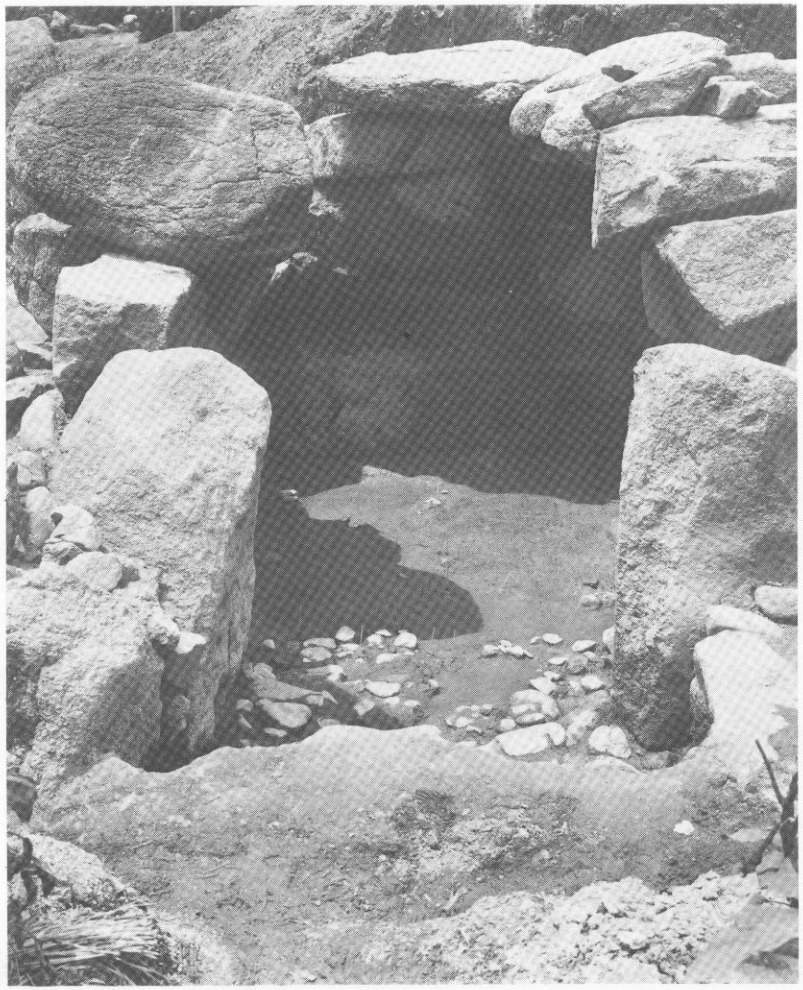
同上　墓道出土遺物(須恵器)



中通14号墳　調査前の状況(南から)



同上　石室全景(北から)



中通14号墳　石室全景(南から)



中通14号墳　石室内遺物出土状況

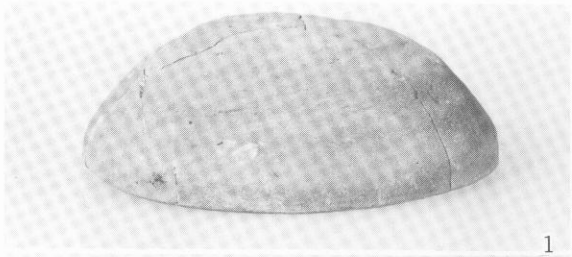

1

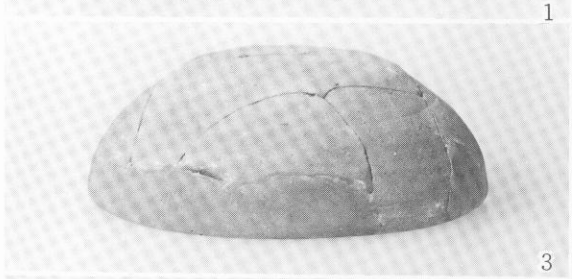

2

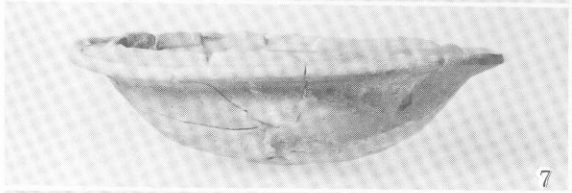

3

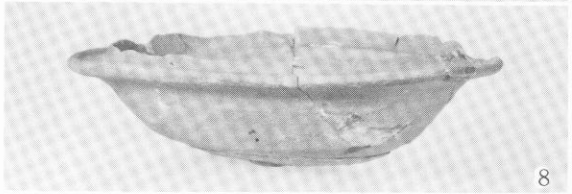

4

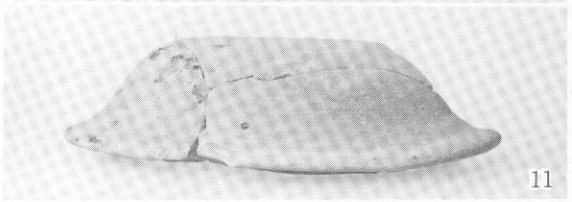
中通14号墳（1 奥壁　2 左壁　3 右壁　4 右袖石）

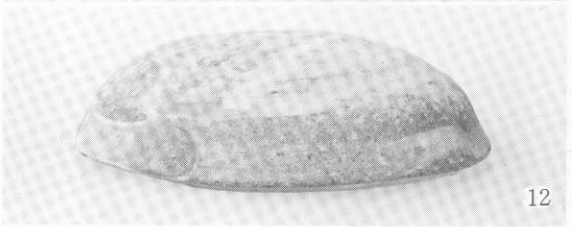

1

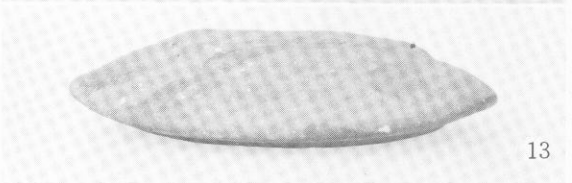

3

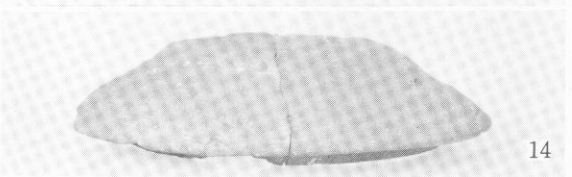

7

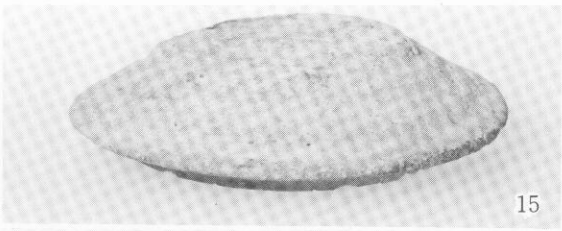

8

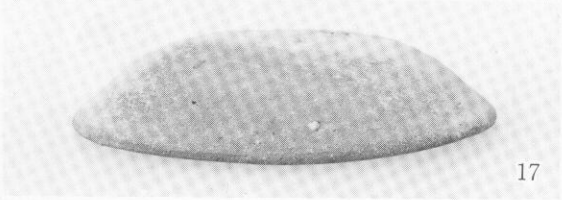

11

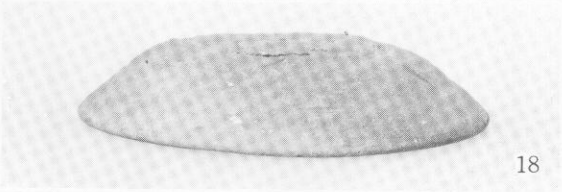

12

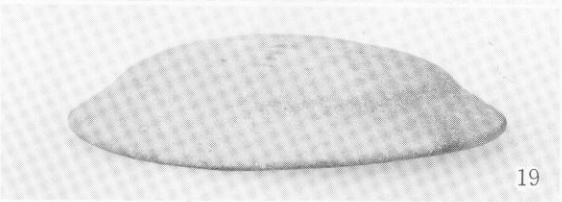

13

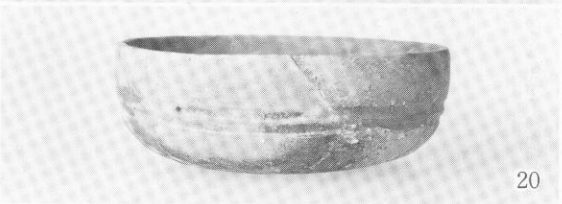

14

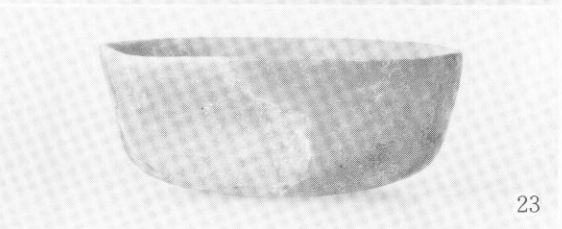

15


17

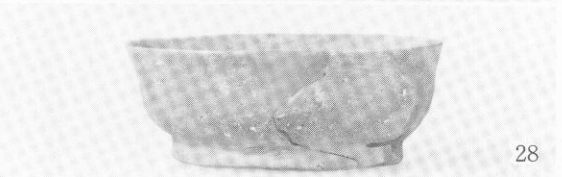

18


19

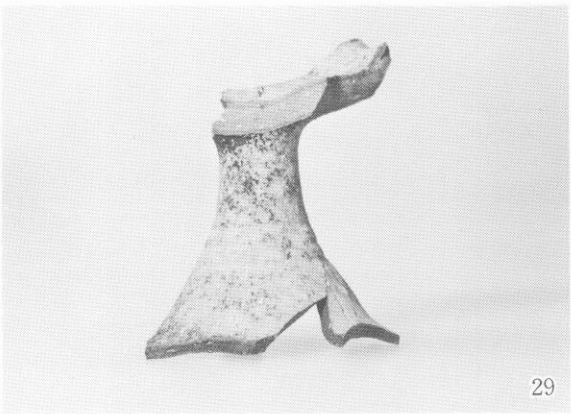

20

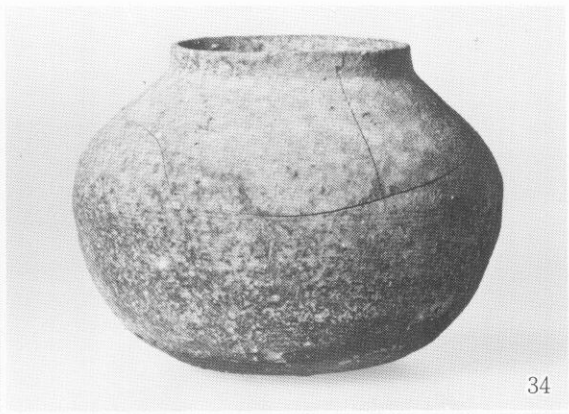

23


26

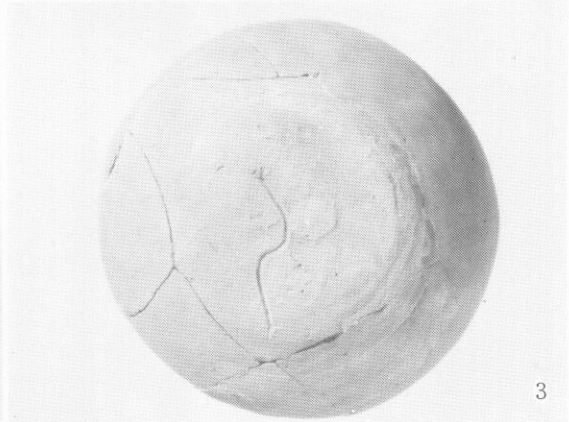

28

中通14号墳　出土遺物(須恵器)


29


34

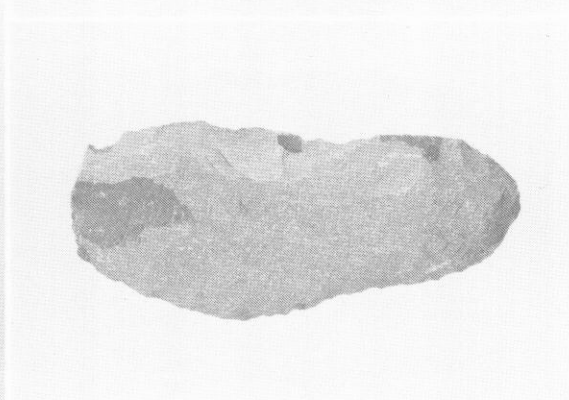

30


3

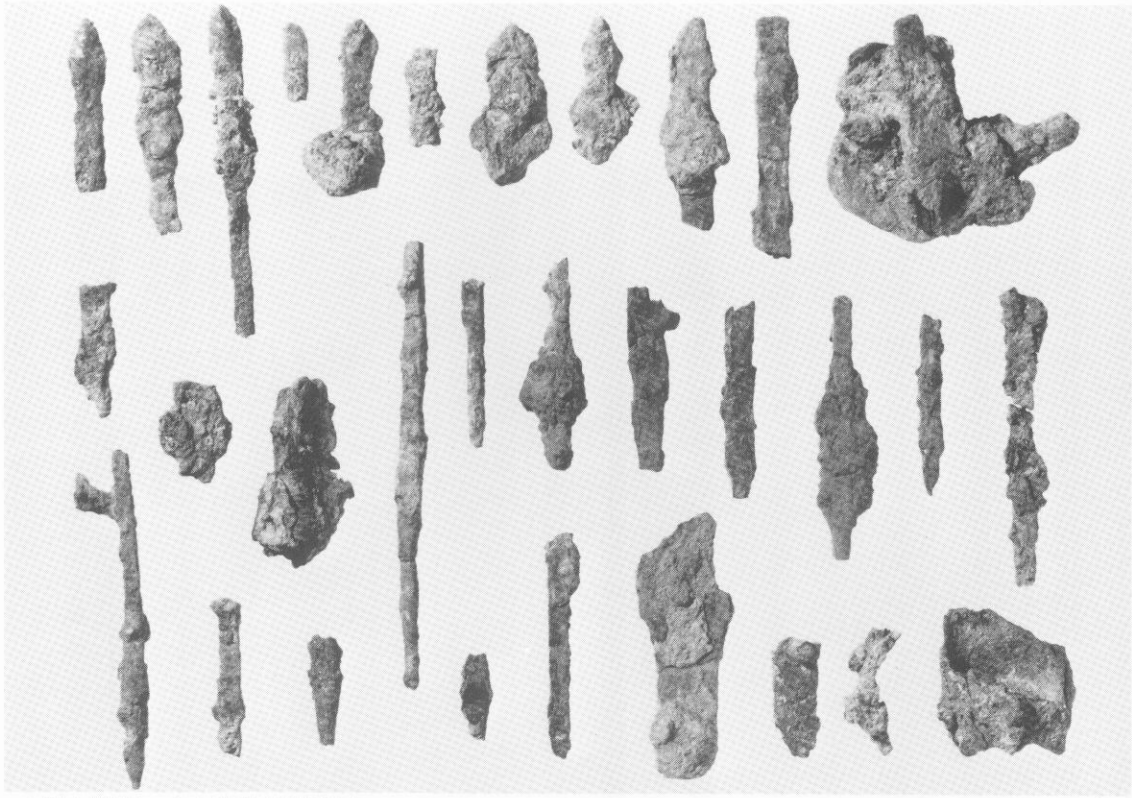

31


13

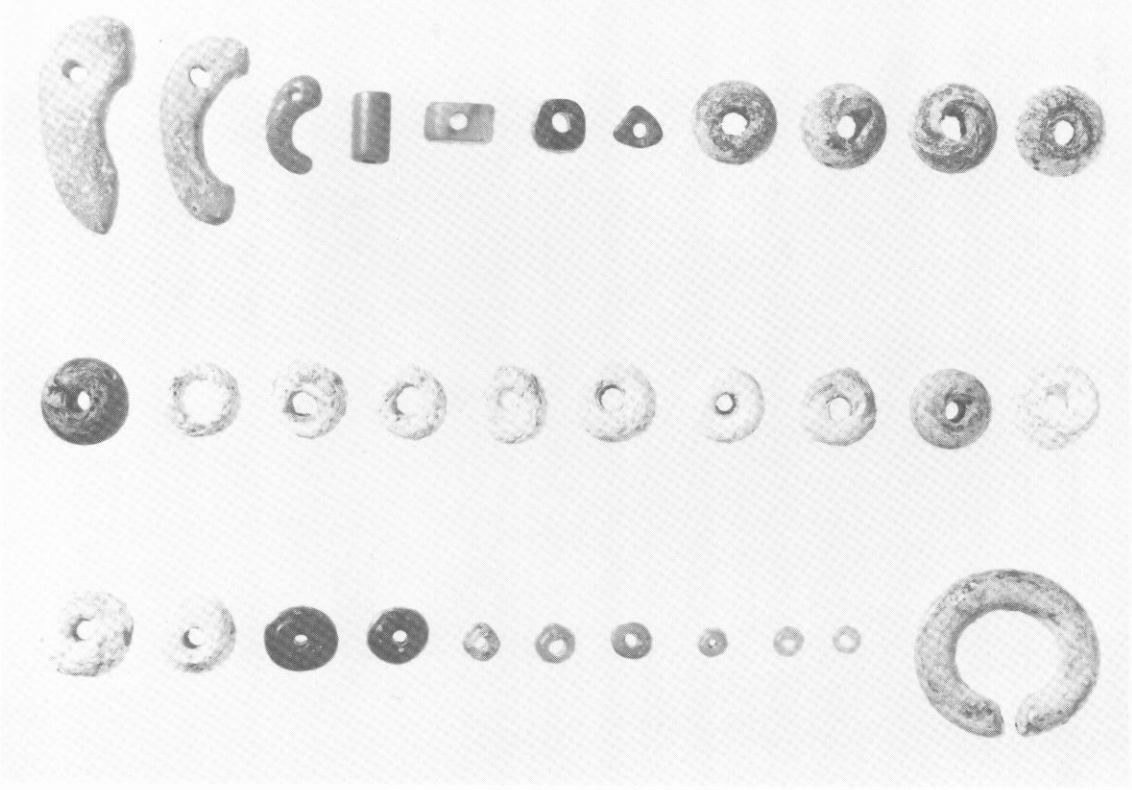

32



中通14号墳　出土遺物(須恵器・石器)



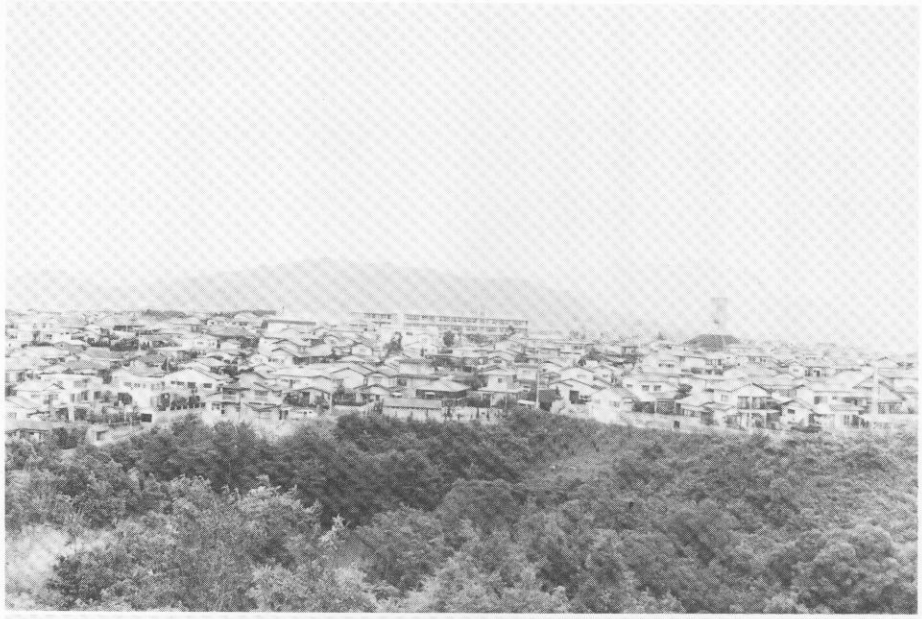
中通14号墳　出土遺物(鉄製品)



同上　出土遺物(装身具類)（実大）



中通A窯跡群全景(左:A－1窯　右:A－2窯)



◀中通Ａ窯跡群より対岸を見る。この遺跡群も一年後にはこのように変貌する。



◀中通Ｂ窯跡群
全貌
（対岸より）



◀中通Ａ窯跡群
全貌
（対岸より）



中通A窯跡群　発掘前(伐採後)



中通A窯跡群　発掘区全景



中通A窯群　全景



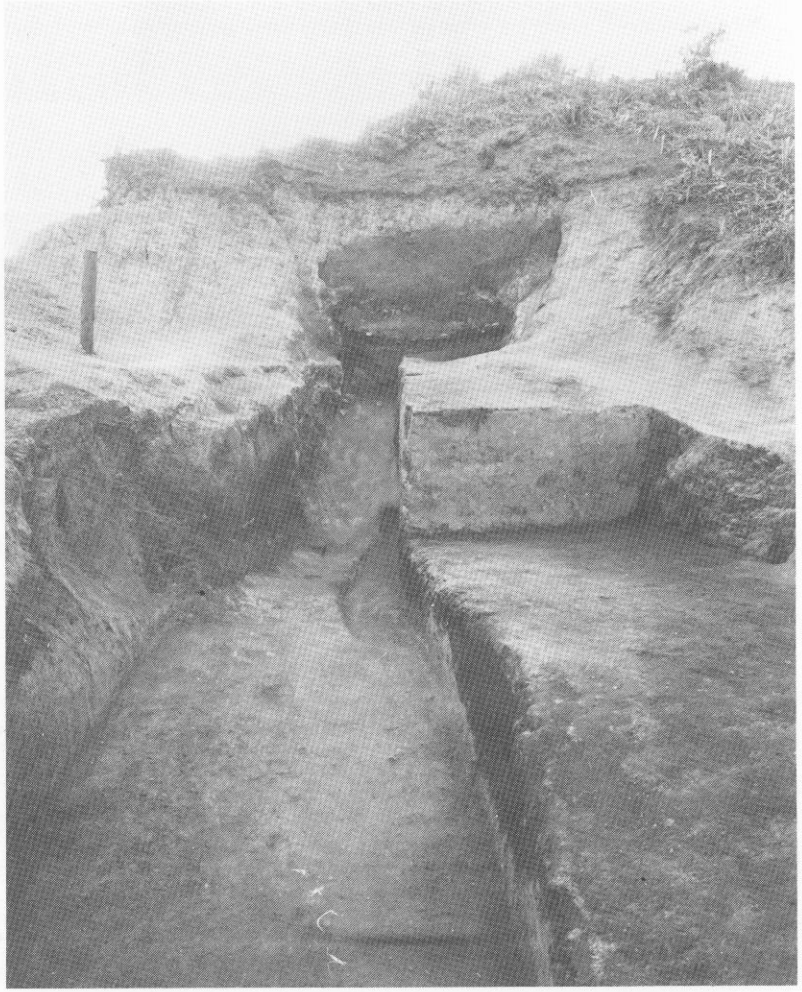
中通A窯群　近景(左:A－1窯　右:A－2窯)



中通A－1窯　全景



A－1窯　全景



A－1窯　近景



◀焼成最後段階
遺物出土状態



◀焼成最初段階
遺物出土状態



◀遺物出土状態

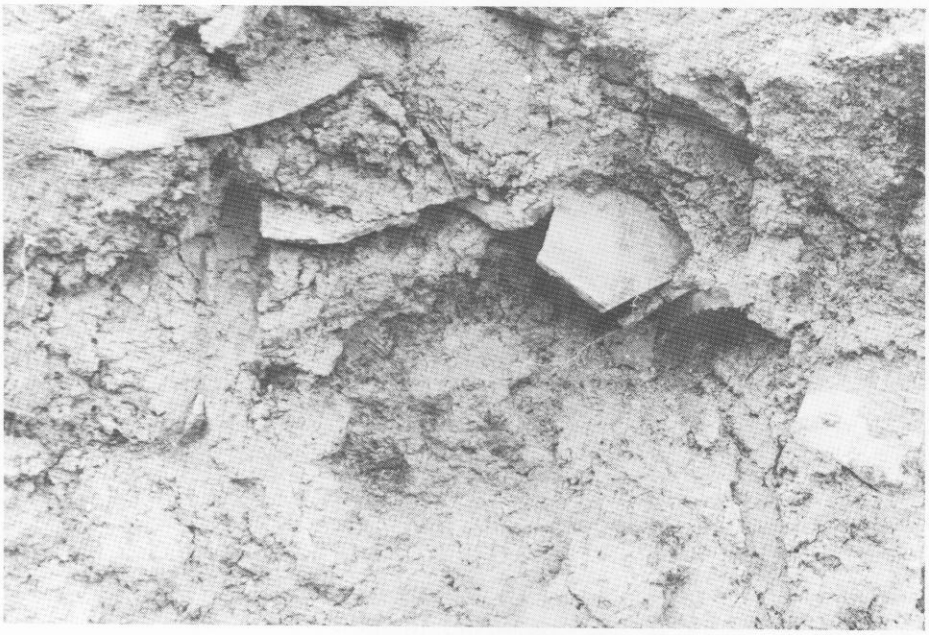


◀焚口部と出土遺物
（焼成当初）

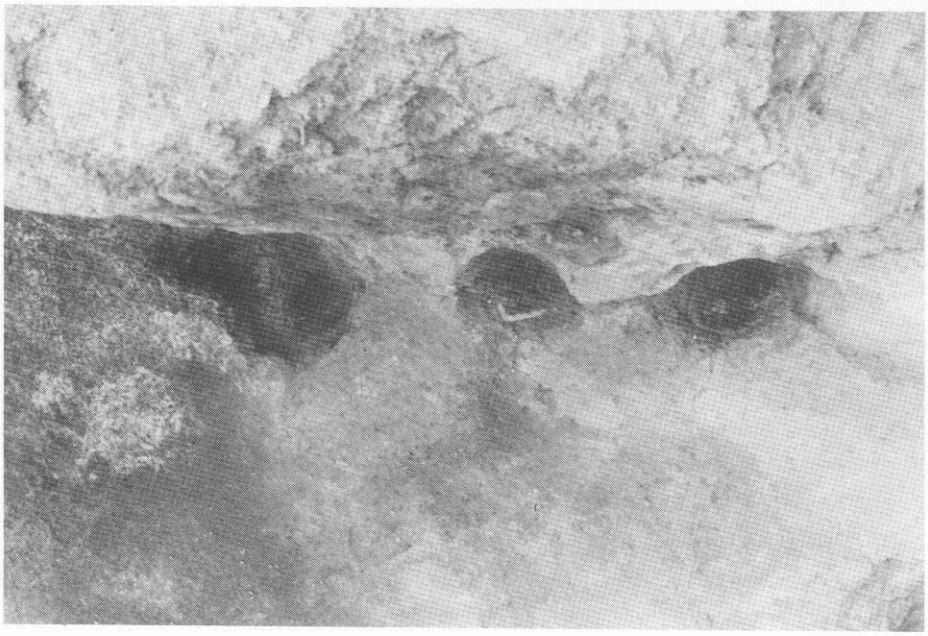
図版 104



◀窯本体の閉塞の一部



◀スサ・杭の残痕



◀杭列の痕跡



A－1窯焚口部右側の柱穴



A－1窯焚口部状態



◀中通 A－2 窯近景



◀A－2 窯全景



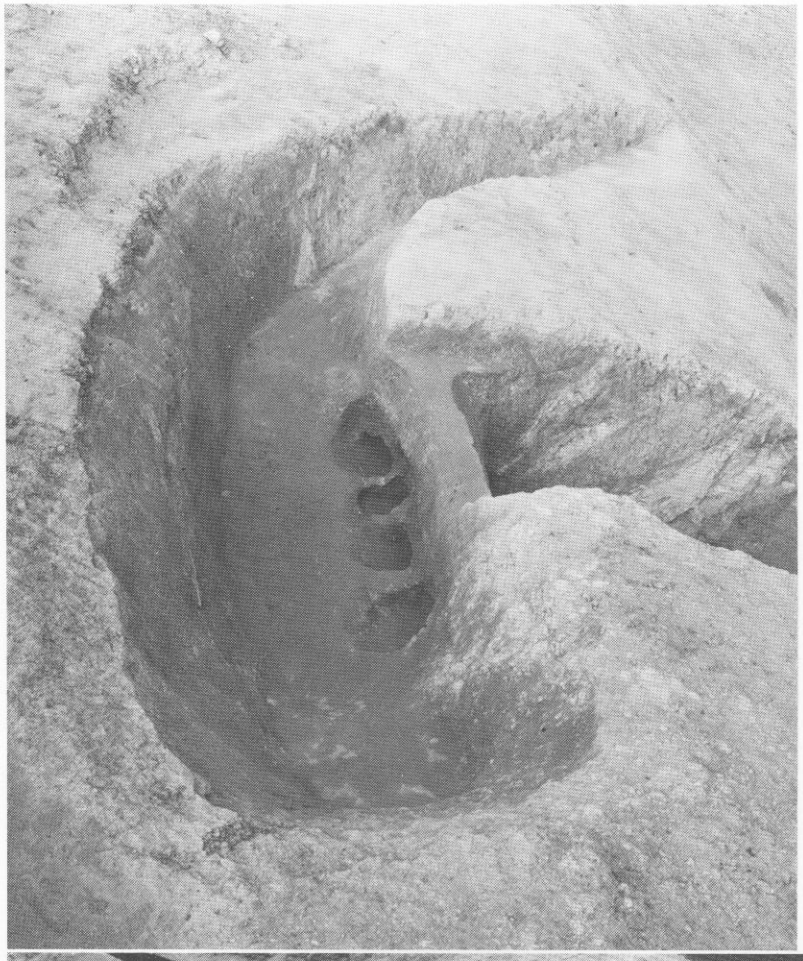
A－2窯　全景(東から)



◀Ａ－２窯　灰原堆積状態



◀Ａ－２窯　焚口部の状態



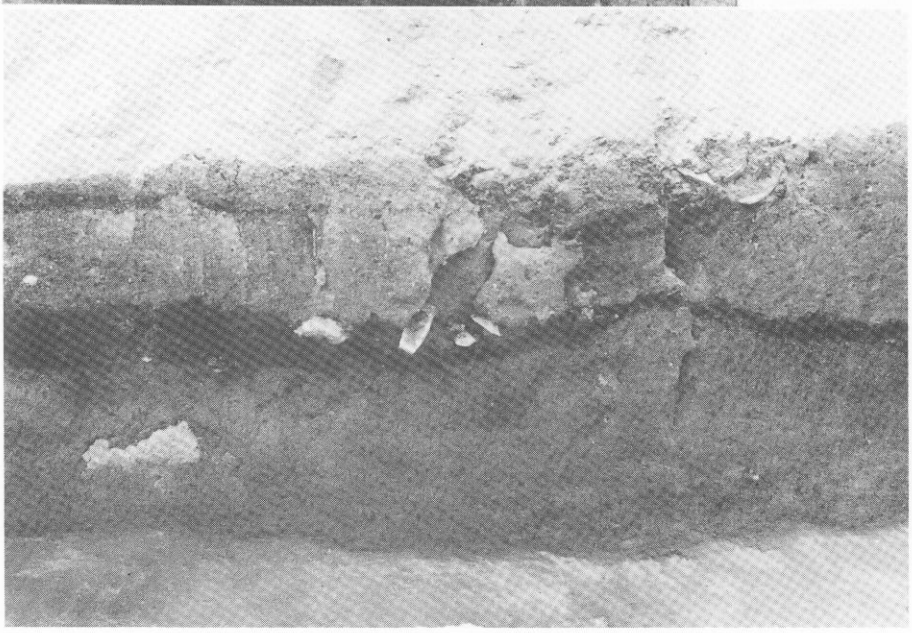
◀窯尻と排水溝の状態
（南から）



◀窯尻と煙出近景
（西から）



◀中通A群
灰原の状態



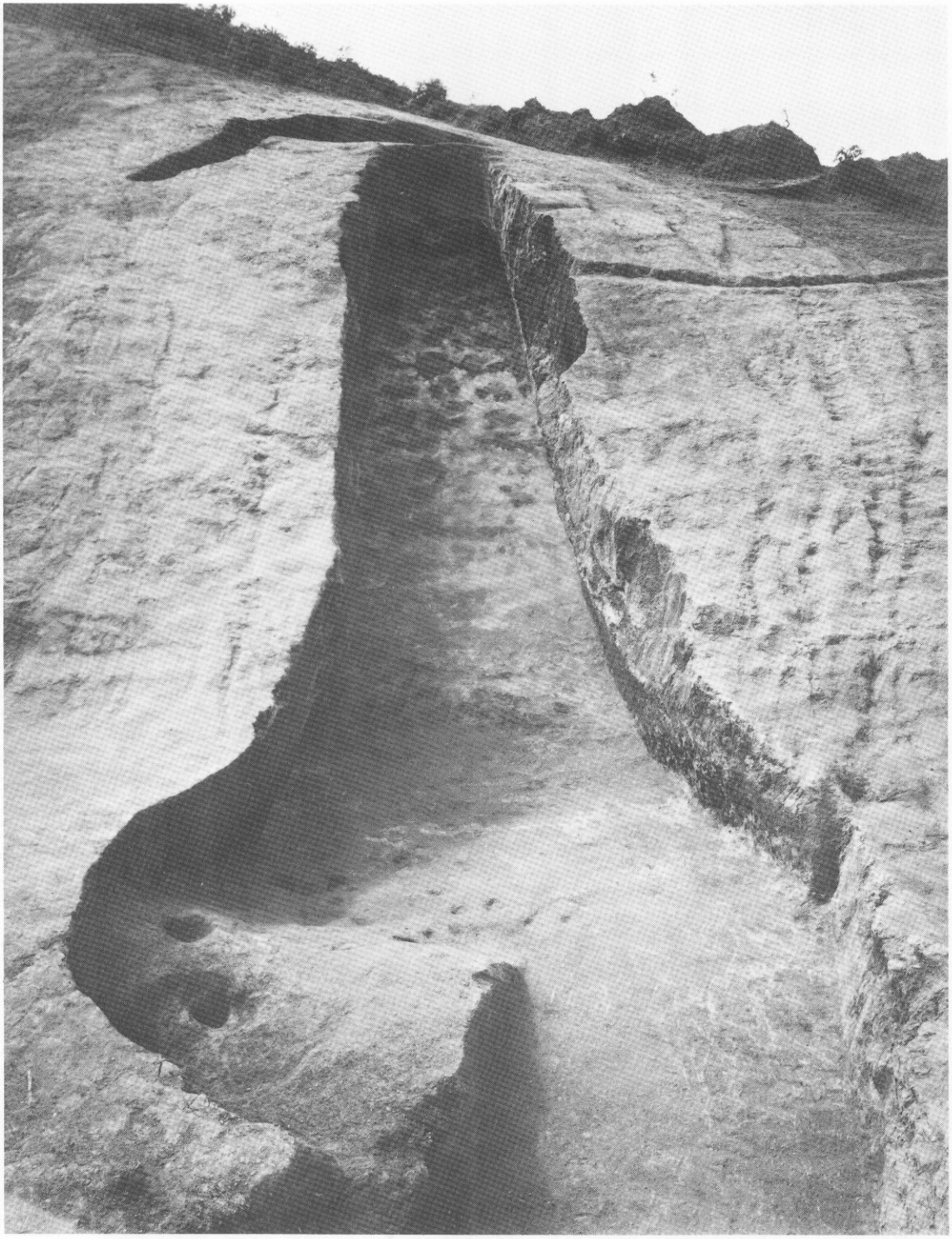
◀灰原堆積状態



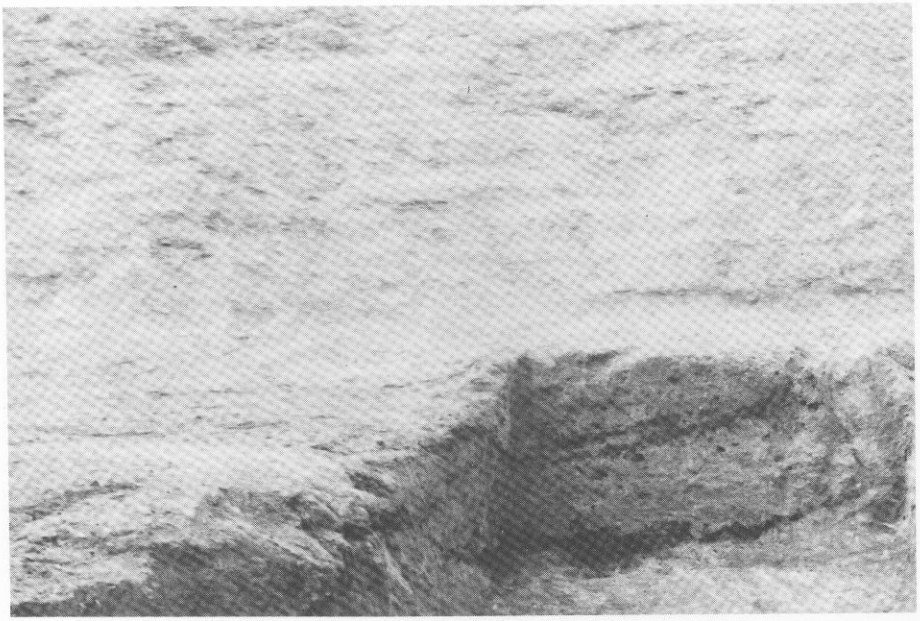
中通Ｂ窯伐採後の状態



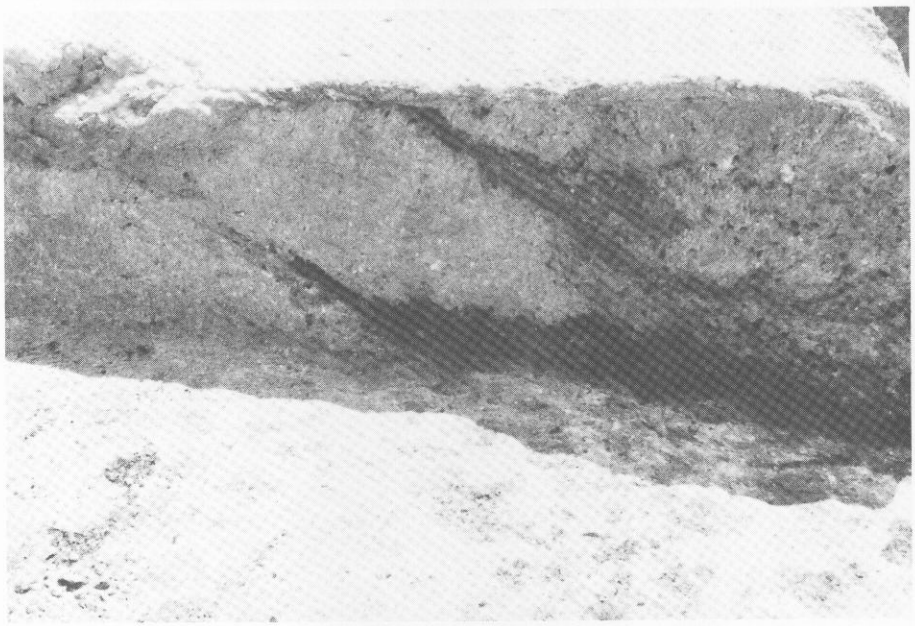
発掘後Ｂ窯の全貌(東から)



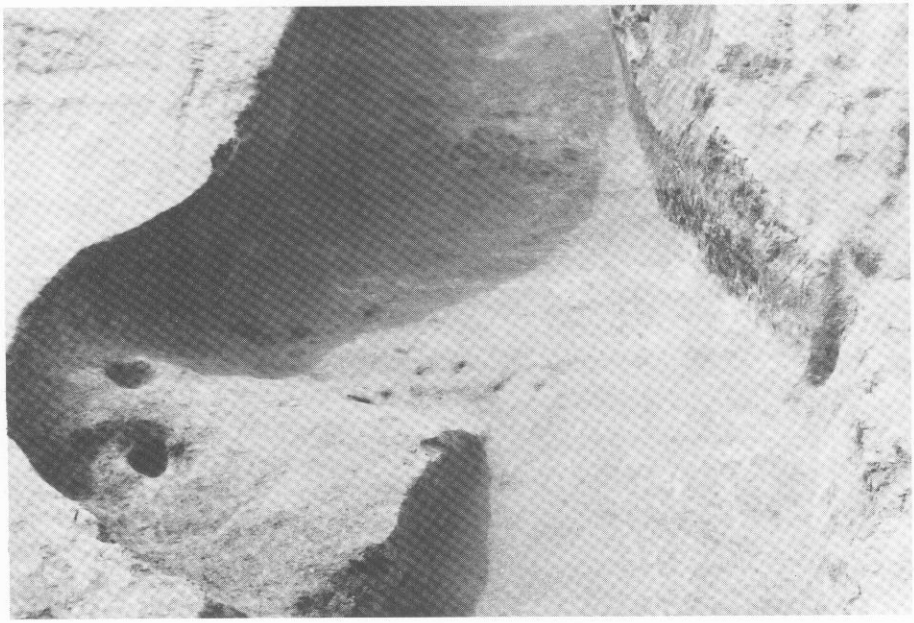
B窯全景(東から)



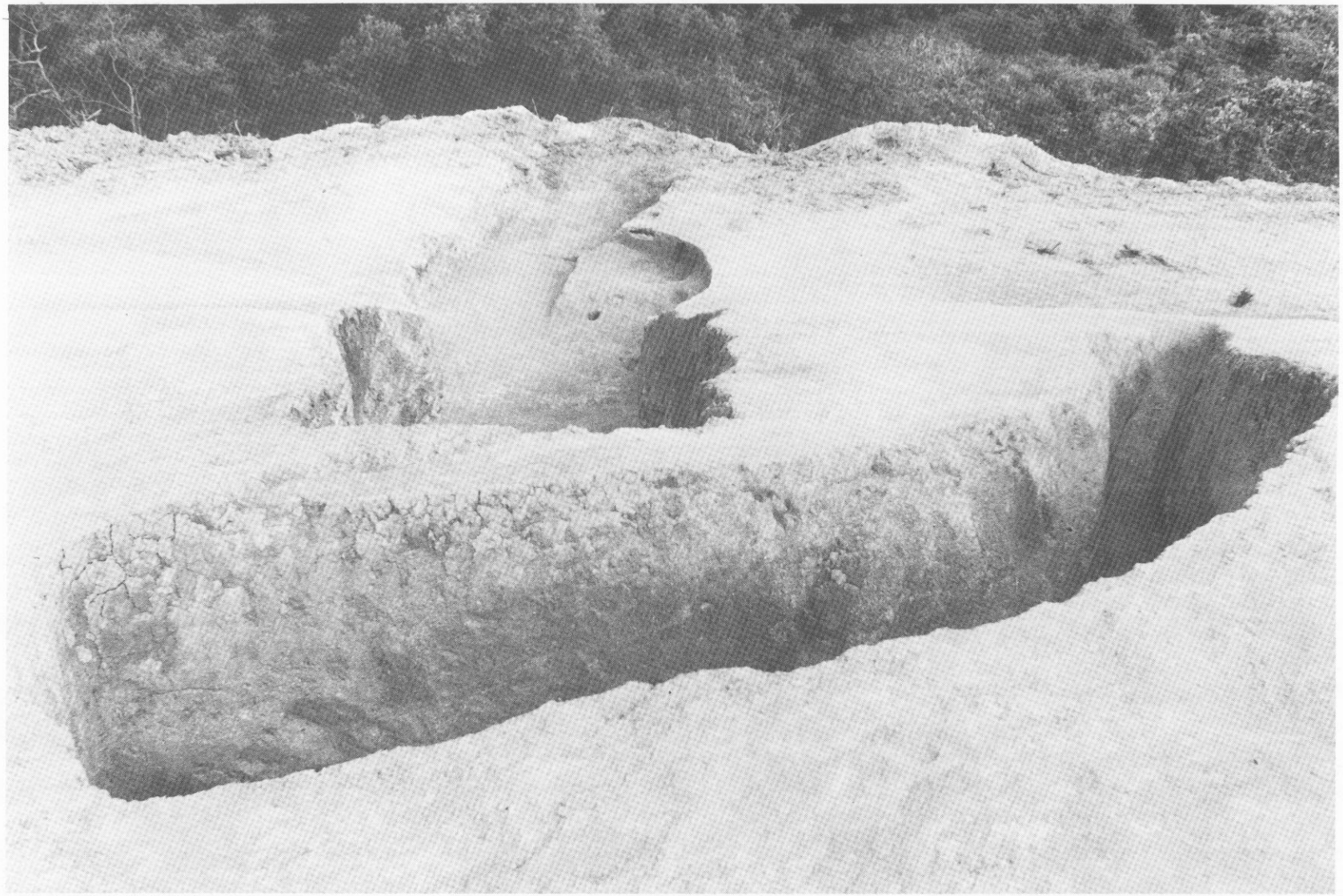
◀B窯　焚口部断面



◀B窯　焚口部断面



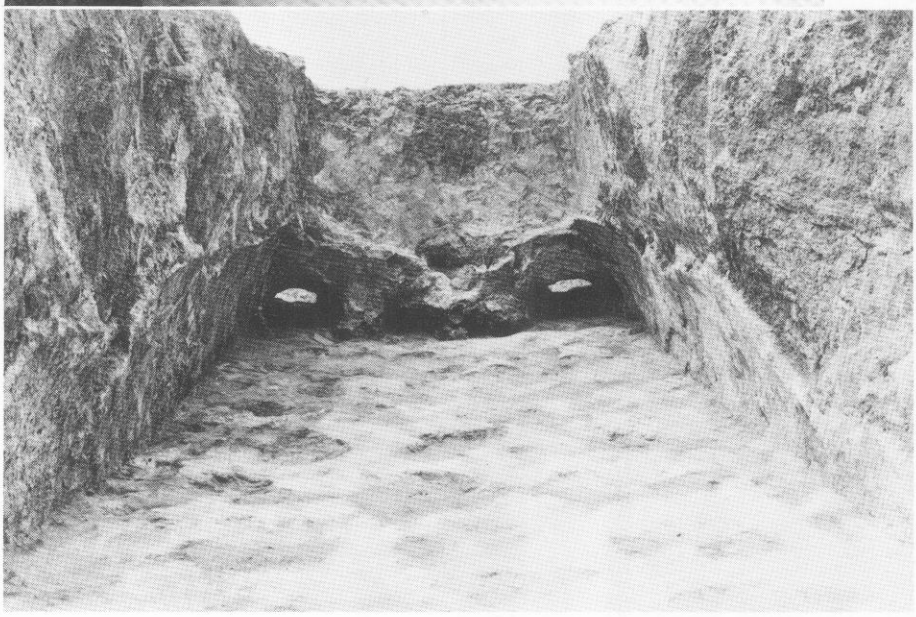
◀B窯　前庭部



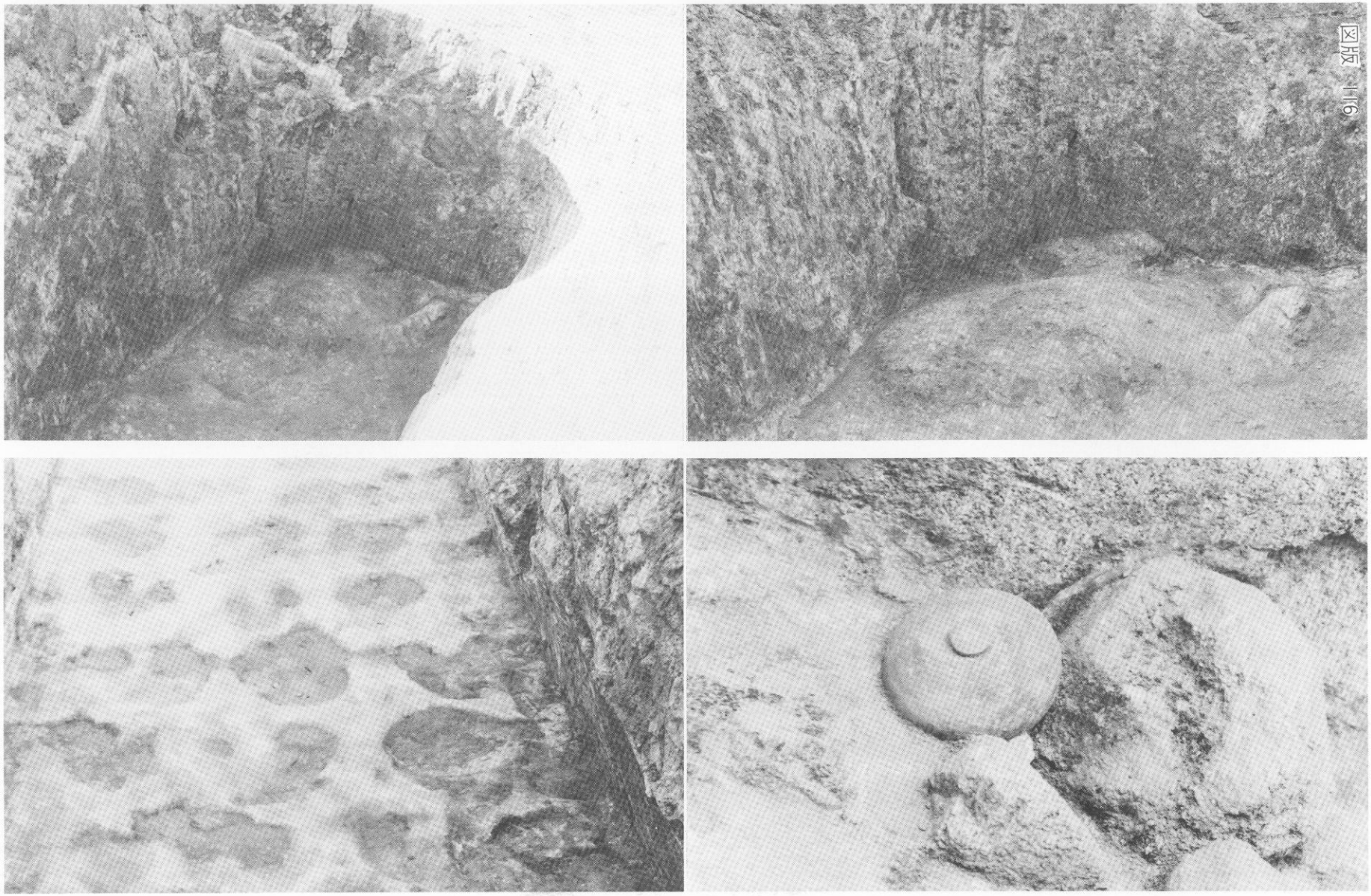
B窯の全貌(西から)



◀窯焼成室の状態



◀窯尻と煙出近景



（上）排水溝と壁面の工具痕
（下）窯床面の階段の状態と窯入れの状態



中通C窯伐採後の状態



C窯煙出の状態



C窯全景



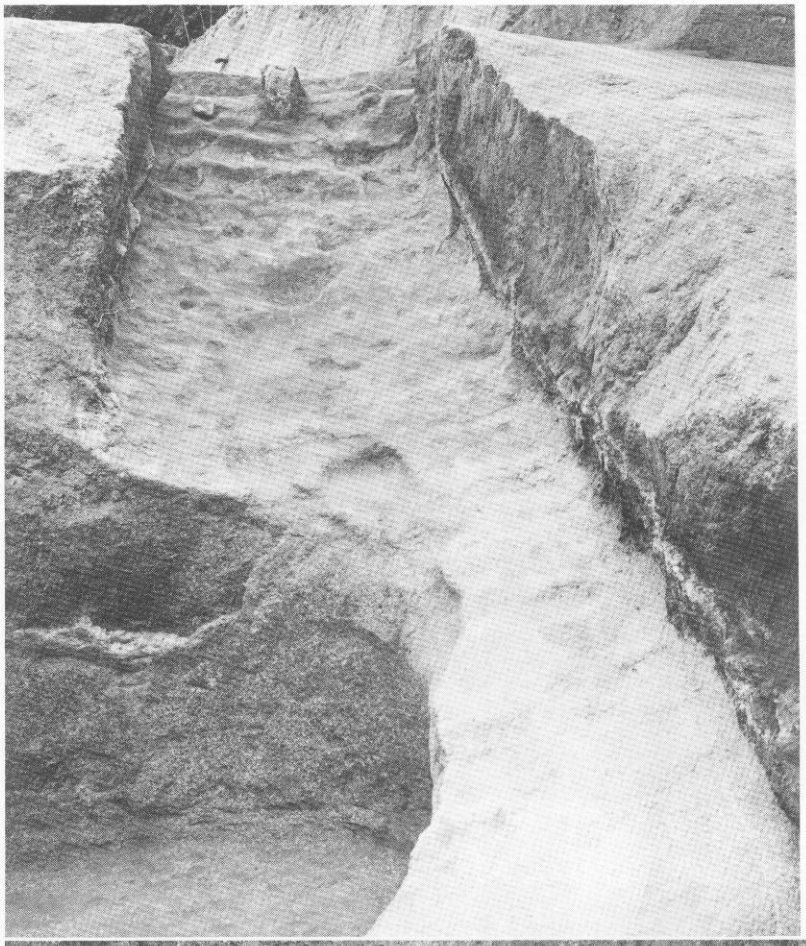
排水溝と煙出部状態



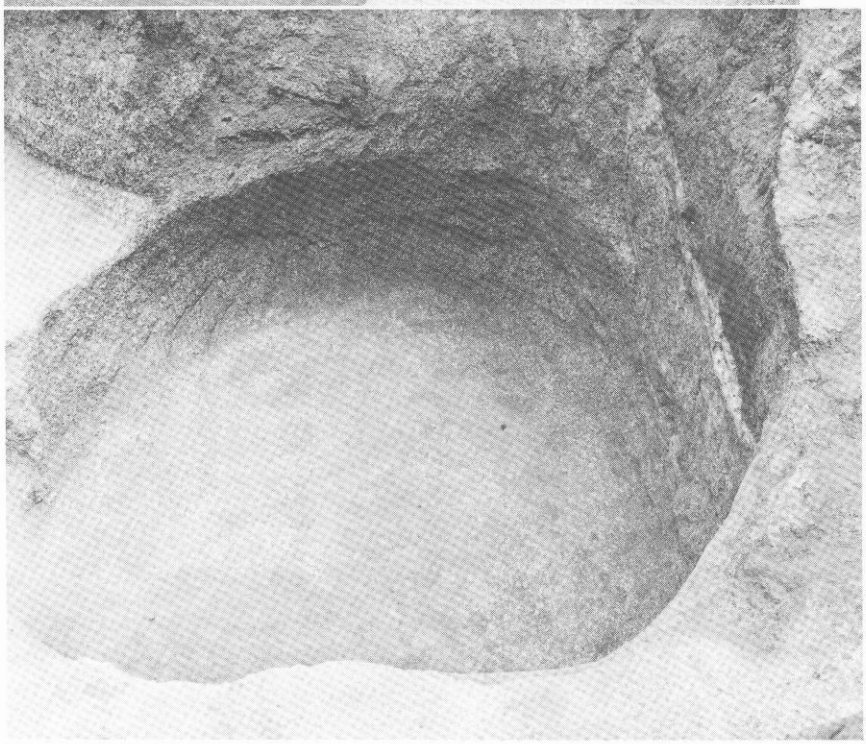
C 窯窯床階段



C 窯窯尻の状態



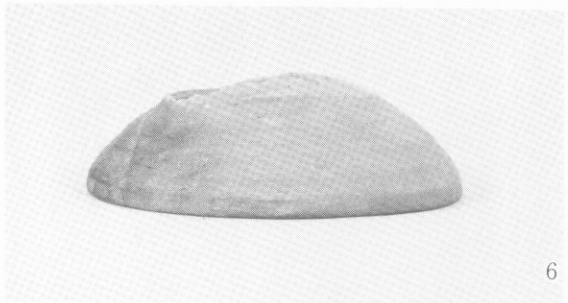
◀窯本体と竪穴状態



◀竪穴全景


1


3

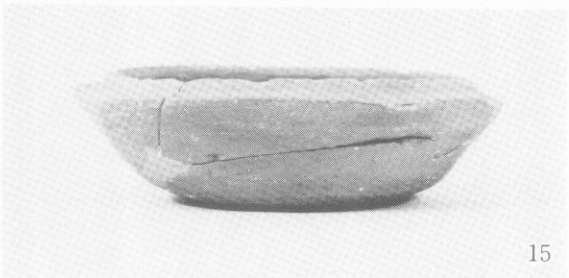

6


8


10


11


16


15


12


19

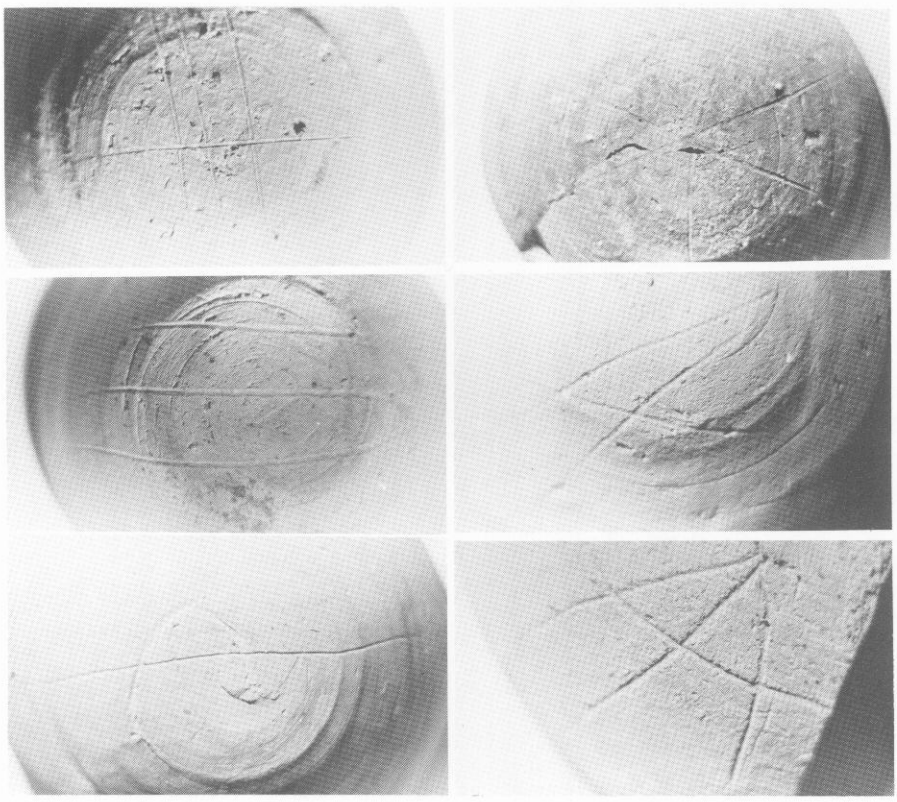

20


21

中通A－1窯出土遺物 ①(須恵器)



A－1窯出土遺物 ②(須恵器)

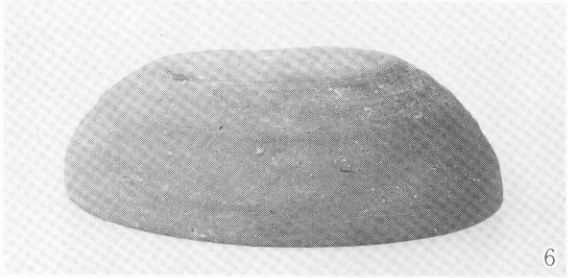


A－1窯出土ヘラ記号


1

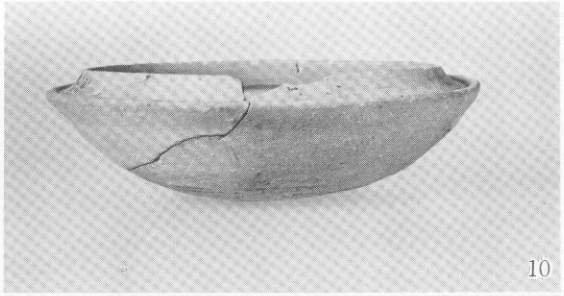

2

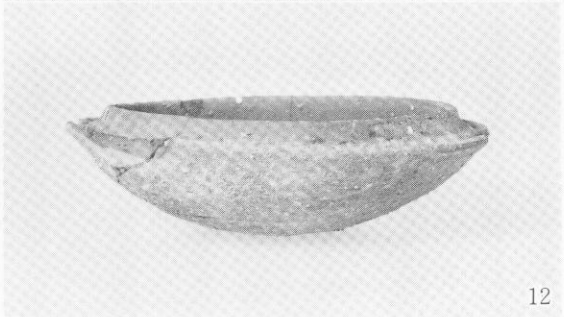

3


6


8

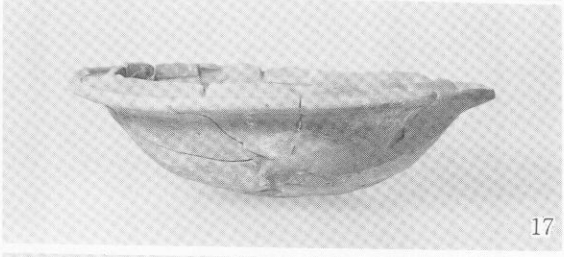

9

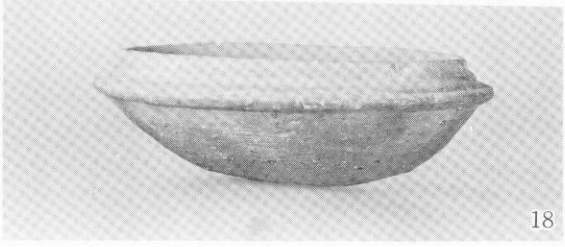

10


12

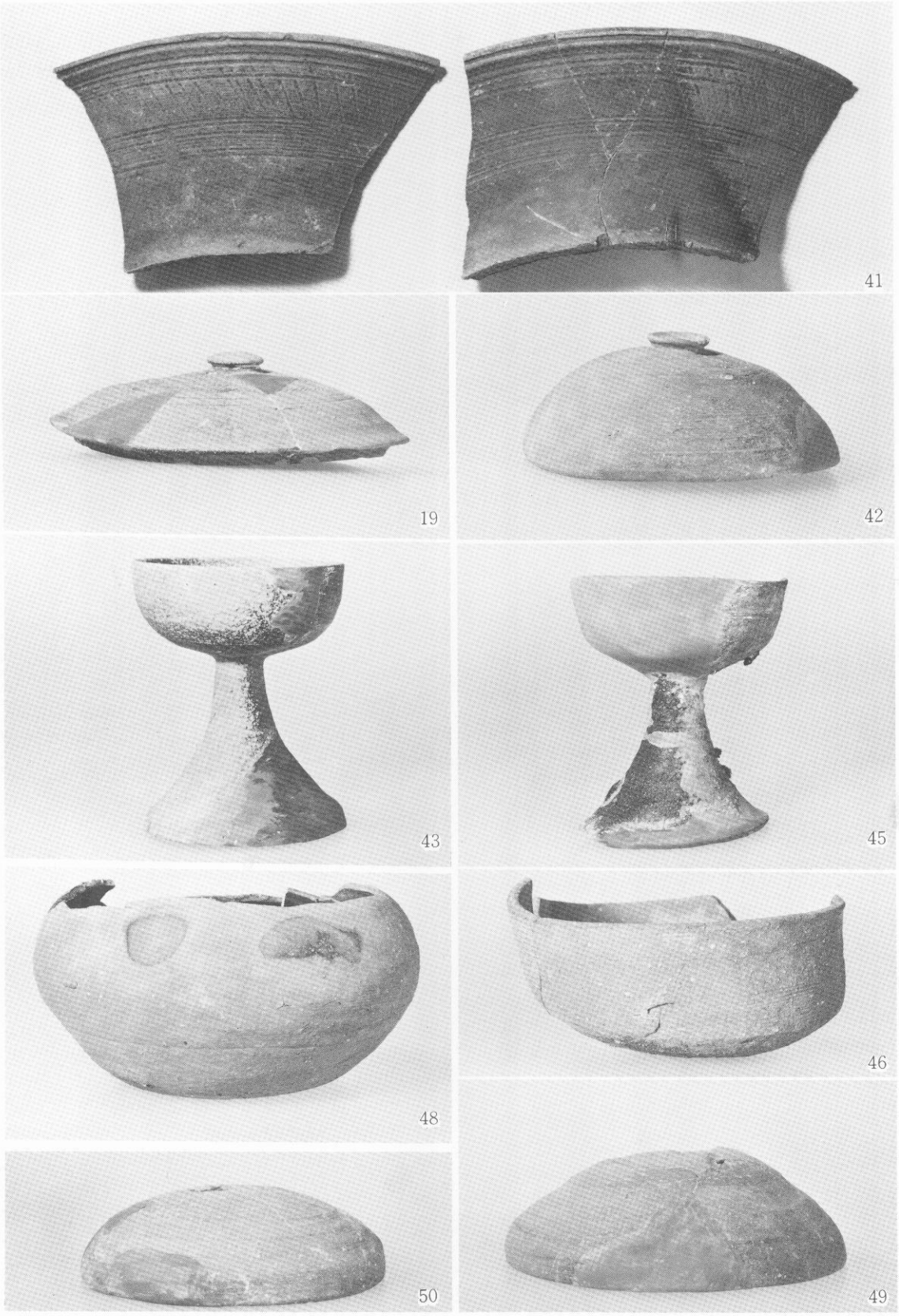

14


16

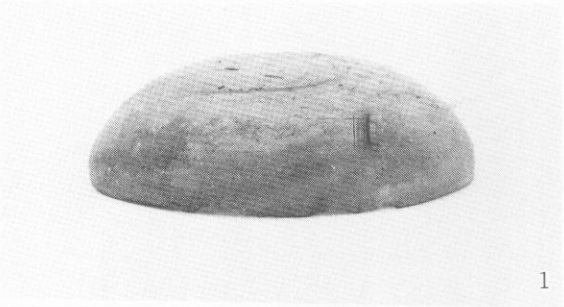

17

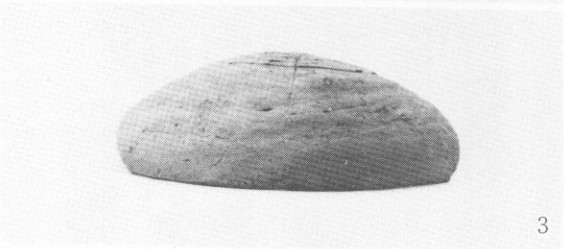

18

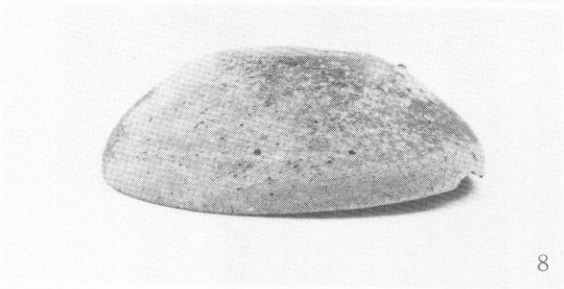
A－2竪出土遺物 ①(須恵器)



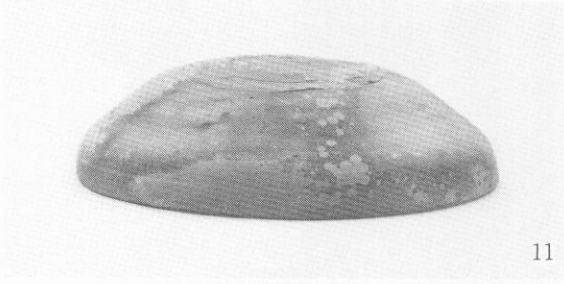
A－2窯出土遺物 ②(須恵器)

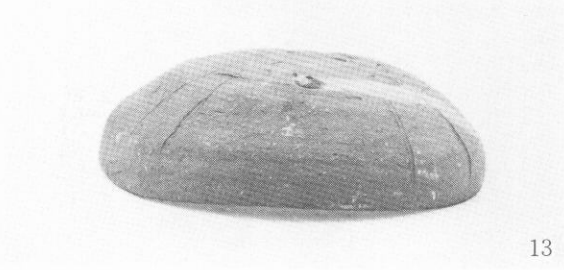

1


3


8

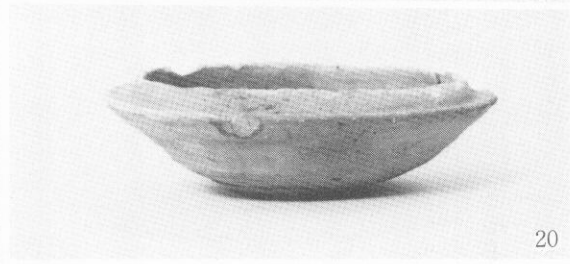

10


11


13

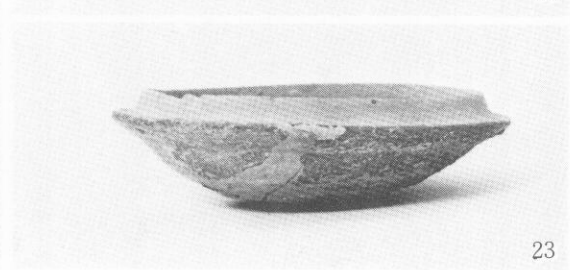

18


19

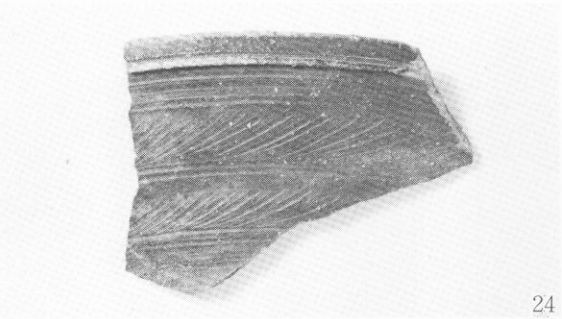

20

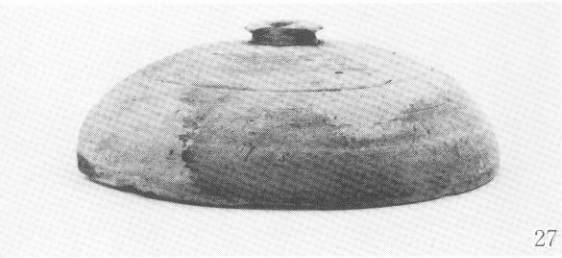

21

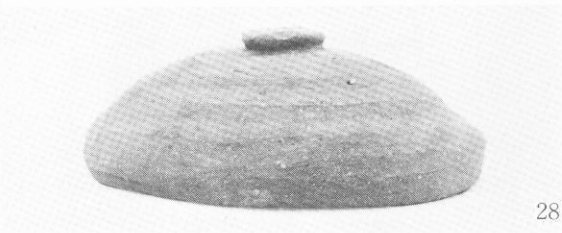

22


23

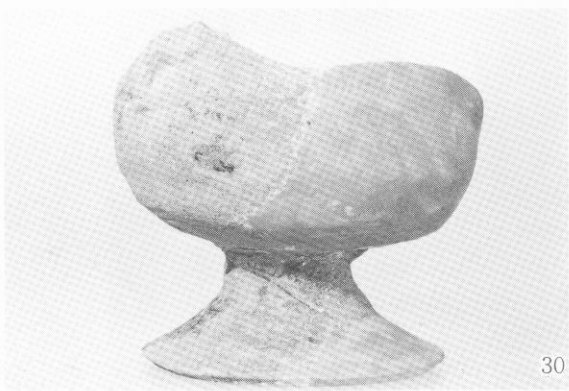
A群灰原出土遺物 ①(須恵器)


24


27


28


29

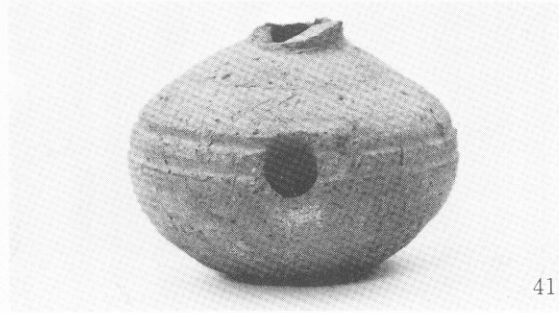

30


37

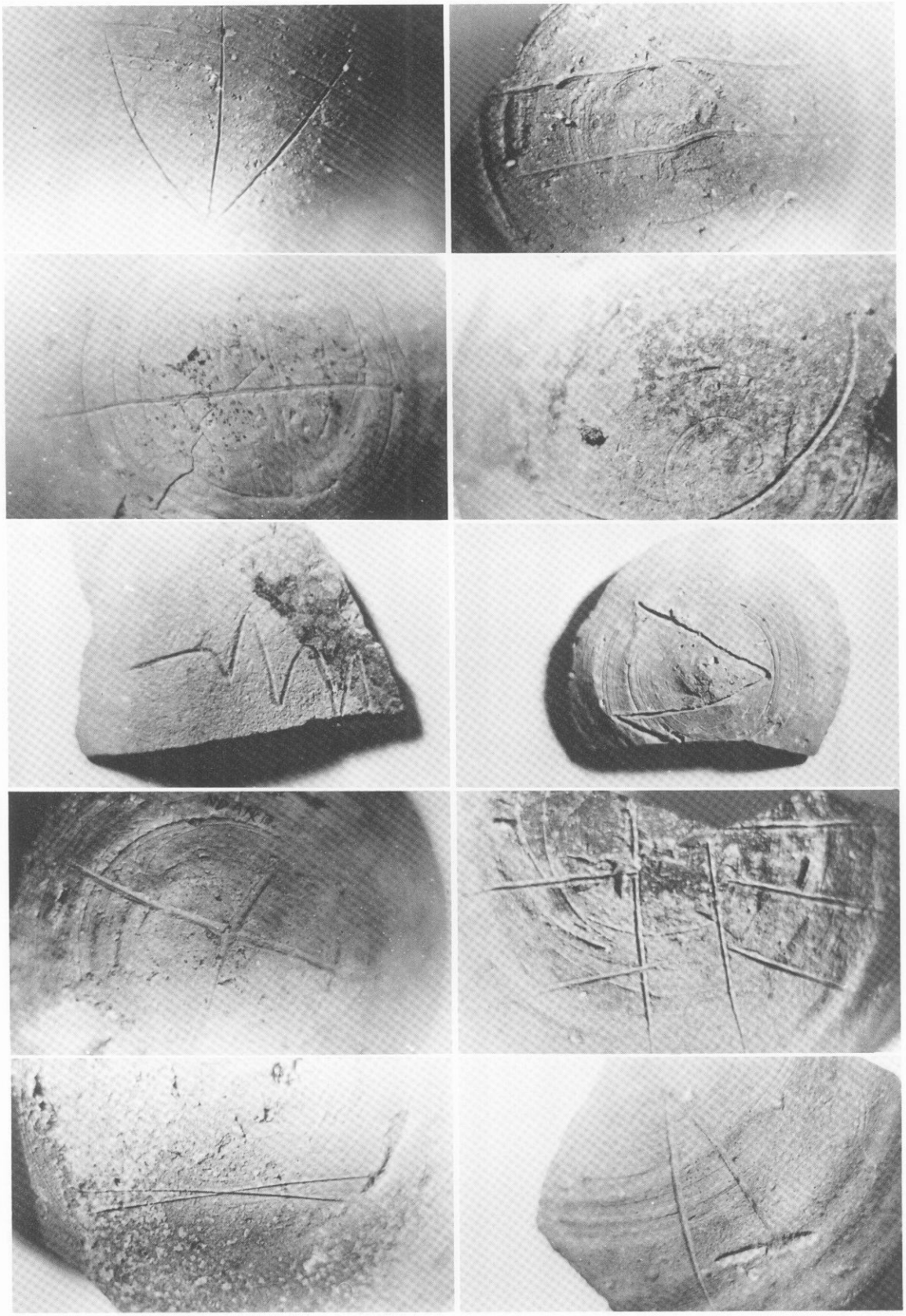

39


32

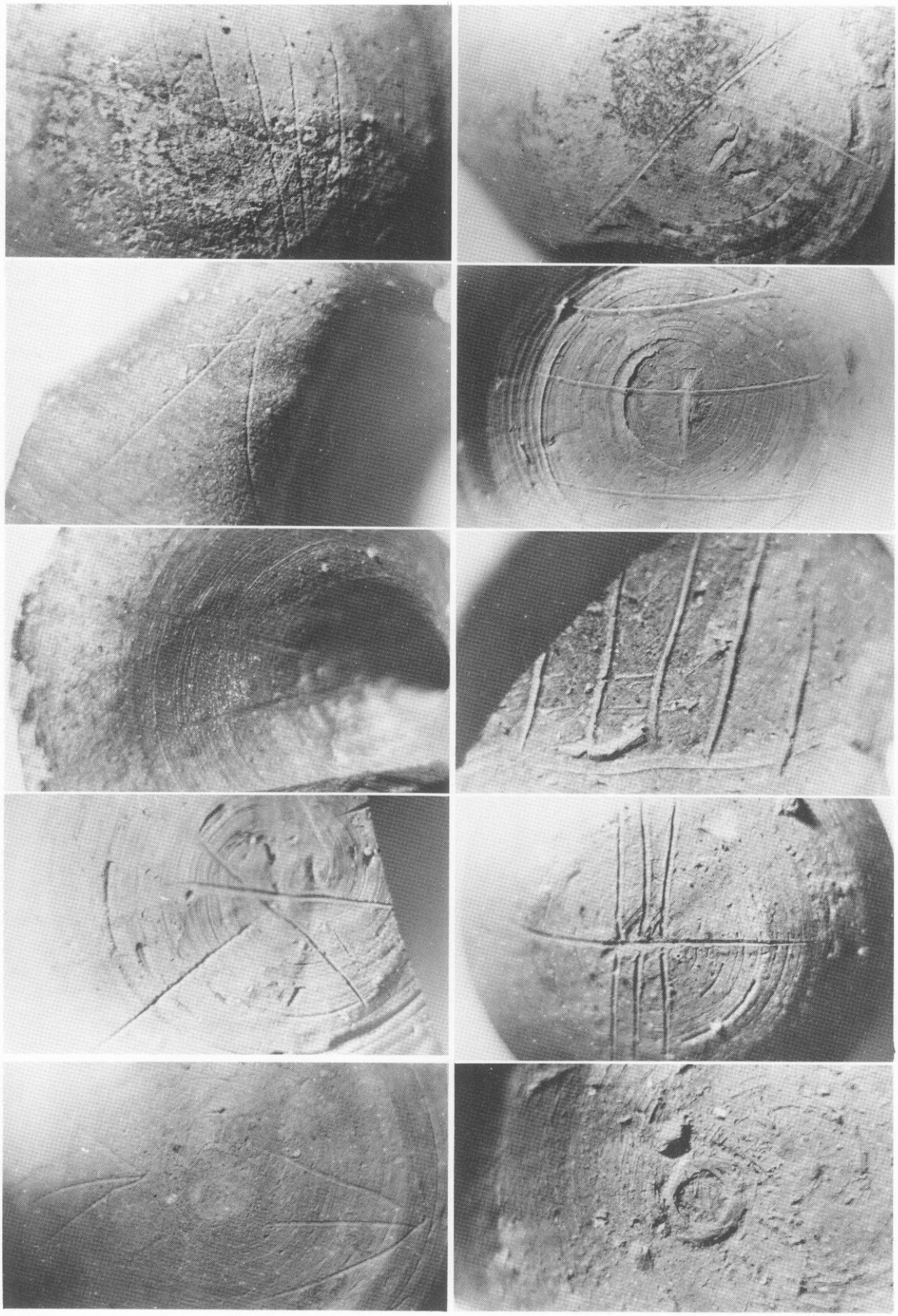

40


41

A群灰原出土遺物 ②(須恵器)



A群灰原出土遺物 ③(ヘラ記号)



A群灰原出土遺物 ④(ヘラ記号)


10


8

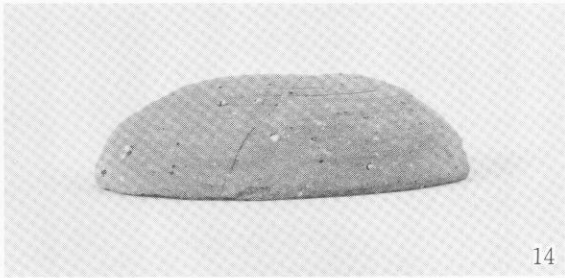

1


3


2


7


17


14


15

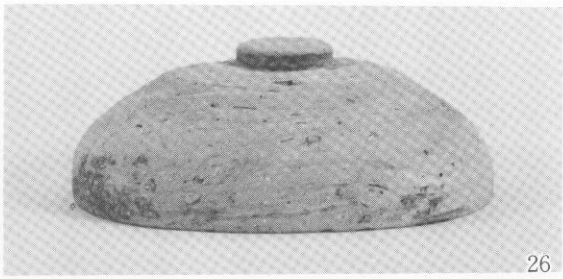

13

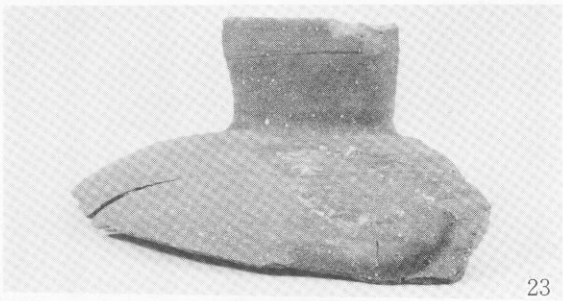

12


18

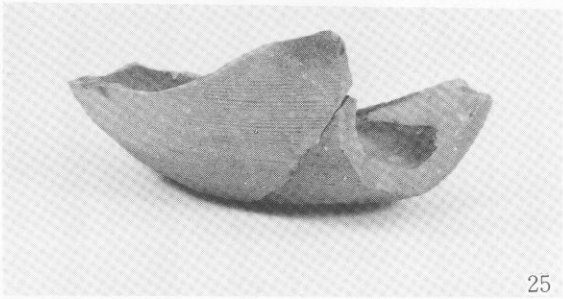
B窯出土遺物 ①(須恵器)

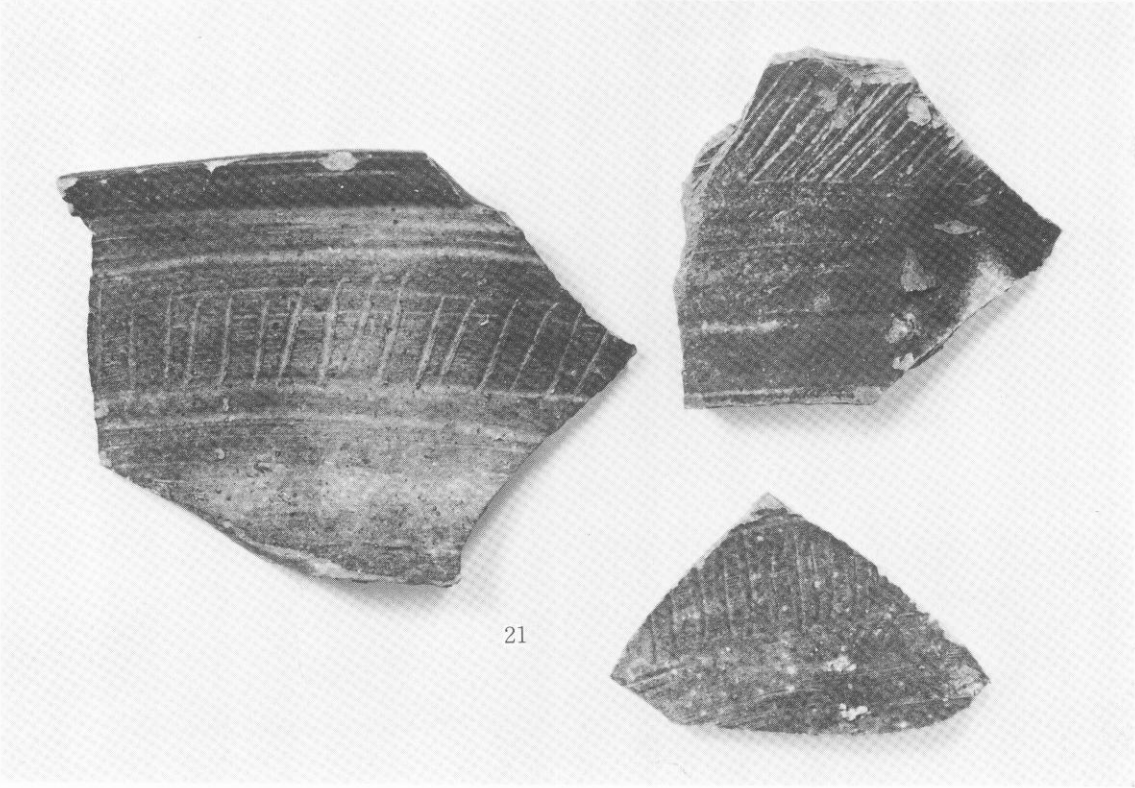

28


26

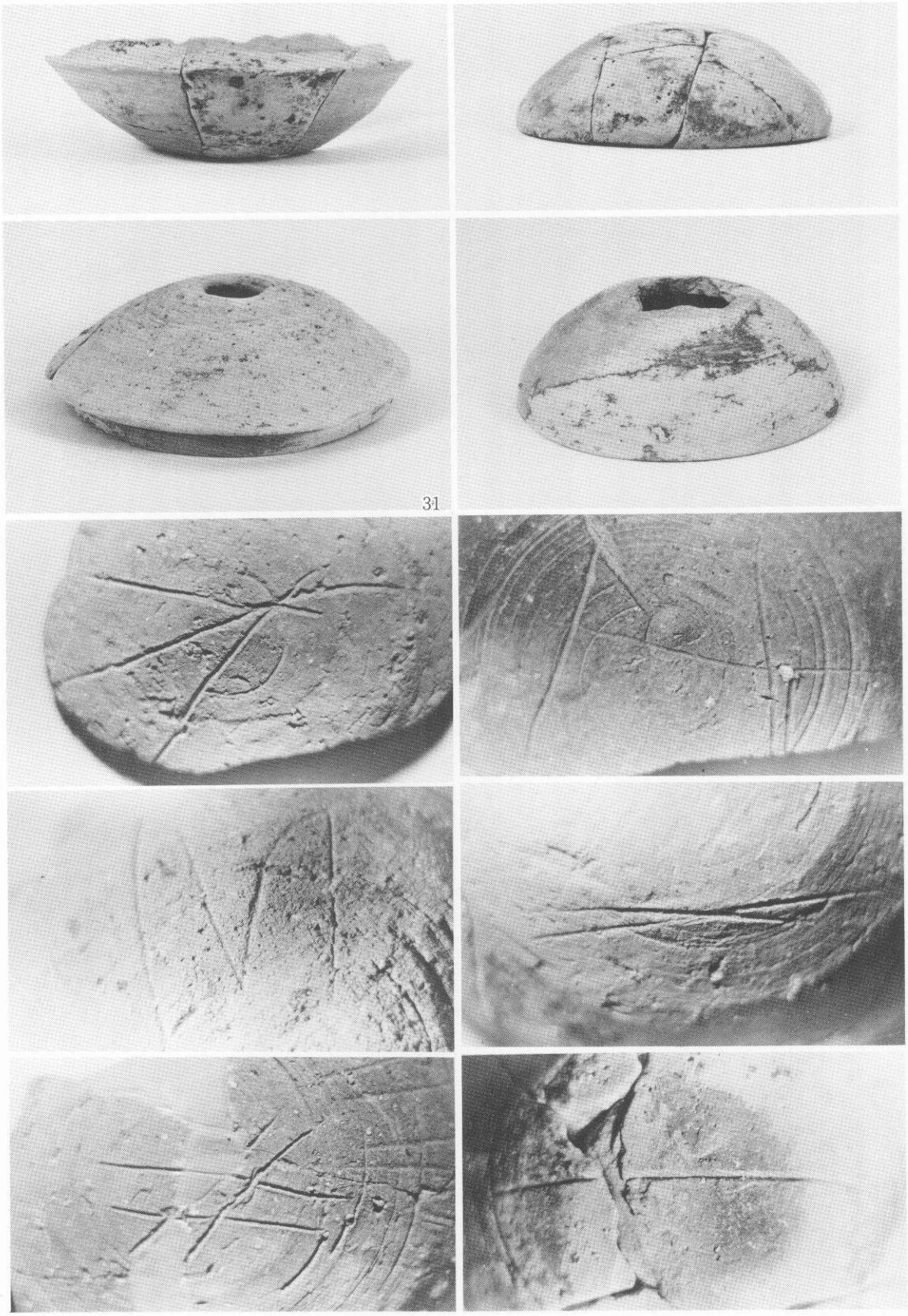

23


24


25


21

B窯出土遺物 ②(須恵器)



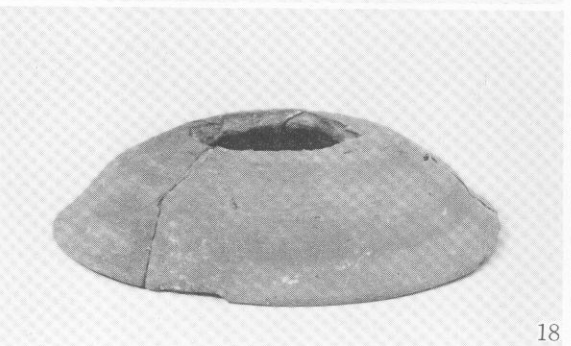
B窯出土遺物 ③(須恵器)及びヘラ記号

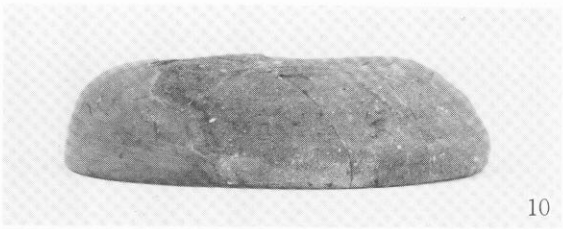

15

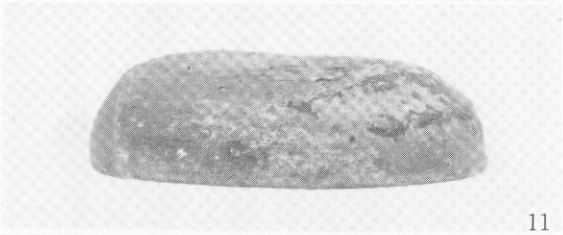

5

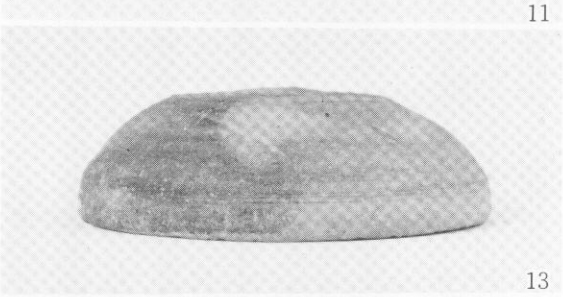

17


7


18


10


11


13


14

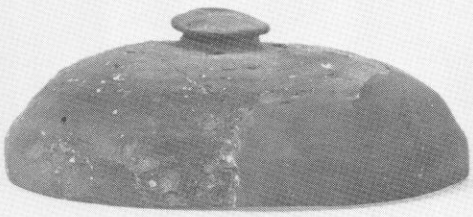

16


9

C窯出土遺物 ①(須恵器)


34

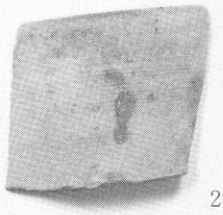

30

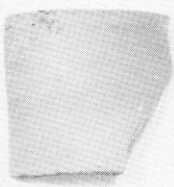

31

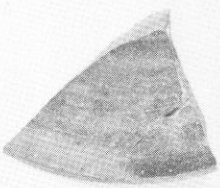

24


22

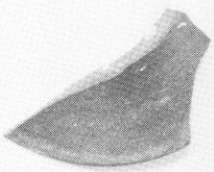


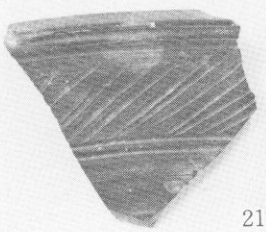

25


26


29

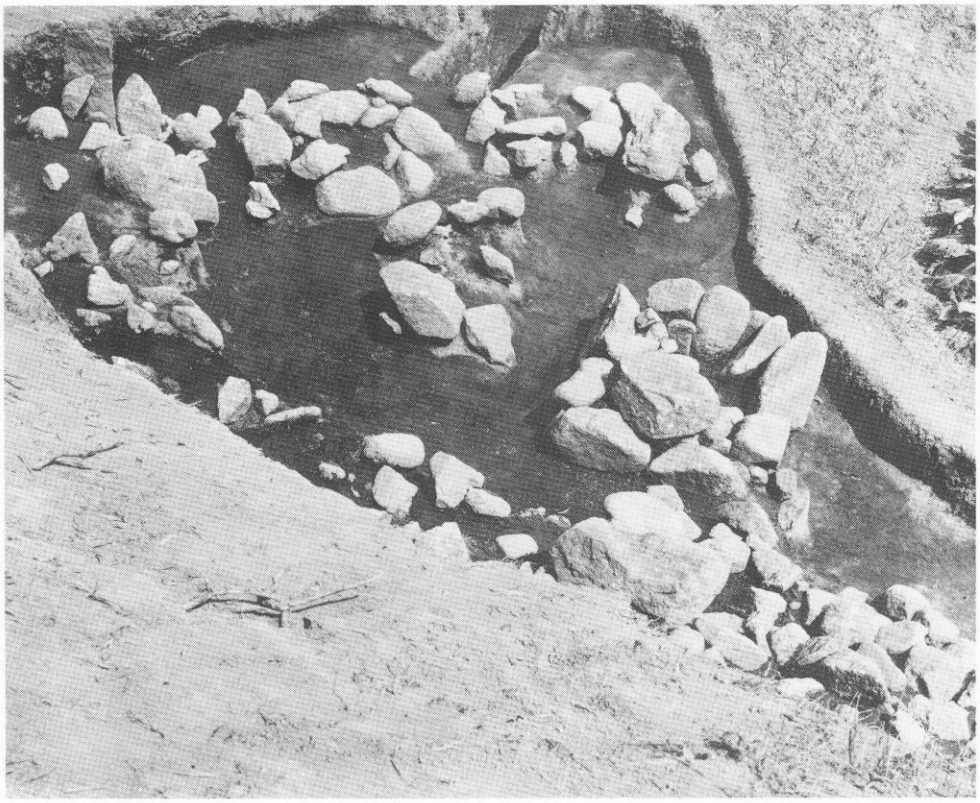

27


28


21


20

C窯出土遺物 ②(須恵器)



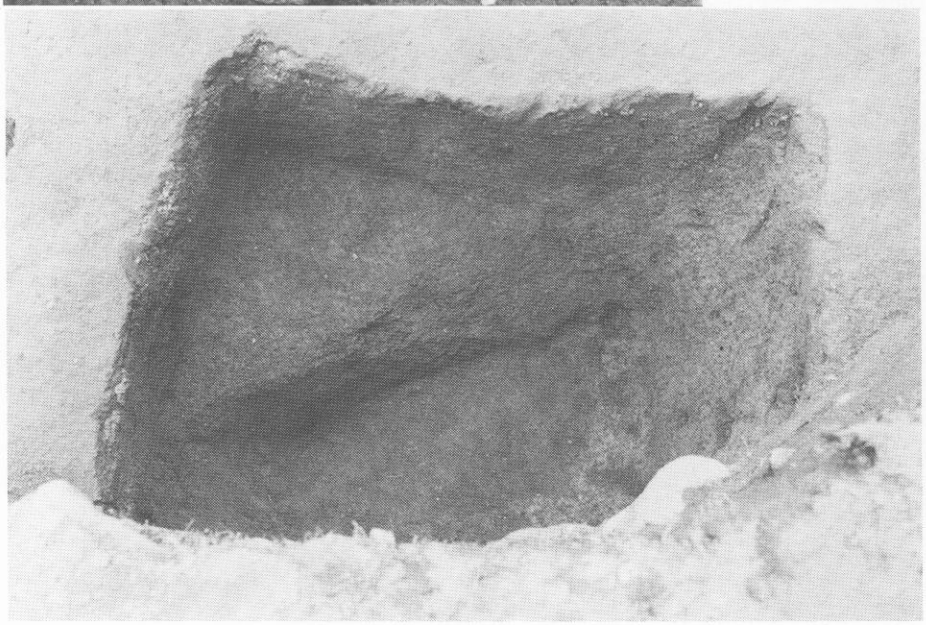
近世墓　石組全景



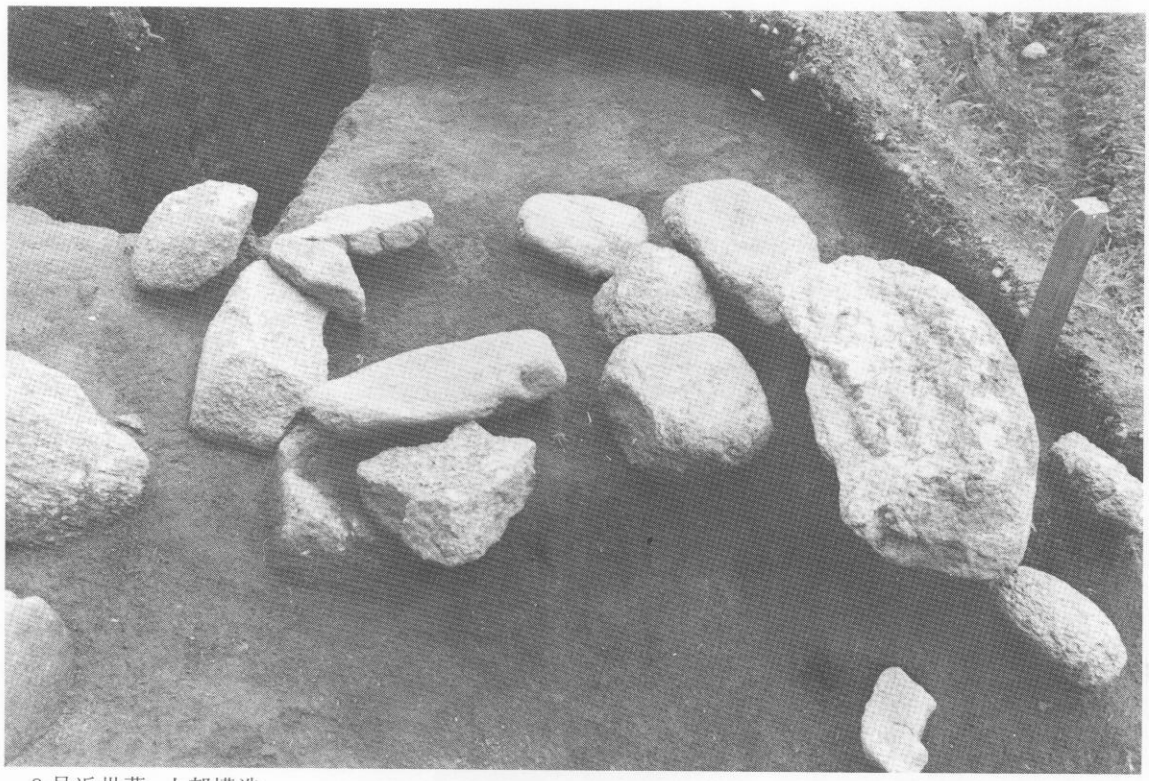
近世墓　墓坑状態(石組除去)



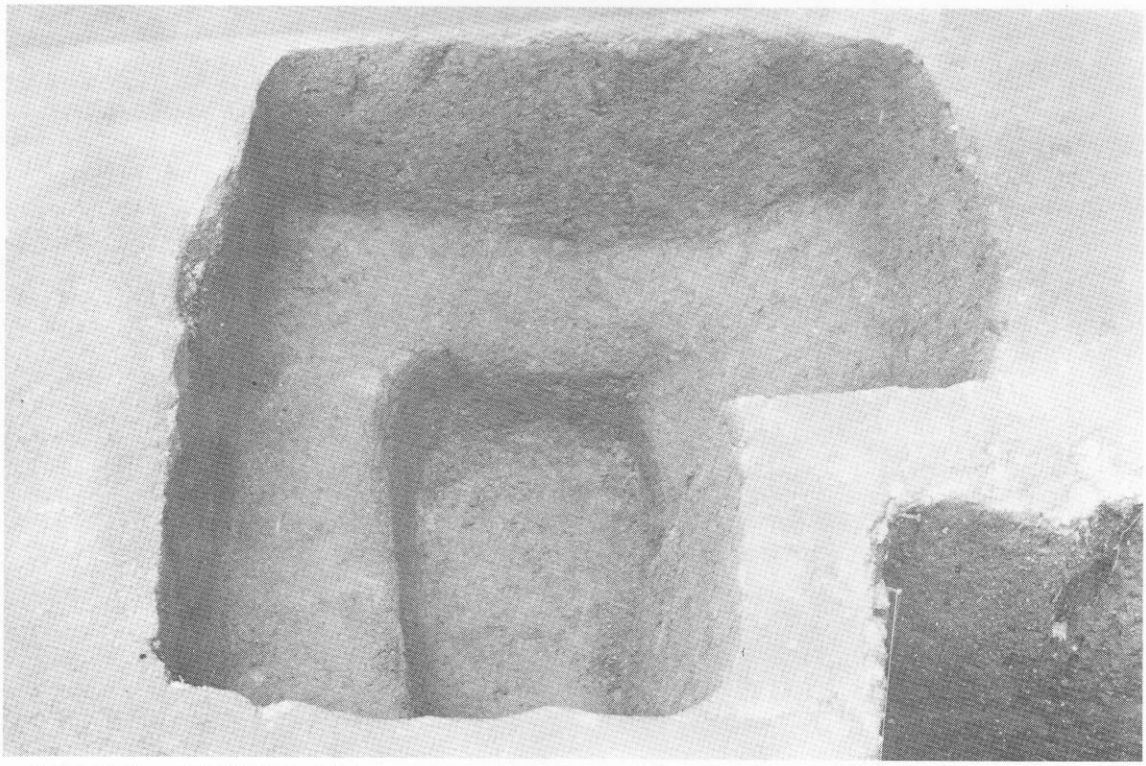
◀1号近世墓　上部構造
（墓標）



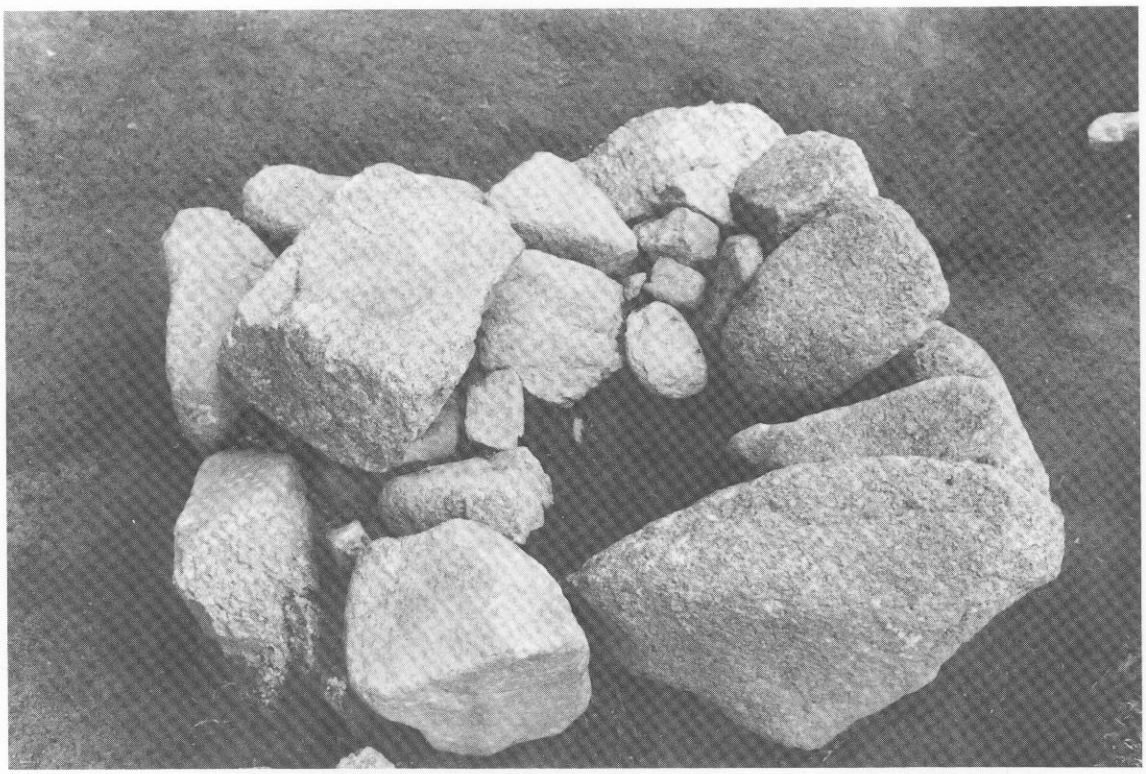
◀1号近世墓　下
部構造（土坑墓）



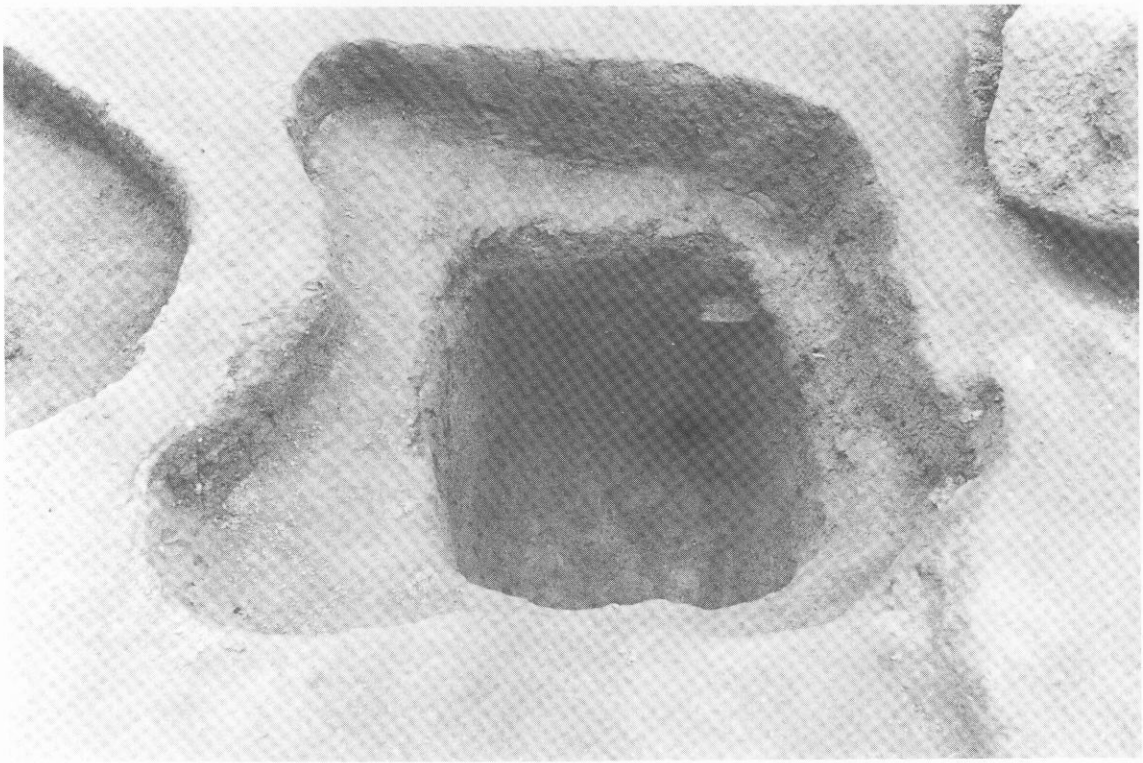
3号近世墓　上部構造



3号近世墓　下部構造(土坑墓)



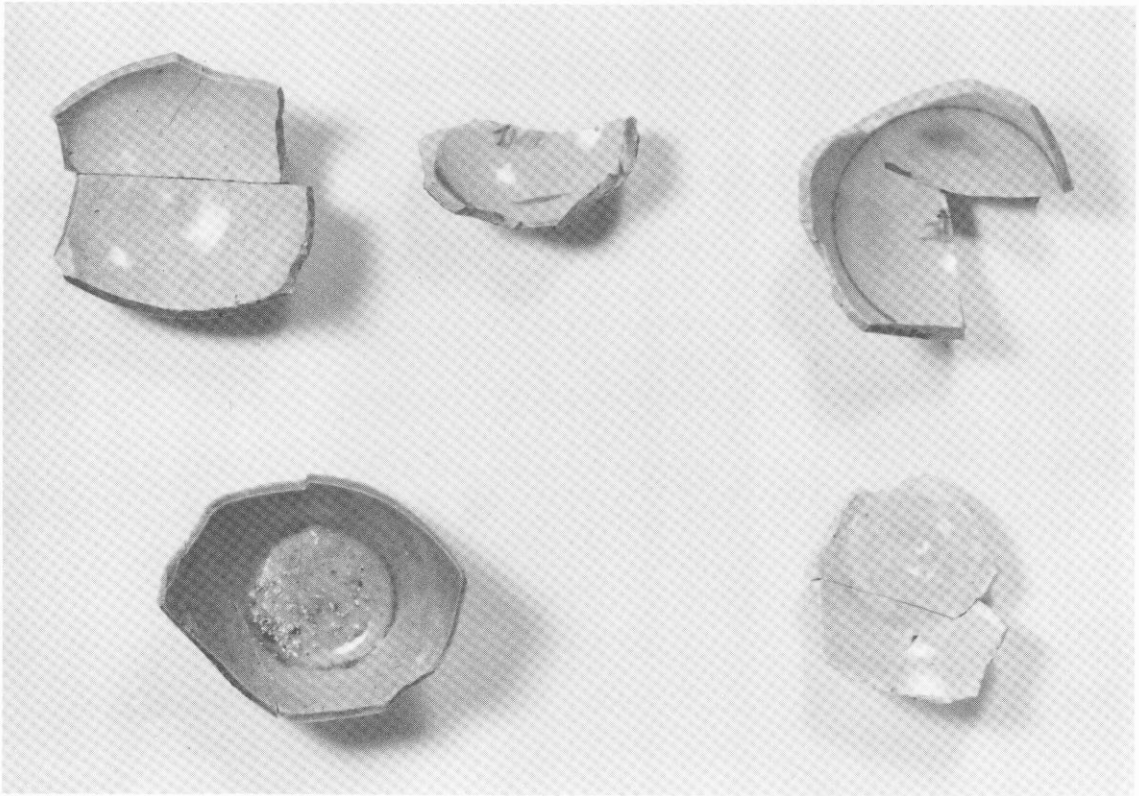
5号近世墓　上部構造



5号近世墓　下部構造(土坑墓)



近世墓周辺部出土遺物



近世墓周辺部出土遺物

3. 第3次発掘調査

（昭和54年度）

本文目次

1）はじめに……151

2）古墳群の調査……154

3）窯跡の調査……167

4）その他の遺構……177

5）小　結……178

1) はじめに

昭和54年８月、中通遺跡Ａ～Ｃ地点を調査中に、その南で、遺跡と連続する丘陵西斜面が伐採された。

かつては段々畑として開墾されていたが、最近は荒地となっていた。伐採された結果、中腹に古墳の石室と思われる石積みが露出した。また、周辺には須恵器の破片がかなり散乱しており、段々畑の崩壊面には一部灰層らしきものも観察できた。(註１)

地権者である福岡土地株式会社に連絡したところ、近々造成する予定との返事を受けたので、福岡土地株式会社と本市教育委員会は文化財の取り扱いについて協議することとなった。

その結果、調査費用を全額福岡土地株式会社が負担し、本市教育委員会が受託して発掘調査を実施することに決定した。

遺跡名については、本地区の小字名はハセムシであるが、中通遺跡と一連の遺跡であるので地点名を加えただけで、中通遺跡Ｄ地点と称することにした。

調査に際しては福岡土地株式会社、牛頸区長森山鉄男氏ら地元各位の協力を得て順調に進めることができた。

報告書作成に関しては、副島邦弘氏を始めとする県文化課技師諸氏、遺物整理については同課岩瀬正信氏に多くの点でご指導を受けた。厚く感謝の意を表したい。

また、県文化財保護指導委員である前田軍治氏に指導、助言を受けた。

調査は昭和54年11月12日より同年12月24日まで行なった。

調査関係者は以下の通りである。

大野城市教育委員会	教育長	井上幸一郎
同	教育部長	古賀昭三
同	社会教育課長	井原信一
同	社会教育係長	赤星健彦
同	社会教育文化財担当	後藤秀規
同社会教育課埋蔵文化財発掘調査技師		舟山良一
補助員		高田一弘

それでは日誌をもって、現地作業をふりかえってみたい。

11月12日　機械で表土はぎ開始

11月15日　作業員入り、表土排除後の残土処理、早くも窯らしきものが検出される。当初から判明していた古墳の北側で新たに古墳を発見。

11月16日　段々畑の第一段目（最上段）地山出し終える。窯の焚口部と思われる部分を検出。畑三段目の灰原残存部を土捨て場確保のため掘り上げる。

11月17日　当初から判明していた古墳を S2 号墳、新たに発見された古墳をS3 号墳とする。S3 号墳の墓道の一部を検出。

11月19日　S3 号墳、羨道の崩れた大石 2 つ金てこ等で引き出し、石室を掘り始める。石室内は天井近くが空間になっていただけで流入土が多い。

11月20日　窯掘り始める。S3 号墳は床面近くまで掘り進む。床近くまで窯壁土片と土器片が流入している。遺物はすべて抜かれているもよう。

11月21日　高田氏来跡。地形測量杭を打ってもらう。S3 号墳床面清掃。

11月22日　窯最終床面を出す。S3 号墳墓道断面写真撮影、実測。

11月24日　郷土史資料展のため作業休み

11月25日　同　上

11月26日　同　上。土器洗い。

11月27日　S3 号墳主軸と直交するトレンチを入れる。灰層が認められ、窯よりも古墳が新しく作られたことが判明。窯は主軸南半分最終床面写真をとり、下層を掘り始める。

11月28日　S3 号墳 No. 1 トレンチ清掃、写真撮影。羨道は掘り終える。

11月29日　S3 号墳 No. 1 トレンチ断面図作製。窯は第一次床面と思っていた床の下層にもう一面あることが判明。

11月30日　S3 号墳閉塞写真撮影。羨道・玄門近くで鉄鏃2～3本出土。窯は主軸南半掘り方終了。焚口直下にトレンチを入れる。福岡県文化課課長補佐松岡史氏来跡。ご指導を受ける。

12月 1 日　S3 号墳石室内清掃、周溝検出作業、窯主軸断面写真撮影。実測。

12月 3 日　S3 号墳閉塞割り付け、実測開始。周溝出し終える。S2 号墳掘り始める。窯主軸北半分最終床面写真撮影。

12月 4 日　土器洗い。

12月 5 日　雨で作業中止

12月 6 日　県文化財保護指導委員前田軍治氏来跡。ご指導を受ける。

12月 7 日　S2 号墳ほぼ石室を出し終える。割りつけて墳丘トレンチを設定、掘り始める。石室床近くよりガラス玉出土。窯第 2 次床面写真撮影。

12月 8 日　S3 号墳閉塞実測、窯写真撮影。

12月10日　きょうから高田氏来援。S2 号墳閉塞実測、S3 号墳閉塞実測終了。窯すべて掘りあげて写真撮影。

12月11日　S2号墳閉塞実測終了。平面図終了。S3号墳NO2トレンチ拡張。NO3トレンチ掘り始める。窯跡割りつけ。県文化課技師副島邦弘、池辺元明氏来跡。

12月12日　S2・3号墳全体写真撮影のため清掃。撮影。あすの気球による写真撮影準備。S2・S3号墳割り付け。

12月13日　気球写真撮影のための清掃。午後撮影。発掘区北側遺構確認のため斜面を削る。社会教育課長来跡。

12月14日　斜面削り終える。遺構の検出はなかった。

12月15日　土器洗い。

12月17日　古墳実測、地形実測。

12月24日　調査終了。

＜註1＞　本地区の窯跡については、大野城市遺跡分布図（昭和48年3月）には記載されてないが、県文化課技師、前田軍治氏らの間では知られていた。



第122図　発掘風景



第123図　発掘風景



第124図　発掘風景

2) 古墳群の調査

1. 古墳の配列

標高64.5mから67mの牛頸川を見おろす丘陵西斜面の裾部に数メートルの間隔を置いて3基並ぶ。第一次、第二次調査で調査された14基からなるN支群に対してS支群とした。南よりS1～S3号墳とする。数の上では少ないが、配置のし方はN支群と質的な違いはない。

3基の古墳のうち、今回調査したのはS2、S3号墳の2基である。S1号墳は昭和50年福岡県文化課によって緊急調査されたものである。

3基とも墳丘を中心にかなりの改変を受けていた。

2. 中通S1号墳の調査

立地・墳丘

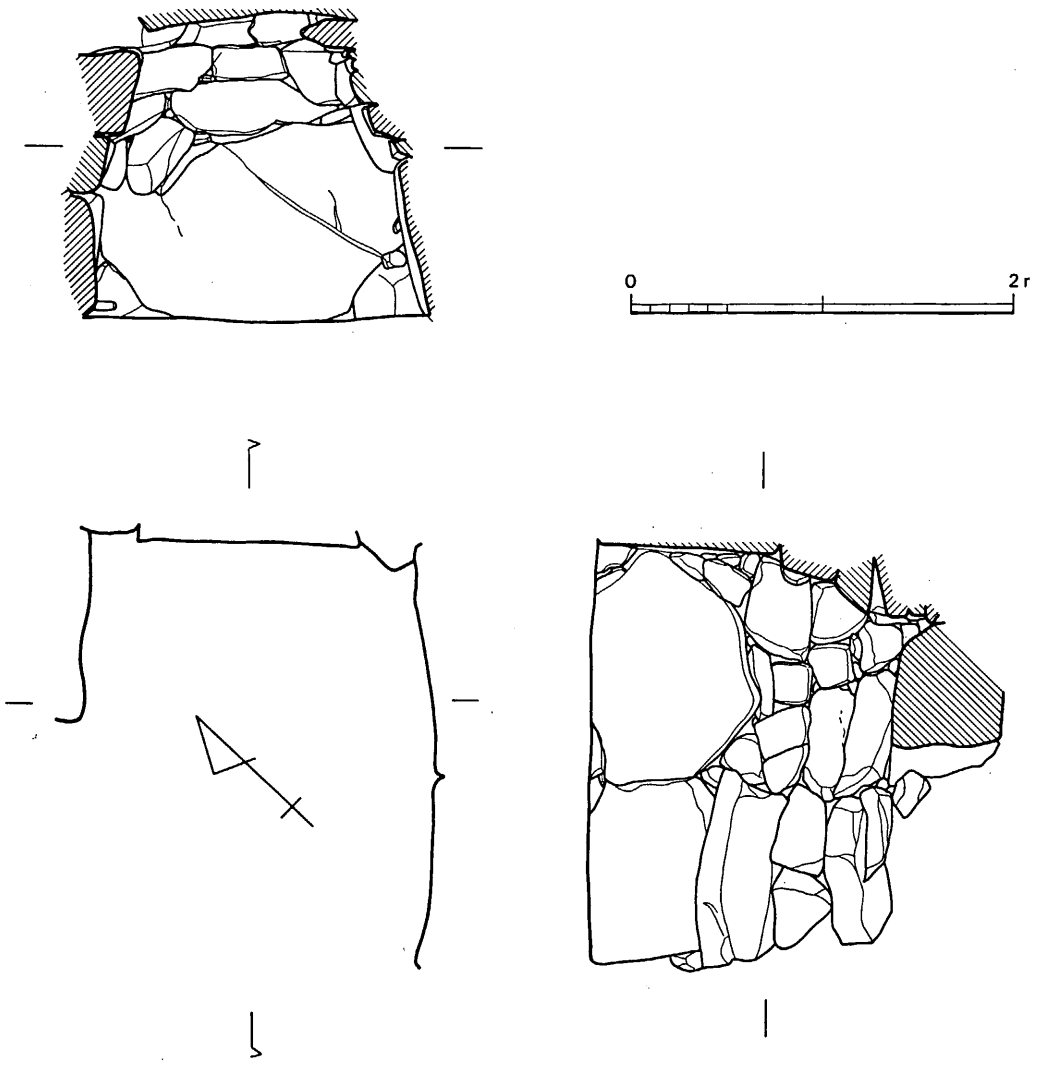
中通遺跡群の所在する丘陸の南側端部西斜面に古墳は立地しており、牛頸川の方向に開口する。現況は住宅の庭となっており、墳丘の規模、形態は不明である。

石室

主軸はN—44°—Eをとり、南東方向に開口する横穴式石室であるが、前面部は道路となっていて調査不能であるため、単室、複室の区別はつかない。石室の形態は長方形を呈しており、規模は幅11.8m、現存長2.2mを測る。奥壁は腰石として、高さ約1mの大石を一個用い、上方に3段積石する。腰石底面から天井部までの高さは1.6mを測るが、床面を復元すると、これから10cmを引いた数値となる。右側壁は腰石として高さ80cm～90cmの石材を2個用いており、上方に3段横積みしている。奥壁、両側壁とも持ち送りしている。天井石は2個の石材を架構しており、残存する天井石は厚さ55cm程のものである。石材はいづれも花崗岩を用いている。床面は攪乱されているが敷石が施された形跡は見られない。前述した如く前面部は調査不能なため、羨道部、墓道部などについてはすべて不明である。

出土遺物

石室内からは古墳に伴う遺物の出土は皆無であるが、床面から30～40cm上面で人骨が検出された。この人骨は中世以後に石室内に埋置されたものと思われる。

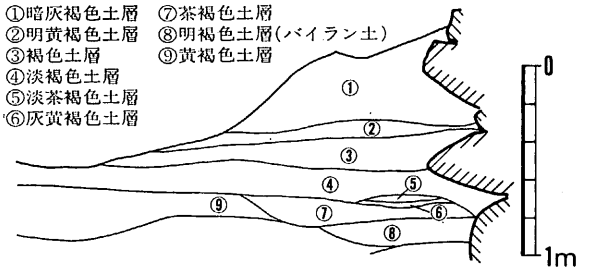


第125図　中通Ｓ１号墳石室実測図（1/40）

小　結

古墳の築造年代は遺物がないため定かではないが、石室の形態と隣接する他の古墳から６世紀末～７世紀初頭の年代が比定される。

（川述 昭人）



第126図　中通Ｓ１号墳　墳丘断面図（1/40）

3. 中通Ｓ２号墳の調査

Ｓ1号墳の北約25m、標高66.8mに位置し、横穴式石室を有する円墳である。

墳　丘

開墾のため西側墳丘はほとんどなく、石室の石が露出した状態となっていた。

盛土に先行して、墳丘範囲設定のため裾部を溝状に掘っている。掘削は地山面まで及んでいる。幅は約20～40cmで、深さ約20cmである。

墳丘規模は、開墾のために正確に把むことは難しい。おおよそ径が６mの小規模な円墳であると思われる。高さは明らかにすることができない。

墳丘盛土中には須恵器を含んだ灰層が認められた。後述するＤ－１号窯のものと考えられる。灰層出土の遺物は古墳築造上限を知る手がかりとなる。

石　室

おおよそ南に開口する（主軸N6°E）横穴式石室であるが、天井石を含む石室上部、墓道左壁が失われている。

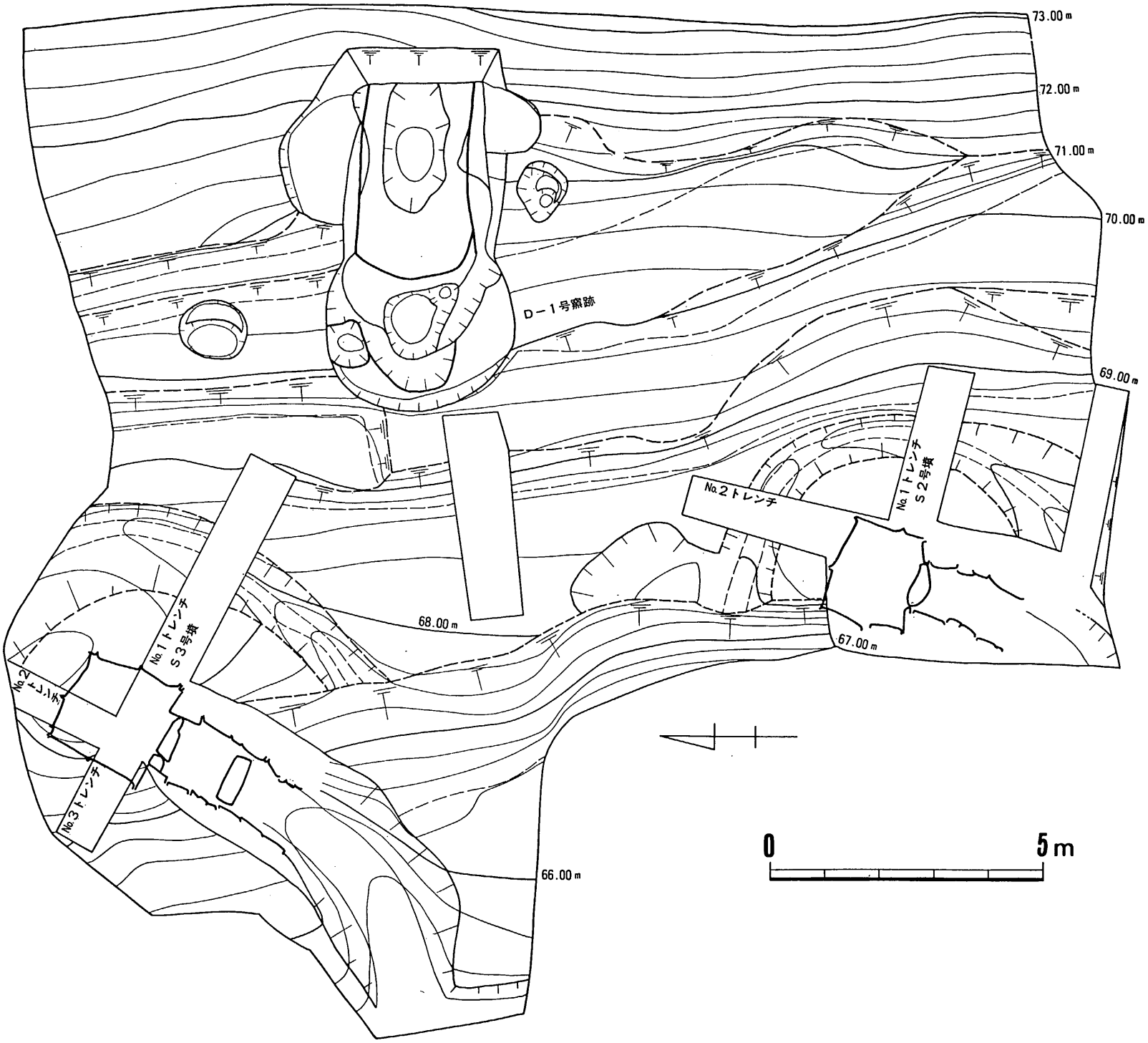
その労力も考慮してのことであろうが、石室は斜面とほぼ平行して作られている。従って墓壙も山側は深く掘られ、その深さは約1.4mである。

プランは単室形態を示すが、玄門前方側壁の積み方を見れば単純な単室構造ではないことがわかる。即ち、右袖から１m前方に80×80cmの大石が据えてあり、この間の石積みは大石前方の側壁よりていねいにしてある。閉塞はこの大石の玄門側縁辺部で行なわれていた。これらのことは本石室が複室を意識していることを示すものと考えられる。後述するＳ3号墳の場合は、Ｓ2号墳の上記の特徴に加えて框石が二つあって、更にそのことが明白である。従って、玄門と大石間を「前室」としておく。

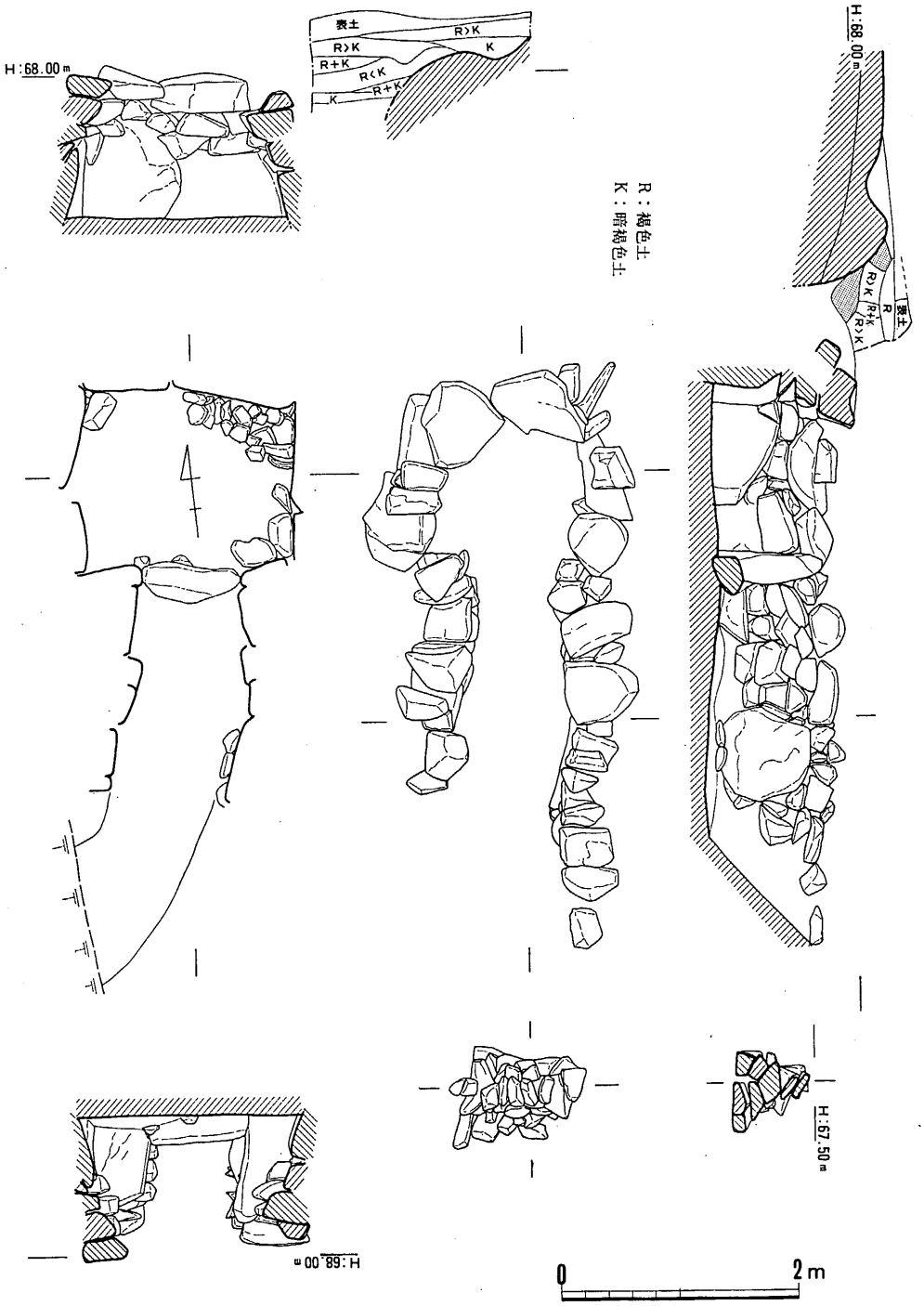
玄室は右側壁長1.3m、左側壁長1.5m、奥壁幅1.8m、玄門側幅1.75mを測り、横長である。

奥壁、左右両側壁ともに最下段には2石を据えている。奥壁は床面よりの高さ約60cmと80cmの石を腰石として、次に小ぶりの石を一段又は二段積んで高さを調整し、やや大きくて平たい石を据えている。右側壁はまず高さ約60cm、40cmの２石を据え、前者の上には小ぶりの石を、後者の上には高さ約40cmの石を重ね、その上に大きめの石を上面レベルをそろえて２石重ねている。床にはこぶし大の石を敷きつめていたと思われるが、北東隅を除いては荒らされていた。

袖石は玄室床面からの高さ約90cmである。袖石間は約85cmで、幅30cmの框石を据えてい



第127図　中通D地点地形図（1/100）



第128図　中通Ｓ２号墳石室実測図（1/60）

る。

「前室」は框中心から大石中心まで約1.6mを測る。幅は玄門側で85cm、大石側で1mである。平面的には室の様相を呈さないが、前述のように、側壁の積み方より一応室と考えた。側壁は平担面を出すように比較的整然と積んでいる。

閉塞は大石の袖石側縁辺部で行なわれており、長さ20〜30cmの長めの石を主軸方向に合わせて積み上げている。高さは約70cmである。この高さでは現存側壁高にも及ばないので、本来はまだ高かったはずである。

「前室」より前方の石積みをした部分は羨道というより石組み墓道（註1）といった方が適切かもしれない。墓道は下端幅80〜90cmで、南西にカーブしている。先端は開墾のため削りとられている。

遺物出土状態

玄室内左袖近くでガラス玉がほぼ床近くから出土した。2個は完形だが、あとは破片でおよそ2個体分であろう。

玄室内からは他に流入土中より滑石製紡錘車片1個が出土している。

墓道埋土中より、破片であるが、子持ち勾玉と勾玉が1個づつ出土している。同じく墓道右上方で滑石の紡錘車が1個出土した。削平された墳丘を検出する作業中に攪乱土中から出土したもので、その原位置については不明である。他に墓道埋土中から土師器の坏が6個体出土している。うち3個は墓道右側壁近くで転げた状態で検出された（図版141）、いづれも墓道床面からは浮いており、供献されたとしても追葬時のものであろう。

墳丘からは前述したようにD－1号窯のものと思われる灰層が認められ、灰とともにかなりの量の須恵器片が出土した。

遺　物

出土した遺物は以下の通りである。

土器	土師器坏	6
	須恵器片	多量（墳丘中）
石器	紡錘車	2
	子持ち勾玉	1
	勾玉	1
その他	ガラス玉	2＋α

土師器

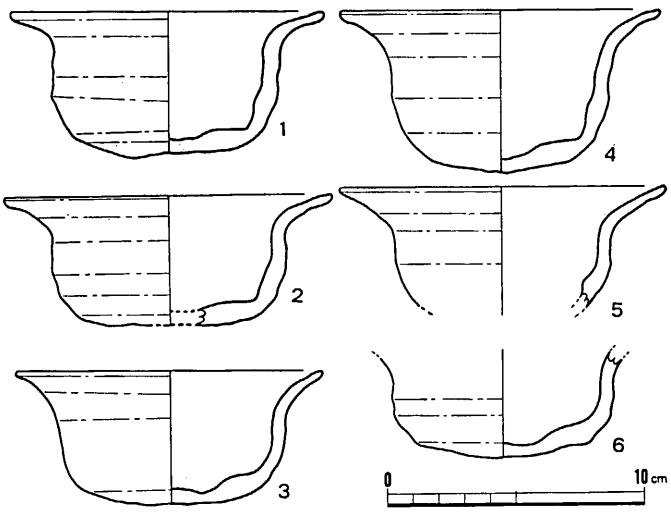
坏（第129図）口縁部がかなり極端に外開きするやや変わった器種である。器面が荒れていて調整の不明なものもあるが、内外面ともにヨコナデで仕上げている。以下に観察表を掲げる。

第9表—1　S2号墳墓道出土土師器観察表

No.	図版番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	142—1	口径(12.3) 器高5.7	底部は平底気味。頸部はしまらずに口縁部外反。	内外面ヨコナデ	焼成　良好 色調　黄赤褐色
2		口径（13） 器高5.0	底部は平底気味。頸部が心もちしまる。	内外面ヨコナデ	焼成　良好 色調　黄赤褐色
3	142—2	口径12 器高5.3	底部は丸底気味。体部より序々に外へ広がりながら口縁部へ続く。	不詳	焼成　良 色調　淡黄褐色
4	142—3	口径(12.4) 器高6.3	底部は丸底気味。体部は傾斜角度を変えながら外湾する。	内外面ヨコナデ	焼成　良好 色調　黄赤褐色
5		口径(12.8) 現在高4.7	底部欠く。口縁部長い。	内面ヨコナデ 外面不詳	焼成　良 色調　淡黄褐色
6		現在高4.1	口縁部欠く。底部は丸底気味。頸部はしまらずに口縁部へ続く。	不詳	焼成　良 色調　淡褐色

紡錘車（第130図5・6）

滑石製である。5は断面がやや台形気味で、上端径4.2cm、厚さ1,2cmである。片刳りである。6は3分の2が欠損している。滑石製で、復元径3,6cmである。表面が剝落しているので正確な厚さはわからない。現在は1cmを測る。同じく片刳りである。



第129図　中通S2号墳墓道出土土師器実測図（1/3）

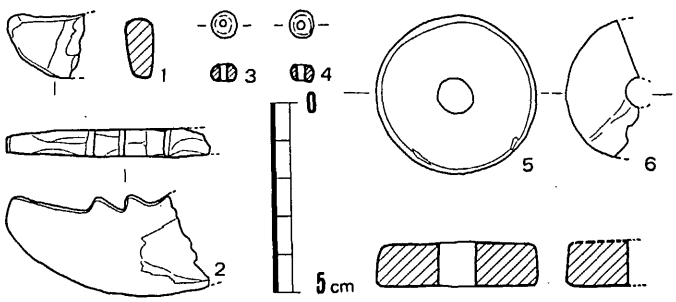
子持ち勾玉（第130図4）

滑石製で、厚さ7mm、現存長約5cmである。腹に子を持つ。子は凹形であるが、その形態から孫を持つのではないかと思われる。子の部分は現存長2.3cmである。腹・子には削り痕が残る。

勾玉（第130図1）滑石製で、当初4と同一個体ではないかと考えたが、一方の面がやや丸味をもつので、別個体として扱った。残存長2cm、厚さ7mmである。

ガラス玉（第130図３・４）

３・４とも直径７mm、孔径２mmの丸玉である。風化して白味を帯びたうす緑色を呈する。本来は青色のガラス玉であろう。



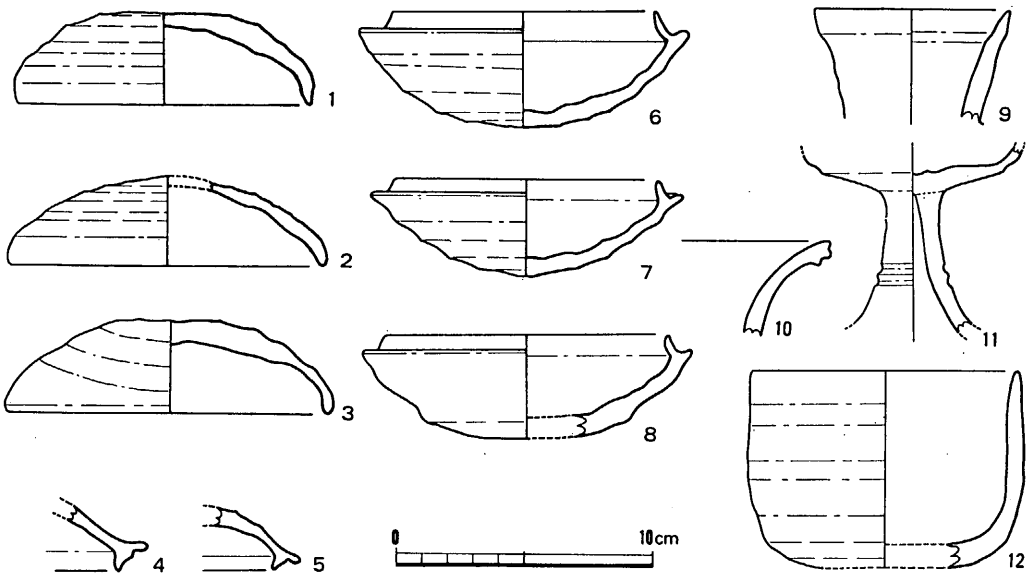
第130図　中通Ｓ２号墳出土遺物実測図（1/2）

墳丘出土須恵器（第131図）

墳丘灰層より出土したもので、坏身、坏蓋・高坏・甕・平瓶・椀が見られる。Ⅳ期のものが多いが、坏蓋５はⅤ期に入るものと考えられる、観察表を掲げる。

第９表―２　Ｓ２号墳墳丘灰層出土須恵器観察表

挿図番号	器種	法量 ①器高 ②口径 ③受部位	ヘラ記号	調整及び特徴	備考
1	坏蓋	復元 ①3.6　復元 ②11.6	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良好、色調青灰色	灰かぶり
2	坏蓋	復元 ①3.5　復元 ②12.4		天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良、色調白灰色	
3	坏蓋	復元 ①3.6　復元 ②12.6	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良、色調暗灰色	熱のため変形
4	坏蓋			胎土精良、焼成良好、色調灰色	
5	坏蓋			天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土やや砂粒含む、焼成良、色調灰色	外面灰かぶり
6	坏身	①4.4　②12.8		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土精良、焼成堅緻、色調内面暗青灰色 外面暗灰色	
7	坏身	復元 ①4.1　復元 ②11.0　復元 ③12.8		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良、色調灰色	外面灰かぶり 蓋の破片焼きついている。
8	坏身	復元 ①3.8　復元 ②10.2　復元 ③12.2		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土精良、焼成良、色調灰色	
9	平瓶口縁	①（4.4）　②7.6		内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良、色調内面暗灰色　外面灰色	
10	甕			胎土精良、焼成良、色調灰色	内外面ともに灰かぶり
11	高坏			坏底部回転ヘラケズリ、その他ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良、色調灰～暗灰色	灰かぶり
12	椀	復元 ①7.6　元復 ②10.8		底部回転ヘラケズリ、その他ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良好、色調灰色、内面紫灰色	



第131図　中通Ｓ２号墳々丘灰層出土須恵器実測図（1/3）

小　結

本墳は推定直径 6ｍの小円墳で、南に開口する（主袖 N6°W）横穴式石室をもつものである。石室は複室構造を意識したものである。

出土遺物は土師器坏６、紡錘車２、子持ち勾玉、勾玉各１、ガラス丸玉約４個、それに墳丘中の多くの須恵器片である。

年代については、盛土中の灰層出土須恵器が上限を考える上での目安となる。灰層中の須恵器はⅣ期のものが多いが、一部Ⅴ期と考えられるものがある。従って本古墳墳築造はそれ以後となる。即ち７世紀前半以後である。追葬時の供献と思われる特徴的な土師器については、その年代をよく知ることができない。

註１　柳田康雄編『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告』第５集　福岡県教育委員会　1978

4. 中通Ｓ３号墳の調査

Ｓ2 号墳の北西約６ｍに位置し、横穴式石室を有する円墳である。石室床面標高は約 66.6m である。段々畑に完全に隠れており、予備調査では発見できず、表土はぎの段階で見つかった古墳である。古墳直下が道路となっており、土捨て場の関係で墳丘北側を調査することができなかった。

墳　丘（第132図）

墳丘はかなり削平を受けており、規模も不詳だが、玄室中心より東周溝内側までは３ｍを測るので、径はおよそ６ｍ内外と推定される。周溝外側までだと約８ｍである。

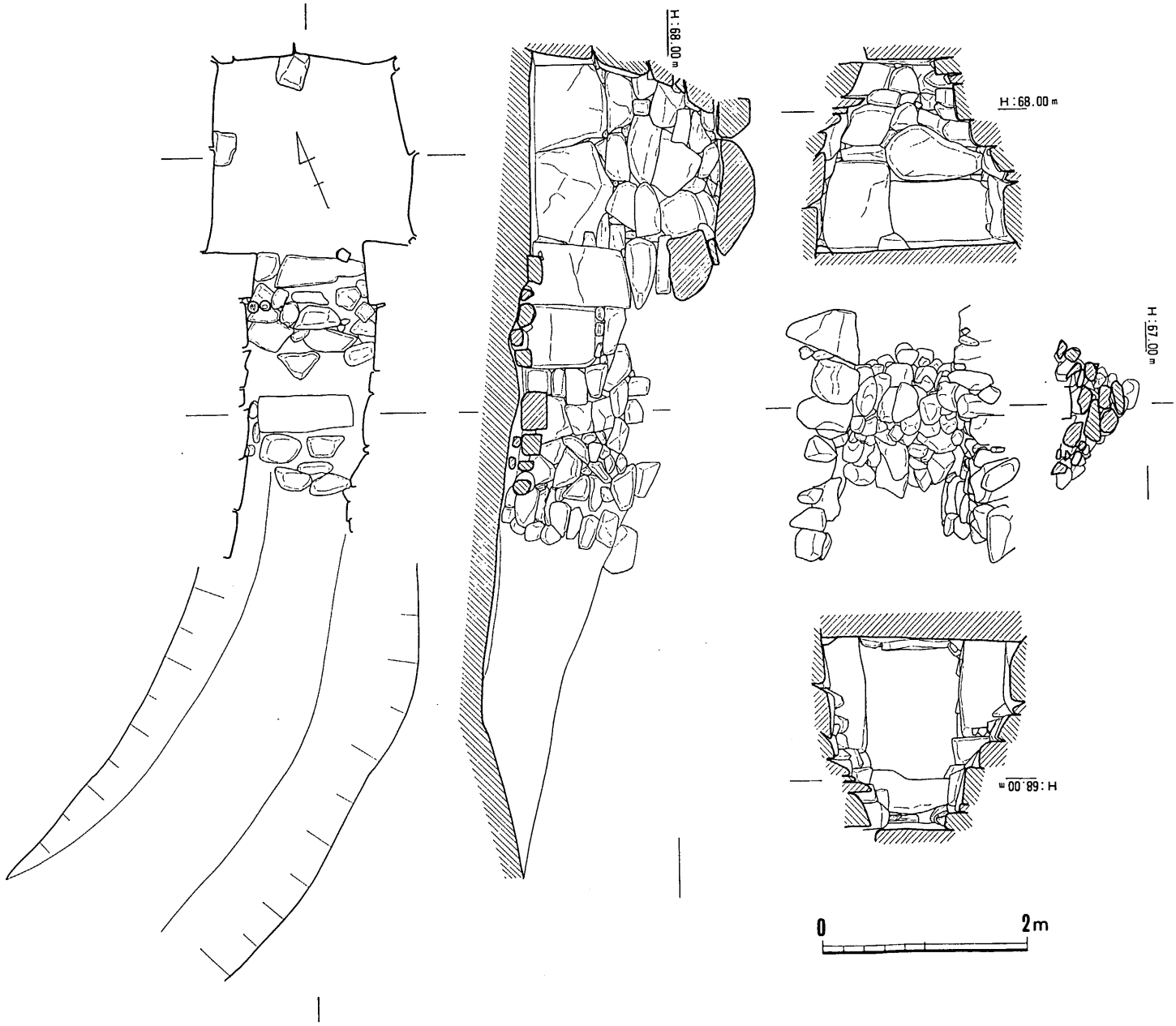
山側は地山面まで、谷側は旧表土を残して墓壙を掘っている。盛土作業は石室構築と平行して行っている。天井石架構までと、その後では盛土の方法だけではなく土の選択も違っている。その様子は山側No. １トレンチで明瞭に観察できる。天井石架構までは粘質褐色土を多用し、細かくたたきしめており、一旦なめらかに仕上げをしている。従って、層も短いものが多くなる。ここまでを前段階とすれば、後段階は暗褐色土を多く用い、細かいたたきしめはやっていない。層は長めのものが多く観察できる。前段階が石室の構築に力点を置いているものとすれば、後段階は墳丘を盛り上げるものということができる。そして注目すべきことは、Ｓ2 号墳でも見られたことだが、盛土中に窯灰原の一部と思われる須恵器を含んだ灰層が見られることである。それは後段階の比較的早い段階で盛られたと観察できる。これも後段階が土を選ばず、ただ盛り上げることを意識したことの表われと思われる。しかし、このことがＳ3 号墳の築造時期の上限を知る良い資料となる。

周溝はNo. １トレンチの観察からすれば、周溝内側に土留め用の土盛りをして、その後に最終的な墳丘盛土をしていることがわかる。

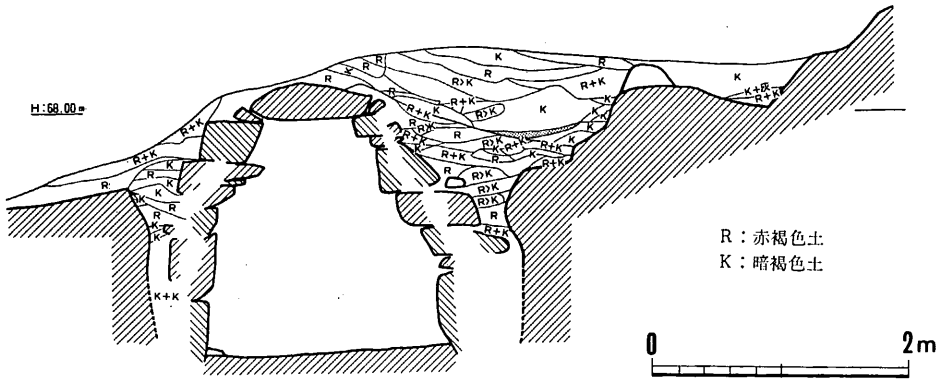
石　室（第132図）

南々西に開口する（主軸 N22° W）横穴式石室である。玄室の残りは良い。石室プランは単室のようであるが、框石が二つある点（手前を第一框石、玄門部を第二框石とする）、框石間と第一框石外側とでは側壁の石積み方法が違う点から見て複室を意識したものと見なされる。即ち、側壁は框石間では角ばった石を整然と積み、第一框石外側では形の不ぞろいな石を前者と比べて雑に重ねている。更に平面形においても、框石間は若干の広がりを持つ。以上によって、框石間を「前室」と呼ぶことにする。調査時には落ち込んでいたが、「前室」には天井石が架構されていたことはまちがいない。

玄室は主軸長 1.95m、幅は奥壁で 1.7m、玄門側で1.95mを測り、台形を呈する。



第132図　中通Ｓ３号墳石室実測図（1/60）



第133図　中通S３号墳々丘実測図（1/60）

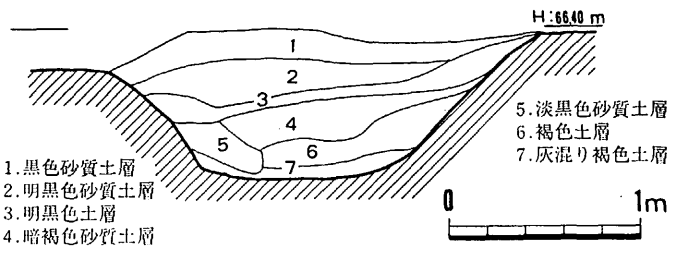
奥壁は高さが60cmと90cmの大石を腰石とし、二段めは低い方には高さ60cm、高い方には高さ15cmの石を重ね、それ以後は主に30cmほどの石を多く用いながらしだいにせり出させ、高さ1.8mまで積み上げて天井石を架構している。側壁も腰石には高さ約70cmの大石を二個ずつ据え、二段め以後30cm×50cmほどの石を横積みにして序々に持ち送りながら積み上げている。袖石には高さ約１m、幅60cmの石を用い、その上に高さ30cmと10cmの石を重ねて眉石をのせている。玄門幅は1.1m、高さ1.3mを測り、框は長さ90cmと20cmの２石を用いている。玄室床面には20cm大の石が多くあったが、雑然としてかなり動かされたことが明瞭であったのでとりはずした。本来は敷きつめられていたものであろう。奥壁と側石それぞれ二つの腰石間に根石と思われる石があった。全体的に見れば、やや雑な感じのする石室である。

「前室」はその長さ約1.1m幅1.25mを測り、大きさは不ぞろいながらも敷石を施している。側壁は前述したように角ばった石をかなり整然と重ねている。特に右壁の袖石と接する石は高さ70cm、幅60cmの大きな石である。「前室」には玄室の敷石と思われる塊石が多く積み上げられていた。玄門右上の墳丘が一部削られており、この部分が盗掘孔としてあけられ、玄室内をかきまわした結果と思われる。玄室・「前室」流入土中には窯壁体部分とともに須恵器片が多く含まれていた。

閉塞は第一框石上で行なわれている。やや長めの石を多用して、幅1.5mにわたって、框石上約60cmの高さまで積み上げている。現存側壁高に及ばないが、閉塞断面の観察によれば比較的整っており、更に積み上げるとすれば最初から積み直さなければならない状況であるので、元来の高さと大差ない残存状態であると思われる。

羨道は第一框石から右壁で1.1m、左壁で1.2m続く、床には第一框石に続いて30cm×20cmほどの石が５個敷き並べてある。これらの石を除くと框石と羨道床面との間に大きな段差がつくので、石室床面と墓道の高低差を埋めるために置いたものと思われる。５個の敷石下には小

石が２個据えてある。高さを調節するためのものであろう。側壁は前室と比べるとかなり雑然と積んでいる。その高さは最も手前で1.3m を測る。玄室の高さから考えて、本来の高さとそうへだたりのないものと思われる。



第134図　中通Ｓ３号墳墓道断面図（1/40）

墓道は南から南西方向にゆるやかにカーブしている。約５mにわたって検出できた。玄室標高は約66.5m、墓道端65.5mで約１mの高低差がある。墓道埋土断面はおおむねレンズ状の堆積状態を示している（第134図）。上端幅約2.3m、下端幅約1.1mを測る。

遺物出土状態

「前室」床から須恵器坏蓋２個、攪乱土中から土師器皿１、鉄鏃５本以上が出土している。玄室内床面から土師器皿片、框石に接して黒色土器椀１が出土している。

墳丘盛土中には前述した灰層があり、そこから須恵器片が出土している。

遺　物

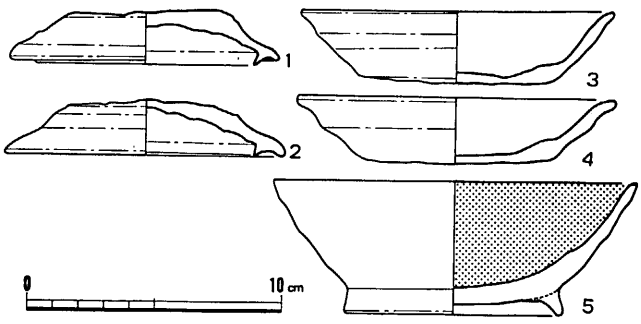
出土遺物を列挙すれば以下の通りである。

土器	須恵器坏蓋	2
	須恵器片（墳丘中）	
	土師器皿	2
	黒色土器椀	1
鉄器	鉄鏃	５本以上

須恵器

坏蓋（第135図１・２）１・２ともに「前室」床面から出土したもので、１は胎土に砂粒を多く含み、暗灰色をした焼成の良いものである。頂部をヘラ調整し、それ以下並びに内面をヨコナデで仕上げている。口縁径8.5cm、最大径10.6cm、高さ2.2cmを測る。頂部にヘラ記号が付けられている。２は胎土に砂粒をやや含み、にぶい灰色を呈する焼成やや不良のものである。頂部はヘラ調整し、それ以下並びに内面をヨコナデで仕上げている。口径 11cm、高さ2.2cmを測る。かえりは１に比べて退化している。

土師器

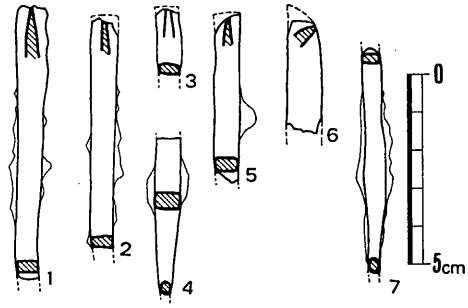


第135図　中通Ｓ３号墳出土遺物実測図（1/3）

皿（３・４）３は「前室」攪乱土中から出土したもので、ほぼ完形の淡褐色を呈する軟質のものである。器面が荒れており、内面はヨコナデを施しているが外面調整は不明である。口径 12.2cm、高さ2.9 cm を測る。４は玄室床面から出土したもので、約４分の１からの復元である。胎土には砂粒を含み、淡褐色をしたやや軟かいものである。調整は不明である。復元口径は12.4cm、高さ2.6cmを測る。

椀（５）玄室内框石についた状態で出土した。比較的精良な胎土を用い、焼成も良いものである。調整は不明だが、内面黒色の黒色土器Ａ類(註１)に属するものである。心もち外湾しながら伸びた体部はやや尖がり気味の口縁で終わる。貼付け高台がつく。高台断面はやや丸味をおびるが、四角形に近い。

鉄鏃（第136図）いずれも「前室」内にたまった玄室床かき出し土中に混じって出土したものである。錆化、細片化がひどく、全体を知ることのできるものがほとんどない。１は方頭斧式(註２)に属するもので、現存長7.1cm、刃部幅0.9cmを測る。２・３・５も刃部を欠くが、同類のものであろう。６は先端を欠くが、断面形より片刃箭式のものであろうと思われる。

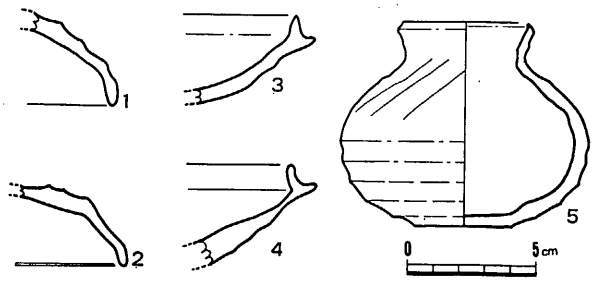


第136図　中通Ｓ３号墳出土遺物実測図（1/2）

墳丘出土須恵器（第137図）

小片が多く、断面図が多くなった。１・２は坏蓋で、ともに胎土にやや砂粒を含んだ焼成の良好なものである。外面上部をヘラケズリし、それ以外をヨコナデ、ナデで仕上げている。口縁部は１が丸くなるのに対して、２は角ばる。

３・４は坏身である。３は焼成良好だが、外面は一面に灰をかぶっている。底部外面はヘラケズリし、それ以外はヨコナデを施している。４は淡褐色をした焼成不良のものであ



第137図　中通Ｓ３号墳々丘灰層出土遺物実測図（1/3）

る。調整は3と同様、底部外面をヘラケズリし、それ以外はヨコナデで仕上げている。蓋受けの形態からあるいは蓋になるかもしれない。5は口縁部がやや外反する短頸壺である。灰色をした焼成良好なものである。胴部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ後左下がりの方向でヘラでなでている。その他の部分はヨコナデを施している。復元口径4.9cm、胴部最大径9.7cm、高さ8cmを測る。

小　結

本墳は前室天井部を欠く外はほぼ原状を留めている。径は6m前後を測るものと思われる。

石室については二つの框石の存在と、側壁積み方などから単純な単室構造を持つものではなく、複室を意識したものと看取できる。

墳丘については、盛土方法に石室補強と墳丘盛り上げの二段階が認められる。後段階で見られる須恵器混りの灰層は築造上限を知る上で好資料となる。

出土遺物は前室床面に須恵器坏蓋2、玄室床面から黒色土器椀1、土師器皿1、前室攪乱土中から鉄鏃5本以上、土師器皿1、そして墳丘灰層中からの須恵器片である。

年代については、その上限をS2号墳と同様に墳丘盛土灰層中の須恵器に求められる。盛土中須恵器はⅣ期に属する。また、この灰層は後述するD－1窯のものと考えられるから、D－1窯廃棄後に築造されたものとすることができる。D－1窯の須恵器はⅣ期を中心にしているが、一部Ⅴ期のものも含まれている。そしてⅥa期に属すると考えられる前室出土須恵器坏蓋の存在より、7世紀前半の築造が考えられる。

玄室出土の黒色土器椀は、横田賢次郎、森田勉氏の覚え書き(註3)によれば9世紀後半と考えられているものに最も近い。

以上をまとめると、本墳は7世紀前半に築造され、その下限を明らかにすることはできないが、9世紀後半頃再利用されていることがわかる。

註1　田中琢「古代・中世における手工業の発達1．窯業(4)畿内」『日本の考古学』Ⅵ 1967
註2　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『日本古代文化研究』所収　1942
註3　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚書『九州歴史資料館研究論集2』1976

3）窯　跡　の　調　査

S2号墳、S3号墳の上方斜面、標高約69.5m付近に焚口を構え、おおよそ東西方向（N101°E）に主軸をもつ窯跡である。S2号墳とは3.5m、S3号墳とは5mの至近距離である。本窯跡の北にも窯跡の存在が知られているので、中通遺跡D－1窯跡と銘名した（註）。

地権者の関係で、焚口、燃焼部それに焼成部の一部、長さにして約6mを調査したにすぎない。調査部分の規模から見て、本来はA～C地点窯跡同様に全長は10数メートルに及ぶものと思われる。大きくは3回の改造を行っている。築造当初の構造について述べ、それから改造とそれに伴う構造の変遷について述べたい。

前庭部

第138図のX－Y間が当たる。壁面、床面ともに柔かく、直接火を受けた形跡はない。凹凸が激しく、中央部が大きく凹む。深さは約30cmである。左側壁に一辺1.5mの落ち込みがある。X－Y間の距離は2.6m、最大幅3.5mを測る。

焚口、燃焼部

側壁はYから奥が良く焼けて固くしまっており、Zの手前0.5mまでは垂直に立つ。Z付近が中心部に向かってせり出している。また、床面はZ点で最もせばまり、そこから奥が熱のために灰色となっている。更に見通し図で見ると、窯右壁下端線はZ点を傾斜変換点としている。従って、Y－Z間が燃焼部、Y点が焚口と考えられる。燃焼部は奥へ行く程せばまり、焚口幅2.25m、燃焼部最狭部1.95mを測り、その長さは1.9mである。

焼成部

床・壁面ともに良く焼けて固くしまっている。幅は1.95m、推定高1.4mである。

燃焼部と焼成部にかけて幅1.1m、長さ2.5m以上の凹みがある。凹み壁は焼けていない。埋土は褐色砂質土で熱を受けたことが観察できる。

窯改造と構造の変遷

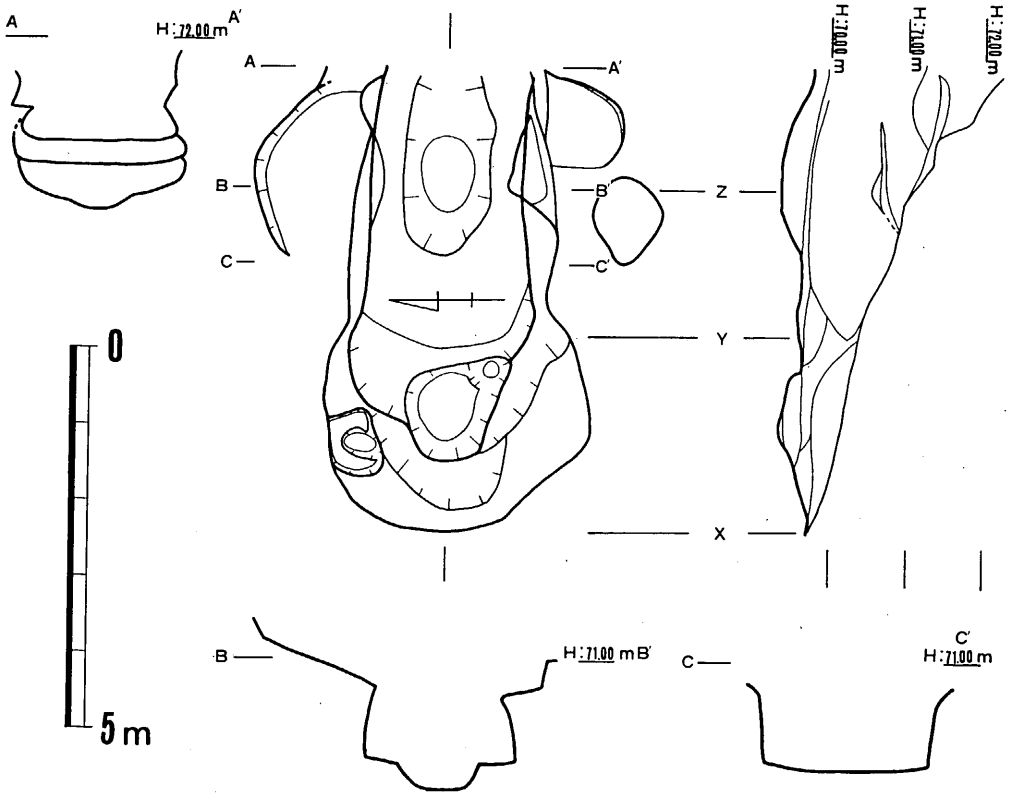
本窯は3回の改造を行っている。築造当初に掘られた凹みは窯使用時には埋まっており、その埋土上が第1次床面となっている。その後5～15cmずつ床上げを行っている。そして、築造当初から50～60cmかさ上げした後に窯の改造を行っている（第1次改造）。この間の床の断

面は還元されて青灰色を呈し、固く焼けてしまっており、正確な床面の枚数を数えるのが難しい。最低2枚、多ければ4枚の床面があったと思われる。

第一次改造後は断面観察によれば、床上げする前に天井が崩壊している。しかし、灰層が見られるので（第139図）使用されたことはまちがいない。その灰層はそれまでと違い、70cmほど上方まで伸びているので、焚口が奥へ移動したと考えられる。同じく断面観察によって、この段階で前庭部は灰をかたづけたことがわかる。従って、前庭部に堆積した灰は第一次改造後のものと考えられる。

第一次改造後、比較的早く天井が崩壊し、その後褐色土を30〜50cmの厚さで埋めて第二次改造（最終改造）を行っている。築造当初に比べて90〜110cmの床上げである。築造当初の燃焼部と焼成部の境と考えた側壁のせり出した部分の上部が平坦となり、熱を受けた形跡がある。最終床面になっているわけである。

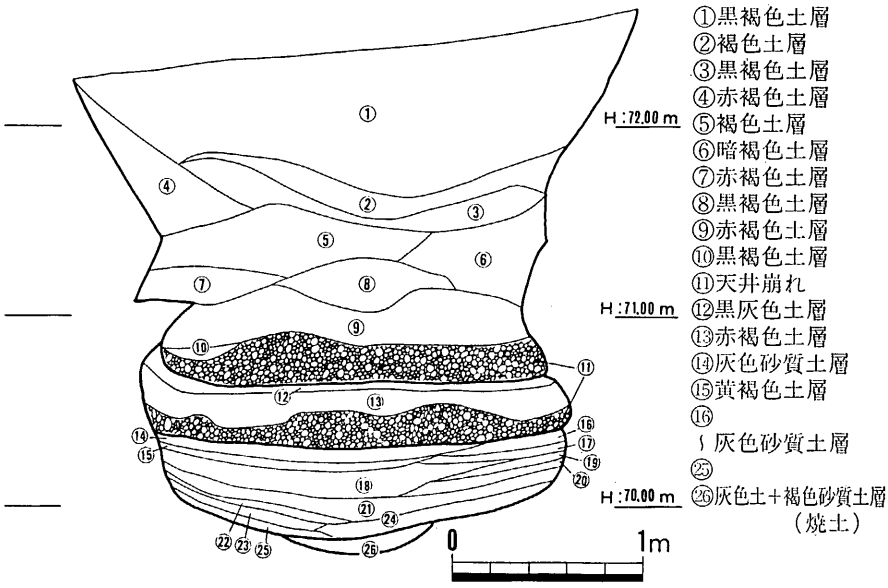
第二次改造時には焚口が更に50cmほど奥へ移動していると考えられる。それは主に縦断面の灰層の位置から判断した。



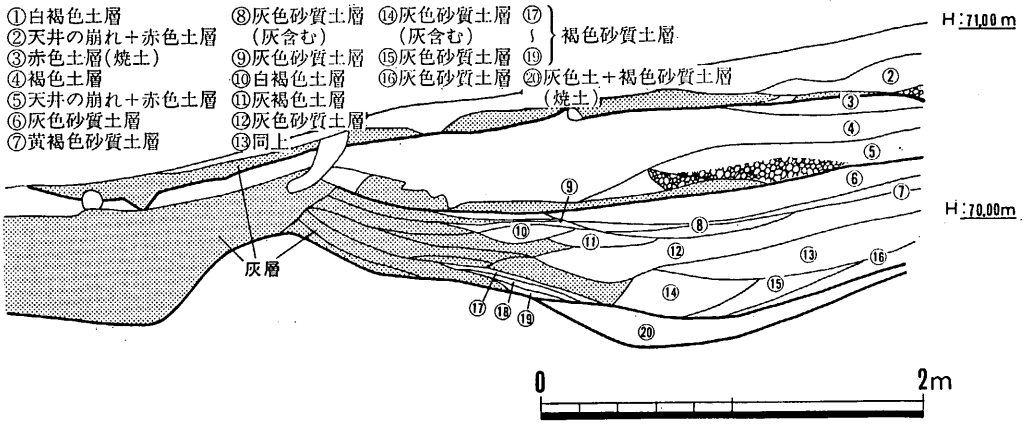
第138図　中通D－1窯実測図（1/100）

築造当初は地下式であったと思われるが、最終的にも地下式であったかはよくわからない。しかし、最終床面上に落ちた天井並びに側壁の一部と考えられるものは地山の一部と思われるものであって、スサ入り粘土等ではなかった。

床面の枚数についてまとめると、築造当初凹みの埋まった段階、第一次改造時、第二次改造時の３枚は確実なものとして把えられ、築造から第一次改造まで２～４枚数えられたので、合計５～７枚の床面が数えられることになる。



第139図　中通Ｄ－１窯断面実測図（1/40）



第140図　中通Ｄ－１窯縦断面実測図（1/40）

灰　原

既に述べたように、本地区は古代においては古墳築造に際しての整地、近代においては開墾のために灰原は窯前庭部下方と、S2号墳北西部、それにS2号墳が隠されていた段々畑の法面下方に検出されたにすぎない。層位的な差は見出だせなかった。灰原中から出土した須恵器は細片となっていることが目をひいた。

＜註＞　前田軍治氏の御教示による。

遺　物

窯内出土須恵器（第141図）

創業時の床面を第Ⅰ次床面、第1回目の改造時床面を第Ⅱ次床面、2回目の改造時床面を第Ⅲ次床面とすると、各床面からの出土須恵器は第141図の通りである。第Ⅰ次と第Ⅱ次床面間は明瞭に各床面を把握できなかったので、第Ⅰ次～第Ⅱ次床面出土須恵器として一括した。

各遺物については後出の観察表にまとめたが、3・4・5・8は焼成不良で、1・2・11は熱のために変形を受けている。出土状態は、1・2については1が上となった状態でセットで出土し、3・4については4が上となった状態で同じくセットで出土した。また11は単独で伏せたまま検出された。

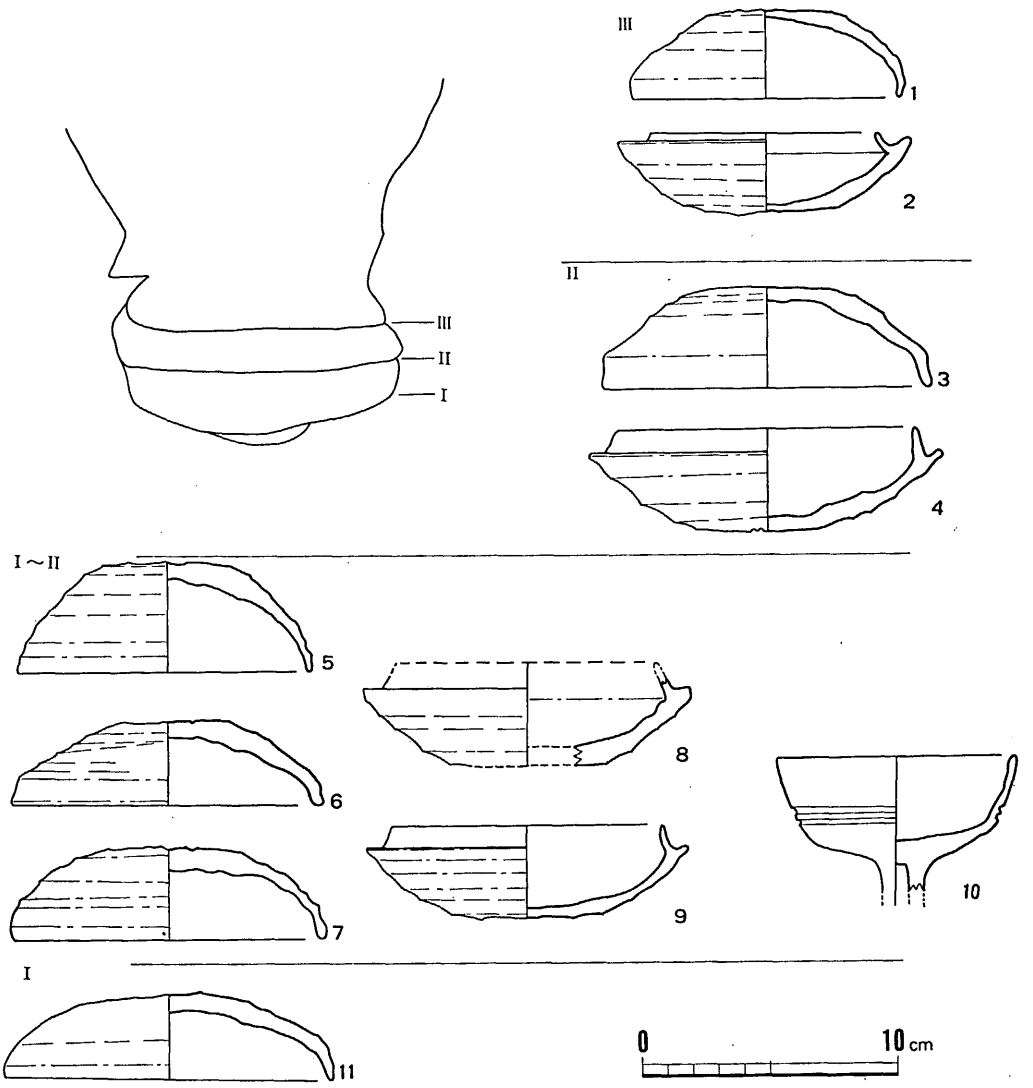
法量については1・2がその他に比べて小型化が目だつ。技法については第Ⅰ～Ⅱ次床面間からの出土遺物に粗雑さが目だつ。6のヘラケズリは連続せず途切れており、7は切り離し後粗い調整を加えただけでヘラケズリを施していない。それに比べて、3・4は天井部・底部に明瞭なヘラケズリを加えているし、1・2も灰かぶりのため不明瞭ながらヘラケズリを行っている。以上技法から見ると粗雑化という視点で直線的に型式をたどることはできないが、法量・形態の面から、第Ⅰ次～第Ⅱ次床面までの遺物と、第Ⅲ次床面からの遺物では型式差が認められる。

灰原出土須恵器（第142図）

表土ならびに古墳「前室」部からの出土遺物であっても、窯壁土がまざった状態で出土している場合はD－1窯の遺物として扱った。それらは少数であるが、観察表に出土地点を明記した。

坏蓋は天井部にヘラケズリを加えている。19は坏身が逆転して身受けのかえりが退化していく時期のものである。

坏身の底部にヘラケズリを施して、その他の内外面をヨコナデ又はナデている。28は底部にヘラケズリを施し、体部との境が明瞭なもので、やや形態の異なったものである。高坏は坏底



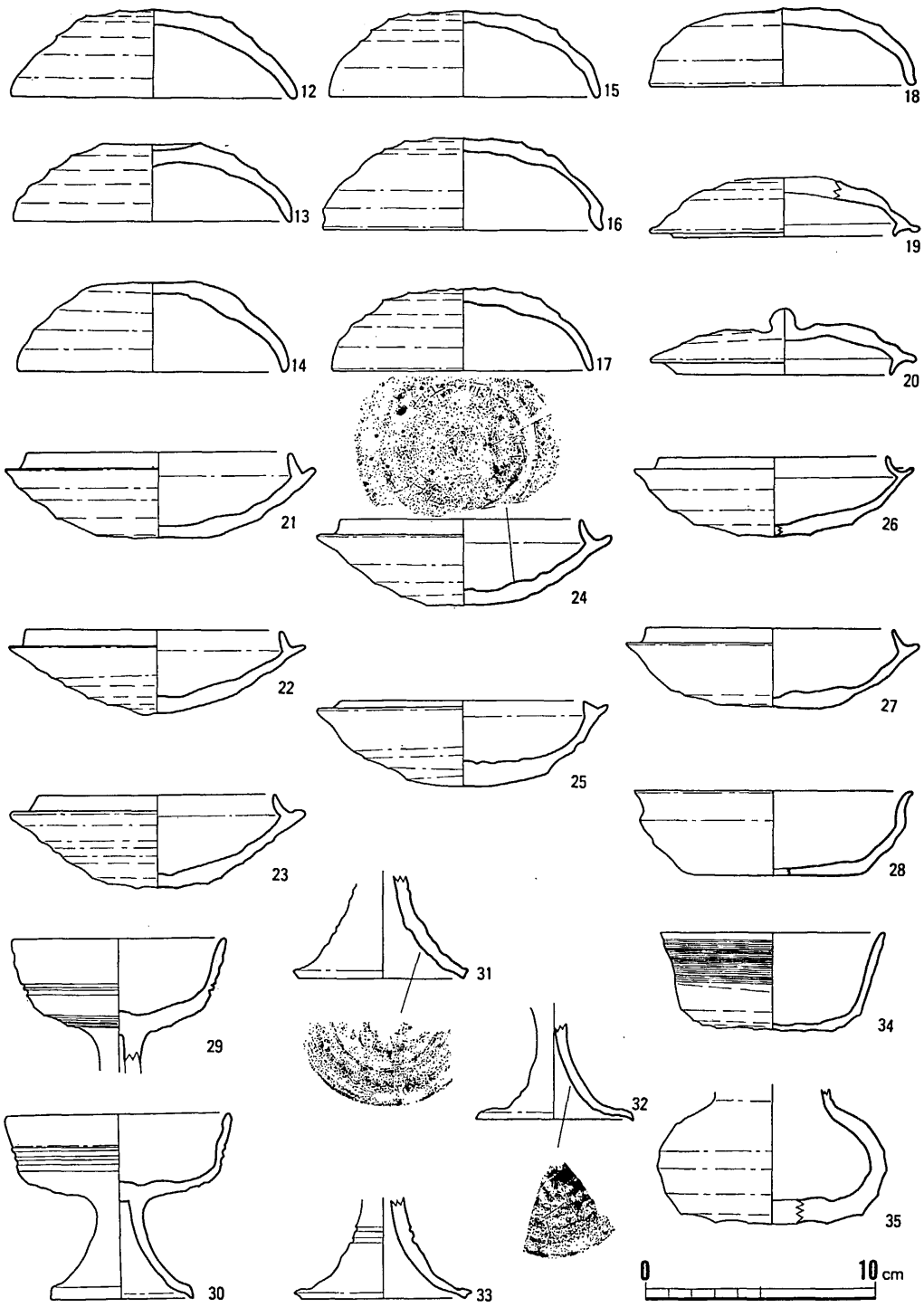
第141図　中通D－1窯内出土遺物実測図（須恵器）（1/3）

部の一部にカキ目を施すものがある。31の脚内面には放射状の刻線が見られる。32は脚裾部が広がり、中ほどが極端に細くなるものである。

灰原からの遺物には坏蓋19、高坏32のように窯本体出土須恵器よりやや時期が下がるのではないかと思われるものが含まれている。灰原から窯最終床面出土須恵器より後出の遺物が出土するということは不合理なことである。考えられることは、両者はそれぞれ新旧の要素を持ちながらも、同時に焼かれたものであることを示すか、あるいは窯最終床面出土遺物が少ないことから、失敗品を少し取り残して、次の製品を焼いたのではということである。

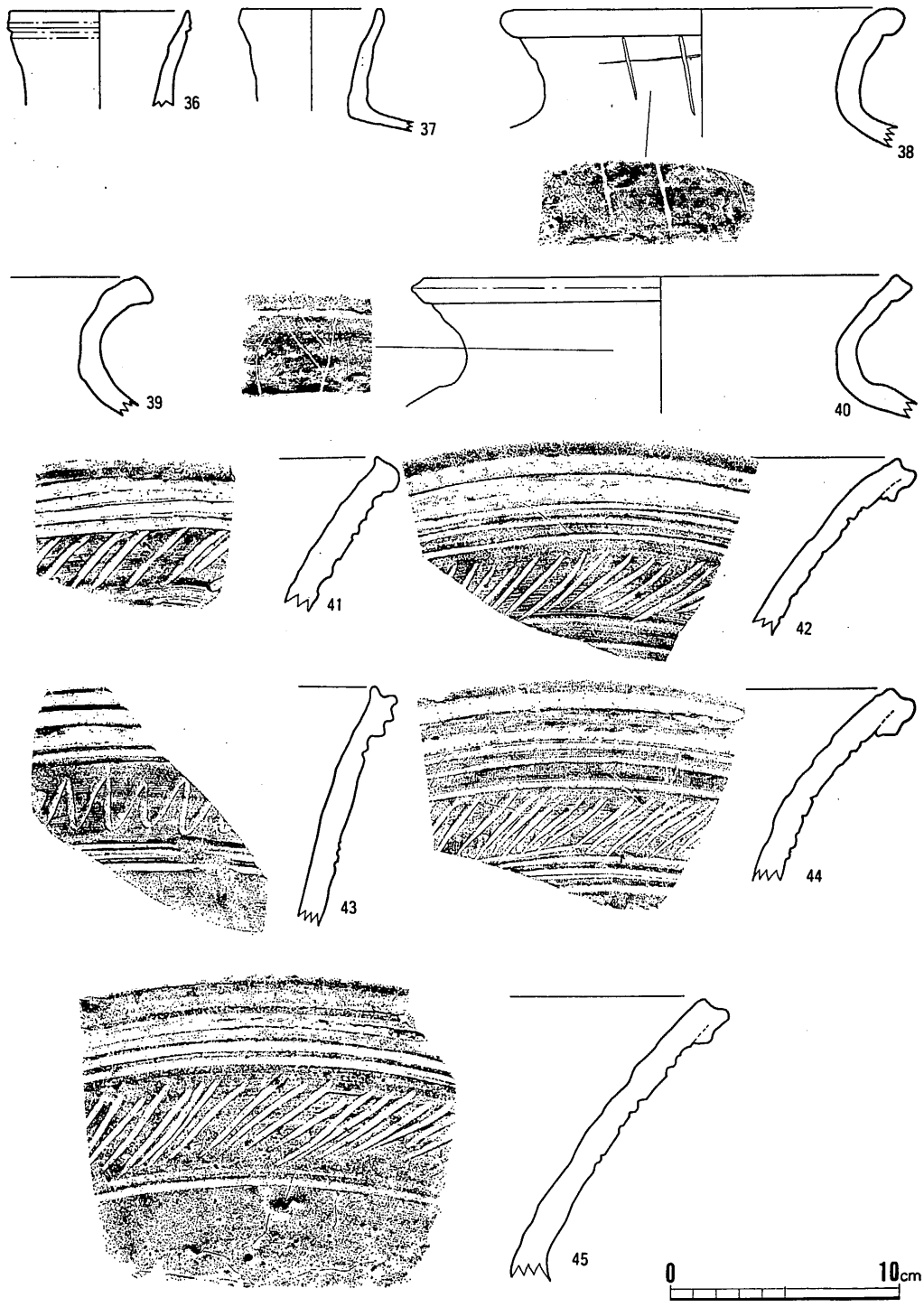
第10表　中通D－1窯出土須恵器観察表

遺物番号	器種	挿図番号 図版番号	出土地点	法量 ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径 ⑤受部径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
1	坏蓋		第Ⅲ次床面	①3.5　②10.7	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良好 色調暗灰色まだら	やや変形 一部欠2とセット
2	坏身		〃	①3.2　②8.8　⑤11.4	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良好 色調灰色	やや変形 灰かぶり 熱のため変形1とセット
3	坏蓋		第Ⅱ次床面	①4.0　②12.9	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ　胎土砂粒やや含む、焼成不良、色調外淡褐色、内白灰褐色	4とセット
4	坏身		〃	①4.0　②11.5　⑤13.8	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成不良　色調灰白色	3とセット
5	坏蓋		第Ⅰ～Ⅱ次床面	復元 ①4.3　②11.6	○	天井部ヘラケズリ、内面ヨコナデ 胎土精良、焼成不良、軟質 色調淡茶褐色	½欠
6	坏蓋		〃	①3.4　②12.1	○	天井部粗いヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良好 色調暗灰青色	⅓欠
7	坏蓋		〃	①3.7　②12.2	○	天井部ほとんど調整せず、その他内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成良好　色調暗灰青色	⅓欠
8	坏身		〃	復元 ①3.3＋α　⑤12.8		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成不良　色調暗褐色	⅙より復元
9	坏身		〃	復元　復元 ①3.6　②10.6　⑤12.6		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良好 色調外明灰紫色、内青灰色	⅓欠
10	高坏		〃	②9.3		坏底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成良好　色調黒灰色	脚部欠
11	坏蓋		第Ⅰ次床面	①3.5　②12.9	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土緻密、焼成良好 色調外暗灰紫色、内暗灰色	一部欠 やや変形
12	坏蓋		灰原	復元 ①3.9　②12.5	?	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成不良 色調淡青灰色	¼欠
13	坏蓋		D－1号墳主軸トレンチ土手	復元 ①3.4　②12.2	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良 色調青灰色	½欠
14	坏蓋		灰原	①3.9　②11.8		調整不詳 胎土砂粒含む、焼成不良 色調淡灰黄色	¼欠
15	坏蓋		灰原	復元 ①3.8　②12.0		天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土精良、焼成不良 色調淡灰黄色	口縁部大部分欠



第142図　中通D－1窯灰原出土遺物実測図（須恵器）（1/3）

遺物番号	器種	挿図番号 図版号	出土地点	法量 ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径 ⑤受部径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
16	坏蓋		灰原	復元 ①4.0 ②12.0	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒少し含む、焼成良好色調外暗灰青色、内灰色	
17	坏蓋		前庭部	①3.6 ②11.4	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗青灰色	一部灰かぶり
18	坏蓋		灰原	復元 ①3.4 ②11.6	○	天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	½欠
19	坏蓋		灰原	復元 復元 ②8.6 ⑤11.9		天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや多い、焼成良好 色調灰色	½より復元
20	坏蓋		灰原	①2.9 ②10.5 ⑤11.5		天井部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良好 色調外灰色、内暗青灰色	やや変形
21	坏身		前庭部	復元 復元 ①3.7 ②11.4 ⑤13.5		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成不良 色調暗褐色、白灰色	
22	坏身		前庭部	①3.7 ②11.1 ⑤12.9	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調灰青色	壁土焼付
23	坏身		灰原	①4.0 ②10.3 ⑤12.8	○	天井部ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒わずかに含む、焼成良好、色調灰青色	
24	坏身		灰原	①3.8 ②10.5 ⑤12.8		底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	外灰かぶり 内面底部にスタンプ
25	坏身		灰原	①3.8 ②10.5 ⑤12.6	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	
26	坏身		前庭部	復元 復元 ①3.6 ②10.6 ⑤12.4	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、焼成良好 色調灰黄色	灰かぶり 反転復元
27	坏身		灰原	①3.4 ②10.7 ⑤12.8	○	底部回転ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成不良 色調白灰色	
28	坏身		灰原	復元 ①3.7 ②12.1		底部ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、焼成良好 色調暗灰色	⅛より復元
29	高坏		灰原	②9.2		坏底部にカキ目、その他内外面ヨコナデ 胎土砂粒多い、焼成良好 色調暗灰青色	脚部欠
30	高坏		中通S3号墳前室埋立	①8.1 ②9.6		ほとんどヨコナデ？ 胎土砂粒やや多い、焼成良好 色調黒灰色	自然釉のため調整不詳



第143図　中通D－1窯灰原出土遺物実測図（須恵器）（1/3）

遺物番号	器種	挿図番号	図版号	出土地点	法量 ①器高 ②口径 ③胴径 ④底径 ⑤受部径	ヘラ記号	調整法及び特徴	備考
31	高坏（脚部）			表土		○	内外面ヨコナデ 胎土砂粒少し含む、 焼成良好　色調暗灰色	脚内面に放射状の刻線（ヘラ記号？）
32	高坏			表土		○	内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成良好　色調黒灰色	
33	高坏（脚部）			表土			内外面ヨコナデ 胎土砂粒含む、 焼成良好　色調灰色	
34	椀			表土	①4.3　②9.8	○	底部ヘラケズリ、体部上半カキ目その他ヨコナデ 胎土砂粒含むが精良 焼成良好、色調青灰色	
35	短頸壺			灰原	③10		底部ヘラケズリ、内外面ヨコナデ 胎土精良、焼成良好 色調暗灰色	
36	平（提？）瓶口縁			灰原	復元 ①7.8		内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含む、 焼成良好　色調暗青灰色	
37	平瓶口縁			表土	復元 ①6		内外面ヨコナデ 胎土砂粒やや含むが精良、 焼成良好、色調灰色	
38	甕口縁			表土	復元 ①17.6	○	内外面ヨコナデ？ 胎土精良、焼成良好 色調外黒色、内灰色	自然釉のため調整不詳
39	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、頸部に一部格子目たたき、部内面同心円文たたき、胎土砂粒多い、焼成良好、色調外褐灰色、内暗灰色	
40	甕口縁			灰原	復元 ②20.5	○	口縁内外ヨコナデ、肩部外面たたき、 胎土砂粒やや含む、 焼成良好、色調灰青色	
41	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、口縁下三条沈線、 その下左下がりのヘラ沈線 胎土砂粒多い、焼成良好 色調暗青灰色	
42	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、口縁下三条沈線 その下、左下がりのヘラ沈線、その下沈線 胎土砂粒多い、焼成良好 色調外暗灰色、内灰色	
43	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、口縁下二条の沈線、 ヘラ描き波状文、その下三条の沈線 胎土精良、焼成良好、色調暗灰紫色	
44	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、口縁下三条の幅広い沈線、その下左下がりのヘラ沈線 胎土砂粒含む、焼成やや不良 色調淡灰褐色	
45	甕口縁			灰原			口縁内外ヨコナデ、口縁下三条の幅広い沈線、その下左下がりのヘラ沈線 胎土砂粒多く含む、焼成良好 色調暗灰色	自然釉

4) その他の遺構

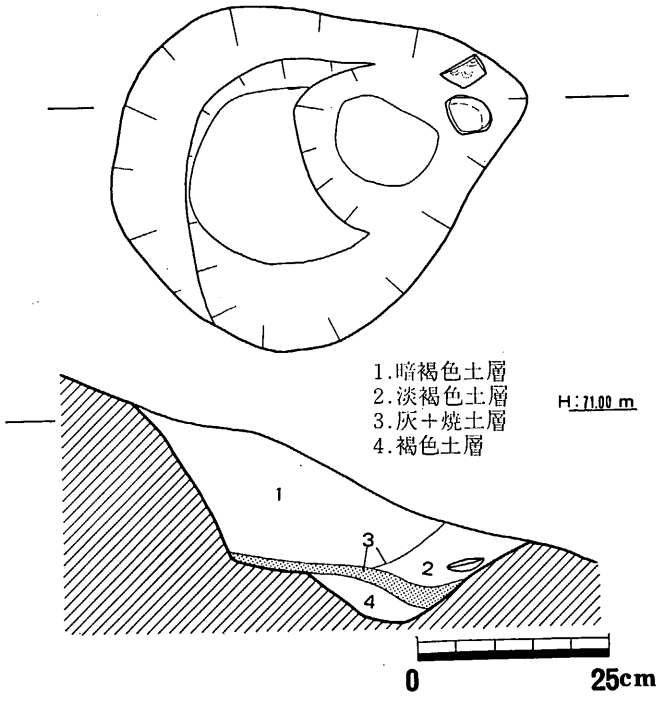
D－1窯をはさんで土坑が2口検出された。

土坑ＳＫ1（第144図）

D－1窯のすぐ南に位置する平形卵形の土坑である。主軸はほぼ東西方向（N93°W）り長径56cm、短径47cm、深さ約17cmで、東側が一段下がる。壁面の一部がやや焼け り、埋土にも厚さ2cmの灰層が見られる。東端で⅓欠損した須恵器坏身と甕の破片が出た。調査者の不注意で紛失してしまったが、窯跡出土須恵器と時期の異なるものではなた。いかなる性格の遺構かは判断しかねる。

土坑 SK2

D－1窯前底部の北1.5m、標高約70mの地点に位置し、径約55cmの円形を呈する土坑る。谷側に一段下がる。壁、床面ともに変化はない。遺物の出土もなかった。



第144図　中通Ｄ地点土壙ＳＫ1実測図（1/10）

5) 小　　結

中通D地点は牛頸川を見おろす丘陵西斜面に立地し、窯跡1基、古墳3基がある。第3次調査で調査したのは窯跡1基、古墳2基（S2・S3号墳）である。S1号墳は昭和50年に調査されたものである。D－1窯のやや北よりで以前崖面に灰層が露出したことがあったことから、窯跡は少なくともう1基はありそうである(註1)。

窯　跡

D－1窯はほぼ西に焚口が開く窯である（主軸N90°E)。地権者の関係で燃焼部を中心にして約6mを調査したにすぎない。しかし、調査部分より考えて全長10数メートルの長大なものとなるであろう。地下式と考えられる。

本窯はすべての床面を明確にすることはできなかったが、改造は天井の崩壊によってかなり明瞭に観察できる（巻頭カラー 第4参照)。即ち、築造後2～4回使用され、その後第1次改造を行い、天井の崩壊によって第2次改造を行っている。

遺物は、少数であるが、床面についた状態で、坏蓋・坏身が検出された。前述したように、第141図坏蓋11は築造時床面に伏せて、坏蓋・坏身のセット3・4は第1次改造床面に4が上となった状態で、さらに1・2は第2次改造床面（最終床面）上で1が上となった状態で出土した。

調整は坏身は底部を、坏蓋は天井部をヘラケズリし、それ以外をヨコナデあるいはナデで仕上げている。築造当判から第1次改造までの床面各層からの出土遺物に粗略さが認められ、それ以後はまたヘラケズリをかなりきちんと施している。また、法量の点で第2次改造時床面出土のものに小型化が顕著である。

第141図2のたちあがりはそれ以外の坏身のものと異なり、基部から端部までほぼ同じ厚みをもって、受部が広くなるような感じで湾曲しながら立ち上がっている。蓋となることも考えたが、1が坏身となることには疑問があり、身として扱った。

身と蓋の逆転現象については、小田富士雄によって、窯跡や古墳からの出土状況からその傾向が指摘され(註2)、あるいは九州の特徴とも考えられるが、各個別の須恵器をとり出した場合には観察者によって蓋と見るか、身と見るかについて見解の相異があるようであり、今後とも窯跡での出土状況、古墳、集落跡での使われ方に注意していきたい。D－1窯の出土状態は前述の通りである。D－1窯の時期はⅣ期を中心にして、一部Ⅴ期に及ぶと考えられる。

古　墳

3基とも丘陵裾に位置し、配列のし方は基本的に北支群と変わらない。3基とも南～西に開口し、小型の横穴式石室を持つ古墳である。S1号墳は不明だが、S2・S3号墳ともに円墳である。主体部については、かなり削られたS1号墳を除いて、残りの2基は石室プランから見れば単室の横穴式石室であるが、側壁の積み方から見て、複室の退化型式あるいはそれを意図したものと考えられる。類例は中通古墳群の北西約5kmに所在する観音山古墳群中第20号墳に求められる(註3)。

S2・S3号墳で注目されるのは墳丘中の灰層である。灰層出土須恵器、位置的関係から見て、これはD－1窯の灰原のものと判断して誤りないものと思われる。従って、両古墳築造年代の上限は須恵器編年Ⅴ期とすることができる。更にS3号墳「前室」出土須恵器はⅥ期と考えられるから、S3号墳の築造年代はⅤ～Ⅳ期、即ち7世紀前半と考えることができる。S2号墳もそう変わらない時期のものであろう。

註1　前田軍治氏ご教示
註2　小田富士雄「豊前地域における須恵器の編年」九州考古学研究古墳時代篇　1979
註3　柳田康雄編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集　福岡県教育委員会　1978

調査協力者（アイウエオ順）
川辺富美子、川辺敏子、境澄子、柴高実、柴高政子、白水富江、高山和恵、田中金太郎、田中ヤエ子、田中フミコ、藤ミツル、中島フミ、永野文子、中山定雄、中山さつき、樋口紀子、松尾ハギエ、山上ヒロ子

井手美知子、大谷龍代、小野淑恵、野田節子、松本利子、牟田昌子、長沼梅乃、吉村妙子

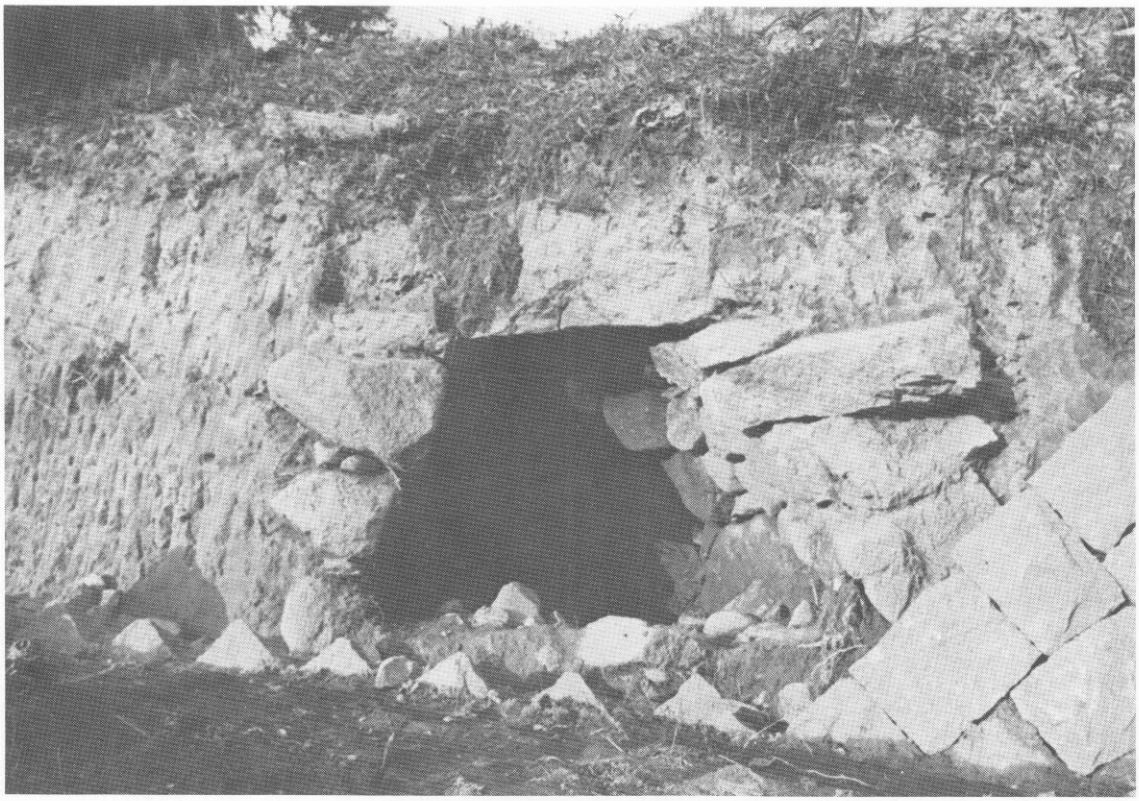
図　　版



中通遺跡Ｄ地点調査前



中通遺跡Ｄ地点気球写真



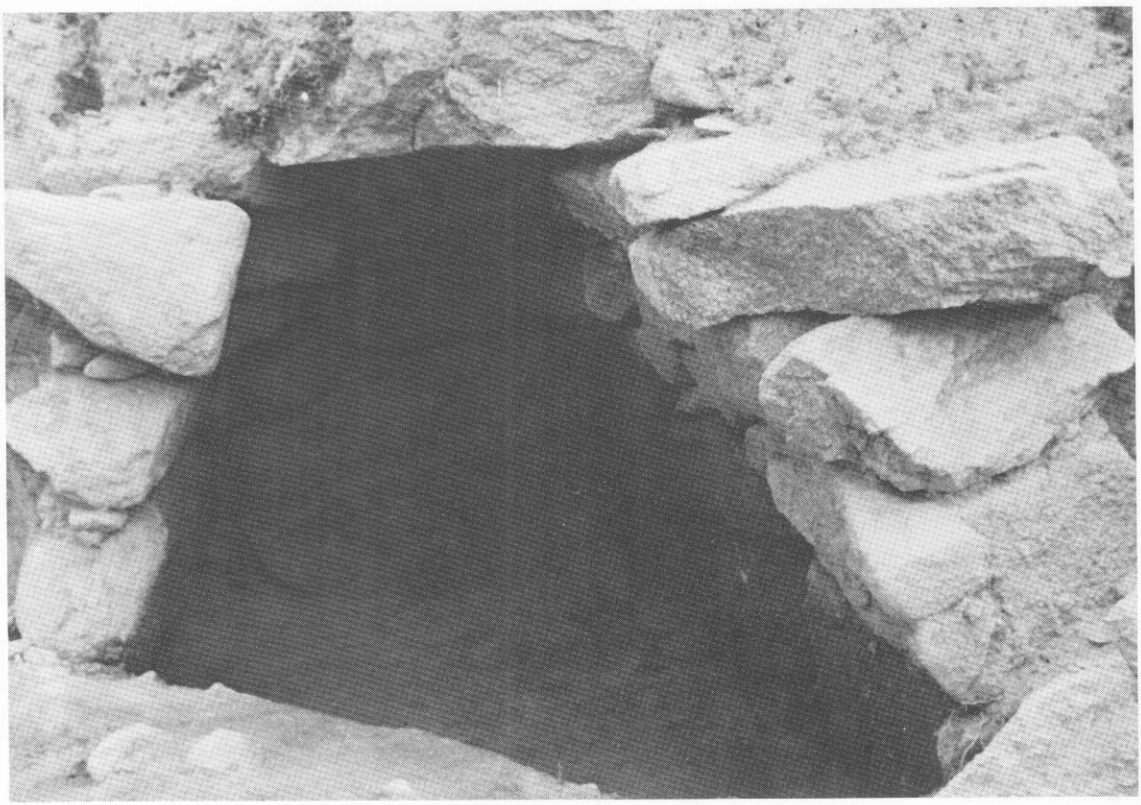
中通Ｓ１号墳全景



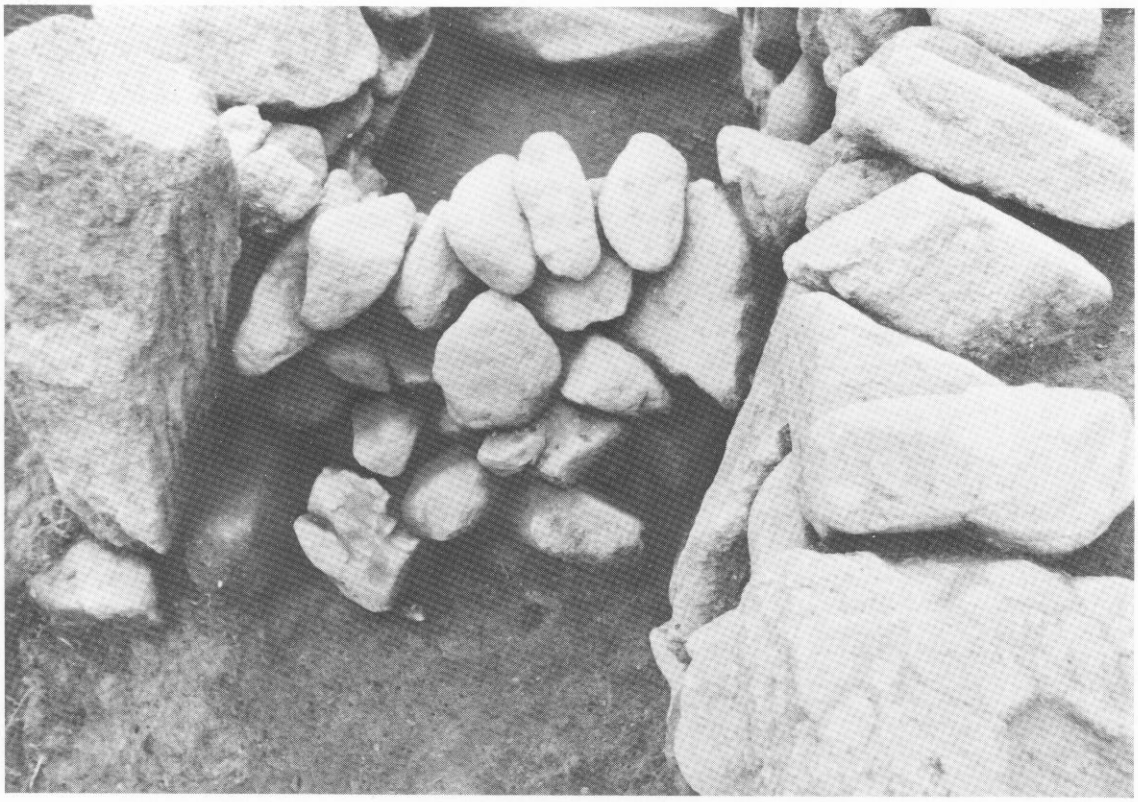
同上　墳丘断面



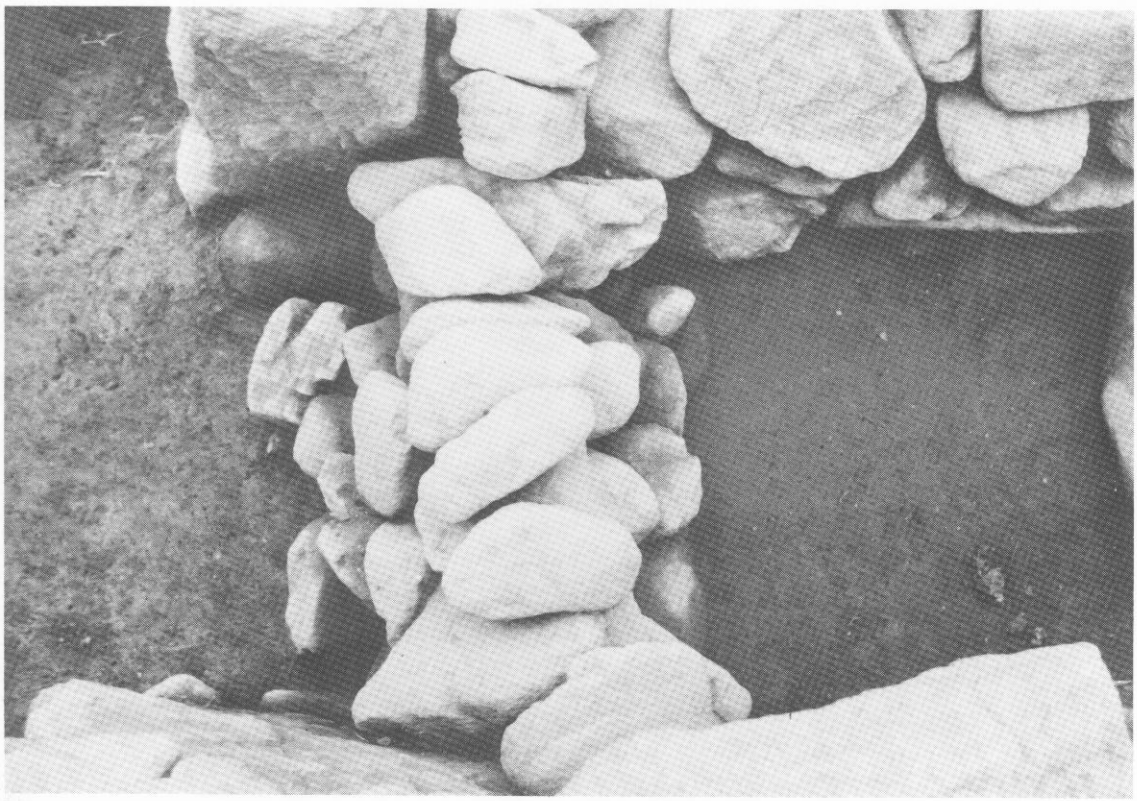
中通Ｓ１号墳右壁



同上　奥壁



中通Ｓ２号墳閉塞状況



同　上



中通Ｓ２号墳石室



同　上



中通
S 2 号墳石室
（墓道より）



同　　上



同上「前室」
右壁



中通Ｓ２号墳東西トレンチ断面



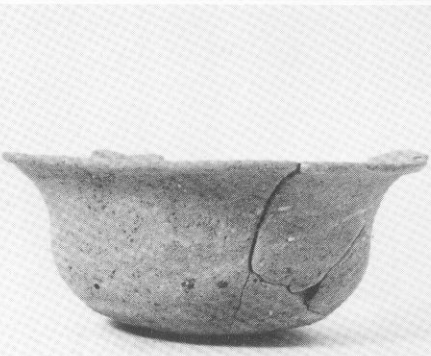
同上　墓道土師器出土状態



1



3



2



ガラス玉

1.子持ち勾玉　2.3 紡錘車



1

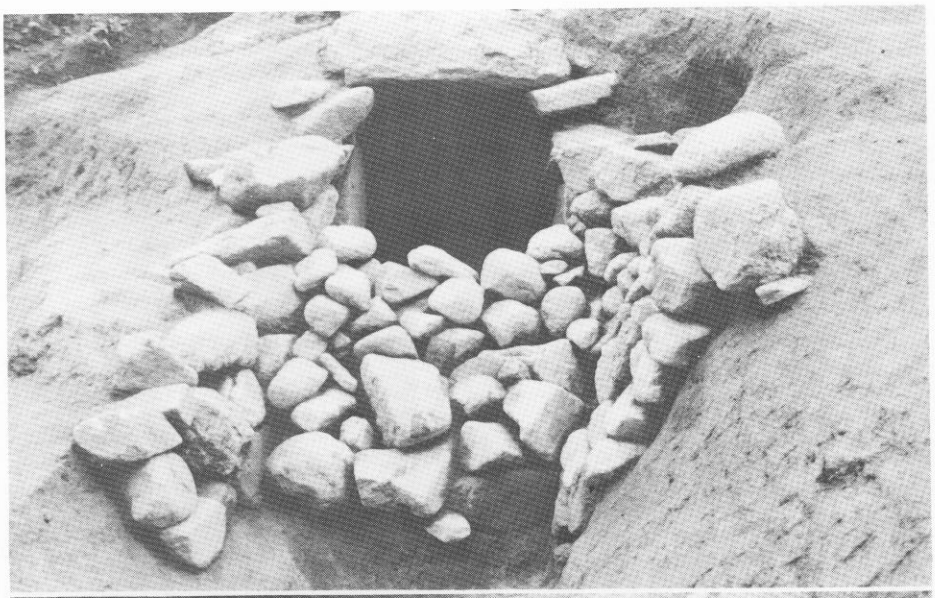


2



3

中通Ｓ２号墳出土遺物



S 3 号墳閉塞状況



同　上



同上　墓道断面



中通Ｓ３号墳全景



同　　上



中通Ｓ３号墳奥壁



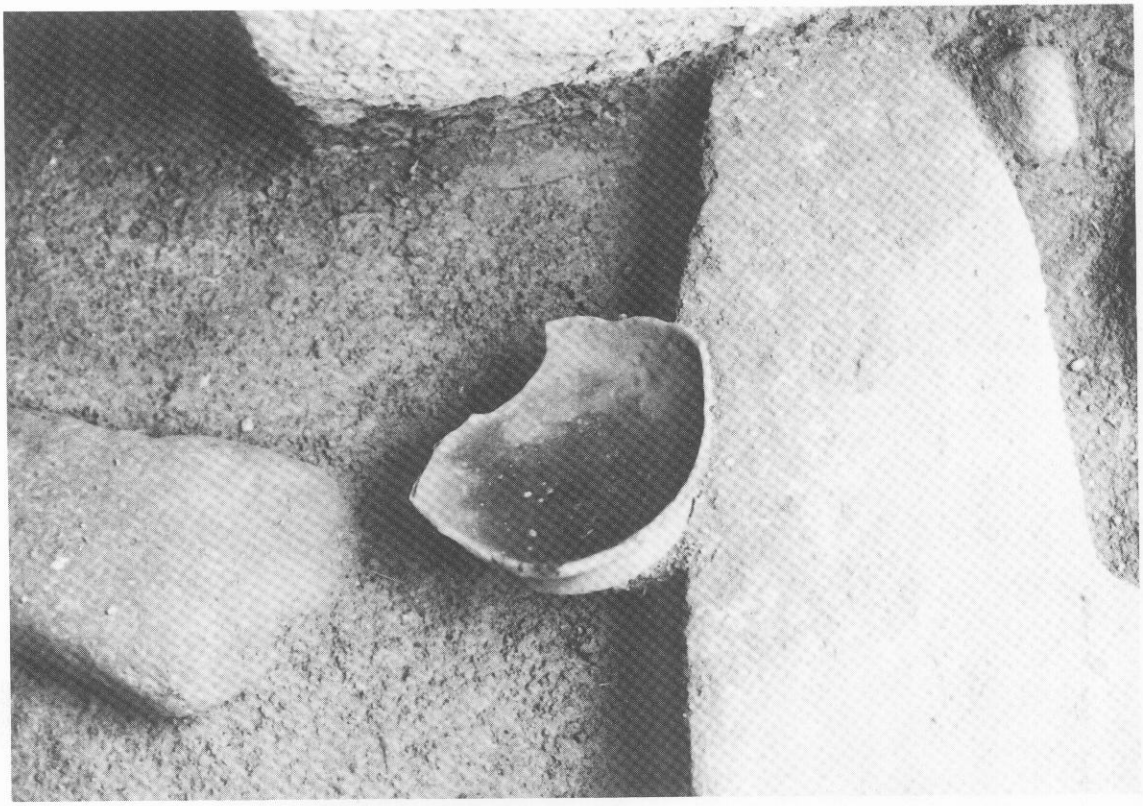
同上　石室構築状況



中通Ｓ３号墳「前室」羨道右壁



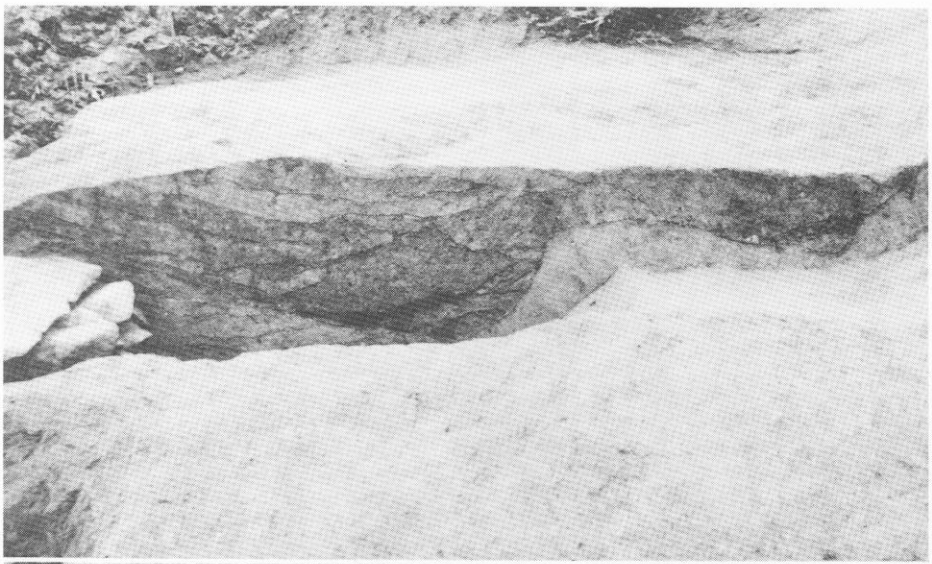
同上　遺物出土状態



中通Ｓ３号墳土師器出土状態



同上　須恵器出土状態



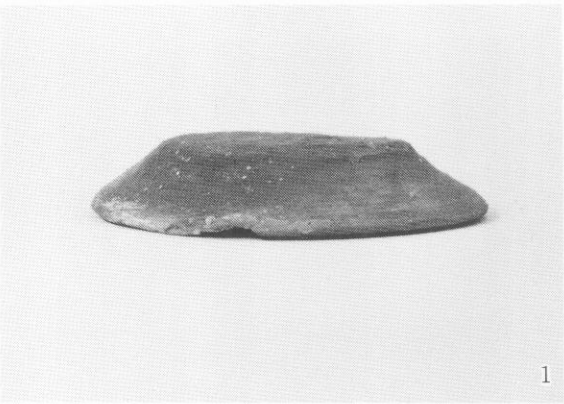
中通S３号墳
No.１トレンチ断面



同　上(拡大)



中通S３号墳
No.３トレンチ断面


1


2


3


4



中通Ｓ３号墳出土遺物



中通Ｄ－１窯全景



同　　上



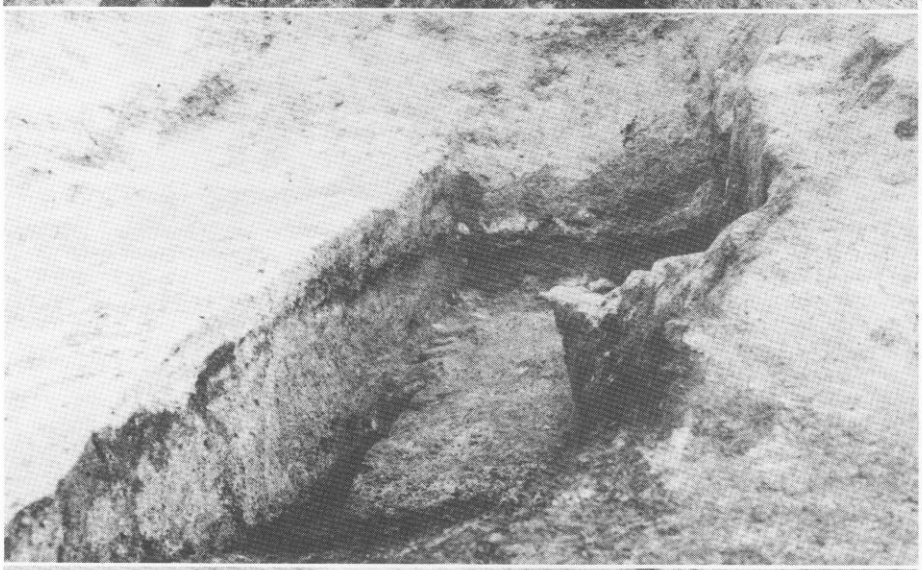
中通Ｄ－１窯第１次床面(窯上部より)



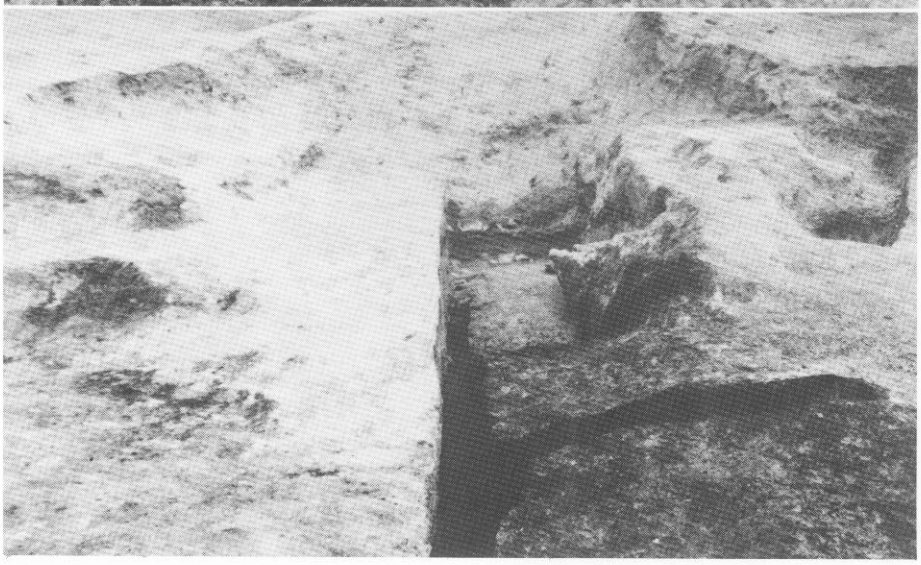
同上　燃焼部・焼成部の境付近



中通Ｄ－１
窯最終(Ⅲ)床面



同上　Ⅱ床面



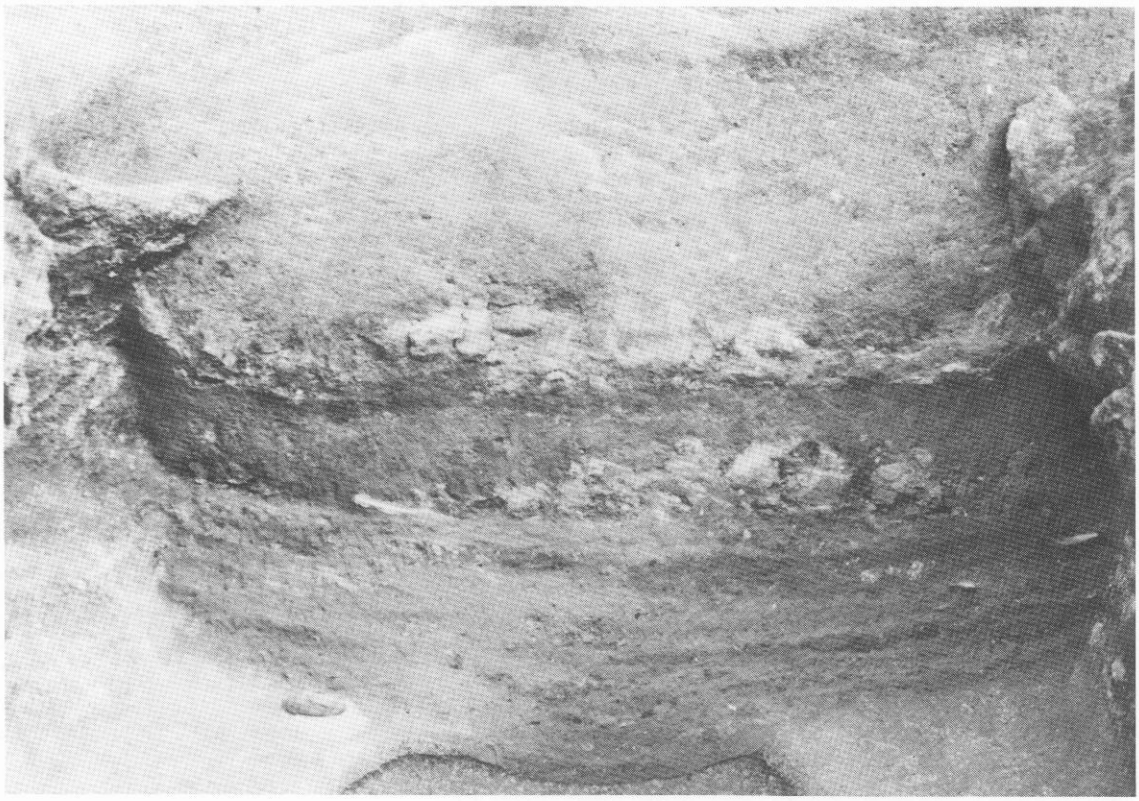
同　　上



中通Ｄ－１窯Ⅱ床面



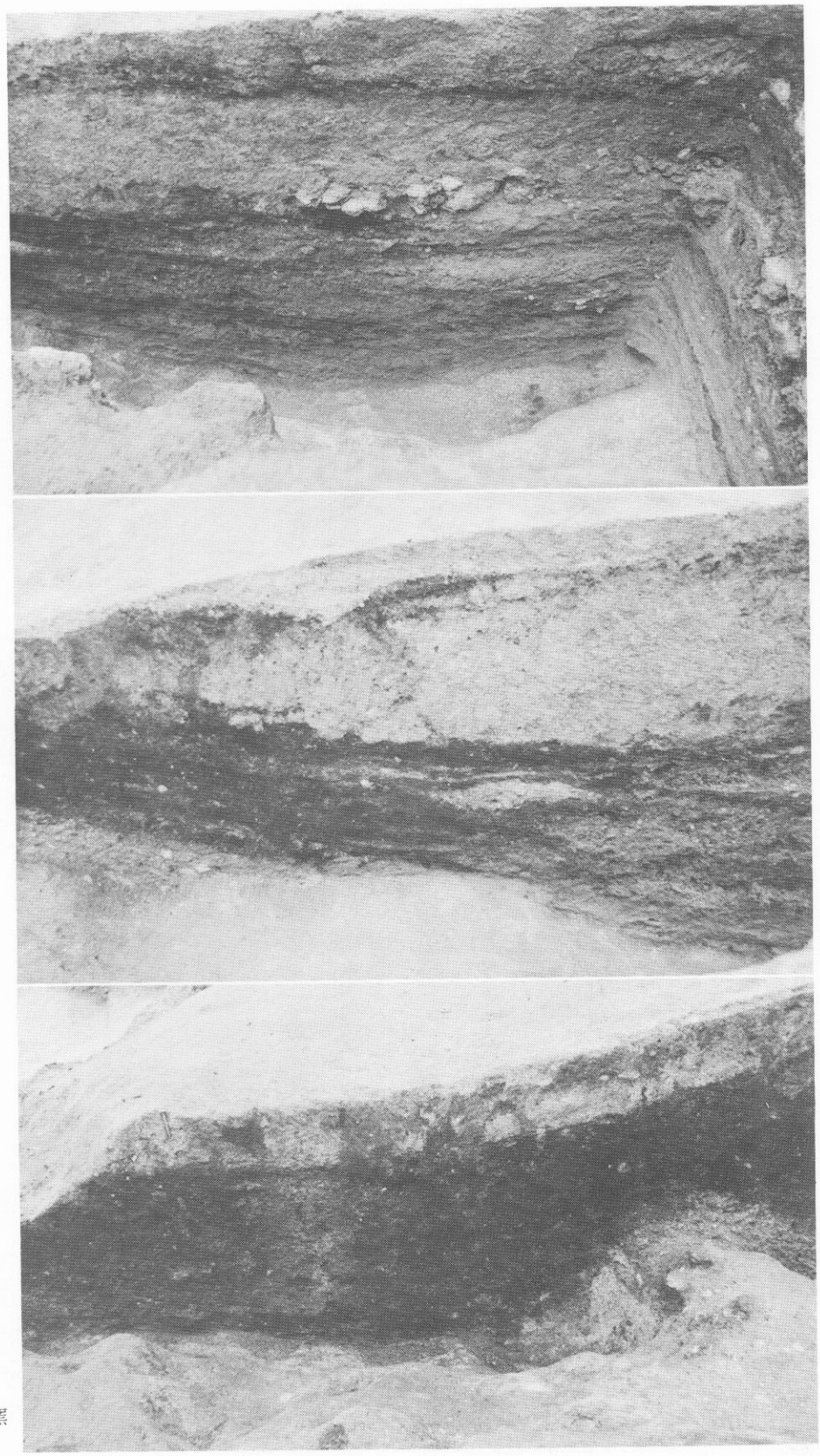
同上　Ⅱ床面遺物出土状態



中通Ｄ－１窯横断面



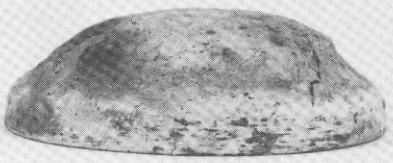
同上　第１次床面遺物出土状態



中通Ｄ－１窯
各床断面


1


2


3


4


5

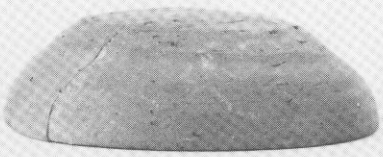

9


11

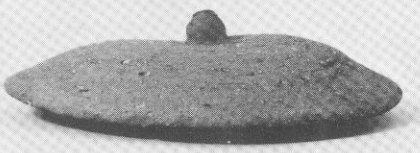

12


15

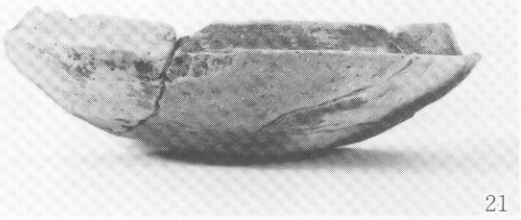

13

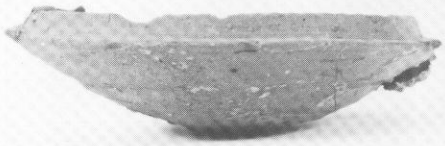

17


14


20

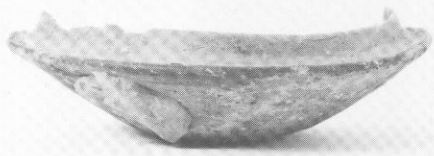
中通Ｄ－１窯出土遺物(1～11窯内、12～20灰原 その他)


21


22

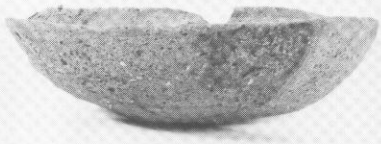

23


24


25

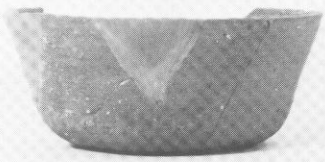

1


2


26


27

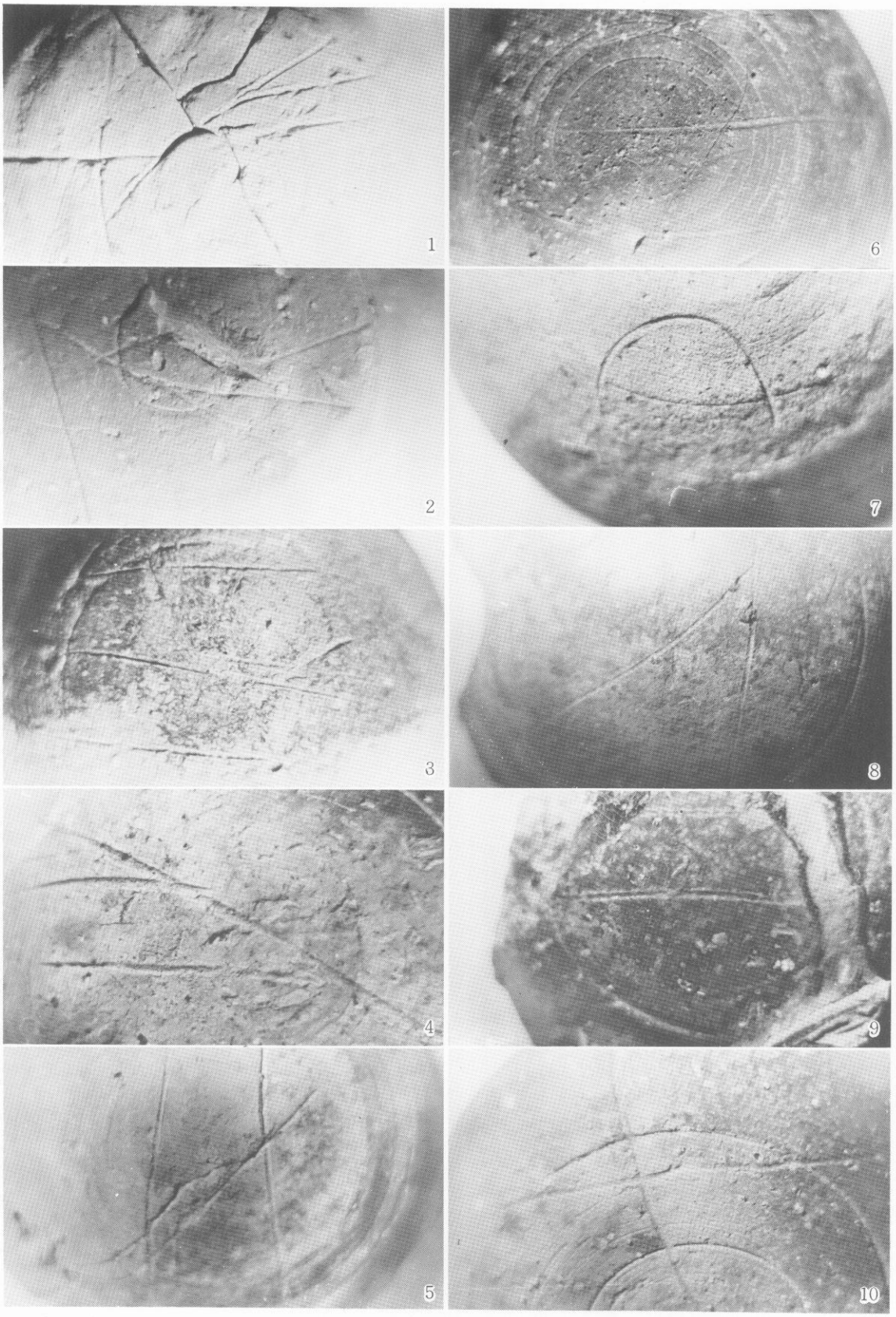

30


34


3


4

中通Ｄ－１窯出土遺物(21～34)、中通Ｓ２号墳々丘出土須恵器(１～４)



中通遺跡Ｄ地点出土須恵器ヘラ記号(1～2中通Ｓ３号墳、３～10中通Ｄ－１窯)

Ⅲ. 結　　章

牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書

大野城市は、福岡市のベットタウンとして、春日市、那珂川町、太宰府町と人口が昭和40年以降に増加している。

昭和47年4月に市制をひき、昭和55年3月には、約26,000人の増加があった。昭和40年（10月1日）25,234人→昭和47年（4月1日）36,752人→昭和55年3月62,180人と増大の一歩を跡している（註1）。

第145図はその変化を大野町時代と大野城市になっての1/50,000地図で、南側の牛頸地区に目をむけてほしい。丘陵地が削平され、住宅地になった地形の変化が理解できるであろう。

この宅造計画は、昭和30年代後半から、高度経済成長という路線に乗り、昭和40年代後半には、日本列島改造という名称まで生まれるにいたった。

第一次石油ショックで、成長の伸びはとまったが、景気の回復によって、漸々に区画整理事業とあいまって、地形は大規模に変化していった。

この地形が変化した地区が、大野城市の南に位置する牛頸地区である。6世紀から8世紀にいたった須恵器の大窯跡群である。いわゆる牛頸窯跡群と称される場所である。その実数は不明であるが約300基とも500基ともいわれている。

牛頸窯跡群は、太宰府町の西南方に存在する牛頸山（標高448m）の北方より東北方にかけて位置し、現在の行政区画によれば、大野城市大字牛頸より東に太宰府町、西に春日市の一部を含み、東西4km、南北に5kmの範囲に存在する。

Ⅰ章の中で前田軍治氏によって地名表と窯跡数を上げているこの資料が現在のところ最新のものである。

地区／年	総数 世帯数	総数 人口	牛頸地区 世帯数	牛頸地区 人口	百分率
昭和35年（10月1日）	4,128	16,960	154	1,011	6%
昭和40年（10月1日）	6,716	25,234	200	1,041	4%
昭和47年（10月1日）	10,373	38,508	927	3,710	9.6%
昭和50年（10月1日）	15,665	50,628	2,266	8,587	17%
昭和54年（10月1日）	19,140	61,377	3.703	13,685	22.2%
昭和55年（3月31日）	19,462	62,180			

※昭和44年南ケ丘1区に分離し、昭和48年南ケ丘1区と南ケ丘2区に分離した。これも旧牛頸地区にはいる。

昭和60年までに完成をめざす牛頸ダム用地の中の、土捨場、原石山付近には、少なくとも100基ぐらいの窯跡が存在すると推定される。このダム用地の発掘調査はいま計画の段階で、近日中に行なわれる予定である。

ではこの様に、位置付けられた牛頸窯跡群はどの様にして判明し、現在に至っているのだろうか。若干、研究史をひもといてみよう。



第145図　大野城市牛頸地区の推移（上）昭和38年　（下）昭和53年

I

大正時代頃からこの一帯に須恵器を生産した窯跡のあることが知られていた。これを明らかにしたのは、中山平次郎博士によってであった。

この踏査された折の資料は、小田富士雄氏によって、8世紀時代に比定されている。中山博士が踏査され採集された資料は、牛頸のどの地点であったか明確にできなかったことが惜しまれる資料である。

その後、この地域には調査が行なわれない空白の期間があり、昭和30年代後半にいたって、小田氏によって、上大利の野添窯跡群の一部が採土工事に伴って古式の須恵器が出土した（後日、野添7号及び8号窯と理解される）ことが確認されるにいたった。

昭和36年当時行なわれた第1回の遺跡台帳作成の際には、窯跡は殆んど登録されていなかった。昭和41年には、福岡県教育委員会によって分布調査が実施され、それを柳田康雄氏が大濠高校考古学部生徒の助力を得て、多くの窯跡の分布がはじめて、分布地図としてマッピングされた。これが現在の牛頸窯跡群の基礎となった。これを、全国遺跡分布地図として公表されている（註2）。

昭和43年6月、上大利、大浦窯跡群が福岡県教育委員会の渡辺正気、柳田両氏によって調査された。当遺跡は41年の分布調査の折、瓦と須恵器が採集されていたことによる。この発掘調査は、住宅団地の造成工事に伴なうもので、二基の窯跡が調査され、窯構造の一端が把握された。

そして、出土遺物によって、より多くの問題と興味深い資料を提供するにいたった。

同年12月には、東浦窯跡の調査が造成工事にさきだって国士館大学大川清氏の担当によって行なわれた。この年から、この地域での宅地造成が進展していったのである（註3）。

昭和44年10月、福岡県教育委員会は、再び採土工事に伴って、昭和38年に小田氏によって発見されていた野添窯跡群が破壊される恐れがあるということで、発見者である小田氏に調査を依頼した。2基の須恵器窯跡が発掘され、野添窯跡群の分布状態とその性格の一端が明らかにされた（註4）。

同年の12月より昭和45年1月にかけて、大谷地区の窯跡の発掘調査が住宅造成工事に伴って大川氏によって実施され、4基の須恵器窯跡群が検出された（註5）。

同年3月に、牛頸窯跡群が正式な報告書の中で登場してきた。それは、野添・大浦窯跡群の発掘調査報告書で福岡県文化財調査報告書の第43集であった。この報告書は、小田・柳田氏等によって執筆され、牛頸窯跡群を正式に学界に提示し、本窯跡群の歴史的意義に関する考察が展開されたものであった。特に「野添・大浦窯跡須恵器編年図」が作成され、筑前における須

恵器編年に一つの基準を提示し、今後における研究の出発点となった重要な窯跡であった（註6）。

昭和47年2月、福岡県教育委員会は、宅地造成に伴なう上平田窯跡群を調査し、四基の窯を検出した（註7）。

同年8月、立正大学坂詰秀一氏によって、平田窯の調査がなされ、A地点で一基と、B地点で三基の須恵器窯跡を検出している（註8）。

昭和46～47年にかけて、大野城市教育委員会において、大野城市遺跡分布地図作成に関連して牛頸地区の踏査が行なわれ、48年3月にはその分布地図が出来上がった。昭和41年当時の踏査の折、35ケ所の窯跡があったのが、70数基に増えている。その後はこの遺跡分布地図が基礎となり、その増加の一方で、本書では約200基近くの数を把握している。

九州縦貫自動車道の土取場として、牛頸窯跡群の東側に位置する、太宰府側の向佐野・長浦窯跡が、福岡県教育委員会によって、昭和47年10月と12月に調査され、7世紀後半から8世紀後半にかけての須恵器の編年がなされた（註9）。

それ以前に、大野城市分布地図の成果ともいえる奈良時代の窯跡について、九州考古学49・50の誌上を飾った（註10）。これによって奈良時代の須恵器の一端を知る事ができ、これを踏まえた上で向佐野・長浦窯跡の報告書にて、亀井明徳氏によって編年づけられた（註11）。

御笠川東岸地区釜蓋では、九州縦貫自動車道建設に伴なう雉子尾、裏ノ田の窯跡群が調査され、編年的な目安が考えられるにいたっていた。

昭和49年2月に、平田窯跡の報告書が刊行され、その『あとがき』に、「出土資料の調査結果について深く論及することはさけ、基礎的な資料としての性格を付与せしめるよう編集したのである」とされている。その中でも、生産須恵器の供給先は、平田窯跡のB－1号窯の場合、篦書資料を認識材料として東方4.5kmの太宰府町池田遺跡と関連づけることができる。これが今後の調査によって、総体的に生産須恵器の供給範囲が具体的に把握される一資料となってくると言及されている（註12）。

昭和51年10月から翌年2月にかけて、宅地造成開発地区に伴なう小田浦窯跡群の緊急調査が、立正大学の坂詰氏を中心とした調査団が組織された。窯跡は（A群－2、B群－2）4基を調査し、A群－1・2は6世紀末頃、B群の1号窯は6世紀末から7世紀前半、B群の2号窯は7世紀後半頃に位置づけられる。7世紀後半の窯の構造をつかむことができた（註13）。

この間に、調査されていた、雉子尾・裏ノ田窯跡群、向佐野・長浦窯の研究により、それぞれに編年が組まれ、野添・大浦窯跡で提示された編年に対して、その欠を埋めるために大綱が導き出された。向佐野・長浦窯は大宰府史跡出土須恵器との対比され、また雉子尾、裏ノ田窯跡は、御笠川東岸を中心として編年研究がなさていた（註14）。

牛頸窯跡群で生産された須恵器の需要先での研究では、山陽新幹線車輛基地の観音山古墳群

の出土須恵器について、若干の考察が述べられている（註15）。

また、理化学的な胎土分析によっても、全国的な窯跡出土の須恵器について分析がなされ、考古学と物理学の協同研究がなされている（註16）。

春日市側では、昭和53年１月から３月にかけて清掃工場建設に伴なう発掘調査で、浦原窯跡群の調査がなされ、八基の窯跡が検出され、その中、七基が発掘された。時期的には７世紀後半が主体であった（註17）。

同年11月から12月にかけて、惣利窯跡群の中の１基の窯跡を、時期的には６世紀後半という（註18）。その後、55年１月から３月にかけて１基を調査し、時期は７世紀後半から８世紀にかけてであった。春日市側の調査は全て、春日市教育委員会で行なわれている。

昭和53年10月から11月に、太宰府町吉松の神ノ前窯跡が調査され、２号窯の焼成部の第１次床面より軒丸瓦が出土している。また窯内崩壊土堆積層中からも、丸瓦と平瓦が出土している。軒丸瓦は瓦当と丸瓦の接続部の形態は畿内飛鳥寺の軒丸瓦と類似しているが、本例は模骨や成形台を使用しておらずこれまでの瓦の製作技法とは異った、むしろ土器（甕や壷）の製作技法に類似するようであり、きわめて注目をひく。これまで、窯跡及び寺院跡などから、所謂須恵質の初期的な瓦が検出されているが、中でも、大浦２号窯跡は須恵器と共に丸・平瓦が出土し、凸面に平行線文、凹面は同心円文および布目痕が残り、模骨製作技法でつくられている。時期的には６世紀末から７世紀前半頃とされ、九州における瓦の初現を提示されている。この神ノ前出土の瓦は、技法的にも異なり、伴出する須恵器は大浦出土の須恵器より時期的に若干遡るものと考えられ、A・D600年を遡ると思われ、造瓦を一段階古くなったことで、今後に注意を喚起することである（註19）。

昭和54年５月、水問題が解決して、本遺跡群の調査が行なわれ、中通A・B・C窯の調査が行なわれ、６世紀後半の窯が中心であった。この調査は９月まで行なわれた。

10月、太宰府町の向佐野宮ノ本遺跡は、〝買地券〟を出したことで名高いが、この遺跡には３基の窯が存在していた。時期は７世紀後半であった（註20）。

11月、中通の同じ丘陵であるが、南支群の古墳２基と窯１基の調査が行なわれ、時期的には７世紀中葉頃に位置づけされる。本報告書に詳細に述べてある（註21）。この窯の廃絶後に古墳を築造されていたことが注目をひく。

12月から55年１月にかけて、中通の北側の丘陵地、平田D地点に半壊していた窯１基を調査した。時期的には６世紀後半から７世紀前半に位置付けられる（註22）。

以上述べたことが、時間的に追ったものであるが、それぞれの窯には注目することが多く含まれている。

牛頸窯跡群の調査は、昭和43年の上大利、大浦窯跡によって、正式な考古学調査が行なわれて、まる10年過ぎたわけで、一応ここでは時間を追って回顧した。これを一覧表にするとつぎ

の通りである。

昭和55年３月31日現在、牛頸窯跡群で正式に発掘調査されたもの。

第11表　発　掘　調　査　一　覧　表　　(1980.３.31現在)

	窯跡名	所在地	発掘調査期間(昭和)	員数(調査窯数)	主催者 発掘担当者	刊行報告書	備考
1	大浦窯跡群	大野城市 上大利字大浦	43年６月	2 (2)	西日本鉄道株式会社 県教委(渡辺正気・柳田康雄)	①	
2	東浦窯跡群	大野城市 牛頸字東浦	43年12月	4 (3)	西日本鉄道株式会社 国士館大学(大川清)		一部概要ついては⑨でわかる
3	野添窯跡群	大野城市 上大利字野添	44年10月	10 (2)	県教委 九州大学(小田富士雄)	①	
4	大谷窯跡群	大野城市 牛頸字大谷	44年12月	6 (4)	西日本鉄道株式会社 国士館大学(大川清)		概要については⑨でわかる
5	上平田窯跡群	大野城市 牛頸字上平田	47年２月	4 (4)	日本信販株式会社 県教委(櫻井康治)	本書付編	
6	平田A-B地区窯跡群	大野城市 牛頸字平田	47年８月	A地区１(１) B地区４(３)	日本信販株式会社 立正大学(坂詰秀一)	②	
7	向佐野窯跡	太宰府町 向佐野	47年10月	3 (1)	県教委 県教委(亀井明徳・高橋章)	③	
8	長浦窯跡	太宰府町 向佐野字長浦	47年12月	1 (1)	県教委 県教委(亀井明徳・高橋章)	③	
9	小田浦窯跡群	太宰府町 牛頸字小田浦	51年10月	A地点２(２) B地点２(２)	大野城市教委 立正大学(久保常晴・坂詰秀一他)	整理中 ④ ⑤	
10	浦原窯跡群	春日市 春日字浦原	53年１月	8 (7)	春日市教委 春日市教委(丸山康晴)	整理中	
11	神ノ前窯跡群	太宰府町 吉松字神ノ前	53年10月	2 (2)	太宰府町教委 県教委(酒井仁夫・浜田信也他)	⑥	
12	惣利窯跡	春日市 春日字惣利	53年11月	1 (1)	春日市教委 春日市教委(丸山康晴)	整理中	
13	中通窯跡群	大野城市 牛頸字中通	54年５月	A地点２(２) B地点１(１) C地点１(１)	大野城市教委 県教委(副島邦弘・小池史哲他)	本書	
14	宮ノ本窯跡群	太宰府町 向佐野宮ノ本	54年10月	3 (3)	太宰府町教委 県教委(高倉洋彰・山本信夫他)	⑦	
15	中通窯跡群	大野城市 牛頸字中通	54年12月	D地点１(１)	大野城市教委 大野城市教委(舟山良一)	本書	
16	平田D地点窯跡	大野城市 牛頸字平田	55年１月	D地点１(１)	大野城市教委 大野城市教委(舟山良一)	⑧	
17	惣利窯跡	春日市 春日字惣利	55年１月	1 (1)	春日市教委 春日市教委(丸山康晴)	整理中	

① 小田富士雄・柳田康雄他『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書　第43集　1970
② 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣　1974
③ 亀井明徳・高橋章他「向佐野、長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅵ　1975
④ 上野精志「小田浦窯跡特集号」『大野城市の文化財』第９集　1977
⑤ 坂詰秀一・上野精志「小田浦窯跡」考古学ジャーナルNo.146　1977
⑥ 酒井仁夫編「神ノ前窯跡」太宰府町文化財調査報告書第２集　1979
⑦ 報告書作製中　太宰府町文化財調査報告書　第３集　1980
⑧ 報告書作製中　大野城市文化財調査報告書　第５集　1980
⑨ 大野町教育委員会編『大野町の文化財』第２集　1971



平田Ｄ地点窯跡全景(窯と灰原状態)　(昭和55年調査分)



平田Ｄ地点窯跡全景(灰原を除いた後)



平田Ａ地点窯跡全景　　（昭和47年調査）



平田Ａ地点窯跡 遺物出土状態

Ⅱ

牛頸窯跡群は平野川の両岸丘陵地帯を平野川支群と牛頸川両岸地帯を牛頸川支群を形成し、上大利より南ケ丘にかけての両丘陵地帯を上大利支群、牛頸丘陵西端地区、春日市内の春日支群、東方丘陵端部周辺に太宰府町の大佐野支群に大別でき、5支群区に分類できる。支群区の中を、牛頸川・平野川流域地区を上流域・中流域・下流域と細分できる、これを目安とするのは平野神社である。平野川支群と牛頸川支群では下流域に位置づける。牛頸窯跡群は平野・牛頸川の奥に行くほど、奈良時代の窯跡になる。

この中通窯跡群は牛頸川の中流域としてよいだろう。

牛頸窯跡群で主な窯跡について、その概要を若干述べてみたい。

東浦窯跡群（大野城市牛頸字東浦）

宅造を伴なうもので、昭和43年12月に、国士館大学大川清氏によって、発掘調査されたもので、窯跡4基を確認し、3基は発掘調査を行なったものである。煙道は3個の孔を有し、後側に排水溝を付設する。時期的にはⅢBからⅣにかけてで、その中心はⅣの時期である。操業期間は長期間であった。構造は地下式で、舟底形を呈している。特に注目をひくのは造瓦を行なわれていることである（註23）。

大谷窯跡群（大野城市牛頸字大谷）

宅地造成によって行なわれた調査で、国士館大学大川清氏によって実施されたものである。全部で6基を確認し、その内4基について調査されている。このうち3基は、ほぼ完全な形で残っていた。3基のうち2基は煙り出しが3本、他の1基は6本あり、特に類例がない。

完全に残っていた3基の窯には煙道部に付設するように、排水溝を設けている。また、6本の煙出しをもつものの焚口の側面に石を組んでいる。時期的には7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。他の2基は6世紀後半から7世紀前半に位置づけられる。

構造的には東浦窯跡群に類似し、6本煙出しを有するものは、前者よりも、一まわり小形化する。全ての窯は地下式の窯である（註24）。

平田窯跡群（大野城市牛頸字平田）

昭和47年8月から9月にかけて、宅地造成に伴なう調査を、立正大学坂詰秀一氏が実施された。平田窯跡群でもA地点とB地点である。

昭和55年1月、大野城市教育委員会が、対岸のD地点の調査を行なっている。

A地点では、1基窯跡で地下式構造を有し、全長16m、窯開始底面の傾斜は30°である。窯跡本体の北方に3m離れて、半馬蹄の半周溝ともいうべき溝が検出された。窯尻には三個の煙

出しを有し、わずかながら排水溝をもつと考えられる。ただ発掘調査では、半馬蹄形の半周溝と、煙出しから付設する排水溝との関係は、詳細に把握されていない。

B地点では3基の窯跡を検出している。半地下式の構造をもつもので、時期的には、出土遺物から7世紀中頃に比定できる（註25）。

D地点では1基の窯跡と灰原を検出している。窯尻と煙道部は破壊されている。窯本体の½焚口部より残している。時期的には6世紀後半に位置づけられるものである（註26）。

野添窯跡群（大野城市上大利字野添）

昭和44年10月に発掘調査が小田富士雄氏と県教育委員会の手によってなされた。6号窯と9号窯で実施された。6号窯は部分的な発掘で、刳りぬき地下式の無段登り窯である。6世紀前半に位置付けられる。9号窯が窯全体を検出したもので、焚口より全長10mで、煙出し部は幅90cmの隅角プランの煙出しを構成している。窯床面の傾斜は22°を測る。時期的には6世紀中頃に位置付けられている（註27）。

大浦窯跡群（大野城市上大利字大浦）

西日本鉄道による宅地造成のため発見された窯で、灰原中より初期の瓦を採集している。

調査は福岡県教委の手で行なわれ、その結果東西方向に隣接して2基（北側1号・南側2号）の窯を検出している。1・2号とも窯体は半分以上が破壊削平された状態であったため、全容を知ることができないが、その規模については推察できる。1号・2号とも窯体幅2m以上で、窯の長さもそれに比例して長大になる。時期的には1号窯Ⅳ期で2号窯Ⅴ期である。この窯は煙出し部に排水溝をもった多孔式の窖窯であったものと推定される。1・2号は操業時が共存はありえない。また遺物から、特に2号窯の第1次操業に宝珠つまみと共に瓦が出現し、第3次操業面に至っても高台があらわれないことである。また須恵器と瓦は同一焼成面から出土しているため、同時に焼いたと考えられる。

削平されてからの調査であったため、全容について不明な点が多いため残念な窯跡である（註28）。

上平田窯跡群（大野城市牛頸字上平田）

福岡県教委が行なったもので、西武化学工業によって宅地造成工事に伴なうものであった。4基の窯の調査が行なわれ、その詳細については、本書の付録として報告されているので参考にされたい（註29）。時期的には7世紀後半から8世紀である。

小田浦窯跡群（大野城市牛頸字小田浦）

西日本鉄道の宅地造成工事に伴なって行なわれた発掘調査で、立正大学坂詰秀一氏を団長として行なわれた。谷の入口部付近に4基からなる古墳群を有し、奥部に4基の窯跡が存在していた。立地は尾根を境界にして、東側斜面（A地区）に2基、西側斜面（B地区）2基で、このうちの3基には煙り出し部は多孔式で、それに付設するように排水溝を有する。時期的には6世紀後半より末で、B地区1号窯は6世紀より7世紀前半、B地区2号窯は7世紀後半であ

る。報告書の刊行がまたれる窯跡群である。

どちらかといえば中通遺跡群と同じ様な性格を有していると考えられる（註30）。

神ノ前窯跡群（太宰府町吉松字神ノ前）

調査は太宰府町教委の主催で、県教委が担当した。2基の窯跡からなるもので、両窯とも地下式の構造を有している。焼成部上半と煙り出し部が削平されているためその全容はつかめないが、両者とも窯幅2m前後を計測することから、特に2号窯の焼成部の第1次床面から出土した瓦に興味がひかれる。

瓦は大浦2号窯跡出土の須恵器と共に、丸・平瓦が出土し、凸面に平行線文、凹面は同心円文および布目痕が残り、模骨製作技法によって作られている。しかし、神ノ前窯跡出土の瓦は技法的および製作時期においても従来の瓦に対する考え方とは律しきれないことがある。九州における瓦の初現に提示された時期よりも一段階古く、A.D600年を若干遡る結果を得ている（註31）。

浦原窯跡群（春日市春日字浦原）

清掃工事建設のために調査をおこなわれたもので、春日市教委が担当した。8基の窯跡の内7基を調査し、1基を保存した。窯は7世紀後半を中心とするものが大多数であり、6世紀末から7世紀初頭の窯1基を検出したという。現在整理中で、近日中に報告書が刊行されるため詳細については省略する（註32）。

宮ノ本窯跡群（太宰府町向佐野字宮ノ本）

学校建設に伴なって行なわれた調査で、太宰府町教委が主催し、福岡県教委で調査された。〝買地券〟を出した遺跡として有名をはせた。窯跡3基が同造成地内にある。窯の時期は7世紀後半ということであった。また、現在報告書作成中であるため、詳細を報告書にゆずりたい（註33）。

向佐野・長浦窯跡（大野城市向佐野字長浦）

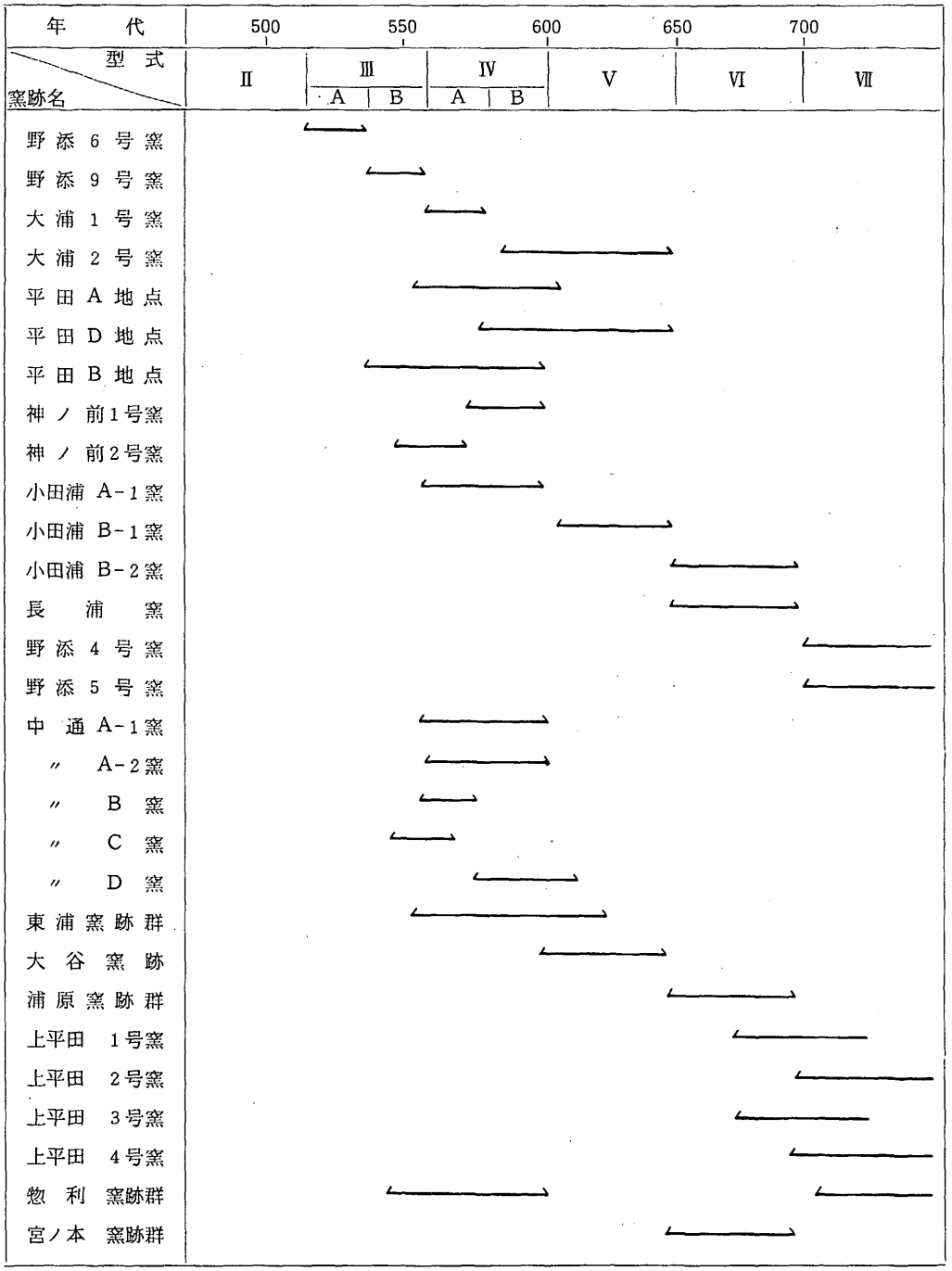
九州縦貫自動車道建設に伴なう土取場として、福岡県教委が発掘調査を行なった。

その結果、向佐野窯跡1基と長浦窯跡1基とを発掘調査を行なった。

向佐野1号窯に煙出し部付近のみで他は削平されていた。長浦窯跡は全長約3.3mの小形のもので、天井は煙出し部で若干残したもので地下式ないし半地下式をなしている。時期は7世紀中葉から7世紀後半にかけてであった。このことは奈良時代の大宰府政庁との関係を把握することが問題となってくる。大宰府との関連から重要な時期である（註34）。

以上概要を述べたが、それぞれの窯跡ごとについて、小田氏の編年を基礎として時期的なものを表示する。

第12表　牛頸窯跡群の年代



この表を踏まえて、窯跡をそれぞれ、構造を時期ごとに比較すると、窯の構造について、若干の変化があることが理解できる。

この構造の変化は、牛頸窯跡群の特徴というべきもので、地形的なものを含めて、時間的な目安となり得ると考えられる。

窯の構造については(註35)、小田氏が天観寺窯跡群(註36)の中で若干述べられている。それによると、「窯体幅は一般に中ふくらみ、両端すぼみのいわゆる〝とっくり〟を倒した平面形をなす〝徳利窯〟に近いものと、窯内と焚口の幅が、ほぼ同一のものがある」とされ、天観寺窯跡群の特徴は焚口と窯内の幅に大差がないということで、窯体の全長が10m前後であるということである。

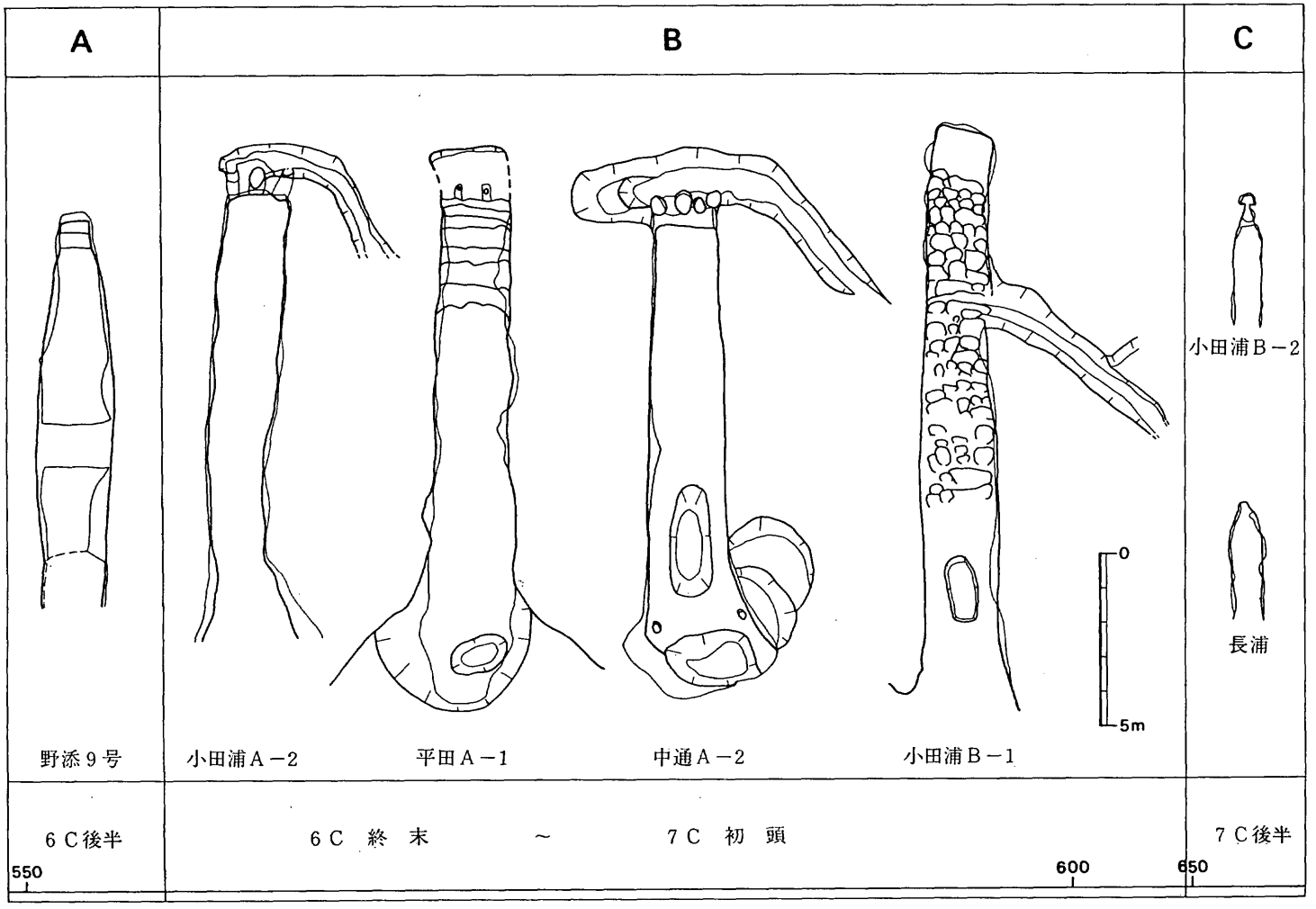
時期ごとに窯の構造について、整理して分析してみると下記の様な結果となる。

窯名	分類	方位	傾斜	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(天井)(cm)	改造	煙出し孔の数	排水溝	生産遺物	窯占有地
野添9号窯	A	N-38°-W	22°	1,000	180～220	80 120 〳-〳-35 105 130	ナシ	1	無	須恵器	山丘尾根
小田浦A-1号窯	B	N-30°-E	33°	1,690	310	100 〳 120	11	4	有	〃	山丘尾根
平田A-1号窯	B	N-82°-W	28°～30°	1,600	200～270	125	9	3	有	〃	山丘尾根
中通A-2号窯	B	N-38°-W	30°	1,600	250		4	4	有	〃	山丘尾根
中通B窯	B	N-75°-W	20°～30°	1,690	330		3	3	有	〃	山丘尾根
小田浦B-1号窯	B	N-30°-E	40°	1,800	220	150	12	3	有	〃	山丘中腹
小田浦B-2号窯	C	N-4-E	40°	370	80	60	2	1	無	〃	山丘中腹
長浦窯	C	N-69°-W	31°	330	95		2	1	無	〃	山丘中腹

それをまとめると、構造の大筋について、**A・B・C**の3分類できる。

A型　6世紀中頃までの窯で、全長10m前後で、平面形が細長く胴ふくらみのあるもので、燃焼部と焼成部の境界が明瞭でなく、床面の傾斜は10°から25°という緩傾斜を示す。煙出し部は1カ所で、排水溝は設けられていない。窯の立地については、山丘の尾根線近くの高所である。

B型　6世紀後半から7世紀前半頃の窯で、全長は10mをこえて15m前後を呈し、平面形は、細長いずん胴のもので、焚口の幅と焼成部の幅とほぼ同一で、焼成部と燃焼部は舟底状のピットにて、理解できる。床面の傾斜角は、燃焼部と焼



第146図　牛頸窯跡群窯構造の変遷（1/100）

成部とには大きく差があり、焼成部では25°から30°を超す値を示す。最大の特徴は煙出し部が多孔式となり、その付設として排水溝がある。窯本体に対してほぼ直交する様にして左右に弧状を描き振り分けて、地山の傾斜と一つにしている。窯の立地については、A型とほぼ同じで、尾根直下に排水溝を設けながらつくられている。また例外的には緩傾斜の丘陵中腹に立地することもある。

C型　7世紀後半から8世紀には、窯は全長5m前後で、小型化し、平面形は、いわゆる〝やっとこ形〟を呈している。焚口部から焼成部に行くにしたがって徐々につぼまり、煙出し部に至っている。床面の傾斜角は25°から50°を超すもので、燃焼部と焼成部との傾斜角は相違する。煙出しに付設する様な排水溝はない。窯の立地については、山丘の中腹付近に立地し、操業期間は短い。

以上が牛頸窯跡群のメルクマールである。

1．窯の大きさは

A型よりもB型が大きい、C型よりもB型が大きい、C型よりもA型が大きい。

A型＜B型＞C型、A型＞C型となる。まとめるとC型＜A型＜B型となる。

2．排水溝はB型のみに付設される。

一般的に操業時期はC型が短期間で廃絶されている。

この分類と編年型式とをかみ合わせてみると、ⅢB～Ⅳの時期に窯の増加と構造的な変化がみられる。その実年代は6世紀中頃から後半にかけてである（註37）。

この時期こそ、須恵器の器形は6世紀中頃以前の前期において、朝鮮のそれから僅かな脱却しか示さず、全国的にも地域差が殆んどみられず、色調も黒味を帯びたものの多いことや轆轤成形後の箆削り手法の著しいことは焼成や成形の技術が未熟であることを物語っている。この1世紀に及ぶ年代のうちに器形の分化があまり進行していないことは分業がこれらの集団内部に留まって、異なる集団との間に個性的な差異を生み出すに到らなかったことを示すものである。6世紀中頃以降になると、生産地の増加が全国的に認められるとともに器形の分化が著しく進行し、地方差を生じてくる。このことは、須恵器の量産化を示唆するもので製作技術変化が表われ、器形の組み合わせや、窯の構造が変化する。牛頸窯跡群の中でもこのことは把握することができる。

須恵器の工人集団は初期の段階においては部民制の形成を必要とするような条件を有していたが、その様式の画一性で示される様に政治勢力による特殊な位置としておかれた。しかし陶部として形づけられるのではなく、結局、部民制の外周に位置づけられ、族長層の支配する一定交易圏を基盤として考えられる（註38）。このことは牛頸窯跡群と古墳とのあり方についてそれを把握することが先決となってくる。

今回の発掘調査では、裾部に古墳群を築造し丘陵部に窯をつくられている。一般的に後期古墳の立地し占有する場所は、丘陵状の尾根線を中心にそれの直下や横に位置するもので、中通古墳群のあり方とは相違する。

その一つの例はD地点の窯と古墳との関係である。窯の廃絶後古墳が築造されたというデータである。しかし牛頸窯跡群をつくった工人集団は最終的には、集団内部でも階層分化を生じ、狭い地域共同体の枠を破って、生産が拡大され、これによって、工人集団の位置が部民制から分離され、族長層の枠からもはみ出したことが傍証される例である。

このことは福岡平野を中心とする窯業生産は集約され、6世紀末からこの牛頸窯跡群より生産されるに至った。この生産をもとに、当時の牛頸の人々は生活を営むこととなった。

牛頸窯跡群は、6世紀中頃に窯が築かれ、奈良時代の8世紀後半まで、約300年間にわたって焼かれた当時の大工業地帯である。このことは7世紀中頃に水城築堤、小水城等の専守防衛線内にとりこまれた。これは窯の立地と原料との因果関係を示すこととが、一つの条件であり、また6世紀半頃から7世紀半頃まで1世紀にわたる生産地帯で、その重要性は明白なことによる。

以上、牛頸窯跡群について述べてきたが、須恵器の編年についての研究は、牛頸窯跡群を中心とする小田・亀井両先学による編年研究（註39）がなされ、岩瀬・酒井・川述氏による御笠川東岸流域地区の須恵器の編年（註40）がなされた。これを基礎として、これに補足補填することによって、より完全な窯跡ごとの編年をめざすことが今後の課題となる。

今回の中通窯跡群についてはその資料を提示したものである。

近い将来、牛頸窯跡群のそれぞれの窯跡について、詳細な報告がなされ、それを基礎として研究が行なわれれば、それぞれの窯跡の個々の編年的な位置づけと工人集団の動きの実体を補足することが可能であり、工人集団（人間集団）の行動のモメントとして、つまびらかにすることができるであろう。

今回は整理する時間不足で、多くの資料について消化できずじまいで、悔まれるが、今後これを脱却することを指針したい。

「牛頸の窯跡群について、個々の窯ごとの資料集積こそがより完璧な編年になる」といった、今は亡き上野精志学兄に本論を捧げ、今後の励みとしたい。　　（副島邦弘）

註

註1　大野城市人口増加統計資料より

註2　文化財保護委員会編『全国遺跡地図』—福岡県—1968

註3　報告書は未刊であるが、概要については、大野町教育委員会編『大野町の文化財』第2集　1971　P6～P7で把握できる。

註４　小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書　第43集　1970

註５　報告書は未刊であるが、概要については、大野町教育委員会編『大野町の文化財』第２集1971　Ｐ６～Ｐ７

註６　註４に同じ、６世紀中頃から７世紀前半にかけて編年図が提示さる。

註７　本書付編を参照のこと。

註８　概要については、上野精志「平田窯跡」『大野城市の文化財』第５集　1974

註９　亀井明徳・酒井仁夫・高橋章「向佐野・長浦窯跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』－Ⅵ－福岡県教育委員会　1975

註10　横田賢次郎・川述昭人・酒井仁夫「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」『九州考古学』49.50　1974

註11　註９に同じ。

註12　坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣　1974

註13　概要については、上野精志「小田浦窯跡特集号」『大野城市の文化財』第９集　1977 と坂詰秀一・上野精志「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』№146．1978

註14　岩瀬正信・酒井仁夫・川述昭人　「御笠川東岸における須恵器の編年について」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－ⅩⅦ－福岡県教育委員会　1977

註15　木下修「Ⅴ－３須恵器について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第５集　福岡県教育委員会　1978　Ｐ200～Ｐ205

註16　三辻利一「窯跡出土須恵器のケイ光Ｘ線分析」『考古学と自然科学』第11号　1978　Ｐ49～Ｐ69

註17　春日市教育委員会、丸山康晴氏教示

註18　註17に同じ。

註19　酒井仁夫・石松好雄・高橋章『神ノ前窯跡』太宰府町文化財調査報告書、第２集、太宰府町教育委員会　1979

註20　報告書作製中、山本信夫氏教示

註21　本書Ｄ地点は大野城市教委舟山良一氏担当。

註22　平田Ｄ地点　現在報告書作製中、大野城市文化財報告書　第５集として刊行予定

註23　概要については註３に同じである。他に高橋章氏に教示を得た。

註24　註５に同じ。

註25　註12に同じ。

註26　註22に同じ。

註27　註４に同じ。

註28　註４に同じ。

註29　註７に同じ。

註30　註13に同じ。

註31　註19に同じ。

註32　註17に同じ。

註33　註20に同じ。

註34　註９に同じ。

註35　中村浩『須恵器』ニュー・サイエンス版 1980 に窯構造の概要について若干記されている。

註36　小田富士雄編『天観寺山窯跡群』第三部総括、Ｐ203　他にも註４の中にも若干記載されている。

註37　一般的に完全な日本化をとげた時期で地方の窯跡は増加する傾向にある。しかしながら畿内の「陶邑」では減少する傾向がある。中村浩他『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ　大阪府教育委員会　1975～1979

註38　浅香年木『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局　1971
註39　註４と註９に示めされている。
註40　註14と同じ。

付

上平田窯跡群

大野城市大字牛頸字上平田所在窯跡の調査概要

本文目次

1）調査の経過…… 197
2）上平田窯跡の立地…… 198
3）窯跡の調査…… 198
　第1号窯跡…… 198
　第2号窯跡…… 201
　第3号窯跡…… 203
　第4号窯跡…… 205
4）小　結…… 205

上平田窯跡の発掘調査

1）調査の経過

上平田窯跡の発掘調査の端緒となったのは、西武化学工業株式会社の宅地造成によるものである。発掘調査は、昭和47年２月25日から４月５日まで、福岡県教育委員会文化課の指導を受けて櫻井康治、肥山正芳、渡辺和子、桑田和義が実施した。

２月25日　西武化学工業株式会社の立ち合いのもとに現地を視察、調査の打合せを行なう。発掘前の全景写真を撮影する。

２月27日　窯を確認するために、表土剝ぎを行ない１号窯跡を発見する。

２月28日　窯跡傍の北側斜面に多量の須恵器を発見する。

３月６日　窯跡内の発掘を開始する。１号窯灰原に窯主軸線に沿ったトレンチ、直交のトレンチを設定する。

３月７日　窯床面より、最終操業時の遺物が多く発見された。

３月８日　北側斜面の須恵器に混って、土師器甕が出土した。灰原の横断面図を作成する。

３月９日　造成区域内の他の丘陵斜面において、窯跡の所在を確認する。１号窯跡の立地する（第１地区）北丘陵の南斜面（第２地区）において、灰原を確認する。

３月10日　１号窯跡の清掃、灰原の縦断面図を作成する。

３月11日　第２地区の南斜面にトレンチを設定し、窯跡の確認をする。１号窯跡の灰原の発掘を完了する。

３月12日　第２地区は、丘陵頂部造成の際の土砂が多量に堆積しているため、ブルドーザにより、この土砂の排除を行なうことにした。

３月13日　１号窯跡の実測図を作成する。

３月14日　１号窯跡周辺の平板測量を行なう。

３月21日　１号窯跡実測図作成を完了する。第２地区において、平行に並ぶ２基の窯跡を発見した。西側の窯より３号・４号と称する。３号窯跡は、ほとんど破壊され窯床の１部を残す。

３月22日　３号窯・４号窯の灰原に、主軸線に沿うトレンチと直交のトレンチを設定する。

３月23日　３号窯跡灰原のトレンチにおいて、窯（２号窯）の煙道を発見し、トレンチを拡張。

３月24日　２号窯跡の主軸線に沿って、灰原にトレンチを設定する。３号・４号窯跡の実測図作成及び撮影を完了する。

４月２日　２号窯跡の実測図、灰原縦横断面図の作成を完了する。

４月５日　第２地区の近景を撮影し調査を終了する。

2）上平田窯跡の立地

上平田窯跡は、大野城市大字牛頸字上平田に構築された須恵器窯ある。牛頸川によって形成された谷の東に、同様な長さ2.5kmの狭い谷がある。この谷の最も奥の、標高50mの位置に窯は構築されている。またこの谷のなかには、北約１kmのところには小水城、約700mの西側丘陵には野添窯跡、東側丘陵には大浦・平田窯跡などが立地している。

3）窯跡群の調査

第１号窯跡

（1）立　　地

西に傾斜する斜面で、道路面より約６m（標高57m）の位置に焚口を構えた窯である。

（2）窯の構造

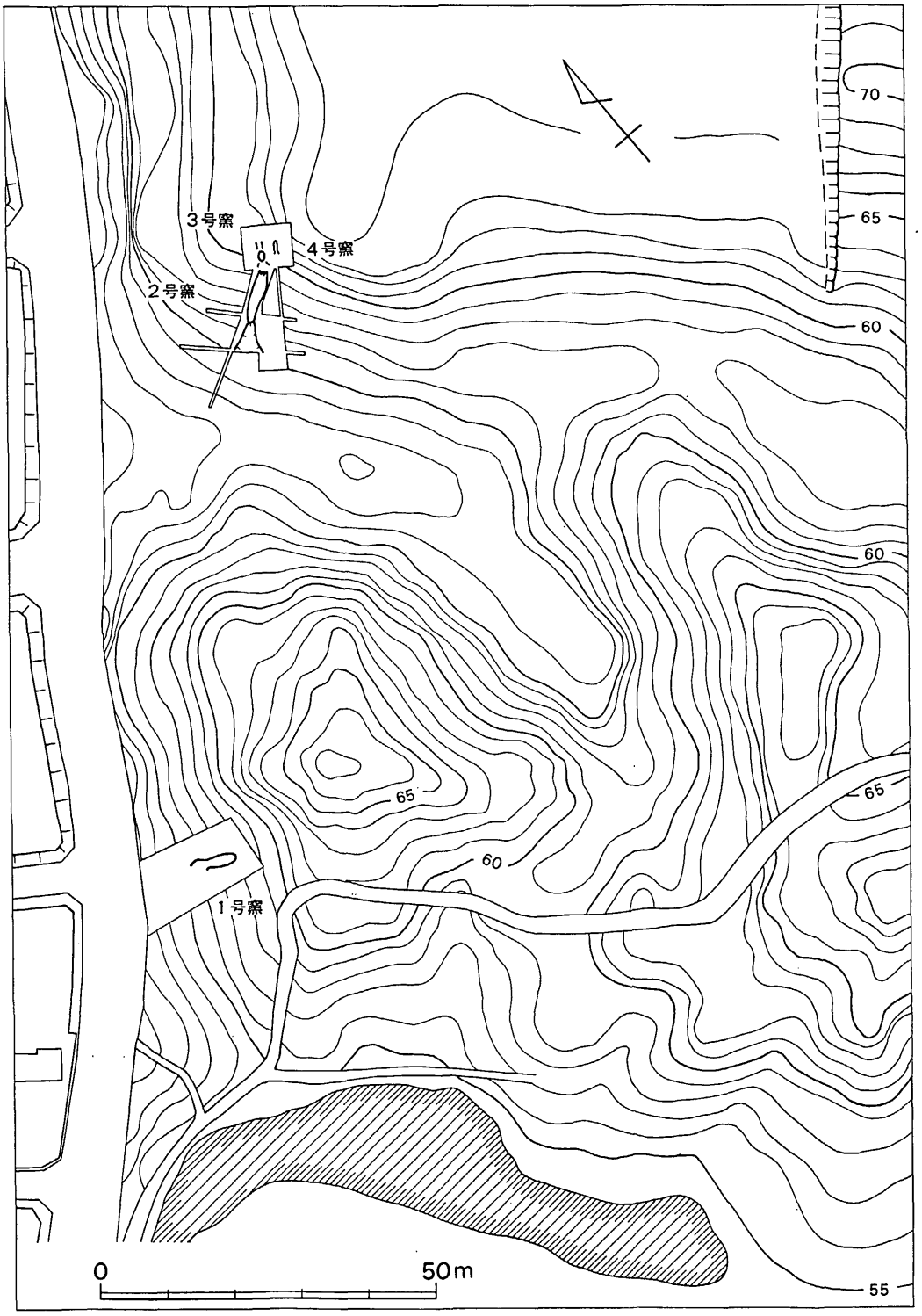
花崗岩バイラン土の地山に掘り込まれた、半地下式の登窯である。煙道及び天井部はすでになくなっており、残存する長さは水平距離約4.3mを測る。窯の主軸は N-117°-E、窯床面の傾斜は22°である。

前庭部　明確には判別しがたいが、急な傾斜面に１部掘り込みが確認された。

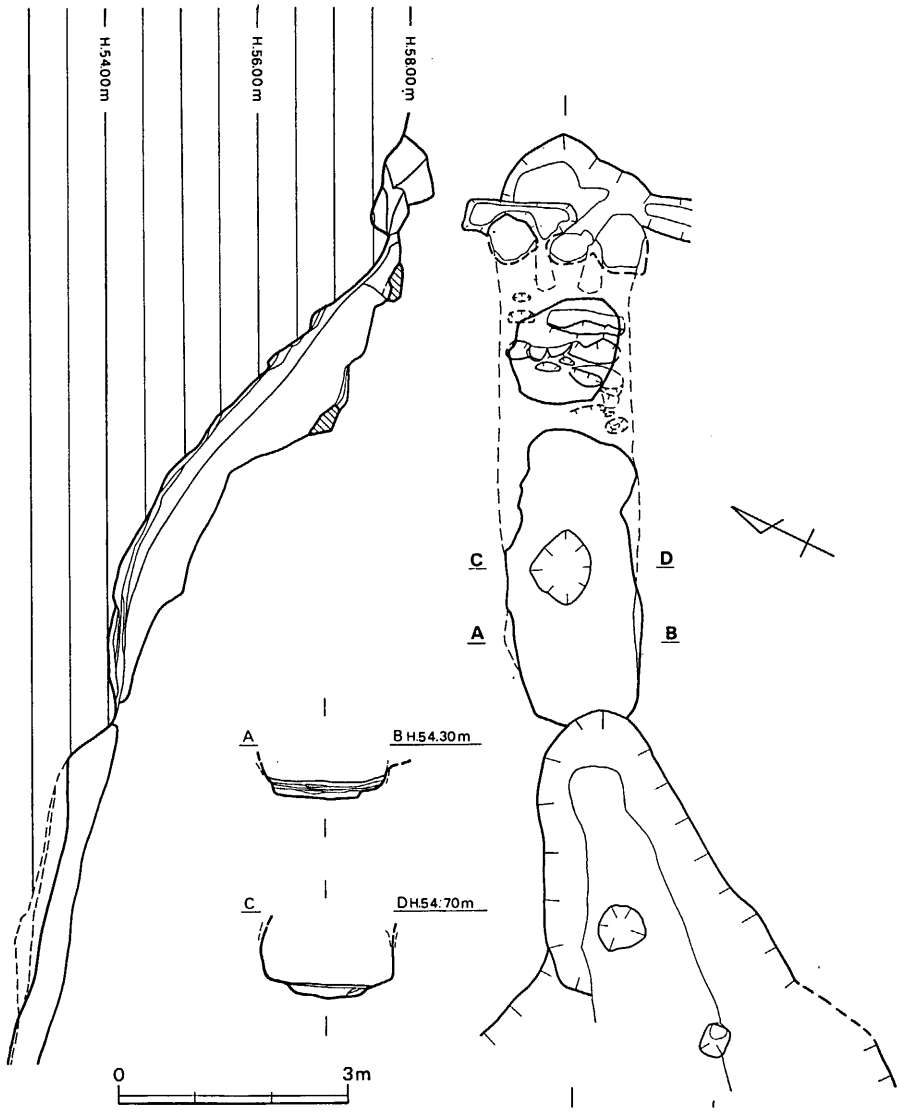
焚　口　床面は、ほぼ水平になっている。最終操業時の幅は、約1.6m を測る。窯壁は直立しており、約30cmほどを残している。第１次操業時の幅は約1.2mを測り、窯床面は最終操業時と約 30cm の差があり、窯の改造はなく床上げにより、５次の繰業が考えられる。

燃焼部　焚口と燃焼部の境は不明であるが、前庭部縁辺から約1.8m に傾斜変換部がみられ、手前の約0.4mに径約0.8mの凹みがある。窯壁は約0.8m 残存し、凹みの焼成部側縁辺において最も狭くなっている。第１次操業時の凹みは、主軸方向径約1.6m直角に径約1.1m、深さ約0.5mの大きなものである。窯壁は、凹みの最深部より広がり幅約1.7m を測る。凹み内において各次の床面は、判断に苦慮した。

焼成部　傾斜変換部から奥壁まで、水平距離約２mを測る。窯床面の幅は約1.7m を測り、第１次操業から床上げにより各次操業行なわれた。主軸方向の傾斜は、第１次は41°、最終操業時には27°と床上げにより緩やかになっている。第１次床面には、急傾斜であるために多くの置台ピットが検出された。遺物は、最終操業時床面において大甕片多数と、杯身や中央を穿孔し焼台に使用されたと思われる杯蓋



第147図　上平田窯跡群地形実測図（1/1000）



第148図　上平田２号窯実測図（1/100）

が発見された。また凹み内において第１次または第２次と思われる遺物が発見された。

（３）出土遺物（第149図）

窯内の遺物（①～⑨）

凹み内より発見された遺物（①～④）と、最終操業時の遺物（⑤～⑨）である。

杯　蓋　（①・②・⑤～⑦）　口縁部に返りを有し、つまみを持つものと持たないものに分れる。７は天井部を穿孔し、焼台として使用されたものと思われる。

杯　身　（③・④・⑧）　高台を持つものと 持たない ものとある。 ３の高台は 台形を呈し、端部に刻み目を有している。

高　杯　（⑨）　脚部のみで変形している。喇叭状に開き、裾端部は面取りをしている。

灰原の遺物（⑩～㉓）

杯　蓋　（⑩～⑮）　口縁部に返りを有し、つまみを持つものと持たないもの、さらに口縁端部を折り返しているものの３種に分けられる。⑭・⑮のつまみの有無は不明である。

杯　身　（⑯～⑲）　踏ん張りのある高台を持つ⑯～⑱と、19の高台を持たない２種に分かれる。

皿　（⑲～㉑）　㉑・㉒は、外へ広がる短い口縁を有し、端部を面取りしている。

高　杯　（㉓）　椀形の杯の体部に２条の沈線を有し、脚部は欠損している。

第２号窯跡

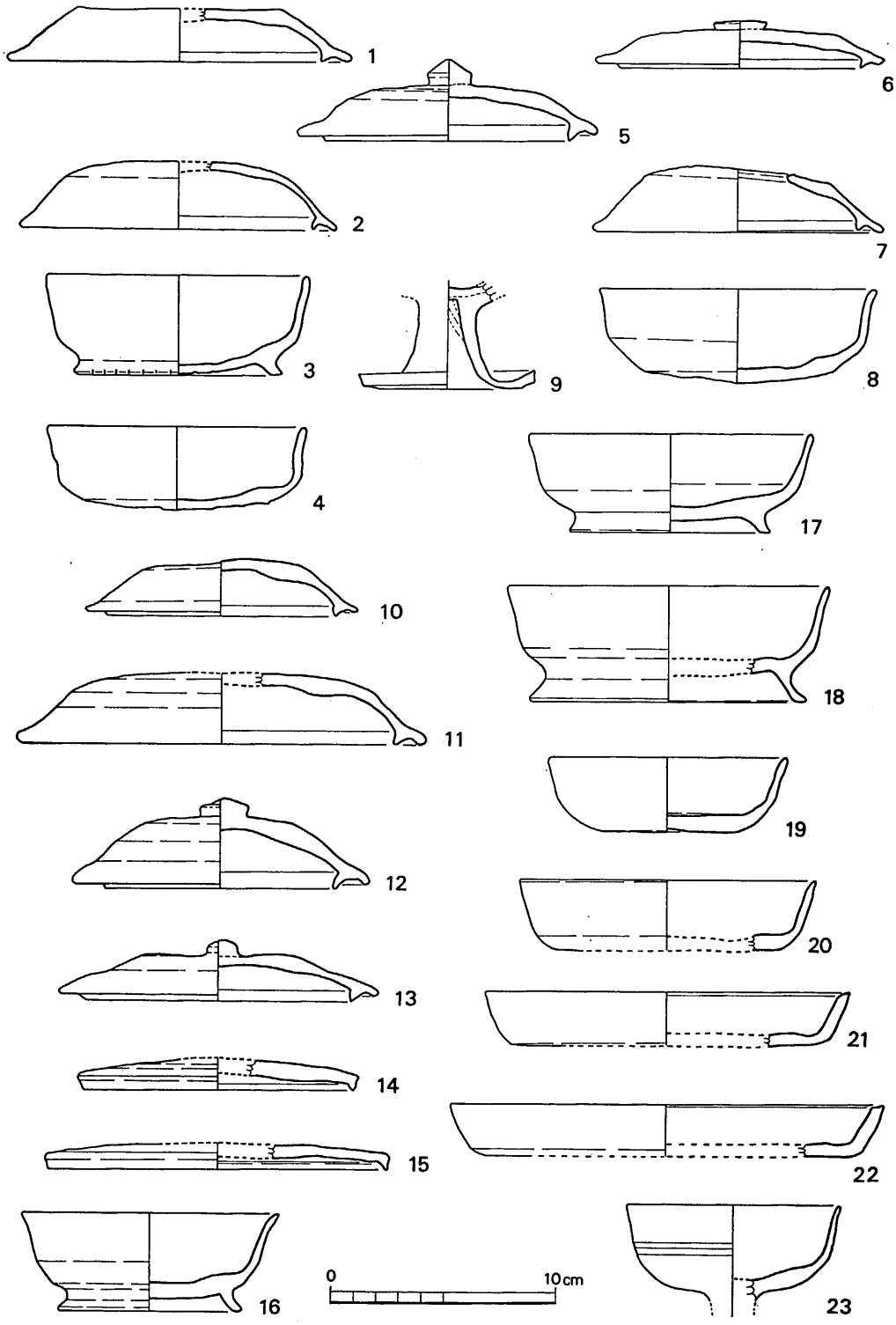
（１）立　　地

１号窯跡から北へ約80m離れている。東へ入り込んだ、小さな谷の、南斜面に構築されている。谷底面より比高約２m（標高54m）に、焚口を構えており、完全ではないが保存状態は良い。

（２）窯の構造

窯の保存はひじようによく、水平距離約6.5mを測る。窯の主軸方向はN-63°-Eである。窯は花崗岩バイライン土に掘り込まれた地下式または、半地下式の登窯である。

前庭部　焚口付近で、深さ約0.65mの舟底状に掘られたものである。調査した長さは約６mほどで、壁は末端において自然に消滅し灰原へ続く。前庭部の主軸は、窯主軸と方向が異なるる。



第149図　上平田1号窯出土遺物実測図（1/3）

焚　口　幅約1.5mを測り、前庭部東縁から約0.9mの床面は、緩やかな傾斜を呈している。窯壁は、高さ約20cmほどが残存し赤褐色に焼けている。窯壁は、前庭部東縁で自然に消滅する。

燃焼部　幅約1.7mを測り、第2次の凹みの東縁までを燃焼部と考え、焚口と燃焼部の境は不明である。窯壁は、約0.6mが内湾して残存し、青灰色に焼き締っている。

焼成部　幅約1.8m、水平距離約3.1mを呈し、一部天井部が残り高さ約1.3mを測る。床面の傾斜は、燃焼部から30°と連続し、さらに45°と急傾斜で煙道部へ続く。焼成部上半の床面には、傾斜が急であるために、置台ピットが設置されている。遺物は、大甕片が数片発見された。

煙道部　煙道部は、完全に保存されている。煙道は三つに分かれており、床面は焼成部から連続した傾きを呈している。煙道部の外周には、孤状に溝が掘り込込まれており、窯内へ雨水が流入するのを防止している。

（3）出土遺物（第150図①～⑯）

前庭部の上層より出土した遺物である。

杯　蓋　（①～⑦）　口縁部に返りを有するもの、折り返しているものに大別される。さらにそれぞれつまみの有無によっても分けられる。つまみは、釦状のものを持っている。

杯　身　（⑧～⑫）　高台を持っていないもの（⑧）、高台を持っているもの（⑨～⑫）に分かれる。後者は、器形において多様のものがみれる。

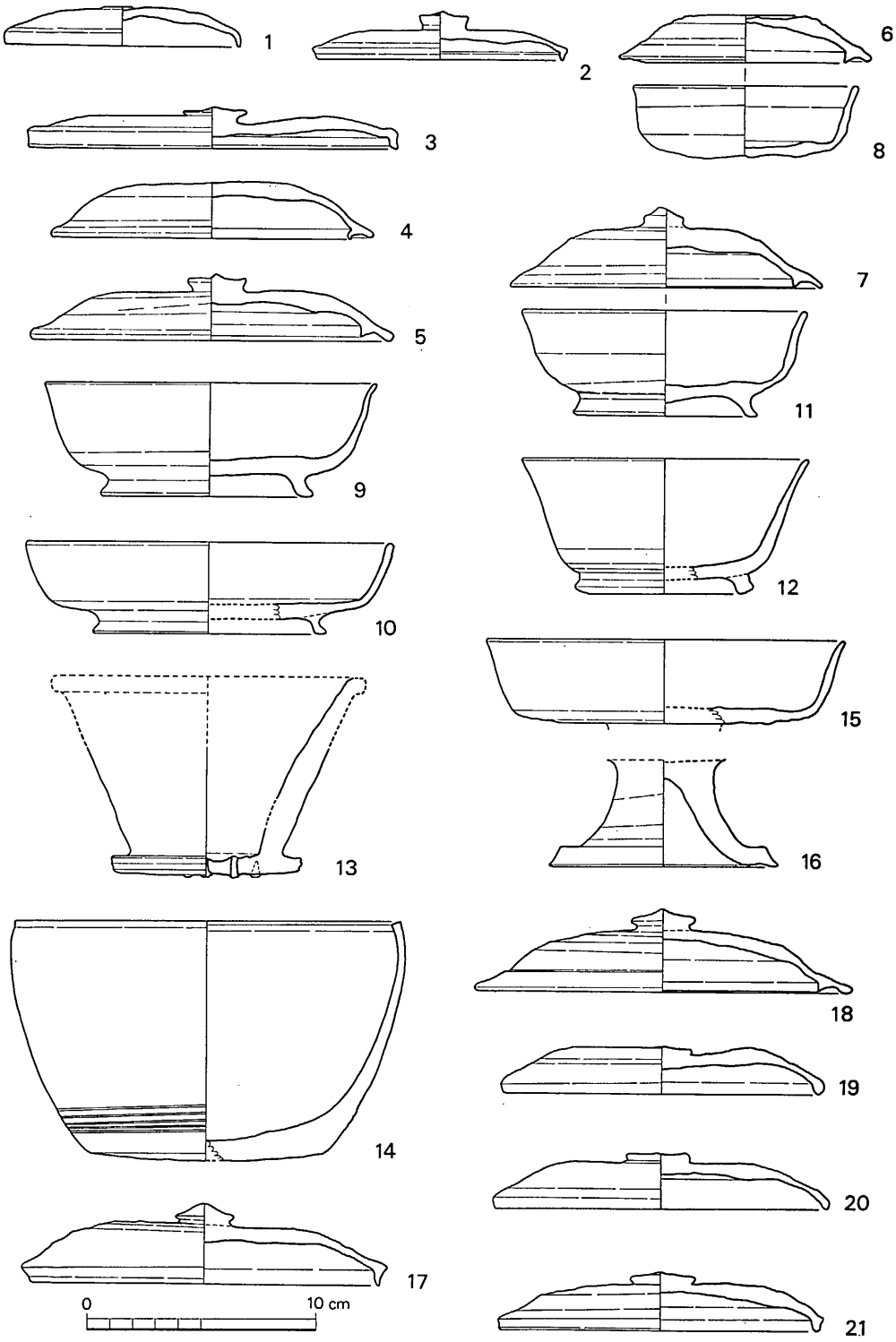
鉢　（⑬～⑭）　⑬は円盤状の底部に、外反する口縁部を有する。底部には11個の穿孔がみられるが、通じていないものもある。また底部端端には2条の沈線がみられる。⑭は、肉太い底部に内湾する口縁部を有し、端部は面取りしている。体部の下半に4条の沈線がある。

高　杯　（⑮・⑯）　⑮は、脚部を欠損した皿状の杯を持つ高杯である。⑯は肉太の脚部で、端部は嘴状を呈している。

第3号窯跡

（1）立地及び窯の構造

2号窯跡と同斜面に構築され、谷底面から比高7m（標高59m）に位置している。窯体のほとんどが破壊され、窯床面の幅約0.9m、長さ約1.6mが残存しているのみであった。残った部分は焼成部と思われるが、傾斜は20°を示している。本来の幅は約1.3mが考えられる。



第150図　上平田２～４号窯出土遺物実測図（1/3）
２号窯（①～⑯）、３号窯（⑰・⑱）、４号窯（⑲～㉑）

（2）出土遺物（第150図）

3号窯跡の前庭部かと思われる。

2号窯跡の溝の傍にある凹みから出土したものである。

杯　蓋　（⑰～⑱）　口縁部を折り返したもの、返りを有するものに分けられる。

第4号窯跡

（1）立地及び窯の構造

3号窯跡の東側に、並行して構築された窯である。花崗岩バイラン土の地山に、掘り込まれた半地下式の登窯である。天井部は破壊され、残存部分は焼成部のみであり、巾約1.1m長さ約3.2mを測る。窯床面では、最終操業時（第2次）の遺物が発見された。

（2）出土遺物（第150図）

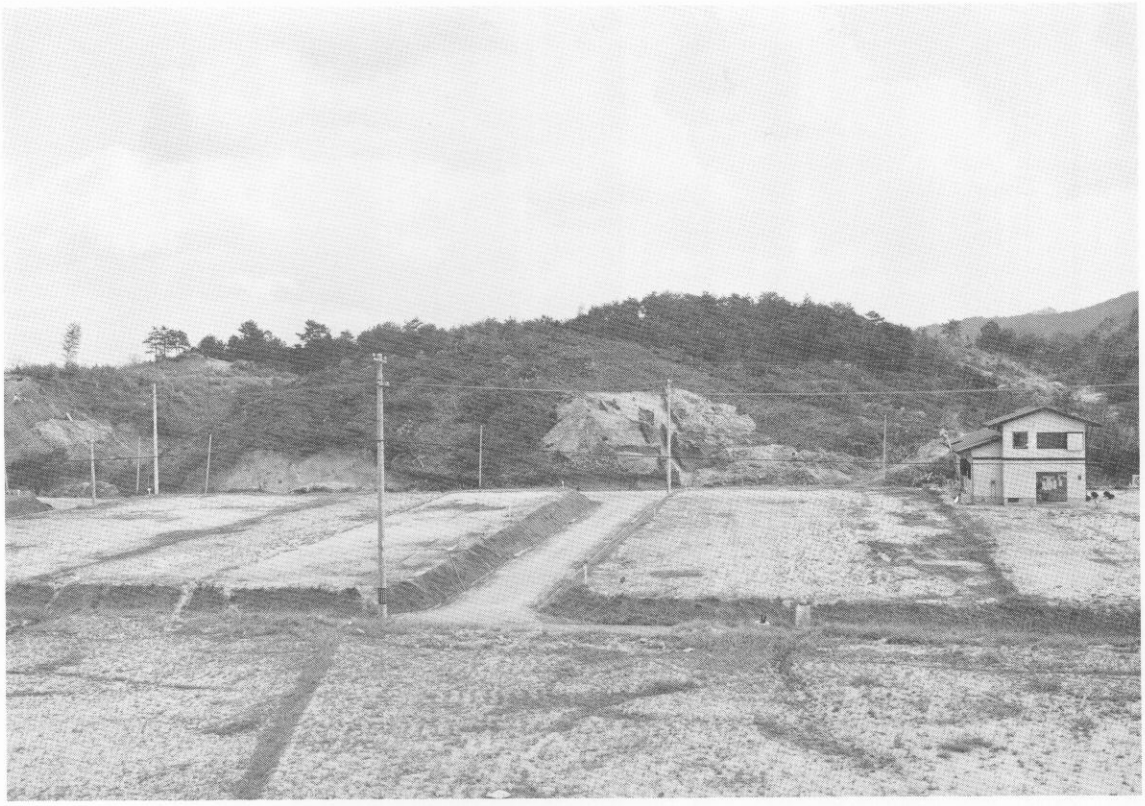
杯　蓋　（⑲～㉑）　釦状のつまみを持ち、口縁部を折り返し、端部は丸く仕上げている。

4）小　　結

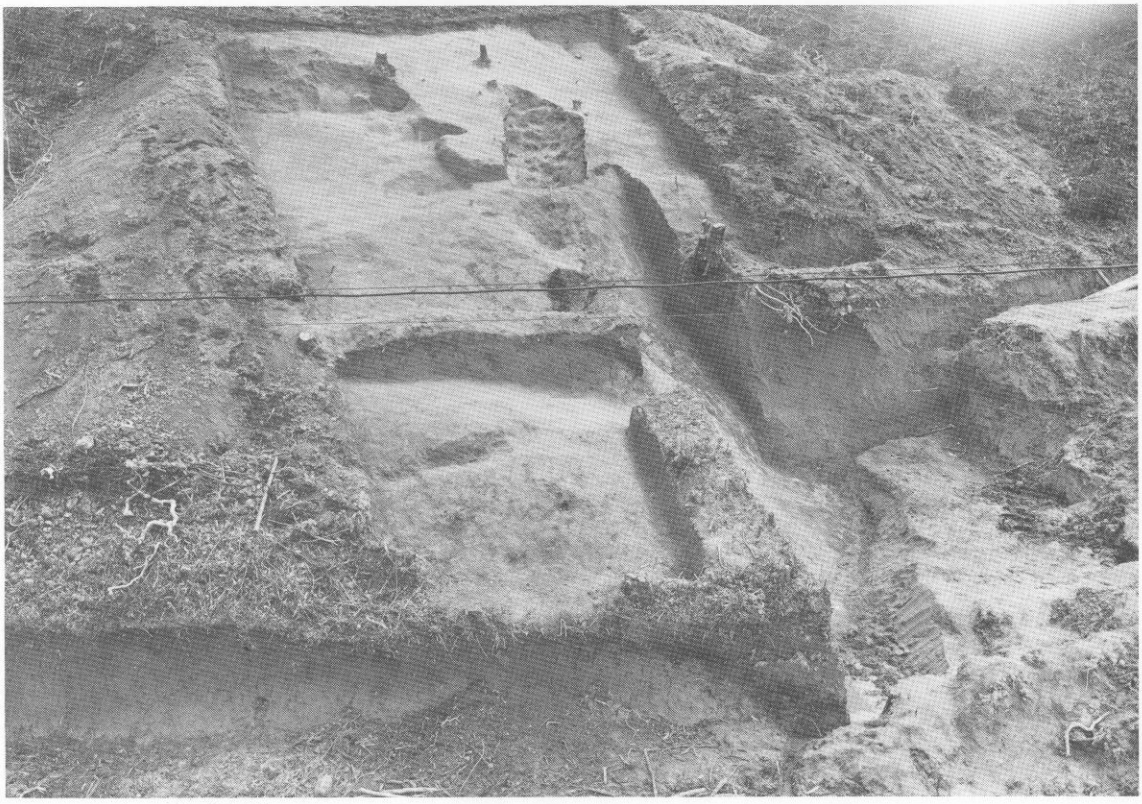
窯の規模は、特に大きいものではない。各窯跡の操業時期については、1・2号窯跡は4～5次操業が考えられるが、遺物からみるとほとんど変化がなく、短期間におけるものと思われる。また2・3号窯跡については、前後関係が考えられる。しかし遺物の形態は、ほとんど変化がみられない。以上の結果から考えると、数多くの需要に対して、短期間において応えたと思われる。

時期的には、この上平田窯跡群は7世紀後半から8世紀前半頃に比定できる。　（櫻井）

図　　版



上平田窯跡群遠景



上平田1号窯全景



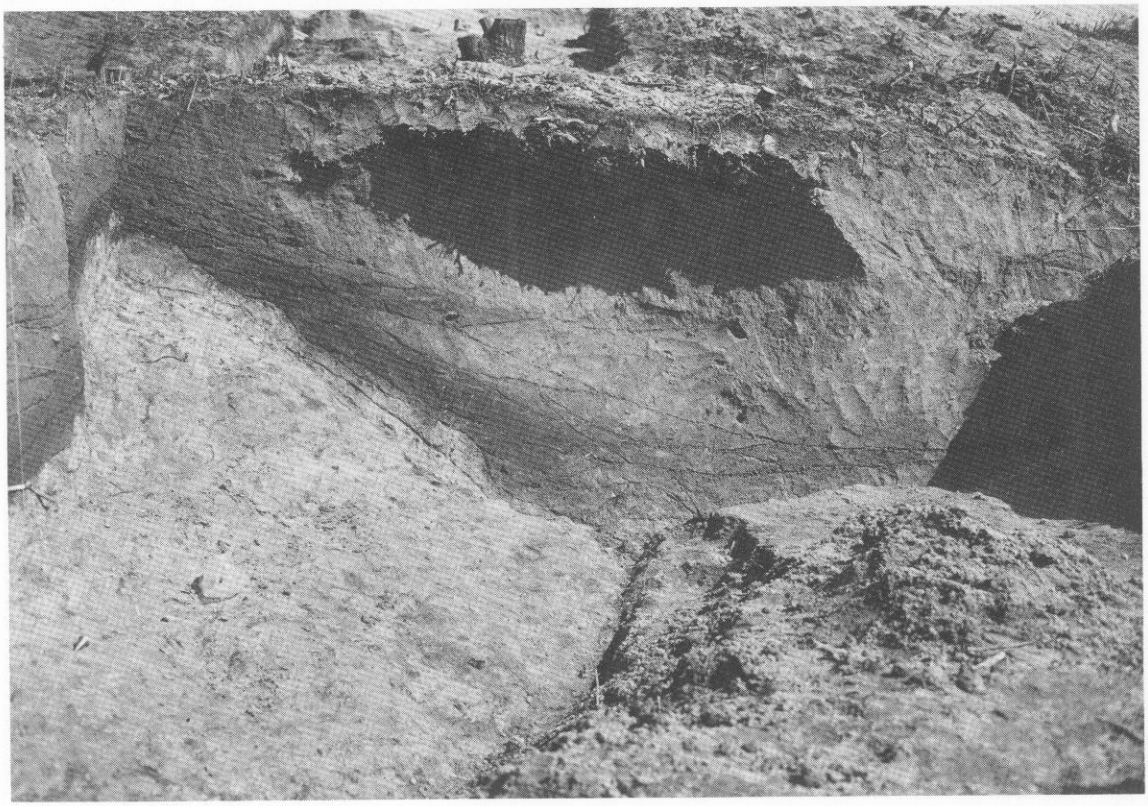
1号窯　第1次床面



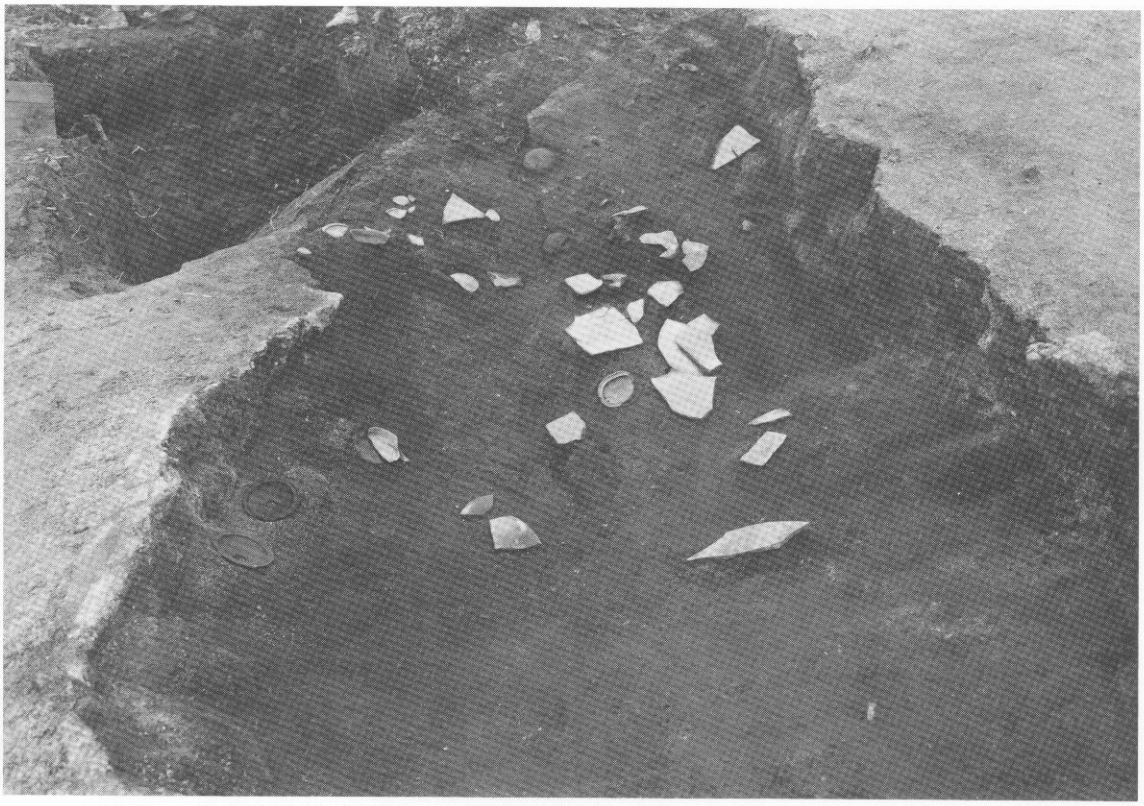
1号窯　最終操業時床面



1号窯　灰原縦断面



1号窯　灰原横断面



1号窯　最終操業時床面遺物出土状況



1号窯　最終操業時床面焼台出土状況



1号窯　最終操業時床面遺物出土状況



1号窯　第1次床面遺物出土状況



1号窯　窯外須恵器出土状況



1号窯　窯外土師器出土状況



上平田2号窯 遠景



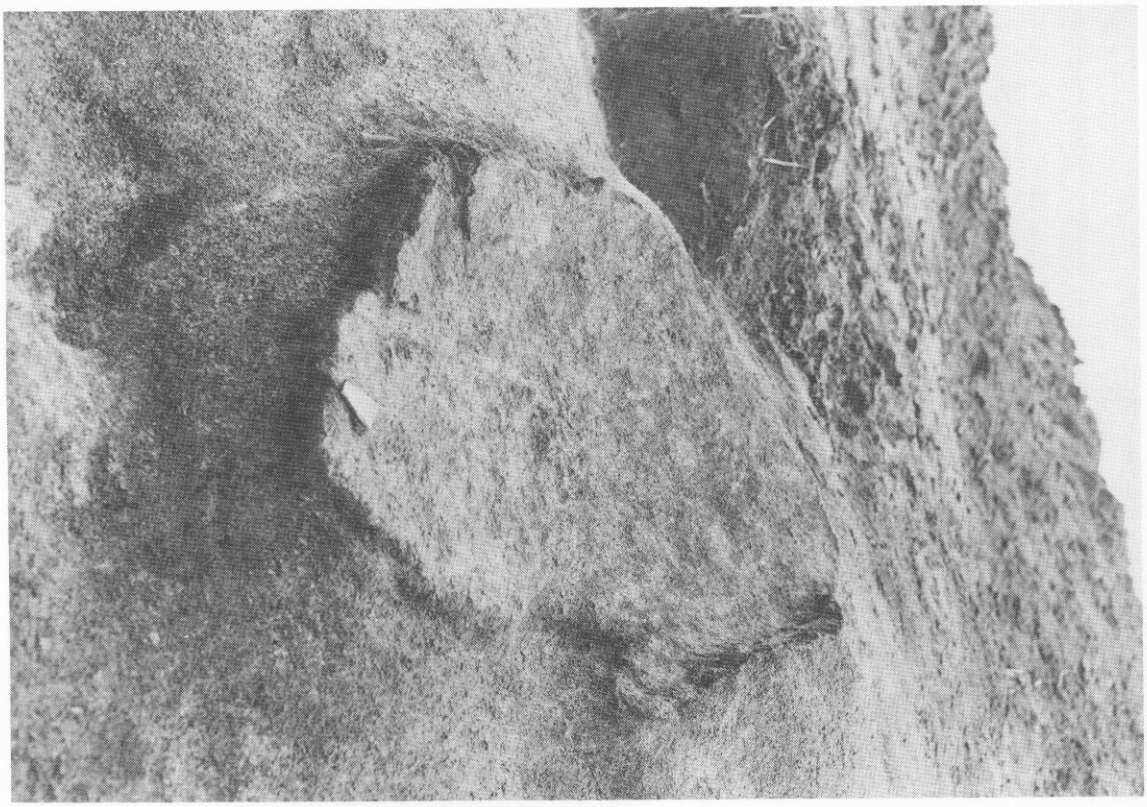
2号窯 全景



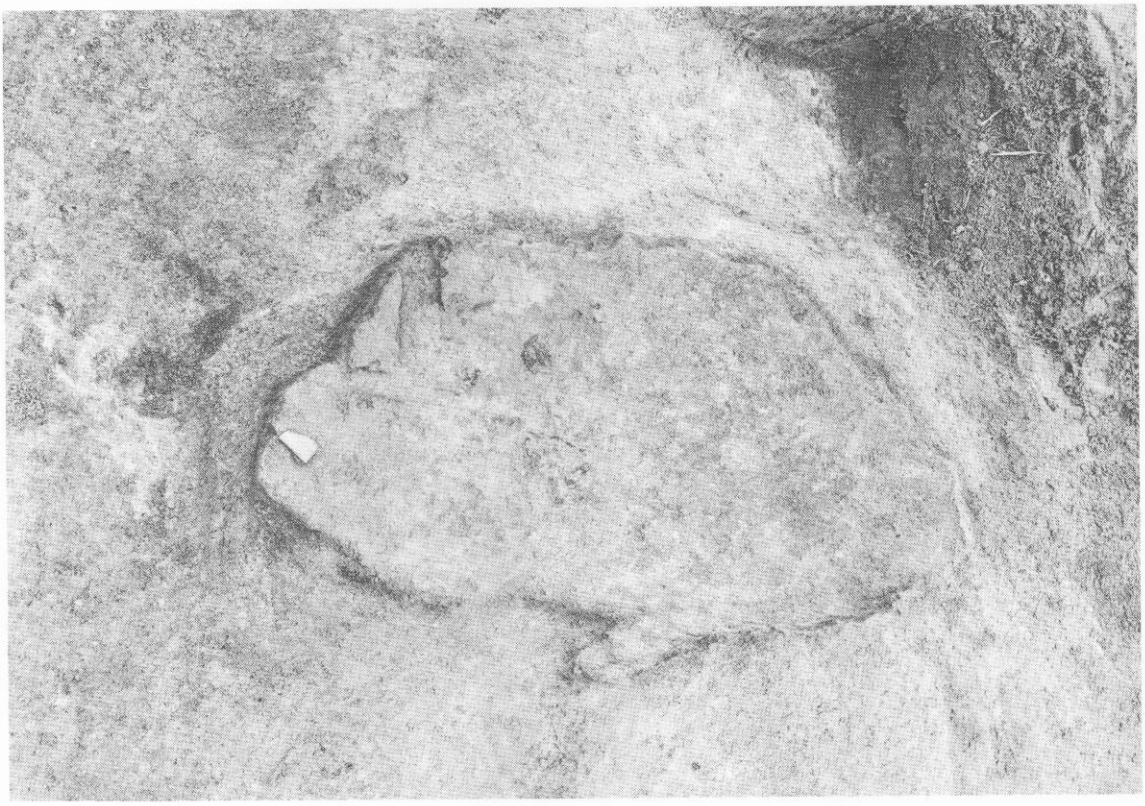
2号窯 煙道部（内側より）



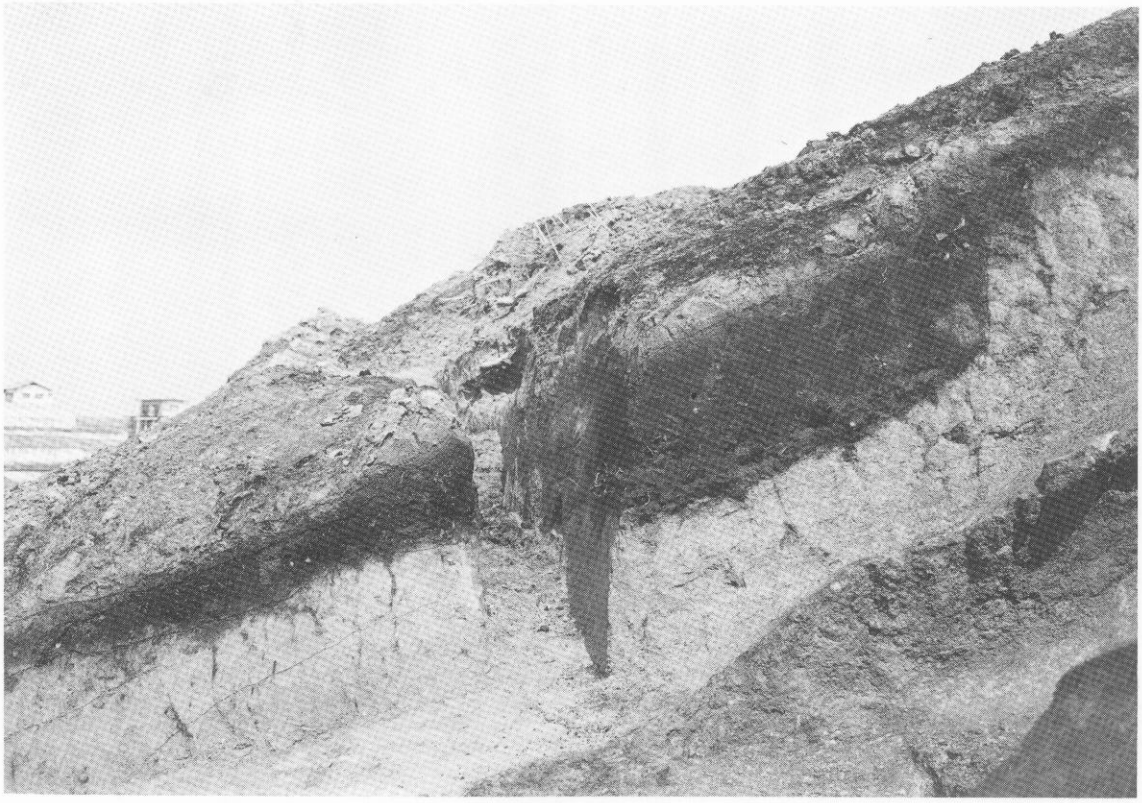
2号窯 煙道部（外側より）



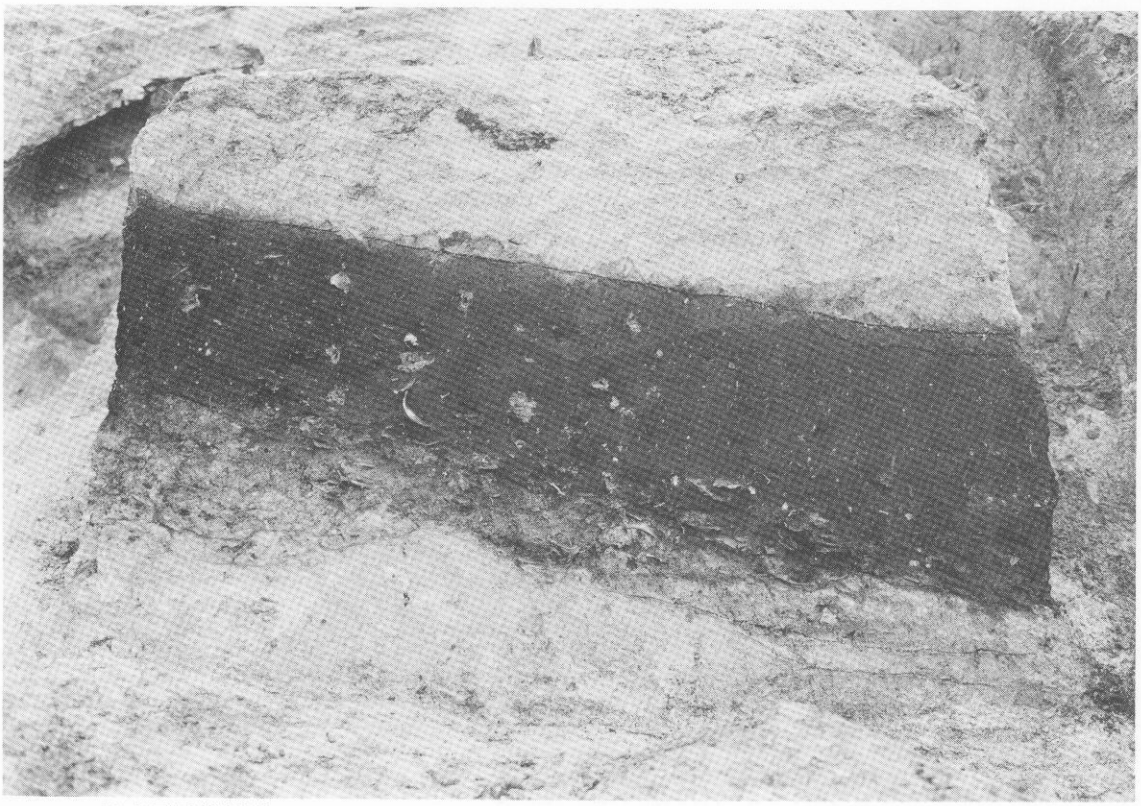
上平田3号窯(南から)



3号窯(上から)



3号窯灰原縦断面



3号窯灰原横断面



上平田4号窯(上から)



4号窯（南から）

編　集　後　記

昭和47年度に第1次調査によって開始され、昭和54年の調査によって、いま、中通りの丘陵は全体が削平され、有史以来の大変革が行なわれ、緑豊かな牛頸の丘陵には、いろとりどりの屋根が甍をなしている。

この10年、この地区ほど地形が変化したところはないだろう。

「緑あふれるコミューニティ都市」という、大野城市の大標題は、今、何を求めているのだろうか、自然との対話ができる都市、親から子へ、子から孫へと、申しおくられてきたこの自然の山々、丘陵がいま、大変革をおこしている。緑とは何なのだろうか、自然とは!!



そしてものを言うことのできない人類共有の文化遺産（遺跡達）は、市民による積極的な意義付をいまや遅しとまっている。

この意義付をどう選択するかは、大野城市市民にあたえられた責務ではなかろうか。

昭和55年3月　　（副　島）

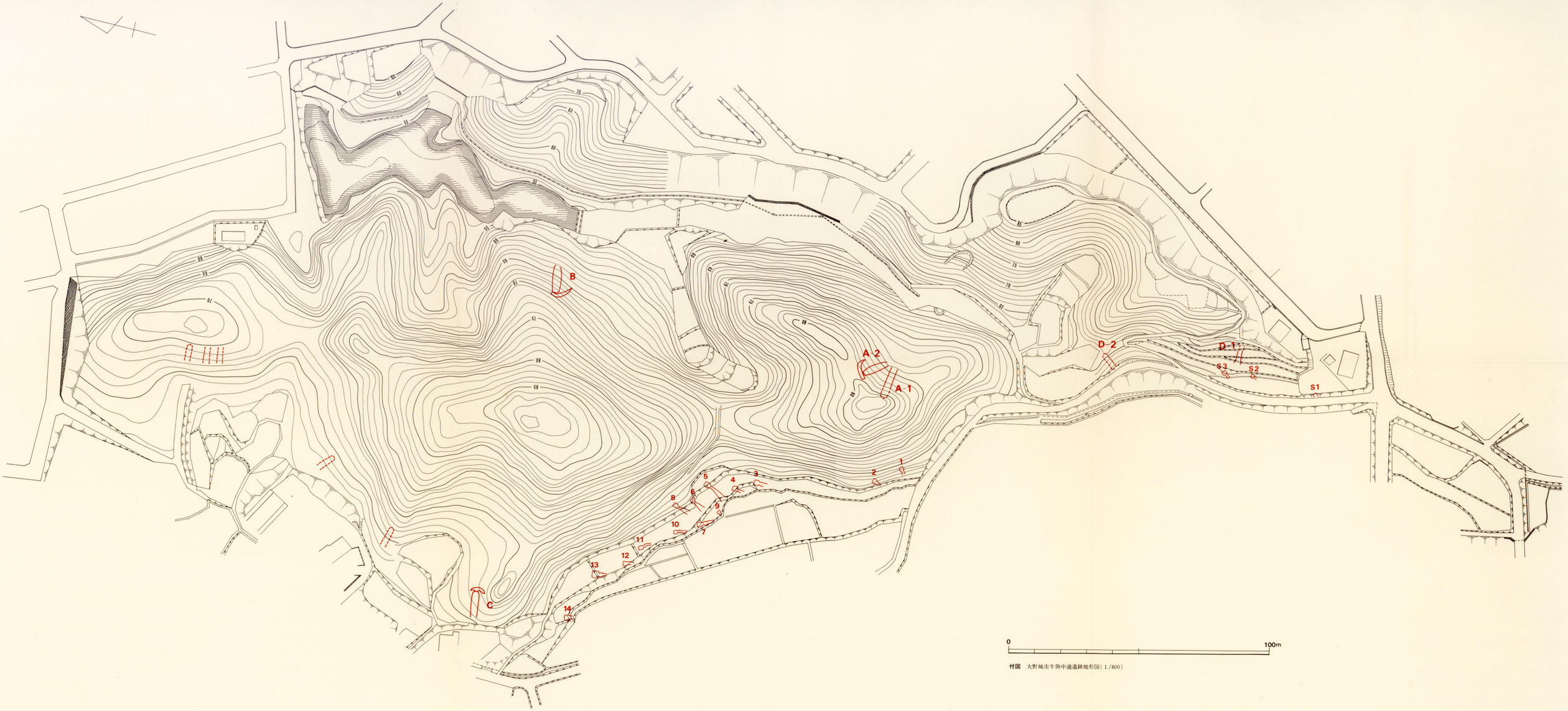
牛頸中通遺跡群

大野城市文化財調査報告書

第 4 集

発行　大野城市教育委員会
大野城市曙町2丁目17番地

印刷　赤坂印刷株式会社



付図　大野城市牛頸中通遺跡地形図（1/800）